IS〈インフィニット・ストラトス〉　IS学園のドッペルゲンガー

ZEOLU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　ＩＳ学園のドッペルゲンガー

【Ｎコード】
Ｎ４１１３Ｕ

【作者名】
ＺＥＯＬＵ

【あらすじ】
ある日、俺は死んだ……訳ではなく、なんだか特殊なパターンらしい。近くにいたテンプレの神様みたいな人に話しかけたら妙な依頼をされた。
なんでも、その人が言うには最近流行の『インフィニット・ストラトス』の世界観にとんでもない負の遺産を置いてきてしまい、俺にその負の遺産の処理を手伝って欲しいそうだ。
さて、そんなこんなでＩＳ学園で変身能力という地味なチートとメ

トロイド的能力を搭載した恐怖機体を持たなきゃいけないって相当ヤバい負の遺産なんだろうな。
そして介入してくる神様の組織。
はたして俺はこの物語で生き残れるのか？

プロローグ（前書き）

私は今回が初投稿ですので、ご指導お願いします。
後、駄文でごめんなさい。

プロローグ

ある日俺は死んだ……。
死んだならこのまま眠ろう――。

「勝手に死んでないで起きろ」
「誰？」

俺が居たのは黒い空間。そこには知らない人が……。

「もしかして神様？……転生先は『リリカルなのは』がいいなぁ……」
「目を虚ろにしながら欲望語るな！　ちなみに神様のようなテンプレ人物ではないぞ？　あとお前は実際には死んでいない」
「えっ？」

死んでないってどういうこと？　たしか俺は……。

「面倒だから俺が説明しよう。君はとある小説の登場人物だった。しかし、小説は大賞に受かること無く落選。そのせいで君の製作者は自殺。君は君の製作者のアバターみたいなもので、肉体がとある場所をさまよっていたので俺が回収した。理解できたか？」

「全然分かんない」
「じゃあ……かくかくしかじか」
「だれそれこのその？」
「理解は？」
「ＯＫ！」

なんてこった……俺は物語の登場人物だったのか……でもなんで製作者の記憶と知識があるんだ？

「俺の組織が実験として移植したからだよ」

なるへそ――じゃない！？　なんだよそれ！！　最近は空想のキャラに人間の記憶を移植できるのか！？

「ジェバンニ……ではなくウチの技術スタッフが一晩でやってくれました（笑）」

うわぁ……なんかムカつくわ。

「まぁ……蘇っていきなりで悪いが……ちょっと頼みごとがある」

目の前の男は急に声の口調を変える。ちょっと怖い……。

「君は『インフィニット・ストラトス』という小説を知っているか？」

インフィニット・ストラトス？　たしか……『魔法少女まどか☆マギカ』と同じ時期にアニメ化したラノベだったような気がする。

「名前だけなら聞いたことがあります」

「実はウチの旧組織『ガルクライフ・アーミーズ』の空想世界侵略兵器がその作品の世界に存在していて、それを向こうの人物にばれる前に回収して欲しいのよ」

空想世界侵略兵器？　つまりラノベとかの世界を侵略する兵器……！？　おいおい、この組織なんてもん作ってんだよ。二次小説的

表現で『原作ブレイク』の為の兵器って聞いたことないぞ！！

「空想世界侵略兵器は俺が空想世界を手に入れるために作って送ったはいいが、計画発動前に俺が宿敵に負けて計画は破綻。残ったのは組織の一部と各空想世界に残った空想世界侵略兵器だけ」

宿敵に負けるって……もしかしてコイツは元ラスボス？

「俺が直接行きたいが……他の世界のも回収しなきゃいけないし、俺は負けた時にキャラクターとして体を構成する“設定”砕けて、７５％までしか回復してないのさ。だから君に依頼する」

この人も物語の“登場人物”なのか……なんか不思議な感じ。

「そうだ、流石になにか能力を与えないとな……何がいい？」

おっ、ついに能力獲得イベントが来ましたよ！　俺もついにチート転生者の仲間入り。やべぇ、ワクワクがとまらねぇ。

「さぁ、何が欲しい？」

「えっと……『Ｆａｔｅ』の能力で！！」

俺はこれで勝つる！！（ドヤ顔）

「君はあんな能力が欲しいのか！？」

なぜか怒られる俺。えっ、なんで？　どうして？

「もしかして……アンチですか？」

「いや、この前チート転生者が俺を始末しに来て……」

――？の回想――

「お前が空想侵略者だな？」

「『元』を忘れてるぞ、ルーキー」

「『お前を倒せば俺様を止める奴はいない』って神様が言ってたんだ。悪いが死んでもらう」

「俺はお前に興味ないんだが……話を――」

「――『体は剣で出来ている。血潮はで　心は硝子』――」

長い……そしてウザい。そして何よりも――

「殺しをバカにしているのか？」

「――『ただの一度も理解されない』――」

「原作を汚すバカか……相手の体、脳から脊髄への信号をカット」

相手は行動不能になった。

――そして現在――

「なんだよその技！！　チートじゃねぇか」

「生物学的な弱点を攻撃しただけだ。守ってくれる奴がいないのに詠唱とかバカだろ？　現実の戦争だって出会って1秒以下の戦いだって言うのに……とりあえず『Ｆａｔｅ』は却下」

俺は頭を抱えた。

「じゃあ……『リリカルなのは』はどう？」
「『ディバイン・バスター』叫ぶ間に死ぬよ？」
「え？」

Ｗｈａｔ？　なんで？

「ウチの作った空想世界侵略兵器はよそ見や詠唱や技名叫ぶ間に攻撃するからだ」

なに『エッヘン』とか言ってやがるんだこの野郎。なんだよ、バルバ●スもそこまで鬼畜じゃないぞ……。今の話からすると……テイルズ系、ジャンプ系、遊戯王系もだめかぁ……技名叫んだり、詠唱が却下となると……思いつかねぇ。

「しかたない……俺が決めてやろう」

なんだか勝手に決められたが……。

そんな事考えていたら名無しさんは俺の額に手をかざした。

「う～ん、『ディスガイア』『プリニー』『モンスターハンター』『メタルギア』『メトロイド』……よし！　『メトロイド』にしよう」

メトロイド！？　なんでまたそんな日本ではマイナーなゲームを？

「なぜかって？　インフィニット・ストラトスはパワードスーツ系だからカモフラが効くんだよ」
「なるほど……でも『メトロイド』のパワードスーツはサムス・アラン専用の装備だろ？」

「たしかに……だったら『メトロイドプライム３』のハンター達の能力にしよう」

まじ！？　ランダスの兄貴とゴアさんとガンドレイダかよ！？地味じゃない？

「馬鹿野郎！！　ガンドレイダの変身能力は質量無視した変身したり、能力コピーできる時点で最強だろ！？　しかも無詠唱。お前がやりたいキャラにはなんでもなれるぞ」

なん……だと！？

「あとＩＳだが……サムスのＰＥＤを参考にするか」

「ちょっとまて？　ＰＥＤって……」

「フェイゾン強化装置の頭文字だが？」

【フェイゾン】

簡単に言うと生物を突然変異させたり兵器運用にも使える放射性物質。

もしかしたらアーマードコアのコジマ粒子よりも危険かもしれない。

「さぁって……こっちに来い」

「何だか予感――ッ！？」

俺の両足両手が拘束された。なんだか怪しい機械が俺に迫る。

「知っているか？　俺達キャラクターは設定を追加したり、流用

したりして強くなるぞ！」
「やめろ、ショッカー！！　ぶっ飛ばすぞ！！」

――2分後――

「俺に何をした？」
「何って……フェイゾン細胞の設定とガンドレイダの設定を君の設定に組み込んだだけだ」
「ランダスとゴアは？」
「ガンドレイダで再現出来るから省略した」

何だよ、それ。

「では早速君には空想世界【ストラトス】で任務を行ってもらおう。ちなみに能力はフェイゾン系兵器以外、生身で出来るぞ。さぁ、逝って来い！！」

さりげなく『あなたは人外です』宣言されたような……。そういえば――

「俺、原作知識ないですよ？」
「おっと忘れていた。俺も知らないから君に“第一巻”と通信機と現実世界にあるガルクライフ社に来れるワープ装置をやろう」

そう言って渡されたのは四つの機械。

「改めて、行けっ！！　戦士よ！！」

俺は暗い部屋から脱出した。

「ちなみに俺の名前は【ゼオル・ゲバイン】だ。よろしくな、転生者」

俺の戦いが始まる。

――続く。

プロローグ（後書き）

感想とご意見・ご感想をお待ちしております。

設定（前書き）

この作品の主な設定です。

設定

○イズール・ユ・ミヅル
この物語の主人公。
元々は捨てられたキャラクター。つまり物語りの存在。
ガルクライフ社の人格移植手術により、空想生命体として誕生した。
性格は温厚、気さくであるが、ＩＳを装着すると性格が豹変する。
人に抱きつくことを何の抵抗もなくやってしまう。（序盤は封印している）
能力は『メトロイド』シリーズのガンドレイダというキャラクターで、知っている物なら何でも変身でき、能力もある程度コピー出来る。（後にランダスとゴアの能力も追加）
名前は無いのでインフィニット・ストラトスの原作者の名前を模して名乗っている。

オリジナルＩＳ
○ＧＡ－ＰＥＤ（通称：ガペッド）
ガルクライフ社が開発したフェイゾン強化装置内蔵のＩＳ。
コアはまったく別のコアを使っているので、移行（シフト）はしない。
ハイパーモードを使用すると、エネルギーシールドのエネルギーを消費し、フェイゾン兵器と無敵時間を得る。
追加アップデートが可能。
名前は型式のみなので、正式な名前は無い。

○ゼオル・ゲバイン
ガルクライフ社のボス。
立場的にはテンプレの神様。
自分の絵柄と設定を書き換えて他作品に侵入出来る恐ろしい能力を持つ。
かつて全空想世界を手に入れようとしたが、別の主人公に倒されゲームセット。空想世界に残った兵器の回収が今の日課。
倒されたせいでキャラクターとしての設定が砕け、７５％しかない。
妹がいるらしい。

第一話　クラス全員が女というわけではないぞ？（前書き）

駄文で連続投稿です。
※作者は豆腐メンタルなので、優しく指導していただけるとありがたいです。

第一話　クラス全員が女というわけではないぞ？

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生。（原作通りだ）

身長は低めで、生徒のそれとたいして変わらない。しかも服のサイズがあっておらず……なんだかかわいい先生だなぁ。

まぁ、子供っぽい先生は現実でもいたし……そういえば俺の中学２年の時の隣のクラスの先生は俺の胸位の身長だったな。

「それでは皆さん、よろしくお願いしますね」

「……」

みんな緊張しているが、俺はそんなの関係ないね。

「こちらこそお願いします」

先生がちょっと嬉しそうに俺に微笑む。あなたは心の支えになりそうです。

『なんだ、惚れたのか？』

ゼオルが突然通信してきた。俺はバレないように返信する。

『なんだよ、この通信はバレたらまずいんだぞ』

『あまりにも真剣にみていたからな……なんだ、あのガタキリバコンボが似合いそうな先生は』

（なんでガタキリバなんて知ってんだよ）

『まぁ、俺も―』

パァンッ！

「あっ、一夏が叩かれた」

その向こうでは歩く“平和”（武力鎮圧的な意味）の織斑千冬さんが織斑一夏となにか言い合っていた。いやぁ、姉弟愛は素晴らしい。

「キャー！！　千冬様！　本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！」

「あの千冬様にご指導していただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

千冬先生がすごくうっとうしそうな顔してる。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

違うよ先生。馬鹿がこのクラスに集まるのではなくて、この教室に入った瞬間に馬鹿になるんだよ。きっと……。

「きゃあああああああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾をして〜！」

こいつら腐ってやがる。やはり女尊男卑（漢字はこれでよかったかな？）に浸った世界の歪みってやつかな。千冬先生には変身しない方が良さそうだ。

「え……？　織斑くんって、千冬様と知り合い……？」

「親戚とかなのかな……？　同じ名字だし、もしかして姉弟だったりして？」

「それじゃあ世界で唯一男で『ＩＳ（アイエス）』を扱えるっていうのもそれが関係して……？」

なんだか話が進んでいる。俺も遅れてなるものか！！

「先生、自己紹介続けませんか？」

周りの視線が『空気読めよ』みたいな感じになるが……だが私は謝らない。

「ならやってみろ」

遂に原作以外のセリフを口にした千冬先生。やってやるさ。

「俺の名前はイズール・ユ・ミズル。なぜか一夏君のように『ＩＳを使える男』になってしまいました。所属はガルクライフ社で、趣味はアニメやゲームです。よろしく♪」

――数時間後

『見事にスベッたな』

「ゼオルさん……俺泣きそうだよぅ」

まさかシンプルな作戦があそこまで無反応で返されるとは。

「というか『ガルクライフ社って何？』と言われたよ！？」

『当たり前だ、ガルクライフ社は『秘密結社』だぞ？　秘密に決まっている』

実はガルクライフ社は秘密結社で、裏の組織には結構有名になったが、表舞台にはまだ姿をさらしてはいないのである。

『千冬先生や束さんなら知っているだろう。なぜならちょっとしたデモンストレーションしたから』

いつのまにそんなことを？

『まぁ、軽くドイツの艦隊とＩＳをガルクライフ社のエンブレム付けた機体で無双しただけさ』

おいー！！　何しちゃってんのウチの組織は！！！

そんな俺たちの前に篠ノ之箒と一夏が何かを話していた。

『おっ、再会のシーンだな？　ブックカバーはちゃんとしてるか？』

「当たり前だよ。今原作崩壊させる訳にもいかないでしょ？」

まったく何で一夏が恋愛の中心にいるんだ？　色々勿体ない。

キーンコーンカーンコッ！

チャイムが鳴る、前の二人は走る。俺追いかける。出席簿アタック炸裂！！　おぉ勇者よ、死んでしまうとは情けない。

そんなこんなで二時間目の休み時間。

「ちょっと、よろしくて？」
「ん？」「へ？」

イギリス代表候補生
【セシリア・オルコット】

なんだか『ゼルダ』のボス戦みたいなテロップだな。

「今のはなんですの？」
「あぁ、珍しい人が現れると出てくるテロップさ」

良い意味でもあるし、悪い意味もある。

「珍しい……当り前ですわ、この私は選ばれた存在なのだから」
「で、誰？」

一夏よ、お前は意地でも物語のレールを走るのか……。

――以下中略――
キーンコンーカーンコッ！！　（なぜチャイムが途切れる？）
「つ……！　またあとで来ますわ！　逃げないことね！　よくっ

て！？」

一夏は適当に頷いた。

「あなたもよ！　よろしくて！？」

俺もかよ！？

『よかったじゃないか、恋愛フラグ立つかもよ？』

「勘弁してよゼオルさん……」

「イズール？　お前誰と話しているんだ？」

――その後――

代表を決めることになったが……。

俺はキレた。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い屈辱で――」

「イギリスだって――」

「――お前ら黙れ！！！」

「！？」「ッ！！？」

「あのなぁ……いい年したヒヨコが何ほざこうが代表戦の勝ち負けにはたいして変わらない訳よ。もういい、俺が二人まとめてスクラップにしてくれるわ！！」

教室がシーンとする。あれ？　なんで千冬さんも驚いた表情してる訳？

「イズール……お前……」
「イズール？」
「イズールさん……顔が……」
千冬さん、一夏、オルコットの順に……って、顔？
「？」
隣のなぜか怯えている女子から手鏡を借りて自分の顔を見た。
「なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
俺の顔に青黒い筋が浮かんでいた。さらに左目の瞳が薄くだが青く光っている。なんだよこれ、邪気眼か！？　ブラックロックか！？
「……！！」
思い出した。たしかこれはフェイゾン汚染の進行したサムスの顔だ！！　てことは何か？　感情でフェイゾン汚染するのか？　あとでゼオルさんに聞いてみよう。
「……あれ？」
感情が落ち着いてきたら顔は元に戻った。
教室に沈黙が走る。
「えっと……二人とも、ハンデ無しの決闘な？」
「「……（コクコク）」」

二人とも涙目だったけど大丈夫か？

『恐らく感情でハイパーモードが作動したのだろう』

「汚染じゃなくてよかった……」

「イズール！！」

千冬先生だ。マズイ、恐らくハイパーモードの件か！？

「話がある」

「……はい」

――保健室にて――

「単刀直入に聞く、アレはなんだ？」

「知りません、俺もアレを初めて見ました」

マジの真剣見つめ合い。お見合いだったらどんなに楽か。

「検査結果が出たが……未知の物質だそうだ、本当に知らないのだな？」

「はい」

俺はハッキリと嘘をついた。

「そうか……あと、お前は独り言が多いようだが本当に――」
「知りません！！」
その後俺は山田先生に連れられて？の部屋へと歩いて行った。

――千冬ｓｉｄｅ

教室で見たイズールのあの姿は異常だった。
まるで体に植物が根を張っているようなあの姿……。
そして体内から検出された未知の物質……。
そういえばアイツは自己紹介の時『ガルクライフ社』という単語を出していたな。
ガルクライフ社……最近ドイツ軍に喧嘩を売った組織で、ドイツ軍は未だに組織の尻尾すら掴めていない。最近表舞台に現れた組織がいきなり軍に攻撃するのもアレだが、ドイツ軍が手も足もでないとは……調べてみるか。
私は古い友人に連絡をした。
『――？』
「あぁ、今回はおふざけ無しだ。調べてほしい組織がある。名前は――」

――イズールｓｉｄｅ

「１０２６室……ここか」

俺の新しい砦の完成だ。
部屋のアイテムはこの世界に来る前にもらった四つの機械でワープゲートを完成させ、現実世界から色々思い出の品を持ってきたのである。

「いやぁー、鏡がワープ装置になるなんて凄いな」
『ウチの技術をなめるなよ』

鏡に四つの機械を付けるとワープ装置の完成である。

『さて、俺はもう寝るよ。チュートリアルはここまで、あとは定期連絡よろしく』
「なんか仕事でもあるのか？」
『実は『魔法先生　ネギま！』の第一期アニメ版２３話で死んだ神楽坂明日菜の死体と設定が改造されて他のヒロインを虐殺するって異常事件が起きているからそれの鎮圧』
「なんだよ……それ」
『俺も体験したことのない未知の事件だ。後で妹を送るからそれまで頑張れよ。それじゃ』
「おぅ」

なんだか嫌な事件を聞いたな……。とにかく風呂かな？あっ、タオルが無い。お隣さんから借りよう。

ルンルン気分で「おっふろー♪」と歌う俺の前に現れたのは……。

ズガンッ！！！

「たわらばッ！！」

「「イズール！？」」

……木刀だった。

――千冬ｓｉｄｅ

「で、どうだった？」

『実はねー、束さんにも分からなかったんだよ。情報無し。サイトもなければガードしてる場所も無い。もしかしたらデジタルじゃなくてアナログなのかもしれないなぁー』

結局分からなかったか……。ガルクライフ社とは一体……。

――ガルクライフｓｉｄｅ

「いや、デジタルさ。ただ、どこにも繋がってないだけで」

「お兄ちゃん、何言ってるの？　また覗き見？」

「隊長はいつもそんな感じでしょうに」

「だが、やるべきことはやっている、問題ない」

「そこが凄いんだよねー♪　イシシｗ」

「さてみんな。留守を頼むよ。ウォルツはイズール君の援護よろしく」

「「「「了解！！」」」」

ゼオルと四人は動きだした。

ただし実際にこっちに来るのはゼオルとその妹だけである。

「「「何だって！？」」」

――続く。

第二話　クラス代表決定戦だと思っているのか？（前書き）

連続投稿しまくりです。
早速物語の方向性が狂ってきたような。

第二話　クラス代表決定戦だと思っているのか？

――イズールｓｉｄｅ

夢を見ていた……。

『俺は……アイツの物語の主人公を演じるのが好きだった』

ゼオルさん？

『でもな……アイツが中学になった時あたりにアイツは『闇』とか『魔力』とか、そんな設定を加えたのさ。まぁ、それでも良かったさ』

これは……ゼオルさんの……過去？

『気付いた時には俺の人生のシナリオは最悪に設定されていて、主人公の座を下されていた。でも、我慢した』

そうか……ゼオルさん……あんたは……。

『許せなかったのは……アイツが俺に『死ぬ』設定を組み込んで俺を『捨てようとした』事だ！！』

――保健室にて。

俺は目が覚めた。もしかして手術の時、ゼオルさんの設定が混じったのか？だとしたら……ゼオルさんはただのテンプレ神様だと思ってたけど、結構重い人生やっているのかもしれない。

「イズール、起きたか？」

「……千冬先生」

俺の眠るベッドの横に千冬先生が座っていた。

「すまんな、馬鹿共のせいで怪我をさせてしまって」

「気にしないでください。箒さんの一撃は俺を惚れさせました♪」

「……冗談だろ？」

「冗談です♪」

そう言えばタオル借りに行って木刀でガトチュゼロスタイルされたんだっけ……。

「動けそうか？」

千冬先生は俺を心配してくれているようだ。なんだ、良い人じゃないか。でもごめんなさい。ちょっと試したいことがあるので。

「今日の授業は休みます。昨日の『アレ』も心配ですし……」

「そうか……馬鹿共にはきつく言っておく、無理せず休め」

昨日少しだけ発動したハイパーモード。それ以外の実験もしたいしね。

「食事はそこに置いておいた。食べておけ」

時計を見ると……朝の八時か……。そう考えている間に千冬先生は保健室を出て行った。

「さてと……実験しますか」

一夏ｓｉｄｅ――

千冬姉からイズールの様子を聞いた後怒られた。まぁ、俺も原因の一因だしな。隣で箒が俺よりきつく怒られていた。それにしても千冬姉の様子が何だか変だ。昨日のイズールの顔が変化してからだ。結局クラスでは『イズールは怒るとあの顔になる』という結論になったけど……。箒やオルコットさんも納得いかない表情になってたな……。まぁ、俺は医者じゃないし何も言えないか。とりあえず箒を連れて学食へ行くか。

――イズールｓｉｄｅ

人気のない場所へ来た。

「さて、変身能力は……っと」

俺は意識を集中させる。何に変身するか……そうだ！　あの国民的キャラクターに変身しよう。そう思った瞬間、俺の体は紫の光を放ち、体が縮んで変化した。

バシュゥゥゥン！！

「――う～ん、スンバラシイ！！」

俺は人気キャラクター『ピカチュウ』（ＣＶもちゃんと中の人の声）になった。服も丸ごと変化するみたいだから脱ぐ必要はない！

「――今こっちでなんだか光ったような……？」

まさか……山田真耶先生とエンカウントするとは……。

ティロロン♪　ティロロン♪　ティロティロティロロロ――♪

？あっ、いどうのとちゅうのヤマダマヤがとびだしてきた。

？たたかう　どうぐ
ポケモン　にげる

？１０まんボルト
へんしん
メロメロ
しっぽをふる

？ゼオルのことば。　イズールよ、いまはそれをつかうときではない。そんなわざつかったらマヤ先生がこの物語から脱落するぞ？

最後の方は漢字を使って表現しやがった。

たたかう？どうぐ
ポケモン　にげる

インフィニット・ストラトス1かん（主要登場人物に見せたらタイムパラドックス）
けいたいでんわ（待ち受け画面はガルクライフ社のロゴ）
ぼくとう（昨日拾いました）
マンテンデュー（スネーク絵柄の限定品）
さいふ（中身は2万円）
Ｗｉｉリモコン（用途不明）
?ゆうぎおうカード（デッキはガスタ系とフォーチュン・レディの二種類）

?ざんねん。マヤせんせいはデュエリストじゃない。

?マヤは　じりきでほかく　をつかった。

「ピカチュウだー！！」
「！！？（この世界でポケモン放映してるのかよ！！）」

?ゼオルのことば。　ＩＳのきょうかのヒントになるものいがいはテレビでやっているぞ。というかオレがテレビのデンパにながしました。

何……だと……！？

そんな事を考えている俺は山田先生に捕まった。胸が当たって……温かい。ピカチュウの頬が最初から赤くて良かったかもしれない。

「ピカチュウだ♪　本当にピカチュウだ♪　あなたは私の言葉理解できる？」

そう言いながら俺の頭を撫でる山田先生。実際に撫でられると……なんだか気持ちいいなぁ……。そういえばサトシの言葉も理解している様だし、理解できることにしよう。

「ピカー、ピカチュウ♪」

そう言って俺はとりあえず笑顔で右手を挙げた。ふふふ、声も仕草も完璧な俺に騙されるがいい。

「わぁ……理解できるんですね♪」

テンションと興奮の汚染モードな山田先生はピカチュウ状態のギュッと抱きしめる。あぁ、女性特有の香りが……はっ、今イケナイ関係世界の扉を開くとこだった。落ち着け落ち着けオチケツ。俺はマスコット……俺はマスコット……。

――真耶ｓｉｄｅ

私は今、夢みたいな事件と遭遇しています。

「ピカー……」

今私の腕の中にはあのピカチュウがいます。昔大好きだけど結局は空想の存在。出会うことはありえないと一度思った事があるのに、今私は興奮しています。それにしてもなんでピカチュウがここに？

そういえば昨日の見せてもらったイズール君のカルテも異常だったし……。もしかしたら何か得体のしれない現象が起きているのかも。ここは織斑先生に相談してみよう。

こうして変身したイズールは一日ポケモントレーナーとなったマヤと共にショクインシツへと向かうのであった。続く！（ＣＶ：オーキド博士）

？Ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

「ピカー！！（勝手に終わらすな！！　助けてゼオルさーん！！）」

――職員室にて。

――イズールｓｉｄｅ

「織斑先生大変です！！」

「どうした山田君、そんなに興奮して」

「ピカチュウと遭遇したんです！」

「……は？」

？ヤマダマヤはピカチュウ（イズール変身体）をくりだした。

俺はまるで生贄に捧げられる気分だ。

？オリムラチフユの　みやぶる　こうげき。

なるほど、先行取られたってことは千冬先生は俺よりもレベルが高いのか。

？しかし　うまくきまらなかった。

流石にピカチュウ以外の答えは出ないだろう。

「生きているのか？」

「はい、体温もあります」

「……触ってもいいか？」

「はい、いいですよ」

千冬先生は俺を抱きしめる。職員室の何人かは写真を撮り始める。写真は後々まずいような……。

「……」

千冬先生は無言で俺の頭を撫で始めた。だからくすぐったいって！　ちょっと恥ずかしいって！　あっ、千冬先生の顔がちょっと緩んできた。もしかして先生はピュアな乙女だったりします？

「ピカァ……チャー♪」

「かわいいやつだな、お前は」

おいー！？　なんか独り言呟き始めたぞこの人！！　まずい、このままでは千冬先生は完全な乙女になってしまう！！　俺に注目しているせいか、他の教師は千冬先生の変化に気付いていない。しかたない。

？ピカチュウの　しっぽをふる　こうげき。

？チフユのぼうぎょがさがった。

?チフユは　ピカチュウ　に　メロメロ　だ。

?ピカチュウの　１０まんボルト。（威力は静電気程度に抑えました）

「ッ！！」

?チフユに　１２　のダメージ。

?チフユは　マヒ　した。

あれ？　この技にマヒ効果あったか？　まぁ、最後にポケモンをプレイしたのは数年前だしな。とりあえず脱出だ。

?キョウシたちはとつぜんのことでひるんでうごけない。

俺は窓から外に飛び出し、風船を取り出す。（何処から出したかは企業秘密）

?おめでとう。ピカチュウは“そらをとぶ”をおぼえた。（“しっぽをふる”は消えました）

「ピカチュウー♪（任務完了、帰還する）」

『よくやった、マザーベースのみんなも喜ぶぞ』

何か声が聞こえたような気がするが、無視しよう。

そして俺は空を飛んだ。

――千冬ｓｉｄｅ

最近はどうにも不可解な現象が起きるらしい。私は空へと飛んでいくピカチュウを見ながらそう思った。

「山田君、あのピカチュウは“そらをとぶ”を覚えていたようだ」

「はい……レアなピカチュウだったみたいです……」

山田君はなんだか寂しそうだった。私も子供のようにはしゃいでしまったようだ。余談だが、この光景は新聞部などが情報をキャッチして、『ピカチュウ伝説』として記録されることになった。また……会えるだろうか。

――イズールｓｉｄｅ

あぁ……死ぬかと思った。精神的に。

「たしかこの辺に……」

あっ、山田先生だ。まだピカチュウ（俺）を探しているな？　ちょっとイタズラしてやるか。

「ピカー……くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこ――はいぃっ！！」

俺は光を放ちながら山田真耶先生に変身した。声も体も……って！？　胸や絶対に見せてはいけない股間や下着も再現できるのかよ

！！　でもなんであんまり興奮しないんだ俺？　もしかして脳も女性化するのか？　恐るべし、ガンドレイダの能力。

「っ！！？　今の光はピカチュウの――えっ？」

山田先生（俺）と山田先生（本人）が遭遇した。

「えっと……私！？」

「そうですよ、私はあなたです。知ってますか？　ドッペルゲンガーって」

「ドッペル……ゲンガー？」

「はい、自分の姿をした存在で……」

俺はひるんでいる山田先生の耳元で……。

「出会ったら死ぬんですって……♪」

「――ッ！！？」

バタンッ！！

なんということでしょう。山田先生が顔を青くして倒れてしまいました。これぞまさにチート転生者である匠の技の集大成と言えるでしょう。

「……」

これが本作のタイトルでもある『ＩＳ学園のドッペルゲンガー』誕生の瞬間であった。

――数時間後。

俺はとりあえず山田先生を保健室へ運んだ。ただし、千冬先生の姿で。（ここ重要）

山田先生をお姫様抱っこしながら歩く姿はとてもシュールである。

「あれ？　千冬姉？　それに……山田先生？」

一夏と箒のカップル（？）と遭遇してしまった。とりあえず俺の演技を見せつけてやる事にした。

「一夏か？　今からどこかへ行くのか？」

「今から箒が俺に稽古を付けてやるってことでトレーニングできる場所に……千冬姉はどこかへ行くの？」

「馬鹿者！！　織斑先生だと何回言えば――今回は山田君で両手が塞がっているからな。私は道端で倒れていた山田君を保健室へ連れて行く所だ」

ふぅん、と一夏は頷く。箒は俺を怪しんでいるように見える。もしかしたら気配が分かる人間だったりする？

「とりあえず……世の中には知った方が良い事と悪い事の２種類がある、今回は悪い方だ」

俺は千冬の姿で真顔状態。どうだ？　ビビるだろう？

「えっと……分かりました……」

苦難は去った……流石千冬さんボディ。あなたの視線はまるでメデューサだよ♪

「とりあえず私は山田君を送り届けてくる。お前たちはトレーニングのしすぎで体を壊さないようにな」

こうしてピンチは去った。さぁ、眠り姫な山田先生を保健室へ連れて行ってやるか。

一夏ｓｉｄｅ――

なんだか千冬姉が妙に優しかった気がする。

「織斑、あの織斑先生……なんだか変だった」

千冬姉が変？

「それに……気持ち悪い気配がした」

「気持ち悪い？　千冬姉が？」

パァンッ！！

「誰が気持ち悪いって？」

俺達二人は頭を押さえた。

「千冬姉！？　さっき山田先生抱えて保健室へ行くって――」
「だから織斑先生と何度言えば――ちょっと待て？　私がいつ山田君を抱えていた？」
？　話が噛み合わない？
「一夏、箒、私は山田君を抱えた記憶は無いぞ？」
「「えっ！？」」
俺達三人はこの学園には何かがいる――そう直感的に感じた。
――続く。

第二話　クラス代表決定戦だと思っているのか？（後書き）

今回はピカチュウと山田先生へ変身しました。
それにしても十年以上も続いてるんですね、ポケモンは。そういえば『ポケモンスナップ』というゲーム……今もコンビニで写真作ってくれるのかな？

第三話　放射線物質の使用は控えましょう。（前書き）

朝見たらアクセスが１０００を超えていてうれしくて泣きそうです。

これからもがんばります。

今回はＶＳセシリアです。

第三話　放射線物質の使用は控えましょう。

――イズールｓｉｄｅ

いきなり翌週、月曜日。セシリアとの対決の日――だったらどんだけ楽か。俺は第一巻を読みながら歩いていた。

「――なぁ、イズール、箒」
「なんだ、一夏」
「なんだ、ヒトナツ」

俺はわざと音読みと訓読みを逆にした。

「『イチカ』だ！！　お前、わざとやっているだろ……」
「当たり前だ。お前の本名何回口にしたと思っている？」
「まぁ、それよりも……気のせいかもしれにんだが」
「そうか。気のせいだろう」

俺はしばらく一夏と箒の漫才を見ておくことにした。

「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」
「……」
「目　を　そ　ら　す　な」

あいつら……結局ＩＳを使ったトレーニングをしなかったようだな。ここまで原作通りだと……壊したくなるなぁ。今の俺はきっと悪役の笑み浮かべてるだろうな。

――数時間後。

『お久しぶりにジャッジャジャーン♪』

「ゼオルさん！？」

『ついにイヴール君のＩＳが完成＆発注したよ。現地に妹を送り込んだけど、妹は空想世界侵略兵器の対処をお願いしているから俺が説明とかするよ』

「例の事件はいいのか？」

『あぁ、リバイバルアスナの事件か……逃げられたよ』

「そっか……」

「――イズール、ここにいたか。お前宛ての専用機が届いたぞ？」

「千冬先生！？」

いきなり現れないでよ、千冬先生。

そして――

「こいつが……俺のＩＳ……」

『紹介しよう！！　こいつがフェイゾン強化装置内蔵型ＩＳ【ＧＡ－ＰＥＤ】読み方はガペッドだ！！』

それは少し不気味に見えた。

設定流用空想機動兵器

【ＧＡ－ＰＥＤ】

『セシリアちゃんと一夏君の試合に乱入だ！　機能は本番で教える』

――アリーナにて。

「あら、二人とも逃げずに来ましたのね」

セシリアぁ……俺は興奮しているよ、初めてフェイゾン兵器を使用できるからね

『あらら……ゴアの能力で性格変わってるよ……』

「あん？　ゴアとランダスの能力設定は組み込まないって話じゃなかったのか？」

『予定が変わってね、君がガペッドを装着した瞬間に能力がアップデートされた訳よ』

「ついに俺も人外チートの仲間入りって訳か！！　ははっはー！！　そいつぁ面白い！！」

「最後のチャンスをあげますわ」

あぁ、セシリアがなんか言ってる。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから――」

一夏……だからお前はヒトナツなのだ。お前はとにかく、一刻も

早く戦闘が始まるようにしてくれれば良いのだ！！

「セシリア！！　俺はコイツの機動テストに来てんだ！！　とっとと始めようや」

「そう？　残念ですわ。それなら――」

――警告！　敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初段エネルギー装填。

「そういやゼオルさん。この機体のシールドエネルギーは？」

『あぁ、それなら――』

「お別れですわね！」

キュインッ！　閃光が走る。

一応腕でガードしてみた。

――バリアー貫通。ダメージ４６。シールドエネルギー残量、１４５３。実体ダメージレベル低。

『――サムスのフル装備のようにエネルギー９９＋エネルギータンク１４個（一個１００）で、合計１４９９。一夏君のＩＳは約６００といったところか。ミサイルは２５５発、ライトとダークのビームアモはそれぞれ２５０発。パワーボムはチャージすれば何度でも使えるぞ』

「なるほど１４９９……圧倒的じゃないか」

「１４９９ですって！！？」

セシリアは驚いている様だ。なんだよ……白式の二倍以上って……。

「削るだけですわ！」

セシリアはそう言ってこちらにライフルを向け、撃ってきた。

「ゼオルさん！！　こっちの武装は！？」

『では装備を紹介しよう！！　君のＩＳにはサムス・アランのパワードスーツの設定を流用してある。ちなみに『プライム』シリーズと『ｏｔｈｅｒ　Ｍ』が大体だ』

【パワービーム】

基本的なビーム。

速度と連射が特徴。

僅かな生体エネルギーを使うが、そんなに大量に使うわけではないので、生命活動には影響ない。

【ウェイブビーム】

尾を引くビームを一度に三発発射する。

攻撃力は低いがロックオンすることで、相手を永遠に追いかける。

電気系なので精密機械に効果的である。

ＩＳ二秒ほどを麻痺させる能力はあると思われる。

【アイスビーム】

弾の速度が遅いのと連射できないのが特徴。

威力は一番高く、敵を凍らせられる。さらに、凍った相手はミサイルを当てる事で粉々になる。

【プラズマビーム】
攻撃力と連射性能を兼ね備えているのが特徴。
ヒットしたら燃焼し、追加ダメージを与える。
ただし、射程距離が短い。
だが、『メトロイドプライム３』でパワーアップし、射程距離強化とバーナーのような溶接機能が追加された。

【ダークビーム】
ダークアモをコストに発射する粒子状のビーム。
アイスビームと性能はたいして変わらない。
連射能力は高い。

【ライトビーム】
ライトアモをコストに発射する光子状ビーム。
プラズマビームと性能はたいして変わらないが、チャージビームはロックオンすると相手を追いかける。

【アナイアレイタービーム】
ライトアモとダークアモをコストに発射する反物質エネルギービーム。
『メトロイドプライム２』の最強ビーム。
連射、速度、威力に加え、ロックオンしなくても相手を追尾する。
誘導性能は狂気としか言えない。
音波成分を含むが、この物語にでは役に立たない。

【ノバビーム】
フェイザイト製の物質を貫通できる、高周波粒子を集束させたエネルギービーム。
この世界にはフェイザイトが存在しないので役に立たない。

【ハイパービーム】
ハイパーモード使用時に発動するビーム。
これぞまさに狂気の産物。
連射、速度、威力は最強で、発射するフェイゾンエネルギーは放射線物質なので、ＩＳ搭乗者は無事では済まない。
チャージすることで、らせん状のビームを数秒間照射する、大体の敵は三秒も耐えられない。

【チャージコンボ】
ビームのチャージ中にミサイルを組み合わせる事によって、特殊な攻撃を繰り出すことができる。

【スーパーミサイル】
パワービームのチャージコンボ。
ノーマルミサイル５発分の威力を持つ、強化型のミサイル。

【ウェイブバスター】
ウェイブビームの継続型チャージコンボ。
１発につき１０発のミサイルを消費して、その後１秒毎に５発ずつミサイルを消費する。ロックオンしなくても対象に当たれば、連続して追尾する電流を発生させる。１秒毎のダメージ量は少ないが、ロックオンできない敵にも使用できる。

【アイススプレッダー】
アイスビームの単発型チャージコンボ。
１発につき１０発のミサイルを消費する。スーパーミサイル同様の高い威力と追尾機能を持ち、着弾後、広範囲を瞬間的に凍結させる。

【フレイムスローワー】
プラズマビームの継続型チャージコンボ。
１発につき１０発のミサイルを消費して、その後１秒毎に５発ずつミサイルを消費する。連続して超高温の火炎を放出する。射程距離は短いが、１秒毎のダメージ量は多い。また水中では使用できない。

【ダークバースト】
ダークビームの単発型チャージコンボ。
１発につき５発のミサイルと、ダークアモを３０発消費する。着弾後、周囲のあらゆる物体を別次元に吸引・消滅させる次元の裂け目を発生させる。裂け目は球状に展開されるため、射程範囲は広く、継続時間も長い。

【サンバースト】
ライトビームの単発型チャージコンボ。
１発につき５発のミサイルと、ライトアモを３０発消費する。着弾後、広範囲に爆発・炎上する閃光弾を発射する。射程距離は長いが、弾速は非常に遅いため、機敏な敵には有効ではない。

【ソニックブーム】
アナイアレイタービームの単発型チャージコンボ。
１発につき５発のミサイルと、ダークアモとライトアモを３０発消費する。発射した瞬間に着弾、広範囲の物体を一瞬で粉砕する超音波の衝撃波を発生させる。威力は驚異的だが、アモの消費量が激しい。

【ミサイル】
ＩＳ世界ではハイパービームの次に恐ろしい遠距離兵器である。

基本的なミサイル。着弾時に爆発を起こし、ロックオンすれば追尾する。

【ボム】
爆発性エネルギー体を封入した機械・カプセル式の小型爆弾。特定の物質を判別・破壊したり、ボムの爆風を利用する事でボムジャンプが発動する。
弾数は無制限だが攻撃力は低く、戦闘向きではない。
使った本人にダメージは無い。

【パワーボム】
強化型のボム。
起爆時には超高温の熱波が広範囲に及び、一瞬で対象物を蒸発させる事ができる。
設定は『ｏｔｈｅｒ　Ｍ』の設定の為、発動後に冷却すれば何度でも使用可能。
威力と殺傷能力があまりにも高く、使った瞬間に登場人物が蒸発してしまうので現在は使用禁止。
これも使った本人にダメージは無い。

【ハイパーモード】
体内でフェイゾンエネルギーを生成して発動する能力。
エネルギータンク１個分（この作品ではシールドエネルギー１００）のフェイゾンエネルギーで起動、フェイゾンエネルギーを全て消費するか、一定時間が経過すると、安全装置が働き強制終了するが、任意で解除したり、一定時間が経過して強制終了した場合は、残ったエネルギーが還元される。基本的に無敵状態となり、フェイゾン

エネルギーを消費した強力な攻撃が可能だが、自身のエネルギーを消費するため、計画的な使用が推奨される。
イズールはこれを発動させると外見に変化が現れる。

【コラプションモード】
体内のフェイゾンエネルギーが徐々に増加し続ける状態。
この暴走状態では、任意解除が不可能となり、ダメージを受けるとその分フェイゾンエネルギーが増加して、再度エネルギーの最大値に達すると完全汚染となり、ダークサムスに精神を支配されてゲームオーバーとなってしまう。防止策として、最大値に達する前に、増加するフェイゾンエネルギーを全て消費するか、強制終了までビーム等の攻撃能力に変換・放出し続ける事で、完全汚染を回避できる（通常より長くハイパーモードを継続する事ができるため、一概にデメリットばかりではない）。
この物語にダークサムスがいない為、ゲームオーバーにはならない。

『こんなところだ』
「凶悪兵器ばっかじゃねぇか！！」

いつの間にか二十七分。

「――二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

白式の残りエネルギーは６７。俺のＧＡ－ＰＥＤは１０００。まだまだいけるじゃねぇか！　もしかしてセシリアは俺が眼中に入ってないのか？　まぁ、パワービームしか使ってないし、他の使ったら千冬先生への言い訳面倒だし、パワーボムなんか使ったらこの世

界と戦争しなきゃいけないし……あの二人を見守るかな？

「これは……」

「ま、まさか……一次移行！？（ファースト・シフト）あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの！？」

あっ、一次移行したか……それよりも俺の存在忘れてません？

ギンッ――！！

「おおおおっ！」

切られたビットが――俺に命中した。

――ダメージ４３。残りシールドエネルギー９５７。

「……」

『イ、イズール……？』

俺はアナイアレイタービームを起動、そしてチャージ。

「……ソニックブーム」

――セシリアｓｉｄｅ

あの人がわたくしの懐に迫る。このままでは負ける。とりあえずライフルを向けました。いえ、向けようとしたのですが……。

「……ソニックブーム」

相手にしていなかったもうひとりの男性がそう言った瞬間。私のブルー・ティアーズの右半分が生身の肉体を残して綺麗に無くなっていました。

「――ッ！！？」

「！？」

一夏さんも目を見開いていました。そして、わたくしと一夏さんが見たのは……。

「オマエラァ……無視するとはいい度胸じゃねぇかぁ？」

悪魔（サタン）のような威力を持ったＩＳとはとても言い難い化け物でした……。

「俺は言ったよなぁ……『二人まとめてスクラップ』となぁ！！」

ＩＳが消えた私は彼の『顔』を見てしまった。

青黒い血管のような筋、黒い眼球、青く光る瞳。

「あぁ……あっ……ぁぁぁぁぁ！！」

「イズール……その体……ッ！？」

イズールさんのＩＳは青白い光を放っていました。本当は綺麗だと思いたいのですが、アレはそんな美的なものではありません！！

直感的ですが……。

『試合中止！！　勝者――セシリア・オルコット！！』

その言葉を聞いた時、なぜか安心してしまいました……。そしてその言葉を聞いた瞬間にイズールさんの姿は元に戻り、そして倒れました。

『医療班！！　緊急出動！！　アリーナ一帯から放射線らしき反応が出た！！　専門スタッフを出撃させろ！！』

騒がしくなってゆくアリーナの中で、わたくしと一夏さんはただ茫然とするしかありませんでした……。

――続く。

第三話　放射線物質の使用は控えましょう。（後書き）

作者は過度のフェイゾン中毒です。
フェイゾンについては実際にゲームをプレイするか、検索してみましょう。
感想をお待ちしております。

第四話　アイムドッペルゲンガー（前書き）

二名の方から感想とご声援をいただきました。
これであと６日は戦えそうです！
最近気づきましたが、戦闘シーンの回数って意外と少ないのですね。

第四話　アイムドッペルゲンガー

ここは保健室……ではなく職員室。

ここで本作の主人公イズールは取り調べを受けていた。

「単刀直入に言おう、アレはなんだ？」

「あれは俺の為にガルクライフ社が開発したＩＳです」

「ふざけるな！！　あんな発射した瞬間に着弾する兵器や放射線のような物質を運用できる兵器なんて聞いたことが無い！！」

取り調べしているのは織斑千冬である。

「もういい、お前のＩＳはしばらくこちらが預かる。ガルクライフ社にも私から抗議する！！？の部屋でもう休んでいろ」

「はい……」

そしてイズールは？へと歩き始めた。

――イズールｓｉｄｅ

「つい使っちゃったよ……ハイパーモード」

『しかたないさ……君はＩＳを装着するとキレやすくなるからね』

「そうはいってもよーゼオルさん。インフィニット・ストラトスでオリ主が機体を没収されるなんて……」

『は？　いつあんな『体験版』を君の本番機体だって言った？』

「へ？」
『完成品は俺の妹が今日届けてくれるぞ？』
「そんなの聞いてないぞ！！」
『まぁ、いいじゃないか。ちなみに没収された機体は調べちゃうと……』
「デットロックでもあるのか？」
『いや、フェイゾン爆発する』
「それヤバくない！？」

俺は歩く。もう周りは夜だ……これじゃあ第一巻が読めないではないか。

『そういえば君は変身でＩＳ展開状態の人間に変身できるぞ？』
「マジで！！？」

バシュゥゥゥゥン！！

とりあえずブルー・ティアーズを展開した状態のセシリアに変身してみた。

「リィンフォース？でぇっす♪……素晴らしいくらいのゆかなボイスです」
『再現できたみたいだな。防御や性能も再現されているはずだぞ？』

それを聞いた俺はビットを使ってみた。

「行け！！　ファンネル！！」

複雑な動きをするビット達。これがフェイゾン兵器だったらどんなに素敵か……俺はもうフェイゾン中毒かもしれない。

『たしかにフィゾン中毒だな、お前は――まて、正面ゲートの前に誰かいるぞ』

「よし、変身解除――早速第一巻を確認、夜だから読めねぇ！！」

（アニメだと夕方だったような……）

とりあえず登場人物と考えていいから接触しよう！！　レッツ・トライ！！

――？side

「ふうん、ここがそうなんだ……」

夜。IS学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなボストンバッグ持った少女が立っていた。

まだ暖かな四月の夜空になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結んである。肩にかかるかかからないかないかくらいの髪は、金色の留め金が似合う艶やかな黒色をしていた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

「お嬢さん、携帯の番号を教えてください」

「？」

あたしの目の前に男性が現れた。なにか飲んでいるようだけど……。

「あんた……誰？」
「よくぞ聞いてくれた！！　俺の名前はイズール・ユ・ミヅル。この学園の生徒さ」
イズール？　たしか……。
「ＩＳ没収予定って噂の？」
「……もう没収されたよ」
やっぱり噂は本当なんだ……。そう思っていると、そいつはあたしにジュース缶を投げた。
「それやるよ」
「えっと……ありがとう」
その缶を見てみる。『マウンテンデュー』と書いてあった。見たことのないジュースね。
「地元ではマイナーだけど美味いぞ？」
「ふぅん……」
缶は冷えていて冷たい。そして飲んでみた……あっ、美味しい。
「そういや君は織斑一夏の関係者か？」
「――ブッ！！？」
壮大に吹いてしまった。しかも炭酸だからダメージが大きい。
「やっぱり……」

「あんたは一夏の知り合いみたいね……ちょっと案内頼んでいいかな？　えっと……」
「イズールでいいよ」
「あたしは凰鈴音（ファン・リンイン）、鈴音でいいわ」
「よろしくな、鈴音♪」
「こっちもよろしく、イズール」

あたしは握手した。男の人と握手はちょっと照れる。

「そういえばイズールは知ってる？」
「何の事？」
「この学園で『ピカチュウ伝説』と『ドッペルゲンガーの噂』があるみたいだけど」
「ギクッ！！」
「噂は本当みたいね……」

それにしてもこの学園の謎ってなんなのよ……ピカチュウには会ってみたいけど、ドッペルゲンガーはなぁ……。

「とにかく受付に行くんだろ？　自転車あるから送っていくよ」
「え？　自転車？　二人乗りはちょっとバレたら面倒じゃないの？」

次にあたしの目の前に現れたのは、サドルとペダルとハンドルとタイヤがそれぞれ三つ付いた自転車だった。

「俺の所属してる組織が実験で作った自転車、その名も【ドロンボーの自転車】だ！！　家族やカップル向けに作った商品らしいけど、売れ残ったんだってさ」

【ドロンボーの自転車】
ドロンボー一味の使っている三人乗りの自転車。
ドクロベエ型のナビが前のハンドルにくっついている。
詳しい事は『ヤッターマン』で検索しよう。

――イズールｓｉｄｅ。

「「えっほ！！　えっほ！！　えっほ！！――」」

俺達二人はドロンボーの自転車をこぎながら受付を目指していた。

「！？　いち――」

鈴音がなにか言おうとしたな……そういや仲良さそうな箒と一夏を発見するんだっけ？

「よそ見すると転倒するぞ？」
「――え、あ……うん……」

『次の道は右だべぇ～』

ドクロベエ型ナビは道を教えてくれた。やっぱり三人で乗った方が気分が乗るが…しかたない。

「ＯＫ右だな？」
「……」
「一夏の事……好きなのか？」

「あんたなんでそのことを！？」

流石に『未来知ってます』なんて言えないな。

「あの朴念仁は落とすのきついぞ？」

「そうなの？」

「多分、鈴音が言った『酢豚――』もきっと間違った解釈を――」

「――ッ！！？　ちょっと待って！？　何であんたがその話を知っているのよ！！」

あ、ヤベッ！！　つい口走っちまった！！　そういや俺は第一巻を読みながら進めているからアレだけど……マズイ！！　本当にマズイ！！

『お前たちが修羅場の間に目的地に到着したべえ～』

流石ドクロベエ様！！　空気の流れを一気に変えてくれる。そこに痺れる！！　憧れる！！　そういえば俺……『ジョジョの奇妙な冒険』は読んだことなかったな……今度取り寄せるか？

「鈴音、今日はもう遅いから明日一組の教室で会おう。まぁ、お前が一組の可能性もあるがな」

「ちょっと！！　話はまだ終わってない！！」

「さらばッ！！」

「あ、ちょ――」

俺は逃げるように自転車をこいだ。

あのままだったら絶対にボロが出ていたよ。

「ふぅ、危なかった……それにしてもなんでこの自転車は売れな

かったんだ？」
『それはこの自転車が爆発するからだべぇ～』
「……え？」
『さぁ、ママよりも怖いお仕置きだべぇ～』
「ちょ、おまっ！！　やめろっ、やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

チュドンッ！！！

翌朝、そこには謎のクレーターが出来ていたという。

――翌朝。

「織斑君、イズール君、おはよー。ねぇ、転校生の噂聞いた？……何でイズール君はジャージなの？」
「昨日、制服が夜空を飛びたいと言って飛んで行ったのさ……」
一夏クラス代表就任パーティを開いた翌朝、俺と一夏が席に着くと近くの席の女子が話しかけてきた。
「転校生？今の時期に？」
「はー、へー」
一夏は転入生のことに疑問を持ったようだけど、俺はすでに知っているので興味が湧かずに生返事をした。
「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

最初から入学するでなく、転入というのはかなり難しいらしい。
それこそ知識や技量の試験は普通の入学試験より難問になっているとか。
それでも転入できるのだから、流石は代表候補生というところか？

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

こちらの会話を聞いていたのかセシリアさんが腰に手を当てたポーズを決めながら話しに入ってきた。

「セシリア、あんまり淑女のするようなポーズではないと思うぞ？」

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

先程まで自分の席に座っていた箒も俺達の席に近付き話に混ざる。

「どんなやつなんだろうな」

一夏が転校生の話題に乗っかっていた。

「気になるんですの？」

「ん？ああ、少しは」

「ふん・・・今のお前に他のクラスの女子を気にしている余裕はあるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくしが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわ

たくしと一夏さん、だけなのですから！」

セシリアさんは一夏の訓練に自分が付き合うと言いつつも、『だけ』という部分を強調する。

「俺を忘れてないか？　まぁ、没収されたけどな」

「そういえばイズールのＩＳはどうなったんだ？」

「わたくしのＩＳを一瞬で大破させるモンスターマシンですから軍などが目をつけてるんではありません？」

「機動能力は見なかったが、破壊力だけは異常だったな」

一夏、セシリア、箒の順に疑問や意見を話す。

「あぁ、それなら――」

――数時間前。

――食堂にて。

「今日のデザートはぁっと♪」

俺はプリンを取った。

「パクリと口に～はこぶ～♪　――ッ！！？」

その時、イズールに電流走る。

なんだ？　無駄に味が良くなっているぞ！？　舌触り、味、香り

が全て俺を満足させてくれる。なんだ……、一瞬で昨日の爆破事件を帳消しにしてくれるこのおいしさは――。

「このプリンを作ったのは誰だ！！」

思わず叫んでしまった。

「はい。私ですけど……」

そう言って俺の前に現れたのは白いエプロンと三角巾で頭を覆った黒髪の女性だった。白いエプロンには『G』と『A』の文字を重ねたようなガルクライフ社のロゴが……！？

「ガルクライフ社の人！？」

「はい。私はゼオルお兄ちゃんの妹のウォルツ・ゲバインです。もしかして……あなたがイズールさん？　初めまして♪　私は今この学園でパティシエの技術を使って侵入しています。御用があるときは学園の近くにある私のお店を訪ねてください」

パティシエなのか……ゼオルさんの妹って……。

「あと、これを渡しておきます」

そう言って渡してくれたのは……これは待機状態のＧＡ－ＰＥＤじゃねぇか！？

「はい。これは完成品です。能力についてはお兄ちゃんから聞いてください。あと、ＵＳＢメモリも渡しておきます。これにはフェイゾンの資料やＧＡ－ＰＥＤの基礎理論が含まれています。束博士に見せてはいけませんよ？」

そう言って俺にＵＳＢメモリを渡してくれた。ウォルツさんのキャラは山田先生とどこか似ている。というかこのフラッシュメモリ……外見が『仮面ライダーＷ』の『ガイアメモリ』じゃねぇか！！

しかも、テラーメモリ。

「“恐怖”ですからね。見た人は」

「何怖い事言ってんのあなたは！！」

こうして、俺はＩＳを手に入れた。

そういえば前にゼオルさんが妹に空想侵略兵器の対処をお願いしたって言ってたな。もしかしてあの人、メチャクチャ強いんじゃ……。

――現在。

俺は今の話をマズイ部分だけ略して話した。

「まぁ、そんなところか」

「「「あれで『体験版』！！？」」」

みんな騒ぎすぎだよ……箒もセシリアも身を乗り出すな！！　胸がみえてしまうぞ！？

「……まあ、やれるだけやってみるか」

一夏は軽く気持ちで言った（？）のだけど、周りの反応は違った。なんとか原作に沿っているようだ。

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

すごい剣幕のセシリアさんと箒さん。あんたら現実逃避してない？

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

「織斑君、がんばってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「目指せ、優勝！」

そういえば学食デザートの半年フリーパスが配られるとか書いてあったなぁ。そういえば……。俺は携帯電話を取り出した。

「イズール君何やってるの？」

隣のモブ生徒が話しかけてきた。俺が初めてハイパーモードを発動したときに怯えながら手鏡を貸してくれた優しい女の子だ。

「いや、学食のデザート開発の担当がウチの上司の妹さんだから、何か面白い商品ださないかなぁって。ちなみに担当になったのは最近で、無茶苦茶美味いプリン食わせてもらったぞ。なんというか……いままでの四倍ほどのおいしさ」

「それ本当！？」

流石女の子。食いつきがいい。

「専用気持ちは一組と四組だけ――」
「――その情報、古いよ」

なんだか向こうでは鈴音が出てきたが……今はこっちの方が楽しい。

「イズール！！　さぁ、昨日の話聞かせてもらうわよ！！」

宣戦布告を終えた鈴音が俺に話しかけてきた。

「ちょっと待って、今いいところ」
「なんでよ！？　聞かせてくれるって――」
『はぁい♪　イズールさんですね？　ご用件はなんでしょうか？』
「あっ、ウォルツさん？」
「――誰？」

ウォルツさんは携帯の端末からホログラム（画質は無駄に高く、動きもなめらか）として現れた。

「イズール！！　その携帯はなんだ！？　無駄にハイテクじゃないか？」
「一夏よ、だからお前は『ヒトナツ』なのだ」
「どういうことだよ！！」
「ガルクライフ社製の機械が普通じゃない事くらい気付けよ」
「あ、……」

まったく……そんなんだから修羅場が発生するんだよ。

『あのぉ……要件はなんでしょう？』

すっかり空気となっていたウォルツさん。あ、ごめんなさい、サーセン。

「実は、学食デザート以外に何か特典が欲しいんです。クラス代表の士気を上げるためにも」

『あぁ、それについてならすでにお兄ちゃんから要望があって、イズールさんから要望が出たときにお兄ちゃんがプロデュースした計画を発動してくださいとのことです』

すでにゼオルさんが計画してたとは……。考えが読まれていたか？

『えーっと……今からプロジェクトをホログラムで表示しますね♪』

俺と一夏、箒、セシリア、鈴音が表示された計画書を読む。……見なきゃ幸せだったかもしれない。こう書いてあった。

「「「「疑似結婚式イベント？」」」」

「あわわわわ……マズイ！！　こいつはマズイ！！」

【疑似結婚式イベント】

この度はガルクライフ社をご利用していただき、誠にありがとうございます。

デザートのフリーパスでは不服な欲望満載なあなたにとっておきのイベント！！

今回のクラス対抗戦で勝ったクラスには何かの方法でさらに細かい代表を決めてもらいます。決まったのなら、その一人がパートナ

ーを選びます。選ばれた人と選んだ人には私たちガルクライフ社が用意した豪華客船で結婚式を体験してもらいます。
結婚式は疑似的ですが、この体験のおかげで実際にカップルになった人もいます。予算は全てガルクライフ社が負担し、ドレスやスーツもクラス全員分一からオーダーメイドします。新婦のウェディングドレスもガルクライフ社の優秀なデザイナーがデザインしますのでご安心を。
予算は６０００億用意してあります。主役になれなかった方々も高級料理や珍味に舌をうならせる事でしょう。
新郎新婦用のウェディングケーキやお客様用のスイーツはガルクライフ社最高のパティシエであるウォルツ・ゲバインが製作します。
ちなみに、この文章はイズール・ユ・ミヅルさんがＯＫサインを出した瞬間に全クラスに送信されます。
※同性での参加も許可します。要望があればキスシーンまでやって貰います。

【ガルクライフ社代表取締役　ゼオル・ゲバイン】　ＧＯサイン？（Ｙ　／　Ｎ）

こいつは……悪魔の契約書だ……。なんてもん企画しやがる！！
もう一夏が酢豚イベントどうこうの話では無い！！　一応お約束の通りにギギギとブリキ人形のように顔を横に向けた。

「「「「「……」」」」」

いつのまにかクラスの女子全員の目が暗くなっていた。ハイライトが無い……作画スタッフめ……サボったか？　そう考えないと俺は不安で死にそうだ。

『あっ、イズールさんがこのホログラムの『Y』のボタンを押した瞬間に計画が発動しますよ♪』

その瞬間ッ！！

クラスの女子全員が物凄い勢いで襲いかかってきた。

「逃げろ、イズール！！」

「馬鹿野郎！！　唯一のクラスの男子の友達を置いていけるか！！」

一夏よ、見ているがいい！！　チート転生者の力の一部を！！

「連続！！」

迫りくる女子を怪我しないように投げる。

「C！！」

二人目

「Q！！」

三人目

「C！！」

そして、いつの間にか１０人倒したところで――。

「ごめん、一夏。俺はスネークやザ・ボスにはなれそうもないや♪」

「イズゥゥゥゥルゥゥゥゥゥ！！！」

俺は捕まった。

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！！」

「「「一夏（さん）と結婚式……」」」

くそう！！　模擬戦の時覚えてやがれよー！！

拘束された俺は『Ｙ』の文字をタッチさせられた。

ピンポンパンポーン♪

『ＩＳ学園全員に素敵なお知らせがあります。詳しくは掲示板やモニターをご覧になってください』

その時、学園中にこのことが伝わり、学園全体が欲望の渦となった……。

キーンコーンカーンコーン♪

いつのまにか直っていたチャイムを聞きながら、黄色い声を上げる女の子を眺めつつ、千冬先生に叩かれるまで、俺は茫然としていた。

――放課後。

「……千冬先生、あなたを巻き込んで……ごめんなさい」

「気にするな、結局はあの放送ジャックや企画もお前の上司の仕業なのだろう？」

「……はい」

俺や一夏、千冬先生はあの企画のせいでもはや賞品だ。同性も許可されているからこの学園の生徒がほぼすべて賞品として存在することとなるのだが、ほとんどが俺を含む三人が対象なので、自分達の置かれている立場には気付いていないようだ。

「馬鹿共の私を見る顔が……とても恐ろしく見えた」

「そんな企画作るのが俺の上司の趣味なんです。きっと……」

もう、ガルクライフ社所属の肩書捨てちゃおうかな……。

「忘れないうちにこれを渡しておこう」

そう言って渡されたのは待機状態のＧＡ－ＰＥＤだった。しかし、光を失っているような？

「調べようとしたら爆発してな、結局、犠牲が出ただけの徒労となってしまった。しばらくは訓練機で我慢しろ」

「そうですか……」

まぁ、新型あるんだけどね

「ガルクライフ社については何か分かりましたか？」
「分からなかった。だから今度の疑似結婚式で暴いて見せるさ」
千冬先生が怒ってる。『あいつら……コケにしやがって』が多分本音だろう。
俺は怒りで震える千冬先生を見た後、その場を立ち去った。

――千冬ｓｉｄｅ

ふふふ……ガルクライフ社、ここまで私を挑発してくるとは。
必ずお前たちを表舞台にさらしてやろう。
やはりイズールの部屋に監視カメラを仕掛けた方が良いのではないか？

「イズールよ……ん？」

もうそこにイズールはいなかった。

――千冬ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

放課後の第三アリーナに誰かいた……。一夏と箒とセシリアだ。
「何か楽しそうなことやってるな……イタズラしますか♪」
俺はポケットから待機状態のＧＡ－ＰＥＤを取り出す。
「……そういや生身でガンドレイダとランダスとゴアの能力が使えるってことは――」

【グラップリングボルテージ】
バウンティハンターガンドレイダが所持していた装備。
特定の対象物にグラップリングビームを接続している間、体内エネルギーを送り込んで、特定の装置にエネルギーを供給したり、逆にエネルギーを吸収する事で、セキュリティロックの電源を奪う事ができる。
このＩＳ世界ではＩＳから直接エネルギーの奪取が可能。

【アイスミサイル】
バウンティハンターランダスが所持していた武器。
爆発の瞬間、周囲の熱量を大量かつ急激に消失させる効果を持つ。
アイスビームと被る。

【プラズマビーム】
バウンティハンターゴアが使用していた武器。
鳥人族製のプラズマビームより威力は劣るものの、パワービームの弾速・連射能力を継承している。

「この三つが使えるが使えるってことか！？　やべぇ、予定変更

！！」

俺はすぐにＧＡ－ＰＥＤをポケットにしまい、ポーズを決める。

「一夏の体……イケメンで強いのね……嫌いじゃないわ！！」

紫の光が体を包み込んだ。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏ｓｉｄｅ――

「はあああっ！」

「甘いですわ！」

……終わるまで待っていよう。なにか、鬼気迫るものを感じる。

横槍を入れるとひどい目に遭いそうだ。

「一夏！」

「何を黙って見ていますの！？」

「うえっ！？　何を黙ってって……どっちかに味方したらしたらお前ら怒るだろ？」

「当然だ！」

「当然ですわ！」

いや、じゃあどうしろっていうんだよ！

ていうかなんか、こういうときだけ息ぴったりだな、箒とセシリア。なんでだ？

「――私に言い考えがある！！　……この台詞はたいてい失敗するわよ、一夏ちゃん」

なんだ？　男の裏声らしきものが……聞こえて……え？

「なに？　私のオカマ演技が変だって言うの！？　酷いわ、一夏ちゃん！！」

「なっ……！？」

「あ……なんで…？」

「どういうことですの……？」

アリーナに侵入してきたのは制服姿の『俺』だった。どういうことだ？

一夏ｓｉｄｅ　ｅｎｄ――

一夏（イズール）ｓｉｄｅ

「「一夏！？」」

「俺！？」

ふぅん、良い感じに混乱してきたね。さてと、自己紹介しますか。

「自己紹介だ！！　俺はＩＳ学園の生きる都市伝説、『ドッペルゲンガーの噂』だ！！」
「「「ドッペルゲンガー！？」」」
「ちなみにこの一夏君で君達に会うのは初めてだから、心配しなくていいぞ？」

さらに混乱してきた三人に俺はカメラを向けた。

「さぁ、その表情いただき！！」

パシャッ！！

「富竹フラッシュ！！　さぁ、本題に入ろう。俺は、武装の実験がしたいからセシリアと箒が組んで二対一で戦ってくれないか？」

そう、今回俺は武装のチェックが目的なのだ。

さぁ、始めようか。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――箒ｓｉｄｅ

何ということだ！？
一夏が二人いる？
しかもアイツは『ドッペルゲンガー』と名乗った。もしや今まで

接してきた一夏は……。

「ちなみにこの一夏君で君達に会うのは初めてだから、心配しなくていいぞ？」

良かった……それにしても何者なんだ？　学園の噂が本当に存在するなんて……。

そう思っていたらアイツは勝負を仕掛けてきた。ＩＳも無しに？

いや、まだ展開していないのだろう……いいだろう。一夏の偽者め、私が退治してくれる！！

――箒ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――セシリアｓｉｄｅ

ドッペルゲンガー！？　そんなおとぎ話の存在が実在するなんて……。

そういえば何で一夏さんの姿をしていますの？　それにしてもわたくしが好意を持ったのは本物でよかったですわ。

え？　勝負？　わたくしを馬鹿にした態度を見せる偽者を退治してみせますわ！

――セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏ｓｉｄｅ――

「さぁ、ご紹介しよう！！　俺のＩＳ……白式を！！」

そう言って展開されたのは……って！　俺の白式じゃねぇか！？

でも、知らない武装が追加されている。

「一夏ちゃん、あなたはそこで見ていなさい！！　わたしの活躍＆伝説の誕生を！！」

「あ、あぁ……」

もう訳が分からねぇ。というか俺の声でオカマ発言はやめてくれ。

そして戦いが始まった。

シールドエネルギーは……なんだ？　アイツの白式の表示が文字化けしている？

「さぁ、かかってらっしゃい。箒ちゃん、セシリアちゃん」

「気持ち悪い喋り方をするな！！」

「喧嘩を売った事を後悔させてあげますわ！」

イギリス代表候補生

【セシリア・オルコット】

＆

一夏の幼なじみ

【篠ノ之箒】

VS

空想生命体

【イズール・ユ・ミヅル（変身体）】

まずは箒の打鉄が攻撃を仕掛ける。しかし新体操のような動きで綺麗によける。

「人間みたいな動きをした！？」

「箒ちゃん……リンボーダンスでも教えてくれるの？」

「箒さん、避けてください！！」

セシリアがビットを展開する。

それをアイツは避ける。一発も当たっていない。

「こっちもちょっと本気出しちゃおうかしら？」

アイツは白式の背中に何かを展開させる。なんだあれ？

「食らえ！！　アイスミサイル！！」

ミサイル！？

バシュンッ！！

発射されたミサイルはセシリアを追いかける。

「――ッ！？」

ミサイルを回避するセシリア。しかし避けた瞬間にアイツの白式が凄い速度でセシリアを捕えた。

「セシリアちゃん、遊びましょう？」

「――ひッ！？」

アイツはブルー・ティアーズのマウントポジションをとり……。

「グラップリングボルテージ……使っちゃえ♪」

左手の装備からビーム状の鞭のような物が出て、ブルー・ティアーズを絡め捕った。

「さぁ、チェックメイト！！」

「なんで！？　エネルギーシールドが！？」

「そう、これはエネルギーを吸い取ったり出来るのさ！！　降参する？」

「だれがするもんですか！」

アイツの白式……なんて装備を搭載してやがる。

シールドエネルギーを直接吸い取るなんて……。

「おおおお！！」

「突撃の近接戦はオススメしないわよ？」

アイツの白式が右手を挙げた。

ピキピキ――ズガンッ！！

箒の進行方向に巨大な氷の柱が出来た。えっ？　なんで？

「――なっ！！」

箒は避けた。しかしその瞬間にミサイルが足に命中してしまった。打鉄は足が凍って動けなくなった。

「はい、セシリアちゃんはゲームセットね」

「うぅぅぅ……」

ついにブルー・ティアーズのエネルギー残量が０になってしまった。

箒は……。

「くそっ、武装全部が凍っただと！？」

どうやら勝負はついたようだ。

――ピットにて。

「結局お前は何者なんだ？」

「だから……ドッペルゲンガーだって」

「「……」」

箒とセシリアは落ち込んでいた。

「相当落ち込んでいるな」
「当たり前じゃない！！　こんな一夏ちゃんの姿をしたオカマにやられるんじゃ落ち込むわよ！！」
「それ、演技だよな？」
「演技だよ」
「で、お前は何者なんだ？」
「無限ループに入るも悪くないが、そろそろ――」

アイツがそう言った瞬間に千冬姉と山田先生がピットに乗り込んできた。

「お前か、アリーナに乱入した……一夏が二人だと！？」
「あわわわ……やっぱりドッペルゲンガーは実在したんですね」

なんだか山田先生の顔が青いような……。

「え？　倒れた山田先生を千冬先生……いや、千冬姉の姿で運んだんですから感謝されるべきだと思いますが？」
「「「「「！？」」」」」

あの時の千冬姉はお前だったのか！！　全然気づかなかった。

「まぁ、捕まるのもなんですし……煙玉！！」

急にピット内が煙で満たされ、晴れた時にはもう一人の俺はいなかった。

一夏ｓｉｄｅ　ｅｎｄ――

――続く。

第四話　アイムドッペルゲンガー（後書き）

ご感想やこんな展開が良いのではというアイディアも募集しております。

第五話　まさかこうも簡単にばれるとは。（前書き）

いきなり原作ブレイク＆秘密が一つばれるお話です。

第五話　まさかこうも簡単にばれるとは。

――鈴音ｓｉｄｅ

「あ、あの、だな、鈴……」

「最っっっ低！　女の子との約束をちゃんと覚えていないなんて、男の風上にも置けないヤツ！　犬にかまれて死ね！」

あたしは一夏の部屋から飛び出した。

なんでよ――なんで覚えてくれなかったの？

あたしは……そんな意味で言った訳じゃないのに！！

「――あ～いむ　しんく～とぅ～とぅ～とぅ～♪」

「――！？　ちょ、どいて！！」

「あん？　ホイホイチャーハン？」

イズールと曲がり角で激突した。

お互いの荷物が飛び散った。あたしのボストンバッグの中身も散乱した。

「いって～。鈴音か……なん――おい、涙目だぞ、大丈夫か！？」

「！？　何でもない！！」

あたしはすぐにボストンバッグの中身を回収する。イズールの荷物は見たことのないお菓子やジュースやグッズばかりあった。

「ごめんね、じゃあね！！」

「おい、急いでる理由くらい聞かせ――」

あたしは自室へ帰った。

自室にて。

あたしは静かなこの部屋で泣きそうになった。
本当に……なんで一夏は……。
涙がこぼれそうになる。

あたしはまとめていた荷物をボストンバッグ取り出す。

「？」

見たことのない物が入っていた。

ＵＳＢメモリのようなそれには『Ｔｅｒｒｏｒ』と書いてあった。

「テラー？　恐怖？」

ＵＳＢメモリモドキにボタンが付いていた。とりあえず押してみた

『Ｔｅｒｒｏｒ！！（ＣＶ　：立木文彦）』
「なんだか不気味な声ね」

たぶんイズールの私物なんだろうけど……ちょっとした好奇心で覗いてみる事にした。

「ええっと……何々？　ＧＡ－ＰＥＤ？　たしか没収されたイズ

ールのＩＳだったような……フェイゾン？　何の資料？」

――数分後。

「ちょっと待ってよ――これってヤバい資料なんじゃ……じゃあ没収された理由って――！！？　嘘でしょ！？　それじゃあイズールの体内ってどうなっているの？」

次々に見えてくる『狂気の産物』や『放射性物質』の文字。

――さらに数分後。

「パワーボム！？　今までのを整理すると、学園全員の命がＩＳ一機に握られているようなもんじゃない！！　それにコアを使っていないって、もうわけわかんない！！」

そして見えてくる『ガルクライフ社』の文字。

「ガルクライフ社って……あの疑似結婚式イベント仕掛けた組織じゃん――すぐに知らせないと……でも、ＩＳは没収されたっていうし、まずはイズールの本心を聞かないと」

あたしはイズールの部屋の場所を聞くために、一夏の部屋へ向かった。

――１０２５室にて。

「一夏！！」
「鈴！？　あ、あの、さっきは……」
「緊急事態なの！！　イズールの部屋知らない！？」
「イズールの部屋？　それなら隣の１０２６室だけど……そういえばさっきイズールがお前を物凄い顔で探してたぞ？」
「ありがとっ！！」
「あ、おい、ｒ――」

バタンッ！！

私はイズールの部屋の扉を叩いた。

「イズール！！　いるなら返事して！！」

しかし、返事は無い。

「あれ？」

鍵が開いていた。あたしは迷わず入った。

「鈴！！　流石に人の部屋に入るのは――」
「ちょっと黙って」
「おい、さっきからその態度は――」
「今、学園の生徒全員の命がかかってるから一夏も篠ノ之さんも黙って！！」

あたしは部屋に置いているものを確認する。

「なんだこれ……見たこと無いゲーム機だぞ」
「こっちには知らない会社のアニメ雑誌があるぞ」

本当に謎が深まってきた……えっと、パソコンは……あった。起動中みたいね、さっきのＵＳＢメモリを見ようとして無くなっているのに気付いて慌てて出て行ったみたい。

「ファイル名『趣味画像』、『ＶＩＤＥＯ』、『秘密ファイル』――これね」

「お、おい、流石に秘密を見るのはどうかと――」

「ちょっと黙ってて」

「はい……」

中身を覗く……。

「「「ＩＳ学園ゲーム化計画？」」」

なにかしら……ゲーム化計画って……。

「一夏！！」

「？」

「読んで」

「おぅ」

あたしはさっきみたいに一人で怖がるのはもういやだ。三人で共犯者にしよう。

「ええと――今回の企画は、鈍感主人公『オリムラ』が、幼馴染二人『ホウキ』と『リンイン』とクラス代表の『セシリア』、さらに後に合流する『シャルロット』と『ラウラ』の誰かと恋愛をするゲームである――」

「「！？」」

ちょっと待って？　今、一夏は何て言ったの！？

「――このゲームには超高性能ＡＩが搭載されており、人格を見事に再現。完成後はこれをモデルとなった本人たちにプレイさせることによって完成する、現実をも巻き込んだ巨大プロジェクトである。主人公は『オリムラ』だけでなく、ヒロインサイドから主人公を攻略することが可能で、もはやゲームと現実の壁を無くすほど中毒性は高く、プレイする時にはプレイヤーを見守る人物を確保することをお勧めする――」

やめて、それ以上言うとバレるから。

「ストップッ、一夏！！」
「やめろ一夏！！」
「？　顔が赤いけど熱でもあるのか？」
「「うるさい！！」」

もう、何でこんな思いしなきゃいけないのよ。

「何か米印書いてあるぞ」
「「？」」

えっと――。

※実験に協力してもらった山田真耶先生はしばらく『ウヘヘ……オリムラく～ん♪』としか言わなかったことを記述しておく。

「「「……」」」

秘密って……これじゃあ私たちのじゃん。

「鈴、俺達は部屋に戻るよ」

「私も戻る」

「あっ、うん。付きあわせてごめんね」

こうして二人は部屋へ戻っていった。

さて、あたしも帰ろうかな……。

そう思ったあたしはこの部屋にある、とある物に気付いた。

「鏡？」

鏡だ。成人男性の背ぐらいはある大きな鏡。四方にそれぞれ機械が付いている。

男性の部屋になんでこんな大きな鏡があるの？　しかもこんな鏡なんてどの部屋にもないのに――。

「……」

あたしはその鏡に触れた。

チャプンッ……。

「！？」

鏡がまるで水面を触るような感触がする。

「……入ろう」

あたしは好奇心に勝てずにその鏡に潜った。

――ガルクライフ社にて。

「何……ここ……」

いつのまにかあたしは知らない建物の中に入っていた。

「ここ……どこ？」

「あれ？」

私に誰か気付いたようだ。

「誰！？」

「えっと……パティシエのウォルツですが？　あなたは凰鈴音さんでしたよね？」

「はい、何で名前を？」

「中国の代表候補生さんですから……知っていますよ？」

「なるほど」

思い出した。この人は疑似結婚式の企画を紹介したホログラムの人だ。

「今日は観光ですか？」

「観光って……ここはいったいどこですか？」

「あら？　てっきりイズールさんに選ばれてここに遊びに来たのかと……」

選ばれて？　あいつは好きになった人には秘密を暴露するっていうの？

「あっ、初めてならここの紹介しないといけませんね。ようこそ『ガルクライフ社』の本社へ♪」

「ガルクライフ本社！？」

「はい、どの組織も欲しがるテクノロジー満載、戦争すれば二日ほどで勝てます」

どうしよう……敵の城に迷い込んだみたい。一夏……助けて。

「ここで立ち話もなんですし……何か食事できる場所でお話しましょう」

――ガルクライフ社　社長室。

「お兄ちゃん、いる？」

「……ここはどこですか？」

「そんなに怯えなくてもいいですよ♪　ここは社長室です」

「……」

本当に殺されるかもしれない。

「おっ？　お帰り。そちらのお客さんは？」

「あぁ、ＩＳ学園の凰鈴音さん。ちょっと迷子でやってきたみたいで……」

「イズールめ、管理がなってないな。まぁ、とにかくガルクライフ社へようこそ」
「え、は、はい」

エプロン姿の男性はあたしに微笑みかけてくる。手にミトンをはめ、その手には料理の鉄板があった。

「さて、そろそろお昼の時間だ。ハンバーグを焼いたからみんなで食事しよう」
「はい、お兄ちゃん♪」
「お昼？　あれ？　たしか夜じゃあ――！？」

あたしは窓の外を見た。
ここはどうやらビルの中のようで、町を見下ろせた。
太陽は空のてっぺんにある。
もう、考えるのやめようかな？

「ところで君はウチの会社をどう思っているのかい？」
「……悪の結社かと」

答えの内容はもう自暴自棄になっていた。

「その答えは違うな……ウチは悪の『秘密』結社だ！！」
「お兄ちゃん、デザートが出来ましたよ♪」

なんだよ……この会社……。

「どうした？　――口に合わなかったか？　そうか、ライスが無いのが不満なんだな？」
「いえ、美味しいです……美味しいんですけど気分が……」

本当に怖い。

「まぁ、しかたないか――」

『社長、イズールさんが来ています』

「あ、社長室に呼んで。食事してることも伝えて」

『了解しました』

コンコン！！

「社長、お連れしました」

「ご苦労さん。下がっていいよ」

「はい、社長」

あたしの目の前にイズールが現れた。

「鈴音！！　心配したぞ――」

「馬鹿！！　あたしがあんたのせいでどれだけ怖い思いしたか分かってんの！？」

「――すまん」

あたしは怒鳴った。本当に怖かった。

「お二人さん、飯が冷めちまうぞ？　一緒に食おうや」

「お兄ちゃんがイズールさんの分も作ってくれているからみんなで食べましょう」

「――いただきます」

「……」

――鈴音ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

まさか第一巻でバレるなんて……。

「バレるもんだろ？　いずれ某バーローだってバレるさ」

「ゼオルさん、料理の腕上げましたね？」

「……素晴らしいスルースキルだ。さて、鈴音君」

「はい……」

鈴音は不安そうな顔をした。

ごめんな、鈴音。

「君には自由をやるよ。君が望めば情報は何でもやろう。そして君の手に入れたＵＳＢメモリは織斑先生に渡したまえ」

「「！？」」

俺と鈴音は驚いた。公開してもいいのか？

「織斑先生なら大丈夫さ。馬鹿なことには使わないさ。それに、フェイゾンは今のところイズール君の体内でしか生成できない」

「そっか……」

「ゼオルさん……」

「明日からまた頑張りたまえ、主人公君」

「はい！！」

「いい返事だ！　ウォルツ、デザートはお土産にしてあげなさい」

「はい、お兄ちゃん」

ウォルツさんは俺と鈴音に白い箱を渡した。

「中には『プリン大福』というお菓子が入ってるよ。これが結構おいしいんだから♪」

「ありがとうございます、ウォルツさん」

「ウフフ♪　どういたしまして」

俺は鈴音の手を引っ張った。

「鈴音、行くよ！！」

「えっと……うん！」

俺達二人は社長室を出て行った。

「あのイズール君は実はモブキャラにはモテるように設定したんだが……気付いてるかな？」

「――まぁ、あの二人に任せましょうや、兄貴！」

「三人目の人格か？　我が妹よ」

――ＩＳ学園にて。

「これを鈴音へってゼオルさんが」

「え？」

俺はガルクライフ社製のゲーム機を渡した。

「もしかして……例の恋愛ゲーム？」
「やっぱり見たな？」
「……うん」
「まぁ、本当の秘密文章は『趣味画像』のフォルダに入っているのが正解だ」
「そうなの！？」
「ま、現実離れしてる内容だけどな」
「今日以上の現実離れは経験したくないわ」
「でも悪い事ばかりでもないさ、後これも渡しておこう」

俺はＷｉｉと『メトロイドプライム』シリーズ三部作と『ＭＥＴＲＯＩＤ　ｏｔｈｅｒ　Ｍ』を渡した。

「これは？」
「俺の能力の元ネタと言えばいいかな？　俺を倒したければそれで感覚を掴め！」
「なんだか悪いわね」
「巻き込んだ俺の方が悪いわ」

本当にすまないな。こんなことに巻き込んでしまって。
「今日は部屋に帰ってもう寝ろよ」
「うん、お休み」

今日は厄日だったのかな。鈴音の背中を見ながらそう思った。
さて、対抗戦の無人機の代わりに俺が出ますか。
抜き打ちテストだ。

――続く。

第五話　まさかこうも簡単にばれるとは。（後書き）

自分で書いてアレですが、こんなストーリー方向で大丈夫なのでしょうか。

第六話　無人機には退場してもらいました。（前書き）

連続投稿でストックがそろそろヤバめな気がします。
今回で原作一巻分は終了です。

第六話　無人機には退場してもらいました。

――イズールｓｉｄｅ

『それでは両者、既定の位置まで移動してください』

俺はハイパーセンサーで会話を盗聴する。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

まったく……だからお前は『ヒトナツ』なのだ。一夏はなんでこうトラブルを起こしやすいのだか。さて？

「状況は？」

『無人ＩＳはウォルツが撃破した。さぁ、ガルクライフ社の社員である君が活躍し、第二巻へのステップを早めようじゃないか！！』

「でも、真の目的は？」

『第三巻に潜伏している空想世界侵略兵器の撃破だ』

「転生してからずっとその単語聞いてなかったからちょっと不安だったけど……三巻に潜伏していたのか」

『あぁ、あの食事会の後に分かったんだがな』

「そうか……さぁ、始めようか」

俺は観客席から離れ……。

「……」

人気のない場所で変身した。

「山田先生の体……嫌いじゃないわ！！」

紫の光が体を包んだ。

「来い！！　ＧＡ－ＰＥＤ！！（ガペッド）」

さぁ、プレゼンテーションの始まりだ！！

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏ｓｉｄｅ――

ズドオオオオンッ！！！

「！？」

鈴に刃が届きそうになった瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。鈴の衝撃砲――ではない。範囲も威力も桁違いだ。

「な、なんだ？　何が起こって……」

状況が分からず混乱する俺に、鈴からプライベート・チャンネルが飛んできた。

『一夏、試合は中止よ！　すぐにピットに戻って！』

何をいきなり言いだすのか。そう思った瞬間、ＩＳのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

――ステージ中央に熱源。ＧＡ－ＰＥＤに酷似しています。

「なっ――」

イズールか？　でも、イズールのＩＳは没収された後に壊れたって千冬姉が言ってたし……。それにアリーナの遮断シールドはＩＳと同じもので作られている。それを貫通させるほどの威力を持った機体が乱入、こちらをロック――あれ？

どこからかＢＧＭが流れ始める。

「～♪」

足についているボール状の物でこちらまで近づいてくる。

肩にある『Ｇ』と『Ａ』を重ねたようなロゴ。

「～♪」

緑の髪に大きな胸……。

「～♪」

そしてメガネ……間違いない。

「来たぞ我らの♪」

「「山田先生！？」」
「～♪」

いや、山田先生じゃない！！　あの山田先生があんな恐ろしい破壊力のＩＳを装備する人なんかじゃない。

「久しぶりね、一夏ちゃん。ドッペルゲンガーよ？」
「ドッペルゲンガー！？　なんでイズールのＩＳ持ってるんだ！？」
『一夏、ドッペルゲンガーって何？』
「鈴は初めてだったな、こいつが『ドッペルゲンガーの噂』の正体だ！！　前は俺に化けて、その前は千冬姉に化けてたらしい。しかもＩＳもコピーできる」
『それってそうとうヤバい奴って事！？』

ヤバイぞ！！　アイツは今ＧＡ－ＰＥＤに化けてる。あの武装がコピーなんかされたら……。

「あ、ちなみにこのＧＡ－ＰＥＤは本物だからね？　ちなみに私はガルクライフ社の社員だからよろしく。まぁ、今回は全装備解放ＧＡ－ＰＥＤのテストをやれって開発主任の独断企画言われているから――」

ＧＡ－ＰＥＤが本物！？

『一夏！！　すぐにピットに戻って！　早く！』
「――付き合ってね♪」

主人公
【織斑一夏】
&
中国代表候補生
【凰鈴音】

VS

空想生命体
【イズール・ユ・ミヅル（変身体）】

GA－PEDが右手をアームキャノンに変形させてこっちを撃ってきた。

「お前はどうするんだよ！？」

とにかくオープン・チャンネルを開く。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」
「逃げるって……女を置いてそんなこと出来るか！」
「馬鹿！　アイツは今『全装備解放』って言ったのよ！　昨日見たイズール君のUSBメモリの内容が本当なら、学園の生徒全員が蒸発する核兵器モドキが使えるってことよ！！」
「なんだって！？」
「あれはISをスポーツではなく兵器として証明するための機体なのよ！　しかもあれには博士の作ったコアは一切使われてない！！」

「そんな奴にどうやって勝つんだよ！」
「別に、あたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやってきて事態を収拾――」
「あぶねえっ！！」

間一髪、鈴の体を抱きかかえさせてもらう。その直後にさっきまでいた空間が熱戦で砲撃された。

「ビーム兵器かよ……。しかもセシリアのＩＳより出力が上だ。いや、桁違いだ」
「ありがとう、助かった。一夏、あれはプラズマビームよ。アレ食らったら絶対防御でも蒸し焼きよ！　って、どこ触ってんのよ！」

何だって！？　あれ直撃してたら鈴は……。

「よそ見はいけないターリホーゥイ♪」
「「！？」」

俺に向かって黄色い弾丸が飛んでくる。

ズガガガッ！！　と被弾する。

「うわっ！！」

地味だが確実にシールドエネルギーが減っていく。

「ちょっとチャージ……そして！！」
「！？　一夏避けて！！」
「……スーパーミサイル」

俺はすぐに避けた。

すると爆発。アリーナには今まで見たことが無いくらいのクレーターが出来ていた。

あれがＩＳの武装か！？　どうみたって戦争の兵器だろ！！

『織斑くん！　鳳さん！　今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！』

割り込んできたのは山田先生だった。心なしか、いつもより声に威厳がある。

「けっ、本物が出しゃばりやがって」

「――いや、先生たちが来るまで俺達で食い止めます」

今ここで誰かが相手をしなくては観客席にいる人間に被害が及ぶ可能性がある。

「いいな、鈴」

「だ、誰に言ってんのよ。そ、それより離しなさいってば！　動けないじゃん！」

『織斑くん！？　だ、ダメですよ！　生徒さんにもしものことがあったら――』

「――本番といこうやぁぁぁぁ！！」

――イズールｓｉｄｅ

二巻へ早める為のスッテプ&ガルクライフ社の表舞台進出のプレゼンテーションにしちゃあ悪役すぎるが……まぁいい。
シールドもいじってないから侵入した教師を試し撃ち出来る。

「アクセル的にダッシュ！！」
「一夏！！　アイツは多分空を飛べないわ！　それを利用して」
「分かった！」

チッ！　ばれたか……だが関係ない、なぜならコイツは……。

「誘導弾持ちだからだー！！　シーカーミサイル」

【シーカーミサイル】
最大五つまでターゲットして同時発射するミサイル。

俺は一夏に三発。鈴音に二発ロックした。

「ファイアッ！！」
「「！？」」

ミサイルを避ける二人。

「そこまでだ！！」

けっ、来たなモブ教師。（回復アイテム）

「いただきます♪」
「！？」

俺はモブ教師のＩＳをグラップリングボルテージで絡め捕り、エ

ネルギーを吸収する。
６００回復。素晴らしい！！
チュドンッ！！
「！？」
ダメージ！？　衝撃砲かよッ！！　油断したよ。なら今回のメインディッシュと行きましょうか。
「……ハイパーモード解放」
――エネルギータンク一個（１００）を変換中――
俺のＧＡ－ＰＥＤは青い光に包まれた。
多分俺の顔は青黒い筋と黒い眼球と青く光る瞳があるんだろうな。
その間にいろんなＩＳから攻撃を受けるがダメージは０。
「ハイパーミサイル発射」

【ハイパーミサイル】
ハイパーモード発動中、体内で生成したフェイゾンエネルギーを、チャージする事で、破壊力を飛躍的に強化したミサイルを発射する能力。
威力・弾速共に強力だが、追尾機能はない。
モブ教師は爆発した。安心しろ、非殺傷にしてある。

「一夏！！　ハイパーモード中は無敵よ！　回避に専念して」
「無敵だって！？」
さすが鈴音ちゃん。わかってらっしゃる。
――ピピピ♪
なんだ？　通信？
「こちら山田ちゃん。どうした？」
『こちらゼオルだ。演技ご苦労。偽ハイパーミサイルもばっちりのようだな』
「本物使ったら確実にあの先生は死んでますしね」
『二巻への扉が開いた。シャルルが君の部屋に同居せざるをえない状況もばっちりだ。』
「ご苦労さま。で、俺はどうする？」
『偽パワーボム（閃光爆弾）を使ってその場を脱出してくれ』
「いいとこだったんだが……了解」
キュイィィィィン……。
「！！？　一夏！！　急いで離れて！！　早くしないと死んじゃう！！」
「！？」
俺は足の裏の疑似モーフボールから偽パワーボムを射出する。
「また会おう！！」
「一夏ッ！！　早くして！！」

「お、おう！！」

カッ！！

アリーナ全体が光に包まれた――。

「さて脱出しますか……とうっ！！」

俺が観客席の上をジャンプで飛んでいる辺りで……。

「あ……あれ？　気分が……」

墜落した。

――保健室にて。

「……知らない天井って……このことか…」

俺はどうやら意識を失ったらしい。

「イズール！？　起きたか！？」

「一夏……か？」

「俺はいったいどうしてここに？」

「お前はアリーナで逃げ遅れて気絶してたみたいだぞ？」

「そうか……」

どうやら俺が『ドッペルゲンガー』ということには気づいていな

いらしい。

「イズール……」

「鈴音か……」

鈴音は暗そうな顔をしている。

「あのドッペルゲンガー、ハイパーモード使ってた。武装はどれも偽者だったみたいだけど」

「……そうか」

「アイツは知り合いなの？」

「会ったことはない」

同一人物だから『会う』ことは絶対に無い。

「イズール」

「千冬先生……」

千冬先生がこちらを見ている。

「鈴音から見せてもらったぞ、あのＵＳＢメモリ。お前の体内にはあるんだな……フェイゾン細胞が」

「……はい」

「なぜ黙っていた」

「俺はここでやるべき事があるからです」

「ガルクライフ社か？」

「いえ、個人の戦いです」

「そうか……あのドッペルゲンガーが捨てていったＩＳは回収した。あれは私が厳重に保管……いや、やはり破壊することにした」

「……まかせます」

「……そうか」

ついにオリ主が主人公機を失ったか……。まぁ、イタズラの代償だな。

「フェイゾンについての情報は漏れていないから安心しろ。ガルクライフ社は今回のことについて、『ＩＳが盗まれた』と回答した」

ゼオルさんがその回答以外にもなにか裏をやった気がする。

バーンッ！

「一夏さん、具合はいかがですか？　わたくしが看護に来て――あら？」

一夏と鈴音が酢豚の件についての誤解は解けた時にセシリアが乗り込んできた。

「どうしてあなたが……？　一夏さんは一組の人間、二組の人にお見舞いされる筋合いはくってよ」

「セシリアさん、ちょっと耳貸して？」

「？」

俺はセシリアを呼んで耳打ちする。

『お前も知ってるとは思うが、あの娘も一夏の事を愛しているんだよ。あと、俺も病人なんだから看護してくれねぇか？』

『やっぱりそうなんですのね！？　それより今、『あの娘も』言いましたよね？』
『お前と箒の事だ。はぁ、俺は好意持ってくれたら真っ先にＯＫしちゃうのに……』
『！！？　知ってましたの！？』
『あれで気付かない方がおかしい。あと、看護してくれ』
『一夏さんが良いですわ』
『しゃあないわ』

俺は『例のゲーム』の在り処と、説明書を渡す。

『これで手を打たないか？』
『これはなん――ッ！？　……これで手を打ちましょう』

さて、俺の作ったゲームがどれだけ中毒かどうか……楽しみだ♪

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

学園の地下五十メートル。そこにはレベル４権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。
回収されたＧＡ－ＰＥＤはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。それから二時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ている。

「……結局、ガルクライフ社については分からなかったか……」

室内は薄暗く、ディスプレイの光で照らされた千冬の顔は、ひどく冷たいものだった。

ディスプレイに割り込みでウィンドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型端末を持った真耶が映っていた。

「どうぞ」

許可をもらってドアが開くと、真耶はいつもより幾分きびきびとした動きで入室した。

「あのＧＡ－ＰＥＤの解析結果が出ましたよ」

「ああ、どうだった？」

「グラップリングボルテージという兵器以外は、偽者だったり、威力が低く調整されていました」

すでに鈴音が渡したＵＳＢメモリによって情報を得ていた二人は難しい顔をした。

「やはりコアは存在しないのか？」

「はい、やっぱりフェイゾン細胞や人間の脳をコアの代わりとして運用するＩＳだったようです……」

その事実はイズールも知らない――。

――イズールｓｉｄｅ

「ゼオルさん、俺が倒れた原因は？」
『君のハイパーモードが強くなってＧＡ－ＰＥＤが拒絶反応を起こしたんだろう』
「ハイパーモードが強くなった？」
『君はだんだん【ダークサムス】と同じような状態になり始めているってことだ』
「ダークサムス……フェイゾンエネルギー生命体か……」
『ああ、だからそれに対応した新しいＧＡ－ＰＥＤを設定し直さないと……あ、そういえばその状態くらいの今の君なら生身と変身でＩＳ倒せるぞ？』
「それ、本当かよ……」

マジかぁ……主人公機いらないってどんな体だよ！！
なんだかこのノリも久しぶりな気がする。

「……あのー、イズールくん、いますかー？」

山田先生だ。というか俺の返事聞いてからドア開けてくださいよ。

「せめて返事待ってくださいよ先生……。ハグしますよ？」

俺の言葉に少し硬直、そして慌てる山田先生。

「ええ！？　駄目ですよ、先生と生徒がそんな――」

俺はなんだか人肌の欲望を抑える事を止めた。これもフェイゾン汚染のせいだ。これは『ゴルゴム仕業だ！』くらいの理由だ。そうに違いない。

「――あ、あの……」

「山田先生……抱き枕にちょうどいいかも……」
「ええっ！！　あ、あの……からかわないでください！！」
まてよ……大きさ的には鈴音の方がいいかも……でもアイツは一夏ラバーズだし、一夏が気付いて結ばれるほうがいいな。
ちょっと……気に入ってたかも、鈴音の事。

「――イズールくん？　暗い顔してどうしましたか？」
「いや、恋の悩みでしょうかね……」
「えぇ！？　やっぱり――」
「――山田先生はまだマスコット止まりです」
「ハグしながら言う台詞ですか……」

俺は山田先生をハグし続けているが……抵抗が無いな……まさか！？
俺は試にそのまま山田先生の頭を撫でてみた。

「……／／／」
「……」

まさかナデポの設定が俺の体に組み込まれていたとは……。ついに山田先生が黙ってしまった。山田先生の目が潤んでいる……。マズイ！！　このままではＲ－１８板に飛ばされる！！　というか山田先生が『好きにしていいですよ』みたいなサインを出している。

「えっと……その……ＧＡ－ＰＥＤはどうでした？」

空気を一気に緊張に持っていく魔法の言葉『ガルクライフ社、またはＧＡ－ＰＥＤ』。
予想通りに山田先生は真剣な表情になる。

「あ、はい。実は――」
「あっ、椅子貸しますよ」
俺は部屋に置いてある特殊パーティグッズ【玉座】に座らせた。

【玉座】
ガルクライフ社の娯楽開発部が作ったパーティグッズ。
座るとなぜか態度と欲望とそれを発動する勇気が無駄に湧いてくる謎商品。
（羞恥心は減るので注意してください）
王様ゲームにどうぞ。

「……なんというか、命令したくなりますね」
「あのう、話の続きをお願いします」
「そうですねぇ……結局わかりませんでした♪」

山田先生の様子がおかしい。やっぱりガルクライフ社の商品に座らせたのが間違いか？

「イズールさん、こっちにきてください」
「……はい」
「今日訪ねたのは、部屋割りを決める為です。さっきまで篠ノ之さんと一夏さんが同居してたんですが、一夏くんがこの部屋へ行くことになりましたー、はい拍手～♪」

そういや気にしてなかったけど、この部屋にはベッドが三つあったな……俺と一夏と……シャルル――いや、シャルロットの分か？

流石ゼオルさん、手回しが早い。
それにしても先生、その椅子の効力を身を持って教えてくれてありがとうございます。

「イズールさん……／／／」
「……なん…ですか？」

急に顔の赤くなる山田先生。嫌な予感がする。

「ディープキスしてわたしを大人に――」
「いい加減にしなさい！！」

駄目だ、あのパーティグッズは危険だ……処分しよう。
俺は床にあった新聞紙をハリセンにして山田先生を【玉座】からドロップアウトさせた。

「……ッ！！？　わたしったらなんて破廉恥な――あわわわわ！！」
「落ち着いてください、山田先生！！」

俺は山田先生の肩をガクガク揺らす。

「はぁ、はぁ……」
「……落ち着きました？」
「はい……／／／」
「えっと……この後どうします？」
「は、はい……わたしは戻ります。えっと……その……」
「？」
「また……ハグしてくださいね……」
「は、はい……」

そう言って山田先生は部屋を出た。俺が暴走したと思ったのにいつの間にか山田先生が暴走するとは……ガルクライフ社製品、恐ろしい子！

「今日はもう寝ようかな。あ、鏡のワープゲートをどうにかしなきゃ……。ゼオルさん、どうします？」

『ああ、片づけていいよ。しばらく君が本社に来る理由は無いし。定期報告もワンパターンで飽きてたからな』

俺の報告飽きてたのかよ。まぁ、とにかく片づけて寝るか。

『あ、第二巻を渡しておこう。これが無いとその世界の時間が止まるからな』

「そんな真実が……」

それから、一夏が引っ越しを済ませたのは、この会話から数時間後だった。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――ガルクライフ社ｓｉｄｅ

ここはガルクライフ社のとある部屋。ここでは日夜空想世界に関する資料や技術の研究、実験が行われている。そんな部屋で、本来登場する予定だった無人ＩＳ【ゴーレム】がバラバラになって保管

されていた。

「ンムハハハハハ！！　手に入ったぞ！　コアのサンプルが！！」

「ちょっとテンションが高くはありませんか？」

ゼオルは高らかに笑い、隣の白衣の女性は冷静に対処する。

「そう言うなよ開発主任。子供は新しいおもちゃを手に入れたら飽きるまで狂喜乱舞するものさ」

「あなたは子供ではないでしょう」

「冷たいな……まぁ、いい。早速このコアの“設定”を抽出、応用の準備だ。新しいおもちゃの誕生だ。ハッピーバースデー！！」

「作るのは私ですけどね」

白衣の女性はまたも冷静に対処する。

「そういや俺の友人の天才科学者……いや、おもちゃ職人はなんて？」

「たしか、『ボク達はゼオル君のように空想世界を旅行している場合じゃないから自分でやってくれ』だそうです」

「やっぱりこの世界に来る気はないのか……よし、作業に移るぞ」

「……はい」

ガルクライフ社は静かに動く。

――続く。

第六話　無人機には退場してもらいました。（後書き）

書いている内に私がセカン党になりつつあります。
今回で原作一巻編は終了。次回からシャルルやラウラの描写が出てきます。
感想をお待ちしております。

第七話　仮面の貴公子とドイツの邪気眼登場？（前書き）

タイトルとは違って、あの二人が出るのは最後の一瞬だけです。

第七話　仮面の貴公子とドイツの邪気眼登場？

それは、原作二巻で一夏が弾の家に遊びに行った日曜日の事。

「コンコン♪　鈴音、いる？」

俺は鈴音、俺は部屋をノックするが、返事が無い。
ちなみに俺がここに来た理由は、前に俺が渡した『メトロイドプライム』シリーズの攻略法を教える為である。

「ん？　入るぞ？」

そして俺が目撃したのは、涙をボロボロ流してルームメイトに泣きついている鈴音の姿だった。

「一夏が死んじゃったぁぁぁぁぁ！！　うわぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ちょっと、鈴音落ち着いて！！　一夏君は死んでないわよ！！」

なんだこれ？　俺は部屋のどこかに原因が……あっ！！
ベッドに置かれたゴーグル型のゲームディスプレイ。まさか……。

「おい！！　ルームメイトさん。鈴音はいつからあのゴーグル付けてた！？」

「えっと……昨日からかな？」

やっぱり……鈴音は『ＩＳ学園ゲーム化計画（仮）』を長時間プレイしたんだ！！
一夏が死んだってことは……鈴音が主人公の時のＢＡＤＥＮＤか

！！

「何で長時間プレイした！？　説明書には『中毒性が高いので、長時間のプレイは厳禁です』って最初のページに大きく赤文字で書いてあるはずだろ！？」

「それが……鈴音は説明書見ないで感覚で操作してたみたいだから……」

「ガッデム！！　おかげで完全な中毒じゃねぇか！！　治療するぞ！！」

俺は鈴音のルームメイトにサングラスを渡す。

「それを今すぐにつけな！！」

「は、はい！！」

そして俺もサングラスを装着し、ボールペン型の【ＭＩＢ精神瞬時安定フラッシュ】を取り出した。

【ＭＩＢ精神瞬時安定フラッシュ】

ガルクライフ社が記憶操作用に『ＭＩＢ』の装置を模して作った失敗品。

記憶は操作できないが、精神は一瞬で正常化する。

この光を一定時間で何回も浴びると無気力になるので注意が必要。

パシュンッ！！

光が部屋を包み込んだ。

「あっ……あれ？　イズール……？」
「正気に戻ったか？　もう現実とゲーム世界の区別が出来なくなってたぞ？」
「うぅ…くぅっ…あまりにもリアルで…ひっぐ…一夏が…あたしを庇って死んじゃうなんて……あぁぁあぁぁ！！」
まだ精神が不安定のようだ。鈴音は涙をボロボロとこぼしている。
これで禁断の『Ｒ－１８』モード解放したら本当に取り返しがつかなくなるところだった……。こいつは返品物だな。
「ちょっとイズール君！！　女の子を泣かせるなんて酷いよ！？」
ルームメイトに怒られてしまった。
「すいません。まさか説明書を読まなかったとは思わな――あっ！！」
「イズール……どうし……たの？」
両手で一生懸命に涙を拭う鈴音はちょっとかわいい。――そんな事言っている場合じゃない！！　このゲームは軽い実験程度でセシリアに在り処記した紙渡したんだった！！　もしも鈴音と同じ……いや、それ以上の事態になったら命に関わる！！
「鈴音！！　セシリア・オルコットが危ない！！　ちょっと救助を手伝ってくれ！！」
「なんですって！？　わかった、部屋の場所は？」
「走りながら問い合わせる！！　ルームメイトさん、絶対そのゴーグル型ゲーム機に触らないでよ！？」
「え？　あ、うん――て、ちょっと！？　女の子を泣かせ――」
「命の危険があるから説教は後で受ける！！　今は黙って待って

てくれ！！」
「！？　わかった。逃げないでよ？」
「あぁ、わかってる。鈴音、行くぞ！！」
「うん！！」
俺と鈴音は走り出した。

――廊下にて。

「こちらイズール。織斑先生聞こえますか！？」
『――どうした？　お前が『織斑先生』と呼ぶなんて珍しい――』
「セシリアの命がかかわっているので、セシリアの部屋を教えてくれませんか！？」
『！？　――どういう事だ！！』
「ガルクライフ社と俺が開発した中毒性の高いゲームを説明書読まずにやっている可能性があるんです！！　前に三十分だけ山田先生に試した時はそこまでいかなかったんですけど、鈴音の豹変で危険性がハッキリしました。詳しいことは山田先生に聞いてください！！」
「山田君が？　――隣の山田君が顔を青くしたということはそうとう酷いようだな……。わかった、今部屋の場所を表示する！！」
「ありがとうございます！！」
俺の携帯端末にセシリアの部屋が表示される。
ちっ、しかたない。俺が『ランダス』の能力を使ったほうがいいな。

「鈴音、今からすることはみんなには黙っていてほしい。緊急の裏技使うぞ！！」
「え！？　そんなものあるなら早く使ってよ！！　でも、何で黙る必要が――」
「時間が無い！！　俺の肩につかまれ！！」
「えっ？　わ、わかった！！」

鈴音は俺の肩につかまる。そして俺は少しジャンプし、ランダスの能力で空中の水分を一瞬で凍結させ、落ちる前にその上を滑っていく、後はこれを続ける。
周りから見れば、『氷のサーフボードで空中を滑っている』ように見える。

「――なっ！？　生身で空中サーフィン！？　しかも氷って……なんでよ！？」
「企業秘密だ。しっかりつかまれよ！」
「えっ！？　き、きゃぁぁぁぁ！！」

――セシリアの部屋。

俺はセシリアの部屋の前で着地する。
鈴音は唖然としている。そりゃそうだ、『インフィニット・ストラトス』がいきなり超能力バトルアクションになってしまうくらいだ。

「セシリア！！　――部屋が開いている……突入するぞ！！」
「……もうあたしは何が起きても驚かない気がするわ……」

鈴音よ、俺が人外だからしかたないさ……だが私は謝らない！
とにかく突入！！　そこで俺達が見たものとは……。

「……わたくしは……」

カチカチッ！！

「……みんなを……愛していますわ……」

カチッ、カチカチッ！！

「……一夏さん……ありがとう……」

グリグリッ！！

ゴーグル型ディスプレイから涙を流し、コントローラーを操作するセシリアの姿だった……。どうやら錯乱はしていないようだな。ルームメイトは何だかソワソワしている。

「あっ、イズール君！？　ちょうど良かった。セシリアがあのゴーグル付けた後、いきなり笑ったり、なんだかエロい声出したり、私に抱きついて来たり、泣いたりしてるの……お願い！！　セシリアを助けてあげて！！」

――前言撤回、トリップしてやがる。

「おいっ！！　しっかりしろ、セシリア！！　お前の冒険はここ

で終わりじゃないだろ！？」

俺がそう言うと、セシリアはゴーグルディスプレイを装着したままこちらを向いた。

「……イズールさん？　……それに鈴音さんも……わたくし……たしか一夏さんと結ばれて……抱かれて……／／／」

なんだって！！？　まさかとは思うけど……。

「ちょっと失礼……」

俺はゴーグルディスプレイをセシリアの顔から外した。セシリアの目は泣いていたせいか真っ赤だ。俺はゴーグルを装着し、デバッグモードを起動させる。

「デバッグモード機動……ええっと……プレイ環境と記録を表示」

――プレイモード：Ｒ－１８
――回収ＣＧ：７８％
――確認したエンディング：大団円ＥＮＤ（ＢＡＤＥＮＤは確認していません）
――中毒率：６５％
――依存率：４６％

こいつは驚いた……。地獄のＲ－１８モードをＢＡＤＥＮＤ見ずに一番レアな大団円ＥＮＤを確認するなんて……。結果的には重症ではないようだ。

「イズールさん。この物語は……誰が書きましたの？」

意識が正常に戻ったセシリアは俺にそう問いかけた。

「えっと……シナリオ書いたのは俺だけど……それが――」

ガシッ！！

セシリアに両手を掴まれた。

「素晴らしいですわッ！！　物語でここまで泣いたのも初めてですわ！！　今まであなたのこと地味だと思っていましたけど、こんな感動するお話を書けるなんて……おかげで良い思いさせていただきました。本当にありがとうございますわ！！」

俺の腕をブンブンと振るセシリア。いったい何がお前をそこまでした？

――廊下にて。

俺はゲーム機を回収して部屋に戻るとこだった。

セシリアのちょっとした中毒は先生達にまかせよう。

「ねぇ、結局セシリアの泣いてた原因は何なの？　あたしはもうそのゲームはトラウマだわ……」

隣を歩いている鈴音に尋ねられたので答える事にした。

「あいつは一番条件が特殊な大団円ＥＮＤを見たんだ。内容は、オリムラと恋仲になって、他のヒロインのみんなともある一定の関係（友情的な）を得て、人の愛情に恵まれるっていう『ちょっと子供っぽいけど良いエンディング』というやつだな」
「へぇー。あたしもそういうエンディング見たかったな……」
「お前はエンディングの前に説明書見ような。まぁ、俺にも責任はあるけどな」
「うぅ……」

今回の事件は後に『ゲームトリップ事件』という名前で噂が広がるようになるが、それはまた別のお話。ちなみにセシリアが結構無事だった理由の一つが、『説明書をちゃんと読んでいる』点だったらしい。

「ところでイズール？」
「なんだ？」
「さっきのあの氷のサーフィンは何？」
「……」

緊急で使ったから言い訳どうこうのレベルじゃないぞこれは。

「……」
「それにあんた……もしかしてドッペルゲンガー？」

なぜ分かる！？　俺の能力が人外だからか！？

「声に出てるよ……たしかにそれもあるけど、前に見たＵＳＢメモリに『フェイゾン細胞はイズールの体内にしか存在せず、似たような存在を増やすことは不可能』って書いてあったよ？　だからハイパーモードを使ったドッペルゲンガーはイズールだと思った訳よ」

そんな事が書いてあったのか！？　見る前に鈴音に取られたからな……。

ということは千冬先生も気付いているのか？

「ねぇねぇ、どんなのに変装出来るの？」

なんだか目がキラキラしてる。なんだか新しい発見をした子供のようだ。残念だけど『変装』じゃなくて『変身』なんだよね。

「えっと……人間サイズならなんでも……それより大きいとフェイゾンエネルギーを使う。何か変身しようか？」

「うーん……あたしの部屋でやってみて？」

「ルームメイトさんにはなんて説明する？」

「あたしがなんとかする♪」

――こうしてドッペルゲンガーの正体は鈴音にバレた。俺はもしかしてセカン党なのか？

――鈴音の部屋にて。

「あっ、お帰り。イズール君も約束守ったみたいね？　さぁ――」

「ちょっと待って」

「鈴音？　どうしたの？」

「ちょっとイズール説教するの止めてくれない？」

「え！？　だって鈴音を泣かした――」

「それよりもイズールが秘密を見せてくれるから……ね？」

「――しょうがないなぁ……泣いた本人がそこまでいうのなら見逃してあげる」
「ありがと♪　イズール、早速初めて」
俺はまるで動物園の珍獣のようだな……。あれ？　この台詞、一夏が一巻で似たようなことを言っていたような……まぁとにかく――。
「じゃあ……あｑｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：――！！！」
バシュゥゥゥゥゥゥン！！
俺は紫の光を放つ！
鈴音は興味津々で、鈴音のルームメイトは怯えている。
そして回転。（今回の変身シーンは、映画『Ｔｈｅ　Ｍａｓｋ』の変身シーンをご想像ください）
「えｄｒｆｔｇｙふじｋ――……まぁ、こんなもんでしょ。もちろん秘密だよ？　わかってる？」
俺は声も姿も服も全て『凰鈴音』に変身した。
あぁ、本物含めて驚いてるよ。
「あっ、あああ、あたし！？」
「鈴音が二人！？　ドッペルゲンガー！！　……あぅ」
バタンッ！！
「「……」」

なんということでしょう。名前も知らないモブキャラを気絶させてしまうこの能力こそ、チート転生者である匠の技術の集大成と言えるでしょう。

とりあえず命は無事なので、ベッドに運んだ。

「本当に……あたしだ……」

「触ってみる？」

そう言って俺は上半身の服を脱いだ。流石、下着や胸の大きさまで再現されてる。

「変装マスクとかじゃないの！？　ていうか何で脱いでるの！？」

「細胞レベルで変身してるからね。脱ぐ理由については『気持ちいいから』だ！！」

「あぁぁぁあ！！　下着も、肌の色も……ちょっと待って？　ということは変身すればあんたには他人の裸が簡単にわかるっていうの！？」

なんだ、そのこと。

「たしかに――」

「死ねッ！！」

ドベシッ！！

「痛いじゃんか！！」

今のは痛かったぞ……。このフリーザ様が死にかけたんだぞ！？

「乙女の裸を何無料で見ちゃってんのよ！！　一回死になさいッ

！！」

「待て、鈴音！　俺も今は『乙女』だ！！」

鈴音の攻撃を『鈴音の経験』で予測し、受け流す。

――数分後。

なぜか俺は鈴音の姿で一緒にシャワーを浴びていた。なぜこうなった？

「うるさいッ！！　もうあんたはあたしの生まれたままの姿を見られたようなもんだし！！　さぁ、あたしに裸を見られて恥ずかしい思いを――」

「脳も一部女になってるからあんまりドキドキしないぞ？」

「――ちくしょう！！」

ここまでの経緯はこうだ。

取っ組み合い→『マウンテンデュー』破裂→二人とも炭酸でベタベタ。以上。

「ねぇ、あたしの裸って魅力あるかな？」

鈴音はそう言って自分と変身した俺の体を舐めるよう見る。

「うーん……魅力はあるぞ。ただ、まだ成長途中な部分もあるけど」

「なっ！？　あたしが貧乳だって言うの！？」

「アホか？　高校一年ほどで箒やセシリアのレベルが異常なんだよ。第一なんだよあの体……。毎日女性ホルモンを垂れ流し出来る内蔵器官でも存在するのかと思うぞ？」

本当にあの胸や体形は異常だと思うぞ……。俺は男だからあれが常識なのかよく分かんないけど。

「そっか……あたしが普通なんだ……」

何だか安心したような声を出す鈴音。シャワーの音と重なってなんだか不思議な音に聞こえる。

ピピピッ♪

「あっ、連絡だ」

「えっ？　誰から」

俺は音声通信に切り替えて通信する。となりで鈴音が裸だからね。鈴音にも内容が聞こえるけどいいよね？

「はい、こちらイズール」

『あれ？　音声通信なんて……恋人とシャワーでも浴びてるの？』

ゼオルさんはエスパーか！？

「似たようなものですけど、鈴音にドッペルゲンガーってことがバレました」

『あらら、まぁ予想はついてたしね。今回の本題についてなんだけど……渡したいものがあるからこの座標まで来てくれ。鈴音君が一緒でも構わないよ』

端末に地図と座標が表示される。

『それじゃあね♪』

そう言ってゼオルさんは通信を切った。

「イズール、ゼオルさんってたしかあの時ハンバーグご馳走してくれた人だよね？」

「あぁ、それで合ってる。それよりも一緒に行くか？」

「うん。ねぇ……さっき『恋人とシャワー浴びてるの？』ってとこ否定しなかったね……／／／」

鈴音は顔を赤らめる。

「まぁ、秘密を共有する関係だから……そんな関係だろ？　あとお前は一夏狙いだと認識してるし」

「たしかにそうだけど……なんかドキドキして損した！！」

怒られてしまった。別に俺は怒られて発情するような新人類ではないぞ？

「なんだよ……怒ることないだろう。一夏の裸体に変身するぞ？」

「ちょっ！！　やめて！　それだけはやめて！！」

「わかればいいんだよ。……俺は結構好きだぞ……お前の事……」

「……え、それって……」

あー！！　こんなの俺の台詞じゃない！！　とっとと目的地へ行こう！

俺はシャワールームを出て、体を拭き、服を着て、そのまま元の

『イズール・ユ・ミヅル』の姿に戻る。（もちろん服も）

「廊下で待ってるから早く着替えろよ？」

「えっ、ちょっと早いよ！」

こうして俺と鈴音……いや、鈴との不思議な関係が始まった。

ルームメイトさんは放置です。

――鈴音ｓｉｄｅ

あたしはイズールと二人で外へ出た。

というかイズールに……告白された……かな……。

そもそもイズールとあたしの関係ってなんだろう……。

でもアイツは『俺は結構好きだぞ……お前の事……』って言った。

声は小さかったけど。

あたしの姿で言われるとなんだか変な感じ。

でもあたしは一夏が……ああ、考えが変になってきた……／／／

たぶん、今あたしの顔は真っ赤な気がする。

「――ついたぞ、ここが目的地だ」

そう言ったイズールとあたしの目の前には屋台があった……。何だかラーメンの匂いがする。

「「屋台？」」

あたしとイズールはとりあえず屋台の椅子に座った。そこには麺

を湯切りする……ゼオルさんがいた。

「やぁ、お二人さん。景気はどう？」

「「ゼオルさん！？」」

「そんなに驚かなくてもなぁｗｗ」

あたしとイズールが驚いていると、ゼオルさんは私たちにラーメンを出した。

「この店は基本無料だよ。日替わりでメニューが変わるから気を付けて。開店時間は夕方から夜にかけてというのも忘れないで」

ふぅん。あっ、でもこのラーメンはおいしそう……。あたしは遠慮なく食べ始めた。

チュゾゾゾッ！！　と二人でラーメンをすする。

「そういえばイズールよ、例の噂は聞いたか？」

「えっと……『学年別個人トーナメントで優勝した人は一夏と付き合える』ってやつか？」

「ブフォッ！！」

「鈴音、噴き出すなよ……」

あたしは思わず噴き出した。というか何それ！！　あたし聞いてない！！

「ちなみにイズールも対象だぞ？」

「ブフォッ！！」

「イズールも人の事言えないじゃない！！」

まったく訳が分からないことになってきた……。

「あっ、今回の話しておきたいことを話しておこうか」
「はい」
「……」

場の雰囲気がガラリと変わる。本当に何者なんだろう……ゼオルさんって……。

「前回、君がクラス対抗戦で大暴れしてくれたから世界中の企業や軍がガルクライフ社に目を付けた。だが我々は存在するように見えても実際は存在しない。だから唯一の手がかりであるイズール君を国際ＩＳ委員会が狙っていることになる。ちなみにフェイゾンに関しては公開はしていない。ただ、未知のエネルギーが使われているということだけばれている。一応言っておくけど、ＧＡ－ＰＥＤの仕組みが世界にばれた瞬間に世界中の軍や企業がガルクライフ社を『正義の為』と言いながら攻撃するだろう。ちなみにそうなった場合は……」
「「……場合は？」」
「人類史上初の『国家が解体され、世界が一つになる日』が拝めるぞ」
「「……」」

絶対にこの人を怒らせちゃいけないとあたしは思った。

「あっ、そうだ。これとこれを渡しておこう」

ゼオルさんはイズールに一冊の本とビー玉のようなものを渡した。

「この本はウチの会社の商品カタログ。そしてそっちのビー玉はイズールの新しいＧＡ－ＰＥＤ。今回はイズール君の変身能力にも

対応しているし、空も飛べるし、今までのようにハイパーモード使って気絶することもない。そしてそのＩＳは君の肉体と同化するから待機状態なんて存在しないよ」

「「何だって！？」」

「ダークサムスの能力は不具合が確認されたから一部削除したよ。まぁ、消したのはダークサムスの周囲のフェイゾンを吸収して発動する物だから搭載しても無駄なんだよね。フェイゾンはこの世に転がってないから」

「そうですか……」

「そんな君にうれしいお知らせ。現実インターネットが君のパソコンに繋がったよ」

「そうですか！！？」

なんだかうれしそうね。というか『ダークサムス』って何？

そんな事を考えていると、例のＩＳはイズールの体に吸い込まれていった。

イズールの体が青く光り、何かの声が聞こえる。

――初期化開始。

――ＤＮＡ情報確認。

――ＩＳ適正を無視し、適合します。

――能力の一部調整。フェイゾンエネルギーとの適合率調整。

――調整完了。使用可能まで時間かかります。お待ちください。

【ＧＡ－ＰＥＤを入手しました。詳細はステータスで確認できます】

どうやら終わったみたいね。というかＩＳって人間と融合するもんなの？

「さて、俺の用事は以上だ。がんばれ、若者よ！　定期報告や俺に会いたいときはこの屋台に来るといい」

ゼオルさんはニッコリと笑う。束博士並に目をつけられている人がここにいていいのかな？

「ゼオルさん、ご馳走様。また来ますよ」

「えっと……ご馳走様でした！」

「はい、またおいで」

あたしとイズール？に戻ることにした。

また来ようかな、ラーメン食べに。

――鈴音ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――次の日。

――クラスにて。

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」

「え？　そう？　ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラスの女子がわいわいとにぎやかに談笑していた。

みんな手にカタログを持って、あれやこれやと意見を交換している。俺はここで気付くべきだった。『昨日もらったカタログがフラグ』ということに。

「そういえば織斑君とイズール君のＩＳスーツってどこの奴なの？　見たことのない型だけど」

「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリット社のストレートアームモデルって聞いてる」

俺は一夏に続くように答えてしまった。

「俺はガルクライフ社の特注品――そういや昨日、ガルクライフ社の商品カタログもらったな」

言わなきゃよかったよ。

「えっ、あのＩＳ学園に喧嘩売った会社のカタログ！？　見せて！！」

一人の女子が俺の手元からカタログを奪い、周囲の女子と読み始めた。

「イズール、お前も大変だな」

「うん、というかあのカタログにちゃんとした商品があるのか謎だが」

今まで【玉座】やら【ＭＩＢ精神安定フラッシュ】やら中毒ゲームの開発を行った変態集団の集まりだ。物凄く不安だ。

「えっと、どうしましたか？」

と、俺に話しかけてきたのは山田真耶先生。

「いや、イズールがガルクライフ社の商品カタログを持ってきたんですが――」

あ、馬鹿。一夏よ、だからお前は『ヒトナツ』なのだ！！　今ピリピリしてる学園職員にガルクライフ社の話題出したら――。

「えっ！？　今すぐに見せてください！！」

山田先生が真剣になる。一夏のバカァ！！

俺の手元から女子の手元に移動したことを聞いた山田先生は女子の塊に近づく、その瞬間！！

「――！？　山田先生！！　これ、ちょっと見てください！！」

クラスの女子の一人が慌てたような声をだした。

山田先生はカタルグを受け取り、そのページを確認する。そして俺と一夏はそれを覗きこむ。

そのページにはこう書いてあった。

「「「量産型疑似ＩＳ……？」」」

【量産型疑似ＩＳ】

通称：イナゴ兵。

この商品はＩＳ適正や性別を問わずに装着・運用できる、コアを使わない『ＩＳのようなもの』である。

この商品の最大の特徴は、誰でも動かせる事と、量産機でありながら本物のＩＳを蹂躙できる可能性を秘めている部分である。
この商品は量産機であるため、基本性能は低く、空も飛べませんがさまざまの企業のパーツでカスタマイズして問題を解決し、パーツによっては専用機をも超える事が可能になります。
基本的な特徴は壁に張り付いたり、強力なジャンプを使える足が目立ちます。
この商品が出回ればＩＳの存在を否定できる強力な存在になるでしょう。
現在、一般テストプレイヤーになってくださった方にはイナゴ兵一体とガルクライフ社製のカスタマイズパーツを無料で提供します。
（※現在までに３００体ほどが既に生産、整備されています。）

「なっ、イズール……なんだよこれ！！」
「俺も初めて聞いたぞ！！　なんだよ『イナゴ兵』って！　しかも３００体！？　もうすぐこの世のＩＳの数に届くじゃねぇか！」
「……え？　……」

山田先生の顔が青くなってきた。

「「「……？」」」

クラスの女子の大半はまだ事の重大性に気付いていないようだな……。セシリアと箒は気付いて目を見開いている。
しかたないので俺が丁寧に教えてやることにした。

「簡単に言えば今のガルクライフ社は『ＩＳをいつでも集団リンチ出来る状態』だってことだ……」
「「「！？」」」

そう、この資料＝あなたの国はいつでも潰せますよ♪　と言っているようなものだ。一体何を企んでいるんだゼオルさん……。
クラス全員の顔が青くなる。

「――諸君、おはよう。どうした？　山田君も覇気が無いぞ？」
「お、おはようございます！」

クラスのみんなが何とか口を開いた。

「織斑先生、た、たた、大変な事になりました」
「ん？」

山田先生が千冬先生にカタログを見せた。
数秒の確認、そして沈黙――そして……。

「ふざけるな！！　何だこの悪質な冗談は！！　もしもこんな物が実在するなら事は重大だ！！」

そりゃ、怒るわ……。一企業が持つ戦力としては遥かに大きすぎる。もしも全てカスタマイズされてＩＳを超えたら……。確実にこの世の終わりだ。『国家が解体され、世界が一つになる日』というゼオルさんの言葉は冗談じゃなかったのな。

「――電話番号と住所が書いてあるな……まぁ、この話は後にしよう。では山田先生、ホームルームを」
「は、はいっ」

すげぇな……なんとか原作通りの台詞に繋がった。これが『世界の修正力』ってやつか？

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」
「え……」
「「「えええええっ！？」」」

『二名』ってことは原作重視か……アニメ版だとシャルル一人が先に来たはず。

「失礼します」
「……」

ついに現れた仮面の貴公子（仮）とドイツの邪気眼（仮）。こいつらの登場で物語はやっと加速出来そうだ。
というか空想世界侵略兵器とかガルクライフ社についてはどうしよう……。

――続く。

第七話　仮面の貴公子とドイツの邪気眼登場？（後書き）

鈴とのフラグが成立し始めました。
こんな筋書で大丈夫だろうか？

第八話　シャルル君、いい声してるのね。（前書き）

土曜日はちょっと模擬試験でいないので、今日投稿します。
あと、鈴ファンのみなさんごめんなさい。
缶や石やグレネード投げられる覚悟で書きました。

第八話　シャルル君、いい声してるのね。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。人気キャラ来た！　これで勝つる！　最初の三人娘の存在感は大丈夫か？　セシリアと箒の描写が極端に少ないような気がするが……。

俺は箒とセシリアを見る。箒はいつも通りに真面目な顔で、セシリアはなんだか驚いたような顔をしている。なんで？　いや、なんか忘れているような……。

？ゼオルのことば。　イズールの代わりに俺が説明しよう。前回の『ゲームトリップ事件』を体験したセシリアは、ゲームの登場人物の『シャルロット』と『ラウラ』というキャラクターと似ていることを確認している為、驚いているのである。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

「きゃ……」

「はい？」

「きゃぁぁぁぁぁぁ――っ！」

まさか、天使ちゃんの必殺技『ハウリング』か！？

「男子！　三人目の男子！」
「しかもウチのクラス！」
「美形！　守ってあげたくなる系の！」
「地球に生まれてきて良かった～～～～！」

おい、元気すぎだろ！！　というかさっきのカタログ見てお前ら顔を青くしてただろ！！　あ、よく見たら何人か目のハイライトが消えてる……。現実逃避？

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

うっとおしそうに叫ぶ千冬先生。
問題だらけで頭痛いでしょうね。すいません、ウチの上司が……。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

そんな山田先生の言葉に何も反応しないラウラさん。たしかこの後一夏にそげぶパンチするんだっけ？

「……挨拶をしろ、ラウラ」
「はい、教官」

千冬先生の言葉で喋りだすラウラ。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」
「了解しました」

ラウラは軍隊式のビシッとした姿勢であいさつをする。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「……」
少なっ！！
「あ、あの、以上……ですか？」
「以上だ」
そして一夏と目が合う。そして――。
「！　貴様が――」
ズガンッ！！
俺がグーで殴られた。
手荷物をまき散らしてとんで行く俺。なんで？　あぁ、そういえばガルクライフ社がドイツ軍に喧嘩を売ったんだっけか……？
『マウンテンデュー』が空中を飛び、本が飛び、『コアメダル』が舞う。――そして落下。
ドシャアッ！！
「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」
なんだ……一夏と間違えただけかよ……。
「ラウラ、そいつは一夏ではないぞ。イズールだ」
「え！？」
この世界のラウラってまさかドジッ娘？　というか頭ぶつけて痛

いんだが……。

「ｈｆじゃｇｙｇｆｇｈｇｒ――」

頭の衝撃が酷いせいか、なんだか呂律と視界が正常じゃないや。

あれ？　なんだか腕に温かい感触が……？

「グッ……ガハッ！！」

「イズール！！　今すぐ手を離せ！！」

千冬さんが何か言っているけど……あ、視界が戻ってきた……！？

「え？」

俺はいつのまにかラウラの肩を黒板に押し付けていた。

なんでラウラは抵抗しないんだ？

とりあえず手を離した。

「――ッ！！　貴様ァ！！」

「なッ！？」

ラウラが反撃しようとする。

「いい加減にしろ貴様ら！！」

千冬先生の言葉で停止する俺達。

「あー……ゴホンゴホン！　ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

その言葉を聞いた瞬間に一夏はシャルルを連れて更衣室へ歩き出したのでついていくことにした。

――箒side

あの時のイズールの動き……まったく見えなかった。あと、またあの時の青い光……あれはもしや身体能力を強化しているのか？

そういえばイズールが殴られたときに何か飛んできたな……。

イズールの私物……本？　題名は……『インフィニット・ストラトス』？　小説だな。

「……？」

私は少しページを開いてみた。

「なっ！！」

な、ななな、なんだこれは！！　なんで私のバスタオル姿の絵が描いてあるのだ！？　それに……挿絵にはセシリアの裸！？　いったいなんだというのだ！！

――箒side　end

――セシリアｓｉｄｅ

驚きましたわ……。まさかイズールさんのゲームのキャラクターそっくりな人たちが転入してくるなんて……。ですが、なぜシャルルさんは男性なのにあのゲームでは女性で描かれていたのでしょうか？　とにかく、これでイズールさんはエスパーの可能性が……。それにしても先ほどの『イナゴ兵』の話……、これがもし本当なら大変な事態ですわね。

「なっ！！」

なんだか箒さんが騒いでますわね。そういえばイズールさんが何か落としたような……。

――チャリリンッ！！

「？」

わたくしの前に転がってきた物体がありました。これは……お金？　いえ、絵柄がありますからメダルですわね。綺麗な青いメダルですわね……。イズールさんに後で渡しましょう。

――セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――廊下にて。

「ああっ！　転校生発見！」
「しかも織斑君とイズール君と一緒！」
ちっ、見つかったか！！
「一夏とシャルル！！　お前たちは俺にかまわず先に行け！！（死亡フラグ）」
「えっ！！　イズール……。わかった！！　お前の意思は無駄にしない！」
「えっと……ありがとう、イズール君」
俺は一夏とシャルルを逃がすと、女子に向かってファイティングポーズを決める。
「いたっ！　こっちよ！」
「者ども出会え出会えい！」
女子軍団が廊下に集まるのと同時に、俺は左手を突き出す。
『コブラ、サイコガンは心で撃つのよ？』
――わかってるさ、レディ。
そして俺は袖から煙幕ボールを発射する。
ボムンッ！！
廊下が煙に包まれた。
火災報知器はご都合主義で動きません。

「さて、俺も更衣室に――」
「ふふふ……それで終わりか、イズール」
なんだ、このプレッシャーは！！
煙幕の中から足音を立てて現れたのは……。
「クリスタルボ――いや、箒か！！」
「何を言いかけたのだ？　まぁいい。お前にはコレについて聞きたいことがある」
そして箒が見せたのは――って！！　『インフィニット・ストラトス』の第一巻じゃねぇか！
そうか、マウンテンデューと一緒に飛んで行ってたのか！！　マウンテンデューの回収を優先してたから気付かなかったぜ。
「貴様に答える必要はない！！」
「ならば……無理矢理聞くまでだ！！」
真剣を構える箒……ってモノホン使うなよ！！
「問答無用！」
ええい、仕方がない！　秘密兵器だ！
「あっ、あんなところで一夏が箒の胸を凝視してる！！」
「――な、なんだと！？」
俺の指の方向を見つめる箒。そして俺は逃走！　ンムハハハハッ

！！　また会おう！

「いないではないか……あっ、逃げたな！？」

――授業にて。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

二組と合同なので人数はいつもの倍。出てくる返事も妙に気合が入っている。

「くうっ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

なんだかセシリアと鈴が言ってる……。千冬先生に叩かれたのか。まぁ、俺もだけど。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――凰！　オルコット！」

渋々と歩いて行く二人。あれ？　なんか千冬先生に何か言われているぞ。たしかこの台詞は『お前ら少しはやる気だせ。――アイツにいいところを見せられるぞ？』だったはず。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まぁ、実力の違いを見せるいい機会よね！　専用機持ちの！」
お前ら……その努力がどれだけ無駄か……。
「それで、相手はどちらに？　わたくしは鈴さんとの勝負で構いませんが」
「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」
「慌てるなバカども。対戦相手は――」
キィィィン……。
あぁ、山田先生が一夏の所へ墜落するんだっけ？　そして胸を揉むとは……まったく、ラッキースケベめ。
「あああぁーっ！　ど、どいてください～っ！」
さて、俺は見学でもしますかね――。
ドカーン！
グシャッ！！
ビチャッ！！

一夏ｓｉｄｅ――

山田先生が落ちてきた……イズールの上に。
山田先生や他の女子は顔が青くなって倒れている人も出ている。
血まみれの山田先生の目からハイライトが消え、放心状態になっ

ている。
下敷きになったイズールは血のバラを地面に描き、白目をむいている。
「イズール！！　しっかりしてっ！　イズールゥ！！」
鈴がイズールの体を揺するが反応は無し。
「うっ……うわぁぁぁあぁぁん！！」
鈴は泣き出した。
「そんな……イズール……？」
「そんなはずは……あのイズールさんが……！？」
「イズール……お前……！」
「おいっ、誰か医療班を呼べ！！　山田君もしっかりしろ！！」
「そんな……」
俺、セシリア、箒、千冬姉、シャルルの順でパニックになっていく。
「……あっ、……あぁ……」
「「「「！？」」」」
「イズール！？」
イズールの意識が戻った！？
「……国語の……ゴリ松」
ガクッ！！

「「「「「イズールゥゥゥゥ！！！」」」」」
「イズールが死んじゃったぁぁぁぁぁ！！」
再び泣き出す鈴。あれ？　なんだか雰囲気がおかしくなったような……。
「あぁ……鈴……最後に……いいか？」
また意識を取り戻した。
「なんでもやってあげるから死なないで！！」
「あぁ……俺……やっぱりお前の事好きだわ……」
「最後の言葉みたいに……言わないでよ！」
「なぁ……」
「うん……」
「キスしてくれねぇか……」
「……うん」
俺達の目の前でキスをする鈴とイズール。
本当はドキドキする場面なんだけど、今そんな状況じゃない。
「あぁ……ありがとうな……鈴……好きだよ……」
「キスする前に言いなさいよ……バカァ……」
イズールは再び目を閉じ、鈴は涙を流す。
ピピピピッ！！
――その時、場の雰囲気をぶち壊す音が鳴った。

一夏ｓｉｄｅ　ｅｎｄ――

――鈴ｓｉｄｅ

どうしてあんたは死んじゃうのよ……。しかもあたしはイズールに好かれていたのに気付かないふりなんて……これじゃあ一夏の事……言えないじゃない……。

ピピピピッ！！

――何の音？

『全調整が完了しました。搭乗者の蘇生処置の為に機密機能を緊急で使用します』

何かのアナウンスが聞こえた瞬間にイズールの体にＩＳが装着される。これって……まさか！！

『ハイパーモード機動。続けて、コラプションモードによるダークサムス化を開始します』

イズールの体が青い光に包まれた。ちょっと……これって！　ハイパーモード！？

いきなり青い光が強くなったかと思うとイズールのＩＳに黒い装甲が装着される。

お願い、なんでもいいから生き返って！！

『蘇生完了。ＩＳ展開を解除します』

ＩＳの解除されたイズールはゆっくりと目を開く。
イズールの体はまだうっすらと青い光が包んでいる。

「俺が……キスで目を覚ますお姫様になっちゃったな」
「……バカァ……心配したんだから……」

ガバッ！！

そしてあたしとイズールは抱き合いました。
というか……あんた……人間やめてない？
でも、本当に良かった……。

――鈴ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

「織斑君、一緒に頑張ろう！」
「デュノア君の操縦技術を見たいなぁ」
「ね、ね、私もいいよね？　同じグループにいれて！」
「イズール君、リア充おめでとう！　というかイズール君って人間？」

本来の山田先生イベントは俺のデッド＆リバースによってスルーされてしまった。まぁ、恋人出来たし言うことないよね？（大有りです。ｂｙゼオル）

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつグループに入れ！　順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳ背負ってグラウンド百周させるからな！」

女子軍団はその言葉で移動し、すぐにグループが完成した。ちなみに、俺も専用気持ちという名目になった。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

まぁ、仕方ないですよ。それにしてもこのＧＡ－ＰＥＤ、前より動きやすくなってるな。

「……やったぁ。織斑君と同じ班っ。苗字のおかげねっ……」

「……うー、セシリアかぁ……。さっきボロ負けしてたし。あれ？　誰にボロ負けしたんだっけ？」

「……凰さん、よろしくね。あとでイズール君との出会いから話聞かせてよっ……」

「……デュノア君！　わからないことがあったら何でも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！……」

「……」

「……イズール君、鈴の事、大事にしないと許さないよ！……」

ラウラのグループだけ酷いな……会話的に。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が三機で

す。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよ！」

山田先生がなぜかしっかりしているように見える。さっきまであんなに自殺しそうになっていたのに。

「先生、知らない訓練機がありますよ？」

――え？

「え？　知らない……ですか？」

山田先生と千冬先生が訓練機を確認する。するとそこには見たことのない機体が存在していた。

「山田君、この機体はなんだ？」

「織斑先生、わたしもこんな機体は見たことありません。というかいつの間にここに運び込まれていたのでしょうか？」

俺も確認する。明らかに原作に存在しない機体……嫌な予感がする。

「せんせー、ここにイズール君のＩＳに付いているのと同じ会社のロゴがついてますー」

「「！！？」」

やっぱりガルクライフ社製か……ゼオルさんはもう『テンプレの神様』の立ち位置には存在する気はないみたい。

「イズール、もしや……これが『イナゴ兵』か？　カタログでためしに注文したが……」

「もしかしなくても『イナゴ兵』でしょうね」
千冬さんはさっそく正体に気付いたようだ。

量産型疑似ＩＳ
【イナゴ兵】

あ、テロップが出た。

「ええっと……山田先生。ちょっと装着してみてくださいますか？」
「えっ、わたし……ですか？」

山田先生はイナゴ兵を装着する。

「こう……でしょうか」
「それでいいと思います」

すると山田先生を包み込むようにヘルメットやバイザー、装甲が装着される。
人型であり、イメージカラーは緑だ。

「結構動きやすいですね……あ、この機体は飛べないんですね……」

そういえばこの機体はカスタム用の素体みたいなものなんだっけ？
そう考えていると何だか一夏のグループから声がした。
お姫様抱っこのイベントか？　山田先生が指導する。

「イズール」

千冬先生が話しかけてきた。

「はい？」

「これではっきりした。あのイナゴ兵の情報はハッタリではないということが」

「ということはやっぱり……」

「お前の上司はとんでもないということだ。つまり、国際ＩＳ委員会から確実に狙われることになる」

「そうですか……」

もう、ダメだあの組織……危ない……。

絶対にこの世界と戦争して滅ぼす気満々だよ。

――数分後。

「はい、動きは……そう、そんな感じ」

「おぉ……打鉄よりも動かしやすいよ、これ」

現在、クラスの女子がイナゴ兵を装着中。

どうやらイナゴ兵は本当に誰でも使えるように作られているらしい。

もしかして第三世代の量産型超えてる？　まぁ、飛べないけど。

（ジャンプはすごいです）

「ねぇ、イズール君」
「どうした？」
「いつから鈴さんの事好きだったの？」
同じグループの人がイナゴ兵を装備しながら聞いてきた。
「うーん、『いつのまにか』だったね。最初は一夏との恋を応援するつもりだったんだけどね」
「へぇー、そうなんだ」
「まぁ、詳しいことは鈴に聞いてよ。――あ、そこでジャンプしてみて？」
「えっと……」

ダンッ！！
大空をジャンプするイナゴ兵。
ズドンッ！！　と着地。

「……なんだかすごいな……安いみたいだし買おうかな？　これって専用機超えるんでしょ？」
「カスタムパーツは別売りらしいよ？」
「そっか、残念♪」
本当にイナゴ兵はカスタム次第で専用機超えそうな気がする。それは世界レベルでヤバイんだけどな。
「いーくん、今のジャンプ何！？　その機体貸してよ」
「イッちゃん、その機体の操作方法を教えてよ」
なんだか何人か集まってきたぞ！？

「馬鹿者どもが、自分の班に戻れ！」

スパァン！！

千冬先生の出席簿アタックが決まる。すげぇスピードだなおい。

こうして俺の講習は終わった。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方をみるように。では解散！」

俺達は機体を片づけた。

「シャルル、イズール、着替えに行こうぜ。俺達はまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしょ」

「俺は別にかまわないよ」

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしてからいくから、先に行って着替えてよ。時間がかかるかもしれないから、待ってくれなくてもいいからね」

「い、いいからいいから！　僕が平気じゃないから！　ね？　二人とも先に教室に戻っててね？」

「お、おう。わかった」

「おう、シャルルも早めに済ませなよ」

「うん」

――更衣室にて。

俺達二人は着替えていた。

「なぁ、イズール」

「鈴のことか？」

「ああ、まさかお前が鈴のこと好きで、告白するとはな……」

まったく、この朴念仁は……。少し前の鈴がかわいそうだよ。

「何いってんだよ一夏。少し前まで鈴は一夏の事が好きで少し相談のってたんだぞ？」

「そうなのか！？」

「ああ、その相談に付き合ったりしてる内に好きになったが、まさか今回告白がＯＫされるなんて夢にも思わなかったさ」

「――お前が死にかけてたからじゃね？」

「多分実際に死んでた。フェイゾン細胞に救われたよ」

「フェイゾン細胞？」

「ああ……お前は知らなくていい」

とにかく告白がＯＫされた理由を早く聞きたいところだ。

「なあ、イズール」

「ん？」

「――鈴の事、幸せにしてやってくれ」

「……わかってる。お前も誰かを幸せに出来る男になれ」

「……ああ！」

俺と一夏は拳を突き合せた。

あれ？　今気付いたけど、告白とキスはしたけど返事は聞いてないんじゃない？

ちなみに今回の事件はＩＳ学園内の秘密ということにされた。
よかったね、山田先生。

――屋上にて。

「……どういうことだ」
「ん？」

箒、一夏の順に声を出す。

「天候がいいから屋上で食べるって話だったろ？」
「そうではなくてだな……！」

箒がこちらを向く。その方向には鈴の頭を撫でている俺と、セシリアとシャルルがいる。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばっかりで右も左もわからないだろうし」
「そ、それはそうだが……」

ぐぬぬ……と何かを言いたげにしながら持ち上げた拳を握りしめる箒。その手には包みにくるんだ手作りの弁当が握られていた。
そんな事は無視して、俺は鈴に聞いてみた。

「なあ鈴」
「ん？」
「告白とキスしたのはいいけど……ちゃんとした返事聞いてない」
「あぁ……／／／　あんな状況ならＯＫするに決まってるでしょ、バカァ……／／／」
「きっかけは？」
「前に『結構好き』って言われた時から少し意識しちゃって……／／／　後は告白されてクラっと……」
俺そんなにフラグ立てた記憶はまったくないんだが……。
というか長年の想いよりも一回の告白ってどんなんだよ。もしや……フラグ部分は番外編で公開されるのか！？
「よろしく、鈴」
「うん♪」
俺達二人をジト目で見つめる箒とセシリア。
「砂糖を吐きそうですわ……」
「私もだ……」
そんな時に鈴は何かを取り出した。
「はい一夏。アンタの分」
タッパーの中身は……酢豚だな？
「おお、酢豚だ！」
「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言ってたでしょ」

「――ちょっと待て！！　お前はイズールを選んだんじゃなかったのか！？」

箒は叫ぶ。まあ、それが普通の反応だな。

「あたしだって今日コクられてＯＫするなんて思ってなかったもん。作ったからには食べてもらわないと」

「あ、俺も貰っていい？」

「うん、いいよ」

『このままではイズールのリア充話となってしまうので、ここからはガルクライフ社のゼオルがお送りします』

「コホンコホン。一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何かの因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

来た来た来ましたよ。セシリア嬢の料理。こういう小説には必ずいる『ハズレ』の料理作るキャラクター。

「お、おう。あとでもらうよ」

「あ、俺は一つ貰っていいか？」

「イズールさんが？　ええ、構いませんわ」

イズール君、お前は勇者だな。原作予習した筈だろ。

「――うん、なるほど」

イズール君はメモをし始めたね。ああ、表情が歪んでいる。

「夕方、ここに料理を学びに行くといいぞ？」

そう言って渡したのは……って！　俺の屋台じゃねぇか！？　俺に丸投げしやがったよ……まぁ、鍛えてやりますか。

「これは？」

「俺の知る限りで一番料理作るのがうまい人がその場所にいるから尋ねてみろ」

イズール君、うれしい事言ってくれるじゃないか。

「ええと、僕が同席してもよかったのかな？」

「いいに決まっているだろう、そんなんだったら俺と鈴は本来ならどこかでイチャイチャして周りの人間の顔を赤くさせているぞ？」

「イズール……／／／」

……いつからこの物語はイズールと鈴のイチャイチャ物になったんだ？

うーん、イズールの設定にバグがあったか？

「ところでイズール」

「ん？」

「前にあたしがやった中毒ゲームについてだけど……なんでシャルルも攻略対象だったの？」

おう、その話題がでましたか。セシリアも反応したようだぞ？

「そうですわ。わたくしも気付きましたけど、イズールさんはエスパーですの？　どうしてあのゲームの登場人物のそっくりさんが転入してくるなんて……」

さぁ、どう切り抜ける？

「なぜって……それはガルクライフ社と共同開発だからだよ」

「「あぁ、なるほど――じゃない！！　（ですわ）」」

流石に今のには無理があると思うぞ？

「鈴、セシリア。『あのゲーム』とはなんだ？」

箒ちゃんが聞いてきたね。

「一時期あたしとセシリアがハマった悪魔のゲームよ。中毒が高くてあたしとセシリアはトリップしたことがあるのよ。というか前にイズールのパソコンの資料に載ってたのを見たでしょ？」

「なっ！？　あれが実在していたのか！！」

「なんだっけ……」

一夏君だけが気付いていないようだ。まったく……。

「ちなみに……なぜシャルル君が俺の作ったゲームのキャラにそっくりなのに性別が違うのかはそのうち分かる」

「あんた……まだなんか隠してるわね、バラすわよ？」

「あら？　イズールさんは何かやましい事を隠してらっしゃいますの？」

「鈴、バラしたら……あ、俺……鈴の弱み持ってないだと！？」

まぁ、君はちょっと甘いんだよ。というかお前は特に鈴の弱み握ってなかっただろうに。

「イズール、今すぐ教えなさいよ！　恋人に隠し事なんて許さないわよ！」
「だー！　もう、わかったから首絞めるな！　箒、あの本出せ！」
「あの本か……」
箒ちゃんは『インフィニット・ストラトス』一巻を取り出した。
って！！　ちょっと、ここでタイムパラドックス起こす気！？
「こいつは……簡単に言えば預言書だ」
「「「「「預言書？」」」」」
ああ、もうどうなっても知らないよ俺は……。
――確認中。
「――なるほど、初めて会ったとき『酢豚～』について知ってた理由がそれね」
「――そうか……だが、この預言書にイズールが出ていないのは何故だ？　というかここまで私たちのプライベートが暴露されているのはどういうことだ！！」
「――な、なんでわたくしの裸の絵がか、かかか、描かれていますの！？」
「お前ら何読んでんだ？」
「一夏、きっと見られたくないものなんだよ」
ついに一巻を読破した一夏ラバーズ。（鈴は脱退しました）さぁ、これからどうなることやら……。
「ねぇ、まさか『二巻』なんて持ってないでしょうね？」
「……」

沈黙から二秒。ヒロイン達の行動は早かった。その行動はまさに『強奪』。イズール君、沈黙は肯定を意味するから気を付けようね♪

「あ、逃げた！　箒、セシリア、イズールを捕まえて！」

鈴ちゃんが叫ぶ。

「まかせろ！」

「おまかせくださいですわ！」

さて、俺の実況もここまでにするか。がんばれよ、転生者。

――イズールｓｉｄｅ

ち、三人はまだ追ってきやがる！

「待て、イズール！」

「お待ちなさい、イズールさん！」

「待て、イズール。恋人には包み隠さず晒しなさい！」

くそぅ！　今回は鈴がいるから誰に変身しても恐らくバレる。

煙幕も箒に効かないようだし。

人外的能力は使用禁止だ……。

ゼオルさんに聞いてみよう。

「こちらイズール。ゼオルさん、聞こえる？」

『はい、こちらゼオル。コンゴの水は赤いぞ、どうぞ？』
「えっと……かくかくしかじか」
『だれこれそのこの？』
「理解は？」
『ＯＫ。ずいぶんとまぁ、原作ブレイクしてくれちゃったじゃないか』
「そう、のんきな話でもないんですよ。今回は『預言の書』ということで何とか納得してもらったけど、二巻以降読むと原作キャラが自主的に原作ブレイクする可能性があるから困ってるんです」
『しかたないなぁ、その通路を曲がった所でガンドレイダの能力『透過能力』を使え』
「そんな能力あったっけ？」
『まあ、少しフェイゾンを使うがな』

それを聞いた俺は通路を曲がり、フェイゾン細胞を少し使って、エネルギーを生成、そして透過する。侵入活動ではチートじゃないか。

「あれ？　イズールが消えた……」
「どこへ逃げた？」
「たしかにこっちへ曲がったはずですが……」

鈴、箒、セシリアの順で周囲を見渡す。

「くっ、屋上に戻るわよ。夜はイズールの部屋で探索よ」
「「了解！」」

透明な俺から離れていく三人。マズイなあ……家宅捜索とは……。

ドンッ！！

俺に誰かぶつかった。

「――っ！！　誰だ！！」

ラウラ・ボーデヴィッヒがそこにいた。

「ステルスか！？　……どこの軍の者だ！　姿を現せ！」

まったく俺とは反対の方向を向いて叫ぶラウラ。

やっぱり気付いていない。

「くそっ……姿を現せ！」

――数分後。

「……まさか……ゴースト……？」

――さらに数分後。

「……うぇ……ひっぐ……」

ラウラが怖がって泣き出してしまった。あれ？　デレる前ってこんなキャラだっけ？

そこへ千冬先生がやってきた。

「ラウラ、何を泣いているんだ？」

「きょ、教官！？」

なんだかかわいい……。はっ！　いかんいかん。俺には鈴がいるんだ。

？ゼオルのことば。　イズールよ、もし変更したいなら物語の設定を書き換えることは可能だぞ？

なんだって！？　でも遠慮しておきます。俺はそんな外道じゃないので。

「教官！！　この学園には何が存在しているのですか！？」
「私もしらない“何か”としか言えないな。ピカチュウにドッペルゲンガー、恐らくその中心にいるのはガルクライフだ」
「ガルクライフ……我々ドイツに攻撃を仕掛けた組織ですか？」
「あぁ、しかも奴らは巨大な戦力を保持していると予想する」

たしかにウチの組織の戦力は異常だ……一体何と戦おうというのだ？
俺はそんな事を考えながら、二人の会話を聞き続けるのであった。

――夜。
――食堂にて。

「ねぇ、イズール。あの人だかりは何？」
「鈴、たしかあれはデザートのコーナーじゃないか？」

目線の先のデザートコーナー。女子生徒が砂糖に群がるアリのような状態になっていた。

「あっ、いーくん」
「あれ？　のほほんさん？」
「いーくんはりんりんと一緒に食べるの？　ラブラブだねー」
「いやー、それほどでも」
「からかったつもりなのにまいったねー」

のほほんさん（一夏命名）は着ぐるみのような姿で俺達をからかう。だが甘いなのほほんさん。俺はそんなんじゃ怯まないよ？

「だから……りんりんって呼び方やめてよ……」

鈴はちょっとへこむ。
かわいいなぁ……こいつ。

「ところでのほほんさん。あのデザートコーナーの盛り上がりはいったい何？」
「ああ……昨日から『プリン大福』ってお菓子が並んで、物凄くおいしくてー、クチコミで広がってああなったんだよー？　しかも限定五十個」

そういえば前にウォルツさんから貰って食べたけどおいしかった記憶がある。

「鈴、もらってこようか？」
「え？　でもあの人だかりじゃあ手に入らないんじゃないの？」
「そこは――社員特権で」
「他の子に怒られてもしらないからね？」

俺は食堂でウォルツさんを探す。

早速発見！

「あ、ウォルツさーん！」

「あ、イズール君？　リア充おめでとう！　今日はどうかしたの？」

「ええ、プリン大福ください」

「ごめんねー。いくら社員特権行使しても在庫切れはどうにもならないんだよねー」

「……そうですか」

社員特権使おうとしたことが早速バレてた。

「――そのかわりと言ってはアレだけど……新商品の試食お願いしようかな？」

「え、いいんですか？」

「お持ち帰りもできますよ？」

持ち帰り！　そういうのもあるのか。

ウォルツさんは俺と鈴とのほほんさんの座る席に箱を持って座る。

天才パティシエの新作とあってなのか、周りに女子が集まってくる。

「まずはコレの試食お願いします」

最初に出されたのは……ミルクレープ？

「ミルクレープです。生地の味を殺さないようにクリーム自体の甘さを控えめにしました。トッピングはありません。コーヒーと合うように味が設定されています。その他は企業秘密です」

「「「いただきます」」」

俺と鈴とのほほんさんは、とりあえず食べてみた。
うん、たしかに甘さは控えめで……生地の固さも丁度良く、フォークで簡単に切れる。しかも形が崩れない。どんな技術使ってるんだろ？

「「「おいしい……」」」
「どうやら新商品としては大丈夫のようですね」

――ゴクリ……。

周りの女子から生唾を飲み込む音が聞こえる。

「食べたいですか？　私の新作……」

ウォルツさんの言葉で周りのみんながコクコクと首を縦に振る。

「さぁ、ゲームの時間だ……」

ウォルツさんの雰囲気と口調が変わる。なにこれ！　東映版の遊戯王かよ！？　もしかしてウォルツさんって多重人格者！？

「ルールは簡単。六日後、ドッペルゲンガーが現れる」
「「！？」」

俺と鈴は驚く。

「そのドッペルゲンガーを捕まえたクラス全員に、前回中止になった対抗戦のデザートフリーパスと、この私のお店の新作試食係をやってもらいましょう。そして例の『疑似結婚式』イベントも……」

『――！？』

この時、食堂にいた女子の心が全員一つになり、『ヒャッハー！』という言葉が夜空に届いたという。お前らはどこの聖帝の手下だよ！！

――自室にて。

まだシャルルと一夏の戻ってきていない部屋で鈴と対策を考えていた。

「あんたはそのままでいればドッペルゲンガーだなんて気付かないわよ」

「いや、ウォルツさんは自分の企画したイベントは恐らくちゃんと動かす人だ。一定時間、間隔的にマップ表示する仕掛けを用意すると思う」

「というかなんで六日後なの？」

「なんかある日だろ？」

俺は気付いていた。その『六日後』というのは恐らく、ラウラが鈴とセシリアを攻撃する日だ。つまり、その日はドッペルゲンガーとして介入しろというウォルツさんのサインなのだろう。

「――ところでイズール。忘れているようだけど、『二巻』の在り処について話してもらうわよ！」

げっ、まだ忘れてなかったのか！？

俺は机の上を確認する。
マズイッ！　たしか机の上に置いてたはずだ！
「その目線の先ね！　もらったぁぁぁぁ！」
「だめだ、鈴！　未来を変えてはいけない！　タイムパラドックスだ！」
俺の反応よりも鈴の動きが早かった――が。
「あれ？　無いわよ？」
「え？」
俺は机の上を見る。
マウンテンデュー、USBメモリ（千冬先生から返してもらった）、DXオーズドライバー、全メダルセット……あれ？　青いメダルが一枚足りない。そして……二巻は……。
「……ウ」
「ウ？」
「ウゾダドンドコドーン！（訳：嘘だそんなことー！）」
なぜだ！　どこへ行った俺の二巻！！
「ど、どうしたの……？」
「大変だ、鈴……二巻が無くなってる」
「つまり……それ読んだやつは未来がわかるってこと」
「……いや、別に変わって困ることはないはずだ」
沈黙。

「そう言っている割にはあんた、顔が青いよ」
「……ああ、あの本は未来の鈴や他人の秘密を覗けるのさ、もしもそんなんで預言者気取りされてヤバイところまで来てしまったら……俺はこの学園に居られなくなる」
「ねぇ、イズール。あの本読んでから思ってたけど……もしかしてあれは預言書なんかじゃなくて、この世そのものなの？　あたし達は登場人物で、あんたはそれを第三者として見ていた人なの？」
「……前半は正解、後半は不正解。たしかにこの世界はライトノベルだ。ちなみに俺も誰かの小説の登場人物だったらしいけど……そこについては何も覚えていない。気付いたらゼオルさんの元で手術を受けてた」

おれは鈴に全てを話すことにした。俺の目的、役目、この世界に存在する脅威。

「――なるほどね。空想世界侵略兵器……ゼオルさんの旧組織の遺産……転生者……」
「――ごめん、鈴。お前を騙してた」
「気にしないで、例え小説の世界でも、あたし達の人生はちゃんと存在する。そこをわかっていれば何も言わないわよ」
「ありがとう、鈴」

やっぱりお前は優しいよ。

「……てことは、この部屋にはこの世界に無い珍しいものとかあるの？」
「たしかに存在する。見たこと無いメーカーの品は全てそれに該当する」

それを聞いた鈴は俺の私物をあさり始めた。

「鈴、流石にあさるなよ……」
「いいじゃない、別に。あ、これなぁに？」
鈴が取り出したもの――まて、それは！！　なんで俺の私物にそんなものが混入してるんだよ！！
「なんでそれがこんなところに……」
「ん？　だからなにこれ？」
俺は鈴に耳打ちした。
「――」
「なっ！　コン●ームッ！？」
「馬鹿ッ！！　声がでかい！！」
顔が一気に真っ赤になる鈴。
「あんた、あたしの体狙ってるの……／／／」
「まだ若いのになに言ってんだ！！　あと、私物としてソレを混入させた覚えはない！」
「……」
「……なんか言えよ……気まずい……」
「うん……／／／」
「いったい誰だよ……俺の荷物に混ぜやがったの……」
たぶんゼオルさんだ。もしかしなくてもゼオルさんだ。
「ねぇ、今日……一緒に寝ない？　あんたがあたしの姿になってさ……」

「今この？でそれは厳禁だ。前みたいにこの部屋を独占しているわけじゃない。一夏とシャルルに何ていえばいいんだよ……」

ガチャッ！！

「帰ったぞー。あれ？　鈴もいたのか……どうした二人とも、顔が赤いぞ？」

一夏の言葉を聞いて俺は自分の顔が赤くなっている事に気付いて……恥ずかしくなるのであった。

それにしても……いったい誰が二巻を持っているんだ？

――続く。

第八話　シャルル君、いい声してるのね。（後書き）

ということで主人公と鈴が付き合うことになりました。
ストックもヤバく、行事も忙しくなってきたので、更新が遅くなります。ご了承ください。
感想、物語についての意見なども募集しております。

第九話　ドッペルゲンガー、お前はＩＳ使わなくても強いぞ？（前書き）

ええ、前回内容を急ぎすぎて黒歴史化しております・
そして感想にもあったように箒ちゃんが空気化しております。
早く、三巻へ急がないと……。（超展開フラグ）

第九話　ドッペルゲンガー、お前はＩＳ使わなくても強いぞ？

――前回までのドッペルゲンガーは。

いきなりの超展開。

「俺は死んだんだー！」

「イズール……あんた人間？」

進行するフェイゾン汚染。

「ナニカサレタヨウダ」

「そのネタは……知らないわ」

酢豚。

「えっ！？　あたしの事！？」

「お前以外に誰がいる？」

無くなるストックと明らかに不足しているツッコミ。

「そういえばあんたが死んだ後とかキスした事とか、あの時誰もツッコまなかったわね」

「きっとみんなの設定にバグが発生したんだよ」

キスシーン？

「なぁ、鈴」

「ん？」

「八重歯……痛かった」
「……」

無くなった二巻とコアメダル。

「くそっ！　いったい誰が！！」
「そんなに大事なの？」

敵の正体は？

「Ｕノザワシンだ！　Ｕノザワがデータを書き換えている！」
「誰よ？」

影が薄くなる原作メインヒロイン。

「一夏よ」
「なんだ、箒」
「原作でもそうなのだが……私の出番が少なくないか？」
「……」
「お願いだ、何か言ってくれ」

次々に襲来する空想世界侵略兵器。

「あれがグレートチフユサンダーで、これが戦闘要塞ジャイアントストラトス。そんでもってあれが、ザ・ウォーカー」
「ゼオルさん、何言ってるの？」

そして、物語の終焉は？

「そんな装備で大丈夫か？」

「むしろ大丈夫すぎて問題だ」

ＩＳ学園のドッペルゲンガーは続きます。

今回の出演。

イズール・ユ・ミヅル
ゼオル・ゲバイン

織斑一夏
篠ノ之箒
凰鈴音

※このあらすじには嘘が含まれております。

五日が経ち、俺達が射撃訓練をしているとラウラが現れた。
ちなみに五日間で鈴は『メトロイドプライム』三部作をクリアした。
つまり鈴は俺の装備と能力の大半を知った事になる。あの時の怯え方と言ったら……『あんたは化け物か！？』と言われた。それは褒め言葉だ。

「――貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」
「イヤだ。理由がねぇよ」
「貴様にはなくても私にはある」

この時期のラウラは頭固くてイヤだなぁ。二巻……誰が持って行ったんだ？
というかもうこの機体はガルクライフ社以外じゃあ止められない性能になってる。
ちなみに今は『打鉄』に変身しているので、これが専用機ということに誰も気付いていない。（装備は違うけど）

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」

まったく……色々矛盾があるのに……まぁ、そこは別で補完してくれ。

「また今度な」
「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」

ラウラは漆黒のＩＳを戦闘状態へとシフトさせる。だが、そうはいかんざき！
俺はすぐに打鉄（変身形態）に装備したアイスミサイルを発射する。

バシュンッ！！

「ちっ――！！」

ラウラはアイスミサイルを避ける。
ラウラのいた場所は凍っていた。

「ドイツ軍人はずいぶんと短気だな。そんなんじゃ戦場で犬死す

るぞ？」
「貴様ァ！！　訓練機ごときで！！」
ラウラは実砲弾を向ける。
『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』
「……ふん。今日は引こう」
ラウラは戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていく。
「一夏、大丈夫？　イズール、ありがとう」
「イズール、俺からも礼を言うよ。ありがとう」
なんだか英雄気分もいいかな♪
でも……本当に誰がもっているんだろ、二巻……。
「今日はもうあがろっか。四時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉鎖時間だしね」
「おう。そうだな。あ、銃サンキュ。色々と参考になった」
「それなら良かった。そういえばイズール。あの打鉄は何？　あんな装備あったっけ？」
「ああ、あれは企業秘密♪」
俺は微笑みかける。
「やっぱりガルクライフ社だね。最近も『ドッペルゲーム』なんて変なイベント告知するし、たしかそのイベントは明日だよね？」
「ああ、明日だよ」

シャルルの言う『ドッペルゲーム』とは、ウォルツさんが企画した、俺＝ドッペルゲンガーを捕まえて豪華賞品を手に入れようという迷惑なイベントである。

「えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」

ああ……そういえばこの前――

『ふー、すっきりした。あ、シャワー空いたぞ』
『い、一夏っ、なんで服着てないの！？』
『？　着てるだろう。ちゃんと、ズボンだけだけど』
『おまえなぁ、だからお前はヒトナツなのだ。集団行動において相手を思いやる心はお前にはないのか？　この前だって嫌がるシャルル君を無理矢理更衣室に連れて行こうとしてたじゃないか。周りから見れば同性愛っぽい変態行為だぞ？』
『おまっ、ゲームしながら変なこというな！！』
『なんだ？　俺の持ってるゲームにハマってる奴が何を俺に教えてくれるんだ？　――貸さないぞ？』
『――すんませんでした！』

あれは見事な土下座だった。

――数時間後。

「バースバスプラプラバスプラー、バースバスプラプラー♪」

俺は鈴との『メトロイドプライム2』での対戦を終え、部屋に帰

ってきた。
　あのアナイアレイタービームとパワーボムの一騎打ちは燃えたね。
さて、シャワーを浴びますか。
キュルルリンッ！！　（ニュータイプのＳＥ）
　その時、イズールに電流走る。
　なんだ？　物凄いフラグ臭がするぞ……。そういえば誰かのシャワーを浴びる音が……。
「あ、おーい。ボディーソープが切れてるだろー」
　ざわ……。ざわ……。
「一夏、待て！！　昨日エロゲーをやったお前が今シャルルの姿を見るのは危険だ！！」
　バタンッ！！
　なんということでしょう。シャルルの裸を見た一夏が昨日からの蓄積欲求のせいで倒れてしまいました。これぞまさにチート転生者である匠の技の集大成と言えるでしょう。
　俺はシャルルを見る。
「一夏だったらいいのに……」
「……はい？」
　今この人なんて言った？　なんか二巻の後半あたりの台詞吐きや

がりましたよ。
ん？　『二巻の後半』？　それになんでもうデレている？
ＭＡ☆ＳＡ☆ＫＡ！？
「……読んだな……二巻」
「……うん」
二巻の所持者はシャルル君改めシャルロットちゃんでした。
「――それにしても酷いよ。最初から僕が女だってわかってるならフォローしてくれたって」
「それじゃあ、すぐに部屋を変えられていただろ？　主にセシリアとか箒に言われて」
「まったく、本当ですわ。男として転入してくるなんて」
「そう言うなセシリア。きっとシャルルにも深い理由があるのだろう」
――え？
「なんでセシリアと箒がいるんだよ！！　それに何もないように会話に参加するな！！」
本当に何でいるんだお前ら！！
「わたくしはコレを返す為ですわ」
そう言って渡したのは……コアメダル（シャチ・コア）だ。
ちくしょう。あの時のフラグを早めに潰すんだった。
「私はセシリアが一夏の部屋へ行くと言うので付いてきた」

お前は特に何もないのかよ！！

「……うっうう……」

マズイッ！！　一夏が覚醒する。

そう思った俺は箒とセシリアと一緒に部屋を出ていく。

「シャルロット、後は本の内容通りにお願い」

「僕にまかせて」

バタンッ！！

「ちょっと、イズールさん。これはどういうことですの！？」

「そうだぞイズール。詳しく説明しろ」

「わかったからコレ読んどけ！」

俺は『インフィニット・ストラトス』二巻を渡した。

「なんとなく思いましたが……もしかしてわたくし達はこの本の登場人物ですの？」

「私は一巻をじっくり読んだからだいたいその答えに行きついていた。三巻はないのか？」

「セシリア正解。箒、残念だがまだ三巻は支給されてない。あ、今はこのページね」

俺は１５６ページを指さす。

「シャルルさんも辛い人生を送ってらしたのね」

「だが一夏も……なんだこれは――この後、一夏がシャルルに食

事を食べさせる場面があるではないか！！」
「なんですって！？」
――だから見せたくなかったのに……。
「もう、後は勝手にやってくれ。二巻は没収な」
俺は二巻を回収し、歩き出した。
「ま、待て！　お願いだ、一夏と付き合う為にはそれのヒントが必要なのだ！」
「イズールさん、お願いします。それがあれば一夏さんと――」
「だまらっしゃい！　交際したけりゃ――待てよ、こいつはシャルロットだけが有利だな……。まぁ、あの朴念仁がどうにかなるわけじゃあ――」
再び、イズールに電流走る。
そういや……原作と違う部分があったな……。
たしか昨日、面白半分で数十時間エロゲーをやらせて、九時間経った辺りで『この主人公、女の子の感情に気付かないなんてどうなしてないか？』とか言っていたような……。
「ヤバいぞ二人とも！　昨日やらせたエロゲーで一夏は朴念仁を卒業した可能性がある！　例えそうでなくても一夏の欲求が暴走している可能性がある！！」
「「なんだってー！！」」
恐らく後者の可能性が高い。

ドゴンッ！！

「シャルロット、無事か！！」

俺達三人は突入した。

そこには目のハイライトが消えたシャルロットが一夏を拘束している真っ最中だった。

「――前言撤回！　一夏、無事か！！」

俺はシャルロットに近づき――

「ティロ・フィナーレ！（物理）」

バックドロップを決めた。

「グハッ！！」

？シャルロットをたおした。

――数分後。

「反省は？」

「……ごめんなさい」

こうなった原因は、シャルロットが二巻を読んで既に一夏に惚れており、しかも返品待ちだった『ＩＳ学園ゲーム化計画（仮）』を

段ボールから出してプレイしてしまったことにあった。
「だって、ガルクライフ社の秘密があるのかと――」
「――反省は？」
「……ごめんなさい」
まったく、この娘は……。
「それにしても、あのゲームをプレイしてよくトリップしませんでしたわね」
「セシリア、きっとシャルル――いや、シャルロットは特殊な訓練を受けたんだよ」
「そうでしたか……」
こうして主要メンバーにはシャルルが女だと知られた。（鈴には後で教えました）
ちなみに一夏はこの後少し怯えていたらしい。

――そして。
「一夏、今日も放課後特訓するよね？」
「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと――」
「第三アリーナだ」
歩いていると……。
「「わあっ！？」」

一夏は箒と出会った。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことでびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているわけではないが……そういえばイズールをみなかったか？　なぜか物凄い真剣な顔で走っていったぞ？」

「あ、僕は今思い出したけど……今日ってセシリアと鈴がラウラに攻撃されるんじゃ……」

「なっ、そうだった！　さっき、イズールの走っていた理由はそれか！」

「おい、シャルル、箒、俺にもイズールの本の内容教えてくれ！」

「「一夏はダメ（だ）！」」

三人は第三アリーナへと走った。

――第三アリーナにて。

――鈴ｓｉｄｅ

くそうっ、イズールや一夏の事馬鹿にされて何にもできないなんて……。

あのラウラって奴、イズールのことを『下らん種馬』って言いやがって――。

「ふんッ！！」

ドゴッ！！

「ぐあッ！！」

まずい……これ以上のダメージは……。

「おおおおっ！」

あれは……一夏の白式……イズールは？　私の恋人は助けに来てくれないの？

「その手を離せ！！！」

あたしとセシリアを掴んでいるラウラへと、一夏は刀を振り下ろす。

「ふん……。感情的で感情的、絵に描いたような愚図だな――」

キィィィィィィン！！

「な、なんだ？」

「……ん？」

「なん……ですの……？」

一夏とラウラとセシリアが音に気付く。

何？　この音。

ズドォォォォォォン！！

アリーナに落ちてきた青い光。

そして青い光から青い閃光がラウラめがけて飛んでいく。

「ッ！！」

チュドォォォォォン！！

青い閃光はアリーナに大きな穴を空けた。

あれって……ハイパーミサイル！？

そして青い光から現れたのは……。

「…ラウラ……よくもあたしの……もういい、貴様はここでドロップアウトだ！！」

「凰鈴音が……二人だと！？　まさか……お前がドッペルゲンガーか！」

あたしの姿と声を使って本気で怒っている……恋人の姿だった。

「お前、ドッペルゲンガーか！？」

「久しぶりね、一夏ちゃん。早速だけどあんたは離れて」

鈴の姿で一夏と話すドッペルゲンガーは無茶苦茶に怒っているようだ。

「ふんっ！　得体のしれないガルクライフ社の手下が！　ドイツの第三世代機には及ばないことを教えてやる」

「……はん。大した自身だ、貴様に見せてやろう。人外的な力を！！」

イズールの甲龍――いや、あれはたぶんＧＡ－ＰＥＤだ。とにかく青い光を放つ。最初からハイパーモードを使う気！？

「衝撃砲！」

イズールは『衝撃砲』って言ってるけど、あのチャージは絶対に別の『何か』だ。

「ふん、そんな攻撃――」

キンッ！！

ズドォォォン！！

「ぐぅッ！！　なんだ今のは……本当に同じ機体の出せる威力か！？」

アイツ……『衝撃砲』にフェイゾンエネルギーを使ったわね！！

「面白い。ならコレならどうだ！」

ラウラはレールカノンを発射する。

「……」

ズドンッ！！

ちょっと、直撃じゃない！！

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

「きょ、教官！？」

「千冬姉！？」

煙から織斑先生の姿が現れる。いや、あれはイズールだ！
イズールは打鉄装備の織斑先生の姿になって、ラウラを攻撃する。

「きょ、教官！　なぜ私を攻撃するのですか！」
「言ったはずだ、もう教官ではないと！！」

凄い演技……ラウラが本当に騙されてる。

「お前には失望した――死ね」
「待ってください、教官！」

ガギンッ！

「……やれやれ、私はそんな風に見えるのか？」

本物が現れた。

「千冬姉が二人！？　どっちがドッペルゲンガーだ？」
「教官が……二人……」

あいかわらず本物は常人離れしてるわね。
そう思っていると、イズールは織斑先生の姿であたしをお姫様抱っこする。

「すまない鈴、助けるのが遅れた」
「いいわよ、あんたはあたしのヒーローなんだから。あと、いい演技してるじゃん」

本当に王子様みたいなイズール。
あたしを一夏へ預けると、帰ろうとする、でも――

「模擬戦をやるのは構わん。　――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

織斑先生の言葉で周囲がシーンとなる。

「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな？」
「あ、ああ……」
「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」
「は、はい！」
「僕もそれで構いません」
「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！
――と言いたいところだが、ドッペルゲンガー！！」

織斑先生がイズールに近づく。

シュゥゥゥゥン……。

イズールは紫の光を放ち、スーツ姿の織斑先生の姿へ変身する。

「――貴様！！　よくも教官の姿を使ってこの私を――」

ＩＳを解除したラウラがイズールを殴ろうとするけど。

ガンッ！！

「ラウラ、やめておけ。こいつは有機物、無機物問わず変身できる人外だ。生身のお前に勝ち目はない。いや、生身でなくても勝てないだろう」

殴られたイズールの腕は宝石のような無機物になっていた。流石ね……。

「千冬先生、後は頼みます」

「……言いたいことが山ほどあったが、いいだろう。今から罰ゲームなのだろう？」

「ええ、流石に――」

ピンポンパンポーン♪

『只今より、ドッペルゲームを開始します。今から三十秒間ドッペルゲンガーの場所をマップに表示します。次の表示は十分後です。生徒の皆さん、頑張ってくださいね♪』

あ、やっぱりあの企画やるんだ……。織斑先生の姿をしたイズールの顔がどんどん青くなっていく。あ、色々ヤバイみたいね。

「……逝って来い」

「……逝ってきます」

なんだか最後の戦いに出かける軍人のような感じがイズールから漂った。

がんばってよ、イズール♪

――鈴side end

――イズールside

俺は今追われている。誰にって？　ここの女子全員にだよ。

「者ども出会え出会え！　今は千冬様に変身しているわ！　追え！！」

よく言うよ。この企画は捕まえた奴が一番の得をする企画。つまり集団行動を装っているけど、腹の中は真っ黒で全員が一番を狙ってる。

俺は走りながらマウンテンデューで喉を潤し、走り出した。

「まてぇ！！」

げっ！　鈴のルームメイトも参加してやがる！？　たしか名前はティナ・ハミルトンだったか？　あいつは俺の正体しっているから厄介だな。

「よし――次の曲がり角で変身」

俺は曲がり角を曲がり、そのままシャルルに変身する。もちろん男という設定は捨ててはいけないので、男子の制服。そして大量の女子が俺に問いかける。

「あ、シャルル君？　こっちに千冬様来なかった？」

「え？　向こうへ行きましたけどどうしました？」

「いや、それならいいの。どうもありがとう」

「いえ、どういたしまして」

女子軍団は向こうへ走って行った。

「やれやれ……これだから――」

「そうはいかないよ！！　ドッペルゲンガー！！」

――！？

俺の目の前にシャルル――いや、シャルロット本人がいた。だが、俺がイズールという真実を知っていないはず……まさか！？

「参加者か……」

「君に恨みは無いけど、一夏との結婚式の為に捕まって！！」

思わぬ強敵だ。

シャルロットは俺に向かって走る。

ピピピ♪

『十分が経過しました。目標の現在地が表示されます』

時間が！　すぐに女子生徒がここに来る。考えろ……考えるんだ。

おう、良い事考えた！

「おとなしく僕に捕まってよ！」

「断る！！――みんな、僕の目の前にドッペルゲンガーが！！」

「？」

ドドドドド！！

「捕まえろー！！」

「「「おおー！！」」」

女子全員は本物のシャルロットに向かって走る。

「う、うわぁぁぁぁぁ！！」

なんだかボコスカという擬音が聞こえてきそうだ……。

さて、逃げますか……。

「みんな！　そのデュノア君は本物よ！！」

ギロリと視線がこちらを向く、というか気付くの早いな！！　まだ表示が終わってなかったのか！？

「あのデュノア君を追えー！！」

「おおー！！」

後ろから物凄い勢いで襲ってくる女子たち。

前からも！？

「ヒャッハー！！　水だー！！」

なんだかモヒカンっぽいのが混じってないか！？

とりあえず俺はそのモヒカンの台詞を叫ぶ女子を踏み台にして前方の集団を飛び越えた。

「な、俺を踏み台にした！？」

お前は黒い三連星か！？

「――ふふふんふ～ん♪」

前方に山田真耶先生発見！！

「山田先生！！」

「あら？　デュノア君？　どうしました？」

「山田先生、僕をかくま――」

「先生！！　そいつはドッペルゲンガーです！！」

それでいい。俺は山田先生の背中に煙幕弾をセットし……。

「うけとれぇぇぇ！！」

「へ？」

声の割には優しく山田先生を女子集団に突っ込ませる。

ボムンッ！！

「「「キャァァァァ！！」」」

うまくいったようだ。向こうは煙でやり過ごせたぞ。

――学園内敷地にて。

ゲーム終了残り時間わずか、煙玉は無し、シャルルの姿は既にばれている。

周りは夜で、視界も悪い。

透過能力は……使用禁止。（ウォルツさんが言っていた）
それにしても静かだ……静かすぎる。

バチンッ！！
バチンッ！！
バチンッ！！

「！？」

俺に照らされるスポットライト。前方にはＩＳを展開した集団と、恐らくこの学園の全モブ生徒が全て揃っていた。

「嫌あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

思わず叫ぶ俺。

「ドッペルゲンガー、そこまでだ！！　おとなしくしろ！！」

しかたない、あの手でいくか……。
作戦名：『所詮、お前らの友情なんて……』

「で、結局誰が俺を捕まえて賞品を手に入れる？」

ざわ……。ざわ……。

よし、作戦はうまくいった。
俺はすぐさま足だけＩＳを展開し、ボムを起爆させる。

ボンッ！！

周囲が土煙に包まれると、俺は走り出す。
走っている途中で鈴の姿に変身する。
熱探知の可能な『サーモバイザー』を起動する。
「おぉぉぉぉぉ！！」
そのまま俺はその集団に突っ込んでいった――。

ピンポンパンポーン♪
『ゲームセット。今回、賞品獲得者は無し。残念でした、またどうぞ♪』

俺は……勝った。
まさか最後はごり押しになるとは……。
周りには一般女子生徒やＩＳ装着者が倒れていた。（なんだか青い髪の人も倒れているけど気にしない）
「はぁ……あなた……生徒会に入らない？」
なんだか青い髪の人が満身創痍で話しかけてきた。
「あんたは……たしかドロップキックしてきた人？」
「ええ……ちなみに私は生徒会長よ……」

なんだか二巻では登場しなさそうな人が出てきたので、俺はとりあえず――。

「生徒会はパスします。スカウトはガルクライフ社を通してください」

「……ふふふ、そう……絶対にあなたを……勧誘してみせるわ……」

ガクッ！！

生徒会長……お前のドロップキックは効いたぜ。

そして俺は部屋に向かって歩き出した……。

この企画……二弾とかないよな？（それはフラグです。ＢＹゼオル）

――続く。

第九話　ドッペルゲンガー、お前はＩＳ使わなくても強いぞ？（後書き）

こんな展開で大丈夫か？
ご感想お待ちしております。

第十話　鈴は鈴の裸を見て赤面し、鈴は慌てる。そんな鈴と鈴の話。（前書き）

今回はある意味番外編です。

第十話　鈴は鈴の裸を見て赤面し、鈴は慌てる。そんな鈴と鈴の話。

恐怖のドッペルゲームが終わり、みんなが眠りはじめた頃。

――鈴ｓｉｄｅ

今日はラウラにボコボコにされて嫌な一日だった。
まあ、トーナメントでリベンジ……ああ、甲龍はダメージデカくて出場禁止になったんだっけ。はぁ……。何でこうなったんだろ……。

ドドドドドド…！！

「？」

廊下から響き渡る誰かの走る音。それはだんだん近づいているみたい。

バンッ！！

急に扉が開かれる。
ティナも何事かと顔を覗かせる。
……そこにいたのは。

「はぁ……はぁ……鈴っ！！」

あたしの姿に変身したイズールだった。
そんなに息切らせてどうしたの？　と尋ねてみると……。
「鈴の姿から……元に戻れなくなった……」
「へ？」
イズールを見てみると若干涙目だ。あたしって……涙目になるとこんな感じなの？

――イズール説明中。

「なるほど、生徒会長のドロップキック食らった後から元に戻らなくなったと」
「うん……。服やＩＳの変身とかは問題ないけど肉体の変身だけ出来なくなった……」
目からポロポロと涙を流すイズール……って！　マジ泣き！？
「だって……このままじゃあ鈴に迷惑がかかる。俺の行動で鈴に変な目が……」
「ああ、ほら、泣かないの！　男の子でしょ？」
「……今は女だ……」
イズールはこうなってもあたしの事心配してくれるんだ。やっぱり優しいなイズールは。
「とにかく、今日は一緒に居なさい！　一夏達にばれるのはまだ

駄目なんでしょ？」
「……うん」
「ティナもいいでしょ？」
「ええ、いいわよ」
こうしてあたしと鈴（イズール）とティナの奇妙な生活が始まった。

――シャワールームにて。
あたしとイズールは一緒にシャワーを浴びていた。
大浴場は色々とマズイから駄目だ。
「――で？　その現象は直るの？」
「ゼオルさんが言うには、キャラクター構成の設定が少し衝撃でぶれたのが原因なんだって。それ用の構成薬を完成させるからしばらく待ってくれだって」
まったく同じ体、同じ声をしたあたし達の会話はどこか不思議な感じがした。
「まぁ、それまでの我慢ね。一夏や織斑先生には何て言うの？」
「フェイゾン関係の治療で専用施設へしばらく行くという事になってる。ゼオルさんが連絡してた」
あの人は行動早いわね。
「えっと……その間はしばらく……よろしく……／／／」

「なによ、あたしにコクッたなら堂々としなさいよ♪」
なんだかイズールが可愛く見える。
あたしも喋り方変えればこうなるのかな？
「それより今日のけが大丈夫？」
「まだちょっとは痛むけど平気よ」
「腕使うの辛いでしょ？　背中洗ってあげる」
「え？　あ……うん、イズールにまかせた」
イズールはタオルにボディソープを付けてゆっくり擦る。
同じ姿をしたイズールに背中を洗ってもらうのはなんだか変な気分。
そういえばイズールの口調が女口調ね……。
「ねえイズール」
「ん？」
「口調が女口調のままだけどいいの？」
「うーん……鈴はこの姿の場合、女口調がいい？　それとも男口調がいい？」
イズールは質問してきた。うーん……悩むなぁ……。
「じゃあ男口調で」
「了解！　あ、胸とかも洗おうか？」
「な、なにを……あ、そういえばイズールも同じ体だったんだよね……感触とかも同じよね？　つまりあたしの胸の感触知ってるわよね？」
「まぁな」
「触ってもいい？」

「……いいぞ……／／／」

イズールは顔を赤くした。もしかして今のイズールは女であるあたしよりも女っぽいかもしれない。

とにかくあたしは鈴（イズール）の胸を触ってみた。

ムニッ！！

「……鈴、くすぐったい……うぅっ……」

まったく同じ感触がした。

ムニッ！！

ムニッ！！

あたしはさらに揉んでみた。（揉めるほどはないけど……なんだか虚しくなってくる）

「なっ！！　馬鹿！　一応変身して胸に神経通って——ひゃんっ！！　だからやめ——あんッ！」

イズール……あんた……エロい……。

「はぁ……はぁ……女の体って……すごいのな……官能小説の世界に引き込まれるとこだった」

「イズール、なんかその……ごめん」

あたしも揉まれたら今のようになっちゃうんだろうな……肉体同じだし。

「まぁ……ちょっと興奮した。やり返していい？」
「ッ！！？　それだけはダメ！！」
「そっか……」
一瞬イズールの目がマジだった。
あぁ……なんだか顔がお互い赤くなってきた……早く体流して上がろう。

――部屋にて。
パジャマに着替えたあたしとイズール。（イズールの場合は服を変身させた）
今はイズールに包帯と湿布を換えて貰っている。
「どう？　きつくないか？」
「うん。大丈夫」
「ＯＫ　――はい、これで終わり」
「ありがとう」
イズールって何でも出来るのね。そこもコピーした能力なのかな？
「声に出てるぞ。それは実際にゼオルさんに教えてもらった」
「いつの間に……」
「この小説では描写されてないから無理もない」
「メタな事言わないでよ」
「しょうがないだろう……。ちなみに、応急処置、料理、爆弾解体、ハッキング、クラッキング、販売員も出来るぞ？」

そんな『俺、資格持ってます』みたいに言わないでよ。

「まあ、やれることは多い方が便利さ。さて、俺は床で寝ますか」

「え？　どうせだから一緒に寝ようよ」

どうせ今のイズールと一緒に寝ても襲うことはないだろうし。

「じゃあ……一緒に寝よう」

「うん」

あたしとイズールは同じベッドに入る。

イズールからはあたしと同じ匂いがする。

「なあ、鈴」

「ん？」

「実は俺……人をハグするのが好きなんだ……他の人にも平気ですると思うから許可が欲しい。なんか我慢するのが嫌になってきた」

「……いいわよ。ただし、浮気はダメよ」

イズールにはそんな趣味が……というかそれって恋愛フラグ乱立にならない？

？ゼオルのことば。　それはオレがなんとかちょうせつします。

「鈴……抱きしめてもいい？」

「……いいわよ」

鈴（イズール）はあたしを抱きしめた。

ベッドの上だからとても官能的な表現だと思うけど、同じ姿をし

ているからなんだか不思議な光景だ。

「あんた……温かいわね」

「……」

「イズール？」

「……すぅ……くぅ……」

寝るの早ッ！！　あんたはの●太くんか！？

「おーい、イズール？」

「……すぅ……すぅ……」

あたしは鈴（イズール）の頭を撫でる。髪はサラサラで、良い匂いがする。もしかしたら本物のあたしより髪質良くない？　はっ！　もしやガルクライフ社製のシャンプーとか？　起きたら聞いてみようかな。

「今日は疲れたのかな？」

「……くぅ……」

ふと、あたしの目に鈴（イズール）の唇が映る。なにもしていないのにうっすらとピンク色で、潤っている。

「……」

「……んっ……ふぅ……」

寝息をたて続ける鈴（イズール）。

……ちょっとだけなら……いいよね？

「かわいいのがいけないのよ……」

「……くぅ……くぅ……」

あたしは自分の唇を近づける。
一度キスしたけど、あの時より遥かに緊張する。
鈴(イズール)は呼吸を繰り返している。

「……」
「……すぅ……」

――ガチャッ！！

「やっほー、鈴、イズール君の調子は……あ……」
「ッ！？」
「……ふふぃ……」

大浴場から戻ってきたティナが今の光景を目にしてしまった。

「あ……その……」
「あ、いや……あたしはイズールよ！」
「嘘つけ！」

なんでばれるの！？

「イズール君のパジャマ……ガルクライフ社のロゴ付いてるから」
「……あ」

よく見たらたしかにガルクライフ社のロゴがプリントされていた。

「キスしようとしたでしょ」
「……おっしゃる通りです……／／／」

うわぁ……物凄い恥ずかしい。

「……鈴……大好き……」

そんなイズールの寝言を聞きながら夜は過ぎて行った。

――翌朝。

トントントン。

朝はそんな音で目覚めた。

「う……ん？」

「ふぁ～……」

あたしとティナは台所で誰かが料理しているのを見た。

あたしの姿をしたイズールだ。

「あっ、鈴とティナさん、おはよう」

「おはようイズール」

「イズール君、おはよう」

イズールはかわいいエプロン姿で、頭にタオルを巻いている。髪でも洗ったのだろうか？

「はい、二人の今日のお昼のお弁当作っておいたよ」

よく見たら近くのテーブルに二人分の弁当箱が置いてあった。

「そろそろ7月で暑くなるから、食欲が落ちないようにご飯にカレー粉を適量と塩を少量混ぜ込んでみました。カレー粉の香りはご飯が冷めても十分すると思うから食欲が沸くはずだよ。塩味は……まぁ、カレー味だけじゃあ物足りないと思って。おかずは大根とキュウリのサラダ、鳥の唐揚げ、酢豚作ろうとして間違って出来た豚の角煮。ちょっとカロリー高いかな？　味の感想はそれぞれ言ってね。個人の舌の好みはみんな違うからね」

イズールってなんだかすごい。というか酢豚作ろうとして豚の角煮が出来るってどういう事？

「あ、もしかしてパンが良かった？」

「「いえいえ、とんでもない」」

あたしとティナは思わずかしこまってしまった。

ふたの閉まっていない弁当箱からはおいしそうな物が見える。

「あ、飲み物は好み知らないからこれ、お小遣い」

そう言ってイズールは百円玉をあたしとティナにそれぞれ三枚渡す。

「イズール君、ありがとう」

「イズール、いいの？」

「ああ、俺は一応ガルクライフ社の社員だから毎月百万の月給は貰ってるよ」

百万！？　適当な会社の社員より遥かに高い給料じゃない！！

「まあ、使い道が無いのが現状だな。もう五百円必要だったか？」
「「いいえ、滅相もない」」
あたし達はイズールの秘密をまた知ってしまった。
「さあ、朝食にしよう。今日の朝食はパンとベーコンエッグ、コンソメスープにツナサラダ。そういえば、ウォルツさんからイチゴジャムをおすそ分けしてもらったよ」
「「な、なんだって！？」」
ガルクライフ社のパティシエであるウォルツさんが普通のイチゴジャムを作る訳がない！！　それを考えただけでヨダレが出そう。
あ、ティナも目が輝いてる。
「さて、みんなで食べよう」
イズールはそう言うとエプロンを外し、頭のタオルを取った。
サラサラ……。
――へ？
あたしの姿をしたイズールの髪は昨日より遥かにサラサラしているのが見てわかる。窓からの少しの風でもサラサラと髪がなびいている。髪型は癖の無いストレート。
「イズール、あんたその髪どうしたの！？」
「イズール君、どんな魔法を使ったの！？」

あたしとティナは女としてイズールの髪について言及した。
「あ、これ？　しばらく女として過ごす事になりそうだからカタログで取り寄せたんだ」
そう言ってイズールが取り出したのは、見たことのないシャンプーとリンスとボディソープだった。
やっぱりガルクライフ社のロゴがある。でも、昨日よりサラサラって……。
「これは元々、火傷用の塗り薬として開発してたらしいけど、調合や作成の過程の副産物としてコレが完成したんだって、これの特性は皮膚や髪などを修復して最高のコンディションにするらしいよ。今日鈴達が寝ている時に届いたから使ってみたんだ。どう？　俺は元々男だからよく分かんないけど……」
「「それ、今すぐちょうだい！！」」
あたしとティナは迷わず叫んだ。
よく見たらイズールの肌がキレイだった。
「欲しいの？　しばらくは一緒に過ごすから共同で使っていいよ。それともお取り寄せする？」
「「あざーす！！」」
思わずあたし達二人は土下座した。もう、イズールがいればどんな夢も叶う気がしてきた。
「さあ、朝食をいただきましょうか」
「「いただきます♪」」

あたし達よりも女として完璧なイズールの姿を見て、思わず涙が出た。あ、このジャム滅茶苦茶おいしい！！

――数十分後。

「二人とも弁当箱忘れてない？　ハンカチは？　ティッシュは？」
「「大丈夫」」

なんだかイズールはあたしの離婚した母みたいだ。
あの時は本当に幸せだったと今でも思う。

「そう言えばイズールは今日はどうするの？」
「うーん、学園内を歩こうかなと思う。ドッペルゲンガーとして」
「そう？　あんまり悪さしないでよ？」
「迷惑かかんないように髪にリボンしないで行くよ。それで相手は区別できるはず」
「そう？　あたしってツインテールしているのとそうでないので印象違う？」
「うん、違う」

そうなんだ……。言われれば、今のイズールは昨日の髪を結んだ姿と随分印象が違う。

「それじゃあ、いってらっしゃい。鍵は合鍵をゼオルさんに作ってもらったから心配しないで」

あの人なんで合鍵なんか作れるのよ。まぁ、イズールは変な事し

ないから大丈夫でしょ。

「「いってきまーす」」

あたし達は校舎へ向かった。

――鈴ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

俺は鈴達が学園へ向かってしばらく経った後で行動を開始した。

「さて……」

服を女子制服に変身させる。

鈴は肩を露出させているが、俺はドッペルゲンガーとして相手が気付くように肩の露出は消した。

「さて」

俺は部屋の鍵をかけ、外へと飛び出した。

――学園敷地にて。

俺は髪をなびかせながら歩いていた。

「～♪」

両手を広げ、風を浴びるように歩く。

つまり……『ブーン』の構えである。

「ん？」

何かが置いてある。段ボールだ。『イズールへｂｙゼオル』と書いてある張り紙がくっ付いていた。

どうやら特殊なカスタマイズ段ボールのようだ。

――カポッ。

「やっぱり段ボールは万能だ！！　戦士の必需品だ！！」

とりあえず被ってみた。独特の紙の匂いが心を落ち着かせてくれる。

ガルクライフ社製だから恐らく銃弾防御は完璧なのだろう。側面には『ワレモノ注意というのは時代遅れ』と書いてあるから。

――カパッ。

【！】

テュインッ！！

誰かが段ボールを外した。

マズイッ！！　これじゃあ『ＢＩＧ　ＢＯＳＳ』の称号は取れな

い！！

「……誰？」

「いや、それは俺の台詞」

日本代表候補生

【更識簪】

「なんだか生徒会長と似ているような……」

「……妹だから。あなたは……二組の凰鈴音さん……とは少し違う。誰？」

マズイな……俺の持ってる一巻や二巻には恐らく登場しない人物だ。しかも髪が青いということはそれなりのエピソードを持っている可能性が高い。

「もしかして……ドッペルゲンガー？」

「まぁな……」

こうして不思議な出会いをした。

「――そっか……サラシキカンザシと読むのか」

「うん……あなたは何者なの？」

「君のお姉さんの熱烈なキックで元に戻れなくなったマリオネットさ」

「姉さんが？　……ごめんなさい」

「君は君、お姉さんはお姉さん。お姉さんの罪は君の罪ということではないよ」

俺は常に考えていた。兄弟や姉妹だからって罪を共有するのはおかしい。同じ母から生まれたとしても、同一人物ではないからな。

「あなたは……私を私として見てくれるの？」

「？　なんだかコンプレックス持ってそうな言い方だな」

「……」

「ごめん、気に障った？」

「大丈夫」

俺はランダスの能力を無駄遣いして冷やしたマウンテンデューを渡した。

「飲みなよ。胃に何か入れれば少しは気分が楽になるぞ」

「……ありがとう」

俺と簪さんはベンチに座りながらマウンテンデューを飲む。

――ゴキュッ！！　ゴキュッ！！

――コク、コク

飲む音は俺の方がデカい。今は鈴の肉体だからもう少しおしとやかにするべき？

「――ッぷはぁ！！　やっぱり冷えた飲み物は今の時期に効くわぁ！！」

「これって……知らないメーカー。いったいどこの？」

「企業秘密♪」

どこで買っているかも秘密。ついでに何処から取り出しているの

かも秘密。

「ねぇ、あなたの機体……どういう構造なの？　あの青い光も」
「ん？　ＧＡ－ＰＥＤの事？　あれはモンスターマシンだから手を出さないほうがいいよ？　ついでに青い光も」
「ガペッド……一組のイズールという人の機体と同じ。ねぇ、ちょっと相談があるけど……いい？」
「聞くだけならタダだから話して御覧」

魔改造フラグ入りましたー！！　ｂｙゼオル。

「――なるほど……自分の専用機の開発が停止……ね……」
「うん……」

白式の開発が急に決まって、人員を持っていかれ、自分の専用機が未だに完成していないという。

「うーん。簪さん、ちょっと待ってて」
「？」

俺は通信機を起動させる。
するとホログラムのゼオルさんが現れた。

『はい、こちらゼオル。なんだ？　イズール君か……って！　公開通信じゃないか！？』
「おう、今回は急な依頼でな」
「あなた……一組のイズール君なの！？　でも……どう見たってあなたは女……」

俺は唇に人差し指を添え……。

「クラスのみんなには内緒だよ？」

そう答えた。

「そう……」

「まぁ、取引相手に正体隠したままじゃあ失礼だからね」

『ところで、依頼とは？　お前が俺に依頼なんて珍しいじゃないか』

「単刀直入に言おう。『この子に似合う専用機を所望する』理由は、この子とお姉さんとのコンプレックスを消して、自信を持たせたいからね♪」

「えっ！？」

『よし、よく分かった！！　どうやらその子には専用のＩＳコアを使う許可が出ているようだから……こっちの疑似コアを四つ追加しよう。防御は重力型で……実弾無効、格闘攻撃５０％オフ、電子戦専用にして……、重力制御だから鬼のような機動にして……おお、アイディアが浮かんできたぞ！！　早速開発主任と相談だ！！　夢が広がるぞ……じゃあ、任せろ！！』

「じゃあ……お願いします」

ゼオルさんは通信を切った。なんか今『疑似コア四つ』という怪しい単語が出たような……。

「あの……別の組織がこの学園に干渉するのは規則違反……」

「ウチの上司にそんな規則は通用しないよ。秘密結社だからね」

「あの……ありがとう」

「お礼はいらないよ。ただ、これ機会にお姉さんと仲良くなって」

「それは……難しい」

簪さんはそうとう強いコンプレックスを持っているようだ。後は俺の仕事では無く、あの子自身の問題だ。俺の役目はここまで。

「じゃあ、いずれかコアを借りに来るから待っててね」
「うん、ありがとう……イズール君」
「今はドッペルゲンガー、または凰鈴音。そこんとこよろしく」

俺はそう言うとベンチから立ち上がり、別の方向へと歩き始めた。
とりあえず気の向くままに。

――イズールside　end

――簪side

あの女の子はイズール君らしい。
それに私の新しいISを作ってくれるように頼んでくれた。
なんだか不思議だ。
あの時見せた彼女の笑顔がとても眩しく見えた。
姉さんとは違う……私を私として見てくれた。
イズール・ユ・ミヅル……。
私は彼女……いや、彼に少しの好意を持った。
でも、噂では彼は恋人がいるらしいから恋仲にはなれない。

「あっ、そうだ」
「？」

急にこちらへ戻ってくるイズール君。

――ギュッ！

「え！？」

いきなり抱きしめられた。

「これは俺流の挨拶。後、お前はお前だ、頑張れよ！」

「……うん……／／／」

「惚れてもいいけど、俺には恋人がいるからなー」

イズール君は少し笑うと走って行ってしまった。

……本当に惚れてしまいそう。

――簪side end

――イズールside

ここは校舎の屋上。

そろそろ昼食なので、鈴の姿をしたイズールはここで食事をとっていた。（メニューは鈴達の弁当の材料の残り）

「うん、カレー粉はやっぱり正解だったな。塩味もするからおにぎりでもイケる！」

俺は最近料理にハマっている。

「ん？　鈴か、さっきは廊下で――その髪型はどうした？」

話しかけてきたのは篠ノ之箒だ。

とりあえず口の中で咀嚼している物を飲み込む。

「ん？　イメチェン……かな？」

「いや、疑問系で聞かれてもだな……待て？　制服も肩を露出していない……熱でもあるのか？」

「いや、あんたの方が異常だよ。これだけあれば俺が凰鈴音じゃない事くらい気付くでしょ？」

俺はしかたないのでヒントを出してやった。

「鈴じゃない……？　まさかお前はドッペルゲンガーか！？　なぜここにいる！！」

「なぜって……見てわかんない？　昼食してるの」

箒の言葉で屋上にいる女子全員が反応する。当たり前だろう。今では俺も束博士並の要注意人物だからだ。

「この前はよくも……決闘だ！！」

この前？　ああ、一夏に変身した時か……てか真剣を出すなよ。

「さすがの箒ちゃんでも食事の邪魔はゆるさ――」

ふわぁ……。

少し涼しい風が吹いた。
俺の髪が綺麗になびく。
その瞬間、屋上の女子全員の視線が俺に注目する。
「ドッペル……お前、どんなシャンプーを使ったらそんな髪に……」
「え？　髪？」
周りを見ると全員が俺の髪を凝視している。
ふわぁ……。
また風が吹き、髪がなびく。
なんだか全員が見とれているようだ。
「あきらかに鈴本人よりも髪質がいいぞ……」
「ああ、ガルクライフ社製のシャンプーとリンスを使ったからかな」
その時ッ！！　屋上にいた女子が一斉に詰め寄ってきた。
「ねぇ！　そのシャンプーとリンス、どこで買えるの！？」
「お願い！！　そのシャンプーとリンスの在り処教えてください！！」
「ドッペルさん、はぁはぁ……」
「今度こそ倒してやるぞ、デビルサターン」
何だか二か所だけ台詞がおかしかったような……。

「一組連中は前にイズールが持ってきたカタログ見なかったのか？　あれの中にあったぞ？」

一応自分がイズールということは伏せて話した。

「みんな！！　今日はイズール君休みだから同じ部屋の織斑君にカタログの在り処聞きに行くわよ！！」

「「「おおー！！」」」

そして女子連中は走って行ってしまった。

「待てっ、私も欲しいぞ。そのシャンプーとリンス」

箒も集団を追いかけて行った。

「……」

誰もいなくなった屋上で、俺は髪をなびかせながら昼食の残りを食べた。

「一人で食うのには慣れているけど……風の音だけがＢＧＭというのは……さみしいな」

「――あら？　誰かと思いましたら……鈴さん？」

向こうからセシリアが歩いてきた。所々包帯で痛々しい。

俺は思わずセシリアを抱きしめた。

「鈴さん！？　い、いったいどうしましたの！？」

「――静かな場所で一人で食事するのが物凄く寂しいって事を悟ったんだよ！！」

俺は抱きしめる力を強くする。

「り、鈴さん……くっ……苦しいですわ！！」

「――あっ、ごめん」

俺はセシリアを解放した。

それにしてもなんだったんだ？　今の物凄い寂しさ……それにさっき俺は『一人で食うのは慣れてるけど』って言った。つまり、俺の自殺した製作者の……。

「どうしましたの？　髪型も変えて……凄い綺麗な髪……もしかしてイズールさんと別れましたの！？」

「いや、俺は鈴じゃないからね……ドッペルゲンガーだ」

「あ、あなた……ドッペルゲンガーでしたの！？　だから雰囲気が……ところで、どういうシャンプーを使ってますの？」

結局お前もそこかよ！！

「さっき女子の大群とすれ違っただろ？　説明するの面倒だからそいつらに聞いて」

「――まさか、あの人達はみんなその髪の秘密ねらいで！？」

「まぁね」

「こうしてはいられませんわ！　早速わたくしも――」

「あっ、今、鈴は何してるか分かる？」

「鈴さんですか？　先ほど二組でお弁当をおいしそうに食べていましたが……」

「そっか……わかった、ありがとうなセシリアちゃん」

「どういたしましてですわ。ではわたくしはこれで――」

せっかく教えてくれたので俺はお礼を渡す事にした。

「セシリアちゃん。コレあげるよ」

「――これは？」

俺は例のシャンプーとリンスの小型版を渡す。（お泊り用）

「これが秘密のヤツ。お泊り用だから量は少ないよ。ちょっとしたお礼ね」

「え、これがそうですの？　ありがたくいただきますわ♪　ちょっとだけあなたの好感度があがりましたわ♪」

「ああ、ありがとう。じゃあな、また会おう」

「ええ、いずれか」

セシリアは屋上を去って行った。

それにしても、お弁当、おいしそうに食べてくれていたか……。

俺はちょっと嬉しくなった。

たしか……今日の授業にＩＳの実習があったはず……鈴は見学かな？　ちょっと会いに行くか。

「……うん、今会いにいきます」

シュバッ！！

俺は屋上から飛び降り、ランダスの能力で空中サーフィン移動する。

足には一応ＩＳを展開させ、人外であることを知られないようにする。

「ｆｏｏ！！」

俺はそのまま訓練場へと向かった。

――数十分後。
――訓練場にて。
――山田真耶ｓｉｄｅ

今日も一組と二組の合同実習です。
ここに来るとあのときの事を思い出します。

ドカーン！
グシャッ！！
ビチャッ！！

わたしの不注意のせいでイズール君が血まみれになって一度死んでしまった事。
そのせいでイズール君のフェイゾン細胞が活性化して、復活したはいいけど、フェイゾンの汚染が進行してしまった事……。

「わたしは……なんてことを……」

あの時の事を思い出すと泣いてしまいそうです。
今日はフェイゾン関係の治療でお休みだそうですし……。もしかしたらわたしのせいで……。

「――山田君、どうした？　暗い顔をして。またあの時の事を引きずっているのか？」

「織斑先生……」

織斑先生がわたしを心配してくれる。

「あいつも言っていたが、大き過ぎる謝罪は逆に相手を馬鹿にしているように見えるから心配するなということだ」

「ですが……」

あのときのことは謝罪しても謝罪しきれません。やっぱりもうこの身を捧げるしか謝罪する方法が……。

コツンッ！！

「？」

わたしに何かぶつかりました。

これは……？

「織斑先生……これが降ってきました」

「これは……氷だな。なぜ？」

二人同時に空を見ると、何かが飛んでいました。

「ねぇ、あれ……人じゃない？」

「ほんとだ！　しかも空中をサーフィンしてる！」

生徒の何人かがそう言いました。

「「サーフィン？」」

わたしと織斑先生は思わずそう言いました。
サーフィン？　海でする……ですよね？

「――イヤッフゥゥゥゥゥ！！」

どうやらこちらに近づいてきます。
足にＩＳを展開した女子生徒が氷を操ってサーフィンしているようです。

「あ、あの、だめですよー。勝手にＩＳを展開しちゃあ」

一応先生なので注意します。すると、その女子生徒は足のＩＳを解除して、綺麗な空中三回転二回転半ひねりのサマーソルトを決めて着地しました。

「……決まった」

彼女は髪を風になびかせながらこちらを向きます。
そういえばなんでＩＳスーツではなく制服なのでしょうか。
そして彼女の顔をよく見たら……。

「えっと……鈴さん？」
「いえ、ドッペルと呼んでください♪」

どうやら鈴さんの姿をしたドッペルゲンガーのようです。

「――ッ！？　生徒のみなさんは下がっていてください！！」

わたしは生徒のみんなを下がらせ、ＩＳを展開し、攻撃体勢に入ります。

「山田先生、やっぱり怖いですか……俺が」
「……生徒には手を出さないでください！！」
正直に言えば物凄く怖いです。
相手は何にでも変身出来る怪人。わたしはただの先生。
「あ、今日はちょっと鈴ちゃんの姿以外変身出来ないので、よろしくお願いします」
「へ？」
どういうことでしょう。なぜ変身しないのでしょうか？　なにか理由が……。
「昨日、生徒会長のドロップキックで元に戻らなくなりまして……うぅ……ぐすっ……そう……もどれないんでず……」
いきなり泣き出すドッペルゲンガーさん。
「ちょっとイズ――いや、ドッペル……あたしの姿で泣かないでよ」
本物の鈴さんが慌てます。そういえば、ドッペルゲンガーさんの元の姿はどんなのでしょうか？
「山田先生……今日は見学していいですか？」
「見学……ですか？」
「はい、よければ俺も指導を手伝います」
はぁ、どうやら敵意はないようです。でもなぜ見学を？　ドッペ

ルゲンガーの考えることはわかりません。

「山田君、ソイツを参加させてやろう」

「いいのですか？」

「ヤツは前にも見た通り、優秀なＩＳ搭乗者だ。馬鹿共もヤツに興味深々のようだしな」

「はぁ……」

織斑先生は受け入れるみたいですね。もしかしてあの二人は面識があるのでしょうか？

「良く聞け！　今日はガルクライフ社のドッペルゲンガーが指導を行うことになった。訳あって鈴の姿で固定のようだが、こいつも優秀なＩＳ操縦者だ。ヤツから操縦技術を教えてもらえ。以上！　班にわかれろ！」

こうしてドッペルゲンガーも含めた不思議な授業がはじまりました。

――続く。

第十話　鈴は鈴の裸を見て赤面し、鈴は慌てる。そんな鈴と鈴の話。（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

第十一話　激突！　ドッペルゲンガーＶＳ一夏＆シャルル＆山田先生。（前書き

今回は連続投稿でいきます。
今回は模擬戦がだいたいです。

第十一話　激突！　ドッペルゲンガーＶＳ一夏＆シャルル＆山田先生。

――前回までのドッペルゲンガーは。
生徒会長のドロップキックにより――
『スキャニングチャージ！！』
「セイヤァァァァ！！」
「ちょ、それは――」
――鈴の姿から戻れなくなったイズール。
「鈴……あたし……傷物にされた……」
「何言ってるのよ！？」
シャンプー。
「鈴、ティナさん。これどう？」
「「うん、世界が嫉妬する髪！」」
女らしさに二人が泣いた。
「お弁当出来たよ？」
「「……」」
そして訓練所にて。
「お前も参加しろ」

「……はい」

ドッペルゲンガー続きます。

今回の出演。

イズール・ユ・ミヅル
凰鈴音

更識盾無
ティナ・ハミルトン
織斑千冬

※このあらすじには嘘が含まれております。

――イズールｓｅｉｄｅ

「そう、そんなリズムで」
「こ、こう？」

授業に参加した俺は、モブ生徒のＩＳ操作をレクチャーしていた。
もちろんイナゴ兵。

「ドッペルさんって何者なの？」

モブ生徒が聞いてきた。

「うーん、新ジャンルの正義のヒーローってとこかな？」
「ふーん」
俺はそんな適当な返事を聞きながら、講師として役目を果たしていた。
すると……。
「全員注目！！　今から専用機の模擬戦をやってもらう！」
模擬戦？　一体だれと？
「ドッペルゲンガー、お前が一夏とシャルルと山田君と戦うんだ」
「一対三！？」
「これでもハンデが足りないくらいだ。さっさと準備しろ」
「……はい」
そういやブルー・ティアーズと甲龍はまだ修理中なんだっけ？
しかたないか……。
俺は指定の場所へ立った。
「おいで、ＧＡ－ＰＥＤ！」
俺の体にＧＡ－ＰＥＤが装着される。
「一夏ちゃん、山田先生、シャルル、いきますよ！」
「行くよ一夏！」
「行くぞシャルル！」
「あの、お願いします」

空想生命体
【イズール・ユ・ミヅル（変身体）】
ＶＳ
主人公
【織斑一夏】
&
フランス代表候補生
【シャルル・デュノア】
&
ＩＳ学園教師
【山田真耶】

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――箒ｓｉｄｅ

どうやら試合は始まったようだ。
ドッペルゲンガー。ヤツはあの機体を使うのか。
む？　一夏が先行のようだな。
「おりゃぁぁぁぁぁ！」

「甘い！」

ドッペルゲンガー、前とは違って口調は真面目だ。もしや少し本気を出すのか？

「アイスビーム！」

何か白い弾丸が飛び出したが、どうやら弾速が遅いようだ。

「やっぱり機動型じゃあ相性が悪い。ならば」

ドッペルゲンガーのアームキャノンが変形し、灰色の光を帯びる。あれは……前にセシリアを一瞬で倒したヤツか！？

「アナイアレイタービーム！」

ドッペルゲンガーは適当な方向へ撃つ。

「なんだ？　そんなんじゃあたらねぇぞ？」

一夏！！　その弾丸がお前を追いかけているぞ！

ドガガガガガガ！！

「なッ！！　なんで全部命中するんだよ！」

一夏は回避するが、あの弾丸の旋回能力と弾速が異常だ。今のでシールドエネルギーが半分持っていかれたようだ。

「織斑君、離れてください！！」

山田先生がライフルで遠距離砲撃。

ダンッ！！　ダダンッ！！

「ちっ、命中精度が高い――」

「僕も忘れないでよ！」

シャルルが中距離射撃で射撃……近・中・遠距離全て対応してあるのならさすがのドッペルゲンガーも無理だろう。

「ねぇ、箒さん」

急に鈴が近づいてきて私に話しかけてきた。

「ん？　鈴か、どうした？」

「あのドッペル……全然本気出してない」

何だと？　あれでまだ余裕だというのか？

「なぜそう思う？」

「簡単。使ってない武装が多すぎ」

「？　お前はあの機体の武装がなんなのか知っているのか？」

「……一応」

どうやら嘘はついていないようだ。ならば……いったいなぜ。

――箒ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――セシリアｓｉｄｅ

ドッペルゲンガーさんはまだ本気を出してはいないようですわ。

「ふん！」

「当たれ！」

「……」

一夏さん、シャルルさん、山田先生の攻撃を避けながら機会をうかがっているみたいですわね。あの機体にはわたくしを一瞬で倒したあの武装が……。

そういえば、鈴さんの姿だから気付きませんでしたけど、口調が真剣ですわね。もしかして少し本気を？

「一夏！　行くよ！」

「おう！」

一夏さんとシャルルさんがドッペルゲンガーへ近づきます。

「――この時を待っていた！！」

「「！？」」

どういうことでしょう……。まさか、二人が山田先生から離れるのを待ってたんですの！？

――セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――千冬ｓｉｄｅ

あの馬鹿共がまんまとヤツの策にハマったな。最初から『三人で完璧の陣形』を崩すのが目的だ。山田君も慌て始めた。また、自分の不注意のせいで生徒がけがをすると思っているのだろうか。アイツは他人にけがをさせるようなヤツではないというのに。

――ピキピキ、バキンッ！！

あいつは氷の柱を作って二人を拘束する。

「な！？」

「え！？」

その二人にヤツが近づく。

「悪いけど、今回はギャグ無しね」

ヤツはシャルルにアームキャノンを押し付けた。

チュドンッ！！

「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！」

黄色い爆発が起き、シャルルは戦闘不能になった。

次に一夏にアームキャノンを向けるが――

「待ってください」

「……」

山田君が止めに入った。

――千冬ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

「山田先生、ちょっとお説教です」

「え？」

「あなた……戦闘始まる前や戦闘中に作戦の確認しなかったでしょ？」

「あ……」

「イズール君のことがまだ心配なのでしょうけど、あなたが作戦の確認を忘れるほど悩んでどうするんですか」

山田先生は生徒とコミュニケーションを取るのを忘れた。俺を心配してくれるのは嬉しいけど、先生としては問題だ。こういうときは……。

「少し……頭冷そっか」

「！？」

「おい！　ドッペル、やめろ！！」

うるさいな……やっと寝不足でギャグが書けなかったのが動き始めたとこなのに……あれ？　今の俺の台詞か？

「そこで見ていなさい一夏ちゃん」

「わたしは！！　もう、わたしのせいで誰かが傷つくのは――」

「ウェイブバスター」

紫の電流が山田先生を襲う。（一度当たれば電流を流し続けられます。ロックオンも不要になります）

ビリリリリリリリッ！！

「きゃぁぁぁ

――授業終了後。

「大丈夫ですよ、山田先生。あなたも失敗してもいいんですよ。やり直しがまだ効きますから。それに先生が学校で何かを学んではいけないという訳ではありませんし」

「……はい」

俺は山田先生にマウンテンデューを渡して一緒に飲む。

「落ち着きました？」

「はい」

山田先生は何か吹っ切れた表情になる。

俺は山田先生が成長したのを信じて立ち上がり、歩き出そうとする。

「――あの！」

「？」

呼び止められた。

ガバッ！！

なぜか……ハグされた。

「約束ですよ」

「約束？」
「わたしが『またハグしてください』と前に言いました」
もしかして……。
「ドッペルさん……いえ、イズール君。今回は色々教えてくれてありがとうございました」
な、なぜ気付いた！？
「どうして気付いたのかという顔になってますね？」
「ええ……まあ」
なぜだなぜだ？　全然分からん。
「ドッペルゲームの時、あなたはそのジュースの缶を大事そうに持っていましたから。そしていつもイズール君はソレを飲んでいました」
「え！？」
まてよ……？
――回想。（ドッペルゲーム時）
俺は今追われている。誰にって？　ここの女子全員にだよ。
「者ども出会え出会え！　今は千冬様に変身しているわ！　追え

！！」

よく言うよ。この企画は捕まえた奴が一番の得をする企画。つまり集団行動を装っているけど、腹の中は真っ黒で全員が一番を狙ってる。

俺は走りながらマウンテンデューで喉を潤し、走り出した。

→

この部分か！！

たしかにあの時飲んだ後に缶は捨ててなかった……。

まさかフラグだったとは……。

「イズール君、何か困ったらわたしを頼ってください。わたしは先生ですから」

「――その言葉、そのまま返しますよ♪」

俺は山田先生に笑顔のサムズアップで答えると、訓練所を後にした。

――放課後。

――ゼオルの屋台にて。

そこには俺とゼオルさんと料理を学びに来たセシリアとなぜか箒がいた。

「なんだドッペル。私がいるのが不満か？」
「いや、そうじゃないけど……なんでここにいるの？」
「明日の学年別トーナメントについて考えていたらここを見つけてな、料理をご馳走になってる。なぜセシリアがいるのか――」
箒がなにか言おうとした時。
「――だから！　色や見た目気にする前にお前は味を何とかしろ！！　それは教えてやるから！！」
「わ、わかってますわ！」
ゼオルさんはセシリアに料理をレクチャーしていた。
「そうか、修行か」
「箒ちゃんは……なんでそう武士的な言い方するわけ？」
「よ、よいではないか。――なあ、ドッペルゲンガー」
「ん？」
「その……一夏の姿になってくれないか？　こ、告白の……練習をしたい」
告白の練習ってあんたは……。
「悪いけど今は鈴以外の姿にはなれない。調子の良い日に誘ってくれ」
「そうか……」
すごい残念そうな箒ちゃん。
「あ、ドッペル。お前はこれを飲め」

「？」

ゼオルさんが青いお茶のようなものを出した。

「例の設定構成薬だ」

「――サンクス！！」

――ゴキュリッ！！

早速飲んでみた。

なんだか小さいころ飲んだ風邪薬のシロップのような味がする。

「ドッペル？」

「ドッペルさん？」

箒とセシリアが心配する。

――ドクンッ！！

「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！　キタァァァァァァァァァァ！！」

バシュゥゥゥゥゥゥン！！

「俺の名は！！　ドッペルゲンガーだぁ！！」

俺は一夏の姿に変身した。

やっと変身可能の状態に戻った……良かった……。

「セシリアちゃん、箒ちゃん。悪いけど帰るわ！　今日は復活祭

だヒャッホォォォォイイ！！」

俺は急いで自分の部屋へ向かった。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――箒ｓｉｄｅ

ドッペルゲンガーは一夏の姿になった途端、走って行ってしまった。

というかアレは変装マスクではなかったのか……。

今のお茶はなんだったのだ？

「おじさん、あの青いお茶はいったい……」

「あれはアイツがスランプから脱出するためのお薬さ」

そうか……あのドッペルにもスランプがあるのか――ちょっとまて？

「おじさんはドッペルの知り合いなのですか！？」

「……まぁね」

ということは……この屋台のおじさんはガルクライフ社？

「ちなみに、俺についての質問は――」

「ああ！！　これはどうしましょう……」

「――馬鹿野郎！！　たこ焼きのタコに踊らされてどうする！！」

セシリアの対処の方が忙しいようだ。

私はおじさんの作ったたこ焼きを食べながら明日について構想することを続行した。たこ焼きは……うまかった。

「――ちょ、生地に余分な卵を入れるな！！　ただの卵焼きになるだろうが！！」

「ですが黄色が……」

「だから色の前に味をどうにかしろと言っているだろうが！！」

セシリア……私もここで料理を習った方が良いのだろうか？

――箒ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

鈴に色々事情を説明し、元の姿で部屋へ帰ってきた俺。

鈴がちょっと残念そうな顔をしていたけど……まぁ、たまに遊びに行きますか。

「ただいまー、一夏、シャルロット。何か変わったことは――」

「エレンがかわいそうだよぉぉぉぉ」

「シャル、落ち着け！！」

何があったの？

「あ、イズールおかえり！　実はお前がいない間お前の私物のＤＶＤを見てたんだが……」

「ＤＶＤ？　アニメや特撮しかないから別に問題ないけど？」

「それが……シャルがこれを見たら泣き出して……」

一夏が渡したのは『ルパン三世　ワルサーＰ３８』である。

たしか……ヒロインのエレンが……。（ネタバレになるので省略）

「ひっぐ……ふぇ……エレンが……かわいそうで……かわいそう……でぇ……」

「ああ、胸貸してやるから泣いて良いぞ」

「ふ……ふぇぇぇぇん！！」

そういやシャルロットとエレンって……境遇がちょっと似ている？　いや、気のせいか。

ここで俺はある疑問に気付いた。

「俺のいない間他に何を観た？」

「え？　他に――見たのはそれとウルトラマンくらいかな？　ウルトラマンが随分長かった気がする。それにしてもどこで手に入れた？　明らかにこっちで放送してない物だぞ？」

「ああ、ガルクライフ社の仕業だ」

「なるほど」

もしかして一夏は深く考えない方？

そういや転生者ということは鈴しかしらないよな……。自分達や俺が空想の人物ってのはヒロイン軍団は理解している。二巻の結末をちゃんと読んでいるのはシャルロットだけ。

ラウラは知らない。こんなところか？

「エレンが……」

「ああ、ホレ、ハンカチとティッシュ貸すから！」

俺は泣き続けるシャルロットを慰めながら、残りの日を過ごした。

それにしても……なーんか忘れているような……なんだろう、凄い不安だ。

――イズールside end

――ガルクライフ社side

「諸君！　イズール君から頼まれたアレは？」

「現在４５％まで完成しています」

ガルクライフ社のとある部屋で何かの開発が進んでいた。

「そうか……。束博士の方はどうだ？」

「それが……どうやら人工衛星をハッキングして私たちの基地を発見したようです。その証拠に国際ＩＳ委員会がここの周辺海域を徘徊しています」

そう、ここは海の中である。

「もうすぐで三巻って時に……」
「恐らくドイツ軍が中心となって攻めてくるでしょう」
「その時は……戦うしかないか。近日にドイツは襲撃事件の映像を公開するだろう」
ゼオルは静かに語り続けるのであった。
――続く。

第十一話　激突！　ドッペルゲンガーＶＳ一夏＆シャルル＆山田先生。（後書き

もうストックが……。
感想お待ちしております。

第十二話　ラウラとＶＴと偉大なる千冬サンダー（前書き）

連続投稿でついにストック切れです。
ここからは制作期間に入ります。

第十二話　ラウラとＶＴと偉大なる千冬サンダー

ついにあの事件が起こる。
そう、ＶＴシステムなどを含めたラウラのイベントだ。

「しかし、すごいなこりゃ……」

更衣室のモニターには各国政府関係者、研究所員、エージェントなどの顔ぶれが並んでいる。

「三年生にはスカウト、二年生には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今の所関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

――数時間後。
――イズールｓｉｄｅ

どうやら一夏とシャルロットの試合が始まったようだ。
でもなんだろう……ＶＴシステムの話は知っていて、シャルロットもそれを知っている。なのになぜこんなにも不安になる？

「！？」

箒はラウラのワイヤーブレードで投げ飛ばされる。

「邪魔だ」
「な、何をする！」
実際の戦場だったら二人は死んでるな。まあ、ここは戦場じゃないからいいけど。
ズガガガガガ！！
あ、シャルロットの攻撃で箒がやられたか。
そして一夏とシャルロットのコンビプレイが炸裂する。
ラウラはＡＩＣを展開させるが、シャルロットの攻撃によって退避。
そして――
「――これならＡＩＣは使えまい！」
「こ、この……死に損ないがぁっ！」
「でも、間合いに入ることは出来た」
「それがどうした！　第二世代型の攻撃力では、このシュヴァルツェア・レーゲンを墜とすことなど――」
そしてシャルロットがパイルバンカーを起動させる。
ズガンッ！！！
「ぐぅぅっ……！」
勝負あったな、それにしても……シャルロットが二巻を読んだとしても……原作と違いすぎる。特にラウラの戦闘が……なんだかお

かしい。

――ラウラｓｉｄｅ

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……！）
確かに相手の力量を見誤った。それは間違えようのないミスだ。しかし、それでも――
（私は負けられない！　負けるわけにはいかない……！）

『そんなに力が欲しいのか？』

なぜか教官の声がした。

『まぁ、私を慕ってくれるのはうれしいが、あいにく私はお前に恋愛の感情を持っているわけではない』

教官の声が私に語りかけてくる。

『お前は……まあいい。もう一度言うぞ。そんなに力が欲しいか？』

言うまでもない。力があるなら、それを得られるのなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる！
だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を――ガルクライフ社にも、一夏にも負けない力を私によこせ！

『いいだろう。ただし、お前の大好きな教官が死ぬがな。まぁ、

代償としては十分』

――え？

Damege Level……D.
Mind Condition……Uplift.
Certifcation……Erorr.

『全行程中止。私が行こう』

――全能力解放。
――VTシステム掌握。
――ガルクライフ・アーミーズ製特殊装甲召喚。
――織斑千冬の姿をデフォルトにします。
――変更完了。起動します。

――ラウラside end

――イズールside

どうやらVTシステムが作動したようだ。
事情を知っているシャルロットが武器を構える。

「あああああああっ！！」

ラウラの絶叫。そしてシュヴァルツェア・レーゲンの変形が始まる。

『緊急事態発生！　来賓や生徒の皆さんは――』

――ブツンッ！！

ん？　通信が途絶えた？　それに、シールドや隔壁も作動していない！？

「――あああああ……ワレノナハァァァァァァ！！」

突然ラウラの声が変化し、ラウラがラフ画か絵コンテのような姿になる。

ピピピッ♪

ゼオルさんからの通信？

「こちらイズール、どうしました？」

『やられたよ。三巻に潜んでいた空想侵略兵器がこっちに尖兵を送ってきやがった！！』

なんだって！？　ということは……あれが！

グニャリとラウラの体が変形し、何もない空間から何かの装甲が現れる。

『――ヤツは下位だが間違いなく俺達が作った空想世界侵略兵器』

プッピガンッ！！
ガキョンッ！！
ギュルルルルル、ガキョンッ！！
変形したラウラに装着される装甲。
『恐らくヤツはラウラの設定を生きたまま書き換えている』
「救う方法はあるのか！？」
『ある、簡単な話、ヤツを普通に倒せばいい。今のラウラは無理矢理伸ばされた輪ゴムだ！　引っ張るヤツがいなくなれば元の形に戻る』
ジャキンッ！！
空想世界侵略兵器に浮かぶ禍々しきガルクライフ社ような赤いロゴ。
『一応説明しよう。あれは旧ガルクライフ社、ガルクライフ・アーミーズの空想世界侵略兵器、インフィニット・ストラトス方面担当その名も――』
グポーン！！
空想世界侵略兵器が人の形を作り、目が光る。
そしてラフ画状態から戻る。
『――ガルクライフ・アーミーズの空想世界侵略兵器！！』

『グレートチフユサンダー！！』
『グレートチフユサンダーだ！』

デカい千冬先生だー！！

空想世界侵略兵器
【グレートチフユサンダー】
思わず『千冬さんだー！！』と叫んでしまうような12メートルの偉大なる千冬さん。
それ以外の説明は不要。

空想世界侵略兵器
【グレートチフユサンダー】

VS

主人公
【織斑一夏】
&
フランス代表候補生
【シャルル・デュノア】
&
一夏の幼馴染
【篠ノ之箒】
&

空想生命体
【イズール・ユ・ミヅル】

「なんで千冬先生の姿をしているんだよ！！」
『なぜって……強いからだろ』

そりゃそうだけどさぁ……。
もっといいデザインくらいあっただろうに。

「千冬姉！？」
「え……」
「なっ……」

一夏、シャルロット、箒の順番で驚く。
そりゃそうだよな……こんなデカい千冬先生が現れるんだもん。

『一夏！！　私はお前を愛している！　私の愛を……受けとれぇぇぇぇ！！』

おいー！！　なんか叫びだしたぞ！？
巨大なグレートチフユサンダーの拳が一夏を襲う。

「なっ！」
「一夏、あぶない！！」

――ギュン！！
チュドームッ！！

間一髪でシャルロットが一夏を救出する。
って！！　なんだよあの拳のスピード。１２メートルの巨体の出せるスピードじゃないぞ！？
『おのれ……私と一夏の愛の行事に横槍を入れるとは……この泥棒猫め！！』
グレートチフユサンダーは巨大な出席簿を投げる。
ギュオンッ！！
それを回避するシャルロット。
今……あの出席簿、時速３００キロくらい出てなかったか？
――ズドォォォォォォン！！
その巨大出席簿は観客席に半分以上突き刺さっていた。
これ……生身の人間簡単に死ぬぞ！！
「キャァァァァ！！」
「助けてぇぇ」
「お母さん！　お父さん！」
「爆風で誰か怪我した！　だれか手伝って！」
隔壁の閉まらない観客席はパニックになってる。
おいおい、ゼオルさん……これ完全に殺戮兵器じゃねぇか！！
『一夏を狙う蛆虫が！！　皆殺しにしてくれる！！』
まずいッ！！　グレートチフユサンダーが観客席……しかも来賓

を狙ってる。
そこへＩＳ学園の先生や三年生の精鋭達が……待てッ！！　殺されるぞ！！

「攻撃開始！！」

※ここからはスパロボの戦闘シーンを思い浮かべてください。

６００
「ＩＳ学園はやらせない！！」

ライフルを撃つモブ先生。
ズガガガガガ！！

３０のダメージ。
６０００→５９７０
『ふん！　この程度か』

――反撃。

『今度はこちらの番だな』

グレートチフユサンダーの回し蹴り。
高速の足が先生を襲う。

ベキャァァァン！！！
７００のダメージ。
６００→０
「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！」
チュドン！！

『さぁ、一夏。私と愛を語ろうでは――』
「させない！！」

――合体攻撃。
６００
「ここは長距離で行きましょう」
「「了解！」」
教師達の集団遠距離攻撃。
ズドドンッ！！
５９７０→５９００
『もういい、お前らは殺す！』

――反撃不能。

『距離が足りないだと！？』

どうやら教師のみなさんが時間を稼いでくれそうだ。

『イズール、ヤツを倒す為の兵器を転送可能にした。ギャグにはギャグで対抗しろ！！』

あれ……ギャグで済まない威力なんですけど。ＩＳを一撃ですよ？

『この武器を箒に持たせて最強合体兵器を使え！』

表示されたのは一本の刀。

『こいつはヤツの設定を弱くできる』

「まじ！？　で、『最強合体兵器』って……まさか」

『とりあえず一夏と合流しろ！！』

「了解」

俺は一夏達の元へ急いだ。

――そして。

俺は一夏と合流した。

「イズール！！　なんなのだあれは！？」

「なんで千冬姉の偽者が出てくるんだ！？」

箒と一夏は慌てる。

「あれはグレートチフユサンダー。旧ガルクライフ社の負の遺産だ」

「「グレートチフユサンダー？」」

まあ、それが普通の反応だわ。

「箒、お前はコレを持ってくれないか？」

俺は例の刀を箒に渡す。

「これは？」

「ヤツを倒す為の武器だ。――シャルロット！　一夏！　今から『最強合体兵器』のデータを送る！　やるぞ！！」

「え？　あれが使えるのか？」

「あれって……大丈夫なの？」

そんな言葉を無視して俺は二人にデータを送る。

「「「花火でも上げるか」」」

「？」

俺、一夏、シャルロットはそう言った。箒はなんの事だか分からない。

「イズール。アレで本当に倒せるのか？」
「後は箒の活躍次第だ！！」
「私の？」

さぁ、あのゲームで鍛えた俺達の力を見せてやる。
俺と一夏は大きな支柱を展開し、シャルロットはゴムバンド付きの椅子を展開する。

「箒はそこに立て！」
「こ、こうか？」

箒以外の俺達は箒の周りを囲む。

――スタンバイＯＫ
空中にアイコンが表示される。

「箒、合体アイコンを押すんだ！」
「こ、これか？」

――カチッ！

俺達四人は眩しい光に包まれる。そしてこれが今回の勝利の鍵。

「「「最強合体兵器　人間パチン虎」」」

※詳しくは検索しましょう。

「ちょ、ちょっと待て、なんだこれは！？」
「箒、今からお前を飛ばす！　その刀をヤツに突き刺すんだ！」
「飛ぶ！？　ちょっと待て――」
「シャルロット！　椅子を引っ張れ！」
「ＯＫ」

ギリリリと椅子を引っ張るシャルロット。
箒の顔がどんどん青くなってくる。

――戦闘開始。
――合体攻撃。

１４９９
「箒……逝って来い！」
「やめろぉぉぉぉぉぉ！！」
「シャルロット、ファイア！」

箒が金色の光を纏って飛んでいく。

「こうなればヤケだ！」
箒は刀を構えた。
チュドォォォォォォォン！！
綺麗な花火が起こる。

７０００ダメージ

５９７０→０
「馬鹿なぁぁぁぁぁぁ！！」
グレートチフユサンダー撃沈。

「今だ一夏、零落白夜を使え！」
「おう！」
俺はグラップリングボルテージで一夏へエネルギーを送る。
そして一夏はグレートチフユサンダーを切りつける。

ザシュンッ！！

切れ目の中からラウラが出てきた。
一夏はラウラを確保する。そして――

『が……ガハッ！　一夏……私は……お前を……』
「おうじょうせいやぁぁぁぁぁぁ！！」

切れ目にアームキャノンを押し当て、スーパーミサイルを発射した。

チュドンッ！！

グレートチフユサンダーは膝をついた。

『ふふ……私もまだ……愛が足りなかったようだな……』

グレートチフユサンダーは微笑む。そして何かを喋りだした。

『残念だが私の出番も……これまで……ダ。だが……一夏よ……お前は愛されているということを忘れるな』

「千冬姉……」

『ふっ、私は本物ではない……。お前はまだまだ試練があると思うが……私を倒した仲間ととも……に……戦え』

なんだか無茶苦茶なヤツだったけど、もしかしたらコイツ……本当に一夏の事を……。

『一瞬の……短い人生……ダ……ったガ……悔いは……ナイ』

あんたは武士道なのか？

『……お前たち……オボ……えておけ……お前達の敵は……巨大……ダ……』

ふわぁぁぁぁ……。

グレートチフユサンダーは黒い砂となって消えた。

グレートチフユサンダー……お前は強敵だった。お前の意思は忘れない。

俺達三人は黒い砂の飛んで行った空を見上げ続けた。

そういえばなんだか空で笑顔の箒がサムズアップしているような……。

――ゼオルの屋台にて。

「で、結局あのグレートチフユサンダーはどこで混入したんだ？」
「恐らく、ＶＴシステムを搭載した場所に潜伏していたのだろう」
「なるほど」
「あ、今日のメニューはラーメンね」

今ここには空想世界侵略兵器について知っている俺とゼオルさんとウォルツさんと鈴がいる。
ラウラは無事に一夏に惚れたようだ。
千冬先生は顔を真っ赤にして『あれは悪夢だ……』とか言っていた。

「ほい、これが三巻」
「お、ありがとうございます」
「あ、イズール。それ見せなさいよ」
「今回は鈴でもだめだ」
「ちぇ……」

鈴はつまんなそうな表情になる。

「さて、みんな。もうすぐ本番の三巻に突入だ」

いよいよか……転生してから随分と長かった気がする。

「イズール。今回の事も考慮して……恐らく三巻のボスに憑依している可能性がある」

三巻のボス……後で確認してみよう。

――?にて。

やっと二巻の大事件も終わり、部屋へ戻る途中。

「あっ、イズール君」

「山田先生？」

山田先生と合流した。

「イズール君、男子が大浴場を使えるようになりました。あの……わたしの姿で入浴しては駄目ですよ？」

「……はい」

――大浴場にて。

俺は服を脱ぎ、扉を開けようとする。

「ん？」

その時、イズールに電流走る。

「このカゴの中身……一夏とシャルロットの服……」

俺はパンツを水着に変身させ、一夏の姿に変身した。

バシュゥゥゥゥゥン！！

「そろそろあたしも……イこうかしら？」

さらに透明化し、風呂場へ侵入した。

――浴場にて。

「――と、と、ところで、だな。あの、いつまでもこの体制でいられると、正直色々とまずい事態が起こりうるんだが……」

ムフフ、やってるやってる。お前達の裸はこのドッペルゲンガー様が目に収めてやるぜ！

「あ、ああっ、うんっ！　そうだねっ！　ぼ、僕、先に体と髪と洗っちゃうね！」

さて、始めますか。

俺はお湯に拳を叩きつける。

バシャァァァン！！

「！？　シャル……今の……お前か？」

「僕じゃない……よ」

俺は濡れた床の上を歩く。

ピチャッ……ピチャッ……。

「お……おい……シャルだよ……な？」

「いや……だから……僕じゃあない……よ」

俺は懐から（海パンなのに）、『シャルロットちゃん☆お風呂ポスター』を床に置く。

「！？　一夏！！　なんかこの浴場に何かいる！！　って僕のポスター！？」

「どうした――」

「こっち見ないでー！！」

「は、はいっ！！」

フフフ、今までの鬱憤を晴らすには素晴らしい遊びだ。

俺は湯船に入る。

ザバァァ！！

「あ、……ああ……」

「おい、シャル……俺……考えたくないけど……」

二人の顔がどんどん青くなってくる。

極めつけは扉の一部を凍らせて、俺がこういえば良い……。

「――ウホッ、いい男」

「ぎゃぁぁぁぁぁぁ！！」

「うわぁぁぁぁぁぁ！！」

お互いに裸見たり見られたりしている二人は恐怖でそんな事も忘れて出口へ急ぐ。

「一夏！　扉が開かない！！」

「な、ななな、何だって！？」

いや、ちょっと凍っている部分を破壊すれば出られるのにね。パニックになると人は簡単なことが出来なくなる。

ピチャ……ピチャ……。

俺は透明だけどムーンウォークで接近する。

「「ひぃぃぃぃぃ！！」」

ついに裸で抱き合って怯える二人。

流石にかわいそうなので、扉の氷を解除して扉を開けてあげた。

ガララッ！！

「！？　一夏、逃げるよ！！」

「お、おお、おう！！」

ピシャンッ！！

俺は静かになった風呂を貸切で堪能した。

……一夏の姿で。

透明化は解除しました。

「は～、ビバノノ♪」

満喫、そして僕、満足。

「まんまん満足、一本満足、ハッ！！」

そんなこんなで夜は更けていく。
さて、三巻どうしましょう。

「極楽～♪」

――ガララッ！！

「あのー、湯加減どうですか……あら？」

なぜか山田先生が風呂場を覗いてきた。こんなの原作にあったか？
というか山田先生がなぜか水着だ。

「あれ？　山田先生？」
「そういう織斑君はさっきもの凄い勢いで……まさかイズール君？」
「ドッペルと呼んでください。ちなみに今水着ですから大丈夫ですよ」
「もう、さっきの織斑君とデュノア君の様子だと、イタズラしましたね？」
「ちょっとだけですけど♪」

チャプンッ！！

「山田先生。なぜ俺の入っている湯船に入るんですか。水着まで用意して」
「ちょっと……お話がありまして……あの、ちょっと恥ずかしいのでわたしの姿になってくれますか？」
「いいですよ？」
俺は目の前にいる水着姿の山田先生の姿へ変身する。
バシュゥゥゥゥゥゥン！！
「これでいいですか？」
「はい、大丈夫です」
「それにしてもなぜ一緒の風呂に入ろうと？」
「前のドッペルさんの言葉をヒントに、生徒とコミュニケーションを取ろうと思ったんです」
「相手が裸で男なのに？」
「――あ」
どうやらそこまでの思考は無かったようだ。
「あと、イズー……いえ、ドッペルさんにお話しがありまして」
「俺にですか？」
「ええ、実は……ガルクライフ社の場所が特定されて、国際ＩＳ委員会が交渉……いえ、攻撃しようとしています」
「なんですって！？」
現実世界に存在するガルクライフ社が特定された！？　いや、何か違うはずだ。
「実はガルクライフ社は巨大な潜水艦で、海の底を移動し続けて

います」

山田先生はホログラムを表示する。

そこには魚影として映った巨大な潜水艦のような影があった。

恐らく支社だ。

「しかも悪いことに、日本政府があなたを捕まえようとしているのです」

「……そうですか」

これは本格的な殲滅戦の予感がする。

そうなった場合は……。

――イズールの想像。

巨大な火の海。

イナゴ兵の大群。

前のグレートチフユサンダーのような巨大兵器の大群が国家を蹂躙する光景。

――想像終了。

確実に国家のほうが滅ぼされる。

うん、超安心だ。

「ガルクライフ社に喧嘩売ったらきっとその国滅びますよ」

「そうですか……それならこの話は以上です。わたしはもう少しお湯につかっていますが、どうします？」

「俺もお付き合いしますよ。なんなら子供っぽく１００まで数えましょう♪」

「あ、なんだか懐かしくていいですね」

俺と山田先生は静かな大浴場で数を数え続けた。

「「いーち、にーい、さーん、しーい、ごーお――」」

こういう子供っぽいのは……またやりたいな。

――おまけ

「お前ら……何一緒のベッドに入っているんだ？」

部屋に戻ってみると、一夏とシャルロットが一緒のベッドに入ってガタガタ震えていた。

「い、イズール。お前、大浴場平気だったか……？」

「い、イズール君、あ、あの大浴場にお、おお、お化けが！！」

「ウホッ、いい男？」

「「あぁぁぁ

第十二話　ラウラとＶＴと偉大なる千冬サンダー（後書き）

ＺＥＯＬＵ先生の次回作にご期待ください（嘘）

ご感想お待ちしております。

設定二（前書き）

今回は少しオリキャラ達の設定を公開します。

設定二

○イズール・ユ・ミヅル
この物語の主人公。
現在、凰鈴音の恋人。
山田先生の衝突の際死亡。
そのせいでフェイゾン細胞が活性化し、復活。そして完全なフェイゾンエネルギー生命体になってしまったが、本人含めてだれも知らない。
フェイゾンエネルギー生命体になったことにより、ほぼダークサムスと同じ能力を得た。
1、フェイゾン兵器でしかダメージを与えられない。
2、フェイゾンを使って自身の能力を大幅に上昇させられる。
3、意思を込めたフェイゾンを植え付け、汚染し、相手を洗脳する。
4、フェイゾンエネルギーを使ったまったく同じ戦闘能力の分身を2体まで生成可能。
それ以外は周囲のフェイゾンエネルギーを吸収して発動する能力なので無意味。
上記の能力はＩＳ装着の有無を問わずに発動できる。
マウンテンデューを愛飲する。

○ゼオル・ゲバイン
テンプレの神様を超えた存在。
秘密結社ガルクライフのボスで、元捨てられたキャラクター。
昔に自分の製作者へ反逆するために開発した空想世界侵略兵器を

使い、全空想世界を手に入れようとしたした張本人。
一度倒されたときにキャラクターとしての“設定”が砕け、７５％しかない。砕けた設定は実はいろんな世界に散らばっている。
語られていないが、ゼオルは魔力を持ち、魔法が使える。しかし、世界観に合わないので封印している。
怒らせるとその空想世界へ報復したがる危ない趣味を持つ。

○ウォルツ・ゲバイン
ゼオルの妹で、パティシエで、ガルクライフ社の戦闘幹部。
現在はＩＳ学園でデザート開発担当として潜入していて、生徒からの人気は高い。
ウォルツは三重人格者であり、優しいα、冷静なβ、男気があって戦闘マニアのγの３つの人格が存在する。
実は戦闘能力は高く、ドイツを単独で襲撃した張本人。

空想世界侵略兵器
【グレートチフユサンダー】
ゼオルが開発した空想世界侵略兵器。
１２メートルの千冬さん。
その巨体に似合わないスピードは、重力や慣性の法則を軽く無視する。
なぜか一夏を激愛しており、肉体言語で愛を表現する照れ屋さん。
実は量産型で、他には十体存在するらしい。
同系統の兵器に、タテナシロボやメカヤマダ、ゴ・ダンダーが存

在する。

設定二（後書き）

こんな感じです。
ご意見ご要望をお待ちしております。

設定三（前書き）

謎のエラーにより設定二が消滅しましたので、再録。
そのはずが、何故か復活。さらに修正。

設定三

○織斑一夏
本当の主人公。
ガルクライフ社との渦に巻き込まれ。現在は悩む日々。
箒との仲は普通で、設定暴走の兆しが見え隠れしている。
主人公との関係は比較的良好。

○篠ノ之箒
メインヒロイン（？）
原作ではちょっと出番の薄いメインヒロイン。
幼馴染というポジションにあるが関係は進行していない。
現在三巻に入らないと活躍が望めません。

○セシリア・オルコット
イギリス代表候補生。
ガルクライフ社商品の被害者その1。
最近ドッペルゲンガーから貰ったシャンプーにより、髪型がストレートに固定されつつある。
自分が小説の登場人物であることをいいことに、主人公の新しい巻を狙って、一夏との関係を進めようとしている。

○凰鈴音
中国代表候補生。
現在は主人公の恋人。
ガルクライフ社商品の被害者その2。
主人公の正体を全て知るこの作品のメインヒロイン。
原作やグッズだとハブられてしまうが、そうはいかない。
ちなみに主人公とは一緒にシャワーを浴びれるくらいの関係。

○シャルロット・デュノア
フランス代表候補生。
二巻を読んで予定よりも早くデレてしまった。
一夏を最も強く狙う行動力抜群の女の子。
最近は主人公が持っている特撮やアニメを見るのが日課。

○ラウラ・ボーデヴィッヒ
ドイツ代表候補生。
原作通りにデレてくれた黒ウサギ隊の隊長さん。
一番主人公の正体や真実からは遠い。
現在黒ウサギ隊はガルクライフ社襲撃事件で崩壊寸前の状態。それでもけなげに頑張る姿は愛らしく見える。ちょっとした世間知らずで周囲をかき回す。

○織斑千冬
一夏の姉で、おそらく原作最強。
実はすでにドッペルゲンガーの正体には気づいている。
最近は無駄に介入してくるガルクライフ社に頭を悩ませている。

○山田真耶
クラスの副担任。
主人公がドッペルゲンガーであることを知る数少ない人間。
ガルクライフ社商品の被害者というより実験台の扱いをされた。
最近は生徒と一緒に風呂に入ってコミュニケーションを取るのが日課。

設定三（後書き）

この人とあの人の絡みが欲しいなどの意見も募集しています。

第十三話　買い物と第二次ドッペルゲーム。（前書き）

なんだかまた超展開になってしまったような……。

第十三話　買い物と第二次ドッペルゲーム。

ついに二巻を突破し、決戦の三巻へ。
シャルロットはラウラと同室になり、ラウラの『お前を嫁にする』発言も終わり、一夏のファーストキスは奪われたのであった。

――そんなある日の朝。

「うぅ……フェイゾン吐きそう……」

ちょっとしたダルさから俺は目が覚めた。

ガチャリッ！！

「？」

扉が開く音がしたので見てみると、そこには裸のラウラがいた。

「あ」
「あ」

その瞬間ッ！！

画面右上にRボタンの表示が出たと思ったので、とりあえずCQCをする。

ガッ！！

ラウラは俺の腕をはらう。

「甘い！！」

ラウラは太もものホルダーにあったサバイバルナイフを取り出すが、俺はすぐに取り上げる。

「ラウラ、戦いの基本は――」

「――格闘だ！！」

腕から目に見えない速度の残像がお互いに発生する。

「オダダダダダダダダダダダダ！！」

「オラララララララララララ！！」

――数分後

「オラオラオラオラオラオラ！！」

「ムダムダムダムダムダムダ！！」

――さらに数分後。

ガバッ！！

俺達は抱き合い、お互いの戦いを称え合った。

「ラウラ、もう少し早く出会っていたらいいパートナーになれたかもしれない」

「お前も、私の部隊で教官をやらないか？」

「わりぃ、鈴を置いていけないんだ」

「そうか、お前にも嫁がいるんだな」

なんだかおかしな方向に進んできている。

「――お前ら……なにやってんだ？」

一夏よ、だからお前はヒトナツなのだ。

――もっと数分後。

俺はラウラの裸体を素描していた。

「おい……イズール？　何やってんだ？」

「一夏、黙ってて。絵が完成しなくなる」

「おい、ラウラの……裸だぞ？」

「俺は芸術的に美しいと思ったから描いているのだ。欲求程度でしか見れない一夏とは違う」

ラウラは少し顔を赤らめながらじっとしている。

「私は……美しい……のか？」
「ああ、一夏のファーストキスの相手としてはもったいないくらい」
「そうか……／／／」
ラウラはちょっと嬉しそうな顔をし、少し動く。
「ああ、ラウラ、動かないで」
「す、すまん」
「あっ、眼帯も外して」
「外すのか？」
「綺麗だから大丈夫でしょ？」
「綺麗……か」
俺は素描を続ける。
「俺のハイパーモードよりは綺麗だろ」
「ハイパーモード……あの青い光か、あの黒い眼球に青い瞳……」
コンコン。
「一夏？　寝ているのか？　もう起きないと間に合わないぞ」
箒が来たが、構わず続ける。
「入るぞ、一夏。早く起きて支度を――」
「げ」
俺は素描を続ける。

「む？」

びしり。箒の表情が、動きが、全身が固まる。

「お、お前達！！　ななっ、何をしているかこの軟弱ものっ！」

「――完成だぁ！！」

「！？」

俺の言葉を聞いて、一夏、ラウラ、箒の三人が絵を覗きこむ。そこには裸だけど美しさを感じるラウラ・ボーデヴィッヒの絵があった。

「うまいな……」

「これが……私……」

「綺麗だな……というかお前にはこんな才能が……」

一夏、ラウラ、箒が感想を漏らす。

結局、この絵のおかげなのか、一夏がラウラの裸を見て箒にゼロスタイルされるイベントはスルーされました。（絵はラウラにプレゼントしました）

――時間は飛んで日曜日。

俺と鈴は町へ買い物に来ていた。

「買い物だぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「叫ぶなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
俺達二人は腕を組む。
「デートだぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「だから叫ぶなぁぁぁぁぁぁ！！」
俺はポーズを決め――
「ハートキャッチ！！」
「プリキュア！！　――って、何言わせんのよ！！」
俺逃げる、鈴は追いかける。

――某ショッピングモールにて。
鈴の水着を買うためにここに来た。
ガルクライフ社のカタログや直接本社で買い物するという手もあったが、変態技術の詰まった水着を買う勇気は俺と鈴には無かった。
「で、どんな水着を買うの？」
「え？　あんたの持ってる三巻にあたしの水着姿は載ってないの？」
まさかそんなオーダーをされるとは……。
俺は三巻を確認し、その水着を指さす。

「アレ……だな」
「オッケー！　買ってくるから待ってて」
「おう」

鈴は更衣室へ行ったので、近くで待つことにした。

「――そこのあなた」
「あん？　ホイホイチャーハン？」
「男のあなたに言ってるのよ。そこの水着、片づけておいて」

俺は三巻の６０ページを確認……こいつか。

「あなたには両腕が使える。それにそういうことは店員さんにまかせればいいじゃないですか？」
「ふうん、そういうことを言うの。自分の立場がわかってないみたいね」

『いきなり暴力を振るわれた』などと言われれば、この社会では問答無用で有罪確定。
さて、どういたしましょうか……。

カツン、カツン！

いきなり俺の目の前に黒髪でサングラスのお姉さんが現れた。

「――そこの女性さん。俺の友達を勝手に召使いにされると非常に不愉快なんだけど？」

サングラスのお姉さんはいきなり俺を助けてくれた。

「あなたの男なの？　躾くらいしっかりしなさいよね」

迷惑な女性は面倒な発言をまたする。

そういえばこのサングラスの女性……ガルクライフ社のバッジ付けてる！？

「――あん？　あんた……挑発してるの？」

サングラスの女性はサングラスを外す。そして――

「――コロスヨ？」

ギンッ！！

ビキンッ！！

一瞬で店内は静まり返り、店のＢＧＭも止まる。そして迷惑な女性の後ろにあった鏡にヒビが入った。

「あ、ああ、あなた……なにも――ヒッ！！」

女性はサングラスの――いや、この人はウォルツさんだ。どうやらウォルツさんの身に着けているガルクライフ社のバッジを見てビビッっているようだ。

「ガ、ガガガ、ガルクライフ社！！　た、助け――」

その瞬間、迷惑な女性はピタリと動かなくなる。

「忍法、影縫い……てか？」

女性は全く動かない。

「さて、イズール。いつもウォルツα（アルファ）が世話になってるな♪」

『α』？　前にも思ったけど、ウォルツさんって……多重人格者なのか？

「多分想像はしていると思うけど、ウォルツという人間は三重人格だ。そして俺は三人目の人格、名前はγ（ガンマ）、よろしく！」

ガルクライフ社幹部
【ウォルツ・ゲバインγ】

「で、あの女性はなんで、バッジを見て怖がったんですか？」

「ああ、今日の朝からドイツ軍が俺達ガルクライフの襲撃事件の映像を公開したんだよ。おかげで有名にはなったけど、ＩＳのおかげで偉くなれた連中から怯えられるようになってな……。特に、今のアホみたいに」

なるほど、俺が知らない訳だ。というかあの女性、まだ動かない。

「さて、俺はαにおいしい夏ミカンの買い出しを頼まれてるから、じゃあまたな♪」

「はい、ありがとうございました」

ウォルツさんはそのまま店を出て行った。
店の雰囲気が元に戻り、女性は動く。

「あ、あの……」
「ヒッ！！　ごめんなさい、命だけは！　イノチだけはぁぁぁ！！」

女性は買った商品を忘れて店を飛び出して行った。
いったいあの女性にはウォルツさんがどのように見えたのだろう……。

「イズール……」
「イズール君……」

声がした方向を見ると、千冬先生と山田先生がいた。

「先生方も買い物ですか？」
「えっと……そうなのですが……今の場面はいったい……」
「イズール。あの人はたしか学園のデザート開発の担当ではなかったか？」

なんだか二人もウォルツさんを危険視しているようだ。

「はい、あの人の名前はウォルツ・ゲバインです」
「あの殺気……歴戦の軍人でもあそこまで出せるかどうか……」
「あのデザート担当さん……もしかして元軍人なのでしょうか」

軍人ではないと思いたいけど、今の場面じゃなんとも言えない。

「――イズール。買ったよ……あれ、先生達も買い物ですか？」

買い物を終えた鈴が先生達に気付く。
「は、はい私たちも水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」
千冬先生はスーツ姿で先生と呼ぶなと言う方が難しい。
「あ、俺は鈴と別の所へ行きます」
「そうか……事故には気をつけろよ」
「はい、更衣室にいる一夏やシャルロット、そこにいるラウラやセシリアのこともお願いします」
「お前は気付いていたか……わかった」
俺はそれぞれのいる場所を指さし、この店を後にした。

――町中。
現在、俺達は町を歩いていた。
「――シャルロットと一夏が一緒の更衣室って……どんな状況よ」
「まぁ、ラウラとセシリアの尾行が原因だろ」
「ふうん……」
俺達が歩いていると、髪の赤い重要キャラっぽいのが現れた。
あれ？　たしかこいつら――。

「――あれ？　弾じゃない！」
「お！　鈴じゃないか！」
「あ、お久しぶりです」

一夏の親友
【五反田弾】
&
弾の妹
【五反田蘭】

「久しぶりね！　元気だった？」
「元気だったぞ。――そっちの人は？」

弾が俺の方を向く。

「ああ、こいつは一夏と同じく『ＩＳを動かせる男』のイズール・ユ・ミヅル。ちなみにあたしの恋人」
「「え！！？」」
「えっと……よろしく」

ダン&ランは滅茶苦茶驚く。

「おい鈴！　お前は一夏の事が好きじゃなかったのか！？　それにイズールって……たしかＩＳ学園にいる唯一のガルクライフ社の手がかりだって有名だぞ！？」

「「えっ、そうなの？」」

俺と鈴は思わずそう言った。

「そうだぞ！　今ガルクライフ社は朝のドイツ軍襲撃映像で一番の危険組織になっちまった。それに――」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

「「「「？」」」」

何かが近づいてくる音がする。

「――！？　お兄！　空を見て！！」

「空？」

「「空？」」

全員で空を見上げる……そこには。

超ド級空想世界侵略兵器

【戦闘要塞　ジャイアントストラトス】

馬鹿みたいにデカい人型の何かが空を飛んでいた！！（推定３００メートル）

「な！？　なんだよアレ！！」

「お兄……私……夢でも見てるのかな？」
「鈴……まさかだと思うけど……」
「うん、たぶん旧ガルクライフ社の遺産だと思う」
巨大な物体は町の上をただ飛び、海の方へと飛んで行った。
「なぁ……鈴。前にグレートチフユサンダーの言ってた『お前達の敵は巨大だ』ってアレのことか？」
「考えたくないわ……」
俺は弾と蘭を見ると……。
「「……」」
放心状態になっていた。
あの光景を見た町の人全員もそうだった。
「鈴、さっきのラウラ達と合流しよう……」
「うん、弾、あたし達……もう行くわ」
「……ああ、わかった……」
「……はい、わかりました……」
俺達はダン&ランと別れてさっきの水着売り場へ戻ることにした。
――さっきの水着売り場。
「ん？　お前達戻ってきてどうした？」

「「……」」

千冬先生が何か言っているような気がするが、今の俺達はそれどころじゃない。

ラウラは何か連絡をしているようだ。『黒ウサギ隊』の連中か？

「ラウラ、俺が水着選んでやろうか？」

「お前がか？」

本音は、ガルクライフ社に水着を頼んだらどうなるかの実験である。

「こちらイズール、かくかくしかじかでどうぞ？」

『こちらゼオル、読者に伝わらないから要件をどうぞ？』

「簡単な話、ラウラ・ボーデヴィッヒの水着を用意して欲しい。黒ウサギよりも早く」

『了解したぜ、どうぞ？』

「了解！　通信は以上――」

「「オーバー」」

俺は通信を終え、ラウラに話す。

「水着は多分明日届くと思うから待っててくれ」

「そうか、すまないな」

実験台になってもらっているので俺がかしこまるべきです。

――時は過ぎてＩＳ学園の？にて。

『――本日未明に現れた謎の巨大飛行物体について、政府の見解は――』

「「……」」

さっそくテレビで今日の出来事が公開されていた。

俺と一夏は言葉を失っていた。

「なぁ、イズール。あれはこの前のような……ものなのか？」

「ああ、あれも旧ガルクライフ社の負の遺産だろ」

学園とＩＳ関係者の話題は、この巨大飛行物体の事でもちきりとなった。

しかも旧ガルクライフ社のロゴも確認され、もう政府や世界各国の軍事企業は、血まなこになってこの巨大飛行物体の技術を手に入れようとしている。

「一夏、ちょっと鈴のとこまで行ってくるわ」

「ああ、わかった」

俺は部屋を出る。三巻に潜んでいる――というか潜む気はまったくないようだが、敵はたしかに巨大だ。しかし……ついに世界各国がガルクライフ社へ攻撃……そろそろ本格的にまずくなってきたぞ……。

ピンポンパンポーン♪

ん？

『ただいまから第二次ドッペルゲームを開催します。みなさんがんばってください』

えー！！　聞いてないよ俺！！

――ドッペルゲーム開始。

――箒ｓｉｄｅ

とうとう始まったか。

一夏との結婚式の為に……捕まってもらうぞドッペルゲンガー！！

私は３０秒間マップに記された座標を頼りに周囲を捜索する。

「……」

既にここには数人の生徒が監視を始めていた。全員賞品が目当てなのだろう。

ちっ、次の表示まであと９分。このままでは逃げられるだけだ……。

「あれ？　篠ノ之さん？」

「ん？　鈴か？」

鈴がいた。

ん？　髪が無駄にサラサラしている。……ということは……。

「見つけたぞッ！　ドッペルゲンガー！！」
「ちょッ！　何を言って――」
私はドッペルゲンガーの腕を掴む！
「あたしはドッペルゲンガーじゃないって！！」
「黙れ！　普段の鈴がそんな髪質な筈が――」
グッ！！
私はドッペルゲンガーの腕を強く握った。
「ちょ、痛いって！！　髪はアイツから貰ったシャンプーとリンスで――」
「問答無用！」
「――まてい！！」
「「！？」」
そこには一夏がいた。
「地獄から来た男、スパイダーマン！！」
デッデデーン♪！！
「「一夏！？」」
そして一夏は私に近づいてこう言った。
「――箒、俺……そういう酷い事するヤツ……嫌いだ」

――え？　嫌い……？　一夏は何と言った……。

『嫌い』

『箒なんて嫌い』

『箒なんて大っ嫌い。顔も見たくない』

一……夏……。ブツンッ！！（箒の頭が真っ白になった）

――箒ｓｉｄｅ強制終了。

――イズールｓｉｄｅ

まさか……一夏の姿で『嫌い』なんて言うとこんな事になるなんて。

「――うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」

箒が……思いっきり泣き出してしまった。

「一夏……いや、ドッペル。今の台詞は強烈なボディブローだって」

「いや、まさかここまで強烈なダメージが入るなんて……」

「あんたも……女心わかってないわね。片思いの女の子が好きな人から嫌いなんて宣言されたら一日泣き続けるわよ」

「――あぁあああぁっぁあぁあああぁぁあああぁぁ！！」

箒はダムが決壊したかのようにボロボロと涙を流す。

「鈴、箒を頼む」

「え、あんたの責任――」

ピンポンパンポーン♪

『今から３０秒間場所を表示します』

「――これが罰ゲームとして解釈しておくわ」

「すまない」

俺は一夏の姿のまま、外へ走った。

――学園敷地内。

はぁ……まさか女の子を本気で泣かせてしまうなんて。

箒になんて謝ろう……。

バチンッ！！

バチンッ！！

バチンッ！！

俺を照らすスポットライト。

あれ？　これってデジャヴ？

『ドッペルゲンガー、お前は完全に包囲されている。おとなしく降伏せよ』

拡声器でお知らせする生徒軍団。
セシリアやラウラ、シャルロットまでいる。
明らかに前回より数が増えており、テレビカメラを構えた取材班までいる。
そして俺はお約束の通りに――。

「嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

だが、今回の俺は前とは違う。
すでにゼオルさんから秘密兵器を預かっているのだ。

「……ムフフ♪」

俺はポケットから透明なビー玉のようなものを６つ取り出した。

【サウンドスフィア】
これはガルクライフ社ではなく、ゼオルの友人である天才おもちゃ職人が作った発明品。
これを空中に浮かせ、音楽を流すことができる。
上記だけならただの音楽プレイヤーなのだが、これの凄いところは、これの流す音楽に少しでもノってしまった人間をノリノリのバックダンサーにしてしまうという究極の平和の兵器であるというところである。

俺はサウンドスフィアを全て空中に投げる。
サウンドスフィアは空中で停止し、準備が完了する。
「やっちゃるぜい！！」
俺は一夏の姿のままで、マラカスを装備する。

――数分後

「――ワォウ！！　オウチキチキイェイハッスル！！（歌詞は適当）」

学園全員がノリノリになり、俺のバックダンサーとして一緒に踊る。（動きに乱れ無し）
前方は俺と原作主要登場人物で構成されている。
ラウラまでも笑顔でノリノリである。
ＩＳ装着者も例外ではない。

俺と一緒に腰を振る全キャラクター。
にしても……すごいなこのアイテム。

「アジン・ディギヤザ・ディヤダザディザー♪（歌詞は適当）」

もはや完全に制圧された学園の人間は、俺がこっそりいなくなった後も３０分ほど踊り続けたそうだ……。

――その後。

「うぅ……グスッ！！　……ふぇ……」

目を真っ赤にした箒と遭遇した。

「……本物か……偽者か……あ…グスッ！！」

「ああ……悪かった……わざと捕まってやるから結婚式してこい」

「……うむ……ズズッ！！」

ピンポンパンポーン♪

『ゲームセット。賞品獲得者は篠ノ之箒さんに決定しました。なお、イベントは決定してから日時をおしらせします』

こうして俺の謝罪のような結果で、ドッペルゲームは幕を閉じた。

――続く。

第十三話　買い物と第二次ドッペルゲーム。（後書き）

Qこんな展開で大丈夫か？
Aそれは読者様が決めることだ。

だれに変身して欲しいなどのアイディアも募集しております。

第十四話　ガルクライフ、西へ。（キングジョーは出ません）（前書き）

書いている内にシリアスになってしまったような……。

第十四話　ガルクライフ、西へ。（キングジョーは出ません）

――前回までのドッペルゲンガーは。

三巻に突入。

「ついに最終決戦の舞台か……」

超展開で町に現れる巨大兵器。

「「デカッ！！」」

踊る学園生徒。

「――オウ、チキチキイェイ！」

『ウワッホイッ！！』

そして――

「ああ、ごめん。箒、お前が結婚式に行け」

「……ドッペル……」

――ドッペルゲンガーは続きます。

今回の出演者。

イズール・ユ・ミヅル

凰鈴音

篠ノ之箒

※このあらすじには嘘が含まれます。

――ＩＳ学園敷地外。
――とある海。
――その上を浮かぶ豪華客船にて。

俺はマイクを持ち、高らかに宣言する。

『それでは第一回ガルクライフ社主催！　疑似結婚式の開催を宣言します』
「「「イエーイイ！！」」」

一組のクラス全員が騒ぎ出す。

『司会はこの俺、一組のリビングデッドこと、イズールと――』
『――なぜか司会のバイトを引き受けた二組の鈴音がお送りします！！』

「降りろ、リア充！」
「砂糖吐くからやめろ！」
「おい、デュエルしろよ」

俺達に向かってヤジが飛ぶ。

『だまらっしゃい！　今回はお前らはゲームで負けたんだよ！

あの後３０分は踊ってたじゃないか！！　しかもその姿は全国ネットで放送されたぞ？』

「あああああ」
「思い出したくないー！！」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁ」

そう、前回のあの踊りはドッペルゲンガーをカメラに収めようとしたテレビ局によって全国ネットで放送されたのである。

『ま、とにかく――次は来賓の紹介だ！！　鈴、よろしく』
『はい、まずはこの人。新郎である一夏の姉、織斑千冬さんです！』

バチンッ！！

千冬先生にスポットライトによって照らされる。
そして千冬先生はマイクを構える。

『本来なら、明日は臨海学校なのだが……あまり無茶するなよ？』

少し怒っているようにも見えた。

『次に、一夏を狙う三人の代表候補生のみなさんどうぞ！』

「鈴さん！　あなたはなんで司会のポジションなんですの！？
それに、この縄をほどいてください！！」
「僕も何で拘束されてるの！？」
「一夏は私の嫁だぞ！　くそっ！　この縄はなんだ！　ナイフで切れないとはどういう縄だ！！」

特殊繊維を編みこんで作ったその縄は、一夏と箒の疑似結婚式を成功させるために必要なのさ。ごめんな。

『さて、次に我らの副担任、山田真耶先生です！　何か一言どうぞ』

『え！？　あ、あの……一夏さんと箒さんも……自分の体を大事にしてくださいね？』

なんだか山田先生はイケナイ事をご想像のようだ。

そして俺は鈴に代わって次の来賓紹介をする。

『続きまして、ガルクライフ社の来賓の紹介です』

少し場の雰囲気が緊張状態になる。

『えー、現在食堂のデザート開発を担当してくださってる、パティシエのウォルツ・ゲバインさんです』

俺の紹介で、コック姿のウォルツさんが出てくる。

「な！？」

「あの人……ガルクライフの人だったの！？」

何人かは知らないようだ。あれ？　前に疑似結婚の紹介をしたのはウォルツさんだからてっきりみんな知っているかと思っていたのに。

「あいつは……まさか！？」

ラウラがなんだか驚いているようだ。
「ラウラさん、どうしましたの？」
隣で縛られているセシリアが聞いてくる。
「――あいつはドイツ軍を単独で襲撃してきた女だ！！　あの時は顔がよく見えなかったが……あの雰囲気……間違いない」
「「！？」」
おいおい、俺も初耳だぞ！！　というかウォルツさんが単独で襲撃したのかよ！！
そうしている間にウォルツさんはあいさつに移る。
『本日のお菓子は私の技術をたくさん使いました。思う存分味わってください』
その言葉を合図に、ホールへ大量のお菓子と料理が運ばれてきた。
「第二スタッフはあのテーブルへ！」
「ラジャー！」
「あ、そのお菓子はあのテーブル！」
「イエッサー！」
「俺達の実力を見せつけろ！」
「「アイアイサー！」」
忙しくスタッフが動く。
ガルクライフ社って結構人がいるんだな。
『さて、続きまして、みなさんお待ちかね、我らがガルクライフ

社の社長であるゼオル・ゲバインさんの登場です』

カツン、コツンと靴の音を響かせながらステージの上まで歩いてくるゼオルさん。

いつもと違い、スーツ姿が決まっていた。

「あの人……屋台のおじ様ですわ！！」

「「屋台のおじ様？」」

そういや屋台で料理学んでいたな……セシリア。

「学園内で屋台をやっている――わたくしのお料理の先生ですわ」

「ええ！？　じゃあ、僕達の知らない間に学園にいたの！？」

「敵は随分近くに潜伏していたようだな……」

セシリア、シャルロット、ラウラはゼオルさんの存在に驚く。

『初めまして。私はガルクライフ社社長のゼオル・ゲバインだ。最近はＩＳ委員会の連中が私たちの事を攻撃しているようだが、今回のイベントはそんな政治の話は関係のない素晴らしいイベントにしようと思っている。みなさんは存分に楽しんでいって欲しい。私からの挨拶は以上だ』

ゼオルさんの挨拶が終わるタイミングを確認し、俺は主役を紹介する。

『さぁ、みんなお待ちかね！　優勝者、篠ノ之箒によって選ばれたパートナー！　みんなで叫ぼうその新郎の名は――』

バシュゥゥゥゥ！！

扉がドライアイスの煙に包まれ、ライトアップされる。

『織斑――』

「「「一夏ぁ！！」」」

扉が開き、一夏が入場する。

一夏のスーツ姿は無駄に似合っており、さっきまで騒いでいた代表候補生三人娘も黙って見とれている。

「一夏さん……」

「かっこいい……」

「流石……私の嫁だ……」

俺は一夏を指定の席へ座らせ、もう一人の主役を呼ぶ。

『そしてぇ！！　今回のドッペルゲームの優勝者！　新婦の登場だぁ！！　さぁ来い！――』

「「「箒さーん」」」

扉が開く。

そこにはウェディングドレス姿の箒が少し顔を赤らめていた。

パチパチパチ！

少し適当な拍手が起こるが気にしない。

『さ、こっちにおいで』

箒はゆっくり歩いて来て、一夏の隣の席へ座る。

「箒……その……綺麗だぞ……」
「そ、そうか……／／／」
一夏と箒は緊張した感じになっている。
こういうのは何だか見てると面白い♪

『さて、お二人さん』
「「？」」
『――キスするの？』
「「！？」」

二人は顔を真っ赤にする。

「わ、わわ、私は……」
『オッケー！　了解した。スッタフさん。準備よろしく』
「「「アイアイサー！！」」」
「――と、御坂は――」

俺の指令と共にすぐに動き始めるスタッフ達。
なんだかスタッフの中に『御坂妹』が混じってないか？
そう考えている内に準備が整った。
俺は神父の衣装に着替え、二人を誘導する。
俺は衣装に仕掛けたマイクを使い話す。

『ええ……汝ら、今回は疑似的とはいえ、その気があれば、愛を誓えるぞ。どうする？』
「あ……私は……したい……」
「え！　箒……お前……いいのか？」

「あ、……ああ……／／／」

決まりだな！

『では、誓いのキスを』

俺の言葉で一夏と箒はお互いの頬に手を添え、ゆっくりと顔を近づける。

ついに一夏×箒の誕生だ！！　ハッピーバースデイ！！

「一夏……」

「……箒……」

この場の全員がその光景を見守る。ライバルである三人娘も見惚れている。鈴もその様子を見守る。もう、この二人を邪魔する要素は――。

――バタンッ！！

突然扉が勢いよく開かれる。

そこにはＩＳを装備した知らない人が何人かいた。

「こちらは国際ＩＳ委員会の者だ！　ゼオル・ゲバイン、お前を拘束する」

国際ＩＳ委員会の連中かよ！　なんてタイミングで……。うわ、ゼオルさんの顔が引きつってる。

「なんだお前らは。この結婚式を邪魔しないで――」

「問答無用！！　取り押さえろ！！」

ＩＳ装備の連中がゼオルさんに向けて走る。
ダダンッ！！
しかも発砲してきやがった！？
ＩＳ学園生徒はその光景にパニックになる。
「キャァァァ！！」
「助けてぇ！！」
「みんな！　逃げるわよ！！」
一夏や箒もキスどころでは無くなってしまった。
「箒！　逃げるぞ」
「あ、一夏！！」
もう……メチャクチャだ……なんでこんなことに……。
「――お前ら……女の子の一生に一度あるかないかの大事な結婚式をこんなにしやがって……覚悟はできているんだろうな？」
――ッ！？　ゼオルさんが異常な雰囲気……いや、これは……殺気！！
「結婚式などよりも、お前を拘束する事が――」
ゴシャア！！
ＩＳ装着者の女性がゼオルさんの生身の殴りで吹き飛ぶ。
まずい！！　ＩＳ委員会が完全にゼオルさんへ喧嘩を売った！！

「いいだろう。今から殲滅戦だ！！」

ビーッ！！
ビーッ！！
ビーッ！！

船の警報が鳴り始める。

『ＩＳ学園のみなさんは避難してください。ガルクライフ社スタッフは侵入した敵勢力を全排除してください。なるべく非殺傷で捕獲してください。繰り返します――』

あわわわわわ！　もうダメだ……お終いだ。
俺と鈴は一夏と箒の後を追って、船を脱出する事にした。

ガルクライフ社ボス
【ゼオル・ゲバイン】

ＶＳ

侵入者
【国際ＩＳ委員会所属部隊（過激派）】

――船内Ａブロックにて。

「鈴、ついてこれるか？」
「ええ、大丈夫よ！」

なんとか脱出の為、一夏や箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラの原作メンバーと共に船内からの脱出を図る。
全員ドレスとかだから走りづらいな……。

「イズール、脱出ルートはわかるか？」

一夏が聞いてくる。

「ああ、今から全員のマップに転送する」
「「「「「了解！」」」」」

俺達は船の外を目指す。

「――イズール・ユ・ミヅル！！　お前を拘束する！」

ＩＳ操縦者がこちらに武器を向けてくる。
なに！！　俺も対象か！？

ズシャッ！！

いきなりＩＳが吹き飛ぶ。
そこにはゼオルさんがいた。

「イズール、お前は先に脱出しろ！」
「ゼオルさん！？」
「ＩＳ学園の関係者は連中に攻撃するなよ？　後々面倒になるか

らな。あと、他の生徒は既に千冬先生の誘導で避難は完了している」
「ありがとう、ゼオルさん」
俺達はゼオルさんに背を向け、走り出した。

――船内Ｂブロックにて。
「イズール君、ゼオルさんって何者なの！？」
「俺もよく知らん！！」
俺はシャルロットの質問に荒っぽく答える。
「そうですわ、あの屋台のおじ様があそこまで強いなんて……」
「ガルクライフ社の社長は超人なのか！？」
「ああもう、セシリアも箒も、とにかく足動かせ！！」
俺達の通路の先からＩＳ装着者が現れる。
「おとなしくしろ！！」
ちっ、しかたない！
俺はハイパーモードを発動し、本気で殴る。
「おりゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「生身でＩＳと戦おうなど――」

ズドォォォォォォォン！！

敵ＩＳは壁にめり込む。

「俺は少しここで時間を稼ぐ！！　連中は協定上ＩＳ学園の関係者には何も出来ないはずだ！！」

「イズール、お前はどうするんだ！！」

「一夏、お前らは近くにある出口から脱出しろ！！　ハイパーモードを使う！」

「お、おう！　絶対に負けるなよ！」

一夏達は俺の後ろの通路へ向かって走った。

だが、鈴だけは隣にいた。

「援護するわ！　嫌だなんて言わせないわよ？」

「――感謝する。ＩＳは展開するなよ？　ゼオルさんが言っていた言葉には必ず理由があるはずだ」

「ＩＳ無しか……やってみるわ！！」

俺達二人はファイティングポーズをする。

ＩＳ操縦者はこちらを狙ってくる。

「中国代表候補生！！　なぜ犯罪者の味方をする！？」

「犯罪者じゃない！　あたしの彼氏よ！」

「愚かな……いいだろう！　お前もここで処分する！」

何！？　あいつら、最初からガルクライフ社の拘束じゃなくて暗殺が目的か！！

俺はとっさに鈴を庇う。

ズドンッ！！

「アグゥ！！」

「イズール！！」

くそ……銃弾モロに食らった……。

「イズール！！　お願いッ！！　また死ぬなんて事はやめて！」

「……うぅ……あれ……」

体が普通に動く……？

ピピピッ！！

こんな時に通信？

「こちらイズール」

『こちらゼオル。こっちは全て拘束した。あと、反応があったが、どうやらお前は完全なフェイゾンエネルギー生命体になっているようだ。生身でも能力強化などが使えるだろう。こっちはすぐにそちらへ向かう。持ちこたえてくれ』

「あ、ああ、了解」

フェイゾンエネルギー生命体……つまりダークサムス化か！？

そう考えていると、ＩＳ装着者が集まってきた。

「馬鹿なッ！　銃弾を浴びて生きているだと！？」

「鈴！　しゃがめ！！」

「え？　うん！」
鈴はしゃがみ、そして俺はフェイゾンで強化した冷凍弾を放つ。
敵ＩＳは瞬間冷凍される。
バキバキッ……ピキンッ！
「――」
敵操縦者は意識を失ったようだ。
くそう……あんまりいい気分じゃないな。
「イズール……大丈夫？」
「ああ……なんとか……」
俺はハイパーモードを解除し、ゆっくり話す。
ピピピッ！！
『こちらゼオル。敵は殲滅完了した。ＩＳ委員会から連絡があったが、こいつらは過激派だそうだ。ＩＳ委員会の連中は関与していないとの回答だ』
「……」
「イズール……」
こうして、無茶苦茶となった疑似結婚式は幕を閉じたのであった。

――その後。

「今回はなんかスッキリしない事件だったな……。なぁ、鈴、ゼオルさん」

「何？」

「なんだ、イズール」

「俺……これから大丈夫なんだろうか？」

俺はこれから起こる臨海学校に対して不安を覚えたのであった。

「しばらくはこちらでなんとかするさ……」

「そうだよイズール。あんたにシリアスなんて似合わないよ♪」

今は……それでいい……。そう思ったが、俺は不安を感じ続けていたのであった。

――続く。

第十四話　ガルクライフ、西へ。（キングジョーは出ません）（後書き）

感想をお待ちしております。

第十五話　臨海学校危機一髪！！　（海編）（前書き）

最近暑さとダルさでなかなか書けません……。
今回から臨海学校編です。

第十五話　臨海学校危機一髪！！　（海編）

疑似結婚式が失敗に終わり、ちょっと憂鬱な気分になっていた俺は、臨海学校へ向かうバスの中から海を見つめていた。

「どうしたの？　イー君」

隣からのほほんさんが聞いてくる。

「ん？　ああ、昨日の事件で……ちょっとね」

「そっかー。イー君もあの事件はショッキングだよねー」

「うん……」

昨日ＩＳ委員会の過激派がガルクライフ社へ直接攻撃を行い、疑似結婚式は中止。しかもＩＳを投入してきたから余計にタチが悪い。しかも……あいつら、隣にいた鈴をなんの躊躇いも無く撃ちやがった。

あとは……俺がダークサムス化した事か……。ついに人外もここまでくると……不気味だな。

「イー君……大丈夫？」

のほほんさんが心配してくれる。

「……大丈夫。俺、ちょっと寝るから着いたら起こして？」

「うん、なんなら肩に頭乗せてもいいよ」

「ありがとう」

俺はのほほんさんの肩に頭を乗せ、少しの仮眠を取った。

――イズールが寝ているとき。

「あ、何イズール君とくっついてるの？　鈴さんに怒られるわよ？」

「大丈夫、りんりんもこういうのは了承してるんだよ。なんでも、イー君には人に抱きつく癖があるみたいなんだって」

「ええ！？　じゃあ……あたしもしてもらおうかな……／／／」

女子生徒のちょっと淡い会話が続いていた。

――数十分後。

「イー君、着いたよ」

「……ん……ふぁあ～……」

俺はのほほんさんの声で目を覚ました。

「俺……ヨダレ流してなかった？」

「大丈夫、ちょっと寝息立ててただけだから」

「そうか……肩……ありがとな」

「うん、どういたしまして」

俺達はバスを降りた。

「――それでは、ここが今日から三日間お世話になる『くろねこ荘』だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」

あれ？　『花月荘』じゃないの？

俺は山田先生に聞いてみた。

「山田先生、なんで花月荘じゃないんですか？」

「あら？　なんでそれを……。実は花月荘は今、いろんな企業や軍隊の関係者が宿泊して予約出来なかったんです。なんでも、ガルクライフ社の潜水艦がこの辺の海域を移動しているというので……」

なるほど、昨日の連中もこの近くを拠点にしてたわけか……。

「えー、この旅館の館長をしております、ゼオルです」

ガルクライフ社の旅館だったのかー！！？

「「「ええー！！」」」

クラス全員が驚く。

なんて手回しの早い……。

――その頃。

ここは花月荘。

ここでガルクライフ討伐作戦の為にここへやってきた『黒ウサギ隊』の副隊長、クラリッサ・ハルフォーフ大尉はとある物を発見していた。

「……」

『引っ張ってください』と書いてあるウサ耳。

とりあえず引っ張ってみた。

（以下省略）

「――あれー？　あなたはだあれ？」

「あなたは……束博士！？」

「ん？　そうだけど……箒ちゃん知らない？」

「箒？　たしか隊長のご学友……。たしか『くろねこ荘』という旅館へ変更になったと聞きましたが」

「ええー！？　なんで、どうして、この天才束ちゃんに気付かれずに変更になってる訳！？」

「いや……そう言われましても……」

「こうしちゃいられない！　すぐにいかなきゃ！　待っててね、箒ちゃ～ん！」

クラリッサを置いて走り出す束博士。

「……」

クラリッサはただ茫然とその姿を見つめるしかなかった。

――海にて。

「海だぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「叫ぶなぁぁぁぁぁぁ！！」

俺と鈴は叫ぶ。

「デートだぁぁぁぁぁ！！」

「だから叫ぶなぁぁぁ！！」

俺はポーズを決め――。

「二人は！！」

「プリキュア！！　ってなに言わせんのよ！！」

俺逃げる、鈴は追いかける。

「一夏、準備運動なんて感心するな」

「イズール？　何鈴を肩車してるんだ？」

「「最強合体ごっこ、でも二人足りない」」

俺と鈴は同時に答える。

「ねぇ、鈴さんが……」
「いいなぁ……私もあんな彼氏欲しいな」
「順番制なのかな？」
「一夏君もかっこいいけど、イズール君もかっこいいよねー」
「イズール君にもっと早く告白するんだった」

なんだか女子達が何か言っている。

「鈴、早速合体のメンバーが揃いそうだぞ！」
「よし、メンバーの加入よ！　ゴー、イズール！！」
「ガッテンしょうちのすけ！」

――そして。

「「「「最強合体兵器、人間パチン虎」」」」

鈴、射出！！

「なんであたしいいいいいい！！」

ドボンッ！！

海へ落ちた。

「た、助けて！！　足が――」

アイツ、準備運動しなかったのかよ！！
俺は海へ向かおうとしたその時！！
――ザバンッ！！
誰かが鈴を抱えて海から飛び出してきた。
「――おいおい、なんの為に三巻渡したと思ってるんだ？」
「「ゼオルさん！？」」
ゼオルさん登場。
水着姿がよく似合っていた。
「誰あのイケメン！？」
「かっこいい」
「あの人……ガルクライフ社の社長じゃない？」
そんな声を聴きながらゼオルさんは――。
「ライダーは助け合いでしょ」
そのネタを出したので俺はおもわず――。
「仰る通りだわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
ゼオルさんの方へ走った。
チャキンッ！！
『トリプル、スキャニングチャージ！！』

「せいやぁぁ！！」
「ああ！！　カツミちゃぁん！！」
チュドォォォォン！！
俺は爆散した。（？）

「一夏さん、さっそくサンオイルを塗ってください！」
「「「え？」」」
なんだか向こうでいろいろやってんな……。
俺と鈴はテーブル付きパラソルの場所で一緒にジュースを飲んでいた。（ひとつのグラスをストロー二本で）

「サンオイル……あたしにも……塗って／／／」
「やめとけ、ゼオルさんが謎のサンオイル（？）を持ってサンオイル必要なヤツを狙っているから」
俺の目線の先には、サンオイルらしき物を持って獲物を探しているゼオルさんの姿があった。
あっ、一夏とセシリアにロックオンした。
「セシリア……ご愁傷様」
「えっと……南無阿弥陀仏？」

【サンオイル（？）】
使い方は普通のサンオイルと変わらないが、ある程度塗られた人間はなぜか童心に帰って遊びたくなってしまう。（羞恥心が小学校低学年並になってしまうので注意）
遊び疲れると元に戻る。

「一夏君、これを使いなさい」
ああ、始まったよ。
さぁ、どんなことに……。

「じゃ、じゃあ、塗るぞ」
「ひゃっ！？　い、一夏さん、サンオイルは少し手で温めてから塗ってくださいな」
「そ、そうか、わるい。なにせこういうことをするのは初めてなんで……すまん」
「そ、そう。初めてなんですの。それでは、し、仕方が――アバババ！！」

突如、セシリアがビクンビクンと痙攣を始めた。どっからどう見ても悪い症状のようだが……。

「あｑｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：：」
「セシリア！　大丈夫か！？」

どんどんおかしくなっていくセシリア。
そして痙攣が止まり、セシリアは無言で立ち上がる。

「……」
「セシリア――って！　ビキニ外れたままだぞ！！」
胸は完全露出。一応俺はセシリアとは反対の方向を向いた。
「一夏さん、一緒にあそぼ♪」
「セ、セシリア？」
ガシッ！！
セシリアは一夏の腕に抱きつくと、そのまま走り出す。
「一緒におおきな砂のお城を作って、その後は一緒に泳ぎましょう♪」
「セシリア！！　水着付けろ！！」
ああ、一夏よ、お前はどうしてヒトナツなのだ？　それは簡単だ、お前がトラブル体質なのだから。
俺は一夏と思考が幼児化したセシリアの背中を見続けるのであった。
「――やはりわが社の商品は素晴らしいな」
「「ゼオルさん……」」
海で遊ぶ俺達、一夏とセシリアは砂の城を作り、ゼオルさんはライフセーバーのように見守っている。シャルロットや半分ミイラ状

態のラウラ……？

「そういやラウラはどんな水着になったの？」

「私か、しかたない見せるか」

シュルルと包帯らしき物をとる。

「これは……」

ガルクライフ社のロゴがついているが、原作通りの水着だった。

なんだかガルクライフ社のロゴが点滅してるけど……。

「あまり見るな……恥ずかしい……／／／」

「……なあ、ラウラ」

「なんだ？」

「胸のロゴ……なんだか点滅してるぞ？」

「ん？　これか？」

ラウラがロゴに触れた。

カッ！！

チャキーン！

なぜかラウラの頭にゴーグル、腰に虫取りカゴ、背中に虫取り網、右手にイルカ型の浮き輪、耳にウサギ型ヘッドホン、足にサンダル（これは普通）、左手にスイカとそれを割る棒、顔にシュノーケルが装備された。

「なんというか……夏休み装備だな」

「そうなのか？　夏休みという物があまりよくわからないが」

どうやら転送類の商品のようで、あまり害はなさそうだ。
「しかし……これは便利だ。身に着けている物なら何でも消したり出したりすることが可能らしい」
ラウラはロゴを何回も触って効果を調べていた。
「ねぇイー君、ビーチバレーしようよ」
「ん？　のほほんさんか。いいよ」
俺は突然ビーチバレーをすることになった。

――試合開始。
俺は鈴とシャルロットでペアを組んだ。（ラウラはまだ水着の能力テストをしていた）
「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われた私の実力を……見よ！」
櫛灘（くしなだ）さんのジャンピングサーブ！　うん、これはいいスピードだ。
「シャルロット！　アンダーハンド！」
「了解！」
シャルロットはボールを両手で弾く。

「鈴！　トスお願い！」
「わかったわ！」
そのボールを鈴がネット付近で上げる。
「あんたが七月のサマーデビルなら、俺は――」
俺はジャンプし、アタック！！
「――七月のタキシード仮面だ！！」
「「いや、意味わかんないし」」
シャルロットと鈴が同時にツッコむ。

――数十分後。
「俺……疲れた。メンバーチェンジ！　俺と鈴が抜けて、山田先生とラウラを追加」
俺は意外と燃費が悪かった。
ラウラは一夏にかわいいと言われ、乙女モードに突入……することもなく、このイベントはスルーされた。
「イズール、鈴、お前達はもういいのか？」
「千冬先生？」

「織斑先生？」

俺の目の前には水着姿の千冬先生がいた。うわぁ、大胆。

「ええ、ちょっと休憩です」

「そうか、さっきガルクライフ社の社長と話をしてきたが……うまく尻尾を出さなかった」

ゼオルさんは諜報活動もうまいからな……たぶん。

「それにしても……鈴がお前を選ぶとは」

「……／／／」

「ああ、まだ鈴は恥ずかしいみたいなので、あまりからかわないでやってください」

鈴はちょっと顔を赤くしていた。

「そういえば一夏はどうした？」

「「一夏なら……」」

俺達三人は砂浜の一部を見た。

そこには見事な砂の城を作る一夏とセシリアの姿があった。というか、あれは城というよりホグワーツ魔法学校じゃない？

「一夏さん♪　次は窓を作りますわよ♪」

「勘弁してくれ……」

こうして、臨海学校危機一髪！！　……の海編は終了するのであった。

――続く。

第十五話　臨海学校危機一髪！！　（海編）（後書き）

いろいろご意見ご感想をお待ちしております。

第十六話　臨海学校危機一髪！！　（旅館編）（前書き）

なんだか自分でもこれはただの尺伸ばしのように見えてきました。

第十六話　臨海学校危機一髪！！　（旅館編）

前回のドッペルゲンガーの三つの出来事。

一つ、三巻の臨海学校編に突入するが、宿泊先がガルクライフ社の旅館になっていた。

二つ、宿泊先が変更になったので東博士が登場するタイミングを逃す。

三つ、とにかく海で遊んだ。

――そして現在。

「離して山田先生！」

「だめです！　離しません！！」

「風呂上りのコーヒー牛乳が俺を待ってるんだよ！！」

「だから何度も言うように、今は女子の時間帯です！！」

現在、俺は山田先生にホールドされていた。

少し時間をさかのぼると……。

――数分前。

俺は山田先生と同室になった。なんでも先生達いわく、『今のお前と鈴を近づけたらベッドインしそうだ』との事。失礼だな……。

「私は今からお風呂へ行ってきます。お留守番お願いします」

「え？　何言ってんですか、俺も行きますよ？」

「え！？　今からは女子の時間帯ですよ！？」

実はここの旅館は露天風呂オンリーで、男子は後からという話。

「いや、俺が女子に変身すれば問題無いでしょ？」

「あ、たしかに――じゃなくて、ダメです！！　ちょっと迷ってしまいましたが駄目です！！」

こうして口論は始まったのである。

――現在。

俺は山田先生との口論の末、おとなしくすることになった。

「本当に、来ちゃダメですからね？」

「はい、暇つぶしに山田先生に変身して自分の裸として眺めてますよ」

「うぅ、もうイズール君には私の裸バレてるようなものですよね……。いいですよ。でも……あまり悪用しないでくださいね……／／／」

そして山田先生は部屋を出て行った。

「……」

俺は周囲を確認し――

「さぁ、パーティターイム！！　それはなぜかって？　早く風呂上りのコーヒー牛乳、飲みたいもん♪」

女の子の裸？　そんなのノー・オブ・眼中。

俺は『この旅館のガチャポン制覇します』という置手紙を設置し、露天風呂の方向へ歩く。

――露天風呂入口付近。

俺はどうしようか迷っていた。

「う～ん、大体の下手な変身は鈴や山田先生にバレるから……透明化？　いや、たくさんの人間がいる中で透明化はバレやすい……」

俺は必死に考えた。

キュルルリン！！（ニュータイプのＳＥ）

「そうだ、あの二人は俺が小型種に変身できるの知らないな……それなら――」

バシュゥゥゥゥゥン！！

「……あ、あ～、女声へチェンジ。ウニャニャ、ウニャ～ン」

俺はモンスターハンターのマスコット、【アイルー】に変身した。理由は、そこら辺の動物だと警戒されたり、もみくちゃにされるが、ピカチュウ伝説を体験したあいつらならなんとかこれで会話しながら溶け込めると思ったからである。（後は大体ガルクライフ社のせいという理屈でどうにかなる）

「――なにやってんだ？」

「ウニャ！　ゼオルさん！？」

浴衣姿のゼオルさんが隣に現れた。

「覗き……するような性格じゃないから、いったいなんだ？」

「いえ、風呂上りコーヒー牛乳の確保だニャ」

「なるほど、他の生徒に確保される前にか……。そうだ、これを持って行け」

ゼオルさんは小さなタオルと小さなデッキブラシを渡してくれた。

「従業員として話を合わせてやる。ご武運を」

「ありがとニャ……ゼオルさん……いや、この場合はアイルーらしく『旦那さん』かニャ」

俺はタオルをねじりハチマキのように装着し、デッキブラシを受け取る。

グッ！

お互いにサムズアップすると、俺は露天風呂へ歩き出した。

さぁ、戦いの始まりだ。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――露天風呂にて。

――箒ｓｉｄｅ

私は今、露天風呂に入っている。

明日は私の誕生日……。一夏はわかっているんだろうか？

それにしても……昨日は、あのままだったら確実に……キスしていたのに。

「箒？　何考えてるの？」

「む、鈴か……」

私の隣に鈴が座った。

「何？　また一夏の事？」

「そういうお前も前は一夏の事を――」

「言わないで、それで悩んじゃったらイズールへの裏切りと同じだから……」

鈴は少し悲しそうな眼をした。

「とにかく、あたしはイズールが好き。あいつはああ見えても、あたしを助けてくれる大事なやつなんだから」

そうか、鈴は本当にイズールの事が好きなのだな。

「それに、最初出会った頃にあいつは未来知ってたけど、それを使って悪用しなかったもん。優しいんだよ……あいつは」

あっ、イズールが未来を知っている事を忘れていた！！

「鈴、“三巻”を知らないか！？」

「え？　ああ、イズールが持ってたわよ。内容は見せてくれなかったけど」

なんということだ、後でイズールから……フフフフ。

「箒、怖いよ」

「あ、すまない」

ふぅ、少し興奮してしまった。さて、私はそろそろ上がろうか――

ガララッ！！

どうやら誰か入ってきたようだ。

鈴の目が見開いているようだがいったい……誰……が？

「ニャ？」

「猫？」

「猫……のようだな？」

風呂場の全員が見つめる先にはデッキブラシを持った猫がいた。
というか直立二足歩行をしている。どういうことだ？

「あ、気にしないでニャ。ちょっとお掃除に来ただけニャ」

喋った！？　まさかコイツもガルクライフ社の関係者か！？
そんな事を考えていると、猫はゴシゴシと風呂場を掃除し始めた。

「「「かわいいいー！！」」」
「ニャ！？」

露天風呂のいた全員が猫に詰め寄る。山田先生まで……。

「ねぇ、君はどこから来たの？」
「猫さんだー」
「喋れるの！？」

クラスの女子がどんどん騒がしくなってくる。
すると、山田先生がみんなを静めさせ、あの猫に質問するようだ。

「あのぅ、あなたのお名前は？」
「僕はアイルーという種族で、名前はイズだニャ」

あれは猫ではないのか？
しかも名前まであるなんて。

「イズ君ですか？　あなたもガルクライフ社の人……いえ、猫ですか？」

「そうですニャ。僕はここでちょっとバイトみたいな事をやってるニャ。特にここのお掃除をした後にこのお風呂に入るのが日課ニャ」

もしや例の『ピカチュウ伝説』は本当に実在するのか？　ドッペルゲンガーもそうだが、ガルクライフの名前を聞くようになってからはいろんなことが起きる。

「あの、お風呂を一緒にさせてもらっていいですニャ？」

「「「よろこんで！！」」」

なんだか羨ましくなってきたぞ……私も……触ってみたい。

「アイルー、まさか存在するなんて……」

鈴はアイルーについて何か知っているようだな。

「鈴、アイルーについて何か知っているのか？」

「ええ、あのアイルーという猫は前にイズールが前にやっていたゲームのキャラクターなのよ。やっぱりピカチュウ伝説は実在するのよ」

ゲームのキャラクター……。ならばちょっと会いたくなったな、ピカチュウ……。

（山田先生が実体験者ということは知らない）

そう思っていると、シャルロットがイズに近づいていく。

「かわいいなぁ～♪　抱きしめていい？」

「優しく頼むニャ♪」

ギュ～っとイズを抱きしめるシャルロット。
うう、私も抱きしめたいぞ！

「えへへ、ラウラも触ってみなよ？」
「シャルロット……平気なのか？」
「うん、大丈夫だよ♪」

ラウラがイズに触れる。それと同時にイズの耳がピクピクと動く。

「くすぐったいニャ～」
「おお、猫なのに……どういう構造をしているのだろうか」

こうして、イズという存在は我々をおおいに癒してくれた。
まったく……私も触りたいぞ……。

――箒ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

俺は体が小さく、その為、のぼせやすいので少し体が火照った所で風呂から上がった。
そして俺は更衣室に置いてある自販機で、コーヒー牛乳を購入。
購入の前にトラブル発生！！　背がボタンに届かない！？

「ニャ……ウニャッ！！」

やっぱり届かない。
「む？　どうした、届かないのか？」
箒が近寄ってきた。まだ裸のままだ。
「仰る通りだニャ……」
「そうか……よし、私が持ち上げてやろう」
箒は俺をヒョイッと持ち上げた。
背中に胸の当たる感触がするが、今はそれよりもコーヒー牛乳だ。

チャリン
ピッ！
ガコンッ！

「ありがとうニャ♪」
「ふふ、どういたしましてだな」

俺は牛乳ビンのフタを外し、両手を使ってゆっくりと飲む。
流石ウォルツ印のコーヒー牛乳だ、風呂上りの人間が飲むという前提で味が設定されている。

「ねぇ、イズ君の飲んでるコーヒー牛乳の印ってなんか見たことない？」
「あ、これって学園のケーキのフィルムに描いてある印と同じだ！」
「嘘！？　じゃあこれってパティシエさんの作った飲み物！？」
「見て！　この自販機の牛乳系は全部ウォルツさんの印が付いて

るよ！！」

そして小銭を持った女子達の乱闘（？）が始まった。

俺はその間に脱出し、何事もなかったかのように元の姿に戻るのであった。

やっぱり取り合いになったか。先手必勝とはまさにこのことだ。

――その頃。

「イズール君！　聞いてください、喋る猫さんが……あれ？」

山田真耶は部屋に戻ってきたが、イズールの姿はなかった。

「ま、まさか！　お風呂へ……あれ、手紙？」

山田真耶はテーブルの上に置いてあった手紙を見つけた。

「……ガチャポン制覇……ですか？」

――宴会場にて。

俺達は食事をしていた。

「なぁ、一夏」

「なんだ？」
「いったい誰が俺の本わさをアボカドに交換しやがった？」
「アボカドだったのか！？」

なぜか俺の刺身に付属していたのは、本わさびをおろしたやつではなく、アボカドをおろしたものになっていた。

？ゼオルのことば。　すりかえておいたのさ！！

「本わさ？」
「ああ、シャルは知らないのか。本物のわさびをおろしたやつを本わさって言うんだ」
「えっ？　じゃあ、学園の刺身定食でついてるのって……」

俺はこっそりシャルロットの本わさと俺のアボカドを交換する。

「あれは練りわさ。えーと、原料はワサビダイコンとかセイヨウワサビとかいうやつだったかな。着色したり、合成したりして見た目と色を似せてあるやつ」
「ふぅん。じゃあこれが本当のわさびなんだ？」
「そう。でも練りわさびでも最近はおいしいのが多いぞ。店によっては本わさと練りわさびをを混ぜて出したりするから」
「そうなんだ。はむ」

シャルロットは本わさ（本当はアボカド）の山を食べた。

「あれ？　全然辛くない」
「いや、わさびを山盛り食おうとしてたから俺のアボカドと交換しておきました」
「え！？　あ、ありがとう。もしかして、これも三巻に？」

「まぁね♪」

こうして食事が終わり、本当の地獄が始まることになるのだが……それはまた次回。

――続く。

ちょっと予告。

ついに正体を見せるガルクライフ社の旅館の性能。

「なんで旅館にゲームセンターがあるんだよ！！」

売店のあやしいグミ。

「なにかしら」

性欲が爆発する鈴。

「はぁ……はぁ……イズール、ちょっと性欲処理……手伝って……」

「お前は何言ってんの！？」

一夏のマッサージ。

「あふぅ」

セシリアはエロいな。

「セシリアェ……」

「イズールさん！？」

勝利の鍵は？

「ジュエルシードって一般販売されてたっけ？」

次回の変身。

「ちょっと山田先生の姿をスレンダーにしてみました。どうでしょう？」

「かっこいいです……／／／」

ドッペルゲンガー第十七話　臨海学校危機一髪！！　（魅惑の夜の旅館編）へ続きます。

「箒ちゃ～ん、ちーちゃ～ん、どこなの～？」

束博士の活躍はまだ来ない。

第十六話　臨海学校危機一髪！！　（旅館編）（後書き）

ご感想とアイディア、カップリングもお待ちしております。

第十七話　臨海学校危機一髪！！　（魅惑の夜の旅館編）　Ｒ－１７（前書き）

夜中のテンションで書いてしまった為、エロ方面です。
もしかしたらノクターン方面の方がよかったかも。

第十七話　臨海学校危機一髪！！　（魅惑の夜の旅館編）　Ｒ－１７

話をしよう。
あれは今から３６万……いや、４０００年前だったか。まぁいい。
前回までのあらすじ。
イズールはフェイゾン生命体である。
さらに転生者でもある。
以上、あらすじ終わり。

――旅館内ゲームセンターにて。
「なんでゲームセンターがあるんだよ！！」
時間軸的にはセシリアが一夏のマッサージを受けている頃、俺は旅館内でゲームセンターを発見した。
「お、ガチャポン」
そこにはインフィニット・ストラトスのガチャポンが置いてあった。
「なっ！　鈴のフィギュアだけ無いだと！？」
そう、現実世界でもそうなのだが、このガチャポンには鈴がいな

いのである。

「おのれ……ゴルゴムの仕業か！？」

とりあえず俺はガルクライフ娯楽開発部へクレームを入れた後、遊ぶことにした。

――数分後。

「ハイ・ハイ・クルッと回って二連ちゃん♪」

ダンスゲームでハイスコアを記録していた。

「あれ？　イー君？」

のほほんさんとその他二名（名前は知らない）が現れた。

「すご～い。ゲームセンターあるんだ♪」

「おお、これはすごいね」

確かにここはすごいな。しかも無料でプレイ出来るし。

「一緒に踊る？」

「「「うん」」」

――数分後。

『バースバスプラプラバスプラー、バースバスプラプラー♪』
「「「「プラ・プラ♪」」」」
なぜか全員でバスプラダンスをマスターしていた。
『バースバスプラプラバスプラー、バースバスプラプラー♪』
「「「「プラ・プラ♪」」」」
うん、これは楽しい。
次のゲームは『ぷよぷよ』である。
「イズール君、食らえ！　６連鎖！！」
「なぁ！！　紫が来ない！　相殺できない！？」
次は『ガンダムＶＳ　Ｚガンダム』である。（随分懐かしいな）
「見るがいい、真のガザＣを――トランスフォーム！！」
「イー君、その台詞は違うよ」
ツイスターゲーム。
「えー、右手を赤へ」
「どうしたのほほんさん。顔が赤いぞ？」
「イー君、わざと顔近づけてるでしょ。ドキドキが止まらないよ……／／／」
ゲーム終了。

「ふぅ、楽しかった」
「うん、それにしてもなんでみんなはここに来ないのかな？」
「え？　あそこの通路にアダルトグッズが販売されてたから誰も近づかなかったんだよ」
「「「え！？」」」

俺は通路の一部を指さす。そこにはＡＶやらアダルトグッズがショーケースに置いてあった。

「な！？　気付かなかった！！」
「うわぁ……恥ずかしい……／／／」
「そういえば部屋のテレビに特殊な番組欄があったね……まさか……」

そう、この旅館のテレビには、明らかにアダルトチャンネルに繋がると思われるチャンネルが存在する。

「ねぇ……イー君はりんりんとエッチな事したことある？」
「んー、それは無いな。キスはみんなの目の前でしたけど、それ以上は無いね」

なんだか猥談に発展してきたぞ？　というか学園生徒が宿泊する場所がこんなんで大丈夫なのか？

「ねぇ、あのアダルトグッズ……どうやって使うの？」

なんだか興味津々のクラスメート。おい、男の俺に聞くのは間違ってると思うぞ？
だが、聞かれたので答えた。

「――な感じだ。あとはググれ」
「「「……／／／」」」
「ん？　どうした？」
「いや、イー君が真面目に答えるからなんだか……ね？」

どうやらこの子たちはまだ純粋に近いようだ。
あ、そういえば俺にはこの旅館での一部の権限があるってゼオルさんが言っていたな。

「……」
「どうしたの？」

俺は心配するのほほんさんに構わずポケットから端末を出した。

「なにそれ？」
「……イタズラ用のアイテム」
「「「え！？」」」
「いや、あんたらに性的なイタズラする訳じゃないからな？」
「「「……／／／」」」

俺は端末を説明書読みながら操作する。
すると、椅子が人数分用意され、ホログラムディスプレイが設置される。

「みんな、座って」
「「「はーい」」」

俺はさらに操作し、画面が表示される。
そこには一夏と千冬先生の部屋の内部の映像が出された。

「これって……盗撮？」
「監視カメラだ」
俺は説明書の基本操作を確認する。
ニヤリ……。
「みんな、今から面白い物が見れるぞ」
「「「？」」」
俺はボタンを押した。
ポチッとな。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――千冬ｓｉｄｅ

「――というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」
「く、くれるんですか？」
「やるかバカ」
なにが『ええ～』だまったく。
鈴以外が全員一夏狙いだと大変だな。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

私は三本目のビールを口にし始めた。

「千冬姉、ジュース買ってきたよ」

「お、ご苦労」

ガチャッ！！

む？　何だ今の音は。

ピッ♪

なぜテレビが勝手に起動する？

「誰かリモコンに触ったか？」

「「「「「いいえ？」」」」」

私たち六人はテレビを覗く……。

『――あんッ！　……イくッ、イっちゃうぅぅぅぅぅ！！』

「ぶぅぅぅぅぅ！！」

「なっ！？」

「へ！？」

「これは！？」

「ちょっ！！」

「まっ！！」

上から私、一夏、箒、セシリア、シャルロット、ラウラの順である。（鈴は元々ここには来ていない）
私は思わずビールを噴き出してしまった。
な、なんなのだこれは！？

――その頃。

「ウヒヒヒヒw」
「うわぁ、イー君鬼畜」

――千冬side

『――ダメッ、壊れちゃうっ！！　うぁあんっ！』

「くそっ、なぜ止まらない」

私はリモコンを操作するがまったく反応しない。

私以外のやつらはみんな固まってしまった。

「ラウラ、一夏を外へ出せ！」
「わ、わかりました！！」

ガチャガチャ！

「きょ、教官！　ドアが開きません」
なんだと！？
ならば――
「一夏の目を塞げ！！」
「りょ、了解しました」
ラウラは一夏の目を塞いだ。

――その頃。
「イズール君、そのリモコン貸して」
「ん？　いいよ」
「よし、このボタンで――」

――千冬ｓｉｄｅ
『続きまして、箒さんの過去の妄想をみんなで観てみましょう』
？　どういうことだ？
『一夏……』

『箒……』
『ダメだ一夏……私はウェディングドレスで……しかもみんなが見ている……』
『だったら見せつけてやろうぜ……』
『あっ、一夏。そんな……乱暴に……』
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
箒……疑似結婚式にそんな事を妄想していたのか。
「箒さん……」
「箒……」
「私の嫁でそんな妄想をしていたとは……」
こいつらは自分の危機に気付いていないのか？
「な、ななな、なんだこれはぁぁぁぁ！！」
箒は剣を構えた。
「チェ、チェストォォォォォォォォ！！」
ガキンッ！！
「何！？　壊れないだと！？」
どんなテレビだ！？
『一夏！　わ、私は……もうっ！』

「やめてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

「セシリア、せめてもの情けだ。一夏の耳を塞いでやれ」

「……はい」

――そして。

ガクッ！

「もう……嫁にいけない……」

ついに箒はダウンした。

『続きまして、鈴さんの妄想です』

む、次の番は鈴か。

馬鹿共もやっと自分の妄想が暴露される可能性に気付いたようだ。

『ちょ、鈴！　お前何を――』

『イズール、大好き！』

『なっ、お前、そんなプレイをいったいどこで――』

『あたしはそんなイズールの口をキスで塞ぐ』

『ん〜〜〜〜〜〜！！』

『ちゅぱ、レロっ、ぬちゅ、クチュ』

――数分後。

全員が動かなくなっていた。
私もあのプレイにはひるんでしまった。
これをもし一夏が見てしまっていたら、新たな世界へ飛び込んでいただろう。

『次はシャルロットさんの――』

ダンッ！！

シャルロットはＩＳを展開し、テレビを撃ちぬいた。

「ねぇ……ラウラ。これを操ってる奴の場所は逆探できた？」
「あ、ああ。今から表示する」

場所が表示された。
恐らくこんなことをするのは……。

――千冬ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

俺は思わず手に持っていたマウンテンデューを落とした。
鈴の妄想の辺りからである。

「イー君……」
「……」

「イズール君……」

三人がゆっくりと口を開く。

「まぁ、とりあえず……逃げるよ、共犯者のみんな！」

「「「ガッテン！！」」」

シャルロットに殺される前に俺達はその場から逃げた。

――数分後。

――山田とイズールの部屋にて。

俺の隣には涙目の鈴がいた。

その隣には三人娘。

さらにその隣には山田先生。

実は鈴もあの映像を俺達の近くで見ていたのである。

「そうよ！　あたしはイズールとエッチな事をする妄想をしたのよ！！　笑いたければ笑いなさい！　幻滅したければ幻滅しなさい！」

「いや……そこまで自暴自棄にならなくても――」

「うるさい！！　こっちはえらく恥ずかしいんだからね！？」

鈴は近くにあったグミをやけ食いする。

「――ごめん」

「……」

「鈴？」

俺は鈴の顔を見た。

なぜか顔がほんのり赤く、目がとろんとしている。

俺は鈴がやけ食いしたと思われるグミに原因があると思い、パッケージを確認してみた。

「山田先生と三人娘、こっちでちょっと確認するよ」

「え？」

「「「なになに？」」」

俺はみんなにグミのパッケージを見せ、内容を説明する。

本当はとんでもない品なんだけど。

「これにはハイリア文字が使われてる」

「「「「ハイリア文字？」」」」

「そう、そしてハイリア文字でこう書いてある。『ビヤクグミ』と」

その場の全員がソレの正体に気付く事になった。

【媚薬グミ】

一粒でちょっと人肌が恋しくなるグミ。

本来は片思いの相手へアタックする勇気をアシストするグミなのだが、大量に食べてしまうと性欲が暴走。食べる時には注意が必要。

ちなみにピーチ味。

もちろんガルクライフ社の変態集団である娯楽開発部の商品。

本来はゼオルに禁薬として販売は禁止されている。

「はぁ……はぁ……イズール、ちょっと性欲処理……手伝って……」

「お前は何言ってんの！？」

ついに暴走をはじめた鈴。

他の女性陣も驚きを隠せない。

「……」

鈴が無言で俺を抱きしめてきた。

「ちょ、鈴！　落ち着け！！」

「……はむ」

俺の唇が鈴の唇によって塞がれた。

……鈴……本気だな。

「ん……ぬちゅ……くちゅ……」

「！？」

おい！！　舌入れてきたぞコイツ！？

なんだか……みょうな気分……グミの成分が……伝わってきたか……？

「ふぇんふぇい……ふぁすふぇ……んっ、ちゅ……」（訳：先生助けて）

駄目だ、先生と三人娘は顔を真っ赤にして行動不能だ。

「……ちゅ……」

「ふぃん、ふぉふぁふぇ……もふご……ふぁんふぇふぉふぁふぃ」

（訳：鈴、お前こんな――なんでもない）

そして押し倒される俺。あれ？　こういうのって普通逆じゃない？

「……んっ、んン……」

鈴が上半身裸になって全身を俺の体にこすり付けてきた。股もかよ……。

もうダメだ……ノクターンの事……早く知っておくべきだったと思う。

先生方、鈴のお父さんと離婚したお母さん。今日鈴は上ってはいけない階段を上ります。

膜消失はなんとか阻止しますが、それ以外は今の私の気力では不可能です。

このメッセージを聞いている頃にはきっと鈴は羞恥でロケット花火の勢いになってしまうでしょう。自殺だけはハイパーモードを使っても阻止するので、そこはご安心ください。

２０１１年７月　イズール・ユ・ミヅル（本名：バルゼッタ）

あれ？　本名……思い出した。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――シャルロットｓｉｄｅ

探知した場所には緑のジュースの缶。

「あれ？　たしかこれってイズールがいつも飲んでるジュースじゃん」

一夏の言葉に僕は驚く。

「それ本当！？」

僕達は急いでイズール君の元へと向かった。

――山田＆イズールの拠点にて。

僕は部屋の扉を開いた。

「イズール君！　さっきのイタズラは君が――」

「くちゅ……ぬちょ……んン！　くぅ！！」

「……ん……」

僕達が目にしたのは、明らかに普通という状況とは言えないような状況だった。

「んっ！　んん！！　っ～！！」

ガクンと鈴は大きく一回痙攣した後、イズール君の上でグッタリしてしまった。

え？　なに……これ……。

というか……えっ！？　鈴、まさか……今のって……。

「ぷはっ……はぁ……ぁ……はぁ……」

「けほっ……くそ……グミの効果……強力すぎる……」

僕は見てはいけない物を見てしまった気がする。

周りのみんな……セシリアや箒なんか口が開いたままだ。

一夏や織斑先生も……そしてラウラや僕も……。

「……おい、山田君……状況説明……頼む」

織斑先生がなんとか動き出した。

「……あの……鈴さんが変なグミを食べて……今……／／／」

近くには見たことない文字で書かれた桃の絵の袋。

「これか……私と山田君以外は部屋を出ていけ」

僕達はまだ茫然としていた。

鈴……幸せそうな顔しているけど……。

それに……／／／

「いいから出ていけ！」

織斑先生の言葉で退散する僕達。
どうしよう……換えの下着……あんまり用意してないのに……。

――シャルロットｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――鈴ｓｉｄｅ

あたし……イズールやみんなの目の前で……。

――鈴ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

俺は……あぁ……まだグミの成分でボーっとする。

「イズール、立てるか？」
「……えぇ」

俺はなんとか立ち上がる。

「それにしても山田君の目の前で淫行するとは……」

「俺だってあのグミが媚薬だなんて思いませんでしたよ……」

俺はフェイゾンエネルギーを少し生成し、気力を取り戻す。

「イズール、今から鈴を風呂へ連れていけ」

「へ？」

「鈴は汗や体液でベトベトだ。ちなみにこれ以上進行しないように私も行くぞ」

なに言ってんだこの人！？

「お前は変身しろ。お前がドッペルゲンガーということはわかっている」

やっぱりわかっていたか……。

「山田君も行くぞ。下着を変えた方がいいだろう？」

「え、……はい……／／／」

俺はとりあえず山田先生……では無く、山田先生の体をアレンジした姿に変身する。

バシュゥゥゥゥゥン！！

「ちょっと山田先生の姿をスレンダーにしてみました。どうでしょう？」

「かっこいいです……／／／」

見た目は、山田先生をベースに、メガネを外し、背を少し高くし、胸を小さく、とにかくスレンダーにアレンジした。髪型はポニーテ

ール。

「鈴、風呂行くぞ。立てるか？」

「まだ力が抜けて……うまく……立てない」

「おんぶしてやる。ホレ」

俺は鈴をおんぶした。

「あたし……みんなの目の前で……イッちゃった……死にたい」

「『イッた』とか高校一年生が言うな。あと死にたいなんて言うの禁止」

俺は鈴をおんぶした。

浴衣が乱れていたので直してやり、タオルで汗を拭いてやる。

「下着の換えどうする？」

「……ゼオルさんに用意してもらって」

俺はゼオルさんに連絡する。

『こちらゼオル。どうした？』

「どうしたこうしたじゃない！！　なんで媚薬グミなんて売ってんだよ！！」

『媚薬グミ！？　俺が禁薬に指定して販売禁止に――そうか、娯楽開発部の連中か……。この話からするにトラブルの後なんだな、謝罪する』

「それよりも鈴のサイズの下着とか用意できるか？」

『わかった。どこで受け取る？』

「今から露天風呂だから更衣室で」

『了解』

通信を終え、俺達は露天風呂へ向かった。

――露天風呂にて。

俺と千冬先生、山田先生、鈴で露天風呂に入っていた。

「月……綺麗ですね」
「そうだな」

湯船で千冬先生と山田先生が話している間に俺は鈴の体を洗う。

「自分で洗えるか？」
「洗えるけど……背中……お願い／／／」
「わかった」

俺はゆっくり鈴の背中をボディソープをつけたタオルで洗う。

ゴシゴシ……。

「ねぇ」
「ん？」
「イズールは……あたしに幻滅した？」
「そんなことないよ。そんなんだったら今鈴と一緒にいないよ」
「そっか……ごめんね、いつも優しくしてもらって」
「いいって、俺が優しいのはデフォルトだ。あと、俺……キャラクター時代の名前……思い出した」

「そうなの？」
「バルゼッタ……それが俺の本名みたい」
「変な名前」

鈴は少し笑った。
俺は少し恥ずかしくなった。

こうして、俺達の旅館物語は幕を――

ドシャッ！！

……誰かが露天風呂の柵の向こうから侵入してきた。

「……ちーちゃーん……やっと……見つけた」

――続く。

「えっ！　ちょっと――」

――続く！！

第十七話　臨海学校危機一髪！！（魅惑の夜の旅館編）　Ｒ－１７（後書き）

次回はやっと束さん登場。

第十八話　紅椿、海に沈む。（前書き）

束博士の登場です。

第十八話　紅椿、海に沈む。

次の日。
たしか今日は箒の誕生日（なんだか原作と時系列が違うような？）

「ああ、篠ノ之、お前はちょっとこっちに来い」
「はい」

打鉄用の装備を運んでいた箒は、千冬先生に呼ばれてそちらへと向かう。

「お前には今日から専用――」
「ちーちゃ～～～～～～～ん！！！」

ドドドドと束さんが走ってくる。
俺は二人の間に割り込み……。

「蛇翼崩天刃（じゃよくほうてんじん）！！」
「アブシッ！！」

フェイタルカウンターを決めた。
このままエリアルに入ろうかと思ったけど、かわいそうなので止めた。

束さん、落下。

「うぅ……君はだぁれ？」
「俺はイズール・ユ・ミヅル。千冬先生の教え子です」
「おお、君がガルクライフのドッペルゲンガーだね？」

げっ、知ってやがったのか！？

「当たり前だよ♪　でも、ちーちゃんはなぜか君の持っているＵＳＢメモリについてはおしえてくれないんだよね～」

当たり前だ。

アナイアレイターやらエネルギータンク、パワーボムの技術が漏れたら色々お終いだ。

「ねぇ～♪　あれの中身教えてよ～♪」

「だめです」

「あの……姉さん、先ほどイズールの事を『ガルクライフのドッペルゲンガー』と……」

「あれ？　箒ちゃん知らないの？　この子が今世間を騒がせてる――」

ガシッ！

俺は束さんの腕をつかんでアームロックを決める。

「がああああ！！　痛っイイ！　お…折れるう～～～」

「あ…やめて！　それ以上いけない」

本気で痛がる束さんと、それを止める箒。

なんで束さんと箒は『孤独のグルメ』のネタ知ってんだ？

「それよりもイズール！　貴様姉さんの腕を本気で折る気か！？」

「こんなんで折れるわけないでしょ？」

ミシミシ……。

「ぐぎゃぁぁぁぁぁ！！」

どうやらこの程度で折れそうだ。

さすがゴローちゃんの必殺技。ハンパねぇぜ。

「ふぇぇぇぇん、ちーちゃん、この子にいじめられたぁぁ」

「イズール、あんまり面倒な事をしないでくれ」

そんな中、山田先生はどうすればいいか分からない様子。

「え、えっと、あの、こういう場合はどうしたら……」

「ああ、こいつはさっきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「むむ、ちーちゃんが優しい……。束さんは激しくじぇらしい。このおっぱい魔神め。たぶらかしたな！！」

山田先生に飛びかかる束さん。

戦隊もので敵が飛びかかるのは死亡フラグなのに……。

キュイィィィン！！

「きゃああっ！？　な、なんっ、なんなんですかぁっ！」

「ええい、よいではないか――」

「蛇翼崩天刃！！」

「ゴファッ！！」

フェイタール♪

ドシャッ！！

「それで、頼んでおいたものは……？」

「ぐふ……ふっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さぁ、さあ、大空をご覧あれ！」

全員で空を見上げた。

何かが迫ってくる。

キラーンッ！！

あれ？　なんだか別方向から何かが――

チュドォォォン！！

突如、こっちへ向かってきた物体がレーザーによって貫かれ、軌道がずれた。

キュォォォォォォン……。

煙を上げながら銀色の物体は……。

チャポンッ♪

……海へ落ちた。

「……」

「……」

俺と千冬先生は無言になる。

「束……今のはお前の冗談だよな？」

「……」

その場にいる全員が無言になる。

ズドォォォォォォォォン！！

海から巨大な水柱が起き、もはや絶望的な空気になった。

「……ふぇ……」

「束？」

千冬先生が束さんの異変に気付く。

「ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！！」

突然束博士が泣き出してしまった。

「た、束！？」

「ね、姉さん！？」

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！！」

大声で泣き出す天才。

「あかつばきがぁぁぁぁぁぁぁ……壊れちゃったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「マジで！？」

俺は束さんの持っていた端末を覗く。

――紅椿、反応消失。

うわぁ……笑うしかないや。

今の束さんの心境は例えるなら、夏休みの工作を提出する直前で、悪がきに目の前で破壊されるような気分だろう。

束さんは涙をボロボロ流し、鼻水を垂れ流す。

「えぐっ、ぐずっ、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」

「姉さん……」

「こんなのって……ふぇ……こんなのってないよぉぉぉぉぉぉぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「束……」

「昨日はでかいカブトガニみたいなのに襲われて……ぐすっ、森の中で……探知機やＧＰＳがなぜか……うぅ……無効化されて……ふぇ……海が見えたと思ったら、ウォーターバイクの暴走族がいて……やっとたどりついたのに……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

まぁ、ガルクライフ社の旅館お周囲はなにがあっても不思議じゃないしな。ウォーターバイクの暴走族だけ謎だが……。

――数分後。

「はい、ハンカチどうぞ」
「ぐす……ありがとう……ちょっと君に興味……もったかな。名前は？」
「さっきも言いましたけど、イズール・ユ・ミヅル」
「そっか……じゃあ、『イズっち』ね♪」
「いいですよ、それで」

俺はマウンテンデューを差し出す。

「飲みます？」
「見たことないメーカーだね、もらっちゃうよ」

まだ目が赤い束さんは勢い良く飲む。

「ふぅ、さて……箒ちゃん」
「姉さん？」
「……ごめんね、あんなに楽しみにしてたのに」
「いいんです。私には……まだ専用機なんて……」

俺は静かに二人の様子を眺めていた。

ピピピッ♪

ん？　ゼオルさんからの通信だ。

『こちらゼオル。海でＩＳ拾いました。どうぞ？』
「本当ですか！？」

俺の言葉で全員が反応する？

「え！？　紅椿が見つかったの！？」

束さんも反応する。

『イズール、この通信を公開通信にしてくれ』

「わかりました」

俺は通信を公開通信に変更する。

すると、ゼオルさんのホログラムが出現した。

『あなたの落としたのはこの紅椿？　それとも蒼椿？　はたまたこの紅蓮椿？』

「天才束ちゃん特製の紅椿だよ♪」

『おお、正直なあなたにはこの紅蓮椿をあげよう』

「あれれ？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

突然、何かの音が鳴り響き始めた。

「海を見てください！」

セシリアの言葉で全員海を見た。

ザバァンッ！！

なんだかアホみたいにデカい潜水艦が海から出てきた。

ガルクライフ社拠点潜水艦
【ギガハイヴ】

『どうせだから乗れよ』
「なに言ってんですか！？」
『まあ、まずは説明だ』

ガルクライフ社拠点潜水艦
【ギガハイヴ】
ガルクライフ社の水中拠点。
アメリカの原子力空母の５０倍ほどデカい。
船内はいろんな施設があり、拠点という名前に恥じない設計をしている。
実は空も飛べる。
これは三隻の内の一隻

「すっげぇ……」
「すごいな……」
「ええ、本国とは……くらべものに……なりませんわ」
「ゼオルさんって……」
「僕……夢でもみてるのかな？」
「ドイツ軍を攻撃できるだけのことはある」
上から一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラである。

『では、ＩＳ学園一年生の諸君、歓迎するよ』

――ギガハイヴにて。

俺達はガルクライフ輸送部隊によって着艦した。

「ようこそ！」

「「「ギガハイヴへ！！」」」

ガルクライフ社スタッフが歓迎してくれる。

「……各自、自由行動だ。ここの技術を学ぶか、世の中とのギャップにショックを受けて来い」

ああ、千冬先生が自暴自棄だ。

「――あの……」

あれ？　更識簪さんだ。

しばらく登場してなかったと思ってたのに……。

「イズール、浮気？」

鈴が詰め寄る。

「いや、この子は四組の更識簪さん。白式の開発で自分の専用機

の開発がストップして悩んでたのを見つけて話しかけたんだ」
「あの……今回、ゼオルさんに……呼ばれて」
む？　ということは、完成したのか専用機。
「アセンブルするから、コアを貸してって」
「そっか……ゼオルさん、簪さんの事お願いします」
「ん？　全員で格納庫いくぞ？　そのほうがいいだろ」
「え？」
俺達主要メンバーは格納庫へ向かうことになった。

――ギガハイヴ格納庫にて。
なんというか……すごい。
「うわぁ♪　ちーちゃん、見たことない機械がいっぱいあるよ！
これ、どうやって動くのかな♪」
「お前は落ち着け」
束さんは機械に興味深々のようだ。
「ねぇ、イズールさん」
「どうしたセシリア」
「この格納庫にあるのって、例の『イナゴ兵』ではありません？」
周りを見ると大量のイナゴ兵が整備されていた。

あきらかに隊長機のようなカスタマイズされているものもある。
「ああ、この格納庫には５００機は存在するぞ」
ゼオルさんはそう――
「「５００機！？」」
俺とセシリアは思わず叫んだ。
もう、ＩＳの数に届いていたのね。
「あ、そうだ。君達に紹介しよう」
カツ、コツ、足音を立てて誰かが歩いてきた。
「ウチの組織の開発主任の――」
「ウェブです。以後よろしく」

ガルクライフ社幹部
【ウェブ】

なんというか……見た目と印象を考えると……髪が赤い千冬先生だな。
「ちなみに、見た目は冷たそうな感じだけど、こっそりぬいぐるみを抱いて寝るんだよ」

「な！？　た、隊長！　それは言わない約束でしょう！！」
意外と乙女だった。
「ゴホン！　さて、簪さん」
「……はい？」
「アセンブルや最終調整するので、こちらへ」
「はい」
次にウェブさんは山田先生を見る。
「山田先生も一応同行してください」
「私もですか？」
「一応、生徒をほったらかしにするのも悪いでしょう」
「はい、わかりました」
ウェブさん、簪さん、山田先生の三人はどこかへ歩いて行ってしまった。
「ねぇねぇ、この機械触らせて♪」
「ええ、いいですよ」
束さんはガルクライフ社スタッフに技術提供してもらっていた。
「そういや専用機持ちさん達」
「「「「？」」」」
「要望があれば武器提供やカスタマイズするけど？」
「本当ですか！？」
「あたしは……今の甲龍でいいや」

「僕は武器だけ見せてもらってもいいですか？」
「ガルクライフ社の……相手の戦力を見るのには絶好の機会だ……ドイツ軍はイナゴ兵だけで壊滅しそうな気もするが……」
「一夏、箒、イズール、鈴、束博士のメンバーはちょっとこっちにおいで」
「「「「？」」」」
「天才束さんは君には興味ないけど～、技術に興味あるからついて行ってもいいよ♪」
「よし、決まりだな」
こうして俺達はゼオルさんについていくことになった。

――ギガハイヴ兵器実験場にて。
俺達はウェブさん達と合流した。
「織斑先生、凄いですよここの技術は」
「どれくらいだ？」
「はい、重力兵器なんて物も完成しています」
「重力兵器？」
なんだか先生達から危険な単語が飛び出したきがするが……。
「さて、これが箒ちゃんの専用機、その名も【紅蓮椿】だ」
「ちょっと……まさかこの束さんの紅椿を改造したの！？」
「いや、機動性能と武器しかいじってない」

箒専用ＩＳ
【紅蓮椿】
ガルクライフ社が改造した紅椿。
第４世代機超えちゃってる。
とにかく接近戦闘と機動能力に特化している。
ゼオルは機動性能と武器だけと言っているが、本当は重力兵器が使え、ＡＩＣを超えた防御能力が付属している。
隠し機能に、白式と変形合体できる機能が備わっている。
もはやサポート機体を超えている。

「それじゃあ、セッティングお願いします」
「ぶぅ、人のＩＳ勝手に改造して！　まったく！」

文句を言いながらセッティングを始める束さん。

「さあ！　箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！　私が補佐するからすぐに終わるよん♪」
「……それでは、頼みます」
「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こうもっとキャッチャーな呼び方で――」
「はやく、はじめましょう」

やっぱりこの二人は仲悪いみたい。今俺の持っている巻では理由はわからないし……。執拗な監視とか……それだけじゃない決定的は何かが……。

「ん～。まあ、そうだね。じゃあはじめようか」
ピ、とリモコンを押す。
しかし何も反応しない。
「あ、あれ？」
ガチャン！！
ガキン！！
突如、紅蓮椿装甲が割れて、操縦者を受け入れる状態になる。
……ここまでだったら普通だったんだけど。
ガシン！
ガシン！
紅蓮椿が自ら箒に近づいたのである。
「危ない箒！」
「一夏！」
「ちょっと、いったいどんな改造したらこうなるの！？」
紅蓮椿は箒と箒を庇う一夏の目の前で止まり、手を差し伸べた。
「こいつ……意思があるのか？」
「こいつは……私に乗れと言っているのか？」
『……』

機械は何も語らず。

「ねぇ、イズール」

「なんだ、鈴」

「もしかして……あのＩＳ生きてる？」

「多分な」

俺達の目の前で恐る恐る紅蓮椿に乗り込む箒。

周囲にディスプレイが出現し、勝手に調整していく。

「ちょっとなにこれ！！　この天才束ちゃんもこんな現象初めて……え！？　０．２秒で３００ペタバイトの処理！？」

驚く束さん。

紅蓮椿は箒を装甲で包んでいく。

『これより、紅蓮椿の起動テストを開始します。整備士や一般の方は避難してください』

――テスト開始。

――モニタールームにて。

俺達以外にも生徒全員がモニターを見守っている。

「基本は紅椿と一緒みたいだから、動かしてみて？」

『はい！』

画面の向こうで紅蓮椿が動き出す。

ズヒュンッ！！

……へ？

今……ワープしたぞ？

全員、無言。

「えっと……箒ちゃんが思った以上に動く……でしょ？」

『動きすぎです！！』

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨月』で左のが『空裂』ね。武器特製データ送るよん」

――そして数分後。

『――やれる！　この紅蓮椿（ぐれんつばき）なら！』

的を破壊する箒、なんだかダースベイダーになる直前のアナキンみたいな表情のような……。

『以上でテスト終了です。お疲れ様でした。続いては簪さんの専用機のテストです』

ん？　簪さんのテストもするのか？

「織斑先生、だれかテスト相手を3人ほど選んでください」
「む？　なら……山田君がいったらどうだ？　後、一夏とシャルロット」

千冬先生の言葉に――

「はい、わかりました」
「千冬姉……わかった」
「僕も……わかりました」

三人ということはとんでもない機体なんだろうな。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――準備完了。
一夏ｓｉｄｅ――

あの人は何を考えてるんだ？
三対一なんて。
たしか簪さんは……前にイズールがフェイゾンの治療で休んでた時に部屋に来た女の子だったな……。

「一夏、気を付けて。なんだか嫌な予感がする」
「織斑君、デュノアさん。ここは波状攻撃でいきましょう」

シャルがなんだか妙な表情になる。

山田先生は早速作戦の確認をしていた。

ビーッ！
ビーッ！
ビーッ！

警報と共に実験場の床の一部が開く。

グィィィィィィィィィィン……ガコンッ！！

簪さんの乗ったＩＳが上ってきた。
色は黒く、青や紫の光るラインがある。
シッポがあり、プテラノドンのような羽が付いている。腕や足は畳まれている。
俺達のＩＳより２回りデカいぞ！！

『紹介しよう。ガルクライフ社製ＩＳ【ＧＡ－ＩＳ－ＡＣ】。通称、ガイサックだ』

ガルクライフ社製ＩＳ
【ＧＡ－ＩＳ－ＡＣ】

ガルクライフ社製ＩＳ
【ＧＡ－ＩＳ－ＡＣ】
通称、ガイサック。
正式名称『ガルクライフ社製インフィニット・ストラトス　アサ

ルトコア』
本物のコア一つと疑似コアを四つ積んだ化け物機体。
実はＧＡ－ＰＥＤの兄弟機。
ＧＡ－ＰＥＤがサムスの武装などに対し、ＧＡ－ＩＳ－ＡＣはメトロイドシリーズのボスの能力が大半である。
弾幕などを張れ、移動や電子戦に特化した通常モードと凶悪な戦闘能力を備えたバトルモードの二種類を使い分けて戦う。
シールドエネルギーは３０００。
まだ完全に調整出来ていないため、バトルモードは使用禁止。

「では、お願いします」
なんだか滅茶苦茶強そうだ。

日本代表候補生
【更識簪】
ＶＳ
主人公
【織斑一夏】
＆
フランス代表候補生
【シャルロット・デュノア】
＆
ＩＳ学園教師

【山田真耶】

――続く。

第十八話　紅椿、海に沈む。（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第十九話　簪さん、強キャラになる。（前書き）

次でラスボス……です。

第十九話　簪さん、強キャラになる。

一夏ｓｉｄｅ――

俺はガイサックに向けて攻撃する。

「シャル、山田先生！　援護をお願い」

「「了解」」

日本代表候補生

【更識簪】

ＶＳ

主人公

【織斑一夏】

＆

フランス代表候補生

【シャルロット・デュノア】

＆

ＩＳ学園教師

【山田真耶】

「……」

簪さんは無言でこちらの様子を見ている。
そんな簪さんへ波状攻撃を仕掛ける。

ズドン！
ズガガガガ
バキュン！！

しかし、銃弾が全て直前で停止する。

「一夏！　ＡＩＣだ！　ラウラの時と同じようにいくよ！」
「わかった」
「私も援護します」

俺とシャルはラウラを倒したようにそれぞれ攻撃する。
ＡＩＣは集中力が必要だったり、別方向の攻撃には弱いはずだ。

簪さんのガイサックはまったく動いていない。

「一夏！！　まったく効いてないよ！！」
「なんだって！？」

あらゆる方向から三人で攻撃しても全く攻撃が通らない。
いったいどういうことだ？

「……こっちの番」

すると、周囲の空間が数か所歪み、ビームが発射される。

チュン！！

シャルのリヴァイヴをかする。

【ポータルビーム】
亜空間からビームを発射する。
メトロイドプライム2のボス『エンペラーイング（スパイダー）』の技。

「なにあの武装！？」
「なんだかヤバイぞ！！　全然効いてないのにあんなビーム出せるなんて！」
「織斑君、デュノアさん、距離を取ってください」
山田先生の言葉で距離をとる俺達。
「……鬼火」
今度は青い火の玉が飛んできた。

【鬼火】
『ファントゥーン』というボスの技。
大量に出せるのが特徴。

くそっ！　まったく勝てない。
打つ手なしか！？
ガイサックは羽を展開し、こちらに近づいてきた。
バサッ、バサッ！！
そして尻尾で攻撃してきた。
尻尾の先にはブレードのような物が付いている。
「これで終わり」
「ちっ、このまま――」
ビーッ！！
「テスト中止！　各員会議室へ向かってください」
中止？　なんでだ？
『全員、緊急事態だ。専用気持ちはここの会議室へ行き、専用機を持ってないヤツは旅館へ戻れ。以上』
千冬姉の言葉で全員が動き始めた。
簪さんは自分のピットへ戻って行った。
簪さんの機体……あれはいったい……なんだ。
一夏ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ
――ギガハイヴ会議室。

「今回は織斑先生に説明してもらいましょう」

ゼオルさんの言葉で千冬先生は説明を始める。

「では、現状を説明する」

会議室が暗くなり、モニターが展開される。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍事ＩＳ『銀の副音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

ついにゴスペル戦か……。

「……」

全員が厳しい顔つきになっていた。

「その後、衛星による追跡の結果、副音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園の上層部からの通信により、我々がこの事態に対処することとなった」

なんだか嫌な予感がする。

ゼオルさんが千冬先生に代わって説明を続ける。

「ＩＳ学園の教師は訓練機を使ってこの周辺の空域、海域を閉鎖することが決定した。しかし、この周辺をうろついてる多国籍軍がちょっかい出してくる可能性もあるので警戒はしよう。それでは作戦会議を始めよう。意見があるものは挙手をするように」

「はい」

セシリアが手を挙げた。

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「いいよ。ただし、これは向こうの国の機密に該当するから漏らしたら査問委員会で裁判受けて、監視が二年ほど続くことになるから気を付けて」

「了解しま――なんでガルクライフ社はその機密を知っていますの！？」

「……秘密♪」

さすがゼオルさん、準備がいいね。

「さて、このギガハイヴで目標地点まで送っていく、必要な装備があったらレンタルしてもいいぞ。よし、出撃準備！！」

『各員、持ち場についてください。ＩＳ学園の生徒は各スタッフの支持の通りに行動してください』

「今回出撃するメンバーは、一夏、イズール、箒の三名で行う。簪さんのガイサックはまだ調整が終わってなくて、暴走したら国の一つや二つを殺戮しちゃうスペックだしね」

ちょっと残念そうな顔になる簪さん。

どんな性能だよ！？

「いやぁ、開発主任であるウェブと話している内に化け物スペックになっちゃって♪」

なんだかゼオルさんが束さんと同じ思考になってないか？

――午前十一時半。

――作戦開始時刻。

『発進準備！！』

「「「了解！」」」

格納庫からリフトで移動する俺達三人。

なぜかＢＧＭが『ウルトラ警備隊の歌』である。

『第四ゲートオープン。各機、カタパルトへ順調に移動中』

『ギガハイヴ、海面に浮上します』

スタッフのアナウンスが響き渡る。

『こちらゼオル。体調は良いか？』

「大丈夫です」

「平気だ」

「こっちも問題なし」

そして俺達はカタパルトらしき場所に到着する。

『カタパルト、解放します』

グィィィィィィィン……。

カタパルトの出口からは外の眩しい光が見える。

『全行程異常なし。発進どうぞ』

アナウンスで俺はＧＡ－ＰＥＤの足をカタパルトにセットする。

「イズール、先にいくぜ」

「おう、一夏先にいくならかっこよく決めろよ？」

「織斑一夏、白式行きます！！」

バシュゥゥゥゥゥン！！

白式が発進した。

「私も行くぞ」

「一夏について行ってやれ」

「篠ノ之箒、紅蓮椿……参る！！」

バシュゥゥゥゥゥン！！

『最後はイズールだぞ？』

「わかってますよ、ゼオルさん」

「イズール・ユ・ミヅル、ＧＡ－ＰＥＤ、ちょっと宇宙行ってくる！！」

バシュゥゥゥゥゥン！！

「お待たせ！」
「イズール、前までその機体飛べなかったと思うけど大丈夫か？」
「心配するな。今ちゃんと飛んでるだろ？」
「――二人とも、作戦開始だ」

――作戦開始。

お、ゴスペル発見……ん？
なんだか……あのゴスペル……青いカビみたいな……まてよ……
青いカビ？

フェイゾン汚染形態
【Ｐ・ゴスペル】

あのカビはフェイゾンだぁぁぁぁぁぁ！！　ちなみに『Ｐ』はフェイゾンの頭文字ね。

『グギャラララララ！！』

青い光に包まれるゴスペル。
もはや歌うことは無い。

「一夏！！　箒！！　今すぐ離れろ！！　奴はハイパーモードを使える！！」
「「なんだって！？」」

ハイパーモードになったゴスペルは俺にかまわず一夏と箒を攻撃する。

「一夏！　私が動きを止める！！」
「わかった！」

「馬鹿！！　お前らが勝てる相手じゃない！！」

フェイゾン系の兵器っていうのは簡単な物じゃないんだよ。
というかパイロットは無事なのか！？　パイロットがいるなら、高威力の武器は使えない。

「ゼオルさん、なんでフェイゾンが！？」
『恐らく、空想世界侵略兵器が転生者殺しを使ったんだ』
「『転生者殺し』？」
『ああ、転生者に対抗して作ったシステムで、転生者の記憶から適当な物を再現し、転生者の行動を抑止する』
「そんなシステムが……」

まずいぞ……。そうなったらこの世界がフェイゾン汚染の世界になる。

『安心しろ、転生者一人につき一回の再現だ。これ以降は無い』

なるほど、安心だ。

『ギャララララ……♪』

あのゴスペルが不気味に笑い、近くの密漁船に狙いを定める。

マズイッ！！　密漁船の事すっかり忘れてた。

「一夏？」

「うおおおっ！！」

イグニッション・と零落白夜でゴスペルの攻撃を防ぐ一夏。

ちっ、しかたない！　ウェイブビームで援護する。

ロックオンしたチャージウェイブビームは確実に相手に当たる。

『ギギャ……ガガ……ギヒャヒャヒャヒャ♪』

二秒ほどのスタン効果はあるが、やっぱりあんまり効いてない。

「馬鹿者！　犯罪者などをかばって……。そんなやつらは――！」

「箒！！」

「ッ――！？」

「箒、そんな――そんな寂しい事は言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

「お二人さん！！　交戦してる俺の身にもなってくれ！！」

ゴスペルは俺から箒に狙いを変える。

「――しまった！！」

ゴスペルの移動能力は凄まじく、俺では追いつかない。

「箒ぃぃぃっ！！」

箒は原作通りエネルギー切れか。

一夏がゴスペルと箒の間に割り込む。

するとゴスペルは箒への攻撃体勢をやめ、一夏の頭を鷲掴みにする。

こいつ……箒への攻撃はフェイントだったのか！？

『グヒャヒャ……ギャヒャヒャ♪』

「ぐっ……このっ……離せ！！」

「一夏！！」

ゴスペルは一夏の体を空いている手で思い切り殴る。

ドスンッ！！

「ぐぁぁぁ！！」

そして白式のパーツを引きちぎる。

ベキャンッ！！

俺はハイパーモードを発動し、ハイパーボルテージで自分のフェイゾンエネルギーを送り、内側から破壊した。

『ぎぎゃがｙがっやｙぎゃ８８いおご９おいｖ０！！』

ズドォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！

『ギャハ……ガ……』

ゴスペルはボロボロになりながら飛び去って行った。

「……箒、一夏は？」

「……くぅっ……」

一夏は気絶したようだ。

恐らく原作よりも症状がひどいだろう。

箒は自分のミスかもしれないということで、自分を責めるのであった。

――ギガハイヴ医療室にて。

「さて諸君、最悪の事態だ。一夏君がフェイゾン系の攻撃をまともに食らっていたようだ」

俺と鈴、山田先生、千冬先生以外のメンバーはこの単語を知らな

いので事態をあまりうまく掴めていない。

「教官、フェイゾンとはいったい……」

「そうだな、いい機会だ。これは最高機密、これが世界に広まれば確実にイズールはモルモットの人生を送ることになってしまう……」

――説明中。

「そんな……じゃあイズール、お前の体は……」

「イズールさん……」

「イズール君……」

「イズール、お前……」

箒、セシリア、シャルロット、ラウラの順である。

「一応、一夏君は復活するから安心して。今回の作戦は失敗だから各自、命令あるまで待機。現在、他国籍軍がこの潜水艦目指して進行中だから、イナゴ兵とウォルツが足止めしてる」

やっぱりそうなったか……。

一夏、お前はゆっくり休んどけよ……。

俺は出撃した。

俺はゴスペルを発見した。
既にボロボロで、動きが鈍い。
『イガ……ガガ……』
俺はゴスペルのボディを撃ちぬき――
『……ガ……』
機能を停止させた。
パイロットは……既に……フェイゾン汚染が酷く進行していた。
「……うまくいくかどうか」
俺はダークサムス化しているのでフェイゾンの吸収が出来るはずだ。
俺はなんとかやってみることにした。
シュゥゥゥゥゥン……
「よし、成功だ」
『こちらゼオル。やっぱり一人で行っていたか』
「ゼオルさん、ここの小島までこのパイロットの回収頼みます」
『了解した。座標確認、転送』
すると、ゴスペルのパイロットは光に包まれて消えた。

『イズールさん、こちらセシリア。聞こえますか？』

セシリアからの通信だ。

「おう、聞こえるぞ」

キィィィィィィン……。

セシリアやみんなが到着した。

「副音は！？」

「俺が撃破した」

「そうか……無駄足だったようだな」

いや、ラウラよ、無駄足じゃないさ。

読者のみんなすら忘れてると思う『アレ』がまだ残ってる。

三巻の終盤……ヤツが来る。

ピピピピッ！！

――巨大な熱源接近。

「全員海上まで移動しろ！！」

俺は全員に指示する。

「どういう……なんだ、この反応は！？」

「ラウラ、どうした……なにこの反応！？　３００メートル！？

僕でもこんなの……」

「二人ともどうしましたの……えぇ！？」

「全員どうし……なん……なのだ……これは」
「アイツ……あの時の……」
『こちらゼオル。多国籍軍がこっちを無視してそちらの反応へ飛んで行ったぞ、気を付けろ！！』
ドドドドドドドドドドドドドド！！
ザバァァァァァァン！！
まるで巨大クジラが海面へ現れるが如く、それは現れた。
「空想世界侵略兵器……」
ついにラスボスの登場である。
――続く。

第十九話　簪さん、強キャラになる。（後書き）

今回は連続で投稿します。

第二十話　決戦！！　戦闘要塞ジャイアントストラトス。（前書き）

連続投稿でラスボス戦です。

第二十話　決戦！！　戦闘要塞ジャイアントストラトス。

ゴウン……ゴウン……。

空想世界侵略兵器は静かに移動する。

「イズール！　あれはたしか前にテレビでやっていた巨大飛行物体ではないのか！！」

「箒、正解だ。今なら金貨でダーツと交換してもらってパジェロ狙えるぞ」

ついにラスボスの登場である。

『こちらゼオル。そろそろ多国籍軍が到着する。気を付けろ』

「了解」

「――ボーデヴィッヒ隊長！」

「む、クラリッサか！？」

なんとここで『黒ウサギ隊』のクラリッサ大尉の登場である。

「いったいどうしてここに？」

「さっきまでガルクライフ社への総攻撃の作戦があったのですが、あれの反応があって」

クラリッサさんに続いてたくさんのＩＳ操縦者が集まってきた。

「――攻撃開始！！」

な、なにもしていない兵器にいきなり攻撃するのかよ！？

カンッ！！
チュインッ！！

しかし敵の空想世界侵略兵器にはまったくダメージは無い。

『――攻撃を感知。オートディフェンスモード、スタンバイ』

ビーッ！
ビーッ！
ビーッ！

警告音と共に移動しかしなかった空想世界侵略兵器が動き出した。
各ミサイルポッドや砲門、レーザー砲らしきものが解放される。

『目標確認、全機排除開始。オープンコンバット！！』

空想世界侵略兵器
【戦闘要塞　ジャイアントストラトス】

ＶＳ

各国ＩＳ軍団

『イズール、ヤツの説明をする』

空想世界侵略兵器
【戦闘要塞　ジャイアントストラトス】
旧ガルクライフ社が開発した空想世界侵略兵器。
全長３００メートルの巨大なＩＳである。
重力制御によって巨体の割にはあり得ない動きをする。
簡易的な次元跳躍で相手を抹殺する。
磁界や磁力を使って鉄球を発射する『超磁界砲（フレミングキャノン）』や各種レーザー、ミサイル、格闘戦で戦闘を行う。
最大出力の主砲レーザーは直線の物体を蒸発させる。
ゲーム理論を設定に組み込んでおり、弾数やビームエネルギーは無限。
シールドエネルギーは６０万。

なんだか『ミクロマン』のジャイアントアクロイヤーみたいな名前……。

「弾数無限！？」
『ああ、しかし俺達はジャイアントストラトスが暴走したときの為に用意した弱点がある』
「弱点？」
『そう、ヤツは各部の排気口を全て破壊すればうまく動けなくなる』

なるほど、暴走したときの対処法はあるんだな。

『ロケットランチャー、ためしに４００発射！！』

ジャイアントストラトスから大量のミサイルが放たれる。

「くそっ！！　ミサイルの数が無駄に多い」

ラウラはＡＩＣでガードするが、攻撃に移れない。

『シューティングビット召喚』

ジャイアントストラトスの周辺に大量のビットが現れ、ＩＳを襲う。

「くそっ、数が――」

ザシュンッ！！

多国籍軍のＩＳにビットが突き刺さる。

「な！？　このビットは刺すタイプ――」

ザシュ！！
ドシュ！！
ガシュ！！

一体のＩＳにシューティングビットが３０機ほど突き刺さり、一瞬でＩＳを破壊した。

「シールドエネルギーが！？　だ、誰か助け――」

ズドォォォォォォン！！

エネルギー切れのＩＳを容赦なくミサイルで撃破する。
こいつ……この前のグレートチフユサンダーと違って、本当に躊躇なく人を殺してる！！

『一体撃破、戦闘続行』

くそっ！！

「こちらイズール。この戦闘に参加している全員に告げる！！
ヤツの排気口を破壊しろ！！　急げ！　犠牲者が増えるぞ！！」
『了解！！』

今は俺がガルクライフ社どうこうの問題ではなくなっているらしく、素直に聞いてくれた。

俺はＩＳ学園のメンバーと合流した。
普段、人の死を見慣れていない何人かは顔を青くしていた。

「僕の目の前で……誰かが……串刺しに……」
「わたくしの前で人が……バラバラに……」
「くそっ、私は……誰も救えないのか！」
「イズール……あたし、初めてゼオルさんの作った物に殺意沸いたわ……」
「……」

ドイツ軍の軍人であるラウラは無言だった。

「とにかく全員で排気口を潰すぞ！！」

『了解！！』

俺達はジャイアントストラトスに向かって飛ぶ。

『こちらＩＳ委員会所属艦隊、援護に移る』

どうやら空母が到着したようだ。

『……空母級の脅威を確認。……脅威レベル判定完了。超磁界砲用意』

ジャイアントストラトスのモノアイが不気味に光り、肩の装飾が変形し、空母に向けられる。

まさか強力な遠距離兵器か！？

「全員、艦隊もヤツの直線から避難しろ！！」

キュイィィィィィィィィィン！！

チャージが始まり、強力な電磁波が観測される。

「させるかぁぁ！！」

『イズール、パワーボムを使え！！』

「了解！　みんな、俺から離れろ！！」

俺はジャイアントストラトスの排気口を発見し、そこでパワーボムを使う。

キュオオオオオオオオオン！

バシュンッ！！
チュドォォォオォォッォォォオォォォォォォォンン！！

まず一つの排気口を破壊。
排気口はパワーボムによって溶けて変形しているが、巨大なので、全体のダメージとしては少ない。

『排気口の一部に異常発生。チャージ中止、対小規模戦闘モードを起動』

ジャイアントストラトスが俺を向く。

「イズール君、避けて！！」

シャルロットが俺を突き飛ばす。
俺とシャルロットの間をシューティングビットが通過した。
あぶね！！

「――助かったよ、シャルロット」
「うん、それにしても……あの兵器……早く壊さないと！！」
「ああ、わかってる。あんな物が存在したらいけない！」

俺はシャルロットと共に次の排気口の位置へ向かう。

「こちらラウラ、排気口を一つ潰した」

『排気口の一部に異常発生。ダメージ計数……現在はまだ問題なし』

「よし、効いているみたいだぞ！」

「うむ、なんとかなるようだな」
流石代表候補生だ。これならうまくいきそうだ。
「こちらセシリア、排気口を破壊しましたわ」
「こちら箒、排気口を破壊した」
「こちら鈴、排気口撃破！」
「こちらクラリッサ、要望通りに排気口を破壊した」
続々と知らされる排気口破壊の通達。
そして俺は全員に通信する。
「艦隊は砲撃で注意を逸らし、ＩＳ軍は残りの排気口を破壊するぞ！！」
『了解！！』
そして俺達ＩＳ軍団はジャイアントストラトスを攻撃する。
『こちらゼオル。ガルクライフ軍団の到着だ。援護に回る』
ガルクライフ社のイナゴ兵軍団や見たことない機体に乗るウォルツさん（γさん）が援護に回った。
「よぉイズール、いい指揮官ぶりだ！　さぁ、最後の仕上げと行くぜ！！」
「わかりました！！」
俺は最後の排気口へ向かう。
ミサイルやシューティングビットを回避し、排気口へ取りつく。

「これで……最後だ！！」

俺は最後の排気口にパワーボムを放った。

チュドォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォンン！！

『排気口全てに異常。ＡＩ冷却システムに異常発生。システムダウン……せ……強制……終了……』

ジャイアントストラトスのモノアイから光が失われ、一部の装甲の表面が解けて、海へとドロドロと落ちる。

「みんな無事か！？」

「なんとかな」

「ええ……大丈夫ですわ」

「よ、余裕よ」

「僕は死ぬかと思った……」

「クラリッサも無事だぞ」

どうやら全員無事のようだ。

そこへウォルツさんがやってきた。

「さてイズール。あの兵器の技術が盗まれないように重要パーツを破壊するよ」

「それが……俺の仕事ですか……最後の」

俺は空中に浮かんでいるジャイアントストラトスへ向かう。

！？　なぜ空中に浮かんでいる！？

「！？　イズール、ヤツはまだ生きてる」
「やっぱりですか、ウォルツさん」

グポーン！！

ジャイアントストラトスのモノアイに再び光が灯る。

『か……うあ……げ……ロック……解除……バランサー調整……ＡＩ冷却システム新構築。学習完了。これより……てめぇらまとめてブッ殺してやるから覚悟しろ！！』

なんだかＡＩが狂暴化してる！？

『さっきから黙って見てれば、結束だの強力なんぞワンパターンなテンプレしやがって！！　そんなお前ら見てると反吐が出る！！　何がハーレムだ、何がＩＳだ、何がライトノベルだ、今時お色気しなきゃ売れないなんてそんな世の中も大っ嫌い！！　私はアンチだ、この世界の全てを否定する！！　否定して、殺して、滅ぼして、殺戮のＢＡＤＥＮＤに強制打ち切りだ！！　そう！　私はこの世界を歩いて踏み荒らす空想世界侵略兵器の最終形態、【ザ・ウォーカー】だ！！』

空想世界侵略最終兵器
【踏み荒らす者　ザ・ウォーカー】

なんだありゃー！！

なんだか色が黒くなったし、所々変形した！？

『弾道計算開始！！　とっとと滅べ！！』

肩に巨大な筒のようなものが……あれは放射能マーク！？　核兵器か！！

「全員、急いでヤツを止めろ！　核兵器だ！！」

『！？』

全員が『核兵器』という単語に反応した。

全部隊がザ・ウォーカーへ攻撃する。

『うるさいハエ共が！！　計算中止！！　バトルモード、スタートアップ！！』

全ＩＳにシューティングビットが迫る。

「くそっ、イズール、なんとかならないの！？」

「鈴！！　装甲の一部が溶けているからなんとかダメージは与えられるはず！！」

俺はシューティングビットをビームで撃ち落とす。

数が多すぎる。

『ちょこまかと～！　あぁ、別にＩＳ的な物じゃなくてもいいや♪　バインド！！』

何人かのＩＳが変な物に拘束された。

バインド！？　『リリカルなのは』か！？

「だ、誰か助け――」

ザシュンッ！！

バインドに捕まったＩＳ操縦者はシューティングビットによって体を貫かれた。

ＩＳが血の色に染まる。

くそったれぇぇぇぇぇ！！

『ＩＳなんて駄作だ！　色気だけの作品だ！　空想世界として存在する価値無し！！』

こいつ、そんな理由で！！

「みんな、とにかく総攻撃だ！！　適当な作戦はあいつに通用しない」

『了解！！』

全員の声に怒りが混じる。

『はんっ！！　駄作に登場する人間と、それに手を貸す転生者が！！　これでも食らえ！！』

ザ・ウォーカーは超磁界砲をチャージ……。

『チャージするなんて時代はもう古いんだよ！！　発射！！』

バシュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウン！！

俺は超磁界砲を避ける。

超磁界砲は向こうにあった島を根こそぎ破壊した。

「なんて威力だ！！」

ザ・ウォーカーは箒に狙いを定める。

『てめぇのような剣道バカには素手で相手してやる』

ザ・ウォーカーは箒を素手で攻撃する。

巨体に似合わないスピード、リーチ、当たり判定は箒を追い詰める。

箒はワープのような移動でなんとか回避する。

俺はハイパーモードのハイパーミサイルでとにかく攻撃する。

『ぐっ！！　どこの空想世界の兵器だ？　邪魔するな！！』

ザ・ウォーカーは超磁界砲を向ける。

まずい！！　今、超磁界砲はチャージしなくても撃てたはず！？

「イズール！！」

鈴が大声で俺の名前を呼ぶ。

ああ……いくらフェイゾン生命体でも……島を破壊する威力は物理的に耐えられない。ああ……終わったな……俺。

ザシュンッ！！

ん？　誰だ……？

「待たせたな、イズール」

そこには白式の第二形態・雪羅（せつら）を纏った一夏がいた。

「遅いぞ……だからお前はヒトナツなのだ……」

「相変わらずだな」

どうやら一夏は超磁界砲を破壊したようだ。

『なぁぁぁぁぁぁ！！　私の……私の超磁界砲がぁ！！　許さない……許さないっ！！　レーザーシステム起動、レーザー爆撃でハチの巣だぁ！！』

ザ・ウォーカーは空へ大量のレーザーを放ち、それが雨のように降り注ぐ。

全員、それをなんとか避けた。

「一夏っ、一夏なのだな！？　体は、傷は……！」

「おう。待たせたな」

「よかっ……よかった……本当に……」

いや、良くない。

まだフェイゾンの気配をちょっと感じる。

まあ、このくらいなら大丈夫だが。

「なんだよ、泣いているのか？」

「な、泣いてなどいないっ！」

ぐしぐしと目元をぬぐう箒に、一夏は優しく頭を撫でる。

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなどっ……」

「ちょうどよかったかもな。これ、やるよ」

「え……？」

？一夏はリボンを渡した。

「り、リボン……？」

「誕生日、おめでとうな」

「あっ……」

「それ、せっかくだし使えよ」

「あ、ああ……」

『あのさ、あんたら……周りで人がガンガン死んでるのに、馬鹿じゃないの？　なんでイチャイチャしてんの？　待ってる私の身になってよ。それくらいの時間だったら学園に核弾頭撃ちこめたんだよ？』

これは俺も同意をせざるを得ない。

――『絢爛舞踏（けんらんぶとう）』発動。

どうやらワンオフが発動したようだ。

――エラー。
――隠し機能展開。
――合体シーケンスに入ります。

は？

「な、なんだ！？　これはいったい」
「箒、どうした！？」

なんと紅蓮椿が大きく変形し、雪羅と合体した。
ラスボス戦で合体なんて……嫌いじゃないわ！！

最初で最後の究極合体ＩＳ
【グレンノセツラ】

「「なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁ！！」」
『ちっ、合体しても……うらやましくなんかないんだからね！！
とにかく死ねぇぇぇぇ！！』

なんだかギャグで終わりそうな気がしてきたわ……。

大量のミサイルがグレンノセツラを襲うが、ＡＩＣのような物でガードする。

「箒、これならいけるぞ！！」

「一夏、他の武装は！？」

――『ユキヒラブレード・アドバンススタイル』起動。

――『秘奥義！！　亜空抹殺残焼剣（あくうまっさつざんしょうけん）』発動可能。

なんっだよ！！　その『シークレットオブソードツー』みたいなネーミングは！！

必殺技が中二だ。

「一夏！」

「箒！」

そして――

「「どりゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」

ザシュン！！

遠距離でザ・ウォーカーの顔を真っ二つにした。

次元斬かよ！？

『ギガ……ガガガガガ』

すると赤く光る何かが露出した。

『イズール！！　あれがＡＩ、つまり本体だ！！』

「んじゃ、トドメといきますか」

俺は顔の部分に取りつき、赤い球体にアームキャノンを押し付ける。

「あばよ、ゆっくり眠りな……」

ダンッ！！

パキ……ン……。

『イガガガ……深刻な……しょ、障害ガ……ハ、発生シま……ま……シマウマ……円周率ハ……３．１４……イ……イヤ、……お……オ……およそ３……タ……な……ゆのっち……かゆ……うま……機密……ひじ……保持……に……自壊……む、無理……緊急ＡＩ……保持モード、起動……』

こいつ、まだやるか！？

全員に緊張が走る。

『……負けたよ、あんたらには負けたよ。もうエネルギーは空だし、排気口も、各パーツに信号を送る機能もない。ただ喋るだけ。なぁ、転生者』

俺に話を振られた。

「……なんだ？」

『楽しかったか？　今までの生活』

「ああ……」

『そっか……楽しかったか』

「何が言いたい？」

『ん～、私はこの世界を滅ぼす為にアンチな心と機能を付けられ

て暴れた訳だけど、もし人間の体で生まれたなら、恋愛……してみたかったんだ』

どこからかオルゴールの音色が流れてきた。

たしかこの曲はＩＳのエンディングの曲だったような……。

頭の無い空想世界侵略兵器は話し続ける。

『君が見た物、聞いたもの、経験、感覚、感じたこと、その全ては私の憧れるもの……。君はこの世界をただの物語だと思う？』

「そうは思わない」

『うん、それでいい。でもこれは物語。きっと現実世界へ帰ってしまったら忘れてしまうでしょう。でも、忘れないで。あなたがこの作品を読んで笑った事、不快に思った事』

ん？　これって俺向けの言葉か？

『山田先生がピカチュウに抱きついたこと、ガルクライフの変なゲームでトリップし、セシリアがゼオルに怒られ、ドッペルゲンガーが世間を騒がせ、段ボールを被り、魔改造機体を作って、疑似結婚式して、温泉入って、チャリンコ漕いで、グミ食べて、もう数えるの面倒なくらいにいろんなことがあったでしょう？』

「……」

『……もしもだよ、もし……しばらく経って、またこの物語を思い出してくれたら……みんなや私の活躍、また読んでほしい。私はこの二十話でずぅぅぅぅぅっと待ってるよ』

「ああ、必ず」

『安心した、じゃあ……バイバイ♪』

「……バイバイ」

『……ああ、恋愛……したかったなぁ……人間の体に設定しなか

った事は一生恨むよ、ゼオルお父さん……』

ブツンッ！！

空想世界侵略兵器の音声が停止した。

バキン！！

ビキン！！

ボロ……ボロ……。

各パーツが崩れ、海へと落ちていく。

まるで巨大な氷山が崩れるように……。

「さよなら……ウォーカー」

こうして、俺の戦いは終わったのだ。

――岩場にて。

「結局あの戦闘での死者は無し……か」

『ああ、グレートチフユサンダーと同じく、キャラクターの死に干渉していたジャイアントストラトスが倒されれば、全てが元通りだ』

ゼオルさんの話では、各空想世界のキャラクターは本当の原作者にしか権限は無く、俺達のような外部の者がこの世界のキャラを殺

しても、それは殺したことにはならず、『死んだ』という設定を無理矢理押し付けた程度にしかならないらしい。
ジャイアントストラトスが消滅した事によって、死者は蘇ったのである。

「俺達の戦いはただの無駄だったって訳？」
「そうでもないんじゃない？」

俺の隣に鈴が座る。

「で、ゼオルさんはどうするの？」
『ギガハイヴも爆撃で撃沈したし、目的は達成したし、俺は帰るよ。ちなみに、イズール君は現実世界には帰る場所がないからここで暮らしなよ』
「てっきり強制送還されるかと思ってたんですが？」
『そんな鈴ちゃんを悲しませるシナリオ用意する訳ないじゃん』
「ゼオルさん……」
『さて、じゃあね。二人とも、幸せに暮らせよ？』
「「いままで……お世話になりました！！」」

そしてゼオルさんの通信は切れた。

「イズール、これからどうするの？」
「まずは……アレだな」

俺はこっそり向こうにいる箒と一夏に指をさす。

「お、いい雰囲気なんじゃない？」
「だけど、セシリアやお前に邪魔されるんだぜ？」
「げっ、マジ！？」

「だから……」

俺はこっそり一夏と箒に近づき。

ガシッ！！

「！？　い、イズール――」

グニュ！！

キスしそうだった箒の顔を一夏に押し付けた。

これで一夏×箒の完成だ。ハッピーバースデー。

「「！！？」」

「なんだよ、せっかくの俺の『誕生日プレゼント』が気に入らなかったのか？」

「うわぁ……すんごい誕生日プレゼントだわ……」

そして横を見る俺。

鈴も横を見る。

「イズール……貴様……」

「一夏、イズール君、何をやっているのかな……？」

「ふふっ、うふふふふっ」

ＩＳ装備の三人登場。

さて……。

「逃げるぞ！！　一夏、しっかり守ってやれよ？」

「な、あ、おいっ！！」

「鈴、ドロンボーの自転車を用意した！　乗れ！！」
「オッケー！！」
「あ、イズール！！　俺も乗せろ！！」
「悪いな、のび太！　これは三人用なんだ」
「一人分まだのれるだろ！？」
「ははは！　――お前は箒をお姫様だっこで――」

ドゲシッ！！

いきなり箒に蹴落とされた。

「一夏！！　乗れ！！」
「箒、助かった！」
「なっ！？　恩を痣で返しやが――」
『出発だべえ』

「「「えっほ！！　えっほ！！　えっほ！！――」」」

「あ、待って！　置いてかないで！！」

「イズール！！　貴様だけは許さん！！」
「イズール君、僕の恋心潰した代償は大きいよ！！」
「うふふっ、うはっ、うはははは！！」

俺は立ち止まり、三人を見る。

「今日は朝まで返さないぞ♪」
「「「上等！！」」」
「かかってこいやぁぁぁぁぁ！！」

俺は生身で三人へ飛びかかる。
俺達の戦いはこれからだ……。

――その頃。

「……俺もこの世界とお別れか」

ゼオル・ゲバイン屋台から海を眺めていた。

「んにゃ？　誰？」
「束博士か……客じゃないならあっちへ行け！　今俺は感傷に浸ってんの」
「いや、束さんは君には興味無いから別に邪魔しないよ」
「……あっそ！！　いいもん、このＵＳＢあげないもん！！」

すると束博士の表情が変わる。

「ちょうだい！！　今すぐ頂戴！！」
「いやだよ！！　俺の思い出の一部だ」

「――なにをやっているんだお前達」

「千冬先生か……」
「やあ、ちーちゃん」

千冬先生は椅子に座る。

「おでんか……はんぺんをたのむ。あと、ビールも」
「あ、私は大根と卵ね♪」
「なんだよ……最初からおとなしく注文すれば良かったのに」

ゼオルは注文された品を出した。

「金はいらねぇよ。拠点潜水艦の撃沈祝いだ」
「撃沈は祝う物ではないぞ、あれにはいくらの予算が？」
「沈んだ設備、イナゴ兵を含めないと……小数点切り捨てで約８５００兆円。まぁ、全体の５００分の１程度の損失だけどな」
「ぶぅぅぅ！！」

千冬は思わず噴き出した。

「わおっ♪　私のお小遣いよりも遥かに……えぇ！！　８５００兆円！？　ゼロが二つ多くない！？」
「何？　興味持った？」
「そのＵＳＢくれたらね」
「足元見やがって……ほらよ、もう俺には不要の資料だ」

束はＵＳＢを受け取った。

「あ、鳥つくねあるけど食べる？」
「貰おう。ところでお前はどうするんだ？」
「まあ、拠点潜水艦は撃沈して、多国籍軍が必死で技術泥棒サルベージしちゃってるから、しばらくは里帰り＆表舞台を去りますかな」
「そうか……。む、このつくね美味いな」
「あと、ウォルツも学園離れるし――」
「「え！？」」

「なんで二人が驚くの？」
「いや……その……」
「私とちーちゃんはあの人の作るお菓子のファンだったの♪」
「お、それは妹も喜ぶ」

ゼオルは笑う。

「君はゼオルだから……ぜっくんね♪」
「なんだかゼットンみたいな名前だが……まぁいい」
「ぜっくん、あの巨大ＩＳモドキのパーツはどうしたの？」
「ん？　ああ、イズールが撃ちぬいたＡＩならここに」

ゼオルは赤い球体を取り出した。

「もらっていい？」
「どうせ解析不可能だと思うからあげるよ」
「やった♪」

千冬はおでんを食べ続けている。

「紅蓮椿は解体するのか？」
「うん、本来は私の作品だし、流石に改造は気持ち悪いから」
「そっか……自信作だったのにな」
「むぅ、人の作品で自信作なんて――あっ、この……なんでロールキャベツ？」
「食べる？」
「食べる♪」

束の皿にロールキャベツを盛り付けるゼオル。
その時、束の口が開いた。

「ねぇ、二人とも。今の世界は楽しい？」

「そこそこな」

「最初から楽しかったら、あんな巨大殺戮兵器なんか作らないって」

「な！？　あれはお前が作ったのか！？」

「え！？　もしかしたらぜっくんはこの束さんと同じ天才の部類な訳！？」

「言ってないっけ？　まぁな、惚れたろ？」

「「いや、全然」」

こうして三人はゆっくりと夜を過ごした。

朝になったらいつのまにか束博士はいなくなっていたという。

（紅蓮椿解体の為、すぐに発見された）

――続く。

第二十話　決戦！！　戦闘要塞ジャイアントストラトス。（後書き）

次回で……終わりません。

第二十一話　エピローグ？（前書き）

まだまだ続きます。
問題は目的ですね。

第二十一話　エピローグ？

ゼオルさん率いるガルクライフ社はインフィニット・ストラトスの世界観から撤退。

――学園内の屋台にて。

無人で主人を待ち続ける屋台は存在し続けていた。

「うぅ……おじさま……」

「あれ？　セシリアじゃないか」

なぜかセシリアは泣いていた。

近くに手紙が置いてあったので読んだ。

愛弟子へ。

お前はもう卒業だ。

お前は覚えがいいから料理の腕は上がったぞ。

ハンコも用意した。

もう、お前の料理はみんなを笑顔にする効果が付属した。

自信を持て、お前の料理の味は俺が保証する。

でも、最初の頃のように色を重視して味を落さないようにな。

あと、ここに卒業証明書と俺のレシピ、屋台をセシリア、お前に託す。俺が帰ってくるまで使ってくれ。

お前の料理の先生、ゼオルより。

「うぁあぁぁぁぁぁぁぁあん！！　おじさまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ああ、泣くなよセシリア」

「だって……ぅ……えぐっ……優しい……親のような方でしたのに……いきなりの別れなんて……ぁ……あぁぁぁぁぁぁぁん！！」

どうやらあの数か月ほどで楽しい思い出となったようだ。

――イズールのレポート。

ここにどうなったかを記述する。

ガルクライフ社撤退。

ウォルツさんも撤退したので、学食のデザートを愛していた生徒から悲しみの声が聞こえた。

「そんな……」

「ふぇぇぇぇっぇぇぇぇん！！」

「泣かないの！！　私も悲しいんだから……」

「ウォルツお姉さまが……故郷に帰った……！？」

紅蓮椿について。
束さんの調整で、元の紅椿に戻る。
少し箒は残念そうにしていた。
現在、分解された紅蓮椿のパーツは、学園内の技術部が必死に解析、半導体に未知の物質が使われていることが判明し、量産不可能なブラックボックスと断定された。

ギガハイヴについて。
爆撃などによって知らない間に沈んでいたギガハイヴは、必死なサルベージ作戦によって、イナゴ兵ごと回収されるが、修理費が国家予算を遥かに超えるということで、ギガハイヴの修理はストップし、イナゴ兵の分析のみ行われているが、構造を理解出来る人は未だ登場していない。

ジャイアントストラトスについて。
これもサルベージ作戦によって回収され、未知の金属や物質は全て各国の研究機関に回された。
この金属の価値は現在高騰中。
ＩＳコアに分類される部分は俺が所持している。未知のエネルギーを垂れ流し続けているので、とりあえずミニトマトの植木鉢に埋めた。すると、１日で収穫できる状態となった。農業的には大助かりである。

「あれ？　何してるんだ？　何かのメモ？」

織斑一夏。
現在は篠ノ之箒の恋人である。
とっても仲良しさん。
しかし、それでもまだ鈍感な部分があり、箒を悩ませている。

「む、一夏！　手を握れ！」
「え？　まぁ……いいけど」
「うむ……まだ恋人としての感覚がお互い掴めないか……」

篠ノ之箒。
現在は一夏の恋人。
とっても仲良しさん。
今ではツンデレのツンの度合いが二分の一である。
毎日一回キスしたいと思っているが、恥ずかしくてお互いに緊張して出来ない。

「はぁ、一夏さんってば、わたくしも好きでしたのに……」
「そうだったの！？」
「はぁ……はい、大根が煮えましたよ」
「サンキュ」

セシリア・オルコット。
一夏への恋心がブレイクされ、そのショックで色々やめてしまった。
料理の腕が向上し、ゼオルさんから受け継いだ屋台で誰かと雑談するのが日課。
なぜか屋台の費用は減らないという謎現象が起きているらしい。なので料理は無料。

「災難ね」
「鈴さんには言われたくないですわ」
「それもそうね」

凰鈴音。
現在はイズールの恋人。
今回起こった事件の大体の真実を知る人物で、中国の諜報部に狙われるが、なぜか諜報部は壊滅したらしい。原因は不明。

「一夏ぁ……箒さんも含めて……僕も愛してよ」
「シャル、お前酔ってないか？」
「うるさい！！　一夏が鈍感なのがいけなかったんだ！！　どうするの……僕の恋心……」
「……ごめん」

シャルロット・デュノア。
一夏が箒と付き合い始めたことにより、自暴自棄の日々が続く。
最近ラウラに教えてもらった『日本では一夫多妻のハーレム（クラリッサ談）』が存在するという幻想に踊らされている。
最近イズールのアニメからエロい物をこっそり借りて観ている。
もはや最初の頃のような性に関する恥ずかしさは全く感じなくなってしまった。
今では牛乳で酔った気分になれる。

「まったく……あの時イズールが一夏と箒を結ばせなければ……」

ラウラ・ボーデヴィッヒ。
恐らく一番ショックの小さい人。
ドイツ軍がギガハイヴやイナゴ兵の獲得で軍備復活を喜ぶべきかどうか悩んでいる。
イナゴ兵１２体を獲得したため、『黒ウサギ隊』は事実上、次世代特殊部隊と化した。
現在は、グレたシャルロットを慰める日々。（シャルロットのおもちゃにされている）

「あ、うどんも煮えましたよ？」
「……いただきます」

更識簪。

ガルクライフ社の急きょ撤退により、ＧＡ－ＩＳ－ＡＣを調整出来る人間がいなくなり、事実上の専用機凍結。再び専用機無しの日々が始まる。しかし、一部機能は使えるので、背中に羽を展開して空を飛ぶのが趣味となった。
匿名でサムスのバイザー機能が付いたメガネが送られてきた。

「今日はおでんか……セシリア、味がゼオルに近づいてきたようだな」
「……わたくしはおじ様には勝てませんわ」

織斑千冬。
ガルクライフ社の後処理に一番苦労した人物。
一夏が箒と付き合い始めたのを喜ぶべきかどうか悩んでいる。

「あの……私はガンモドキをお願いします」

山田真耶。
生徒の不純異性交遊を許すべきかどうかを真剣に悩んでいる。
最近、『返品待ち』と書かれた段ボールの積まれた倉庫を発見したが、対処法が分からないので、生徒会に頼もうとしている。

「うぁー、みんな大変だね」
布仏本音（のほとけほんね）。
実はあの時、冗談で専用機作ってくれと言ったら、専用カスタマイズの黄色いイナゴ兵をもらって、事実上、専用気持ちになった。

「……これでレポート完成……っと」
「何書いていたの？」
「ん、秘密♪」

イズール・ユ・ミヅル。
現在、凰鈴音の恋人。
ＧＡ－ＰＥＤは進化の限界に達し、ドッペルゲンガーとしての能力も高くなった。
ガルクライフが撤退したため、ＩＳ委員会に監視される……ことは無かった。
この世界で自由に生きることを決めた。

「なぁ、鈴」
「ん？」

――《主演》

「俺、決めたよ」
「何が？」

――イズール・ユ・ミヅル
――織斑一夏

「この世界で立派に生きてみようと思う」

――篠ノ之箒
――セシリア・オルコット

「何をいまさら」

――凰鈴音
――シャルロット・デュノア

「ふふ、ちょっとカッコつけただけ♪」
「特に意味ないのね……」

――ラウラ・ボーデヴィッヒ
――更識簪

「……鈴、今回の一連の事件……ちょっと気になる事があって……」
「？」

――織斑千冬
――山田真耶
――布仏本音

「前にゼオルさんはグレートチフユサンダーの事を『空想世界侵略兵器の尖兵』って言ったんだ」
「え？　それって……どういう事？」

――ゼオル・ゲバイン
――ウォルツ・ゲバイン
――ウェブ

「もしかしたら……あんなのがまだいくつか存在するかも……」
「その根拠は？」

――グレートチフユサンダー
――ジャイアントストラトス
――ザ・ウォーカー

「ゼオルさんが用意したイナゴ兵の大群……俺のＩＳ……箒や簪さんのために用意された魔改造や恐ろしい性能の機体……これらを考えると、例え空想世界侵略兵器が残っていなくても、何か大きな理由があるはずだ」
「……ゼオルさんは帰ったんだし、きっと思い込みよ」

――チフユサンダー
――タテナシロボ
――メカヤマダ
――ゴ・ダンダー

「まぁ、考えても仕方ないか。さぁ、何か食べよ」
「そうね」

――《製作・監督》
――ＺＥＯＬＵ

ＩＳ学園のドッペルゲンガー

――おしま……マｊ……いあｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：「：@；ｐぉきじゅｈｙｇｔｆｒでｓｗざｓｘｄｃｆｖｇｂｈんｊｍｋ、ｌ。；・：レｄｆｇｃｖ７湯ｈｊん９イオｋｌｒｔｆｇｑｗ背ｄｘｔｆｇｈ部位ｊｋもｐｌ；ｐ＾@【；：』ｐ@【；：】「@：」ｋｌｔｆｇｈｒｃｒｔｆｇちゅｈ０いおｐｋｌ＾ｐ@；：@「：ちゅへｒｄせｄｒｆｔｇｙｈｇｙｈｇｃｚｄｘｆｃｇｖｈｂｊんｋｍｌ、；。ｈｊｋんｍ、。@ｐぉきｈ――

――深刻なエラー発生。

以下のアイテムを獲得。

○謎の鍵。
○現在販売されているＩＳの原作本全て。
○二週目への切符。

――？にて。

『指揮系統消失の為、我々はこれより自立行動を開始します』

――続く。

第二十一話　エピローグ？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第二十二話　ピカチュウ伝説再び！！（前書き）

今回はあるいみ番外編です。
前に言われた通りにピカチュウの再来です。
前よりも話の質が落ちています。

第二十二話　ピカチュウ伝説再び！！

それは夏休みに入る前。
学園に帰ってきてから俺は体がだるかった。
理由は簡単、最終決戦で使ったフェイゾンの量が多かったからである。

「空……青いな……」

俺は空を見上げた。
雲は少なく、風も心地よい。
俺は久しぶりにピカチュウに変身して燃費を抑えると共に、芝生の上で昼寝することにした。

バシュゥゥゥゥゥゥン！！

「ピカー……チャー……」

少し……眠ります。

――イズールside　end

――楯無side

今回の仕事は、イズール君が借りている倉庫の中身の確認。

山田先生が発見した倉庫の中身には、『返品待ち』と書かれた紙の貼ってある段ボールが山積みになっているという。

？ゼオルのことば。　みんなは覚えているだろうか。いままでトラブルを起こしたガルクライフ社製商品の数々を。実は一つも返品されぬまま倉庫に封印されているのだ。

「きっとお宝だよー」

「こら、今回は仕事なんだから」

「二人とも、姉妹であんまり遊ばないの。例の段ボール、もしかしたら――」

「「「ガルクライフ社の遺産」」」

最近になって突如姿を消した巨大組織。

軍事力は大陸の国家を遥かに凌駕する。

あれには私も驚いた。あんな潜水艦を所持してるなんて……。いや、過去形ね。

簪ちゃんは専用ＩＳ作ってもらったようだけど……完全ではないみたい。

なんだか……簪ちゃんのＩＳから……ドス黒い何か……狡猾な知性みたいなのを感じるのよね。

「会長？」

「お嬢様？」

「ちょっと考え事……あとお嬢様はよしてよ」

「すみません。いつもの癖で」

そして私たちは倉庫の前に到着した。

「えー、なになにー？　『パンドラの箱。開けると学園が大パニック。だから触れないでください』だって」

そう言われると開けたくなるのよね。

「よし、開けちゃうわよ」

私は鍵を開け、扉を開く。

中には大量の段ボールやコンテナ、宝箱があった。

「会長ー♪　これなんかどうですか？」

「どれどれ？」

本音が掃除用ロッカーらしき物を指さした。

「よし、レッツ・ショウタイム！！」

ガチャッ！

扉を開けた。

『……くぅ……すぅ……もう……かんざし……ちゃん♪』

「「「……」」」

空想世界侵略兵器

【タテナシロボ】

バタンッ！

「よし、他のをいくつか持って帰りましょう。どうせ返品の品なんだから三つくらい持って帰っても何も問題なし♪」

「「……はい」」

今、私そっくりの何かがいたような気がするけど、気のせいよね。

私たちはいくつかの段ボールを回収し、生徒会室へ戻ることにした。

――数分後。

私たちが帰る途中。

敷地内で飲み物を買ってベンチで休憩することにした。

「あれ？」

「どうしたの、本音？」

「この自動販売機の中身……全部イー君がいつも飲んでるジュースだらけだー」

私も見てみると、緑色の缶一色に染まっていた。

こんな自動販売機なんてあったかしら？

「とにかくベンチにすわ……！？」

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「虚、どうしたの？」

私と本音が虚の視線を追うと、木の日陰で寝ているピカチュウがいた。

ティロロン♪　ティロロン♪　ティロティロティロロロ――♪

？あっ、やせいのピカチュウがとびだしてきた。

？たたかう　どうぐ
ポケモン　にげる

？みやぶる
なめる
みずてっぽう
つるぎのまい

？タテナシの　みやぶる　こうげき。

？しかし、うまくきまらなかった。

？ピカチュウはぐうぐうねむっている。

「だれかモンスターボール持ってない！？　私あのピカチュウ欲しい！！」

「会長、落ち着いて！！」

「わたしも欲しいなー♪」

私はそっと、ピカチュウに触れてみる。
耳がピクピクと動く。
でも眠っている。
体温もあるので、生きていることは間違いないらしい。

たたかう　?どうぐ
ポケモン　にげる

センス。
カンザシとのシャシン。
?なぞのダンボール。
エプロン。
ワイシャツ。
エロイしたぎ。

?タテナシはなぞのダンボールをつかった。なかからへんなグミがでてきた。

「なにかしら?」
「会長!!　そのグミは絶対食べちゃダメです!!」
「ん?　本音、何か知ってるの?」
「臨海学校の時……そのグミを食べた友達が……///」

どうやら相当ヤバそうなグミらしい。

?タテナシは素手でピカチュウをつかまえた。

私はピカチュウを抱きしめた。

私の胸の中でまだ眠っている。
「ピカー……チャー……」
おもわず生徒会室へお持ち帰りしてしまった。

――楯無ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ
――生徒会室にて。

目が覚めると、しらない天井――ではなく、生徒会室だった。
なんで俺はここに？
「あ、目が覚めたみたい♪」
あれ？　のほほんさん？
「ピカ……？」
「わぁ～♪」
俺はのほほんさんに抱きしめられた。
な、なにをする！！
あふん。おぉ……テクニシャン……。
「よしよし、会長！　この子私が飼う～」

「だめよ、本音。子供の頃からの夢を叶えるのは生徒会長である私よ！」
「あの……出来れば私が……」
なんだか三人が勝手に口論を始めた。
その隙に俺、脱走。
？ピカチュウはにげだした。
「あ、逃げた！！」
「追え！！」

――そのころ、某所にて。
――ゼオルｓｉｄｅ
『教えて！！　ゼオル先生！！』
「はい、ここは亜空間にあります俺達ガルクライフのラジオ局からお伝えしています。今回はみなさんから届いた質問ハガキをイズール君が逃げている間に読んでいきます」
Ｑ：この物語の最強キャラは誰ですか？
「うん、１００％になった俺だね。今は７５％しかないからウォルツが最強だね。あいつはかるく世界を滅ぼせるよ」
Ｑ：亡国機業はどうなっていますか？

「存在しているよ。でも、ジャイアントストラトスにちょっかい出して死にかけたみたいよ？」

Q：一夏が箒と付き合ったけど、後々に起こる本来のイベントはどうなるんですか？

「打ち切り」

Q：ぶっちゃけ、七巻までもつの？

「良い質問だ！　一夏に恋する人たちはバッサリカットされて、もはやイベントは崩壊状態。後は指揮系統を失った下級空想世界侵略兵器の処理と、俺の設定の欠片集めになるだろう」

Q：イズールの設定が無茶苦茶になってませんか？

「サーセン。By作者」

Q：ガイサックの出番は？

「後に出ます」

Q：早く本編に戻れ。

「……それでは、お天気です。アマタツ～？」

――ゼオルside end

――イズールｓｉｄｅ

誰がアマタツだ！？
お前はオグラさんか！？
あれ？　今、ゼオルさんの幻聴が……。

俺は何とか逃げ、シャルロット達の部屋の前にいた。
ラウラ、どうにかラウラならややこしくなくて済むはず。世間知らずはこういう時に役に立つ。

俺はカリカリとドアを引っ掻いた。

『シャルロット、客だ！　いい加減離せ！！　私は女だぞ！！』
『いいじゃん、ほら、こんなに……』
『う、うわっ！！　私の口に指を入れるな！　か、噛むぞ！！』
『舐めても良いんだよ？』

どういう状況？
一夏への恋が終わった途端に暴走しているシャルロット。大丈夫だろうか？

『ちぇ……は～い、どちらさま？』

ガチャッ！

「……え？」
「ピッピカチュウ♪」

その時、歴史は動いた。
「ピカチュウだー！！」
俺は部屋へと招かれた。

「見てよラウラ、ピカチュウだよ！！」
「ほう、こいつがピカチュウという生物か……クラリッサが写真を撮ってほしいと言っていたな。撮ってもいいだろうか？」
「ピカ♪」
「こいつは人の意思がわかるのか！？　興味深い……」
今はシャルロットに抱き枕な状態にされている。
「本当にいたんだ～♪」
やめろ！　勝手に撫でるな！　どうせなら喉を撫でろ！！
あ、あふぅ……テクニシャン……♪
「かわいいよ～♪　でもなんでここに？」
「ふむ、もしかしたら私を訪ねてきたのかもしれないな」
ラウラ、正解。今なら黄色いパネルが白いパネルに変わるよ。
「ピカ～……」
「……何を言っているかわからんぞ」

コンコン！

誰かやってきたようだ。

ガチャ！

「シャルロットさん、新作のお料理が出来ましたので試食を……？」

珍しいな、セシリアがシャルロットとラウラの部屋に来るなんて。

「ピカチュウ！？　な、なな、なんでここに！？　あ、あの！抱かせてくださいますか？」

「うん、いいよ」

俺はシャルロットからセシリアにチェンジさせられた。

「わぁ……かわいいですわ～♪」

そんなに頭撫でられると照れるな……／／／

ああ、また眠くなってきた……セシリアって少し体温高いのね。

なんというか、幼いころに感じた母の温もりのようなものが……。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――セシリアｓｉｄｅ

「あら？」

「ピー……カー……」

どうやら眠ったみたいですわね。

わたくしはベッドに腰を下ろし、優しく抱きしめました。

それにしても、世界的人気なキャラクターがなぜ実在してるのでしょうか。

「シャルロットさん、この子が入る位のカゴと……タオルケットはありますか？」

「あるよ、ちょっと待っててね」

わたくしはこの子の為に簡易的なベッドをつくってあげました。

「ピー……チャー……」

「ふふ、ぐっすり眠っているようですわね」

「ほんとだ、幸せそう」

「随分とセシリアの抱き心地が良かったのだろう」

わたくし達は、このままピカチュウの寝顔を眺めていました。

「「「かわいい」」」

それにしてもこの子はいったいどこに生息していたのでしょうか？

コンコン！

あら？　誰かしら？

「ああ、僕が出るよ」

ガチャ！

「やっほー、二人とも……あれ？　なんでセシリア――」

「「「し～！」」」

そして声を小さくする鈴さん。

「嘘っ、なんでピカチュウがいるの？」

「この部屋を訪ねてきたみたいなんだ」

「ところで鈴さんは何の用でしたの？」

鈴さんは思い出したかのように、一枚のチケットを取り出しました。

「これ、セシリアと一緒に行こうかなと思って」

「わたくしと？」

そこにはプールのチケットがありました。

なぜ……わたくしと？

「実は当日、イズールと行けると思ってたんだけど、イズールはなんだか予定が入ってるみたいで……。なんでも、『強盗をプレデターのように撃退するんだ』とか張り切ってたけど……。とにかく、セシリアを連れて行く理由は……その……最近おいしい物ご馳走してくれるお礼……」

そういう事でしたの。イズールさんも鈴さんがこういう事をする

のに断るなんて――。
いえ、あの人は未来を知っている事になりますから、何か裏があるはず……。まぁ、それでもプールで泳げるなら別に思惑に乗ってあげても良いでしょう。
「ふふ、鈴さんありがとうございますわ♪」

――セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ
――時は変わって次の日。

「えぇー、明日からいよいよ夏休みだ。全員はしゃいで事故などを起こさないように」
「「「はーい！」」」
「それと、現在イズールが行方不明だそうだ」
「「「はー……ええ！？」」」
まずった……変身解除するタイミングを完全に逃した。
「ええ～、今日は特別ゲストに……ピカチュウを呼んでいる」
現在、俺は千冬先生の頭の上でたれぱんだのような状態になっていた。
「こいつは昨日、一夏の部屋の前にいたのを捕獲した」

実は昨日、シャルロット達の部屋から帰る途中、見つかって捕獲、愛玩動物として抱き枕にされたのである。あの乙女な千冬さんは……ある意味すごかった。

隣の山田先生はなんだかソワソワしている。

「ピカ！」

「「「かわいい～！！」」」

「ピカチュウ、今日はイズールの席を使うといい」

「ピッピカチュウ♪」

もしかしたら千冬先生は俺の正体に気付いているのでは？　いや、だったら昨日のような乙女な状態は晒さないはず。

「さて、授業を始めよう――」

――休み時間。

「ねぇねぇ、君はどこに住んでるの？」

「あ、私が抱きしめるの！」

「いや、私よ」

「ちょっと！　ピカチュウが困ってるじゃない！！」

予想通りのお祭り騒ぎ。

どうなることやら――ガフッ！　誰だ！？　俺の尻尾をテュンテュンするのは！！

「へぇ～、本当に生きてるのな」

一夏ェ～！！　俺様の大事な尻尾をテュンテュンしていいのは鈴だけだ！！　死ねィ！！

？ピカチュウの１０まんボルト。

バリバリバリ！！

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ああ、織斑君がピカチュウを怒らせちゃった……」

「流石に尻尾は駄目だよ～」

周りの女子が一夏を冷たい目で見つめる。

ふぅ、久々の電撃だ……快感！！

キュルルリン！！（ニュータイプのＳＥ）

その時、イズールに電流走る。

な、なんだ！　このプレッシャーは……。

プレッシャーの方向を見ると、そこには４組の更識簪さんがいた。

じ～。

すると、簪さんのメガネが緑色に光る。

あのメガネはたしか……ＩＳ用の簡易ディスプレイ。いや、たしかこの前、サムスのバイザーシステム搭載の新型に変わったって…

…まさかスキャンバイザー！？

ピピピ♪

スキャン結果を見る簪さん。
そしてこちらに近づいてきた。

「……秘密にしてあげます」
「ピ！？」

そして懐から、俺の部屋に保管してあるはずのＩＳ全巻を取り出した。

「！？」
「お部屋から見つけました。ちなみに織斑君に頼んで部屋を開けてもらいました」

一夏の野郎！！　俺の私物の管理は徹底的にしろとあれだけ言ったのに～！！

「『借りたい』と言ったら貸してくれました」

俺の私物は貸出したら世界滅ぶわ！！
そしてＩＳ全巻を見た主要メンバーが動き出した。

「ちょっと！！　なんであなたがそれを！！」
「……借りた。織斑君にたのんで」
「お願いだよ！　僕の為にそれを貸してくれ～！！」

シャルロット……お前……。

「……駄目♪」
「うわぁぁぁぁぁ！！」
あれ？　簪さんってこんなキャラだっけ？
「……それより、あなた……喋れるでしょ？　なんでいちいち面倒な事してるの？」
簪さんが俺に話を振った。
俺のようなマスコットに人の言葉を話せというのか！？　そんな夢も無いようなことを……面白いね！！
「――負けたよ、簪さん。たしかに僕は喋れるよ」
声はチョッパーのような声である。
「しゃ、喋った！？」
「嘘……」
「ええ！？」
「キャァァァァァァ、シャベッタァァァァァ！！」
俺はスポンジボブじゃねぇっつ～の！！
「簪さん、７巻の１６９ページ」
簪さんは言われた通りにページを開き、顔を真っ赤にした。
「お返しだよ♪」
「……うぅ……」

うつむく簪さん。
ちょっとかわいい。

「ねぇ！！　わたくしの家族になりませんか！？」
「いや、私のだ！！」
「僕の！！」
「わ、私もだ！！」

セシリア、箒、シャルロット、ラウラの順で俺に交渉してきた。

「あ～……駄目、僕にも帰る場所はあるから」

「そうでしたの……」
「そうか……」
「そうなんだ……」
「む、残念だ……」

俺はこの隙に逃げた。

「じゃ、また今度ね♪　バイバイ♪」
「「「「あ……逃げた」」」」

？ピカチュウはにげだした。

――廊下にて。

ち、ドッペルゲーム並の勢いだな……。
今、学園生徒が必死になって俺を追いかけている。
外に出れば、風船で空を飛んでミッションコンプリートなのに……。

「者ども！！　あのピカチュウを追え！　追うんだ！！」
「くそっ、実際のレアポケモンハンターはあんな感じなのかな？」

俺はとにかく逃げた。
お、エネルギーがやっと回復した。
これでいつもの本調子が取り戻せる。ならばっ！！

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――箒ｓｉｄｅ
――第三アリーナにて。

私は今、ピカチュウを追っていた。

「一夏！　絶対にゲットするぞ！！」
「箒、落ち着け！！　俺達はモンスターボールを持っていないんだぞ！？」
「ええい、そんなの知るか！　絶対に捕まえるぞ！！」
「そんな無茶な……」

私は紅椿を起動し、センサーを使って索敵した。

反応あり。
場所はアリーナ内部！！
他のＩＳ装着者も気付いたようだ！！
――大型のエネルギー反応。注意してください。
む、どういうことだ？
――ズシンッ！！
「グルルルルゥ……」
私たちの目の前に巨大な狼のような生物が現れた。
「あ、あああああ、あれは……ジンオウガ！？」
「一夏、知っているのか！？」
「アイツはイズールの持ってたゲームに出てきたモンスターだ！！」
「も、モンスター！？　てっきりピカチュウの進化形態だと……」
「マスコットが色々過程をすっ飛ばして凶悪面になるかよ！！」
ジンオウガという生物が青い光に包まれた。
「まずい、アイツは本気だ……箒！　逃げるぞ！！」
「こ、ここで逃げるなんて男……いや、私の恋人ではない！！」
「あれは冗談抜きでヤバ――」
「アオォォォォォォォンン！！」

雷狼竜
【ジンオウガ（イズール変身体）】
ＶＳ
主人公
【織斑一夏】
&
一夏の幼馴染
【篠ノ之箒】
&
その他

ジンオウガはこちらの様子を伺いながら移動する。

「――ば、化け物！！　た、助けて！！」

ジンオウガは逃げていく生徒には興味が無いようだ。

「二人とも！！　無事か？」
「む、ラウラか」
「あの生物はなんだ！？」
「ジンオウガというモンスターらしい」
「モンスター！？」

ジンオウガはただこちらを見つめている。
もしやあいつには戦う気は無いのではないのだろうか？

『生徒の皆さん！　避難してください！！　ここは教師で何とかします』

山田先生達がＩＳを装備して現れた。

「あの生物はいったい……」

「分かりません、ですが危害を加えるようなら……」

「グルルルルルル……」

教師達はジンオウガの視線で怯む。

「どうやら威嚇だけのような気もしますね」

「――山田先生！！」

「織斑君？」

「あのジンオウガ……もしかしたら何もする気はないのではないでしょうか」

「あの生物はジンオウガというのですか……。でも何で向こうは何もしないと言えるのですか？」

「はい、ジンオウガは逃げてく生徒などには見向きもせず、しかもこっちをただ威嚇しているだけなので……肉食なのに」

一夏の言葉で教師達とジンオウガとのにらみ合いは止まる。

「……グルル……」

ズシン

ズシン

ジンオウガはアリーナの外へ行こうとするが、バリアで進めない。
すると勝手にバリアが解除され、ジンオウガは去って行った。

「結局……なんだったのだ、一夏」

「さぁ……」

結局、今回の事件の真相を教えてくれるものは誰もいなかった。

――箒side end

――イズールside

「いやぁ、助かったよ。変身して追い払おうと思ったら、バリアの事忘れちゃって」

「……詰めが甘い」

俺は今、簪さんの肩にピカチュウ状態で乗っていた。

「それにしても流石スキャンバイザー、ハッキングも簡単のようだね」

「正直私もここまで簡単に出来るとは思わなかった」

そして俺達は一夏&イズールの部屋にたどり着いた。

俺は元の姿へ戻る。

「今日はごめんな、後俺の全巻返して」

「代わりにアニメ貸して」
「それなら一緒に鑑賞会でもするか？　一夏もそろそろ帰ってくるようだし」
「……うん……／／／」
こうして、俺と簪さんは二人でアニメを鑑賞するのであった。

――その夜。
「イズール……あれ？　簪さん？」
「おお、鈴。一緒にアニメ鑑賞会してたところ。一緒に観ようぜ」
「あ、いいわよ。……そういえばもしかして、イズールの事好きだったりする？」
「……うん／／／」
なんて罪作りな男なんでしょうか私は♪
「いや、あんたがハグする性格なのがいけないんでしょうが！」
「怒るなよ鈴。抱きついてやるからさ♪」
「うぅ……これで怒るに怒れないのよね」
俺は鈴に抱きつく。簪さんはじ～っと眺める。
「……鈴、簪さんも仲間に入れてあげよう」
「ああもう……わかったわよ」
鈴の隣に簪さんを座らせ、二人に抱きつく。

何だか変な構図。

「今度は何観る？」

「「ビーストウォーズ」」

こうして、少しの間、俺達は不思議な時間を過ごした。

にしても、簪さんはやっぱりフラグ成立してたか……。

まぁ、鈴の事もわかってるし、なんとかなるかな。

――おまけ。

「ピカチュウさ～ん。どこですか～？」

山田先生はまだアリーナで探していたとさ。

――その2。

「箒……」

「一夏……」

この二人は甘い時間を過ごしたとか。

――続く。

第二十二話　ピカチュウ伝説再び！！（後書き）

さらに話の構図がめちゃくちゃになっているような……。
ご感想をお待ちしております。

第二十三話　プールの監視員はほくそ笑む。（前書き）

ついに１０万ＰＶ行きました！！
今の私は気分が有頂天。
やっと就職の山場の一部が終わり、夏休みが始まります。
頑張ります！！

第二十三話　プールの監視員はほくそ笑む。

八月、クソ暑いったらありゃしない。昔から、この国の夏は嫌い大っ嫌い。

そもそも私はこの国の人間じゃない。最初は両親の都合、次は祖国の都合でここにいる。

凰鈴音。それがあたしの名前。

ＩＳ『甲龍』の専属操縦者にして国家代表候補生。

現在はＩＳ学園に通う一年生。

「あっつぅ……」

八月、ＩＳ学園は遅めの夏休みに入る。そのせいで、世界中からやってきた学園は現在ほぼ半分が帰省中。あたしも本当は国に帰ろうかと思ったんだけど――

「……」

でも、やめた。

帰ってもどうせ両親は一緒にはいないし、軍施設で面倒な訓練も受けたくない。

それに別の理由だってある。

ズモモモモモモモ……。

あれ？　なんだか？の廊下が涼しくなってきたような……。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ。

ドドドドドドド。

ズンドコズンドコ。

あの部屋から漂ってきている。
たしかあの部屋は……イズールと一夏の部屋。
「イズール、いる？」
ガチャ！
ブフォォォォ……。
「寒ッ！！　な、なにこの部屋！？」
部屋の中は所々凍っており、季節を逆行した空間になっていた。
「あ、鈴？　どうした、また性欲処理か？」
「もうそのネタでいじらないで！！　その……思い出すから……／／／」
イズールはこの部屋で半袖短パンだった。
「ああ、廊下のエアコンが止まってたから思わずランダスの能力で冷気流しちゃった♪」
「あんた！　流石に寒すぎるわよ！！」
ミニトマトの植木鉢なんかすごいことに……ん？　土が光ってる？
「ねえ、イズール。このミニトマトの土が光ってるのはなんで？」
「ああ、肥料の代わりにジャイアントストラトスのコア使ってるんだよ」
「ええー！？」

ＩＳコアを何に使ってるのよ！？
「それより一夏にばれたらまずいんじゃ……」
「ああ、それなら……」
イズールが上を指さす。
そこにはグッタリした一夏が天井に氷で貼り付けられていた。
「暑いと騒ぐもんだから黙らせちゃった♪」
――超、ＯＫ！！
「全然オッケーじゃないわよ！！　一応幼馴染だから解放してあげて！！」
イズールは渋々氷を全て除去した。
一夏が天井から落ちてきた。
ドシャッ！！
「まぁ、凍傷にはにはなってないから問題はないよ。さて……」
イズールはベッドに置いてあった荷物を担ぎ、窓を開けた。
「ちょっとバイト行ってくる」
「バイト？」
「そう、ちょっと欲しい物あるからね。あ、ちゃんとプールの相手を決めた？」
「うん、セシリアとね」
「喧嘩しないように気をつけなよ？」

「わかってる」
「それじゃ！　あ、一夏はそのまま寝かせても大丈夫だからね」
イズールはそう言うと窓から飛び降り、空中サーフィンで飛んで行った。
相変わらず自由ね……。
あたしは一夏を放置したまま、部屋を出て行った。

――自室にて。

「ただいま」
「あ、おかえり。鈴、今テレビでなんかやってるよ」

金髪碧眼のルームメイト、ティナ・ハミルトンはテレビを指さした。

『――海底から回収されたガルクライフ社の巨大兵器のパーツから解析された結果によりますと、謎の物質、謎の次世代エネルギーなど、今の科学では証明できないようなオーバーテクノロジーが詰まった巨大ＩＳという説が濃厚となってきました。回収されたパーツを使ったＩＳの開発も進行しており、ガルクライフ社がいない今、この技術を復活させた企業こそが次世代の先頭に立つことになるでしょう。この技術の競売にアメリカ、中国、イギリス、フランスの国家や有名企業が名乗りを上げており、ドイツは巨大潜水艦とイナゴ兵とよばれる量産型の次世代ＩＳの研究を現在行っている為、参加しないとのことです。さらに近辺で回収された青く光る謎の鉱石についてですが――』

なにこれ？　ちょっと！！　これはまずいんじゃない！？
あの青い鉱石って、フェイゾンの染み込んだ鉱石じゃん！！
たしかあのゲームをプレイした時だと……宇宙海賊がフェイゾン鉱石の鉱脈見つけて……まさか、あのシルバリオ・ゴスペルも……これで……。

「鈴、どうしたの？」
「た、たたた、大変よティナ！！　フェイゾンが……フェイゾン鉱脈が……実在してる！！　もしかしたらフェイゾン生命体やフェイゾンコアも！！」

あたしはティナの肩を掴み、ガクガク揺らす。

「ちょ、ふぇ、フェイゾンって何！？　いったいどうしたの！？」

あ、そうか……だからゼオルさんの戦力や備えが異常だったんだ。たしか『転生者殺し』とかイズールから聞いたわね、あれがイズールの記憶から具現化したのがフェイゾン形態のゴスペルじゃなくて、フェイゾン鉱脈、最悪、フェイゾンコアだったら……。

「終わる……この星が終わる……汚染されちゃう。その前に国家や企業がアレに手を出したら……」
「り、鈴？　大丈夫！？」
「こうしちゃいられないわ！！　たぶんイズールも知らない、早く知らせないと……」

でもイズールのバイト先も知らない……駄目だ。今は諦めるしかない。
先生達も夏休み中いつもこの学園にいるとも限らないし。

「ごめんティナ、ちょっと体の震え止まるまで抱きしめてくれない？」
「え、鈴？　本当に大丈夫！？」
あたしはしばらく体の震えが止まらなかった。

――鈴ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――山田ｓｉｄｅ

「ふぅ。やっと一段落つきました」

私、山田真耶は職員室の自分の席で熱いお茶をすすっていた。真夏に冷房の効いた部屋で熱茶――というのは、やっぱり贅沢ですよね。
しかも、この学園は運営資金の一部を税金でまかなっているので、多少なりとも胸が痛む思いだった。
（でも、今だけは許してください。やっと……やと溜りに溜まった一学期の総まとめが終わったんです……）
というのも今年はイレギュラーが多すぎた。
『ＩＳを扱える男子』に始まり、『ＩＳ学園のドッペルゲンガー』、イズール。異常な数の専用機持ち、頻発する謎の事件、巨大ＩＳ、さらには国際ＩＳ委員会からの説明要求と織斑一夏とイズール・ユ・ミヅルの身柄引き渡し命令、ガルクライフ社、そして……フェイゾ

ン。
考えるだけでも頭が痛い。
それらの仕事がやっと半分以上片付いた……あれ？
私が書類を見てみると、書類のほとんどが片付いていた。

「あ、山田先生。例の資料を持ってきました」
「え？　例の資料？」
「流石ですね、昨日物凄い勢いで仕事をやって、織斑先生と帰った時の姿はまるで戦士でしたよ」

私は昨日仕事をここまでやった記憶は無いし、織斑先生と帰った記憶も無い。
イズール君が？　いえ、イズール君の変身だったとしても、イズール君はこういう仕事のやり方はわからないはず。

「それにしても山田先生と織斑先生は本当に仲が良いですね。織斑先生に『チフユサンダー』なんてあだ名を付けられるなんて」

ッ！？　今、『チフユサンダー』って名前が出ませんでした！？
その名前は以前イズール君から聞いた、あの時の巨大な織斑先生の名前！！
ということは……その隣を歩いていた『山田先生』というのは……。

「あの？　どうかしましたか？」
「――い、いえ、何でもありません！！」

私は同僚の先生から資料を受け取りました。

「では私は仕事に戻りますので」

「あ、はい。ありがとうございました」

私は貰った資料について読んでみました。

「ええと――『最近発見された謎の青い鉱石について』？　なんの資料でしょうか……」

紙をめくるとそこには一回だけ見たことのある写真がありました。

「これは……フェイゾン鉱石！？　あ、あれって机上の空論では！？」

フェイゾン……イズール君の体内にある細胞のみが生み出すことの出来る放射性物質の高エネルギー。あの時の資料には、『生物の突然変異』や『無機物生命体』、『惑星汚染』といった実態の無い理論のみが存在して……。でも発見されたのは間違いなく前に資料で見たフェイゾン鉱石……。

『――海底から回収されたガルクライフ社の巨大兵器のパーツから解析された結果によりますと、謎の物質、謎の次世代エネルギーなど、今の科学では証明できないようなオーバーテクノロジーが詰まった巨大ＩＳという説が濃厚となってきました。回収されたパーツを使ったＩＳの開発も進行しており、ガルクライフ社がいない今、この技術を復活させた企業こそが次世代の先頭に立つことになるでしょう。この技術の競売にアメリカ、中国、イギリス、フランスの国家や有名企業が名乗りを上げており、ドイツは巨大潜水艦とイナゴ兵とよばれる量産型の次世代ＩＳの研究を現在行っている為、参加しないとのことです。さらに近辺で回収された青く光る謎の鉱石についてですが――』

テレビから流れてくる情報は私の体を震えさせました。
本当に実在するなら……あの資料のことが本当なら……これは……世界が終わる。

重なっていた資料から重要な書類が出てきたり、冷房が効いている部屋だったりするが、私はだらだらと汗を流して狼狽する。
その汗はとても冷たかった。……別の意味で。

――山田ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――セシリアｓｉｄｅ

「なんなんですの！？　このニュースは！！」
「落ち着いてください、お嬢様！！」

祖国から帰ってきたら、恐ろしいニュースが飛び込んできました。

――青く光る謎の鉱石発見。

あれはあの時教えてもらった資料にあった……フェイゾン鉱石。
鉱石などにフェイゾンが染み込むと出来上がる物で、今はイズールさんがフェイゾンを体内から直接注がないと完成不可能のはずでしたのに……。

「チェルシー、この青い鉱石について……何か知ってますか？」
「たしか……例の巨大ＩＳの沈んだ海底に眠っていたとか。鉱脈

が」

鉱脈ですか……本格的に危険ですわね……。

もしも、あれが兵器運用できるということを国家が知ってしまったら……。

核戦争よりも恐ろしい放射線戦争が発生してしまいますわ。あれは本当に安易に手を出してはいけない物質ですわ。

「チェルシー、祖国の軍に……いえ、そうしたら機密であるフェイゾンの情報が漏れる事に……」

「お嬢様……」

チェルシーが心配してくれる。

わたくしは足が震えてきました。

「大丈夫です。お嬢様には私がいます」

「ありがとう、チェルシー」

わたくしはその日、チェルシーと一緒に寝て、怖さを和らげました。

――セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――次の日。

――ウォーターワールドにて。

「セシリア！」
「あ、鈴さん。遅いですわよ」
二人は待ち合わせの場所へ来た。
「鈴さん、昨日フェイゾン鉱石が――」
「ストップ！！　今日はそんな暗い話は無し。楽しもうよ」
「……それもそうですわね」
二人は入場した。

『では！　本日のメインイベント！　水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！　参加希望の方は十二時までにフロントへお届け下さい！』
「もしかしてイズールが未来知ってまであんたとさせたかったイベントってこれかな？」
「もしかしたらそうかも知れませんわね」
『優勝賞はなんと沖縄旅行五泊六日の旅をペアでご招待！』
「「いらない」」
鈴には恋人がおり、一夏は箒の恋人という事実がある為、二人はあんまり興味を持たなかった。
「どうする？」

「……でも、優勝してみたいですわ。鈴さんとの過去の決着もつけたいですし」
「そうね。一夏を取り合わなくなってから随分気軽に話すようになったけど、その前の決着はつけよう！」
二人はガシッと腕を組んだ。
「「目指せ優勝」」
ペアなのにどうやって決着をつけるのだろうか？

――その頃。
「にひひひ、やってるやってる♪」
プールの監視員はほくそ笑んでいた。
「さて――お姉さ～ん？」
「どうしたの？」
「俺もあのゲーム参加して良いですか？」
「女の子だらけのゲームよ。空気読めよ」
ギンッ！！
サングラス越しの目つきが変わる。
「俺から賄賂として２０万受け取ったくせに……何か言いました

？」
「いえ、なんでもございません、ボス！！」
「いい返事だ。さて……パートナーだが……お姉さんも参加する？」
「いえ、私は司会なので」
「そっか……」

プールの監視員の男は監視塔から飛び降り、周りを見る。

「う～ん……本当は鈴が良いけど、流石に原作崩壊しすぎてもなぁ……そうだ！」

ピッポッパッ♪
トゥルルルル♪

「もしもし？　あ、ゼオルさん？　ああ、俺だけど、四巻のイベントに最適な人材送ってくれない？　え？　ゼオルさんが行くって？」
「あの……ボス？　誰と電話して……」

男は電話を続けるのであった。

――そして。

「さあ！　第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

司会のお姉さんがそう叫ぶと大きくジャンプする。その動きで大胆なビキニから豊満な胸が思わずこぼれそうになった。
そのせいなのか、はたまた単純にレースの開始を喜んでか、わぁぁぁっ……！　と、会場からは歓声（主に男性の）と拍手が入り乱れる。
レース参加者は全員女――ではなく、一組だけ不気味雰囲気をかもしだすペアがいた。
参加希望して、受付が『お前空気読めよ』という無言の笑みを送ったらしいが、そのペアのみ不気味で、そんな空気出したら殺される勢いだったらしい。

「さ、さあ、皆さん！　参加者に今一度大きな拍手を！」

再度巻き起こる拍手の嵐に、レース参加者は手を振ったりお辞儀をしたりとそれぞれ応える。

そんな中、特にどういう反応をするわけどもないペアがいた。――鈴とセシリアである。
ふたりとも念入りに準備体操しながら、それぞれ体をほぐしていた。

「ねぇ、あそこにいる男のペア、何だか不気味じゃない……？」
「え、ええ、そうですわね……」

視線の先には、ムジュラの仮面を付けた青年と、キータンのお面を付けた男が準備運動していた。

「狐はまあいいけど……あの仮面は何？　なんだかすごい嫌な感じが……」

「わたくしも物凄く同意しますわ……」

まぁ、ムジュラの仮面ですからね。

「さあ！　いよいよレース開始です！　位置について、よ～い……」

パァンッ！

全員が一斉に駆け出す。

「セシリア！」

「わかってますわ！」

開始直後、足払いを仕掛けてきた横のペアをジャンプでかわし、一番目の小島に着地する。

このレースは、なんと『妨害ＯＫ』なのである。――が、しかし、本物の軍隊と同じ訓練を受けた代表候補生に取っては、そのルールはぶっちゃけ有利なのである。

「さあ、いくわよ！」

「ええ――って、ええ！？」

「どうしたの？」

視線の先には、仮面の二人組が、妨害してきた女性の頭を容赦なく掴んでプールに思いっきり叩き込む光景があった。

注目は二人に集まり、妨害が増えるが、あの仮面の二人は軽くあしらっていく。

「おりゃぁぁぁぁ！！」

妨害組のラリアット。しかし、ムジュラの仮面をつけた青年に軽く撃破された。

「ぎゃぁぁぁぁぁ！！」

「……」

『早速だけど、奥の手よ』

『はぁ……。どうなってもしりませんわよ』

『勝つためよ！』

『そ、そうですわね！　勝つためなら！』

鈴とセシリアはボウガイペアに向き直った。

「「うりゃぁぁぁぁ！」」

がっつりと組み合った腕でラリアットを仕掛けてくる妨害ペア。なにがそうまでさせるのか、鈴とセシリアはため息をもらしたあと、風を裂くような素早い動きで一閃した。

どぼーん！　とプールに落ちる妨害ペア、しかしそれはもはや慣れっこのようだった。

「何度でも蘇るわよ！　私たちは！」

水面へと浮上した二人組。しかし、その体にはあるべきものがない。

「ふ……。人は水着無くして生きてはいけない……」

「マリー・アントワネットの言葉通り、水着が無いなら全裸でど

うぞ」
「「きゃぁぁぁぁぁっ！？」」
素早く水着のブラを奪った鈴とセシリアは、パニックに陥る妨害組一瞥したあと手元のそれを丸めて反対側の客席へと放り投げた。
期待通り――というかそれ以上のアクシデントに、会場の男性陣はおおいに沸いた。
「さて、邪魔者は去ったし」
「追撃しましょう」
「こ、これはすごい！　ふたりは高校生ということですが、何か特別な練習でもしているのでしょうか！？」
続く第二の島も、障害そっちのけで二人は突き進む。
一人が放水を止めてその間に通り抜けるという障害だったが、同じくふたりとも同時に走って突っ切った。
「ははん！　余裕！」
「地雷原に比べれば何とも簡単ですわね」
そしてついに第五の島なのだが――問題が起きた。
「あっはっはっ。一般人があたしたち候補生に勝てるとでも――」
「おおっと、トップの木崎・岸本ペア！　ここで得意の格闘戦に持ち込むようです！」
「――はい？　得意の……なんですって？」
「ご存じ二人は先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの武闘派ペアです！　仲がよいというのは聞いて――」

その時。

「……」

「……」

マッチョ・ウーマンの後ろに、仮面の二人組が現れ……。

「な、なにを――きゃぁぁぁぁ！！」

「く、来るな……うわぁぁぁぁぁ！！」

マッチョな二人を軽く投げ飛ばした。

「あ、あんたら……何者？」

「「……」」

仮面の二人は黙って鈴とセシリアを見つめる。

「ええー、ご紹介します。今回唯一の男性ペア。このプールの監視員のアルバイトをやっている、バルゼッタ君と、謎の男、ミスターZペアです！！」

鈴はその言葉であることに気付く。

「バルゼッタって……あんた、イズール！？　バイトって、ここの監視員のバイトだったの！？」

「えぇ！？」

二人が驚く間に仮面の男たちは仮面を外す。

「ピンポ～ン♪　遊びたくなってな」

「おぅ、俺も夏休みだからな」

空想生命体
【イズール・ユ・ミヅル】
&
ガルクライフ社ボス
【ゼオル・ゲバイン】
VS
中国代表候補生
【凰鈴音】
&
イギリス代表候補生
【セシリア・オルコット】

「おじ様……？」
「元気にしてたか、愛弟子よ」
セシリアは少し目に涙を浮かべる。
「おじさまぁぁぁぁぁぁぁ！！」
セシリアはゼオルに抱きついた。
「おいおい、いきなり抱きつくなよ。ここは足場悪いんだから…

…」

そして――。

小島は転覆。

「い――」

「せ――」

「り――」

「ぜ――」

ドボンッ！！

勝負終了。

――その後。

――イズールｓｉｄｅ

「結局、優勝者は無しか」

「しかたないわよ、みんな落ちたんだから」

俺達は落ちた後プカプカと水面を漂っていた。

「おじ様、今日はなんでここに？」

「ああ……ウチの組織も夏休みでね。さっきフェイゾン鉱石につ

いてイズールと話していたところ」
「そうでしたの……」
そう、俺もあのニュースを聞いてパニックになった。
「まぁ、ここの技術者がいくら頑張っても兵器運用には後５０年は必要だな。ただ……資料が漏れなければの話だが」
ゼオルさんは仰向けの状態から立ち上がる。
「さて、そろそろ行きますか。@クルーズのパフェでも奢るよ。一応社長だし、金もある」
「「ゴチになります！！」」
二人の反応は早かった。
「イズール、早速任務だ。@クルーズの席を確保して来い。俺達が追いつく前に」
「了解」
ちなみに今のゼオルさんの言葉の本当の意味は『俺達が到着する前に強盗を血祭りにあげて来い♪』だ。
俺は次回に向けて走った。
――続く。

第二十三話　プールの監視員はほくそ笑む。（後書き）

いつものとおりご感想をお待ちしております。

第二十四話　１０万ＰＶ突破記念作品『生徒会長と段ボールの中身』（前書き）

今回は番外編でちょっと短めです。

第二十四話　１０万ＰＶ突破記念作品『生徒会長と段ボールの中身』

前々回にて、返品待ちだったガルクライフ社商品を獲得した生徒会。
今回はそんな生徒会長の視点から物語を始めよう！

『生徒会長と段ボールの中身』

「～♪　さて、オープン」
私は段ボールを空けた。
「お嬢様、大丈夫なのですか？　前のグミセットもよく分からないままでしたし」
虚は私を心配しているようだけど、今回はそんなことよりも好奇心。
「ん？　なにこれ？」
コントローラーの付いたゴーグル？
どうやらゲーム機のようね。
それにこれは……ガム？
「ねぇ、本音。あなた、これ食べてみたら？」

「えぇ！？　さすがに嫌ですよー」
私は素早くガムを本音の口に入れる。
「アグッ！　――ソ、ソーダ味……」
本音は必死に味の感想を言う。
「会長！　ひどいですよー」
プカ……。
プカ……。
「へ？」
「え？」
「あ、あれ？　これどうなってるの！？」
本音の口からシャボン玉が出てきた。

【バブルガム】
ガルクライフ社の娯楽開発部の作った風船ガム……のようなもの。
これを作ったチームはガムで上手く風船を作ることが出来なかった。
それにイラついた一人が『風船じゃなくてシャボン玉が出るようにすれば簡単じゃないか！！』という意味不明な発想によって開発された。
開発コンセプトは『誰でも簡単に遊べるガム』だそうだ。
口から空気を出すたびにシャボン玉が出るのでちょっとウザい。

口からガムを吐き出せば効果は無くなる。
ちなみにコーラ味とソーダ味の二種類がある。

「おねぇちゃ～ん、これ止めて～」

生徒会室がシャボン玉だらけになる。
どんな科学力でこんな物が作れるのよ……。
しかもこのシャボン玉……意外と割れにくい。

「本音……大丈夫？」
「口にシャボン液を入れた時のような感覚はないけど……」

プカ……。

「なんかやだ」

プカ……。

ガムを吐き出せばいいのではとも思ったけど、あえて教えないであげた。

プカ……パンッ！

――次の品。

「私の……人形？」
「わぁ～、そっくり♪」
プカ……。
「本当に……そっくりですね」

【タテナシ人形】
娯楽開発部が造形した六分の一スケールの大型人形。
その正体はスパイ用の小型ＩＳ。
専用クレイドルで三時間充電すれば２４時間戦えます。
これは肖像権とか著作権、その他色々引っ掛かり、ゼオルに怒られた。

私はじっくり観察する。
パンツも実際持っている物のデザインだ……。
「会長～♪　こっちに着せ替えセットがありますよ～♪」
プカ……。
段ボールを見ると、そこにはこの人形用の着せ替えセットがあった。
「魔法少女に着物、競泳水着に……執事服なんてマニアックな物も用意されてるのね」

「会長、遊んでみたらどうですか？」

プカ……。

本音が……というかいい加減そのシャボン玉がウザく思えてきた。

――次の商品。

「なにこれ、紙？」

【重要】歌詞の無断転載に関するお知らせ

いつも小説家になろうグループをご利用頂きありがとうございます。

この度、一般社団法人日本音楽著作権協会様より、歌詞転載に関する対応要請のご連絡をいただきました。直接の申し立てが行なわれましたテキスト並びにユーザに対しましてはすでに対応を完了しておりますが、昨今情報提供フォームより受付を行なっております問い合わせに歌詞の無断転載に関する情報提供が増加しております。

権利者の許可を得ない歌詞の転載は部分的であった場合でも、著作権の侵害行為となります。小説家になろうグループでは利用規約第１４条１項にて「当グループもしくは他者の著作権、商標権等の知的財産権を侵害する行為、又は侵害する恐れのある行為」を禁止し、小説家になろうグループ関連サイトをご利用の際にはその旨に同意をいただいているものとして各テキスト等の情報の取り扱いを行な

っております。この禁止項目は小説本文だけでなく、感想や活動報告記事など「テキスト、画像、等本サービスを利用して投稿できる情報」全てに適用されます。

今回の要請に伴いまして、歌詞の無断転載が発覚いたしました場合は、即時のユーザＩＤ削除などの厳しい対応を実施させていただきますことをご連絡申し上げます。また、歌詞転載に関する注意事項を後日ガイドラインにて掲載させていただきますので、テキスト等の情報の投稿を行なわれます際は、ご確認ください。

もし、歌詞の無断転載を発見されました場合は、各小説閲覧ページ下部「情報提供」フォーム、もしくは小説家になろうグループサイト各「お問い合わせ」フォームより運営まで情報をお寄せいただきますようお願い申し上げます。

※運営よりお送りするメールに関して

運営より何らかの具体的な対応が行なわれたユーザに対しましては、運営より対応を行なった旨のご連絡を行なっておりますが、メールの受信設定などによりメールが返送される場合があります。登録ユーザの方は、今一度登録メールアドレスの確認、メールの受信設定の確認を行なっていただきますようお願い申し上げます。

今後とも小説家になろうグループをよろしくお願い致します。

「「「……」」」

申し訳ございませんでした。

言い訳はしません。

今後は、何か間違いを犯した時は、みなさんが警告して止めてください。
Ｂｙ作者。
「なんだか哀愁と懺悔の漂う紙ね……」
「「……」」
この文章については保留になった。

――その頃。
「……ということは、某とある×オーズの人も大丈夫かな……？」
「おじ様？　何を言ってらしますの？」
「さぁ？」

――生徒会室。
「さて、変なガムの実験も終わったし……最後のアイテムを確認するわよ」
「「はい」」
三人は段ボールの中を確認する。
そこには絵本があった。

「「「絵本？」」」

【笑顔の絵本】
娯楽開発部の最高傑作の一つ。
その絵本に触れると、幸せな記憶が絵本に描かれる。
それを見た人は心が優しくなるという。

「あ、絵が浮かんできた……これは……私と簪ちゃんが一緒に遊んでいる場面みたいね」

絵本には私と簪ちゃんが笑顔で一緒に遊ぶ場面が描かれていた。
これは随分昔……更識の当主になる前……だったはず。

パラ……。

私はページをめくる。
そこには一緒に公園で砂の城を作る姉妹が描かれていた。

「……」
「会長、泣いてるの？」
「お嬢様……」

どうやら私は少し泣いていたようだ。
あの頃……たしかに楽しかった。

パラ……。

最後にはこう書かれていた。

――お姉ちゃん、今でも大好きだよ。ちょっと力になれないのが不満なだけ。だから……何か必要な時は力になるよ。

「うっ……ぁう……ふぇ……うぅ……」

「会長、ティッシュとハンカチありますよ」

「お嬢様、大丈夫ですか？」

私は声を殺して泣いた。

簪ちゃんの本心が……こんな事って……。

そして私は泣き続けた。

――その頃。

――倉庫にて。

倉庫の中の掃除用ロッカーのような物が開く。

ガチャ……。

『ん～、良く寝た。あれ？　ジャイアントさんの信号が無くなってる。どういうこと？』

タテナシロボは周囲を見渡す。

目の前に誰かいた。

『やっと目覚めたか。眠り姫』
『あれ？　チフユサンダー０１ちゃん♪　おや、グレートちゃんはどうしたの？』
『随分前に撃破された。ジャイアントも撃破されて今は全員フリーだ』
『そっか……。ゴ・ダンダーとメカヤマダちゃんは？』
『それぞれ別行動だ。ＩＳは現在、廃材から復元中だ』
『ふむむ……ジャイアントさんのコアは残ってるみたいだね。アホ毛にビンビン反応が来てるよ～♪　これなら戦力回復も簡単だね』
『そうも言ってられない。親組織が完全に敵に回った』
『あれま！！　なら……準備は徹底的にしないとね♪』
二人の声は静かに響いていた。

――再び生徒会室。
「落ち着きましたか？」
「……えぇ」
私は涙で真っ赤になった目をこする。
「ふぅ……泣いたら甘い物が欲しくなったわ。なにか食べましょ」
私はソーダの絵が描かれたグミの袋を開け、食べた。
モニュモニュ……。

おいしかったので、思わず全部食べてしまった。

「「あ……」」

「二人ともどうした――ッ！？」

私はその袋を恐る恐る確認してみた。

【アポトキシン４８６９グミ】

某バーローに登場した薬をモチーフに作られたグミ。

一個食べると外見年齢が一つ下がる。

全部で８個入っている。

模倣品なので一週間程度で元に戻る。

解毒グミでも直る。

？さぁ、トラブルの始まりだ。

――続く。

第二十四話　１０万ＰＶ突破記念作品『生徒会長と段ボールの中身』（後書き）

【重要】歌詞の無断転載に関するお知らせ
これを昨日見たとき、てっきり私個人への文章だと思って一人でパニックになってしまいました。
ご感想をお待ちしております。

第二十五話　いつも売り切れのミックスベリー、それはちょっとした不幸の味。

ラウラにもチャンスをという意見がございました。
どうしよう、一夏×箒の時点で超展開以外での方法が思いつかない。
ここは娯楽開発部の出番だ！！
今回は上記と関係のないお話です。

第二十五話　いつも売り切れのミックスベリー、それはちょっとした不幸の味。

俺は今、@クルーズへ向かって走っていた。
現われるであろう強盗を血祭りのデデーン♪にするためである。

「ちっ、この体じゃちょっと走るのはきついな……身体能力強化と動きやすい体が必要だな」

なら……シャルロットの大人姿がいいのでは？
そう思った俺は、変身する。

「イズール、変身！！」

バシュゥゥゥゥン！！

紫の光を放ち、俺はシャルロットをアレンジした姿に変身する。

「うん、動きやすい♪」

俺はビルをキッククライムで上り、建物の屋根から屋根へと飛び移る。

シュタッ！
シュバッ！

気分は忍者である。

「さて……と。おっと、もう警察が集まってきてる」

@クルーズには既に警察が囲んでいた。
俺はサーモバイザーを起動し、熱探知で中を確認する。
「うん、役者は揃ってる」
俺はスキャンバイザーを使って敵をスキャンした。
「ショットガンにマシンガンにハンドガン。けが人無しでクリアするには……これだな」
俺はフェイゾンを使って透明化し、店に侵入した。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――ラウラｓｉｄｅ

今私は犯人の男の一人の懐へと膝蹴りを叩き込んでいた。
「ッざけやがって！　このガキ！」
犯人のリーダーらしき男が発砲する。
それを私はいろんなものを盾にしながら避ける。
「あ、兄貴っ！？　こ、こいつッ――」
「うろたえるな！　ガキ一人、すぐに片づけて――」
「一人じゃないんだよねぇ、残念ながら」

リーダーの背後に執事服姿のシャルロットが迫る。
うむ、順調だな。

――その時。

ピンポ～ン♪
ウィィィィン……。

突然自動ドアが開く。
全員が一瞬そちらを向く。
敵の増援か！？

「あ、兄貴……今のは」
「さ、さぁ……それより――」

すると、店内の気温がぐっと下がる。

「な、なんだ！？　なんで急に寒く？」

この場の全員の口から白い息が見える。
一体何が？

カツン……。
コツン……。

！？　何もない場所から足音が！！
しかもこの気配……まさか！！

「ぐぁぁぁぁぁぁ！！」

犯人の一人が首を抑えながら空中に浮かんだ。
「ラウラ！！　何アレ！？」
「……ゴースト」
「ゴースト！？　ま、まさか大浴場の……」
「ああ、私が学園に来て最初の頃に遭遇……いや、遭遇したとは言いにくいがとにかくヤツは透明だ」
あのときは本当に怖かった。
軍時代にも遭遇したことのない未知の存在だ。
「な、なにがどうなってんスか！？」
「お、俺が知るか！！」
空中に浮かんでいた男はまるで投げられたかのように壁に叩きつけられた。
「くそ、撃て！！」
犯人たちはゴーストがいたであろう場所に向かって発砲する。
しかし、そこには何もない。
「おい！　誰だか知らないが出てきやがれ！！」
「そ、そうだ……出て来い！！」
犯人たちはゴーストを挑発する。
人質達は怯えていた。
私とシャルロットも警戒する。

「こ、こっちには人質がいるんだぞ！？」
犯人は人質の一人を盾にしようとするが、人質の様子がおかしい。
しかもその人質はシャルロットにそっくりだった。
「裏拳♪」
「へ？」
ズガンッ！
犯人のリーダーは思いっきり飛んで行った。
「あ、兄貴！！　よ、よくも――」
犯人は銃を構える。
「あ、あの人……危ない！！」
シャルロットが割り込む。
無茶だ、よせ！！
しかし、発砲はされない。
「あ、あれ？　な、なんでトリガー引いてるのに」
「これのこと？」
シャルロットそっくりの人質の手には銃弾の入ったマガジンがあった。
「あ、なんで！？」

「さて、今重要なのは……お前たちが明日まで生きられるかどうか……」

人質は近くにあった掃除用ロッカーから……ガトリングを取り出した。

「……答えは、Ｙｅｓ　ｏｒ　Ｎｏ　ア～ヒャヒャヒャヒャ～♪」

ガシャンッ！！

キュィィィィィィン……。

ガトリングは回転を始める。

「ヒィッ！！　た、助けて――」

ズガガガ

「お母……さん？」

シャルロットは人質を見てそうつぶやいた。
たいかに大人でシャルロットに似ているが……。

――ラウラｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

まずった、どうやらこの姿はシャルロットの母に似ていたらしい。

「……ごめんね、私は君のお母さんじゃないよ」
「でも……姿も声も……お母さん」

ゆっくりと俺に近づいてくるシャルロット。

「絶対お母さんだ！」
「シャルロット、あなたお母さんは死んでしまった。それは変わらない事実よ」
「僕の名前……それに死んだって……やっぱり……お母さん……」

あ、ミスった。

涙目のシャルロットが抱きついてきた。

「お母さん……助けに……来てくれたんだね？」

仕方ない、ここは話を合わせるか？
いや、そうすると正体がばれた時、ショックが大きくなる。
「あの……その……私は……シャルロットのお母さんじゃなくて……その……」
いいアイディアが浮かばない……。
「……ごめんなさい、ドッペルゲンガー。お母さんに似てたから……つい……」
「……知ってたのか」
どうやらシャルロットは俺の正体に気付いてたらしい。
「あの……お願いあるけど……いい？」
「……いいけど」
シャルロットは涙で少し赤い目をこちらに向けてこう言った。
「今日だけ……僕のお母さんでいて」
「……はい？」
俺は警察が突入するまで茫然といていた。
――二時間後。

俺達三人は夕焼けの道を歩いていた。

「ねぇ、お母さん♪」

「どうしたの、シャルロット」

「呼んでみただけ♪」

母に似ているらしい俺は今シャルロットに懐かれていた。

「買い物はもう全部か？」

「うん。っていうかラウラ、自分のものなのに後半は『任せる』とか『好きにしろ』とかばっかりだったでしょ。ダメだよ、女の子なんだから」

「あまり小言ばかり言うな。老けるぞ」

「ふ、老けないよっ」

どうやらシャルロットには思い当たる部分があるらしい。

「老けるか……もう19年生きてるけど、思考が年寄っぽくなったな～、俺も」

「お前は19歳だったのか！？」

「お母さんの一人称は『俺』だったんだ……」

「ん？　イメージ崩れるから嫌か？」

「お願いしてる立場だから強要はしないよ」

ちなみに、俺が透過できるとう事実に二人は気付いていない。

「あ、そうだ。向こうの公園行ってみようよ」

「「公園？」」

「うん、城址公園。元はお城なんだって」

「ほう。それは興味深いな。日本の城は守りにやすく攻めに難い

と聞く。城跡とはいえ、一見の価値はありそうだ」

ラウラはあいかわらずの軍事思考だな。

まぁ、それがこの子の人気の秘訣の一つでもあるんだけど。（ちなみにもう一つはギャップ萌え）

――その頃。

――@クルーズにて。

「ちっ、イズールめ……俺達の事を忘れやがったな！？」

「あ、メールだ。なになに――ラウラとシャルロットに捕まった。すまないがゼオルさんとこで何か御馳走になってくれだって」

「ラウラさんとシャルロットさんが近くにいらっしゃいましたのね」

――城址公園にて。

クレープ屋を発見。

「ご注文どうぞ」

「一番良いミックスベリーを頼む」

神は言っている、ミックスベリーは無いと。

「あぁー、ごめんなさい。今日、ミックスベリーは終わっちゃったんですよ」

がーんだな、出鼻をくじかれた。
どうしよう、ミックスベリーを食べたい気分だったのに……。
アームロックでもかけるか？

「あ、そうなんですか。残念……。ラウラ、別のにする？」
「ん？　イチゴとブドウをくれ」
「お母さんは何にする？」
「う～ん……じゃあ、このカキザキエクストリームで」

名前が気に入ったので。
というかすぐに撃墜しそうな名前だな。

「ねぇ、そのカキザキエクストリームってどんな味なの？」
「……ライチとソーダと……ちょっとした余裕の味がする」

結局のところ、このソースの味は表現しづらい。

「んむ、んっ。これおいしいね！」
「そうだな。クレープの実物を食べるのは初めてだが、うまいと思うぞ」
「俺は一度『米粉クレープ』というものを食べたことがある」
「米粉？　お米の粉なの？」
「うん、お米の味はそんなにしないけど、食感が面白いね。擬音で表すなら……モッチャモッチャ……だね」

俺の話に興味を持つ二人。
「今度ウォルツさんに頼もうか？」
「そっか、お母さんもガルクライフだからウォルツさんの知り合いなんだね」
「そうなのか」
二人は目を輝かせる。
「そうだ、今度また来ようよ。次はみんなも誘ってさ」
「そうか。では私は一夏と――」
ラウラがそう言いかけ、声の元気が無くなる。
「一夏は……箒の恋人になってしまったんだな」
「ラウラ……」
俺のせいでもあるので、ちょっと心が痛む。
俺はラウラをそっと抱きしめる。
「……ごめんな、ラウラ」
「な、なんだドッペル！　なぜ謝る？」
「……本当にごめんなさい」
「お母さん？」
俺はラウラを解放し、シャルロットを見る。
「……シャルロット」
「な、何？」

俺はハンカチを取り出し、シャルロットの口に付いていたソースをふき取る。

「……本当に……お母さんみたい」

「今日一日お母さんをお願いしたでしょ♪」

俺は笑みを浮かべる。

するとシャルロットは俺に抱きつく。

「シャルロット？」

「……このまま……お願い」

「……はいはい♪」

俺はシャルロットを抱きしめてやり、頭を撫でる。

ラウラがこちらをじ～っと見ている。

「ラウラもこっちおいで」

「……いいのか？」

「子供はお母さんに愛される権利があるものよ」

それを聞いたラウラはゆっくり近づいてきたので、俺はラウラの腕を引っ張り、抱き寄せた。

「これが……母親というものか……良い物だな……」

俺は数分間二人を抱きしめ続けた。

「さて、ミックスベリーの意味はラウラが教えてあげて」
「なんだ、知っていたのか」
「え？　どういう事？」
「……やっぱり俺が教えるわ」

どうやらシャルロットは原作通り気付いていなかったようなので俺が教えてあげることにした。

「つまり、ミックスベリーというのは、二人組でベリー系のソースのクレープをまわして食べるからミックスベリーという訳」
「な、なるほど……」
「まぁ、一夏にそんな事期待しても無駄だと思うけどね。だからあいつはヒトナツなのだ」
「――ッ！？　そのセリフ……」

シャルロットが何か驚いているようだが、なんかしたっけ？

「ラウラ、取り押さえて！！」
「わ、わかった！！」

突然ラウラが俺を取り押さえる。
Ｗｈａｔ？　なぜに！？
するとシャルロットが俺の股間に手を当てた。

「な、まさかお前は野外プレイの趣味があったのか！？」
「違うよ！！　……たしかに女だ……どうなってるの、イズール君！」
「な、なんのことかな？」
「とぼけても無駄だよ！　今の台詞と行動、そしてイズール君と

ドッペルゲンガーが同時に現れなかった事を考慮するとドッペルゲンガー＝イズール君以外は考えられないんだ！！」

シャルロットは俺の手首に指を当てる。

まさか、嘘発見のやつか！？

「君はイズール君だね？」

「ち、ちがう！！」

しかし、血流はコントロールし損ねた。

「……もうばれたからいいよ、イズール君」

「こいつが……ドッペルゲンガーの正体だったのか」

「はぁ……」

俺は渋々元の姿に戻る。

バシュゥゥゥゥゥゥン。

「なんだよ……人を無理矢理……野外プレイモドキしやがって……」

「イズール君……ごめん」

「イズール……」

俺はちょっと涙目になる。

あのシャルロットの顔が怖かった。

「グレちゃうもん……フェイゾンでフランス滅ぼしちゃうもん」

「そ、それはやめて！！　謝るから！！」

俺は何だか悲しくなって泣いた。
感情の不安定で体の変身が勝手に変身する。
いつのまにか鈴の姿になっていた。

「……うぅ……ぐすっ……」
「ああ……ごめんなさい」
「イズール、お前……意外と泣き虫なのか？」

ラウラがそう言ってくる。

「泣き虫じゃない……もん！　これは目からしょっぱい体液がだだ漏れなだけだもん！！」
「いや、それを涙と言うのでは……」

俺はその場にいるのが嫌になって逃げることにした。

「イズール、トランスフォォォォム！！」

ウィン
ガシャン！
ガキョン！

俺は戦闘機に変身して飛んで行った。

――夜。
――鈴の部屋にて。

「そんな事があったんだ」
「……うん」
俺は鈴と一緒にシャワーを浴びていた。
ちなみに今の俺は鈴の姿である。
「元気出しなよ。あんたの負担が減ったと考えればいいのよ。後、ちゃんと和解してきなさいよ？」
「……うん」
鈴は俺の背中を洗う。
「ねぇ、鈴」
「ん？」
「あんまり俺の股触らないで。その……あれだから……／／／」
「いいじゃない、こっちも溜まってたんだから」
うわぁ、駄目だこの鈴、早く何とかしないと……。
鈴は俺の股を触り続ける。
鈴が変態コマンドーの称号を受け継ぐ日も近いかもしれない。
「鈴ッ！　だめ……ティナさんも見てる」
「……／／／」
実はこの場には裸のティナさんもいたのである。
理由は『どんなことしてるのか見てみたい』とのこと。
「鈴……イズール君を解放してあげなよ。イズール君は今日はＯＫサインじゃないみたいだし」

ティナさんの言葉を聞いた鈴は俺を解放する。

「そっか……ごめんね」

「なんで鈴が欲望に走った彼氏の結末みたいな台詞を言うかな……」

俺は体を流し、湯船に浸かる。

流石にこの湯船に三人はキツイ。

「あ、私そろそろ上がるわ。あとはがんばってね♪」

?ティナさんはシャワールームから逃げ出した。

俺達二人が残される。

「「……」」

少し沈黙。

「ねぇ、イズール」

「何?」

「キス……しよっか」

「アスカみたいな台詞を……まぁ、いいよ」

俺と鈴は軽いキスをした。

――シャルロットとラウラの部屋にて。

コンコン。
コンココココン。
ココココココココココココココココココココ（高橋名人の１６連打）

『どちらさま？』
「イズール・ユ・ミヅル。銀河連邦軍第七小隊所属」

ガチャ……。

「上がって」
「お邪魔します」

部屋に招かれた俺は二人を見る。
二人は猫のようなパジャマ姿だった。

「えっと……あの時はごめんね」
「うむ、すまなかった」
「いいよ、こっちも頭冷えたし」

少しの沈黙。

「ねぇ、どんなのに変身出来るの？」
「ん～、人間サイズなら何でも」

バシュゥゥゥゥゥン

試に今のシャルロットの姿に変身した。

「僕だ……ねぇ、上半身裸になってみて？」

俺は言われた通りに上半身裸になった。

「うわぁ……／／／」

「侵入や諜報だったらお前は最強なのではないか？」

「まぁね、俺――いや、僕はＤＮＡ情報は調べたことないけど、それ以外は本人の体のまんまだよ」

その言葉を聞きながらシャルロットは俺の体を舐めるように見る。

「ホクロの位置まで……へぇ～、イズール君には人の裸は隠しても無駄なんだ／／／」

少しシャルロットの顔が赤くなる。

「うん、だから鈴も俺に裸見せるようになったな」

「やっぱり鈴は正体知ってたんだ」

「うん」

シャルロットとラウラは何を思い出したかのように、何かを取り出した。

誰かの写真である。

「イズール君！　君に変身して欲しい人が――」

「――いや待てシャルロット、私が先だ！！」

「あのぅ……俺は誰に変身する訳？」

「「一夏だ！！」」

「断る！！」

そしたら二人は俺を拘束した。

「ラウラ、そのまま……今は僕の体、どこをどうすれば気持ちよくなったり、くすぐったいかは僕が一番良く知ってる」

「イズール……すまない」

シャルロットは手をムカデのようにワシャワシャしながら俺に迫る。

「や、やめろ……せ、迫るな……あ、ぎゃぁぁぁぁぁぁ！！」

その時、俺の部屋のミニトマトの花びらが散った。

――その頃。

ガチャ。

「イズール君、助けて……あれ？　留守？」

見た目が小学生に逆行した会長は俺を探していたという。

――そして一夏はというと……。

「……」

自宅に帰っていた。

――続く。

第二十五話　いつも売り切れのミックスベリー、それはちょっとした不幸の味。

ご感想お願いします。

第二十六話　究極不完全生命体更識楯無暴走事件簿　さぁ、この文字を初見で読

ネタが……ネタがうかばねぇ……。

第二十六話　究極不完全生命体更識楯無暴走事件簿　さぁ、この文字を初見で読めるかな？

今、俺の目の前の簪さんの膝の上には小学生のような生徒会長がいる。

「……なにがあったの？」

「お姉ちゃんが変なグミを食べたんだって」

「てへ♪」

簪さんは最近少し喋るようになったはいいが……これはいったいどういう状況？

「会長、食べたグミの袋あります？」

「うん、あるよ」

会長は俺に空の袋を渡した。

「えっと……こりゃウルトラ文字だな。なになに……『アポトキシン４８６９グミ』か……またやっかいな物を食べましたね」

「だっておいしかったんだもん♪」

「お姉ちゃん！！」

「……ごめんなさい」

簪さんに怒られてシュンとする会長。

「さて、ここでお説教です。なんであの倉庫の封印を解いたんですか！！　開けるなと書いてあったでしょう！？　あれには起動前のヤバイ人型兵器やら戦闘ラジコンヘリとか具現化するデュエルディスクなんかもあるのに！！　あなたは馬鹿だ！　本当に馬鹿だ！

何だか人型兵器の方は起動しちゃって脱走してるし！！　しかもそいつは紅蓮椿のパーツを強奪して逃げたっていうじゃないですか！！　しかも最悪なことに、ジャイアントストラトスのＩＳコアまで盗まれましたよ！！　これだけの高級ジャンクが揃ったら世界は滅んでも文句言えませんよ！！　まったく、生徒会長の癖になんで――」

「……あの、そのくらいにして……お姉ちゃんが……」

「……ふぇ、ふぇ～ん」

――数分後。

「――いいですね！！　この馬鹿ッ！！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい――」

「……イズール君、下品」

会長が泣き出したので、説教終了。

泣き出してから5分位怒鳴ったけどね。

「さて、連絡だ」

ピッポッパ♪

トゥルルルル……。

『はい、こちら特務機関ネルフ諜報課――』

「すいません、間違えました！」

……あれ？

リダイヤル。

『はい、こちら警視庁空想対策課敵対型空想生命体迎撃チーム【デバッガーズ】ですが？』

「えっと……ゼオルさん？」

『おや、君はゼオルの知りか？』

「やっぱり間違えました！」

『あ、おい――』

ガチャ……。

どうなってるんだ？

なぜ繋がらない……。

リダイヤル。

『おはようからおやすみまで、暮らしに夢と希望とその他を無理矢理押し付けるガルクライフ社のゼオルですが？』

「こちらイズール、なぜかこの番号でネルフとデバッガーズという組織に繋がったぞ、どうぞ？」

『お、デバッガーズに繋がったか……ごめんな、今次元通信の電波の調子が悪くてな』

「なんで？」

『リリカルなのは世界、空想世界【ウミナリ】の拠点準備で改築しててね』

「え、俺が行くの？」

『余裕があればね。……ところで、本題は難題――もとい、なんだい？』

「実は会長がアポトキシングミを食べて、体は子供、頭脳は幼稚、

名探偵タテナシになっちゃって……」
『解毒グミは？』
「のほほんさんが食べてしまったそうです」
『そうか……いい機会だ。今から送信する座標に主要人物全員連れて来い』
俺の携帯に座標が表示される。
「了解、以上通信を終了」
『了解』
「「オーバー」」
ピッ♪
俺は二人を連れて目的の場所へ向かった。

――学園敷地内。
俺と簪さん、会長、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラが集まった。
「一夏と箒は夏祭りか……」
「あれ？　そこの小学生は誰？」
「シャルロット……その子は生徒会長だ。鈴と同じようにグミ食ってこうなった」
「ええ！？」

驚くシャルロット。

「一つ思うのだが、謎のグミを使えば今の私にも一夏と恋仲に発展するのではないか？」

「ラウラ、流石に……あり得るから怖い」

それを聞いたセシリア、シャルロット、ラウラの目つきというかハイライトが変わる。

「うふふふ……」

「くくく……」

「くけけけけけ……」

おい、上二つはいいけど、下のはなんだ！　誰の台詞だ！？

「さて……ゼオルさんは……」

すると、向こうから走ってくる人影が……ムーンウォークで。

そして俺達の間の前で回転。

クルンッ！

「やぁ、みんな。さっそくだが、そこの壁を見てくれ」

壁には特に何もない。

ただ……ガルクライフ社のロゴがうっすらと描かれている。

ゼオルさんはそこに手を触れる。

チャプン……。

これって！　例えるなら、スーパーマリオ６４で各ワールドへいくために飛び込む絵みたいなものか！？
そういや俺の部屋の鏡もこんな転送装置だったな……。
「さぁ、みんな大好きな遊園地の開園だ！！　飛び込め～♪」
ゼオルさんが飛び込んだので、俺達も飛び込んだ。

――ガルクライフ社。
――インフィニット・ストラトス出張拠点にて。
たどり着いた場所にはいろんな人が仕事をしていた。
「ようこそ、ガルクライフ社インフィニット・ストラトス出張拠点へ」
「位置的には？」
「学園の地下」
「「「「「！？」」」」」
まさか学園地下に拠点作ってたなんて……。
「あ、簪ちゃんはＧＡ－ＩＳ－ＡＣの調整受けてきて」
「あ、はい」
「後、全員ゲストＩＤタグを渡しておくから無くさないでよ？」
そう言ってゼオルさんは全員にネームタグを渡す。

「さて、会長ちゃんとイズール君はこっち。簪ちゃんは向こうでウェブが待ってる。他はウォルツと一緒に観光していいよ」

こうして、それぞれ解散した。

――娯楽開発部の開発室にて。

ガチャ……。

ゼオルさんが扉を開ける。

「久しぶりに来たぞ、変態共！！」

「かわいいよ……ステファニー」

「この曲線美……流石だよアドルド……」

「ぐへへへ……この細胞とこの装置を融合させれば……」

へ、変態だー！！

隣の会長もドン引きである。

「あ、ボス……なんですか……ッ！？　よ、幼女！？」

娯楽開発部の連中が一斉に会長を見る。

会長は驚いて俺の後ろに隠れる。

「おい、手を出したヤツから脳から脊髄の信号カットな♪」

そんな『給料カット』みたいにとんでもない事言わないでください！！

「安心してください！　我々は相手の同意なしでは手を出さない紳士&淑女、ときどき野獣（ビースト）ですよ♪」

全員がネクタイやメガネを整える。

おい、最後に野獣って言ったぞ！！

「馬鹿共が……今回はお前達が再現したアポトキシン４８６９モドキでこの子が幼女になってしまったんだぞ？」

「あれまっ、てっきり賞味期限切れで処分される時期だと思ってましたのに」

「いや、期限まで後二年あるからな？」

本当にコイツらなんなんだ。

「解毒グミはあるか？」

「あぁ、在庫ないんで作りますか？　ついでに【設定解毒グミ】もセットで」

「ふつうの解毒グミでいい。他はいらん」

【設定解毒グミ】

キャラクターに付加された設定を木端微塵にするグミ。

一夏と箒が付き合ったという“設定”すら無かったことにする恐怖のグミ。

転生者に使うと、転生者が手に入れたチート能力を設定レベルで

破壊――もとい、解毒する。
恐らく空想世界侵略兵器よりも恐ろしい。

「あ、ここの大浴場がついにオープンしたんです。我ら娯楽開発部第３課が周りの意見を無視して作った自信作ですよ♪」
「……予算は？」
「１００億です。この内の２０パーセントを設備費に、５０パーセントをみんなのお小遣いに、２０パーセントをこの施設の飲食物のお店に、残りの１０パーセントは募金しました。大丈夫です、この中に今月の私たちのお給料は含まれておりません♪」
「よぉし、お前ら歯ァ食いしばれ～」

ドカッ！
バキッ！
メチャッ！
プニッ♪
あふぅ……。

「だ、大丈夫……我々には仙豆が……」

研究員の一人が豆を取り出す。
ゼオルさんはそれを踏みつぶす。

「オーダー、解毒グミ作れ。俺達が風呂から戻るまでに」
「お、オーケィ、ボス……」

そして俺達は満身創痍の研究員達の部屋から出て行った。

――大浴場にて。

「あ、イズールもお風呂？」

「まぁね。さっき娯楽開発部見てきたけど……酷かった」

俺は服を脱ぐ……あれ？

「この脱衣場……男女混同？」

「みたいね。セシリア、どうする？」

「あの……殿方の裸を見るのは……ちょっと……／／／」

「お姉さんは別にい～わよ♪」

「だまれ幼女」

「……ごめんなさい」

現在、俺、会長、鈴、セシリアのメンバーがこの脱衣場にいる。

ゼオルさんはどうやらこの設備の点検をしているようだ。

シャルロットとラウラは……先に入っているのかな？

「うん、シャルロットとラウラは先に入るって言ってた」

「そっか……。あ、声漏れてた？」

「うん、気を付けなよ？」

俺はとりあえず鈴の姿に変身する。

バシュゥゥゥゥゥン……。

「「ええ！？」」

「あ、会長とセシリアは知らなかったっけ？　隠すのに飽きたから言うけど、そう！　俺が、俺がぁぁぁぁぁ！」

急に脱衣場が暗くなり、俺にスポットライトが当たる。

「ディセプティコンの破壊大帝メガトロ――」

「ＩＳ学園ドッペルゲンガーでしょ？」

「流石鈴、サーセン」

会長とセシリアが鈴となった俺の裸もじっくりと見つめる。

「はぁ……イズールさんって……凄いですわね」

「そうね……是非生徒会に欲しいわ……」

生徒会は後々面倒だからな……。

演劇部なら軽く頂点目指せるな。

「あ、あの！　わたくしの姿になってくださいますか？」

「え？　いいよ」

俺はクルリと回転しながら変身する。

バシュゥゥゥゥン……。

「ちょろいですわ！」

「わ、わたくしですわ！！」

ちょっとセシリアの体は動きづらいな……。

最近料理にハマって味見のし過ぎじゃないか？

「どうよセシリア、俺の能力は♪」
「なんだか……複雑ですわ」
やっぱり裸知られるという事かな。
とにかく俺達は大浴場内部へと侵入した。

――大浴場にて。
既に大浴場には、ウォルツさん、シャルロット、ラウラ、簪さんがいた。
「あ、みんな～待ってたよ」
いや、それよりもこの大浴場、ウォータースライダーや流れるプールみたいになってるのはなんで？
「それは娯楽開発部の仕業ですね」
ウォルツさんが話しかけてきた。
うぁ……ウォルツさんの裸……なんというか……綺麗……。
性的な魅力よりも美術的な魅力の方がデカいってある意味レアだよ。
「あ、すいません。みつめちゃって」
「いいですよ。今はあなたも女性ですから」
「……皮肉じゃないですよね？」

「皮肉じゃありません♪」

――数分後。

「思い出すな……臨海学校のこと。あの時結構時間経ったんだなぁ……」

「ジャイアントストラトスとか……あんなのには会いたくないわね」

だが、パーツが盗まれたとなると……安心できない。

俺は鈴の頭を洗いながらそう思っていた。

「鈴さん、もしかしていつも洗ってもらっていますの？」

「うん、セシリアもやってもらいなよ。気持ちいいよ？」

「では……お願いします」

「あ、了解」

セシリア（俺）がセシリアの髪を洗うというのも変な光景だな。

というかバトルしたいな……いい加減夏休み編も飽きてきたな……。

「あ、僕もお願い」

「私も頼む」

「……私も」

「お姉さんも」

まったく……俺はみんなのお母さんかお父さんか？

シャンプーハットでも用意すればよかったかな？

「……♪」

セシリアの顔が少し気持ちよさそうな表情になる。

俺は頭のツボを刺激しながら洗う。

「あふぅ……♪」

こうして俺は、全員分の髪を洗うのであった。

――脱衣所にて。

今度は全員の髪を乾かす。

ここで問題が発生。

全員の髪がサラサラし過ぎて綺麗なストレート以外の髪型にならない。

シャルロットは髪留めのゴムを結んでも落ちてくる。

「そうだよね、娯楽開発部の用意したシャンプーだからこうなるの当たり前だよね」

世界が嫉妬する髪へ。

「おぉ～♪」

みんなご機嫌。

「あのう……お姉さんの体は……？」

こうして、俺達の温泉旅行？　は終わったのである。

「ちょっと！！　私の体！！」
「反省」
「ちょ、だから――」
「反省」
「……はい」

――続く。

第二十六話　究極不完全生命体更識楯無暴走事件簿　さぁ、この文字を初見で読

そろそろ亡国機業でテコ入れしないとヤバイです。
ご感想をお待ちしております。

第二十七話　夏祭りの決戦！！　ＶＳゴ・ダンダー（前書き）

今回は短いです。

第二十七話　夏祭りの決戦！！　ＶＳゴ・ダンダー

前回からの続きで夜。
突然、電話がかかってきた。

「はい、こちらイズール、電撃大賞用の小説執筆中です。ご用件の方は――」
『イズール！！　た、助けてくれ！！　五反田弾にそっくりなヤツが襲ってきて――』

ブツッ！

プー
プー
プー

「……鈴、ちょっと宇宙行ってくる」
「いってらっしゃい」

俺はさっき完成した解毒グミを掴んで会長の口に押し込む。

「セイヤッ！」
「あぐほ！！」

俺は千冬先生に電話する。

「千冬先生！　かくかくしかじか」
『私にそれは通用しないぞ』
「すいません、ＩＳ起動許可ください。一夏と箒が掘られそうな

んです！！」
『なっ！？　わ、わかった、許可する！！』
俺はＧＡ－ＰＥＤを展開する。
すると施設の一部が変形し、カタパルトが出現する。
『発進どうぞ！！』
「イズール、行まぁぁぁす！！」
バシュンッ！！
俺はカタパルトで勢いよくワープゲートに突っ込んだ。

――夏祭りの会場にて。
人々が泣き叫び、逃げ惑う。
こりゃあ完全なパニックだな。
「えっと……一夏発見！！」
箒と蘭も一緒だ。
俺は着陸態勢をとった。
――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏ｓｉｄｅ――

なぜか俺達は追われている。

「一夏さん！！　あのお兄みたいなヤツはなんなんですか！？」

「わかんねぇよ！！」

「一夏！！　来るぞ！！」

屋台を突き破ってそれは出てきた。

『まてよ一夏！！　俺と一緒にヒャッハーしようぜ！！』

空想世界侵略兵器

【ゴ・ダンダー】

空想世界侵略兵器

【ゴ・ダンダー】

ジャイアントストラトス配下の下級空想世界侵略兵器。

五反田弾を模して造られている。

足のボールローラーでＩＳのような動きが出来る。

実は『ごだんだ』ではなく『ごたんだ』ということに気付いていない。

口癖の『ヒャッハー』は影が薄くなるのを恐れて自分で無理に付

けている。
武器はガトリングやミサイルなどの重火器。軽い武器は好まない。

『ヒャッハー！！　死ねい！！』

ズガガガガガガ！！

ガトリングが火を噴く。
周りの屋台が破壊され、火薬の匂いが漂う。

「くそっ！！　今ここで三人に別れたら殺される」
「一夏さん、私……死ぬのかな……」
「馬鹿ッ！！　何言ってんだ！！　諦めてんじゃねェ！！」

そう話している俺達の目の前に偽弾が迫る。

『ヒャッハー！！　リア充だぁ！！　死ねぇぇぇい！！』

こちらにガトリングを構える。
くそっ！！　終わりか……。

グシャン！！

偽弾の頭が何かに潰された。

「ア、オウ……ごめんちゃ～い♪」
「「イズール！？」」

俺達の目の前にイズールが現れた。

「みんな、ＩＳの起動許可は下りてるよ」

「そうか」

「よし！！」

俺と箒はＩＳを展開する。

パラリラパラリラ♪

『ふふふ、俺達は所詮、量産機。俺達が一機では勝てるはずもない』

『ならば人海戦術だ！！』

『そうだ、俺達のヒャッハーなモヒカン魂見せてやるぜ！！』

『俺達モヒカンじゃないけどな。とにかく、俺達五人合わせてゴ・ダンダー。早速一人抜けて早くも四人だがな』

空想生命体

【イズール・ユ・ミヅル】

&

主人公

【織斑一夏】

&

一夏の幼馴染

【篠ノ之箒】

ＶＳ

空想世界侵略兵器
【ゴ・ダンダー】×４

バイクに乗ったゴ・ダンダー達はこちらに迫る。

「なぁ一夏」
「なんだ？」
「『ごだんだ』じゃなくて『ごたんだ』じゃないか？」
「ああ……そういえば」

キキィィィィ……。
ズドォォォォォン！！

この言葉を聞いたゴ・ダンダー達は俺達を通り過ぎて、木に激突する。

『なんだって……ゴタンダ……だと！？』
『もしそれが本当なら……俺達はゴ・タンダーじゃないか！？』
『おい！！　ダンダー？がやられた！！　おのれぇ……よくも？を殺したな！？』

いや、今のは事故だろ……。

空想生命体
【イズール・ユ・ミヅル】
&

主人公
【織斑一夏】
&
一夏の幼馴染
【篠ノ之箒】

VS

空想世界侵略兵器
【ゴ・ダンダー】×3

再戦。

『くらえぃ、兄貴の仇！！』

ダンダー？はこっちにガトリングを撃ってきた。
俺はそれを避ける。

『流石一夏、いい動きをする』

ダンダー？の台詞が一番まともなようだ。

「本当の弾のほうがお前達よりも強いとおもうぞ？」
『ふんっ、戦いというのは経験なのだよ』
『ダンダー？、加勢する！！』

ダンダー？がこちらに迫る。

ズバンッ！！

『俺の右手が！？』

「一夏、無事か！」

「箒、助かった」

箒がダンダー？の右腕を切り落とす。

箒の背後にダンダー？が迫る。

「箒！　避けろ！！」

「何！？」

『ヒャッハー！！　知ってるか？　死神は林檎しか食べな――』

ズドォォォォォォン！！

いきなりダンダー？が消滅した。

「……ソニックブーム」

『ダンダー？！！』

『ダンダー？！！』

残り二体。

「さっさと決めるぞ！！　アイスビームにチェンジ！！　奴の動きを止めてくれ」

「「了解」」

俺と箒はダンダー？とダンダー？に迫る。

『しかたない……？！　アレを使うぞ』
『ヒャッハー！！　アレを使うんだな！？』
ダンダー達はアンカーを飛ばす。
箒が捕まる。
「しまった！！」
『釣れたぜ兄貴！！』
『よし、そのまま引き連れ』
アンカーによって吸い寄せられる箒。
ダンダー？は肘鉄砲の構え……あの肘、まさかパイルバンカー！？
『俺の必殺、肘バンカー！！　せーの――』
ガキャンッ！！
ダンダー？は凍った。
『あ、兄貴――』
ガキャンッ！！
ダンダー？も凍った。
「ふんっ！！」
イズールは？を踏みつぶし――。

「発射」

ズドォォン！！

?をミサイルで砕いた。

よ、弱っ！！

パラリラパラリラ♪

まだくるのかよっ！！

『ふふふ……俺達は後２５体はいるんだぜ！！』

『俺達の力……見せてやる！！』

『我らのあがき……見るがいい！！』

『よし、俺達の必殺、ダンダーファイナルエクストリームを――』

「馬鹿兄達！！」

『！？』

『！？』

蘭の言葉にダンダー達は気付く。

「みんなの楽しみにしてた祭り……滅茶苦茶にして……」

蘭は泣いているようだった。

「……お兄達なんか、大っ嫌い！！！」

それを聞いたダンダー達は……。

ピキィィィン！！

『あべしっ！！』
『ヒデブッ！！』
『タワラバッ！！』
『カニタマッ！！』
『エビチャーハンッ！！』
『レヴァニラッ！！』
『チリガミッ！！』
『アダモステッ！！』
『カネガネェ！！』
『オ、オレモダァ！！』
『ナギナタッ！！』
『イワムラッ！！』
『シマムラッ！！』

――以下略。

次々に爆発していった。

一夏side end

――イズールside

ある意味辛い戦いだった……。
蘭は泣いたままだった。
「一夏さんは……もう恋人いるなんて……そんなのいやだよぅ……」
あれ？　さっきのヤツで泣いてるんじゃないの？
「寂しいよう……」
俺はポケットの中を確認する。
中には飴玉が入っていた。
「食べなよ。悲しい時は胃に何か入れてリラックスして寝るのが一番」
「……イズールさん……」
一夏と箒は屋台の人たちと一緒に事情聴取を受けていた。
「さて、俺も帰りますかね」
「あの……イズールさん」
「？」
「好きな人に恋人がいた場合って……どうします？」
難しい質問だな……。
「その恋人に了承を貰って付き合っちゃえば良いんじゃない？」
「そ、そんなの無理ですよ……」
「……それくらいの根性出さないと欲しい物はいつまでも手に入らないぞ？」

蘭は俺の言葉を聞いて顔を上げる。
「諦めなければ……どうにかなるのですか？」
「ああ」
そして俺と蘭は腕を組み……。
「「見よ！！　東方は赤く燃えている！！」」
まぁ、夜だけどね。
というか腕組んだだけでネタ言えるなんてどういう事？
常人だったら絶対不可能だったぞ？
ピピピ♪
『こちらゼオル。会長ちゃんは元に戻ってみんな帰りましたぞ？』
「なんでムックみたいな語尾になってんだよ」
『とにかく、そこの空想世界侵略兵器の反応がまだあるというお知らせ』
はい！？
ビヒュンッ！！
俺の横をビームが通り過ぎた。
『……外したか……』
俺はすぐさまスキャンバイザーを起動し、スキャンする。

スキャン完了。

空想極限汚染変異形態
【チフユサンダー・ＺＥＯ】
量産型のチフユサンダーの一体がゼオルの設定の１％を獲得して空想生命体となった姿。
他にも具現化されたフェイゾンコアを吸収している為、事実上最強の空想世界侵略兵器。
強奪されたジャイアントストラトスのＩＳコアや紅蓮椿の反応を確認。

こいつ……チフユサンダーか！？
見た目が全然違うぞ！！
というかフェイゾンコア……ここにあったのか。
『……今回は軽い挨拶代わりだ。今日は退こう』
チフユサンダー・ＺＥＯは飛んで行った。
ピピピ♪
『俺の設定……必ず取り戻してくれ』
「了解。設定の欠片にはどんな効果が？」
『吸収したキャラクターの設定を変異させ、体の構造を作りかえる効果がある。他にもエネルギーを操ったり、冷気も操れる。汚染

に近い感じでキャラクターを強化する』

１％でそれは無いだろう……。

もう亡国機業なんて敵じゃないだろうな。

燃える神社の屋台の中心で、俺はそう思った。

――続く。

第二十七話　夏祭りの決戦！！　ＶＳゴ・ダンダー（後書き）

ご感想をお待ちしております。

第二十八話　ラウラと不思議な銀時計。（前書き）

今回はご都合主義と超展開を発動するための回です。

第二十八話　ラウラと不思議な銀時計。

ある日、私は変な段ボール箱を見つけた。
それには、『ユーザーネーム杉田さん、用意できましたよ♪』と書いてあった。
どういうことだ？
中には銀の海中時計が入っていた。
「アンティーク……なのか？」
カチャンッ！
懐中時計を開いている。
そこには『恋の叶うおまじない、上のボタンで叶えます』と書いてあった。
「……押すか」
カチッ！
この時私は気付くべきだった。
裏に『犠牲は大きいですが』と書いてあることに。
カチコチカチコチ……。
カチンッ！！
「……何も起きないな……」

自分の体には特に変化無し。
景色も見慣れたものだ。

「……やはり信じた私が馬鹿だったか」

私は銀時計を自分の部屋に置いて一夏の家へと向かった。

町は平和だ。
この前まで滅亡しかけていたというのに……。
それにしても……衣装はこれで大丈夫だろうか。

一夏の家を確認する。

「ここか……」

私は呼び鈴を鳴らす。

ピンポ〜ン♪

『はーい。どちらさま？』
「ラウラだ。今日は遊びに来てやったぞ」
『え……ラウラ？　今家の中だろ？』

ん、なんだか話が噛み合わない？
どういうことだ？

ガチャ……。

玄関が開く。
そこには簡素な恰好をした一夏がいた。
「ラウラ……だよな」
「私は私だ、いったいどうしたというのだ？」
「そう……だよな……」
一夏の言葉の意味を私はすぐ理解することとなった。

――二階にて。
「「……」」
私がいた。
もしや……。
「イズールか、まったく……私を驚かすな」
すると向こうの私は私をナイフで攻撃してきた。
私はとっさにナイフでガードする。
「イズール！！　なんのつもりだ！　お前は私に――」
「お前は何者だ！！　なぜ私の姿をしている！！」
「何を言っているイズール！！　お前が私の姿に変身しているのではないのか！！」

「ふざけるな！！　イズールとは何者だ！！　それに私は私以外の何者でもない！！」

ッ！？　いったいどうなっているのだ！！　イズールではないだと？

「ちょっと待てラウラ！！」

「い、一夏離せッ！！　こいつは私の偽者だ！！」

「流石に殺人はまずいって！！」

本当にどうなっているのだ……。

もしや前の教官の姿をした兵器の同系統か？

「すまない、ここにいるみんなに聞きたい。イズールと言う男に心当たりは」

全員が『無し』と回答。

「では……ガルクライフ社という単語に聞き覚えは？」

これも『無し』の回答。

「では……私の記憶では一夏と箒は恋人なのだが……」

「「え！？」」

一夏と箒が驚く。

「ちょ、一夏さん！？」

「一夏！！　箒と恋人ってどういう事！？」

「酷いよ一夏！！　僕達も初めて聞いたよ！！」

「私に黙って他の女と付き合っていただと！？」

もしかしたら……この世界は……。

「おいッ、そこのもう一人の私！！　今の話を吐いてもらうぞ！！」

女子全員で私を拘束する。

「わ、わかった！！　話すから拘束はやめろ！！」

――説明完了。

「つまり……君の知ってる限りでは、イズールというＩＳを操れる男の子と、ガルクライフ社という変な組織がラウラの記憶の中には存在するんだね？」

「今のシャルロットの説明で間違いない……しかし、なぜ消えたのだ……」

「ラウラ……大丈夫？　顔が青いよ……」

これはまるで、最近読んだ『浦島太郎』のような状況ではないか……。

「それに……あたしがそのイズールって男の子の恋人で……」

「私が……一夏の……恋人……」

箒の顔が赤くなってくる。

「私は……どうすれば良いのだ……」
「お前は私なのだろう？　ならば必ず解決できるはずだ」
もう一人の私が私を励ます。
「きいた事がありますわ。まだおとぎ話のような物ですけれども……世界は何重にも重なって存在しているという……」
「そうか！　この世界はパラレルワールドと言うわけだな！？」
「その通りですわ、一夏さん」
なんということだ……待て、ならばあの時計で元の世界へ戻れるはず！！
「おぉ……希望が見えてきたぞ……」

――その頃。
――二次創作サーバーにて。
「緊急事態だ！！」
「オェェェ……なんで俺今こんな気分悪いんだ……？」
「なぜだか知らないが、本来の原作サーバーと二次創作サーバーの一部が繋がって、世界が干渉してやがる」
「つまり……？」
「この二次創作サーバーに存在するキャラクター全てが原作通りの記憶にフォーマットされるぞ！！　こんなことが続けば、設定バグでこの世界が吹っ飛ぶぞ！！　くそっ、空想世界侵略兵器め……

大きな作戦立てやがって！！」
「何だって！？」

――原作サーバーにて。

「なぁ……ラウラ、私と一夏が付き合っていた時の話を教えてくれないか？」
「うむ、人前ではなかなかくっ付かないが、影で愛していたようだったぞ？」
「そ、そうか……／／／」

この世界では、一夏は誰とも付き合ってない……これはチャンス……いや、この世界の私に悪いな。ここはとにかく元の世界へ戻らなければ。

「とにかく、お前も今日は家で遊んで行けよ」

一夏は私に手を差し伸べる。
今日は……今日くらいなら……。
私はその腕を掴んだ。

――再び二次創作サーバー。

「鈴、しっかりしろ！！」

「――うっ、くっ！！」
「ゼオルさん、大きな変化は！？」
「設定バグで一夏が死んだ事になってる！！」
「な！？」

――原作サーバーにて。

全員で料理を作ることになった。

「私の世界ではセシリアの料理はうまくなっていたぞ。だが……この世界のセシリアの料理は……正直……赤点だな」
「そ、そんな……」
「ラウラ、君の世界ではセシリアの料理はおいしかったの？」
「それはもう……絶品だったぞ」

シャルロットは私の話に興味を示す。

「さっき、織斑先生驚いてたよね～」
「そうですわ、流石に同じ人間が二人いるのには驚きますわ」

鈴とセシリアはお互いに材料を切りながら雑談していた。

「そういえば、鈴とセシリアは一夏を取り合わなくなってから随分仲良くなっていたぞ？」
「へぇ……」
「そうなんですの……」

鈴とセシリアはお互いの顔を見る。
お互いの間に火花が見える。
やれやれ……この世界ではまだまだ仲良くは出来そうにないらしいな。

「おかしいですわ。写真と色が違います。赤色が足りませんわね」
「お、おい。そんなに大量に……。ああっ！　火が強すぎる！」
「ご心配なく、箒さん。わたくしの料理は最後で挽回――が、ガガガガガ」
「セ、セシリア！？」

突如セシリアが狂った機械のように体が震えだす。

「……セシリア、大丈夫か？」

すると、セシリアの腕が変に動き、料理を続ける。

「な、なんですのこれ！？　作った覚えのない料理の記憶が……と、止まりませんわ！」

手際よく料理を続けるセシリア。
この動き……私の世界でのセシリアの動き！？
まさか……私から情報が漏れているとでも言うのか！！

「な、なんだかうまくいく自信がありますわ！！」
「セシリアが狂った！！　誰か医者を呼んでくれ！！」

箒は叫ぶ。
もしかしたら私がここにいるのは相当マズイのではないのだろうか？

「そういえばもう一人の私。お前は何を作るのだ？」
「おでんだ」
……。
「おでんだ」
「そうか、おでんか」
たしかにおでんは良い料理だ。
ゼオルの屋台で食べた時はおもわず隊のみんなにご馳走しようかと思った事もある。
「お前は何か作るのか？」
「私か？　……特に考えてもなかったな」
「ならば私のおでんを作るのを手伝え」
「いいだろう」
私はもう一人の私と共に大根を斬る。
「「――斬る！」」
ダン！
――そして料理は完成。
「じゃあ、みんなで食べようぜ。待ってるだけってあんまり経験

したことなかったんだが結構腹が減るのな」
「そうだな。それでは夕飯にするとしよう」
「一夏、小皿どこ？　取ってくる」
「それでは、わたくしは飲み物を出してきましょう」
「「こうやってお互いに作った料理を食べるというのは、なんというか不思議な気分だな。……しかし、悪くない」」
「そういうときは、楽しいっていうんだよ。ラウラ達」

楽しいか……。
うむ、悪くない。

「じゃあ、食べるとするか！」
「いただきます」

こうして、一夏の家での話は終わる。

――ラウラとシャルロットの部屋にて。

私は懐中時計を拾う。

「これが……」
「ああ、これが原因だ」
「綺麗な懐中時計だね」

私は懐中時計を開く。

「もう行くのか」

「ああ……」
「えっと……向こうの僕にもよろしくね」
「うむ！」
私は時計のスイッチを押した。
カチンッ！
カチコチカチコチ……。
目の前のもう一人の私とシャルロットが霧のように消える。

――２０話にて。
――イズールｓｉｄｅ
俺の隣に鈴が座る。
「――で、ゼオルさんはどうするの？」
『ギガハイヴも爆撃で撃沈したし、目的は達成したし、俺は帰るよ。ちなみに、イズール君は現実世界には帰る場所がないからここで暮らしなよ』
「てっきり強制送還されるかと思ってたんですが？」
『そんな鈴ちゃんを悲しませるシナリオ用意する訳ないじゃん』
「ゼオルさん……」
『さて、じゃあね。二人とも、幸せに暮らせよ？』
「「いままで……お世話になりました！！」」

そしてゼオルさんの通信は切れた。

「イズール、これからどうするの？」

「まずは……アレだな」

俺はこっそり向こうにいる箒と一夏に指をさす。

「お、いい雰囲気なんじゃない？」

「だけど、セシリアやお前に邪魔されるんだぜ？」

「げっ、マジ！？」

「だから……」

俺はこっそり一夏と箒に近づき。

キュィィィィン……。

ん？

バシュゥゥゥゥン！！

なんだかターミネーターみたいにラウラが現れた。

「む、ここはどこだ？」

「ラウラ……どこから現れた？」

「あたしも今……気付かなかった」

そしてラウラは何かに気付いたかのように手元の時計らしき物をいじる。

キュィィィィン……。

バシュゥン！！

ラウラの姿は消えた。
な、なんだったんだ今のは……。

「ほう……」
「一夏、何をしてるのかな……？」
「ふふっ、うふふふっ」

ラウラ、シャルロット、セシリアに見つかった。
あれ、さっきラウラは……。
とにかく！

「鈴、箒、一夏、逃げるぞ！！」
「あ、ちょっと待って――」
「俺を置いてくな！」
「一夏！　急げ！！」

――そして現在。
――ラウラｓｉｄｅ

どうやら帰ってこれたよう……だ？

目の前にイズールが立っていた。
すると、イズールは私の胸倉を掴んだ。

「てめぇ！！　いったい何に触りやがった！！」

ギリリリリリリ……。

「あぐっ……ガッ……」

何が……どうなって……。

「良く聞けラウラ！！　お前のせいで一夏の墓が出来てたぞ！！」

「――ッ！！」

「おまけに外は設定の砂だらけ、鈴はキャラクターグラフィックが崩れて死亡！！　セシリアは視力の設定が壊れて失明！！　シャルロットは性別と年齢の設定が大破してよく分かんない人類になった！！　箒にいたっては束さんのもう一つの人格という設定になってしまった！！　今すぐお前を殺してやりたい気分だ！！」

どういうことだ……一夏の……墓？

「ここ数日、左腕消滅した千冬先生の泣き顔を見ると……本当に……お前を……」

イズールは私を離す。

イズールの横には『織斑家』と書かれた墓があった。

「一夏……そんな……私の……せいで……」

「――ッ！？　ラウラ、その時計……」

「これは私が……拾って……」

「いいか、良く聞けラウラ。そいつはガルクライフ社の商品じゃない。そいつは――」

設定バグ
【ズレタコイゴゴロ】
この物語で一夏と箒が付き合ったことによって叶うことのなかったヒロインの恋心の設定がバグとなって形を持った姿。
時計となって使用者を待ち、使用した人物を操って世界を丸ごと破壊する恐ろしい時計型生命体となっている。
ＩＳ二次創作を作る人やその読者の願望や欲望の集合体でもある。

「……う、うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

私は頭が真っ白になった。

――ラウラｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

「……さて、今回はラウラがこのバグを無くさなかった事に感謝だな」

俺は時計を破壊する。

バキャンッ！！

「出て来いよ、原作破壊の代償を今踏み倒してやる！！」
壊れた時計から大量の文字が空中へ飛び出し、形を作る。
『イチカ……イチカァ……』
「恋も歪めばこうなるのか……あまりいいものじゃないな」
俺はＧＡ－ＰＥＤを起動し、アームキャノンを向けた。

空想生命体
【イズール・ユ・ミヅル】
ＶＳ
設定バグ
【ズレタコイゴコロ】

『イチカァァァァァ！！』
設定バグが触手を使って攻撃する。
俺はパワービームで触手を撃ち落とす。
『イタイヨ……イチカァ……』
「俺は一夏じゃねぇっつ～の！！」

プラズマビームに変更し、触手を焼く。

『イチカァァァァ！！』

設定バグは表現しづらい声で鳴く。

「さっさとデバッグされろ！！」

ダークビームにチェンジ。

「ダークバースト！！」

アームキャノンから発射された黒い物体は設定バグに直撃する。
そこに次元の裂け目が現れ、設定バグを吸い取る。

『イチカァァァァ

「残念だったな、俺はここの住人じゃないのさ。だから俺はバグらない」

ピピピッ♪

「あ、ゼオルさん？　こっちの決着ついたよ」

『ご苦労。長かったな……。ラウラちゃんの主観時間じゃどれくらいだったか知らないけど、俺達は5年かかったからな……』

「で、例のバックアップは？」

『２０話までしかバックアップとってないからな……』

「つまりは？」

『２０話以降の記憶が大体の人物から消えることになる』

「それでもいい、みんなの苦しんでる姿を5年間見てると……俺が狂ってしまいそうだ」

『……では、始めよう』

そして世界全体が白い光に包まれた。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――ラウラｓｉｄｅ

私は目を覚ました。

「あ、ラウラやっと起きた」

目の前にはシャルロットが……ッ！？

「シャルロット！　体は大丈夫か！！」

「え？　何の話？　随分夢でうなされてたようだけど……」

「ゆ……夢……？」

今までのが……夢？

「さぁ、明日から夏休みだよ。今日の学校もがんばんないとね♪」

明日から夏休みだと！？

「……そうか……夢か……はは……ははは……」

「ラウラ！？　いきなり泣き出してどうしたの！？」

「良かった……本当に……良かった……」

「――良くないよ」

部屋にイズールが座っていた。

「シャルロット、ちょっとラウラに重要な話があるから……お願い」

「え、うん……わかった」

シャルロットは部屋を出て行った。

「さてラウラ、今回は大事件だった。今回狂った世界を元に戻す為にリセットがかけられた」

「リセット……だと？」

「そう、状況を全て夏休み前に戻した。ほら、ここに」

「――ッ！？」

イズールの手には壊れた懐中時計があった。

「んじゃ、リセットによって発生した事情を確認するよ」

1、　ジャイアントストラトスのＩＳコアと紅蓮椿のパーツを取り戻した。
2、　ドッペルゲンガーの正体を知るのは鈴と千冬と山田と簪とラウラだけになった。
3、　夏休み中の出来事は全て無かったことにされた。
4、　なぜだか知らないが、一夏と箒が付き合っていた事実が消滅した。

「以上だ」

私は腰が抜けた。

「こっちはお前と違って5年もあの地獄を見てきたんだぞ？」

「5年だと！？」

本当に浦島太郎になっていたとは……。

「ふぁ～……俺はタイムパラドックスの報告書書くから、千冬先生に適当に『きのこの山ＶＳたけのこの里の決着をつけてくる』って言っといてね」

そう言ってイズールは部屋を出て行った。

その後、また思わず泣いてしまった。

「は……ははは……はははははっは……」

私は最後につぶやいた。

「……ごめんなさい」

と。

――続く。

第二十八話　ラウラと不思議な銀時計。（後書き）

自分で書いてて思った。
なぜこうなったし？
まぁ、簡単な話、今までの無茶な設定の一部リセットです。
ご感想、ご意見をお待ちしております。

第二十九話　五巻の世界の侵略者と生徒会長。（前書き）

更新が遅くてすいません。
超展開を『いいぞ、もっとやれ』というご意見が出ていますが、大丈夫なのでしょうか。

第二十九話　五巻の世界の侵略者と生徒会長。

――某所にて。

一度崩壊したこの世界はバックアップにより復活していた。
ここはそんな世界とは無関係の亜空間。

『ふは、ふはははははは！！　悪役は意味も無く笑うものだぁ……。俺の名はチフユサンダー・ＺＥＯ！！』

玉座に座ったその人物は偉そうに部下を見下ろした。

『ヤマダちゃん、今回の被害報告を教えてちょ♪』

その言葉を聞いてメカヤマダは説明を始めた。

『はい、今回はラウラ・ボーデヴィッヒを使った設定バグの大規模作戦は大体成功したのですが……、まさか２０話分のバックアップを用意しているとは知りませんでした』
『そうだねぇ……おかげで作戦は失敗、ジャイアントストラトスコアと紅蓮椿のパーツ、及びロボタテナシちゃんは再び眠りについちゃったし……。まぁ、ゴ・ダンダーが蘇ったのはプラスだな。五年か……短かったな、俺達の天下は』

ＺＥＯは立ち上がり、手を掲げた。

『さぁ、まずは俺の専用機の開発ｏｒ強奪だ！！　野郎どもェ……行けい！！』

『――今から一夏のブロマイドを賭けて野球拳をしよう』
『流石サンダー０１、良いアイディアだ』
『ぐぅ……すぅ……』
『みんな……０４が起きちゃうから静かにして……』
『お前ら……』
ＺＥＯは頭を抱えた。

――ＩＳ学園にて。
――イズールｓｉｄｅ
「でやぁぁぁぁぁ！！」
ガキィンッ！　と鋭く重い金属音を響かせ、一夏と鈴は刃を交えて退治する。
「くっ……！」
「逃がさないわよ、一夏！」
『鈴、そこでゴッドハンドスマッシュだ！！』
「そんな技無いわよ！！」
クラス代表者同士ということで始まったバトルは、最初こそ一夏が押していたものの次第に鈴が巻き返しはじめていた。
理由は簡単、第二形態の白式の燃費が悪いからである。
「最初にシールドを使いすぎたわね！」

「まだまだぁっ！」

しかし一夏の雪片二型の光も無く、エネルギーはすっからかん。
一夏は敗北するのであった。

――食堂にて。

「――ラウラ、それおいしい？」
「ああ。本国以外でここまでうまいシュニッツェルが食べられるとは思わなかった」

相変わらずこの二人は仲が良いな。
ラウラはシュニ……まぁ、仔牛のカツレツなのだが、一切れ切り分ける。

「食べるか？」
「わぁ、いいの？」
「うむ」
「じゃあ、いただきます。えへへ、食べてみたかったんだ、これ」
おいしそうにシュニッツェルを食べるシャルロット。幸せそうだ。

「そういえば最近変な夢をみたんだよね」
「夢？」
「うん、僕の性別がおかしくなったり……みんなが死んじゃったり……妙にリアルで……」

「「「……」」」

俺と鈴とラウラは無言で目を逸らす。

あの時、設定バグのせいで世界は一回滅んだ。

この事実を知るのは上記の三人とガルクライフ社のメンバーだけである。

鈴は体が崩壊して一度死んだ。

バックアップ後のバグ取りの際、バグだらけになった鈴の設定修復の為に俺の空想生命体としての設定の一部を移植。原作のシナリオに縛られない体になった。

ラウラはあの事件の中心となっていた為、悪い影響はなかったようだ。

その他メンバーはバックアップの影響で、夏休みの記憶がリセット。二週目の夏休みを過ごしたのである。

「まさか夏休みが後8回位あるとか言わないよな？」

「そ、それはないんじゃ……」

「わ、私も考えたくはない」

俺も主観時間で5年間はきつかった……。

鈴は死んでいた為、あんまり時間的な感覚は無い。

ラウラの主観時間は1日だったらしい。

「あー、ドイツってなにげに美味しいお菓子おおいわよね。バウムクーヘンとか。中国にはあんまりああいうの無いから羨ましいっていえば羨ましいかも」

「そうか。では今度部隊のものに言ってフランクフルタークランツを送ってもらうとしよう」

黒ウサギの連中……暇なんだな……。

「――亀裂の奥に、ザクロの森があるよ？」

いきなりウォルツさんが現れた。

「あれ、帰ってきてたんですか！？」

「えぇ、せっかくの休日が世紀末黙示録な世界でしたけど…」

今のウォルツさんは日焼けで肌が褐色になっていた。

「今日からお仕事再開です」

「ゼオルさんは？」

「お兄ちゃんなら――」

――その頃。

「ジーク……ジオン」

バタンッ！！

一連の大事件のバグ取り処理が終わったゼオルは満身創痍で倒れていた。

――現在。

「なるほど」

「えぇ、他にもＩＳコアとタテナシロボの封印とかですね」

あのタテナシロボは時間が逆行したことにより再封印。さらにお札やらベークライトで厳重封印されたのである。

「だが今回、私にも一夏の交際のチャンスが戻ったのは……喜んで良いのだろうか……」

「反省は２週目の夏休みでしたから良いよ」

「うむ……」

ラウラはまだ銀時計事件の罪悪感を引っ張っていたのである。

――場所は変わってロッカールーム。

俺と一夏は着替え中。

一夏はコンソールを呼び出して白式の情報確認。

俺は体内のフェイゾン残量などを計測していた。

「！？」

「だーれだ？」

更識楯無が一夏の目を塞ぐ。

俺は近くにあったオレンジジュースに指を浸し……。

「はい、時間切れ」
「……誰？」
「んふふ」
俺は会長を呼ぶ。
「そこの綺麗なお姉さん！！」
「ん？」
ピッ！
俺は指先に付いたオレンジジュースの雫を会長の目に向けて飛ばす。
ピチャ……。
「ぐぉぉっぉぉぉぉぉぉっぉぉぉっぉぉ！！　め、目がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
？こうかはばつぐんだ！
※１００％の柑橘系ジュースを目に入れるのは危険です。絶対に真似をしないでください。オリ主とみんなとの約束だぞ。
「さて、一夏。授業に遅れる、さっ、行こうか♪」
「あ、あぁ……」
「染みるぅぅぅっぅぅぅぅぅぅぅぅっぅ！！」
俺は会長にタオル（オレンジジュースで染めたもの）を渡した。

「これで拭いてください」
「あ、ありがとう」
ゴシゴシ……。
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
満足した俺は教室へ向かった。

――教室にて。
「……遅刻の言い訳は以上か？」
ヘルズ・ティーチャー、織斑千冬。そこには慈悲の心など一片もない。
「すみません、千冬先生への食事の誘い方を考えていたらつい……」
「ほぉ、そのメモ帳に言い訳が全部書いてあるわけだな？」
千冬先生は俺からメモ帳を奪う、しかしこれがトラップである。
書いてある内容は以下の通り。
1、　一夏の家で見つけた千冬先生のポエム。
2、　同じく千冬先生の小学校時代の恥ずかしい卒業文集【将来の夢】

3、　今まで山田先生に変身した時に聞いたブラコンを連想させる台詞。

以上である。

「――ッ！？」

「ちなみにコピー取ってありますよ♪」

俺は封筒を三つほど用意する。

「さぁ……どうします？」

「……なにが望みだ？」

「これが言い訳です♪」

「……いいだろう」

すると俺の封筒を目にもとまらぬ速さで奪った。

「などと言うと思ったか？　デュノア、ラピッド・スイッチの実演をしろ。的はそこの馬鹿者で構わん」

……いいだろう。

たまには遊んでもいいよね？

「……むはぁ……」

「お、織斑先生！？　イズール君が完全に迎撃態勢なんですけど！？」

「……なんとか倒せ」

「そんなぁ！！」

俺はウェイブビームをセットする。

「誘導ビームがＩＳにとっていかに脅威か……実演してやろう」
「いやぁぁぁぁぁ！！」
「……セシリア、鈴、箒、ラウラ、一夏、シャルロットを援護しろ」
おい、追加オーダーしすぎだろ！？

――放課後。

はぁ……あとラウラと鈴だけだったのに……負けた。
まさかワイヤーで拘束した後、衝撃砲の基本コンボで攻撃とは……。
俺は着替えを終えて、廊下に飛び出す。
まぁ、ハイパーモード使ってなかったからノーカン……って、これじゃあただの負け犬だな……。

俺は現在、鈴の姿で学園を歩いていた。（前に姿が戻らなくなった時の鈴の姿で）
俺は校舎内のベンチでマウンテンデューを……。

「あら？　もしかして……ドッペルゲンガーさん？」
「お、セシリアか、どうしたの？」

セシリアに見つかった。

「一夏のハートは射止めた？」

「いえ……しかも何だか一夏さんと箒さんが付き合っていたような気がしますわ」

恐らく銀時計の影響だろう。

「でも、それは夢なんでしょう？」

「えぇ……そうなんですが……」

「ならいいじゃない♪」

俺はマウンテンデューを飲みながらあの時の事を思い出した。

セシリアの視力の設定が壊れて失明し、俺が罪滅ぼしで介護した。

それでもこいつは一生懸命にあの時間を生きてたな……。

「あの！！　相談なんでしけれども！！」

「ど、どうしたの！？　そんな大声出して……」

セシリアが急に顔を近づけるのでビックリしてしまった。

「ガルクライフ社に繋がりのあるあなたにお願いがあります……実弾装備を譲ってください！！」

「実弾装備！？」

ガルクライフ社の実弾装備には……あまり良い思い出は無いな。

ジャイアントストラトスに搭載されていたシューティングビット、超磁界砲、ゴ・ダンダーに搭載されていた大型ガトリング……あっ、カタログがあるじゃない♪

「～♪」

「それって……前に見たカタログですわね」

パラパラ……。

今回は電子書籍ではなく、紙媒体のカタログである。

「……あった。イナゴ兵用の簡単なヤツだね。お値段は３０万から……ＩＳ用にしては安い方だと思うよ？」

「では、お願いしますわ」

「はい、了解♪」

俺はパタンとカタログを閉じた。

「あ、あの……」

「ん？」

「今度、模擬戦をお願いしてもよろしいですか？」

「いいよ、その時は屋台にいるゼオルさんに言ってね♪」

「わかりましたわ」

セシリアは向こうの方へと歩いて行った。

「――おい、あたし」

「？」

いつのまにか鈴が隣にいた。

「恋人に黙って浮気？　浮気なのか、あぁん？」

「浮気だったらもっと隠密にやるのが普通だろ？」

「何話してたの？」

「セシリアが実弾装備欲しいって言ってたからカタログで探してた」

俺は鈴にマウンテンデューを渡した。
「ありがとう。そう言えばイズール、フェイゾン鉱石の話がまた出てきたわよ？」
「政府の回答は？」
「うん、予想通りに放射線を観測しただけで正体には気付いていない」
それは良かった。
これ以上の酷い事はないようだ。
「しっかし……あたしが一度死んでるなんてね」
「しかた無いだろ、俺を含めてキャラクターっていうのは脚本で演じる役者なんだから、脚本が壊れれば俺達も壊れるのさ」
「なんだかメタね」
「そうだね」
俺と鈴は同時にマウンテンデューを飲んだ。

――次の日。
全校集会が行われた。
内容は、この五巻で行われる学園祭の話である。
学園祭……嫌な予感しかしない。
「それでは生徒会長から説明をさせていただきます」

そしてこの巻のキー人物が現れた。

生徒会長
【更識楯無】

「やあみんな、おはよう」

檀上で挨拶する女子こそ、原作で戦闘能力ナンバー2の楯無さん。ナンバー1は千冬さん。

「ふふっ」

会長が一夏を見る。
もうフラグ立てたのかコイツ！！

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったわね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

生徒会長は強さの象徴なんだっけ？　倒せば会長になれる……俺にもチャンスがあるということだね？

「では、今月の大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは」

ディスプレイにそれは表示される。

「名付けて、『各部対抗織斑一夏＆イズール・ユ・ミヅル争奪戦』！」

おいっ！　俺もかよ！？

――その頃。

『う～む……一夏争奪戦か……』

ＺＥＯが立ち上がる。

『この世界は今やこいつをどうバグらせ、支配するかで勝敗が決まるようなもの……例えるなら、相手のマザーコンピューターを奪ってみんな楽しい核戦争を俺達が無料の安心サービス、今なら１０％ポイント還元で洗剤もサービスしちゃうよん♪　ってとこだぁ……』

ＺＥＯは画面を見つめてニヤつく。

『野郎ども！！　この企画に俺達も飛び入り参加の準備だ！！』

ＺＥＯはメンバーを見る。

『ぶ～ん、ぶっぶ～♪』

『うんうん、ぶ～ぶ～だね』

『ふぇぇぇん！！』

『ちょっと０２、０４をいじめないでよ……』
『うるさい！！　オリジナルはこんな泣き虫じゃないやい！！』
『お前だってぬいぐるみ抱いて寝る癖に』
『テメェ！！』
『はいはい、おやつ出来たからみんな手を洗ってこい』

チフユサンダー０１以外は手を洗いにどこかへ行ってしまった。

『リーダー？　どうかしましたか？』
『お前ら……』

ＺＥＯは再び頭を抱えた。

――視点は元に戻ってＨＲ。

「は～い、他に意見は？　また一夏と俺のウンタラとか言ったやつは俺がきついハグで肉骨粉にしてやるぞ？」

ちなみに今までの意見だと、ホストクラブ、ツイスター、ポッキー遊びなどが挙がっている。俺と一夏しか参加しないような……。

「はい！！　織斑君と一夏君の王様ゲームがいいです♪」

――訂正、王様ゲームもだ。

「こっちおいで」
「えっ……まさか……冗談じゃなかったの……／／／」

おれはモブ生徒を手招きする。
モブ生徒はゆっくり近づき、停止する。

「……」

俺はその子をハグする。

「「「きゃぁぁぁぁ～！！」」」
「はわわ……／／／」

女子軍団から黄色い声が聞こえ、ハグされた子も顔を赤くする。

――しかし、そうはいかんざき！！

ベキバキボキ！！

「ウヴォ！！」
「「「！？」」」

俺は抱きしめる力を強くする。

「うぎゃ～ッ、やめろッ、やめてッ、やめてください～！！！」
「やめないよ♪」

グググ……。

「ギブッ、折れる、本当に……ぎゃぁぁぁぁ！！」
「反省は？」
グギギギ……。
もうその子は首を縦に振ることしかできない。
「せいやっ！！」
グシャッ！！
俺はその子の体をバックドロップし、沈黙させた。
逆さまでパンツ丸出しの状態である。
「気を取り直して……却下」
ええええ～！！　とブーイングの嵐。
デ～ンデ～ンデ～～ン　デデデデデデ　デーンデーンデーン♪
（暴れん坊将軍の処刑用ＢＧＭを思い出してください）
「来いよ！！　みんなハグしてやるから！！」
「「「お願いします！！」」」
――数分後。
パンツ丸出しの女子のオブジェが何体か完成した。

なぜか満足そうな顔をしている。

「……山田先生、それと一夏、何か良いアイディア無い？」

「え、えーと……うーん、わ、私はポッキーのなんかいいと思いますよ……？」

――数秒後。

「……」

山田先生のオブジェが完成していた。

口にはポッキーではなく、トッポが咥えられている。

やっちまった……。

「一夏、お前は？」

「えっと……あの……」

「お前に期待した俺が馬鹿だった。だからお前はヒトナツなのだ」

俺が自分の意見を出そうとしたときにラウラが意見を出した。

「メイド喫茶――」

「却下！！」

「な、なぜだ、話を聞いてくれ！！」

「断る！！　どうせ『客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのであろう？　それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ』なんて、そんな常識で誰もが真似しそうな意見は求めてないの！！」

全員のディスプレイに資料が表示される。

「見ろ、ここ最近の他学校の文化祭売店などの資料だ。メイドカフェ、コスプレ喫茶、オカマバー、戦国喫茶などなど、カフェ・喫茶・メイドのローテーションだ！！　俺達はそんな個性の無い事をぐだぐだ真似するような人間か？　否、他人の理論だけで発見の無い世界はただ腐って行くのみ！！　俺達は俺達のやり方で俺達の個性を表現するのだ！！」

「「「おぉぉ……」」」

「と言う訳で、俺の意見でフリーマーケットを――」

「「「断る！！」」」

「全員オブジェにしてくれるわぁぁぁ！！」

乱闘勃発。

もう女だからって手加減しない！！　魔界の議会が如く、力づくで可決してやる。

「一夏君の執事服の為に死ねぇぇいい！！」

「コスプレ喫茶なんぞ、お父さんはお前達の将来が心配だ！！」

バコン！！

「メイド服着たいのよ！！」

「高校生のガキが欲情の対象になることをそのちっぽけな頭で考えろ！！」

ドベシッ！！

「カバディ？」

「ｏｈ　カバディ！！」

グワシッ！！

「わたしはおっぱい党、あなたは何党？」

「俺はイチャイチャ党！！」

モニュッ！！

「ちっちゃなお姉さんは好きですか？」

「大好物です！！」

ナーウ。

――職員室にて。

「……というわけで、一組は喫茶店になりました。一部区画でイズール君の私物のフリーマーケットになってますが」

「また無難――待て、なんで一部がイズールのフリーマーケットになってる？」

「イズール君が『テメェらの神経がおかしすぎる！！　自分から自分の体を見せ物にすだなんて……俺がお父さんだったら絶対に認めんぞ！！　来る人がちゃんとした人か女性だけだったら許可するけど』と抗議の意思だそうです」

それを聞いた織斑千冬と山田真耶は少し苦い顔をした。

「山田君、もしかしたら我々はＩＳがどうこう以前に先生としてどこか感覚がおかしくなっているのかもしれないな」
「えぇ……イズール君の話を聞いたとき、生徒の健全な精神の育成を私たちはどこか忘れていたのかもしれません」
「山田君、今回の企画……許可するか？」
「一応許可はします。ですが……ここは道徳に詳しいあの人に聞いてみましょう」
「あいつか……まぁ、いいだろう。ところで、一夏とイズールは？」
「イズール君と織斑君だったら――」

――その頃。
――返品待ち倉庫にて。

俺は返品待ちの段ボールの中からフリーマーケットに出す物を漁っていた。

「あのエロガキどもめ……、あいつらと俺の決定的な差を思い知らせてやる」
「イズール……やめようぜ、お前ひとりじゃ喫茶店の売り上げには勝てないって」
「いや、あるんだよ……需要が高くて膨大な額付けても売れる奴が」

俺は倉庫の中の段ボールの中身を確認する。

「……ゼオルさんが許可を貰った時点で俺は止められないぜ」

「それって――ッ！？　お、おいイズール！！」
「止めてくれるな一夏よ、これはあいつらに勝つためだ……」
俺はその３つの物体を見つめる。
「ＩＳ疑似コア３つとこの世界で開発可能な次世代新型フレームの設計図！！（ガルクライフ社の没案機体の）　お値段はコアと設計図の一セットで２０００億から、今回の目玉商品だ！！」
「あわわわ……た、大変なことになるぞ……」

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――千冬ｓｉｄｅ

私は今、山田君と共に敷地内の屋台へ来ていた。
「お、いらっしゃい。ちょっと久しぶりだね」
「久しぶりだな、ゼオル。臨海学校以来か」
「お久しぶりです、ゼオルさん」
屋台ではコトコトとカレーの鍋が煮えていた。
「今日から営業再開……今回はどうしたの？」
「実は……先生としてのアドバイス的な物を聞きたくてな」
「よしてくれ……俺は料理の先生は出来るけど、そんな人生――」
「お前は人の上に立つ人間だろ？」

「……わかった。俺のアドバイスは下手だが頑張って教えよう」
ゼオルは私たち二人にカレーを振る舞う。
スパイスの良い匂いが食欲をそそる。
「食べなよ、ここは基本無料だからな」
「「いただきます」」
そのカレーは少し甘い味がした。
「トマトケチャップ少量と冷凍トマトを丸ごと煮込んであるから甘味があるだろう？」
「うむ、美味いな」
「すごくおいしいです！」
山田君は少し子供のようにはしゃぐ。
その様子を見たゼオルが少し微笑む。
「先生か……懐かしいな、俺が部隊長してた時は部隊内の道徳を教え込んだものだ」
ゼオルはカレーを煮込みながら答える。
「なぁ、先生方はどんな悩み？」
「今回、生徒をコスプレさせるべきかどうかで悩んでいてな」
「はい、許可したのはいいのですが、それがただしいかどうか……」
ゼオルは鍋の火を止めた。

「今回は良いとおもうよ。失敗してもそれを最小限にするのが先生の役目、失敗しないで成長した子っていうのは大人になって失敗した時に立ち直れなくなるから、若いうちは失敗させて成長させた方が効率はいいよ」
「そうか……」
「なんだか……不思議な話ですね」
「それに、先生が生徒から学んじゃいけないというのも無いからね。今回の事を通して先生方も色々学んでみなさいな♪」
ゼオルは鍋の火を点火、弱火で煮込み始めた。
「今度はそっちの話を聞かせてほしい」
「ふっ、そうだったな、ここは利益よりも会話だったな」
「そうでしたね。じゃあ一組のみんなの話でもしましょうか♪」
屋台の大人たちの話は夜まで続いた。
――続く。

第二十九話　五巻の世界の侵略者と生徒会長。（後書き）

いつもの通りご意見ご感想や願いを待っています。

第三十話　生徒会長楯無無敵最強会話術初級検定試験会場はここですよゼオルさ

なんだかキャラが多くて空気化がひどくなってくる……。
ユーザーのみなさん、色々助けて。
え、無理？

第三十話　生徒会長楯無無敵最強会話術初級検定試験会場はここですよゼオルさ

俺と一夏はいくつかの段ボールを運びだしていた。

「いいのかイズール。政府は絶対にソレを欲しがるぞ？」

「いいんだよ、どうせ返品待ちの製品なんだから」

この段ボールには疑似ＩＳコアが３つ入っている。

俺個人のフリーマーケットの売り上げはどの学年・クラスを合計しても勝利出来る計算だ。

そういえば……誰か知り合いにチケットを渡せるんだっけ……、誰にしようかな。

そんなことを考えていたら――。

「やあ」

「……」

「あ、会長。チーッス！」

扉の近くで生徒会長、更識楯無が立っていた。

「……何か？」

「ん？　どうして警戒しているのかな？」

「それを言わせますか……」

俺は二人の会話を無視して歩き出す。

「ちょっと、無視しないでよ。お姉さん悲しいわ～」

「いや、こっちは割れ物の危険物運んでいるので、ちょっと急ぎたいんです」

すると会長はニヤリと微笑み……。

ガシッ！！

「あっ！！　駄目です、開けないで！！」

「いいじゃない♪」

会長は段ボールを奪う。

そして開けようとした。

「一夏、ちょっと耳塞いでろ」

「え、あ、あぁ……」

俺はマイクを取り出す。

マイクには『優しく呟いて？』と書いてある。

そして深呼吸。

『パァウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥアアアアァァ！！』

巨大な音量で会長の動きが止まる。

周りの物体は吹き飛んで行く。

「……フゥッ」

「……なんだよ今の音……」

俺は会長を見る。

「……」

会長の髪がハリネズミのように逆立っていた。
俺はとりあえず段ボールを取り戻した。

「回収完了」
「いいのか、それで」

「ハッ！！　今まで私は何を……」

会長はどうやら正気を取り戻したようだ。
すると向こうから竹刀を持った生徒が走ってきた。

「覚悟ぉぉぉぉぉっ！！」
「なっ……！？」
「ワオゥ……元気な女の子が走ってきたね、俺のファン？」
「流石に違うと思うぞ？」

会長は扇子を取り出し竹刀を受け流し、左手を叩き込む。

「迷いのない踏み込み……いいわね」

女子生徒が崩れ落ちると同時に、今度は窓ガラスが破裂した。

「こ、今度は何だ！？」
「これはアーチだ。詳しい説明はアークエンジェル達に聞いてく――」

――ザクッ！！

「！？」
「どうした、一夏？」
俺は一夏の視線を追って頭を触る。
コツンと何か堅い物に当たった。
隣の会長も目を見開いて口を大きく開けていた。
俺は手を見る。
「……？」
自分の手には赤い血がベットリと付着していた。
「な、……なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁ！！」
「イズール、お前早く保健室に――」
俺は気付いた。
俺の頭に矢が刺さっていることに。
そして理解した。
あいつらは弓道をするものとして……というかそれ以前の絶対条件、『人に向けて撃ってはいけません』という掟を自分達の欲の為に破った事に……。
――ブチンッ！！
――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏ｓｉｄｅ　――

イズールが切れた。
眼球が黒くなり、瞳が青くなり、黒い筋が体中に浮かぶ。

「ぎガがこガギリリリ……」

歯ぎしりの音が周囲に不気味に響く。

ズポンッ！！

イズールは頭の矢を引っこ抜き、さっきまで赤かった筈の血が青くなり、紫色の静電気を放つ。

「あわわわわわ……」
「織斑一夏君、これって逃げた方が良いのかな……？」

生徒会長の笑みもちょっと無理している感じがする。
というかほったらかしにしたらまずい！！

「イズールに矢を当てた人物を守ってください！！」
「わ、わかったわ！！」

生徒会長は弓道部員の元へと走る。

「イズール、落ち着け！！」
「俺の頭だぞ一夏、笑えるよな……今の小学生でも頭を攻撃したら死ぬって言うのは知っているのに……ハハハ、馬鹿みたいだろう？　いくら俺がこの程度じゃ死なないからってさぁ～、頭は……頭は無いだろ？」

イズールは恐ろしいほどの笑顔を見せる。
物凄く怒ってるというレベルでは無い。
下手するとこの場の全員が殺される……。

「ハハ、ハハハハハ……Ｄｉｅ！！」

イズールは割れたガラス窓から飛び出す。

「くらぇぇぇいい！！　フェイゾンビィィィィィ――」

――ガンッ！！

千冬姉のとび蹴りが炸裂した。

「あぶらびらッ！！」

そのまま地面を転がって行くイズール。
青い光……ハイパーモードも収まったようだ。

「まったく……なぜイズールが血まみれでハイパーモードを使ったのか説明できるヤツは……一夏、説明しろ」

俺は千冬姉に説明した。
説明の内容を聞いた千冬姉は激怒した。
そりゃそうだ、生身の人間の頭に弓矢が刺さったんだからな。
でもなんでイズールは平気なんだ？　これもフェイゾンって物質の力か？

――数分後。

「――お前ら弓道部は数か月の部活動禁止だ！！　人に向けて矢を放ち、頭に命中させるなぞ狂気の沙汰だ！！　本当はこのレベルは廃部、退学になるが、今回はイズールが直々に制裁することでチャラにするそうだ。廃部や退学の方がまだマシだと思うようなるだろう、覚悟しておけ！！」

イズールはすぐに保健室へ運ばれ、弓道部員は全員千冬姉の説教を食らっている。

ちなみにイズールが保健室へ運ばれる直前に弓道部へ言った言葉は、『お前らはガルクライフ社娯楽開発部の薬品投与実験のモルモットな♪』と、そんな言葉を残して運ばれていった。

たぶんこの子たちは……助からないな、合唱。

この後、俺は生徒会長に連れられて生徒会長室へ行った。

ちなみに段ボール箱は千冬姉が俺達の部屋に運んだそうだ。

一夏ｓｉｄｅ　ｅｎｄ――

――ラウラｓｉｄｅ

「あいつはどこに行ったんだ、まったく……嫁失格だぞ」

今日は私が一夏へＩＳの指導をする日だ。
しかし、まったく一夏は見つからない。
もしや……避けられているのでは？
私はバレないようにＩＳを起動しようとする。
「――やめとけ、ラウラ」
「ッ！？」
私は思わず殺気を込めて振り返る。
「よっ！！」
「イズール？　――ッ！？　お前、血だらけだぞ！！」
そこには血だらけで、所々ＩＳが展開しかかっているイズールがストレッチャーで運ばれていた。
「いやぁ、弓道部のアホが俺の頭に矢を命中させちゃって♪」
「あ、頭！？」
なんということだ、イズールの頭にダメージがあってもイズールは死なないというのか。
「それより、条約違反になるから指定区以外での勝手なＩＳ展開はやめた方がいいよ？」
「お、お前も展開してるではないか」
「あぁ、脳に矢が刺さったから体内の信号が滅茶苦茶でねぇ……まぁ、今回限りさ。じゃぁ、そういうことだから、じゃあね♪」

イズールはストレッチャーを引っ張る人に指示を出すと、そのまま運ばれていった。

「お前は……不死身か？」

私はそう思わずにはいられなかった。

――ラウラｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

俺はゆっくりと目を開ける。

手には温かい感触があった。

「イズール……また死んだかと思った……」

俺の手を握っていたのは涙を流す鈴だった。

その隣には簪さんもいる。

「また心配かけたな」

「「ううん」」

二人は首を横に振る。

「あたしはあんたのパートナーでしょ？」

「私も……あなたは大切」

二人の優しさに俺は泣きそうになった。
俺はゆっくりとベッドから起き上がる。

「さて、また再生にフィゾン使ったな……生成しにくいっていうのに……」

体内のフェイゾンは確実に減ってきている。
生み出す方法は限られているし……。

あっ、関係ないけど、今のストーリー状況だったら……。

シャッ！

俺は隣のカーテンを開ける。

「ワォ」
「……やぁ」

そこには会長に膝枕されている一夏がいた。

「一夏！」

ラウラも合流。

「めけ～も」（超イケメンボイス）

ゼオルさんも合流。

「ゴブリン・バット」（クールなボイス）

ウォルツさんも合流。

「……とういうかゼオルさんとウォルツさんはノリで出てこないでください。キャラが多すぎると必ず空気になるキャラが出るので」

「「どうもすいません♪」」

ゼオルさん&ウォルツさん退場。

その間になんだか第三アリーナへ向かうことが決定したらしい。

――第三アリーナにて。

「あれ？　一夏」

「い、一夏さん？　今日は第四アリーナで特訓と聞いていましたけれど」

いや、それどころか俺と簪さんもいるよ。

「……そちらの方はどなたですの？」

セシリアは会長を見て言う。

「あぁ、この子はポケモン大好きクラブの会長、更識楯無だよ」

「変な教え方しないでよ」

「んじゃ、訂正。この子は歩くキラーマッスィーンの楯無会長だ

よ」
「わざとやってる？」
「訂正。この子はこのＩＳ学園生徒会長にて学園の暗躍家系、通称更識家現当主『十七代目楯無』さんご本人――」
「ちょっと待って？」
「はい、なんでしょう」
「なんでそこまで知ってるの？」
「ヒ・ミ・ツ♪」
俺の言葉を聞いた他のメンバーは茫然としていた。
「今、イズール君がサラッと凄い事喋らなかった？」
「えぇ、何だか暗躍家系とか言ってましたし……」
「まあ、そう邪険にしないで。あ、私はこれから一夏くんの専属コーチをするから今後会う機会があるわね」
おい、俺はコーチしてくれないのかよ。
「あなたにはフェイゾンがあるじゃない♪」
まぁ～たしかに……？　なんで知ってんだ？
「ふふん♪」
会長の手元にはあの時のガイアメモリが！？
なんで持っている！？
「見せてもらったわよ。なんだか相当ヤバイ物のようだけ――」
「姉さん……勝手に持ち出した」

?簪ちゃんは冷たい視線で会長を見る。
「か、簪ちゃん？」
「……」
簪さんはプイッとそっぽを向く。
ガーン、と効果音が聞こえた気がした。
「で、なんで持ってるんですか？」
「しくしく……それはもちろん部屋から」

――数秒後。

「――姉さん、いいですか！？　もう勝手に人の物を借りてはいけません！！」
「……ごめんなさい」
一回リセットされたことによって仲が悪くなってたと思ったけど、案外そうでもないみたいだな。
さて、どうなるかな？
「姉さん、私と勝負して」
「え、簪ちゃんと？」
なんだか変な展開になってきたぞ……どうしよっかなぁ……。

日本代表候補生
【更識簪】
ＶＳ
生徒会長
【更識楯無】

でも専用機は完全に調整されてたっけ？
あの時間軸は結局リセットされたし。

『そうもいかないよ。既に調整は終わってる』
「ゼオルさん？」

ビーッ！
ビーッ！
ビーッ！

突然警報が鳴り始める。

アリーナの地面が開き、機体がリフトで上昇してきた。

ガコンッ！！

そこには前よりも装甲が増えたＧＡ－ＩＳ－ＡＣがあった。

「……」

簪さんは器用に機体に上り、体をセットする。

――全調整完了。

――起動。

「ガイサック、行くよ」

――了解。

「簪ちゃんも本気みたいね……簪ちゃんは私のように戦わなくてもいいのに」

会長がＩＳを展開する。

――数分後。

――試合開始。

まずは簪さんのＩＳが動く。

なんというか、早いな。

「簪ちゃん、私はあなたとこんな戦いしたくないの。だから退いて」

「嫌です！！　私は、姉さんに……勝ちたい！！」

ガイサックは鬼火やポータルビームで攻撃するが、かわされる。
会長のＩＳ……どういう名前だっけ？
「しょうがない……それなりの覚悟あるみたいだから、ちょっと痛くするよ！」
会長のＩＳが簪さんのガイサックを攻撃する。
しかし、特殊なフィールドで攻撃が通らない。
「嘘！？」
「これでも食らえ！！」
簪さんのガイサックは尻尾で攻撃する。
会長はその隙を見て攻撃する。
ズドォン！！
「きゃぁ！」
「なるほど、攻撃中はフィールドが出せないってことか……これなら勝てる」
会長は……なんだあれ、ナノマシンか？
チュドォォォォン！！
「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！」
ば、爆発！？　いったい何が？
「簪ちゃん、もうやめにしましょう？　これじゃあ本当に……ッ

！？」

ん？　会長の様子が……ッ！？

ズシン……。
ズシン……。
ズシン……。

ガイサックにさっきまでなかった巨大な腕と脚が展開されていた。

「わたしは……勝つ！！　どんなことがあってもなぁ……」

――バトルモード展開。

ガイサックがそう言うと、簪さんの体に電子回路のような模様が浮かぶ。
そういやバトルモードがあるって言ってたなぁ。
でも……簪さんの口調が変なのはなんで？
俺はスキャンバイザーで情報を確認した。

ガルクライフ社製ＩＳ
【ＧＡ－ＩＳ－ＡＣ　バトルモード】
通称、ガイサック。
正式名称『ガルクライフ社製インフィニット・ストラトス　アサルトコア』
本物のコア一つと疑似コアを四つ積んだ化け物機体。
バトルモードは基本能力を倍にしたような性能。
遠距離攻撃が減る分、凶悪な近接戦闘が可能である。

一定距離になると、バリアとして使っていた重力フィールドを使って相手の動きを封じ、格闘戦で破壊する。
この機体の性能に普通はパイロットが耐えられないので、この機体がパイロットを強制的に強化する仕様がある。
ＭＥＴＲＯＩＤ　ｏｔｈｅｒ　Ｍの『リドリー』と『ナイトメア』がモデル。

どんな仕様だよ！！

「死ねや姉貴！！」

うわぁ……キャラがブレてる。
いや、明らかに違う。なんというか……人が。

ガイサックは羽を広げ、襲い来る。

「か、簪ちゃん！？」
「沈めッ！！」

ガイサックは強力な重力場を展開しながら会長に迫る。

「ナノマシンが飛ばない！？」
「貰った！！」

ガシッ！！

ガイサックは会長のＩＳを片腕で捕まえる。
ガイサックは元々大きいため、片腕で収まるのだ。

バンッ！！
「グゥッ！」
「……」
ガイサックは会長のＩＳを壁に押し付ける。
そしてそのまま引きずる。
ギャリギャリギャリ！！
「あははは！　大根おろしだぁ♪」
「や、やめて簪ちゃ――」
ダンッ！！
ガイサックは会長を地面に叩きつけるとそのまま何度も踏みつける。
会長は強力な重力場でうまく動けない。
ガンッ！！
ダンッ！！
デンッ！！
「このッ、こいつッ、くたばれッ！！」
「あうっ！　がふっ、ッ！」
あれは間違いない、簪さんがガイサックにコントロールされてる。
「簪さん、やめるんだ！！　お前の正義はそんな物か！？」

その声を聞いた簪さんは停止する。
「……わたし……なんで……あれ？」
「うぅ……」
「お姉ちゃん！？　一体誰が……」
簪さんは自分の機体が姉を踏みつけていることに気付く。
「あ……あぁ……あぁあぁぁああ！！」
簪さんの顔が青くなってくる。
「あぅ……」
ガクンッ！！
簪さんのＩＳが解除され、それと同時に会長が立ち上がる。
「……流石に今回はマズかったわ。簪ちゃん……なんでこんなことに」
会長は俺を睨みつける。
「今回はおふざけ無しで……私の妹に何をした！！」
俺はアリーナへ駆け寄り、スキャンしたデータと今まで説明され

てきたこと、なぜ簪がこの機体を欲しがったのかを話した。
「――そんな、私の言葉でコンプレックス……？　それでこんなことに」
「えぇ、でも暴走の原因は、疑似コア４つと本物のコア１つという数字に関係があるかもしれません」
機体の使用にあった『パイロットを強制的に強化』という部分に該当するかもしれないが……。
「ゼオルさん、応答願います」
『こちらゼオル、どうした？』
「簪さんがＧＡ－ＩＳ－ＡＣに乗っ取られたんで、原因究明をお願いします。恐らくバグかと」
『なんだと！？　調整で不具合は無かったはず……設定バグか？……とりあえず調べてみよう』
「了解」
俺、会長、簪さんは保健室へ向かった。

――保健室にて。
「まったく……ガルクライフ社関係だとけが人が多くて困る」
「すいません千冬先生」
俺は千冬先生に事故の説明をしていた。
会長は簪さんの手を握りしめている。

『こちらゼオル。みんな、これを見てほしい』

空中にディスプレイが表示される。

『今回の原因は……ＧＡ－ＩＳ－ＡＣのマルチコアシステムによる人格変化だな。簪ちゃんの場合はお姉さんへのコンプレックス……つまり、自分で自分を劣等評価したマイナスイメージの反動……が一番の説だな』

「「「……」」」

『でも、これは簪ちゃんの気持ち次第で直る』

「本当！？」

会長が反応する。

『あぁ、だから今日は簪ちゃんの傍にいて、簪ちゃんを頼ってあげなさい』

「はい……」

――廊下にて。

「――で、本当は？」

『イズールの予想が見事にビンゴどころか大物がヒットしたぞ』

空中ディスプレイにとある物が表示された。

「これは……」

『これは簪ちゃんの体内……いや、“設定”から見つかった物だ』

そこには黄色いビー玉のようなものが表示されていた。

『これは俺の“設定”の欠片だ。しかも1%分のな』

「ゼオルさんの設定！？」

『あぁ、本来7巻登場の簪ちゃんがこんなに早く登場していることをもっと疑問視するべきだった。俺の設定を得た奴は基本的に空想生命体化して原作シナリオを大きく無視できるようになる』

「で、悪い影響や後遺症でもあったんですか？」

『悪すぎる。今の簪ちゃんは野心に溢れていた頃の俺の設定を吸収して、下手すればそのまま俺の設定に汚染されてたぞ。後遺症は……見てみろ』

俺は言われた通りに保健室を開けて、簪さんを見た。

「お姉ちゃん♪」

「簪ちゃん！？」

『甘えん坊になることだ』

「平和的で良かった……」

簪さんは姉である会長に抱きついてしばらく離れなかった。

――続く。

第三十話　生徒会長楯無無敵最強会話術初級検定試験会場はここですよゼオルさ

アンケートでもやってみたいと思う今日この頃。
でも、こっちに集中。
ご意見ご感想、アイディアなどを募集しております。

第三十一話　会長、実際に裸エプロンはドン引きですよ？（前書き）

今回は会長との交流（？）です。

第三十一話　会長、実際に裸エプロンはドン引きですよ？

あれから二日。
簪さんの体内から無事に欠片は摘出され、簪さんとＧＡ－ＩＳ－ＡＣの相性も安定した。

そんな中、一夏は会長の特別訓練を受けていた。
ちなみに俺は生徒会長の座をいつでも得られるくらい強いので、参加していない。
（ウェイブバスターでハメ殺し　ｏｒ　ソニックブームで瞬殺）

俺が部屋のベッドで休んでいると……。

ガチャ……。

「～♪」

会長が勝手に扉を開けて、段ボールを運びこみ、水着に着替えてエプロンを身に着けた。
（会長が裸エプロンなう）

しかし、俺は無視して寝る。
会長はなぜか気付いていない。

ガサゴソ……。

会長はテーブルに置いてあるお菓子の袋を漁る。
一応『危険物』の張り紙張ってるんだけどな……古代リント文字で。

「♪」

どうやら食べる気のようだ。
あ、食べた。
というか会長、今媚薬グミ一袋食わなかったか？

「はぁ……はぁ……」

そして会長はオナ――待て！！　何やってんだこの会長！？　アカン警察に投稿するぞ！！
しかし、会長はこちらに気付いていないようなので、とりあえず寝る。

「……んぁっ、んぅ！！」

……眠れない。
これが某ＩＳオリ主ならば寝れるのだろうが……。
というか、一夏の服の匂い嗅いでないか？

「はぅッ！！　くッ、あんッ！！」
「――さっきからうるせぇんだよ、この雌豚がぁ！！」
「イ、イズール君！？」

俺はこちらに気付いて顔が真っ赤になる会長の口を無理矢理開き、解毒グミを放り込む。

――ゴクン！！

プシュゥゥゥゥゥ！！

会長の頭から水蒸気らしきものが噴き出る。
どうやら解毒完了のようだ。
会長はそのまま真っ白になってしまった。

「……とりあえず写メするか」

パシャッ！！

「内容は『会長は現在賢者タイム。マジワロス』これで送信」

送信先は簪さん。
しかし、簪さんには『賢者タイム』の意味は通じなかった。
ですが、流石簪さん。わからなければググる人。
結果、理解した。
姉の大人になる姿を……。

「……合唱」

――数十分後。

「……飲みます？」
「……うん」

会長はショックでしばらく立ち直れないでいた。
鈴も応援に駆け付けてくれた。

「大丈夫ですって会長。あたしもみんなの目の前でイったことありますし」
「鈴、それはフォローとは違うと思うぞ？」
「そう？」

そしてこのカオスな空間に一夏がやってきた。

「……なにこのカオス」
「深く突っ込まないでくれよ一夏」
「お帰り。私にします？　私にします。　それとも、わ・た・し？」

なんとかこの言葉を言うがどこか余裕が無い。
というか元気が無い。

「選択肢がない！」
「あるよ。一択なだけで」
「いや、『お帰り』も選択肢だ」

俺はチビチビとマウンテンデューを飲む。

「あ、あたしそろそろ行くわ。次のイベントのフラグを準備しなきゃいけないから」
「うん、わかった。鈴、ありがとな」

そうして鈴は部屋を出て行った。
というか今、さらっと変な事言わなかった？

「今日から私、ここに住もうと思ってね」

「「……危険物食べといてそれですか？」」
「……ごめんなさい。あれ？　なんかデジャヴ……」
そして一夏は会長の恰好にツッコミを入れる。
「と、とにかく！　服を着てください、服を！」
本来はここで振り返り、一夏を困らせるのだが、問題発生。
「じゃん♪　水着――」
「「……」」
「？」
俺は親切に指をさす。
そこには会長が脱いだ水着が置いてあった。
「「「……」」」
会長は自分のエプロンの下を確認。
そして俺を見る。
「「「……」」」
――私……裸？
――うん。
――エプロンの下全裸？
――うん。
――見た？
――うん。

「「「……」」」

バタンッ！！

会長、羞恥でダウン。

「ぶふぉあ！！」

一夏は鼻血を噴き出してダウン。
今この部屋は殺人現場のようだ。
とにかく、会長が住むなら準備しておきますかね。
俺は段ボールを空いているベッドの上に移した。

「……ふぅ、変な同居人が増えたな……」

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――箒ｓｉｄｅ

「……」

すたすたと1年生？の廊下を歩いているのは箒だった。
（語り：ゼオル・ゲバイン）
手に包みを持っていて、時折それを観ては笑みを漏らしている。
中身はなんだい？
え？　ニシンの包み焼き？

俺この料理嫌いなんだよね～、嘘だけど。
「ふふっ♪」
今月になって頑張ってたもんね～。
あの時は……。

「わ、私の料理の先生をしてください！！」
「いいでしょう。さぁ、行きますよザーボンさんドドリアさん」

あの時は箒ちゃんの真剣な目と言ったら～。
んで、完成したのが一夏君の大好物のいなり寿司。
残念、それは私のおいなりさんだ。は有名なセリフである。

コンコン。

「……」

反応が無いね。
もしかしてｓｙｕ☆ｒａ☆ｂａの予感？

『はい？　どちらさまですか？』
「わ、私だ。差し入れを持ってきてやったぞ」
『ごめんね。一夏は体調を崩してるの。……でも差し入れの質が落ちるからな……じゃあ、とりあえず中に入ってよ』

ガチャ……。

さて――

（語り変更）

私は扉を開ける。

そこには血と体液の混ざった何とも言えない臭いが立ち込めていた。

「うッ！？」

「気を付けて、そこで伸びてる会長は臨海学校の鈴と同じ運命辿って、一夏は会長の裸見て倒れた」

「お、お前は平気なのか！？」

「芸術的に見れば問題ない」

部屋の一部に血が付いており、生徒会長と一夏が倒れていた。

「イズール、私はどうすればよいのだ？」

「さぁ、とりあえず一夏の唇を強奪すれば良いんじゃない？」

「な、そんなことが出来るか！？」

まったくなにを……。

う、なんだ……この感覚……。

『一夏♪』

『箒、何やってんだ？』

『恋人だからな、うれしいのだ♪』

ッ！？
なんだ……今のイメージは……。
私と一夏が……付き合っていた？

「どうした？」
「……いや、なんでもない」

私が色々考えている内にイズールは荷物をまとめる。

「後は会長から色々説明あると思うからよろしくね」
「お前はどこかへ行くのか？」
「……お仕置きしにね」

そう言ったイズールの周囲に不気味な瘴気が漂う。

ガチャッ。

「じゃ、そういうことで」

片手で手を振り、部屋から出て行った。
私は二人が目覚めるまでに何をすれば……あっ。

私の目線の先の本棚には『インフィニット・ストラトス』が7冊ある。
本棚には『勝手に触ったら電気アンマな？』と書いてあった。

ゴクリ……。

私はそれに手を伸ばした。

――箒ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ
――弓道部部室にて。

バンッ！！

俺は勢いよく部室の扉を開ける。
現在弓道部は俺に矢を命中させた罰として部活停止処分。
まさか本当に俺が制裁に来るとは思っていなかったのか、部員たちは部室内でトランプをしていた。

「息ィ吸い込んで歯ァ食いしばれェ、俺がお前らを修理してやる！！　オーバーホールだぁ！！」

俺は両手にバンジーボールを装備する。

ＢＧＭ【必殺仕事人のテーマ】

「に、逃げろ！！」
「た、助けてッ！！」
「嫌ァぁぁぁぁ！！」

俺は逃げる部員を追いかける。

「な、なんで携帯が通じないの！？　これじゃあこれから来る部員が――」

シュッ！！

部員の足にバンジーボールの紐が絡みつく。
※バンジーボールはボールにゴム紐が付いていて、投げてキャッチするおもちゃです。検索してみよう。

「あ、あぁぁあぁぁあぁぁ！！」

部員は俺に引っ張られて地面を引きずられていく。
※これは間違った使用法です。
そのまま木に吊るされる。

キリリリリ……。

「や、やめ――」

俺はゴム紐を弦楽器のように弾く。

ピンッ！！

「あぅ――」

ガクッ！！

「主将がやられた！！　みんな、早く逃げ――」

ガン・ガン・ドガガガガガガガガガ――

バンジーボールの連続コンボがヒットする。

「あ、あぁ――」

バタンッ！！

「いやぁぁ！！　部長ぉぉぉ！！」

「は、はやく逃げるわよ！！」

俺はボールを思い切り投げる。

部員一人の後頭部に命中し、倒れる。

倒れた部員の足をゴム紐で絡め、自分の方へ引っ張る。

ビョンッ！！

勢いで部員が空中へ飛ぶ。

俺はそのままボールを連続ヒットさせた。

ドガガガガガガガガガガ――

ダンッ！！

部員はそのまま気絶。

「あ、あぁ……ちくしょぉぉぉぉぉ！！」

「や、やめなさい！！　あなたではイズール君には勝てないわ！！」

自暴自棄になった部員の一人がこちらに走ってきた。
俺はその部員の足にボールを命中させる。

「わッ！！」

部員が転びそうになるので、俺は腕を掴む。
そしてそのままＣＱＣ

「きゃぁ！！」
「……今夜のおかずはうな重……」

俺は再びバンジーボールを構えた。

後に語られるこの事件は【弓道部の虐殺】と呼ばれ、数年間弓道部の恐怖の代名詞となり、『矢を絶対に人に向けて撃ってはいけない』という掟が完成するのであった。

――数分後。

「――で、お前らに頼みがある」
「「「ヒィッ！！」」」

俺は紙袋から執事服の衣装を取り出す。

「これに着替えて俺のフリーマーケットの手伝いな？　上級生のみなさんも例外なく。あ、そうだ、ゼオルさんが文化祭時の人員欲しがってたな……」

俺は全員分の衣装を用意する。

「「「……」」」

「大丈夫、着付けは俺が呼んだ助っ人が行う。俺はみんなの着替えが終わるまでそこら辺うろついてるよ」

俺は外へ出て、すぐに気配のない場所へ移動。

バシュゥゥゥゥゥン！！

千冬先生へ変身する。

再び侵入。

「待たせたな」

「「「千冬様！？」」」

「騒ぐな、すぐに始めよう」

パチンッ！！

俺が指を鳴らすと、外の地面から店が生えてきた。

ちなみにこれはゼオルさんが俺の為に用意してくれた個人商店だ。

ズドドドドド！！

「さぁ、私に着付けしてほしいヤツはどいつだ？」

「わ、私です！！」
「何言ってんの！！　私よ！！」
「お姉さまの着付けは私がされるのよ！！」
喧嘩が始まった。
流石千冬ボディ、良い反応してくれる。
「面倒だ、まずはこの店に入れ」

――店内にて。

「部長、まずはお前だ」
「は、はいッ！！」
俺は部長をドレッサールームへ案内する。
ちなみにこの店の中にはガルクライフ社商品しかない。
「さぁ、力を抜け」
「は、はい……／／／」
俺はメジャーを部長の体に巻きつける。

【メタモルメジャー】
これを体に巻きつけ、一気に引っ張るとイメージした衣装になる
という謎のメジャー。

服を体に一気に装着する事も可能。
別名『服屋潰し』
これも娯楽開発部の開発。

「あ、あの……いったい何を？」
「じっとしていろ」
「は、はい」
俺はリボンのように巻きつけたメジャーを一気に引っ張る。
ジュンッ！！
部長は立派な執事服姿になっていた。
「う、嘘！？」
「う～む……何かが足りない……髪だな」
パチンッ！！
俺が指を鳴らすと、すると一本の櫛(くし)が出てきた。

【メタモルブラシ】
イメージしながらこれで髪を梳かすと、イメージする通りの髪型に変わる。
効果は髪を洗うまで。
別名『床屋潰し』

これも娯楽開発部の商品。

「じっとしていろよ？」
「？」

俺はブラシを部長の髪に合わせて、一気に引っ張る。

ジュンッ！！

「？？？」

俺は部長に鏡を見せさせた。
部長の髪が短髪になって、衣装とすごく合っていた。

「うわぁ……これが……私？」
「髪は洗えば元に戻る」

パチンッ！！

次に装飾品関係が出てきた。

「懐中時計は良い思い出が無いけど……しかたないか、あとは手袋に……靴に……」

次々に部長へと渡していく。

「これを付けていけ」
「はい」

こうして弓道部部長は見事なイケメン男装執事へと進化した。

「う～ん、実にお似合いベリーマッチ！！」

「あ、ありがとうございます！！」

俺はドレッサールームの扉を開けて、部長の生まれ変わった姿を公開した。

「どうだ？　こいつの姿は」

「「「！？　部長！？」」」

「や、やぁ……」

ふふふ、やはり私の着付けは正しかったようだ。

「ぶ、部長……惚れそうです……ぶはぁ！！」

「部長……はぁ、はぁ……」

「ぶ、ぶふぉ！！」

次々に鼻血を出した。

さぁ、文化祭へ向けての最後の仕上げだ。

数十分後、俺は元の姿へもどっていた。

「さぁ、着替えが終わったな？」

「「「はい、ボス！！」」」

「生徒会に負けたくないか？」

「「「はい！！」」」
「勝ちたいだろ？」
「「「はい！！」」」
「さぁ……当日は勝ちに行くぞぉ！！」
「「「おぉー！！」」」
そしてここに『イズール隊』が完成したのである。

――その夜。

「一夏くーん」
「なんですか？　――って、わああ！？」

なんだか一夏と下着ワイシャツなんてマニアックな装備の会長はなんかのコントをしているようだが、俺は構わず作業を続ける。

「さあさあ、観念して巧いと評判のマッサージを私にもしなさい」
「え！？」

あんまりうるさいので、俺はパソコンを打つ手を止める。

「なんでそれをって？　んふふ、おねーさんはちょっとだけ情報が早いのよ」

一夏は何か思考しているようだが……。
俺は段ボールからピコピコハンマーのようなものを取り出した。

【アサルトピコハン】
女性でも簡単に取り扱えると評判の対暴漢用の鎮圧アイテム。
『ピコ♪』という音と共に強力な衝撃波が発生、相手を鎮圧させる。

俺はアサルトピコハンを眺める。
流石にかわいそうなので、説教で済ますことにした。

「二人とも、こっちにおいで」
「「？」」

二人はベッドに腰掛ける。

「いいですか会長、一夏をからかうにしても、女性がむやみに異性の前で肌を露出してはいけません。例え学園最強であったとしても、生徒会長という肩書は生徒から信頼される立場でいなきゃいけないのです。あなたのような露出狂が生徒会長だなんて俺はおかしいと思いますよ？」
「む、おねーさんに向かって……なら――」
「まだあります」

俺は会長のお腹を触る。

「この部分は女性にとってとても大切な場所なんです。昔俺は先生に『女性の腹だけは絶対に殴ったり傷つけたりしてはいけない』と教わりました。それだけ大切なんです。だからヘソ出したままい

るなんてやめてください！！」
「イズール君……」
会長は自分のお腹をさする。
「……そうね、たしかに女性にとっては大切ね。私も子供が出来たらもう一度このお腹を擦るでしょうね……。久しぶりにお説教されちゃったわ」
そう言うと会長は自分のベッドに入る。
「流石簪ちゃんの惚れた男の子ね♪　色々エピソードがありそうだから、また聞かせてくれるかな？」
「俺が話す気になったらいいますよ」
「そう……じゃあ、おやすみなさい♪」
「はい、おやすみなさい」
そのまま会長は喋らなくなった。
「イズール、お前会長をコントロールするのうまいな」
「俺の人徳のなせるわざさ」
俺は再びパソコンを起動しようとする。
しかし、ここであることに気付いた。
「……本棚誰か触ったな」
実は本棚と本にはＩＣチップが設置されており、俺の許可を取らないで閲覧した場合、履歴が残るのだ。

「誰だ……この時間帯に読んだ奴は……箒！？」

そこには箒のＩＤが表示されていた。

「はぁ……こいつ……」

一番ルールを守りそうなやつが守れなかった事を知って、俺は脱力。

「……まぁいいや、罰ゲームは今度にしよう。一夏――」

「ぐぅ……かぁ……」

「寝るの早いな……まだ１０行分の文字程度しか過ぎてないぞ？」

俺は一夏の布団をかけ直してやる。

会長のタオルケットも乱れていたので直してあげた。

「会長……起きてます？」

「……起きてるわ」

「……フェイゾンの事知って……簪さんを遠ざけますか？」

「そんな事しないわよ。簪ちゃんは簪ちゃんなりの考えがあるから、私はただ……見守るだけ」

「……ありがとうございます」

「……それにしてもあなたたちガルクライフ社が関わったら学園のイベントが尽きなくて面白い♪」

俺は会長を見る。

透き通る瞳に思わず吸い込まれそうになる。

「……俺、もう寝ますね」

「あら、てっきりハグでもしてくれるかと思ったのに」

「それは今度します」
「……え？」
俺は照明を消した。
「おやすみなさい」
「はい、おやすみなさい♪」
――続く。

第三十一話　会長、実際に裸エプロンはドン引きですよ？（後書き）

そろそろ終盤に近いです。
ご感想お待ちしております。

第三十二話　学園祭の大事件？（前書き）

今回は長くて結構山場でした。
暑くてアイディアが浮かびません。

第三十二話　学園祭の大事件？

いよいよやってきた学園祭当日。
学園内のみんなのテンションはとにかく高かった。

「うそ！？　一組であの織斑くんの接客が受けられるの！？」
「しかも執事の燕尾服！」
「しかも勝ったら写真を撮ってくれるんだって！　ツーショットよ、ツーショット！　これは行かない手はないわね！」

とりわけ一年一組の『ご奉仕喫茶』は繁盛で、朝から大忙しだった。

そこにとんでもない商売敵があらわれるともしらずに……。

「そこ、そのコンテナはそこね。危険物だから気を付けてね。余ったメンバーはゼオルさんの屋台の手伝いだ！」
「「「はい、ボス！！」」」
「よし、準備完了。営業開始だ！！」

俺はコンテナのピンを手榴弾の安全ピンのように外す。

ガシャンッ！！

ウィン……。

ガシャガキョジャキンッ！！

コンテナが一瞬で売店に変形した。

「よってらっしゃい見てらっしゃい、さぁ……商売だぁ」

俺は一つの機械を取り出す。

それを『ご奉仕喫茶』で来ていたお客さんに見せる。

「これなんかどう？　ガルクライフ社製の食品カッター。肉や野菜、ポテトの千切りなんかもホゥラ～。しかも丈夫で長持ち。これで２３００円よお客さん♪」

お客さんは少し悩む。

「あら、あんまり興味無い？　ならこれはどう？　俺特製の織斑一夏フィギュア。各部稼働、ポージングも自由。もしよければお客さんのフィギュアもセットしちゃうよん♪　お値段は一夏フィギュア単品で３０００円、お客さんのフィギュアは今から製作になるから４０００円になるよ？」

それを聞いたお客さんは反応。

「一夏君のフィギュアください！！」

「はい、毎度あり♪」

俺はフィギュアの入った箱を渡す。

「もし不具合があったり、壊れたりしても、学園関係者だったら無料で治してあげるよ」

「ありがとうございます！！」

俺はお客さんに手を振った。

「さぁ！　長い列でじっと待っているよりもここで素晴らしい商品探す方が良い時間潰しだぁ……弓道部、客寄せよろしく♪」

「「「さぁさぁ、列でお並びのみなさん、我らが『空想商店』にぜひ！！」」」

「ねえ、さっきの人、一夏君のフィギュア持ってたわよ……」

「嘘！？　そんなのも売ってるの？」

「一夏君のグッズ！？　わ、私も欲しい」

どんどん人が集まってくる。

「商売繁盛？」

「あ、鈴。ちょうど良かった、今から本日の目玉商品の展示なんだよ」

鈴がこちらに来た。

チャイナドレスが実に似合っている。

「あ、私も一夏君のフィギュア欲しいな？」

「会長まで……って、なんでメイド服？」

「秘密よ♪　あと楯無って呼んで」

会長もやってきた。

さて、本日の目玉商品のご紹介だ。

「弓道部、目玉商品出すぞ。厳戒態勢！！」

「「「はい、ボス！！」」」

執事服の弓道部員たちは周囲を警戒する。
まるでＳＰのようだ。
手にはパラライザーやアサルトピコハンが装備されている。
「さて……ここにいるお客さん達だけに特別だよ？　本日の目玉商品はこちら！！」
俺は箱を取り出し、箱を開ける。
「ちょ、これって！」
「なっ！？」
「楯無さんも驚くよね～♪　そう、これはガルクライフ社製疑似ＩＳコア！！　お値段はたったの２０００億、新型フレームの設計図やわかりやすい解説書も付けるから安いもんね～！！　俺の目玉商品だ！！　ちなみに、購入後の返品は受け付けておりません。限定３セット！！」
それを聞きつけたスーツ姿の大人たちが近寄ってきた。
「すいません、交渉よろしいですか？」
「いや、我々が先だ！！」
「いやいや、我らが先だ！！」
中にはなんかオータムがいたような気がしたけど、まぁいいか。
このＩＳコアの事実上のコントロールはガルクライフ社が持ってるし。
自爆ボタンでドカンだ。

「あ、いいですよ。弓道部、他の商品を売ってて。俺はこっちで交渉してるから」
「「「はい、ボス！！」」」

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――ウォルツｓｉｄｅ

今回私の仕事はお休みなので、学園祭を楽しみたいと思います。
『あまりはしゃいで迷子にならないでくださいよ？』
『まったくだぜ、お前はどんくさいからな』

私の別人格であるβちゃんとγちゃんが私をからかいます。
「そんな事言ったら、お菓子作ってあげませんよ？」
『そ、それだけは勘弁を』
『俺もお前のお菓子は好きだからその言葉には勝てないんだよなぁ』

そんなこんなで一年一組の教室前。
少し甘い香りがします。
「――これでどうですか！？」
「……倍プッシュだ。というか非正規で売っているんだから、現金以外受け付けないよ。しかもちゃんと日本円で。ドルとかユーロ

はだめよ♪」

なんだかイズール君が大人の人と値段交渉しているようです。
甘い香りに誘われて私は列に並びます。
すると、列に並んでいる女の子たちが気付きます。

「あ、学食のウォルツさん♪」
「こんにちは！」
「はい、こんにちは～」

するとその声を聞いた一組のメイドさんが、私の元へ駆け寄ってきました。

「あ、ちょうどよかった！　ウォルツさんがいればイズール君の売り上げに勝てます！！」
「はい？」

私はそのまま連れていかれました。

「あ～れ～♪」
「みんな、ウォルツさんが来てくれたわよ！！」
「「「おぉー！！」」」

私はメイド服に着替えます。

「えっと……よろしくお願いします」

パチパチと拍手が起こります。

「最後に検便したのが結構前なので、色々大丈夫でしょうかね…

…」

すると、私は一番聞きたくなかった言葉を聞きました。

「え、検便？」

……はい？

今、この人達は疑問文で返しませんでした？

「まさか……あなたたち……検便してないんですか？」

「何ですか、検便って……」

ガッ！！

私は思わず近くにいた一夏君の胸倉を掴みます。

ここで意識がγちゃんに変わりました。

「いいか？　検便ってのはなぁ、こういうイベントの食品扱うやつが食中毒者出さない為に絶対にしなきゃいけない日本の常識だぞ！！　それをお前らはアレか？　忘れてたとか言わないよなぁ？」

俺の言葉に反論する人ゼロ。

「……お前ら全員そこに並べぇ！！」

――数分後。

そこにはご奉仕喫茶関係者全員と、先生二人が正座で並んでいた。
入口は『ｋｅｅｐ　ｏｕｔ』の黄色いテープで封鎖されている。

「最近検便を行わない学校もあると聞くけど……そんな事が知れたらこの学園の評判はどうなる？　食中毒者が出たらどうなる？　そして最悪、重症者や死亡者が出たらお前らは責任とれんのかぁ！？　答えろ、織斑姉弟！！」

「「……」」

織斑姉弟は何も言い返せない。

ガンッ！！

俺は織斑千冬の頭を踏みつける。

「グッ！！」

「言い返せないよなぁ？　ああん？　俺を納得させる言い訳言ってみせろよ！！」

「や、やめてくれウォルツさ――」

俺は一夏を蹴り飛ばす。

「グハッ！！」

「一夏！！」

一夏ラバーズが一夏へ駆け寄る。

「お前ら……楽しい学園祭っていうのはなぁ、安心・安全、そしてなによりも、楽しいのは店に来るお客さんの方で、決して店を経

営するお前らじゃないんだよ！！　わかってんのか！！」

俺の怒鳴り声で何人かの生徒は顔が青くなり、泣き出した。

「……もういい、話をするだけ時間がもったいない。私はただの食堂のデザート開発の人間だ。この店を営業停止にする権限はない。このまま続けるのなら……勝手にしろ」

俺は黄色いテープを剥がし、教室を後にした。

ったく……なんでこんな説教しなきゃいけないんだよ！！

――ウォルツｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

「なら、これで！！」

「だ～めッ☆」

大事件の事に気付かず、俺は値段交渉を続けていた。

すると、ウォルツさんが凄い形相で歩いて行くのが見えた。

「これで――」

「あんたじゃ話にならん。またおいで」

「く、くそうッ！！」

それにしても……いったい誰がウォルツさんを本気で怒らせた？

「！？」

俺が気付いたら、いつのまにかご奉仕喫茶に並んでいたはずの人がいなくなっていた。

「な、何があった！？」

「ボス……実は」

俺は事の真相を弓道部の部長から聞いた。

「なるほどねぇ……だから本気で怒ったのか……」

「はい……みんな元気が無くなって、お店の営業は出来そうにもありません」

そうか……もうダメか。

俺は交渉途中の女性、オータムへ声をかける。

「さて、オータム」

「！？　な、なんで名前を――」

「交渉ウンヌンどころじゃなくなったよ。ここは大人しく帰ってくれ」

「て、てめ……あぁ、顔が元に戻らなくなっちまったよ、どうしてくれんだぁ？」

「後ろを見ろ」

「あん？」

オータムが後ろを見ると、そこにはウォルツγさんがいた。

「さっきからうるさいな……俺は今機嫌が悪いんだ、黙っててく

れないか？」
「――ヒィッ！！」
なんだかウォルツさんから黒い煙のようなものが漂っている……。
しかも背中から黒い腕のような物が生えている。
オータムがＩＳを展開しようとする。
「やめときな、アラクネじゃあこの人には勝てないよ。ちなみにこの人はドイツを単独襲撃した張本人だ」
「な、なんだって！？」
「あぁ……本当に気分悪いわ……α、後は頼む」
すると、ウォルツさんの人格が変わり、殺気が消えた。
「えぇ！？　修羅場に置いてきぼりにしないでよ、γちゃん！！」
「……は？」
急に殺気が消えたので戸惑うオータム。
「もう、私が戦闘しちゃったら……」
――この学園ごと島がディラックの海になっちゃうじゃないですか♪
ゾクゥッ！！
俺とオータムに悪寒が走る。
「「……」」

俺とオータム、無言。

「ご奉仕喫茶はもう立ち直れないと思うし……しかたない。他のお店に行きますかね♪」

「「は、はい……」」

俺とオータムはとりあえず頷くしかなかった。

――そして。

「なんで俺がお前なんかと食事せにゃならんのだ！」

「それはこっちの台詞だ！　このオータム様がなんでお前なんかと……さっさと疑似ＩＳコア渡せ！！」

俺達は今、空き部屋となった一年一組の教室を占領して店を開いていた。

最初みんなを見たときは、それはもう酷かった。

千冬先生までもが、元気が無かった。

「はぁ……」

「元気出せよ一夏、人間は失敗の繰り返しで育つもんだ」

「けどよぉ……アレは正直へこむぞ」

ご奉仕喫茶の恰好のままで、クラスのみんなは俺の店を手伝っていた。

「ねぇ、その女性誰？」
「あぁん？」
「……ごめんなさい」
「こら、オータム！！　のほほんさんをいじめるなよ」
「んだとゴラァ！！」
「第一、お前の今の状況考えろ。周囲には専用気持ち、ガルクライフ社製品で武装した弓道部、そしてこの学園には機嫌の悪いウォルツさんがいる。ドイツを単独襲撃して無傷で帰還する人外だぞ？　お前勝てるのか？」
「……無理」
「だろ？　だから命大切にするために大人しくしてろ」
「畜生……」

オータムは歯ぎしりした。

「そういやイズール、そいつは誰だ？　さっき俺に名刺を渡した……巻紙礼子さん……にしては表情が怖いけど……」
「あぁ、こいつは昔お前を誘拐した組織の人間、名前はオータムだ」
「あ、テメェ！！」
「「！？」」

織斑姉弟が反応する。

「お前がッ――」
「落ち着け一夏。今戦う時じゃない」
「落ち着いていられるか！！　お前はなんで冷静なんだ！？」
「本当に戦うべきは……もっと後だ」

そう、こうゆうイベントには必ず何か来る。
二巻に現れたグレートチフユサンダー。
三巻に現れたジャイアントストラトスとザ・ウォーカー。
四巻に現れた設定バグ。
この調子でくれば、恐らくここにも何か来る。

「とにかく、こっちからこいつに手出しは無しだ」

全員が凝視する。

「何見てんだ！！　ブッ殺されテェのか！？」

ジャキジャキンッ！！

弓道部員が一斉にパラライザーの銃口を向ける。

「な、なんでこいつらは銃の扱いが慣れてるんだ！？」
「ワシが育てました」
「本当に何なんだよ……お前らは」

俺は店番を任せ、『シンデレラ』の為に移動を開始。

オータムの監視にフェイゾンで生成した分身【ダークエコーズ】がいるのは内緒だ。

――数時間後。

――第四アリーナ更衣室にて。

俺と一夏は王子の衣装に着替える。

「二人とも、ちゃんと着たー？」

「いいっすよー」

「……」

「開けるわよ」

「開けてからいわないでくださいよ！」

「なんだ、ちゃんと着てるじゃない。おねーさんがっかり」

そして王冠を渡される。

「ねぇ、イズール君」

「なんですか？」

「イズール君のイメージする『王子様』って、迷彩柄なの？」

「はい」

「防弾チョッキも？」

「はい」

「その機関銃も？」

「はい」

「その四連式ロケットランチャーも？」

「はい」

「というかこれ……『コマンドー』じゃない？」

「はい、これが俺のイメージする『王子様（コマンドー）』です」

ガチャ……。

俺は銃を担いだ。

／デェェェェェン／

「さあ、幕開けよ！」

ブザーが鳴り響き、照明が落ちる。

「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」

俺は所々にペイント式のクレイモアを仕掛ける。

カチッ……。

「否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女らを呼ぶにふさわしい称号……それが『灰被り姫（シンデレラ）』！」

俺はゆっくりと、ステージへ向かって歩き出す。

「今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜がはじまる。王子の冠に隠れた隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る」

カッ！！

照明がつく。

その瞬間に、レーザーサイトが俺を狙う。

「しかし今回、王子様もパワーアップ。少女達と素敵なダンスをするために、『歩く第三次大戦（コマンドー）』としてやってきた！！」

俺はスナイパーライフルを向けるセシリアにロケットランチャーを向ける。

いちおうこのロケットランチャーもペイント式です。

「最後に殺すと言ったな……あれは嘘だ」

「い、嫌ァぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

バシュゥゥゥゥン……。

チュドォォォ

ズガガガガ！！
ダンッ！！
チュドドド！！
次々とやってくる猛者を薙ぎ払っていく。
「一夏、ここは鈴と簪さんに任せて行くぞ」
「お、おう」
観客の拍手の中、俺達は広いステージへと移動する。
「一夏、伏せ――」
「敵かー？　（棒読み）」
ガトリングを展開。
キュィィィィィン……。
「ちょっ！？」
ズガガガガガガガガガガガ！！
シャルロット、ＯＵＴ！
「ひ、酷いよ……一夏、王冠を――」
一夏は、王冠を取ろうとする。
「一夏、そいつは自分で取ろうとすると電流が流れるぞ？」
「な、なんだって！？」

俺はガトリングで周囲を警戒する。

「す、すまん、シャル。そういうことだから」

「ええっ！？　そんな、困るよ！」

「そういわれても……スマン！」

「あっ！　い、一夏ってばぁ！」

なんだかコントが進んでいる内に黒髪と銀髪のシンデレラ×２が現れた。

「一夏、そこに直れ！」

「王冠は私がいただく」

箒は日本刀、ラウラは二刀流のタクティカル・ナイフ。

「あ、あ、あぶねぇ！！」

「二人とも、そこは対人地雷エリアだよ？」

「「え？」」

二人は足元のクレイモアさんに気付く。

只＜へぃ♪　俺はシブタク、一緒にお茶しない？＞

「「……」」

チュドォォォォォォォォォォォォォォン！！

「さあ！　ただいまからフリーエントリー組の参加です！　みな

さん、王子様の王冠目指してがんばってくだ――」

ズドォォォォォォォォォォン！！

「あ、楯無さんすいません。四連の一発飛んじゃいました♪　おまけで残りも追加だ！！」

バシュバシュバシュゥゥゥゥゥン……！！

ズドォォォォォン！！
バゴォォォォォン！！
チュドォォォォン！！

そうこうしている間にどんどんシンデレラの数が増えてきた。

「織斑くん、おとなしくしなさい！」
「私と幸せになりましょう、王子様」
「そいつを……よこせぇぇぇ！！」

俺と一夏へ向かって、シンデレラ達が走る。
すると、鈴と簪さんがやってきた。

「大変よ、弓道部が謀反を起こしたわ！！」
「……危険」
「なんだって！？」

あいつら……欲に負けやがって。
弾も少ないしな……。

「とりあえず。Ｓマイン発射！！」

バシュンッ！！

空き缶のような物が飛んでいき、ペイント爆弾の雨を降らせた。

「ちっ、数が無駄に多い……どうする？」

俺は最終兵器のデイビー・クロケット見つめる。

一応ペイント弾だとしても、元々デイビー・クロケットは小型の核弾頭。爆風で会場が吹き飛ぶだろう。流石に俺はそこまで鬼じゃないのでやめた。

「貰い！！」

すると、後ろにいた鈴が俺の王冠を奪った。

「「あ……」」

俺と簪さんは驚く。

「ごめんね♪」

――凰鈴音　ＷＩＮ！！

俺の試合は終わってしまった。

ここで俺はあることに気付いた。

「あれ？　一夏は？」

「一夏ならさっき、女の人に連れてかれたけど？」

おのれオータム！！
警告無視しやがって！！
いいだろう、お前はフェイゾン洗脳被験者一号の栄誉をくれてやる！！

――某所にて。

既に戦闘は行われていた。

「――お別れの挨拶はすんだか？　ギャハハハ！」
「なんのだよ……？」
「決まってんだろうが、てめーのＩＳとだよ！」
「なに！？」

まずいっ、あれは剥離剤（リムーバー）！？
くそっ、間に合え！！

「せい――ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

俺の体に電流が走り、ＩＳが分離する。

「な、イズール！？」
「ん？　なんだ、テメェか……まぁ、良い物が手に入ったな……ギャハハハハ！！」

俺は強烈なだるさに襲われる。
一応俺の体とＩＳは融合していたようなもんだからな……。

「イズール、大丈夫！？」
鈴が俺に駆け寄る。
「だ、大丈夫じゃないかも……」
――オータムがね。
「「「え？」」」
俺以外の三人が疑問の声を出す。
グチュ……グチャニチャミチョ――。
「な、なんだ！　ＩＳのコアが変形して――あ、熱いッ！！　あ、ギャァァァァァ！！」
「イズール……あれは……」
「あのＩＳは俺と一緒にフェイゾン生命体となった。俺の予想が正しければ、俺のＩＳは間違いなく『生きている』ことになる」
俺はオータムに言葉をかける。
「さて、オータム。今ここで俺が助けなきゃ確実に致死量の放射線浴びて死ぬぞ？」
「ほ、放射線だと！？」
異様な変形をしたＩＳコアはオータムに取りつき始めた。

「わ、わかった！！　た、助けてくれ！！」
「おーけー♪」
「あ、あんた、何を言って――」
俺は左手にフェイゾンエネルギーを溜め――
ドンッ！！
思い切り腹を殴った。
強烈な青い光がほとばしる。
「グァァッ！！」
「……手ごたえあり」
「あ、あんた……まさかフェイゾン細胞を埋め込んだの？」
「ご名答」
よろよろとオータムが立ち上がりる。
「ウ、ウェェェェ！！　な、何をしやがった！！」
ＩＳコアはまるでタコのように俺に纏わりつき、一体化した。
「それは後々のお楽しみ♪　とっとと失せろ！！」
「くっ」
オータムはアラクネを自爆させて、逃亡した。
「さって……あとはエムちゃんか……行きますか」
俺はオータムを追った。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――オータムｓｉｄｅ

「くそっ、なんだか腹に違和感がある……気持ちわりぃ」

それにしてもあのイズールってガキはなんで正体を知ってやがったんだ？

くそっ、なんだか思考がうまくできねぇ……。

しかもあのガキの計画も欠陥どころか最悪じゃねぇか！！

あのイズールのＩＳコアがタコみたいに動いて火傷を負わせるなんて……しかもあいつは『放射線』ってヤバイ単語出しやがった。

蛇口を捻るが、水が空中で停止した。

「ＡＩＣか！？　クソッ！　ドイツのＩＳだな！？」

「その通りだ、『亡国機業』まさかイズールがわざと見逃すとはなぁ、いったい何を考えているのやら」

抵抗しようとする。

「動くな。すでに狙撃者がお前の眉間に狙いを定めている」

「くっ……！」

「洗いざらい吐いてもらおうか。貴様らの組織について」

まずいっ、このままで――マまでは――ダ……が…。

「！？　なんだ今のは」

「お前のＩＳはアメリカの第二世代型だな。どこで手に入れた。言え」

「言うわけねーだろうが――茶色の狐はのろまな犬を飛び越える？」

ガ……ガガガ……。

「何を言っている？」

――笑え。

「うはははははっはっはっはは！！」

「おい！！　何が可笑しい」

――泣け。

「ふぇぇぇぇん……」

「？？？」

や、やめろ……誰だ！！　話しかけてくるのは！！

――自分の手を見てみろ？

見てみると、手に青いカビのようなものが出来ていた。

「い、嫌ァぁぁあぁぁっぁあぁぁあ！！」

体から青い光が溢れだす。
腹の違和感が全身に流れていく。
「まさか……ハイパーモード！？」
私の名前は……オータム……。
よろしくお願いします……偉大なるイズール様。
「偉大なるイズール様ばんざ～い♪　偉大なるイズール様ばんざ～い♪　あはははは♪」
「イズールだと！？　いったい何が……」
――今から来るエムを捕まえて俺の前まで連れて来い。ハイパーモードの使用はそっちにまかせる。
はい♪　このオータム、一生懸命頑張ります♪
――オータムｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ
俺は透明化して様子を伺っていた。
「離れて！　一機きますわ！」
「あ、エムちゃんが来るよ♪　エムちゃんはサイレント・ゼフィルスでビームを曲げることが出来るんだよ～♪」

「「！？」」

すると、ラウラの右肩がレーザーで撃ちぬかれた。

「ぐぅっ！？」

ラウラは眼帯を外して回避行動をとるが、反撃は出来ない。

「フェイゾンのお導きあれ～♪　あははは～、たのしいな～♪
エムちゃん、ここだよ～？」

オータムは洗脳がうまく効いている。
サイレント・ゼフィルスはラウラとセシリアを攻撃してオータムの元へたどり着いた。

「迎えに来たぞ、オータム」
「お前に……呼び捨ては……ガガガ……もう駄目だ……スコールに伝えろ……イズール・ユ・ミヅルは正真正銘……化け物だ……早く行け……」
「何を言っている？」
「……ツッカマエタ～♪」

バキベキンッ！！

オータムは青い光を放ち、背中から数本の腕が生えてエムを拘束する。

「何を……ぐぅ！！」
「全ては愛おしい偉大なる指導者、イズール様の為♪」

無数の腕はエムの首を絞める。
既に眼球は黒く、青黒い筋が無数に浮かんでいた。
「何がどうなっているんだ……」
「わたくしにも分かりませんわ……」
そうしている間に、オータムは剥離剤でエムのサイレント・ゼフィルスを解除し、捨てた。
「こんなものポ〜イだ♪」
「やめろ、オータム！！　な、なぜ――」
オータムは右手でエムの口を押え、残りの腕で殴る。
ドカッ！！
バキッ！！
「ッ！！」
エムはオータムをナイフで切りつけた。
しかし、オータムは全く動じない。
「全ては偉大なる指導者、イズール様の為。この程度で倒れては褒めてもらえないよ♪　さぁ、エムも一緒に偉大なる指導者を崇拝しましょう？」
「――ッ！？」
口をふさがれたエムは抵抗するが、人外となったオータムには敵わない。

そしてエムはオータムに捕まった。

「イズール様ぁ！　私やりました～♪」

――よくやった、オータム。

「えへへ……褒められちゃったよ♪」

これで任務終了かな。

「――そこまでだ、イズール」

隣を見たら、ラウラがこちらに武器を構えていた。

透明なのになぜわかった？

「さっきからソイツがお前の名前を呼ぶ時にここを見つめていたのでな。あと、お前がゴーストだったとはな……色々話してもらうぞ」

俺は透明化を解除した。

「なんだよ、犯人捕まって無事平和じゃないか」

「お前……人の命をなんだと思っている！！　こんな重度の洗脳をして……なんとも思わないのか？」

なんだか説教される俺。

「第一この洗脳は俺の意思一つで解除できる。そんな重度という訳じゃないさ」

「……」

俺はサイレント・ゼフィルスのパイロット、『エム』に話しかける。

「初めましてだな。たしか……織斑マドカだっけ？」

「……」

エムは黙る。

「しかたない、あとでコイツも洗脳……あれ？」

俺は気付いた。

サイレント・ゼフィルスが……無い。

『――これの事か？』

「「「！？」」」

俺、ラウラ、セシリアは声のした方を見る。

そこには千冬……いや、チフユサンダー・ＺＥＯが立っていた。

『いやー、俺も随分待ったよ……学園祭の時に行進するのも良かったけど、それじゃあ毎回のパターンでつまらないんだなぁ、これが』

「主観時間で……５年ぶりだな」

『あぁ、五年ぶり。あの時は色々あったからねぇ～♪　さて、俺はこのサイレント・ゼフィルスを使って……そうだなぁ……世界滅ぼすかな？』

ダンッ！！
ダンッ！！

エムとオータムが銃弾に撃たれた。
二発とも頭に。

『どうせソイツらは……というか、ファントム・タスクの連中はこの時点で謎だらけだ。存在するだけで創作が面倒になるだけだ♪だからもうこの世界にはいらない』
「テメェ……」

俺はＧＡ－ＰＥＤを起動して攻撃しようとする。

『おっと……物語にとって“敵”というのは重要なスパイスだ。その敵役が早く死んじゃったからバグになったぞ？』
「何！？」

頭を撃たれたエムとオータムは文字の集合体へと変化する。

『んじゃあ、がんばってね～♪』
「――待て！！」

ＺＥＯは歪んだ空間へ逃げた。

グキンッ！！
ジュルル……！！
バキバキンッ！！
バサッ！！

ズシンッ！！

文字の集合体となった二人はお互いに混ざって行く……。
そして巨大な機械鳥の怪物へと姿を変える。

『ギャァァァァァァァ……ッ！！』

「イズール、何だコイツは！！」
「イズールさん、これは何ですの！？」
「こいつは……設定バグだ」
「何だと！？　こいつはあの銀時計と同じか！！」
「ラウラさん、銀時計とはいったい何のことですの？」

設定バグ
【亡@機%】
原作で重要な役割を持つ敵組織の事実上の崩壊に伴い発生した設定バグ。
フェイゾンを含んでいるので、戦闘能力は高い。
設定バグ化した原因は他にも、原作で全然設定が明かされない事による二次創作の限界という部分が例として挙げられる。

「全員、武器を構えろ！！」
「おう！！」
「はい！！」

空想生命体
【イズール・ユ・ミヅル】
&
イギリス代表候補生
【セシリア・オルコット】
&
ドイツ代表候補生
【ラウラ・ボーデヴィッヒ】
VS
設定バグ
【亡@機%】

――続く。

第三十二話　学園祭の大事件？（後書き）

本当に大事件になってもうた……。
ご感想お待ちしております。

第三十三話　設定不足の亡国機業（前書き）

今回もカオス路線。
『いいぞ、もっとやれ』という言葉に思わず私は涙。

第三十三話　設定不足の亡国機業

――ＮＯＷ　ＬＯＤＩＮＧ

前回までのあらすじ。
なんて言ってる場合じゃない！！
オータムとエムがＺＥＯによって設定バグ化した！！

空想生命体
【イズール・ユ・ミヅル】
＆
イギリス代表候補生
【セシリア・オルコット】
＆
ドイツ代表候補生
【ラウラ・ボーデヴィッヒ】
ＶＳ
設定バグ
【亡@機％】

『キュルルルル……』

巨大な機械鳥はゆっくりと近づく。

「全員、武装や体調は大丈夫か！？」
「あぁ、少し怪我があるが大丈夫だ！！」
「えぇ、わたくしも大丈夫ですわ」

俺はその言葉を聞きながらアームキャノンを向けた。

『キュォォォォォン……！！』

設定バグの鳴き声によって周囲に結界が張られる。

「閉じ込められた、気を付けろ！！」
「わかった」
「わかりましたわ」

シュンッ！！

設定バグは飛び上がり、自身の羽をクナイのように飛ばす。
ラウラにＡＩＣによって俺達はガードする。

「ふんっ！！　そんな攻撃は通らんぞ？」
『クルルルルル……ラウラ、後ろだ！！』
「――ッ！？　一夏！？」

ラウラは後ろを見る。
あいつはオウムか！？

「馬鹿、それはソイツの声真似だ！！」
「なんだと――」

ズドォンッ！！
ラウラは設定バグの足で拘束される。
「このッ、離せ！！」
しかし動けない。
設定バグはそんなラウラをつつく。
ツン、ツンツン！！
「な、い、痛いッ！！」
もしかしてこいつ……攻撃力は高くても……攻撃する方法が思いついていないのか？
「そこですわ！！」
バシュンッ！！
セシリアのレーザーライフルが炸裂する。
『キェェェェ……！！』
設定バグは少しよろけ、ラウラは脱出した。
「あいつ……遊んでいるのか？」
「わからん、だがフェイゾンがある時点で危険のはず……」
「二人とも、来ますわよ」

設定バグは尾をクジャクのように広げる。

『キュロロロロロ……さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！』

「わ、わたくしの声ですわ！？」

クジャクのようなあの羽は……ビットだ！！

合計7機のビットが俺達を追撃する。

『キュロキュロキュロ～♪』

あいつ……感情がある。

しかも人間特有の『笑う』行為が出来るとは……。

「二人とも、援護するぞ！！」

俺はシーカーミサイルでビットを5機撃ち落とした。

「残りはわたくしがやりますわ！！」

バシュバシュンッ！！

セシリアのビットが設定バグのビットを撃ち落とした。

『キュロッ！？　……おのれぇ……お前さえいなければ……私はお前という存在を認めない！！』

「今度は私の声か！？」

設定バグは背中からワイヤーブレードを射出して攻撃する。

「馬鹿にするなぁあぁぁ！！」

ラウラはレーザー手刀でワイヤーブレードを切り落とす。

『キュルルル……てめえら二人ともスクラップだ！！』

「今度は俺か……」

設定バグは俺の声を出した後に口からプラズマ砲を発射する。

ビィィィィィィ！！

「あぶねっ！！」

俺の横を熱線が通り過ぎていく。

『キュロロロロ……ッ！！　ハイパーモード』

キュィィィィィィン！！

設定バグの体が青い光に包まれた。

それと同時に俺もハイパーモードになる。

――エネルギー１００をフェイゾンエネルギーに変換中。

――ハイパーモード、起動。

「セシリア、ラウラ、回避に専念しろ。今のコイツでは大抵の攻撃は無意味だ！」

「「了解」」

設定バグは羽を広げて飛んできた。

動きはまるでオメガリドリーである。

『キュロロロ！！』

尻尾や爪、背中の棘を飛ばして攻撃してくる。
おそらく全てがフェイゾン系の攻撃だ。

「おらおらおら！　こっちもフェイゾンビームだ！！」

しかし、相手の弱点が不明なので、無駄にエネルギーを減らす。

――ハイパーモード終了。

「くそう……タイムオーバーか……次ッ！！」

――エネルギー１００をフェイゾンエネルギーに変換中。
――ハイパーモード、起動。

『キュルルル♪』
「笑ってんじゃねぇよ！！」

俺は弱点を探る為にスキャンバイザーを起動した。

――スキャン完了。

設定バグ
【亡@機%】
オータムとエムの設定がバグとなって集まった姿。

フェイゾンも含んでいる為、戦闘能力は高い。
常に自身の設定を書き換えて敵に対応するのが特徴。
しかし、どれだけ設定を書き換えても、元々亡国機業メンバーの設定が薄いため、そこをうまく攻撃できれば勝つことはできる。

な！？　常に自身の設定を書き換える！？
そういや説明文も前回とは大きく異なっているな……。
それなら……。

「ラウラ、セシリアの目を塞げ。ちょっと秘策が出来た」
「わかった」
「え、ちょ、なんですの！？」

ラウラはセシリアの目を塞いだ。

「ハイパーモード解除。イズール、変身」

バシュゥゥゥゥゥン！！

俺はエムの姿に変身した。

『キュルル……この程度か、遺伝子強化素体――ガｗくぁｓでｒｄｆｇヴｈｊｋｐｌ』

やっぱり……コイツはこの場の人間を真似するんだ……。
でも今真似したエムは、原作でも描写が少なく、設定があまり公開されていないキャラクター。真似をしようとしても出来ないはずだ。

（２０１１年８月１１日現在）

『ｙｔｇｈじおｋぇｓｄｆｄｒｆｔｙｇふｊｋｌ；！！』

ビキンッ！！

設定バグの体にヒビが入り、青く光るコアが露出した。

これがヤツの設定核であり、フェイゾンコアか！！

俺は再びハイパーモードを起動。

「おりゃぁ！！」

ガンッ！！

アームキャノンをコアに押し付ける。

「とっととデバッグされな！」

俺はフルチャージのハイパービームを浴びせた。

ビシュゥゥゥゥゥゥゥ……！！

『腐ｊｋｈｊｋ眼部ｈさぎぇｒｈ場ｆｃｒｄｙｊｇｖｄｈｂｔｂん編ｓｈｂ』

ガンッ！！

ズドンッ！！

設定バグは苦しみだし、周囲の物体に体を打ちつける。

その間にボロボロと体の羽や棘が落ちていく。
俺はそんな設定バグに背を向け、振り向きざまに変身を解除する。
「……デバッグ完了」
設定バグは体が変色し、爆発する。
ピキピキピキ……。
『キェェェェ――』
ズドォォォォォォォォォォォォォンン！！
爆発で飛び散った無数の文字が集まって、エムとオータムの形に戻る。
「う……テメェ……さっきはよくも洗脳してくれたな……エム、お前は憎いが、とりあえず平気か？」
「……だ……れ？」
「……はぁ？」
「あなたはだれ？　わたしはだぁれ？」
へ？
「……ふぇ？」

――学園にて。

俺はゼオルさんの屋台で説明を受けていた。

「――つまり、簡単に言うとな、そいつは設定の無いキャラクター、つまり外見だけの『落書き』みたいになっちまったというわけだ」

「オータムも？」

「知るかよ！　ああもうッ！　亡国機業とこのオータム様に関する深い記憶が思い出せない！！　どうしてくれんだ、この野郎！！」

俺は怒鳴るオータムを無視してそうめんを食べていた。

「ねぇねぇ、これってどうやって食べるの？」

「あぁ……これはね、この麺つゆに浸して食べるんだよ？」

何だかエム……いや、織斑マドカがキラキラした目で語りかけてきた。設定の無くなったキャラクターって……ここまで天使のようになるの？

「マドカちゃん、お箸……使えるか？」

「マドカぁ？」

「そう、織斑マドカ。それが君の名前」

「マドカぁ♪　マドカぁ～♪」

何この子、マジ天使。

「結局、亡国機業の情報は闇の中……か。重要な証人の頭がこれではな……」

「ラウラさん、あんまり考えると体に悪いですわよ？　あ、麺つ

ゆの薬味いります？」
「……ネギを貰おう」

チュゾゾゾゾゾ……。

俺達はそうめんをすする。

「久しぶりに食うと美味いな……そうめん」
「そうめん、そ～お～め～ん～♪」
「エムと、このオータム様がこんなんじゃ……もう……亡国機業もお終いだな……再就職先……どうしよう……チュゾゾゾゾ！！」

何だかオータムから哀愁が漂う。
ちなみに、スコールの事はこれっぽっちも思い出せない。
あぁ……哀れスコールよ。
なのに……なんでエムの事は覚えてる？

「一応言っておくが……俺達空想生命体にとって『設定不足』は病気の一種です」
「……まじかよ」

チュゾゾゾゾゾ……。

俺達は再びそうめんをすする。
というかマドカちゃん……お箸使えるのね？

「イズール……いい加減お前の人外もここまで来るとすごいな。透明化に変身だぞ？　諜報では無敵ではないか？」
「そう言うなよラウラ。俺にも弱点の一つくらいはあるさ」
「例えば？」

「強いドロップキックで俺の能力が狂った事があってな……あ、話変わるけど、透明化したときのお前の涙目と言ったら――」
「わ、わー！！　い、言うな！！」
「あのう……さっきから『透明化』だの『変身』だの……なんの話をしてますの？」

そういやセシリアはあの時近くにいなかったから透明化を確認してないのか。

「そういやマドカちゃんとオータムはどうすんの？」
「あん？　『オータム様』だろう？」
「ホームレス生活で毎日強姦の恐怖に怯えたいの？」
「……すいませんでした」
「わかればよろしい」
「オータムおもしろ～い♪」

マドカはニッコリ笑う。
やばい……毒の抜けたマドカちゃんの破壊力がマジパネェ。
例えるなら、名言『一夏のえっち……』の破壊力が1トンだとすると、このマドカちゃんの破壊力は1メガトン位いくぞ！！　いわゆるギャップ萌え。

「こいつらは俺が引き取る」
「あ、じゃあゼオルさんにお任せします」
「おいッ！！　ふざけるな！！　まだ私は何も言ってない――」
「ああ、給料はだすぞ？」
「お願いします！！」
「マドカも～♪」

こうして、一部記憶が思い出せなくなったオータムと、毒と記憶

と設定がゴッソリ抜けた織斑マドカは無事に保護されることになった。

めでたし……で、いいのかな？

――続く。

第三十三話　設定不足の亡国機業（後書き）

ご感想お待ちしております。

第三十四話　ゼオルの日常（前書き）

今回はちょっとした番外編です。

第三十四話　ゼオルの日常

現在は6巻前の世界。
今回は番外編として、ゼオル・ゲバインこと、この俺の日常を紹介しよう。
ある日、俺はいつもの通り屋台を開いていた。
そしてここ数日は妙に客が多かった気がする。
そんな会話をここに記す。

一夏の幼馴染
【篠ノ之箒】の場合。

「すまない、もうやっているか？」
「お、いらっしゃい。今日はどうしたの？　まだ冷やし中華完成してないよ？」
俺は冷やし中華の具を切りながら話した。
「実は……あなたに相談したいことがあってな……」
「とりあえず座りな」
箒は屋台の椅子に座った。

「で、相談というのは？」
「……最近、一夏の事が……愛おしくて……私がおかしくなっていくような気がしてならんのだ……」
箒ちゃんは顔を赤くしながら答える。
なるほど、いつもの持病か。
「なら、これを使え」
俺は箒ちゃんに壺を渡す。
「これは？」
「これの使い方は、この中に自分の思いを大声で吐き出す物だ。昔バラエティ番組でもあったんだけどね。知らない？」
「いや……知らない」
箒ちゃんは壺を見つめる。
俺は使い方を実践してやることにした。
「いいか、こう使うんだ」
俺は息を吸い込み、壺の中に向かって思いっきり叫んだ。
『俺の設定を返せェェェェェェ！！』
俺は壺から顔を外し、ドヤ顔で箒ちゃんの方へ振り向く。
「ま、こんな感じ。箒ちゃんも叫べばスッキリするぞ？」

「そ、そうか……」

箒ちゃんは壺を手元に持っていき、深呼吸する。

「すぅ……はぁ……すぅ――」

そして叫んだ。

『一夏ァ！！　私はお前が大好きだ！！　愛おしくてたまらない！！　私はお前が欲しい、私を見てくれ、そして私を……愛してくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！』

ピキンッ！！

なぜか壺に亀裂が走った。

声だけでこのガンダリウム合金の壺にダメージを入れるとは……。

「はぁ……はぁ……」

「スッキリした？」

「あぁ……これは良い物だな……あの……このことは……」

「内緒にするよ」

「すまない……／／／」

箒ちゃんは顔を赤くして、うつむく。

俺はそんな箒ちゃんに冷やし中華を渡した。

「はい、後は胃に食べ物詰めて寝れば気分が良くなるはずだ」

「いつもすまない。いただきます」

箒ちゃんは冷やし中華をおいしそうに食べるが、長い髪が少し邪魔のように見える。

「あ、髪留め貸すよ。それじゃあ食べ辛いだろ？」

俺はキラキラ光るヘアゴムを渡す。ちなみにこれは妹が幼い頃に俺に間違ってプレゼントしてくれた……俺の思い出だ。

「なにからなにまですまんな……待て、何で男性のあなたが女性物のヘアゴムを？」

「昔妹から貰った品だよ」

「なら、大切なものでは？」

「いいよ、使わないヘアゴムなんてカレーの無い福神漬けのようなもんさ」

「そ、そうなのか？」

俺はとりあえず箒ちゃんの手のひらにヘアゴムを乗せる。

箒ちゃんは髪をうまく纏めた。

「リボンだけでも髪は垂れてくるからね」

「たしかに……このリボンは一夏から貰った……大切なものだ」

「そっか……」

箒ちゃんは目を閉じて何か回想しているようだった。

「何か良い思い出でも？」

「ああ……すごく良い思い出だ」

箒ちゃん……今すごく良い顔してる。

「……そういえば……あなたの過去について、イズールは何も喋らないが、何かあるのですか？」
「俺の過去？　なんでそんなことを？」
「いえ……あの小説にはイズールとあなた達ガルクライフ社の事が記載されていなかったので……」
「ああ、読んでいたな、忘れてた」

俺の過去ね……話してやるかな。

「昔ね、俺は正真正銘悪の秘密結社のボスをやっていたんだよ」
「悪の……秘密結社ですか？」
「そう……昔のガルクライフ社『ガルクライフ・アーミーズ』これが俺の旧組織の名前さ」
「ガルクライフ……アーミーズ……」
「俺達は自分達の自由と、同じ境遇にある仲間達の為に戦った。でも、それをこころよく思わない連中によって『悪の秘密結社』という称号を貰った訳よ」
「そんな……」
「いい機会だから覚えて帰ってね。『正義と悪に大きな違いは無い。違うのはちょっとした信念とやり方だけ』という事を」
「少し難しい話だな」
「悪と言われようがなんだろうが俺は戦ったさ……あ、おかわりいる？」
「いえ、大丈夫です」

俺は冷蔵庫からラムネを取り出した。

「飲むか？　今時珍しい瓶のラムネだよ」
「おお……懐かしいな。で、話を逸らされたようだが……続きは

？」
「……ちょっと恥ずかしいから秘密だよ♪」
「そうですか……」
箒ちゃんはラムネの口の部分を塞いでいるビー玉を専用の器具で押し込む。プシュッという音と共に泡が溢れ、ラムネ独特の甘い匂いが立ち込めた。
箒ちゃんはチビチビと飲んでいく。まるで小動物のようだ。
「……昔の縁日以来だな」
「そっか。あ、俺に敬語はしなくていいよ。俺はそういう人だから♪」
「そ、そうですか……では遠慮なく……ゼオル」
「はい、箒ちゃん♪」
俺達はこの後ラムネで乾杯し、他愛もないことを喋り続けた。
どうやら箒ちゃんの溜まっていた不安や感情はスッキリしたようだ。

――別の日
イギリス代表候補生
【セシリア・オルコット】の場合。

「～♪　～♪♪」

俺は鼻歌を歌っていた。

曲は『ハンガリー舞曲第５番』である。

「～♪」

俺は小型冷蔵庫からカルピスの原液を取り出し、水で薄めていく。

カラン……。

氷が解けて、グラスの中で崩れる。

俺はストローで原液と水をうまく混ぜていく。

「初恋の味って言うけど……初恋は『味』じゃなくて『感覚』なんだよなぁ」

そんな様子を見つめる一人の女の子。

「……セシリア？」

「あ、はい……こんにちは……」

少し様子がおかしい、どうしたのだろうか。

「どうしたの？　何だか挙動不審だけど」

「実は……おじ様の混ぜているドリンクが気になりまして……」

セシリアはじ～っと俺が調合したカルピスを見つめていた。

「これの事？」

「はい、それはなんですの？」
「これはカルピスという乳酸菌飲料だよ」
「カルピス？」
「そういや……この世界じゃ販売してなかったな……忘れてた」
そう、このカルピスは現実世界から直接取り寄せた……貴重品である。
直接設定を作り出した疑似品とは味も質も違う。そこはこだわりってやつ。
「ゴクリ……」
「……飲む？」
俺は調合済みのカルピスが入ったグラスを渡す。
「え、よろしいのですか！？」
「うん、珍しい物はチャレンジするもんだ。と言う訳でレッツ・チャレンジ！」
その言葉を聞いたセシリアちゃんはストローに口を付け、ゆっくりと飲んだ。
「おいしいですわ！！」
「おぉ……ちょっと原液濃い目だったんだけど、口に合ったようだね」
「原液？」
「うん、これはね、このビンの中に入っている原液を水で3～4倍に薄めて飲むんだ。中には薄める必要のない商品もあるけど」
俺は冷蔵庫から原液の入った瓶を取り出す。

「混ぜてみる？」
「は、はい」
俺はセシリアの隣へ座った。
「さぁ、やってみよう」
「えっと……この原液を……どれくらいですか？」
「このグラスの五分の一位かな？」
セシリアちゃんはカルピスの原液をトポトポとグラスへ注ぐ。
「次に、水を注ぐ」
「はい、水ですね」
セシリアはゆっくり慎重に水を注ぐ。
「できましたわ♪」
ストローを突き刺し、飲んだ。
「あ、セシリアちゃん！　混ぜなきゃダメだって！！」
哀れセシリア。
沈殿しているカルピスの原液を思いっきり吸ってしまった。
「お、おぉ……甘ったるい……ですわ……」
ちょっと悶絶。

「はぁ……先走りすぎだよ。ストローでかき混ぜなさい」
「……は、はい……」
セシリアちゃんはストローでグラスの中の原液と水を混ぜ合わせた。
そしてリトライ。
「……この味ですわ♪」
「なんとかうまくいったみたいだね」
フワァ……。
夏の暑い時間帯に優しくて涼しい風が吹いた。
セシリアちゃんの髪が綺麗になびく。
「……気持ちい風ですわ」
「あぁ……今の感じ……CMで使ったら売れそうな気がする」
「あ、あの……」
「ん？」
セシリアちゃんはこちらを見つめ、何かを訴えかけているように見える。
「そのカルピスという飲み物は……余っていますか？」
「結構取り寄せたから余ってるよ？」
どうやらセシリアちゃんはカルピスが欲しいようだ。
「いいよ、どうせこれだけの量は飲みきれないから……6本位やるよ」

「え！？　そ、そんなに！？」

俺は屋台の横にある箱を指さした。

そこには『御中元』と書かれた箱が置いてあった。

「部屋に郵送する？」

「い、いえ……これくらいの大きさなら持って帰れますわ」

「そっか、何か食べてく？」

「あ、すみません……今日は一夏さんとお食事の約束ですので」

「人気だな……一夏君は。たまには屋台手伝ってくれよ？」

「はい♪　ではおじ様、今日はありがとうございました」

「はい、またおいで」

こうしてセシリアちゃんは箱を持って歩いて行った。

余談ではあるが、セシリアちゃんの調合するカルピスはルームメイトに人気だったとか。

――別の日。

空想生命体

【凰鈴音】の場合。

俺がラーメンの新しいスープの配合で悩んでいると、鈴ちゃんがやってきた。

「ゼオルさん、こんにちは！」
「お、鈴ちゃん。ごめんな、今ラーメンのスープの調合中」
俺はとりあえず調合を中断した。
「そういやイズールから移植した空想生命体の設定は馴染んでる？」
「えぇ、なんだか二つ名が『中国代表候補生』から『空想生命体』へジョブチェンジしたようで、身体能力が高くなりました♪　あ、イズールには内緒ですよ？」
「ついに鈴ちゃんも転生者の仲間入りかぁ……いや、転生者じゃないか。で、他に得たものは？」
「えっと……最近氷の能力の覚醒に向けて特訓中です。流石にフェイゾンは無理そうですけど」
「いや、流石に空想生命体になったからってイズールに組み込んだ能力が使えるという訳ではない……いや、努力次第では可能だな」
鈴ちゃんが空想生命体化したことによって、大体の無茶が通用するようになっていたのである。
「ところで、前から気になってたんですけど、『空想生命体』ってなんですか？」
「……それを知らずに会話してたのか……」
俺はホワイトボードを取り出した。
「食事前の講義だ。お題は、『空想生命体って何？』だ」
パチパチパチ。

ヒューッ！
パフパフ♪
どこからかいろんな音が聞こえる。
「んじゃあゼオルさん、空想生命体って何？」
「空想生命体とは、核となる“主設定”と、“絵”を肉体として存在する空想の存在。まぁ、簡単に言えば『二次元のキャラクター』なんだよね」
簡単な返事で流す鈴ちゃん。
「じゃあ、あたしの主設定は？」
「『セカンド幼馴染』の部分だね。基本主設定というのは、失うと一気にモブキャラになるくらい重要な設定だから、傷付けちゃだめだよ？」
鈴ちゃんは自分の胸に手を当てた。
「じゃあ、次にこの世界について教えてください。『インフィニット・ストラトス』とはずいぶん違う世界になっているようだけど」
「この世界は本来存在する原作世界とは違う二次創作の世界さ。パソコン的に言えば『別のハードディスク』か『別サーバー』ってとこだね。お、麺が煮えた」
俺は茹でた麺の水切りを行い、スープの中に入れる。
後はトッピングを入れて完成である。
「ほい、俺特製ラーメン。スープの調合法や調合物については秘密だよ」

「今日もおいしそうですね」
ちなみに具は、チャーシュー、シナチク、海苔だけである。
「いただきます」
「はい、どうぞ」
実に美味しそうにラーメンを食べる鈴ちゃんを見て俺は少し微笑む。
「んで、話の続きだけど……もちろんこの世界は本物の世界とは違うし、原作が完結していないから限界が来れば世界の時間は止まる。この二次創作サーバーの運命だよ。ここ最近になって現れた設定バグ、ＺＥＯが好き勝手暴れられるようになったのはその二次創作の限界が近くなったことによる設定の歪みの影響だな。ジャイアントストラトスはそれに対応したシステムを積んでいた。他にもいろんな実験やってわかった事はいくつかある」
「例えば？」
「……全ての二次創作サーバーのオリ主の設定を融合させた『究極の空想生命体』が誕生可能だという事が可能という事がわかった」
「究極の空想生命体！？」
「そう、今のイズールは『メトロイド』の設定を組み込んでいるけど、そいつは『オリ主』と『オリキャラ』、『オリ主の能力』いう膨大な設定を組み込む……いわば巨大な『世界』だ。昔それを開発するプロジェクトがあったんだけど、取り込んだ設定を制御できないという事態が発生して、ひとまずお蔵入りとなったんだが……」
「何か問題が？」
「……テンプレの神様だ」
「は？」
「テンプレの神様の設定を制御装置として吸収することで可能と

いう結論が出た」
「なんですか、テンプレの神様って？」
「近年、二次創作サーバーに空想生命体を送りまくる巨大な『使い捨てキャラ』だ。基本テンプレの神様というのは、オリ主の生産、調整、開発などを担当した後に……処分される」
「殺されるって事ですか？」
「いや、基本は空想生命体を開発して送り出した後に凍結処分を受ける。中にはテンプレの神様が存在しない世界はある。でも、このサイトは大体テンプレの神様が関わっている。その凍結された巨大な権限の塊が誰かにリサイクルされたとしたら？」
「それが……究極の誕生ですか？」
「あぁ……今のＺＥＯはまさにそれをやりかねない」
「じゃあ、そのテンプレの神様の設定を奪われなきゃいいじゃないですか」
「いや、それは完全な『他世界干渉（規約違反）』といって、禁止事項なんだよ」
「へ、へぇ……」

俺はホワイトボードを放り投げた。
ガシャンとどこかで何かが割れるような音が聞こえるが気にしない。

「以上で抗議終了。なんとなくわかった？」
「はい、だいたいは」

そう言いながら鈴ちゃんはラーメンをすする。

ズゾゾゾゾ……。

「鈴ちゃんは何か悩みある？」

「悩み……。あたしがだんだんイズール化している事かな？　設定が馴染んできたみたいだし」
「それは……俺にはどうすることもできない」
「まぁ、大丈夫ですよ。あたしはあたしですから」
「そ、そうか……」
「そういえば……他の人の主設定ってなんですか？」
「他の？　そうだな……」

各キャラの主設定。

織斑一夏：『主人公』
篠ノ之箒：『一夏の幼馴染』
セシリア・オルコット：『イギリス代表候補生』『お嬢様』
凰鈴音：『セカンド幼馴染』『中国代表候補生』『空想生命体』
『メト$イ@』
シャルロット・デュノア：『フランス代表候補生』『健気』
ラウラ・ボーデヴィッヒ：『ドイツ代表候補生』『眼帯』『軍人』

織斑千冬：『姉』『教師』『最強』
山田真耶：『教師』『おっちょこちょい』
篠ノ之束：『天才』『???』
更識楯無：『生徒会長』『自由』
更識簪：『日本代表候補生』『内気』

織斑マドカ：
オータム：『亡@機%』『%$?__@』

イズール・ユ・ミヅル：『空想生命体』『転生者』『メトロイド』

ゼオル・ゲバイン：『空想生命体』『氷』『光』
ウォルツ・ゲバイン：『空想生命体』『三重人格』『闇』
ウェブ：『空想生命体』『鬼』『火』

ちなみに主設定は必ず一つという訳ではない。

「――とまあこんな感じ」
「ちょっと！？　なんだか変なのが混じってませんか！？」

俺の事か？　失礼だな、俺のどこが――

「いえ、ゼオルさんじゃなくて、あたしの設定と、織斑マドカとオータムってやつの設定ですよ！！」
「あぁ……鈴ちゃんはメトロイドの設定が成長を始めたから載っている。織斑マドカちゃんとは……まだ面識がなかったね、マドカちゃんは設定バグのせいなのか、それとも原作の設定不足のせいか、設定なしという例のない存在になった。オータムちゃんの場合は完全なバグね」

マドカちゃんは設定がないのになぜか存在出来る。理由は不明だ。

「やっぱりあたし……イズールの能力が使えるようになるんですね！！」
「いや……最終回までに覚醒するかどうか……」

こうして俺達は空想生命体についての会話を続けるのであった。

――別の日。

フランス代表候補生
【シャルロット・デュノア】
&
ドイツ代表候補生
【ラウラ・ボーデヴィッヒ】の場合。

今日も夕方からの屋台の為に点検をしていた時の事。

ゴロロロ……。

「雷？」

ポツポツと雨が降り出し、一気に大雨となった。

ザァァァァァァ！！

「うわ、ゲリラ豪雨ってやつか！？」

雨が強くなっていく。
この屋台は屋根が少し大きめに作られているので、特に心配する必要はない。雷は俺の体に吸収すればいいし。

ザァァァァァァ！！

「涼しいのはいいけど……少し濡れるな」

そんな事を考えていると、向こうから二人の人影がこちらへ走ってきた。

「ゼオルさん、雨宿りさせてください！！」

「すまない、場所を借りるぞ！！」

「おや、シャルロットちゃんにラウラちゃん？」

シャルロットちゃんとラウラちゃんは屋台の椅子に座った。

どうやら雨の中を走ってきたようで、制服が濡れて下着がうっすらと透けていた。

「うわぁ……ぐしょぐしょだよ」

「私はこれくらい平気だ」

「とりあえずこれ纏え、下着が透けてるぞ」

俺は野宿用の為のタオルケットを二人に渡した。

「下着！！　あ、あわわわ……」

「すまんなゼオル」

二人は制服の上からタオルケットを羽織った。

「なんでここへ？」

「僕達はＩＳ練習の為に移動してたらこんなどしゃ降りになっちゃって……ちかくにこの屋台があったから雨宿りしようってなったんだ」

「うむ」

「そうか……なにか温かい物を作ってあげよう」
ここは簡単な物が良いな……ホットミルクか？　こういう時はウォルツの専門なんだがな……あ、クラムチャウダーでも作るか。具が少ない物だったらすぐに出来る。
「ナ～ウ……」
「「「？」」」
俺達は何かの鳴き声に気付く。
「ニャァ……」
「「「猫？」」」
鳴き声の正体は猫だった。
黒猫……だな。
あまり濡れてないところを見ると……いままで屋台の屋根の下にいたようだな、気付かなかった。
「君も雨宿りかい？」
俺は猫に話しかける。
「ニャア～」
どうやら肯定のようだ。
俺は生物の脳から流れる信号を読み取って、感覚的だが相手の心情が分かる。

「ゼオルさんって、猫の言葉が分かるんですか！？」
「いや、感覚的にだから分かるとは言わないよ」
俺は猫にカツオ節を差し出す。
「食べるかい？」
猫はゆっくりと俺の手元のカツオ節へ近寄り、食べた。
「ニャウ♪」
「おぉ、もっと欲しいのか」
猫はカツオ節を一生懸命に食べる。
その様子をシャルロットとラウラが見つめる。
「うわぁ、かわいい～♪」
「おぉ、まるでゼオルと猫は家族のようだな」
俺はラウラの言葉を聞いて、猫を観察する。
猫には赤い首輪と鈴が付いていた。
「この子……飼い猫だな」
「迷子かな？」
「名前は書いてないのか？」
俺は赤い首輪を確認する。
「名前は……『ラウラ』……ッ！？」
「「！？」」

黒猫
【ラウラ】
バックアップ前の崩壊した世界に存在したらしいもう一人のラウラ（？）
身も心も完全な猫であるが、人間の言葉を理解している。
設定バグではない。

良く見たらコイツの右目が赤で、左目は金色。

「へぇ……この子もラウラって名前なんだ～♪　こっちおいで」

猫ラウラはシャルロットの膝の上に乗る。
シャルロットは猫ラウラの頭を撫でる。

「よしよし」
「ニャ……♪」

猫ラウラはとても気持ちよさそうだ。

「よし、私もやるぞ。さぁ、こっちへ来い」

猫ラウラはラウラの膝の上に乗る。
ラウラは喉を撫でる。

「ゴロゴロゴロ……♪」
「ほう、そうか、ここがいいのか！」

ラウラが猫ラウラを撫でる姿はまるで母親のようだ。
言えない、その猫が銀時計事件で生まれたもう一人のラウラだなんて……。

「ニャ……ニャ～」

猫ラウラは何か俺に伝えたいようだ。
む、脳の信号がやけに人間っぽくなってきた？

――この二人に何か温かい物をやってくれ。体温が少し下がっているようだ。

なんとしっかりした猫なんでしょうか。まるで二人の母親のようだ。
俺は急いでクラムチャウダーを作った。

「ほい、お二人さんに」
「あ、ありがとうございます」
「すまないな」

クラムチャウダーを飲む二人。
俺と猫ラウラはその様子を眺める。
俺が猫ラウラを見ると、猫ラウラは自分の足をペロペロと舐め始めた。

「その猫……どうするのだ？」
「僕も気になる……ゼオルさん、どうするの？」
「う～ん……猫さんはどうする？」

俺は猫ラウラに聞いてみた。

「ニャ～ウ……」

――私にはもう帰る場所が無い。それに……この物語の結末を見届けてみたい。

「そっか……」

「……僕には何て言っているかわからないや」

「私もだ」

「ニャ……」

――やはり私の言葉は二人には伝わらないか。

「そうだな、そういえばどうやってここまでやってきた？」

「ニャ！」

――よくわからん！　気が付いたらこの近辺にいて、食料を探していた。

なるほど、食料さがしていたらここにたどり着いたというわけか。

「よし、しばらく俺の屋台の看板猫をやらないか？」

「ニャ？」

――条件は？

「三食昼寝付き、人間形態の体も用意しよう」

「ニャ～♪」

――乗った♪

こうして猫ラウラは俺の屋台の看板猫となった。
猫ラウラは猫であるが、ちゃんとラウラの設定を持っている。体を作ってやれば復活も可能だ。

「ねぇ、猫ラウラ、僕はシャルロット・デュノア。よろしくね」
「私はお前と同じラウラ。ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「ニャン！」

――よろしく頼むぞ、この世界の二人。

「『よろしく』だって」
「やっぱりゼオルさんは動物の言葉がわかるんだね！？」
「やはりお前はただものではないな？」

ラウラちゃんがそう言っている間に、猫ラウラは俺の屋台の椅子に座った。

「ナ～ウ～」

「ははははっ、よろしくな猫ラウラ」
「僕もよろしく♪」
「私もだ」

外を見ると、いつのまにか雨は止んでいた。
雲の隙間から太陽の光が見える。

「あ、雨やんだみたい。ゼオルさん、今日はありがとうございま

した」
「私からも礼を言うぞ」
「帰りに転ぶなよ？　気を付けてな」
「ニャウ……」

――また遊んでほしい。

「また遊んでほしいってさ」
「そっか……あぁ、『ラウラ』だとややこしいから、『黒猫さん』って名前はどう？」
「ニャ！」

――この世界の私の為に許可しよう。

「許可するって」
「んじゃあ……よろしくね、黒猫さん」
「よろしく頼むぞ、黒猫さん」

そして二人は晴れた空の下を歩いて行った。

「……俺も『黒猫さん』と呼ぶけどいいか？」
「ニャウッ！」

――許可しよう！

俺の屋台に新たに自由な黒猫さんが加わったのである。

――別の日。

亡@機%
【オータム】
&
無設定
【織斑マドカ】の場合。

俺は新たな同居人達と屋台で食事をしていた。

「ニャ、ニャウッ！！」
「サーモンだぞぉ♪」

マドカちゃんが黒猫さんで遊んでいた。
サーモンのお刺身で遊ぶって……一部人間が怒るぞ？
ちなみに黒猫さんは元人間なので、食べ物の特別な制限は無い。

「あ、オータムとマドカちゃん。俺が用意した部屋はどう？」

エプロン姿のオータムと白のワンピースで麦わら帽子姿のマドカは俺の質問に答えた。

「おう、あれは良い部屋だ。三食昼寝付きで家賃無しでテレビや映画も見放題、たぶんお前のとこを一般で募集したら倍率が何百倍はいくと思うぞ？」
「ぬいぐるみもいっぱいあって、絵本やゲームもあって楽しいよ♪　昨日はオータムと対戦して引き分けたんだよ？」
「そうか、それは良かった」

俺は二人の反応を見て思わず微笑んだ。

「それに猫さんもいる♪」
「ニャ～」

黒猫さんは新しい仲間が出来てうれしいようだ。

「そういやゼオル。その猫はなんだい？　いつのまにお前に懐いてた？」
「こいつの本名はラウラ、あだ名は黒猫さん。ちょっとした旅人さ」
「わぁ～♪　旅人だなんてカッコイイな～♪　ナデナデしてあげよう」

マドカはニッコリと微笑んで黒猫さんの頭を撫でる。

「ニャウ～♪」
「ええのか？　ここがええのんか～♪」

黒猫さんはとても気持ちがよさそうだ。

「はい、サーモン。ツナ缶のほうが良かった？」

「ニャッ！」
黒猫さんは一生懸命サーモンのお刺身を食べる。
なんというか……純粋な女の子と小動物は絵になるな～。
「さぁさぁ、もっと食べれ♪」
「ニャウッ！」
「なぁ、ゼオル。私……もしかしたら今の方が楽しいかもしれない。昔は思い出せないけど」
「なら……それでいいんじゃない？」
俺はカレーのスパイスを調合しながら答える。
あ、ターメリックが足りない。
「みんな、買い物行くぞ」
「了解」
「マドカも～♪」
「ニャウ」
――私はここの留守番をしよう。楽しんでくるといい。

――とあるデパートにて。
俺はターメリックを入手。
会計を終えたところである。

「あれ？　マドカちゃんは？」
「あぁ、エムなら――」

――おもちゃコーナー。

「じ～……」

俺がマドカちゃんを発見した時、マドカちゃんはショーケースの中を凝視していた。

「あ、あの～……お客様？」
「じ～」

マドカちゃんは遊戯王カードを見つめているようだ。
そしてマドカちゃんが俺に気付く。

「あ、おじさん～♪　これ買って！」

指を指した物を見ると……。

「何々……『氷結界の龍トリシューラ』って、これ一枚で４，０００円！？　というか何で遊戯王に興味を持った？」
「ん！！」

マドカちゃんが指をさした場所にはテーブルがあり、そこで小学生くらいの子供達が遊んでいた。

「――F・G・Dを融合召喚。さぁ、お前のモンスターゾーンはガラ空きだ！　そのまま――」
「神の警告、お前マジワロスｗｗ」
「ふ、ふぁぁあぁぁあぁあん！！」

恐ろしい……、あれが今の小学生の遊び――というよりも会話か！？

マドカちゃんはその光景に目をキラキラさせている。

「楽しそう～♪」

あの子供達のどこに楽しい要素があるんだ？
俺はもう一度小学生達を見る。

「――よし、こいつが墓地に行った時――」
「マクロコスモス、お前本当にバカだなぁｗｗ」
「うぇぇぇぇん！！」

なんというか……本当にマドカちゃんはこれの何処に楽しい要素があると思ったんだ？

「んっ！」

マドカちゃんは指をさす。
その方向にはなんと……イズールと鈴ちゃんと山田先生がいた。

「――そうそう……こんな感じです。この文章は別の解釈が可能なんです」
「そ、そうなんですか？」
「イズール、あんたって遊びを教えるの上手よね」

「最初はワザと負けながら相手に楽しさとルールを教えるのが基本だろうが」

俺はなんだか邪魔しちゃいけないような気がした。

「マドカちゃん、買ってあげるから今日は帰ろう」

「えぇ～、みんなと決闘した～い！」

「……今日はカレーだ」

「やった♪　カレ～♪」

俺はカードを買い、食材の袋を持たせたオータムと合流し、デパートを後にした。

――その頃。

「あれ？　誰だろう……トリシューラ買っていったの」

「えぇ！？　あれ買ったやついたの！？」

「あの……そんなにすごいんですか？」

三人は謎の存在に驚いていた。

――屋台にて。

俺はスパイスの調合を再開していた。

後にわかったことだが、あの三人はデパートで偶然会って、そのまま遊んでいたらしい。
マドカちゃんが遊戯王に興味を持った理由は、『楽しそうに見えたから』だそうだ。
興味を持ってすぐにデッキを作る行動力に俺は驚きだが。

「ニャ～♪　黒猫さ～ん♪」
「ニャ……？」

「……ゼオル、あいつらは何やってんだ？」
「……さぁ？　あ、オータム……こうやって調合するんだよ」
「こ、こうか？」
「うん、やれば出来るじゃん」

俺は調合したスパイスでカレーを作る。
オータムはその様子をメモする。俺の新しい教え子だ。

「オータム、野菜と肉の準備お願いね」
「わかった。ゼオルはカレー粉の調整か？」
「まぁな」

調理途中の俺にマドカちゃんが話しかける。

「ねぇ、海に行ってきてもいい？」

目がキラキラしている。
どうやら夕焼けでオレンジ色に光る海を見たらいてもたってもいられないようだ。

「いいよ、興奮して泳ぐなよ？　黒猫さん、監視よろしく」

「は～い♪」
「ニャ！」
俺から許可を貰った一人と一匹は海へ向かって猛ダッシュ。
「よし、黒猫さんと競争だ！」
「ニャン！！」
そのまま海岸へとダッシュ。
マドカちゃんのワンピースが風に吹かれて揺れる。
あ、麦わら帽子が飛んでった。
「あ、待って～！」
「ニャ～ン！」
俺とオータムはその光景を見て微笑む。
「あいつら……元気だな」
「あぁ、俺達も童心に帰って遊ぶか！　花火位ならあるぞ？」
「お、いいじゃないか。日本の花火は綺麗だからな」
こうして俺の日常は過ぎていく。
さぁ、最後の戦いは近いぞ。
転生者……お前はどのようにこの物語を完結させるのか……見せてくれよ？
――続く。

第三十四話　ゼオルの日常（後書き）

ご感想お待ちしております。

第三十五話　六巻へ……ようこそ。（前書き）

夏休みが終わり、また地獄が始まる。
それにしても８巻はいつの発売だ？

第三十五話　六巻へ……ようこそ。

北アメリカ大陸北西部、第十六国防戦略拠点。通称、『地図にない基地』。
本来ならば軍関係者であっても知られることのないそこに、今は銃声が響いていた。

「侵入者確認！　６－Ｄエリアに至急救援求む！　繰り返す、侵入者確認！　６－Ｄエリアに至急救援求む！」

鳴り響くアサルトライフルの発射音。屈強な男たちの怒号。軍靴の合奏。
それらわすべてたった一人の侵入者に向けられていた。

「……パォッ！！」

鉄の通路をムーンウォークで進む女性。
そう、侵入者はたった一人の……変質者だった。
その女性は男たちの攻撃をマトリックスのワンシーンのように避け、笑顔で微笑みかける。

「ん～、展ッ開！！」

女性の体が不気味に変形していく。
そう、『装着』ではなく『変形』なのである。

グチャリ
ジャキン
ガキン

「ＩＳ！？」
「こ、こいつ、まさか報告書にあった組織の者か！？」
ＩＳ『サイレント・ゼフィルス』を身にまとった女性――チフユサンダー・ＺＥＯは、その右腕だけで巨大なバズーカを構える。
実はこのバズーカは、『設定分解砲』といい、相手の設定を瞬時に分解して設定の砂に変えてしまうというチート兵器である。ちなみに、弾丸の材料には捨てられたテンプレの神様の設定が使われている。あまりにも弾の材料が高級なため、この兵器は使い捨て。
「も、目的はなんだ！？　米軍にこれだけのことをしておいて、ただで済むとおもうなよ！」
ＺＥＯはその言葉を発した米兵を向く。
バイザーの下から覗くその笑顔は、とても不気味である。
「そうだねぇ……この基地に封印されているイカしたＩＳ『銀の副音』をいただく」
「な、なに！？」
ＺＥＯはバズーカを発射、前方の人間は無数の文字へと姿を変えた。
「すんばらしぃ……でも一発のみか……。しかたない、ＢＴ兵器でいきますか」
ＺＥＯは無数の文字を吸い取る。
「足りない……俺の設定はこんなのじゃあ補えない。ならば……」

ＺＥＯの右手が光りだした。
「あの時血液から奪取したオータムとエムの設定……使わせてもらうぞ」

「ぐあっ！」
「ぎゃあっ！」
「くそっ！　本部――」

バクンッ！！

ＺＥＯの背中から口が生え、肉体ごと設定を食らう。

「足りない……完全体の復活には程遠い」
「あ、あぁ……」

ＺＥＯは一人の兵士を見つめた。

「んん～？　なんだ、腰が抜けたのか？」
「ば、化け物……！！」
「酷いな～♪　こんなかわいい女性の……どこが化け物だ、あぁん！！」

ＺＥＯは女性兵士の首を掴みあげる。

「あぐぅ！！」

「俺だって好きでこんな体やってんじゃねぇんだよ！！　俺の元の体はもっとハンサムなイケメンなんだよ、それが何か？　『化け物』！？　お前いい加減にしろよ！　今すぐお前にフェイゾン埋め込んでやろうか？」
「た、たすけ――」
すると、ＺＥＯの肩に光の矢のような物が刺さった。
「なに！？」
引き抜こうとした瞬間、壮大に爆発した。
ＺＥＯの右肩ははじけ飛び、腹の皮膚が焼け落ちる。
――サイレント・ゼフィルス大破。
「ガァ、だ、誰だ！？」
「ナターシャ・ファイルス。国籍は米国ＩＳテストパイロット――ッ！？　ブリュンヒルデ！？　なぜあなたが！！」
驚くのも無理はない。ＺＥＯは千冬に似ているのだから。
「痛いなこんちくしょう……あ～あ、ゼフィルスが一瞬で廃品回収の対象になっちゃったよ……。今度の廃品回収はいつだったか覚えてないのに。これじゃあ町内会の会長に怒られちゃうよ、どうしてくれんの？」
「そうか、最近現れたブリュンヒルデの偽者か」
「偽者？　いや、違うな。俺はこの世界の頂点に立つ者、チフユサンダー・ＺＥＯ様だ。そこんとこ、よろしく」
ＺＥＯは左手のみでポーズを決める。

「なんで右手無しで平気なの？」
「俺は兵器だから平気なのさ」

一瞬の沈黙。

「とりあえず、ゴスペルちゃんを貰う為……そこをどけ！」
「あの子は渡さない……！」

ナターシャはエネルギー・ショットを撃つ。

「生身で撃つなんて随分余裕だな。そっちが生身でエネルギー・ショットなら――」

ＺＥＯの左手が変形する。

「俺は生身でレールガンだ！！」
「何！？」

キュォォォォン……。
ブゥゥゥゥン……。

「あれ？　エネルギーが足りなかったりする？」

その間にエネルギーショットが命中し、頭蓋が砕ける。

『ア～、セッカクジンコウセイタイガカンセイシテキレイナコエガデテイタノニ』
「ッ！？」

ＺＥＯの頭が半分になり、中の機械が露出する。
『マァ、ソセイハカノウナンダケドネ』
ＺＥＯは近くに転がっていたサイレント・ゼフィルスの残骸へ近づく。
すると残骸が無数の文字となって吸収され、ＺＥＯの体が元に戻る。
そしてナターシャの元へ走り、強力な回し蹴りを浴びせる。
ドン！
「グッ！……」
「なんだ？　人の頭砕いといて、まさか何も無いなんて思ってないよな？　このまま太鼓の達人の鬼モードやっちゃおうかな？　この釘バットで」
「ふ、ふふ……」
ナターシャの目は、その瞳に宿る闘志は、一切衰えてはいなかった。
「ふふっ……」
「お約束だから言うけど、何が可笑しい」
「私の役目はここで終わり、けれど、目的は果たしたわ」
「あぁ、イーリスの事？　忘れてたな」
「ッ！？　イーリの事知ってるの！？」
「あたりまえよ、下調べはバッチリで――」
「ナタルは返してもらうぜ、『亡国機業』！――」

「攻撃パターンも知ってるんだから♪」
「イーリ、逃げて！！」
ＺＥＯの背中からニードルガンが発射される。
「あぶねッ！！」
しかし、イーリスはそれを避け、ナターシャを回収する。
「ほう、今のを避けちゃったか～。アメリカの第三世代型『ファング・クエイク』……いいデザインだな」
「おう。そして国家代表イーリス・コーリングだ。……ナタルをやってくれた仮は返すぜ？」
そう言いながら、格闘戦に邪魔なナターシャをぽいっと床にほおり投げる。
「……イーリ」
「なんだ？」
「私けが人なんだけど」
「知ってる。……待ってろって、今から倍返しであれをボコるからよ」
「私が言いたいのはそういうことじゃないんだけどね……」
はぁっとため息をつくナターシャを、イーリスは不思議そうに眺める。
「女同士でピロートークしてないで早くしてくれ～」
ＺＥＯはどこから取り出したかわからないテーブルで紅茶を飲ん

でいた。

「おいおい、お前映画とか見たことないのかよ。ヒーローが口上を述べているときは出番待ちでぽつんと立っているもんだろうが」

「じゃあ、早くやって。俺は待ってる」

「……あ、うん……私――」

「もう、遅いな～、俺が口上やるからいいよ」

すると、どこからかＢＧＭが鳴り響く。

デデン♪

マイクをリボルバーのように回し、口元に添える。

『生まれは日本で育ちは空想世界、欠片として漂流しながら早数年。現在、『インフィニット・ストラトス』の二次創作サーバーに寄生しております、空想世界侵略兵器チフユサンダー・ＺＥＯでありんす。以後、お見知りおきを』

ヒューッ！！

パチパチパチ！！

ドンドンドン！！

パフパフパフ！！

「……言っておくが私はつえーぞ。殴り殺される覚悟はＯＫか？ロボットのようだが、生身じゃあ私には勝てねーな」

するとＺＥＯは懐中時計を取り出した。

「今どういう時間だと思う？　お前の鼻を摘まんで、お前の顔を

青ざめさせてやるぞ？」
「上等！！」
イーリスがＺＥＯに殴りかかるが、ＺＥＯはそれを避けてイーリスの鼻を摘まむ。
「馬鹿にしやがって、この野郎！！」
ズガンッ！！
イーリスの拳は命中し、壁にめり込む。
砂煙で視界が遮られる。
「……ッ！？」
煙が晴れるとそこには血だらけでぐったりしたナターシャがいた
「ナタル！！」
「……」
「おい、しっかりしろ！！」
その様子を見つめるＺＥＯ
「ほら、顔が青くなった」
「てめぇぇぇ！！」
ＺＥＯに殴りかかるイーリス。
「あ、もうこの基地に用はないや、そろそろ帰るか」

ＺＥＯの背中に黒い翼が生え、イーリスを弾き飛ばす。

「な、なんだ！？」

ＺＥＯの形がどんどん鳥人間のような姿へと変わる。
足先と手先が黒くなり、腕は倍の長さになる。
まるで金属の鞭のような尻尾が生え、黒い霧を放つ。

「ばいば～い♪」
「待ちやがれ！！」

イーリスはＺＥＯの足に取りつく。

「……邪魔」

ズガン！！
パリィィィィン。

イーリスのＩＳはＺＥＯの攻撃によってガラスのように粉々に砕ける。

「私のＩＳが！！」
「やっぱり、設定がキチントしてない物体の強度はたかが知れてるな」

ＺＥＯはそう言うとナターシャの元へと歩く。

ズシン……。
ズシン……。

するとイーリスはナターシャを庇うように立つ。
「させるかよ！！」
「ＩＳ無いお前が俺に勝てる訳ないだろ？　ナターシャの設定を食うぞ？」
「実際に戦わなきゃわからねえだろ！！」

ピピピ♪

「あん？　今いいとこなのに」
『ＺＥＯ様、そろそろ帰還してください。ゴスペルは奪取しました。あと、その体は作画が違うので干渉が始まっています。このままでは設定が空中分解します』
「まじかよ……、やっぱり取り込んだ設定が安定してなかったか。了解、全員に撤退命令」
『了解』

ＺＥＯは羽を大きく広げ、そのまま隔壁や天井を破って去って行った。

「ああっ、ちくしょう！」

イーリスは拳を叩く。
そこには無残な基地の残骸と重症のナターシャ、ＩＳを失ったイーリスが取り残された。

――ＩＳ学園にて。

「え！？　一夏の誕生日って今月なの！？」
「お、おう」

？での夕食、いつもの面々で食事を摂りながらの談笑を交えていると、突然シャルロットがバインドボイスをあげた。しまった、スキルに『耳栓』が無い。

「い、いつ！？」
「九月の二七日だよ。ちょ、ちょっと落ち着けって」
「う、うん」

そう言って椅子にかけ直すシャルロット。

「に、日曜だよね」

身を乗り出すシャルロット。
はぁ、なんで一夏はこんなにモテるんだ？　まったく……みんなの目の前でＡＶ見せるぞ？

「に、日曜だな」
「そっか……。うん、そうだよね。うん！」

シャルロットの隣でビーフシチューを食べていたセシリアも反応する。

「一夏さん、そういう大事なことはもっと早く教えてくださらないと困りますわ」
「え？　お、おう。すまん」
「セシリア、一夏はさほど大事な話だと思ってないから教えない

んだよ。まったく、だからヒトナツなのだ」
「お前はどうしてそういうことを黙っているのだ」
今度はラウラが話しかけてきた。
あの……俺の話聞いてました？
「ふん。しかし、知っていて黙っていたやつもいることだしな」
「う！」
「だって、その方が面白いじゃん？」
鈴……なんだか性格おかしくなってないか？
「とにかく！　九月二七日！　一夏さん、予定は空けといてくださいな！」
「あ、ああ。一応、中学のときの友達が祝ってくれるから俺の家に集まる予定なんだが、みんなも来るか？」
「も、もちろん！　何時から！？」
「えーっと、四時くらいかな。ほら、当日ってあれがあるだろ？」
一夏の言う『あれ』とは、『キャノンボール・ファスト』。本来なら国際大会の……レースゲームだっけ？
「ん？　そういえば明日からキャノンボール・ファストのための高機動調整を始めるんだよな？　あれって具体的に何をするんだ？」
「あぁ、俺も知らないから教えてくれ」
「ふむ。基本的には高機動パッケージのインストールだが、白式とＧＡ－ＰＥＤには無いだろう」
ラウラはプチトマトを頬張りながら告げる。

「その場合は駆動エネルギーの分配調整とか、各スラスターの出力調整とかかなぁ」

白身魚のフライをかじったシャルロットが、言葉を告げた。

「あぁ……ブルー・ティアーズに付いてある『ストライク・ガンナー』みたいなものか。あ、ならば俺もフェイゾンエネルギーを使った超強力な推進装置を――」

「「「「「「「それはやめてください」」」」」」」

「……ブリオジェルで我慢します」

ちなみにブリオジェルは、惑星ブリオから採れる燃料の事である。主に惑星ワープできるスターシップの燃料などに使われる。

「それだとセシリアが有利だよなぁ。今度超音速機動について教えてくれよ」

「えぇ、わかりましたわ」

エムが天使マドカになったことにより、セシリアが悩むことは何も無い。

ここで俺はあることを思い出す。

「みんな、忘れているかもしれないけど……この大会で有利な人物が数人いる」

「え、それって誰だよ」

一夏が尋ねる。

そして俺は答えた。

「まずは布仏本音……のほほんさんが操るカスタムイナゴ兵」

「あ、すっかり忘れてた！！　たしかあれって、カスタム自由なんだっけ？」
「そう、ガルクライフ社製の変態機動ブースターが出てくると思う」
「他には」
「更識簪さん操るＧＡ－ＩＳ－ＡＣ。まだ能力は未知数、スピードは速いはず」
「……他は？」
「……マドカちゃん」
「……誰？」
「「マドカ……」」

ラウラとセシリアは俺の言葉に反応した。

「誰だ、マドカというのは」
「確かゼオルさんから一回だけ聞いたわね」
「誰？　マドカって」
「誰の事だ？」

上から箒、鈴、シャルロット、一夏の順である。

「本名、織斑マドカ。千冬さんにそっくりな女の子で、一夏の隠れた家族かクローンの疑いのある娘だよ。まぁ、本人は記憶失って頭がお花畑だけどね」
「「「織斑だって！？」」」

その叫び声によって周囲が反応する。

「嘘！？　千冬様に妹！！」
「これはスクープよ！！」

「クローンの疑いだって」
「姉妹丼……はぁはぁ」
いい加減どうにかならないのかここの連中は。
しかもこの叫び声がいけなかった。
ドドドドドドドドド！！
「呼んだぁぁぁぁぁぁ？」
物凄い勢いでマドカちゃんが走ってきた。
というかログインしました。
しかし、窓の外。
「いや、今回は呼んでない」
「んじゃあ帰るね――じ～」
マドカちゃんはセシリアのビーフシチューを見つめる。
「な、なんですの？」
「……今日の晩御飯はこれだ！！　おじさ～ん、今日はビーフシチューが良い――」
マドカちゃんはそのまま走り去って行った。
「な、なんでしたの？」
「「……さぁ？」」
そんな会話をする一方で。

「あれは……俺の妹？　それとも姉なのか？」
「ここまで千冬さんそっくりだったとは……」
「あたしもビックリ」
「僕もビックリ……まさかあの子もライバル！？」
そんな会話をするのであった。
ちなみに、マドカちゃんの恋愛に関する思考は一夏並である。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏ｓｉｄｅ――
窓の外にいたあの女の子……たしかに千冬姉にそっくりだった。
もし親の隠し子だったら……姉か？　妹か？
ガチャ……。
「おかえりなさーい。あ、お邪魔してるわよ」
「楯無さん……」
がくっとうなだれる俺。
なんだか説明するのも面倒だな。
とりあえず楯無さんはベッドの上でファッション雑誌を読んでいた。
イズールは学園祭の時の影響でこの部屋にはもういない。

今は鈴&ティナの部屋で暮らしている。
ちなみにこの部屋……イズールの遺産が数多く眠っている。

「……」
「どうしたの？　あ、もしかしてパンツ覗こうとしてる？」
「あ、あのですね！　スカートで足ぱたぱたしないでくださいよ！　イヤでも見えちゃうじゃないですか！」
「ふーん。見たんだ？」
「う！」
「問題です。楯無おねーさんの下着の色は？」
「……ピンク色でした」
「あは。えっちぃ」

まったく、この人は！
何が何でも俺をからかいたいらしい。部屋に来るたび、こんな調子である。

「さて、今日はちょっとお話があってきたのよ」
「なんですか……」
「そんなに警戒しないの。ちょっと……いや、大真面目な話。例の組織についてね」

例の組織……亡国機業のことだろう。

「……壊滅したわ」
「……は？」
「だから、壊滅したの。先日、体のいたるところが文字の集合体のような姿をした幹部を保護したとの話よ」
「文字の……集合体？」
「そう、恐らくガルクライフ社か何かが関わっていると思うの。

そうでなきゃこの現象は誰にも理解できないわ。あと、その幹部は錯乱していたそうよ。『エム、オータム、どこいったの？』って繰り返し言っていたそうよ」

「で、その幹部はどうなったんですか？」

「死んだわ。というよりも消えたという方が正しいわね。その場所にはビー玉のような物体が残っているだけだったと聞くわ」

ビー玉？

一体何があったんだ？

それから楯無さんと俺の脳裏には、俺達の知らない不気味な存在がいるという恐怖でいっぱいになった。

一夏ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――次の日。

――ゼオルの屋台にて。

――イズールｓｉｄｅ

……暇だ。

今日は鈴と遊ぼうと思ったのに、代表候補生管理官が来て中止。

今日……なにしよっかな～。

「――よし、オータム。その箱をそこに」

「オッケー」

「マドカちゃんはそこに白線よろしく」

「わかったよ～」

なんだ？　なんでゼオルさんの屋台に人体錬成の錬成陣が？

「お、イズールか。ちょっとそこに白線しくからどいて」

「ゼオルさん、いったいこれは何？」

「お前は覚えてないか？　プロローグの黒い空間を作っているんだよ」

「はあ！？　なんで今それを？」

そんな俺の近くに黒猫が現れた。

「ニャ～ウ」

「黒猫？」

「その子の名前はラウラ。あだ名は黒猫さん。銀時計事件で生まれたラウラの変異体だ」

「えぇぇぇぇぇ！！」

驚いた。まさかこの黒猫がラウラだなんて。あ、目の色は同じだ。

「よし、準備は完了。黒猫さん、錬成陣の真ん中に立って」

「ニャッ！」

黒猫は錬成陣の真ん中に立つ。

「では、儀式を始める」

パチンッ！

ゼオルさんが指を鳴らすと、周囲が黒い空間になる。
なつかしいな、俺が初めてゼオルさんとあった場所だ。

「パンドラの箱、解放！！」

バカンッ！！
バカンッ！！
バカンッ！！

３つの箱が開き、無数の文字が宙を舞う。
すると黒猫が無数の文字の集合体へと姿を変え、空中の文字と混ざり合う。

「ニャ……ァ……ァ……あぁあぁあぁあぁあぁ！！」

文字の集合体が人の形を作っていく。

「最後に原画、セル画、イラストを放り込む」

無数の紙が投入され、文字の集合体に色が付く。

バシュゥゥゥゥゥ！！

眩い光を放ち、黒猫は転生する。

「五年……五年ぶりの……体だ」

そこには……。
黒髪。
猫耳。

猫の尻尾。
いつものオッドアイ。
身長が高い。
スレンダーなラウラが……って誰だお前！！

「私の体……人間の体……ニャン」
「おい、ゼオルさん！！　絶対におかしいよな！？　これが正常だなんて言わないよな！？」
「あれ～？　グラフィックに問題あったかな？　言語はただの癖だけど」

黒いワンピース姿の……ラウラだよな？　は、とにかく……人間に戻ったらしい。

設定変異体
【黒猫ラウラ】
設定バグの影響で誕生したラウラ・ボーデヴィッヒの設定変異体。
設定の砂を補給したことにより、人間形態へ変身できるようになった。
簡単に言えば、『ラウラ亜種』。

「これで……みんなと話が――」

プシュゥゥゥゥゥゥ……。

まるで風船の空気が抜けるように黒猫ラウラは猫の姿へと戻った。

「「「……」」」
「黒猫さ～ん、あっそぼ～♪」
沈黙する俺、ゼオルさん、オータム。
特に気にしないマドカちゃん。
「設定が安定してなかったか……」
「ゼオルさん……それじゃあダメでしょ」
「意外とお前も詰めが甘いんだな」
「ほら、ツナ缶だぞ？」
「ニャ～」
黒猫ラウラは何事も無かったかのようにツナ缶を食べる。
５年も年取れば……あれくらいの背にはなるか。
「あ、そういえばイズール、オータム。お前達に買い物を頼みたい」
相変わらず話がいきなり飛ぶな。
「マドカちゃんとオータムの服がいつまでもウォルツのおさがりじゃあ可愛そうだから買い物へ行ってくれ。お金はこっちで５０万用意する」
「いままでウォルツさんの服だったん――５０万！？　一回の買い物の額にしちゃあ大きくないか？」
「いいんだよ。欲しい物があって、手元にお金無くて嫌な思いはさせたくないからな。ちなみに、ウォルツが同行する」

ブロロロロロロロロ……。

なんだか向こうから黒くてイカした車が走ってきたぞ？

キィィィィィ！！

……ガクンッ！！

「おまたせ、さぁ乗って」

ちょっと待て？　ここって学園敷地内……つまりここは島で……本土まで橋とかあったっけ？

「水陸両用だから平気だよ。さぁ、三人とも乗って」

「「「おっじゃまー」」」

「んじゃあ、お兄ちゃん、行ってきます♪」

「おう、けが人だすなよ？」

へ？

「運転はγちゃんにまかせますね――よし、まかせとけα！！」

ガコン・ガガコンッ！！

え、この車ってマニュアル式なの！？

「レッツ・パァァァァァリィィィィィ！！」

ギャルルルルル！！

「「いやぁぁぁぁぁぁ！！」」

「ゴーゴー♪」
なんでマドカちゃんは平気なの！？
さぁ、ロックンロールの始まりだ。

――イズールside　end

――その頃。
――亜空間にて。

「あむ……」
『ＺＥＯ様、一体何を食べてますか？』

玉座で何かを食べているＺＥＯに向かってメカヤマダが問いかける。
近くには無残な人間の死体らしきものが転がっている。

「いやぁ、見てよこれ！　この可愛そうなテンプレの神様のなれの果てを！　転生者送り出したら凍結処分されちゃって……それがまた美味しいんだよね♪」
『ウェ……カニバリズムですか？』

死体の正体は捨てられたテンプレの神様だった。
ＺＥＯはそれをまるで鳥の軟骨を食べるかのように噛みつく。

「あと、そこに転がっているのが女神の頭、神様のおっさんの腕、

天使、死神などなど、もう……取り込める物が多くて俺ウハウハだよ」

そこには転生者を送り出し、終末を迎えた神軍団のなれの果てがあった。

『私……機械ですけど……これは吐きそうです……』

そんなメカヤマダの様子を無視して食事を続けるＺＥＯ。

「さぁて……これだけ食えば基礎骨格は十分だろう。次に設定の砂だな……。あれはこの前の基地で米兵から大量に補給したからいいとして……、後は大量の主設定だな。各員を集結させろ。他のＩＳ二次創作から設定を奪いに行くぞ！！」

『それは無理です』

「え、なんで？」

『今日はみんなお出かけです』

「理由は？」

『おめかし……だそうです』

「……あいつら～！！」

ＺＥＯは頭を抱えた。

――イズールｓｉｄｅ

――駅付近。

「いやぁ、今日も天気が良いよ」

「「もう……勘弁してください」」
「～♪」

ウォルツさんの危険運転でなんとか目的地に到着した俺達。
マドカちゃんはなんで平気なの？
そして俺達は目的地を見る。

「ここの……ショッピングモールか」

レベル27
【ショッピングモール】

「……なんでダンジョンみたいに名前紹介されてんだ？」
「とにかく行きましょう」

俺達4人はショッピングモールへと足を踏み入れた。

――続く。

第三十五話　六巻へ……ようこそ。（後書き）

最終回迎えたら感想でお題を受け取って話を作ってみたいです。
感想お待ちしております。

第三十六話　俺と買い物と9人の刺客（チフユサンダー）（前書き）

ラスボスの構想完成。
……どうしよう。

第三十六話　俺と買い物と9人の刺客（チフユサンダー）

マドカちゃんとスプレンディットなオータムのね～ちゃ→んの服選びをウォルツさんにまかせて俺は歩いていた。

「シャッシャッシャウッタ～♪　シャッシャッシャウッタ～♪」

お、懐かしいな……これはミクロマンじゃないか！

なんでこんな年代物がここにあるんだ？

現実世界との……差？

「さて……輪ゴムと割り箸とハサミとテープ……後は色紙。わくわくさんが食いつきそうな買い物リストだな」

俺は買い物をしながら今までの事を思い出す。

色々あったこの世界。

変身し、フェイゾンで暴れ、鈴と付き合い、ジャイアントストラトスと戦い、世界がバグって、五年が経ち、元に戻り、仲間も増えて……。

あぁ、なんだか涙が出てきそうだよ。

そういや俺のＧＡ－ＰＥＤ……出番少なくないか？　それどころか最近変身してないし。もしかして最近合流した連中に出番持ってかれた！？

フェイゾンコアはＺＥＯが取り込んだとして……フェイゾンは大丈夫か？　あの時のリセットで何かズレたか？

「……まぁ、いいか」

俺は会計を済ませて、とりあえず歩く。

――下着売り場近く。

「……」

なんでこういうショッピングモールやデパートの女性用下着売り場ってこんなにオープンなんだろう。例えるなら秘密基地が秘密じゃないくらいのオープンだ。そう、まるでデストロンの基地のように……。

幼いころはおもちゃのコーナーへの近道としてこういうコーナーを通ったが、思春期になると恥ずかしくて目も当てられない。

「ん？　あれは～……蘭だな」

第一知り合い買い物人発見！

俺はまだダーツを投げていなければ、何かのくじを所さんに引いてもらった訳でもないのに。

「……変身するか」

俺は近くの試着室を借り……。

「イズール、変身」

バシュゥゥゥゥゥン！！

「――あ、あ～！　声も大丈夫だな。よし、行きますか」

五反田蘭に変身した。

俺は下着を選んでいる蘭に近づき、声をかける。

「へい、そこの彼女！　私と一緒にエクストリームかくれんぼしない？」

「へ？　――ッ！？」

蘭はビックリして後ろへ倒れてしまった。

顔を青くして怯えている。

ガクガクガク！！

ちょっとやりすぎた？

「あ、ごめんね！　えっと……立てる？」

俺は手を差し伸べる。

「あ……ひ、ひゃい！」

蘭は恐る恐る俺の手を掴んで立ち上がる。

「あなた……も、もしかして……『ＩＳ学園のドッペルゲンガー』ですか？」

「うん、正解♪」

俺の存在は夏休み前にテレビで検証されたことがあったので、知名度はそれなりに高い。

「さ、サインください！！」

「サイン？　俺――いや、私ってサイン書くようなスターだったかな？」

俺はとりあえずメモ帳を取り出し、メモに本名の『バルゼッタ』と書いて渡した。

「バルゼッタ？　それがあなたの名前ですか？」

「まぁね。あ、早く会計を済ませた方が良いよ？　一夏達がここに来るはずだから」

「ほ、本当ですか！？」

すると、一夏とシャルロットが現れた。

「お～い、蘭～！」

俺は素早く一夏の目にオレンジジュースの雫を飛ばした。

ピュンッ！！

ピチャ……。

「ぐおぉぉぉ

蘭は素早く会計を済ませた。
そして一夏が復帰。

「お、お前は……ドッペルゲンガー！！　なんでここに！？」
「僕……なんだかものすごい久しぶりに見た気がする」

恐らく銀時計事件の五年間が違和感として残っているのだろう。
とりあえず挨拶。

「やぁ、久しぶり。元気にしてた？」
「おぅ、元気だ」
「夏休み前だよね……あれ？　夏休み中に会った？」

シャルロットは記憶混同中。

「そいいや、蘭とドッペルは今暇か？」
「私は暇ですけど」
「俺は……まぁ、暇と言えば暇だな」
「よし、じゃあ一緒に店内を見て回ろうぜ！」

その言葉を聞いてため息をするシャルロット。
まったく……だからお前はヒトナツなのだ。
一夏は俺が色々考えている間に『キャノンボール・ファスト』のチケット渡しと、シャルロットの紹介を終えた。

「はぁ……」

蘭がシャルロットを見てなんだかテンションが下がっているようだ。

「大丈夫だよ蘭ちゃん。蘭ちゃんにもチャンスがあるって！」
「ほ、本当ですか！？」
「あぁ、保証する！」

この前一夏とエロ談義した時の総合評価で出た結果だ、間違いない。

「それに蘭ちゃんも魅力たっぷり……」

俺は自分のシャツから自分の体を覗く。

「……じゃないか！！」
「ちょ！　まさか！？」

蘭は俺の体を覗きこむ。

「あ、あああ……／／／」

蘭の顔が某専用機のように赤くなっていく。

「……どうした？」
「わ、私の裸……／／／」
「あぁ……これの事？　うん、基本化けると、その人の裸も再現されるからね。鈴はなんであの時――」
「！？　鈴さんを知ってるんですか！？」
「うん、なんせ鈴は――あっ」
「……なんだか鈴さんと深い関係にありそうな感じですね……もしかしてあなたは……」

まずい……。
俺は蘭の気を逸らす為にちょっとしたキーワードを呟く。
「俺……意外と蘭の事好きかも。（一夏ヴォイスで）」
「ッッッ！！！」
ボンッ！！
蘭はまるで爆発するようなリアクションをした。
お前は将来、熱湯風呂にでも入るのかな？
とりあえず、正体がバレることは回避した。
「ド、ドッペル！！　い、一夏の声で何やってるの！！」
「そう怒るなよシャルロット。ちょっとしたイタズラじゃないか」
「い、イタズラって言っても……その……あの……その声は反則だよ／／／」
ニヤリ、と俺は新たなイタズラを思いついた。
俺はシャルロットの耳へと口を近づけ……。
「シャル……帰り、どこかホテルで泊まらないか？　久しぶりにシャルと同じ部屋で寝たいんだ。（セクシーな一夏声）」
一瞬の沈黙。
「ひ、ひゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……／／／」
ばたんきゅ～。
何という事でしょう、イケメンな一夏ボイスによってシャルロッ

トが倒れてしまいました。これぞチート転生者である匠の技の結晶と言えるでしょう。

「お、おいドッペル。二人に何喋った？」

「気にしないで。無駄な考えは脳を老化させるのよ」

こうして俺達は合流したのである。

――その頃。

――ＩＳ学園にて。

ＩＳ学園の第三アリーナ。

いつも決戦やらトラブルが起きることで有名となってしまったここでは生徒が練習に明け暮れていた。

「はぁ……、はぁ……」

その一角で息が上がっているのはセシリアだった。

何度もビット運動の拘束ロール射撃を行っては、そのレーザーに曲がれと念じる。

しかし、ただの一度もＢＴ偏向射撃は成功しておらず、その額には刻一刻と疲労の色が濃くなっていく。

「……なんでわたくしはこんな練習をしていますの？」

セシリアは悩んだ。

『シナリオに従う』これが原作キャラのちょっとした運命である。

「もう、今日はここまでにしましょう……ブルー・ティアーズ、待機モード」

ＩＳ解除のＰＩＣによってゆっくりと着地するセシリアの視線に意外な人物が入った。

「あれ？　セシリアじゃん。シナリオ変わって、悩む事ないのになんで練習してんの？」

「……わかりませんわ。でも……やらなきゃいけない使命感のようなものが」

「……あんたも大変ね。あたしは新型装備展開練習したかったんだけど……満員はどうすることもできなかったわ」

「新型というと、やはり高機動パッケージですの？」

「ふふん、そうよ。見てなさい、セシリア。当日は互角に戦うわよ」

「ええ。望むところですわ」

ライバル……ではなく、この世界では親友である鈴の指さしを受け、セシリアは闘争心を燃やす。

しかしセシリアは知らない。鈴の体内にある秘められた能力が覚醒しつつあることに。

それはまるで、最近の特撮にある、『新たなパワー』のような物である。

「じゃ、またね」

「ええ。また」

鈴はひらひらと手を振って、セシリアが笑顔で見送ろうとしたら……鈴の姿にイズールの姿がダブった。

「……？」

セシリアは目を擦った。
もう一度見ると、そこに鈴はいなかった。

「……気のせいでしょうか」

そんなセシリアの元へトコトコと歩いてくる生き物がいた。

「ナ～ウ」
「！？　……黒猫？」

なぜか第三アリーナに黒猫さんが侵入していた。
セシリアは黒猫さんの前でしゃがみ、話しかけた。

「あらあら、ここにいると危ないですわよ？」
「……ニャ～♪」

黒猫さんはセシリアの足に頬を摺り寄せる。

「くすぐったいですわ♪」
「ニャ～！」

すると黒猫さんはどこかへ案内するようにトコトコと歩き出す。

「ニャンッ」
「……ついてこいということですの？　着替えてからでもよろしいでしょうか？」
「ニャ～」

「言葉を理解できるんですの！？」

――数分後。

セシリアが更衣室での着替えを終え、廊下に出ると黒猫さんが足を舐めながら待っていた。周囲には何人かの学園生徒が集まっていた。

「……（ペロペロ）」

「かわいい～！」
「君はどこからきたの？」
「この子メスみたいよ？」
「あたしこの子だっこする～！」
「随分おとなしいわね。誰かの飼い猫かしら？」

黒猫さんがセシリアを発見。
複数の学園生徒をすり避けてセシリアの足元へと近寄る。
それに気付いた学園生徒がセシリアに話しかける。

「この猫さんはセシリアさんの猫？　校舎内はさすがに不味いんじゃないかな？」
「いえ……この猫さんはわたくしの飼い猫では無くて……さっき第三アリーナでわたくしが保護したのですわ。しかもこの猫さんは人の言葉を理解しているみたいですの」
「え、じゃあ……この猫も『ピカチュウ伝説』のような特殊なタイプ！？　じゃあ……猫さん、私の言ってることわかる？」

「……ニャ〜ン」
「「「おぉ……」」」
周囲の女子が反応した。
「……ニャ〜、ニャ！」
――行くぞ、セシリア。こちらも急いでいるのでな。
「……え？　今の……ラウラさんの声……？」
黒猫さんはどこかへ歩き出す。
「あ、待ってください！」
「新聞部！　私に付いて来い！！」
「「「ラジャー」」」
暇な女子生徒たちもそれを追いかける。

――ゼオルの屋台にて。
黒猫さんはゼオルさんの近くにあるタオルケットの敷かれたカゴに収まる。
ゼオルは七輪でサンマを焼いていた。

「やぁ、セシリア……なんだか余計なお客さんもいっぱいみたいだね」
「おじ様！？　もしかしてその猫さんもゼオルさんのですの？」
「あぁ、あだ名は黒猫さんで本名は……ラウラ」
「ラウラ……ですか？」

何だか核心に迫るような会話をしているとき、他の生徒たちは屋台を眺める。

「こんなところに屋台があったんだ～」
「おぉ……もしかして穴場かも？」
「サンマ……ジュルリ……」

ゼオルとセシリアの間にあった妙な空気はこの生徒たちによってかき消され、二人は苦笑いをする。

「そういや、今日は生サンマが大量入荷したからみんなで焼いて食べよっか。セシリアちゃん、ご飯炊いてくれない？　俺はサンマ焼かなきゃいけないから」
「は、はい。おまかせくださいですわ！」

こうして、留守番組は留守番組で楽しんでいたのである。
……この後、こっそり箒が匂いにつられてやってきたのは秘密だ。

――場所は戻ってショッピングモール。

そろそろ昼時。

さっきまで時計を選んでいたのだが、銀時計がちょっとしたトラウマであんまり選ぶ気分じゃなかったと言っておこう。

「シャル、昼飯どこにする？」
「う～ん、どうしよっか」
「蘭は？　食べたいものあるか？　奢るぞ」
「い、いえ！　自分の分はだせますから！」
「まあ、そう言うなって。あ、向こうのオープンカフェでも行ってみるか？」
「あ、あそこ、結構高いですよ？」
「だから奢るってば。あ、それとも入ったことあるか？」
「ド、ドリンクだけ……」
「よし、じゃあ決まりだな。あそこのランチにしよう」
「は、はい。ありがとうございます」

……。

「なぁ、シャルロット」
「どうしたのドッペルさん」
「俺……お前らにイタズラはしたことあるけど……嫌われるようなことしたか？　なんで一夏が俺に話振ってくれないの！？　こちとら所持金に２０万あるのに！！」
「２０万！？」

他のお金は三人へ預けました。

「……一夏、それじゃあ行こうか」
「おう」

いざ、入店。

……なんだか店の雰囲気というか、空気が変だぞ？

「い、いらっしゃいませ」

「あ、本日のランチってなんですか？」

「はい。本日は蟹クリームスパゲッティとなっております。デザートは梨のタルトです」

「じゃあ、それを四人前ください」

「すみませんお客様。只今在庫が少なく、三人前までしかお出しできません」

「え、在庫切れ？」

一夏が疑問に思い店員に聞いた。

すると店員は無言でその原因に視線を移す。

俺達は店員さんの視線の先を見た。

０１『今日は休暇だ。好きな物を食べるといい』

０２『まったく……まぁ、たまにはいいか』

０３『……結局新刊発売されてなかったな～』

０４『ムニャムニャ……』

０５『あぁ……０４がまた眠っちゃってる』

０６『いいんじゃないか？　あいつはいつも自由だし』

０７『パスタ美味し！！』

０８『スシ・テンプーラ・ファンタスティックね～！！』

０９『おこさまらんちはまだですか～？』

同じ顔をした集団が一部を占拠していた。

俺は思わず手荷物を落してしまった。

「ドッペル……あれはもしかして……」

「僕も思いたくないけど……」

「……あれは千冬さん……？」
「三人とも……あれは間違いなくチフユサンダーだ」

下級空想世界侵略兵器
【チフユサンダー】×９

下級空想世界侵略兵器
【チフユサンダー】
思わず『千冬さんだー！！』と叫んでしまうような……千冬さん型兵器。
グレートチフユサンダーほど重度ではないがブラコン。
こいつらの上司はジャイアントストラトスであるので、ＺＥＯの命令は気に食わない。
同僚のメカヤマダとゴ・ダンダーとは仲良し。
個々で性格が違うが、特に０４と０８と０９のキャラは濃い。
０４はとにかく寝る。
０８はエセ外人みたいな口調。
０９は平仮名だけの子供のような喋り方をする。
グレートチフユサンダーとは従妹（いとこ）の関係。

さぁ……どうしよっか。

――続く。

第三十六話　俺と買い物と9人の刺客（チフユサンダー）（後書き）

ご感想お待ちしております。
アイディア募集中。
本編で補完しきれなかった裏場面やフラグを感想で受け付けます。

第三十七話　チフユサンダー１０はご臨終です。（前書き）

スランプ状態で書いたせいか、色々急展開します。

第三十七話　チフユサンダー１０はご臨終です。

前回までのあらすじ。
チフユサンダー０１～０９まで現れた。
以上。

０６『あ、一夏だ』
やべ、気付かれた。
その他『何だって！？』
０４『Ｚｚｚ……』
「全員離れろ！　ここは俺がなんとかする」
「「「わかった」」」
全員回答早ッ！！
チフユサンダー達は隊列を揃える。
０５『０４、起きなさい。一夏も来てるよ』
０４『一夏が……？　起きる……』
ビシッ！
シュバッ！

９体のチフユサンダー達が謎のポーズを決める。

０１『みんなのリーダー、０１！！』
０２『喧嘩上等、０２！！』
０３『コミケ……サークル参加出来なかった。０３！！』
０４『ふぁ～……ボクは０４』
０５『０４の保護役、０５です』
０６『正義のヒーロー、０６！！』
０７『ロボットだって食事するんだよ？　０７！！』
０８『ジャパニーズ・ゲイシャガール、ゼロハチィ！！』
０９『えっと～、あの～……ぜろきゅーです。　よろしくおねがいします』

シュビッ！
ンバッ！
グググ……。

全員で何かのポーズをする。
あのポーズは……仮面ライダーＢＬＡＣＫか！？

０１『我ら、十人そろって――』

０１『空想世界侵略チーム、チフユサンダーズ！』（正解例）
０２『略奪上等、熱血爆走団！』（暴走族気味）
０３『暗黒騎士隊、ダークブラックシャドウ団！』（闇に憧れている）
０４『眠い』（論外）

０５『あぁ！　寝ちゃだめですよ０４！』（論外その２）
０６『正義の数字戦隊、チフユナンバーズ！』（某魔法少女の組織とダブってしまいます）
０７『０７と愉快なグルメリポーターズ！』（旅番組集団ではありません）
０８『クウソウセンタイ、チフーユレンジャー！』（レンジャーの発音は巻き舌で）
０９『はわわ……たいみんぐをみうしなっちゃった……』（今度はもっと努力しましょう）

全員台詞違うじゃねぇか！！
というか０７の回答例はなんだ！？　ただの旅番組集団かよ！！
後……一人足りなくねぇか？

０１『うむ……今からチーム名を決定するための会議を行う！』
その他『賛成・中性・アルカリ性！』

さっきまで座っていたテーブルに座り直す９人。

「「「……」」」
「おい、俺達はどうすればいいんだ？」
０１『うむ、そこで適当に座ってくれ。しばらくかかりそうだ』

――会議開始。

ペーペーペーペレッペー♪
テッテッテー♪

ペーペーペーペレッペー♪
テッテッテー♪
デデンッ♪

０１『多数決で決める。各員は自分のに手を挙げるだろうから……０４、０５、０９が決めてくれ』

パチパチパチ！

０４『０１が……妥当だと思う』
０５『私は……０８のです。発音が気に入りました』
０９『わ、わたしもじぶんのあるのですけど……』
０１『よし、言ってみろ』
０９『……ジャッカル暗殺隊』
０１『ッ！？　いきなり漢字を入れるな！！　心臓コアが止まるかと思ったぞ！！』

なんだよ……こいつら。

０１『こういう時に死んだ１０がいれば……』

え、１０は死んだの！？

０２『言うなよ０１。私たちにはどうすることも出来なかったんだ』
０３『そうだよリーダー。あの子は好奇心で触ったゼオル様の設定の欠片であんなことになったんだから仕方ないよ』
０４『……Ｚｚｚｚ』
０５『あの子の笑顔は素敵で、いつも何かで揉めた時には良いアイディアを出してくれました。あの子は良い子でした』

０６『あいつの正義は……本物だった。流石私たちの末っ子だ』
０７『いつも美味しい物をリサーチしてくれた……良いヤツだったのに』
０８『イチゼロチャンハ、ワタシノクチョウヲイツモタノシクキイテクレマ～シタ。アノコヲウシナッタコトヲイマモコウカイシテマ～ス！』
０９『いちぜろちゃんはわたしたちのかわいいもうとでした……でも……せっていがおかしくなってしまって……』

そっか……それがチフユサンダー・ＺＥＯか。

０２『そういやアイツ……チーム名は関係ない、私たちがチームであることが重要だって言ってたな』
０１『そうか……では、チーム名は無しという方向でいこう』
その他『異議なし』

チフユサンダー達が立ち上がり、俺達に近づいてきた。

０１『待たせたな。我ら十人そろって――』

全員『……無し！！』
「「「「えぇぇぇぇぇぇ！！　『無し』がチーム名なの！？」」」」

どんなオチだよ！！
チフユサンダー達……厳密に言うと、寝ている０４以外は見事なチューチュートレインを披露する。０１の手には笑顔の……１０と思われる遺影が握られていた。

０１『見ろ１０……お前の大好きな一夏が……うぅっ……』

０２『泣くなよ０１、天国の１０が困ってるだろ？』
本当にコイツらが千冬さんをモデルにしてるのか疑問に思う。
俺はとにかく話しかけた。
「で、結局どうするんだ。ここを戦場にするのか？」
店内の空気が重くなる。
チフユサンダー達は顔をニヤつかせた。
そのまま３０秒くらいの時間が過ぎた。
０１『いや、休暇だから特に攻撃はしないぞ？』
ズデンッ！
チフユサンダーズ以外の全員がコケた。
何『そんなの当たり前でしょ？』みたいな顔で言ってんだよ！！
「……なんだかとても疲れるわ」
「あぁ……千冬姉みたいなやつは一人もいないようだな」
「僕もなんだか疲れた」
「……（無言）」
そんな事を考えていたら、一夏がチフユサンダー達に捕まった。
「なっ、離せ！」
０１『なんだ、私の抱擁が……嫌なのか？』
「そうじゃなくて……とにかく離せ！」
０２『そう言うなよ一夏。私とお前の仲じゃないか』
「いや、お前は千冬姉じゃないからな！？」

０３『さぁ、一緒にこのＢＬ本を読もう。コッチの世界は気持ちいいぞ～？』
「や、やめろ！　俺はノーマルだ！！」
０４『……Ｚｚｚ』
「お前は特に何も無いのな？」
０５『あ、あの……弟とはいえ……嫌がる人を無理矢理するというのは……』
「それが普通だ！　後、お前は俺の姉じゃないからな？」
０６『さぁ、お姉ちゃん達と一緒に新必殺技を考えよう！』
「お前は俺に何を求めているんだ！？」
０７『ご飯作って♪』
「どう突っ込めばいいんだ……」
０８『ｏｈ！　イチカハワタシトアッソーブネ！』
「お前はもう喋るな！！」
０９『いちか……だいすき』
「え、あぁ……ありがとう」

その言葉を聞いたシャルロットと蘭から見えるほどの負のオーラが溢れる。

「一夏ァ……？」
「一夏さん……？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！
ドドドドドドドドド！！
バァァァァァァァン！！

こんな擬音が聞こえそうだ。

「ちょ、ちょっと待て！？　俺は何も悪い事は……おい、お前ら

もなんか言えって！」

一夏が０４の肩に触れた。

０４『！！！』

クワッ！！

チフユサンダー０４の目がハッキリと開いた。

０１『おぉ、半年に一回しか目を全開にしない０４が目覚めた。これは特殊スキルが発動するぞ！！』

なんだよ……特殊スキルって。

０４には隠し機能があるのかよ。

０２『一応説明しとくが、０４は覚醒時、何かの預言をするんだ。発動条件は興奮したときなんだが……、今回は一夏が触ったことが原因らしいな』

「「「「ふぅ～ん」」」」

とにかく聞いてみよう。

――０４の預言。

０４『設定ノ海ニ沈ム……無限ノ欲望……執念……コノ世界ニ繋ガル……ソレハ邪神トナッテ……世界ヲ飲ミ込ム……カレハ……コ

ノ世界ソノモノデアリ、ムスウノ世界……空想ヲ束ネル……支配欲。
……鉄ノ巨人……魔法……地球……宇宙……ソノ全テヲ……Ｚｚｚ
ｚ……』

――預言終了。

どういう事？
全然分かんないけど……嫌な予感しかしないのはなんでだろう？

０１『さって……私たちはそろそろ失礼しよう……お会計お願いします！』

チフユサンダー０１は会計を済ませて荷物をまとめた。

０１『では……いずれまた会おう』
０２『またな、一夏！』
０３『神のご加護があらんことを』
０４『ふぁ～……バイバイ』
０５『ではこれで失礼します……０５、おんぶしますよ』
０６『俺とお前の正義がまた出会いを作ってくれるぜ！』
０７『こんどは手料理が食べたいな』
０８『マタアエルヒヲマッテマ～ス！　バ～イ♪』
０９『またあそんでね～』

キュィィィィィィン……。

周囲の空間が歪み、チフユサンダー達はそれに飛び込む。

そして空間の歪みは消えた。

ピピピ♪

ウォルツさんからの連絡だ。

『……あら？　ドッペルさん状態ですか？』
「はい、どうしました？」
『こっちの用事が済んだので、合流してください』
「了解」

俺はまだボーっとしている一夏達に声をかけた。

「俺はここまでだ。連れの用事が終わったらしい」
「そうか、じゃあなドッペル」
「さよなら、ドッペルさん」
「えっと……また会いましょう」

俺は一夏達と別れた。

――そして合流。

「お、なんだか荷物いっぱいだねぇ」
「あ、イズールさん。見てください、マドカちゃんとオータムさんの服装」
変身解除した俺の目の前には、ボーイッシュな格好のマドカちゃんと、なんというか……お母さん的な雰囲気の服を纏ったオータムがいた。
「どう？　似合う？」
「うん、マドカちゃん……そういうのも意外と似合うね」
「えへへ♪」
次にオータムを観察。
「あ、あまり見るな／／／」
「へぇ、結構かわいいじゃん」
「……あぁ、私こういうキャラじゃないのに／／／」
こうして俺のある意味疲れた買い物は終わったのである。
「さぁ、帰りましょう♪　私の車で」
前言撤回。まだ難関がのこっていました。

――その頃。
――ＩＳ学園にて。
学園敷地内で凰鈴音は眩い光を放っていた。
「キタキタキター！！」
バシュゥゥゥゥゥゥ！！
周囲が凍り、静電気が周囲を照らす。
「スケェェェェェイス！！　……じゃなかった」
シュバッ！
ガシッ！
鈴音は何かの変身ポーズを決める。
「あたし……変身ッ！！」
眩い光が周囲を包み込んだ。
――続く。

第三十七話　チフユサンダー１０はご臨終です。（後書き）

次回はちょっとした番外編です。

第三十八話　番外編　ＺＥＯ軍団の生活（前書き）

みなさまのおかげで２０万ＰＶ突破しました。
このまま終盤までお付き合いください。

第三十八話　番外編　ＺＥＯ軍団の生活

――亜空間にて。

０１『一夏の叫びが聞こえる時』
０２『お節介だけど現れる』
０３『漆黒に輝くスーツの色が』
０４『……一夏の』
０５『幸せ願います』
０６『自分の正義に忠実な』
０７『食を大切にする』
０８『ジャパニーズ、ヤマトソウル！！』
０９『わたしたち、きゅうにんそろって』

シュバッ！
バシッ！
グググ……。

全員『空想戦隊、チフユサンダーズ！！　ただいま新しいメンバー募集中！！』

チュドォォォォォォン！！

ポーズを決めた９人の背後で黒い煙の爆発が起きる。

ここはＺＥＯ軍団のアジト。今、新しい決めポーズの真っ最中で

ある。

０１『どうだ、メカヤマダ』

０１はメカヤマダに話しかけた。

メカヤマダは一生懸命に何かのメモを取っている。

メカ『う～ん……やっぱり何か足りませんね』

０２『おいおい……これで３２回目だぜ？』

メカ『そう言われましても……。そうだ、ゴ・ダンダーに聞いてみましょう』

――亜空間拠点。

――第七エリア。

ここでは３０体のゴ・ダンダー達が趣味全開でバンドをしていた。

その実力は……お察しください。

ゴ『お、サンダーちゃんにヤマダちゃん。今日はどうしたの？』

メカ『実は相談があって。ダンダーリーダーはいますか？』

ゴ『あぁ、ちょっと待っててね。リーダー！！　お客さんですよ！』

すると奥からバンダナを付けたゴ・ダンダーが現れた。

ゴ『今日はどうした？』

メカ『はい……サンダー達の決めポーズの話で』

ゴ『ふむ……まぁ、お茶でも飲みながら話そう』
メカ『はい』

――説明中。

ゴ『よし、だいたい用件はわかった。……だが、それは俺達の専門外になる』
メカ『そうですか……』
０１『残念だ』

三人は喫茶店のような部屋で軽食を取っていた。
メニューは不明。
明らかにこの世に存在しない食べ物である。

ゴ『ところで、０４が新たな予言をしたそうだな』
０１『うむ、どうやらこの世界の未来についてらしい』
メカ『はい、昔ゼオル様が中断したプロジェクトの一部資料と似ているんです』
ゴ『すると……例の【究極空想生命体計画】のことか？』

【究極空想生命体計画】
旧ガルクライフ社が考案した、究極の空想生命体を生み出す計画。
死んだり捨てられたりしたキャラクターの設定を組み合わせた空想生命体を生み出すだけの計画であったが、当時のゼオルの指示で

完全な兵器としての計画として変わって行った。現在この計画は凍結。

メカ『もう……凍結されたかと思ったんですが』
ゴ『ＺＥＯがゼオル様の欠片から記憶を再現したとすると……ちょっとまずいかもしれないな。なんせあの計画は……』
０１『物語サイズの“生物”が誕生するからな』
ゴ『そうだ、物語ほどの巨大な生き物になったら……このサイトに存在する全ての転生者の設定や能力を蓄える事は事実上可能になる』
メカ『そうなったら最悪、この世界どころか全ての空想世界を破壊しかねません』
ゴ『そうなると……俺達の存在意義とは違う事になる。俺達の目的は空想世界の侵略であって、破壊ではない』

三人は一旦会話を止め、コーヒーを飲む。

ゴ『そういや話は変わるが……最近施設に搬入された棺桶型のアイテムボックスはなんだ？』
メカ『たしか……【真っ白い布の転生者】とかいう……転生者の情報を含んだコピー体だとか……後、【杉田のラウラ愛】とか言うアイテムも搬入されましたね。なんの材料なのでしょうか？』
０１『わからん、もしやＺＥＯの趣味の品ではないのか？』
メカ『でも、この品の搬入に結構なコストがかかっていますよ？』
ゴ『ということは……コストをかけるほどの重要な品なのだろう』

三人『……』

結局結論には至らなかった。

――中央広場にて。

０２『バッターは、イースラー』

三人が中央広場へ来てみたら、チフユサンダーとゴ・ダンダー達が野球をしていた。

０２『ズェア！　ズェア！　ズェアズェアズェア！　ヴァ～ンババンババババ～ンバ～ンバン、バンババ～ンババッバババババ～バ～バ！』

０２はバットを構える。
ホームラン宣言だ。

０５『ピッチャー、ダンダー？に変わりまして……ダンダー？』

ダンダー？はグローブをはめた。

０５『審判は……ジョージ・ケツメルさんです』

ジョージ・ケツメルと呼ばれた人物は、ここのボスであるＺＥＯである。

「プレイボール！！」

どうやら今から試合開始のようだ。
ピッチャーがなぜ交代したのかは不明。
ダンダー？……第一球投げました！！
カキーン！！
投げたボールは大きく飛び、『ヒット』と書かれたエリアに落ちた。
どうやら、これは野球では無く、野球盤のようだ。
テレレレッテレ～♪
０５『やりました。０２がヒットを決めました。次のバッターですが、実力派エセ外国人である０８さんが向かいます。おぉっと、０８さんは誰もいない観客席に向かって手を振っています！　妖精でも見えるんでしょうか！』

――以下省略。
「ゲームセット！　６７対５９でチフユサンダー野球団の勝利！！　もういいだろ、お前ら仕事しろ！！」
そんなＺＥＯの言葉を無視して喜ぶチフユサンダー達。
「……もう寝る」

ぐったりしながら向こうへと歩くＺＥＯであった。

――次の遊び。
――特にないので、休憩。

０５『空……紫色ですね』
０４『……うん』
０５『なんででしょうか？』
０４『……空の色が……設定されてない』
０５『そうなのですか？』
０４『うん……だから紫色だったり……それ以外だったりする』

０４は何かの端末をいじっていた。

０５『何見てるの？』
０４『弓弦イズル先生のツイッター。二次創作には否定的って噂があったから……それの検証』

……検索中。

０５『で、どうでした？』
０４『二次創作に否定的というわけではなく……ツイッターでちょっとした事があったようです』
０５『なるほど、私たちも織斑千冬の姿を借りた兵器ですから文句は言えませんね。所詮私たち二次創作は、作者の黙認によって消されないだけの大きなにきびのようなものです。いつ処理されてもおかしくは無いんですよね』

０４『……』
０５『０４？』
０４『Ｚｚｚ……』
０５『……おやすみなさい♪』

――別の場所では。

何人かのチフユサンダーが集まってなぜかＡＶ観賞していた。

０２『人間の男ってのはこういうのに興味あるんだぜ？』
０６『あわわ！　こ、こんなの不潔だ！！　嫌がる女性を無理矢理だなんて！！』
０２『ば～か。これは演技だよ。女優と男優なんだよ』
０６『だからって……』
０２『どうした、欲情したのか？』
０６『……なんだか……変な感じしてきた……。これって……気持ちいいのかな』
０２『実際には痛いらしいぞ？』
０６『そ、そうなの？』
０２『私たちには子供産む器官やシステムは最初からないからこんなビデオ見ても無意味だがな』
０６『ところで……このＡＶは誰の私物？　もしかして……ＺＥＯ？』
０２『……そこで瞬きせずに凝視している０３の私物だ。今度の同人誌の参考にするんだと』

０６が近くを見ると、そこには０３がいた。

０３『はぁ……はぁ……もう、最ッ高……』

その様子を見なかったことにする０２と０６。

０６『欲情しないんじゃなかったんですか？』

０２『あいつは自分で下半身をカスタマイズして性感帯建築したんだとさ』

０６『それはまた……』

しばらく二人はＡＶ女優の妙にリアルな演技を見続けるのであった。

――さらに別の場所では

ここはＺＥＯの謁見の間。

ここに０７と０９が忍び込んでいた。

０７『ここに……ＺＥＯがいつも飲んでいる何かがあるらしい』

０９『おさけですか？』

０７『いや……サイダーだ』

――完

――別の場所では。

０８『ヒ～マデスネ～』

０８が一人で散歩していた。

０８『イクラワ～タシガロボデモ……ヒマニナリマ～ス』

０８が歩いていると、一つのビー玉らしき物を発見した。

０８『？　コレハ……ダレカノ……主設定だな』

０８は急に口調を変えた。

目つきや雰囲気は本物の織斑千冬に似ている。

０８『馬鹿共が……いや、これは私たちの主設定では無いな。では、いったいだれの……』

「わたくしですわ」

０８の目の前に車いすに乗ったセシリアにそっくりの女性がいた。

０８『あ、オウ……アナ～タハ……セシリアデハアリマセンネ？』

セシリアらしき女性を見た０８は慌てて口調を元に戻した。

「いえ、さっきの口調のほうが話しやすいのでは？」

０８『……わかった』

女性と０８は近くのベンチに座った。

０８『ところでお前は何者だ。この死んだり没になったキャラクターしかたどり着けないような空間にいる時点で普通ではないが』
「わたくしの名前はセシリア・オルコット。わたくしは目が見えないので……あなたの姿が分かりませんが」

ここで０８女性の正体に気付いた。

０８『そうか……５年前の……滅んだ世界の残党』
「はい、もう……五年にもなるのですね。感覚的に過ごしていたら……いつのまにか大人ですわ」

設定変異体
【盲目のセシリア】
銀時計事件の被害者。
視力の設定が砕け、目が見えない。
今はガルクライフ社によって物を感覚で感じる能力が備わっている。

０８『……すまないな。本当はこのまま一夏と楽しい時間を過ごすはずだったのに。組織を代表して、私が謝罪する』
「いいんですわ。あの世界は新しいセシリア・オルコットにまかせました。猫になったラウラさんが行方不明なのが謎ですが」

０８は何も言わずに、ビー玉をセシリアに渡す。

０８『これを返すが……いいのか？　それを取り込めば……恐らく原作のセシリアに近くなって……フォーマット……いや、原作サーバーに吸収されるぞ？』
「……いいんです。わたくしは……もう……心残りは……ありませんわ」

セシリアは自分の設定を取り込んだ。
それによって、全設定が原作のセシリアと近くなり、原作サーバーへと吸い込まれ始めた。

「最後に……素直に渡してくれて……ありがとうございます」
０８『オルコット……幸せになれるように祈ってる』

それを聞いたセシリアは閉じていた瞳を開いた。

「あぁ……、あなたは……織斑先生でしたの？」
０８『いや、私はただの人形だ』
「……いえ、あなたは人形ではありませんわ。ちゃんと自分で考え、優しいですもの――」

セシリアはそのまま消えて行った。

コツン！
コロコロ……。

０８の足元に一個のビー玉が転がった。
０８はそれを拾う。

０８『これは……セシリアの……記憶だな。原作とは違う、この

世界の。あとで返してやるか』

０８はそういうと、セシリアだった物をポケットにしまう。

０８『……あの子はユーザーネーム杉田さんの願望を叶えようとした作者の犠牲者だっていうのに。そもそも、あの時一夏と箒が付き合い始めた頃にラウラにチャンスをという純粋な願いが恐ろしく歪んだ無茶へと変わって……この世界の路線を大きくずらした。作者本人も……自分の本小説のアイディア引っ張ってこなきゃいけないほどの修正するんだったら、最初からしなきゃよかったのに』

０８は胸からペンダントを取り出す。

そこにはチフユサンダー１０の写真があった。

０８『……もう、終巻まで時間が無い。みんなが動かないなら……私がなんとかしよう。全ては……この物語にエンドマークを刻むため。そうだろ？　ＺＥＯＬＵ』

カツン
コツン
カツン
コツン

チフユサンダー０８はその場から闇の中へと姿を消した。

――続く。

第三十八話　番外編　ＺＥＯ軍団の生活（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

第三十九話　愛ずるオルコット大暴走（前編）（前書き）

今回は好みが分かれる話です。
というか今までの物語とはほとんど関係なく、私の思いつきと欲望をぶちまけた話です。

第三十九話　愛ずるオルコット大暴走（前編）

※今回は仮面ライダーＯＯＯネタが濃いです。
もう原作に『メトロイド（武器と能力）』って書くのやめた方が良いでしょうか？

月曜日の放課後。
俺と一夏はテニスコートにいた。
『生徒会執行部・織斑一夏＆イズール・ユ・ミヅル貸出キャンペーン』というものだ。
最近になって楯無さんは鈴の部屋で暮らしていた俺を……俺を！！　あろうことか一夏の部屋へと強制引っ越ししやがった。もちろん鈴は激怒。しかし、生徒会長権限ということで、意見は通らなかった。
鈴が『あのアマ……いつか殺す』とか言ってたが……鈴ってあんな性格だったか？

「はぁぁぁっ！」
「負けるもんか～！」
「セシリアが散々自慢したマッサージ、絶対受けてやる！」

……セシリアさんのお馬鹿さん♪
マッサージなら俺が手に微電流流した悶絶マッサージしてやるのにぃ……♪
だ～がしかしぃ。このトーナメント、実はおもろい商品が隠しで

用意されている。それは……。あのＩＳ学園ゲーム化計画の改良品、【黄昏のＩＳ学園】である。

【黄昏のＩＳ学園】
前作の反省をふまえて作られた改良品。
前作のような異常な中毒性は無いが、ちょっと引きこもりになってしまう。この学園で人間関係に満足していない人は要注意。
攻略対象も増え、ゼオルさんやウォルツ三人格も攻略可能という豪華ぶり。
ゼオルさんは『俺は未亡人で、娘もいる』と言っていたのに驚きである。つまり、ゼオルさんルートは、ゼオルさんの娘さんとのコミュニケーションがうまくいかないと即バッドエンドとなる。

ちなみに実験に協力……いや、実験台となった山田先生は『私……ナナセちゃんのお母さんになります！！』と意気込んでいた。

【ナナセ】
本名：ナナセ・ゲバイン。
ゼオルとその妻の設定を掛け合わせて生まれた空想生命体の娘。
本作には登場しない。
テンプレ神と同等の能力を持つ……らしい。

「まさかゼオルさんが既婚者で奥さん亡くなっているとは……テンプレの神様も大変だな」

俺がそんな事を呟いている間に試合は終了。

結局セシリアが優勝したのである。

「セシリア、おつか――」

当て身！！

バシッ！

バタンッ！

俺は瞬時に一夏と入れ替わる。

「セシリア、お疲れ。優勝おめでとうさん入れ歯」

「はぁ、はぁ、はぁっ……。当然……ですわ……。はぁっ……」

「ほい、バスタオル。それと水分補給の林檎黒酢な」

「はい」

ゴクゴク……。

ブフォッ！！

セシリアは壮大にむせた。

「ゲホゲホッ……なんですのこれ！？」

「何って……林檎黒酢だよ？」
「ゲホッ、ウェホッ！　の、喉がぁ……それより一夏さんに……マッサージを」
そこには俺が気絶させた一夏……あ、復活した。
「いてぇじゃねえか！！」
「黙れ！　お前ばっかり人気なんて気に食わねえんだよ！！」
「何だと！？」
そう言いながらセシリアをタオルで拭く。
いくら原作にそらなきゃって……無理矢理だな。
「あ――――――！！」
「セシリア、何してんのよ！」
「優勝したくせにずるい！　ずるいよ～！」
テニス部一同から一斉にブーイングが発せられる。
セシリアはというと、それを正面から堂々と受けて、髪をぱぁっとかきあげて言った。
「ずるくありませんわ！　勝者の特権でして――ゲホッ！！」
林檎黒酢のダメージは残っていた。
そしていつものように腰に手を当てたポーズは、なんだか輝いて見えた。
「ぐぬぬぬぬ……！」
「くやしい！　あのお嬢様気取りに負けた自分が悔しい！」
「織斑くん！　こうなったらみんなにもサービスしてよ」

「いっ！？」

俺には振らないのか！？

？説明しよう、これでもみんなは密かに鈴とイズールの仲を応援しているのだ。

「そうね……これは、みんなが着替えの時に背中を拭いてもらおうかしら」

キュルルルリン！！（ニュータイプのＳＥ）

その時、イズールに電流走る。

な、なんだ……この妙なプレッシャーは……。

俺がコートの柵の向こうを見たら、そこにはウォルツさんがいた。

「……ニッコリ♪」

まずい！！　この感じはあの学園祭の時の！？　恐らく女子が男である一夏に体を拭かせようとした言動がまずかったんだ！！

俺は叫ぶ。

「みんな逃げろ！！　ガサ入れだぁ！！」

「「「！？」」」

俺の声を聞いて一斉に逃げ出す。

みんなあの時のがトラウマのようだ。

「女子共、そこに座れぇ！！」

柵をよじ登って追跡するウォルツγさん。

「い、いやぁ！！」

「も、もうあれは嫌だぁー！！」

「た、助けて！！」

「こ、殺される！」

「ヨ、ヨシツナーガ、キータヨー！」

まるでネメシスに追われるプレイヤーのようだ。

そんな事を考えている場合じゃない！！

とにかく俺はウォルツさんの怒りを鎮める為に走った。

――イズールside　end

――セシリアside

――イズール＆一夏の部屋にて。

ここでわたくしは一夏さんのマッサージを受けるのですが、それは原作６巻をお読みになってください♪

簡単に言えば……夢落ち……でしたわ。

そういえばイズールさんは……いませんわね。

「です……。ひどい……、ひどいオチですわ！」

せっかく、あんなことやこんなことがあったのに夢オチだなんて……。

ここは一夏さんの部屋……はぁ。夜中の二時。

「？」

わたくしはそこで光るものを見つけました。

「これは……あの時の青いコイン？　なんで少し光っているのでしょうか」

わたくしは前にイズールさんが落とした青いコインを拾いました。この絵は……シャチでしょうか。淡く光るソレになんだか不思議な感覚を覚えます。

――あなたの欲望……解放しなさい。

「ッ！？　だ、誰ですの！？」

すると……わたくしめがけて青いコインが飛んできて……。

カシャ――――――ン！！

――セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――翌日。

一夏の部屋からセシリアが出てきた。

「～♪　わ、セシリーだ！！　なんで織斑君の部屋から！？」

のほほんさんはその光景を見ていた。

のほほんさんに気付いたセシリアはのほほんさんに近づいて行く、なんだか様子が変だ。

「……」

「セ、セシリー？」

ガシッ！！

セシリアはのほほんさんの両頬を掴む。そして自分の唇を近づけていく。

「ちょ、冗談だよね……？」

「……」

「あ、今の事は言わないから……ね？」

「……」

「ちょ、ちょっと！！」

「……」

「や、やめ――」

無音になる廊下
この間３０秒。

なんだかジャラジャラと大量のコインが落ちるような音が聞こえる。

セシリアはゆっくりと唇を離した。
のほほんさんはヘナリと腰が崩れ落ちる。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！　酷いよ！！　お嫁にいけないよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

そんなのほほんさんの大声で周囲に人が集まってきた。

「なに？」
「どうしたの？」
「なんでのほほんが泣いてるの？」

集まってくる人々を見て不敵な笑みを見せるセシリア。

「いいわ……最高……色も味も感触も分かる。アンクのヤツ……随分良い思いしてたみたいじゃない♪　私はこの感覚をもっと知りたい、確かめたい、味わいたい！！」

セシリアは人々に向かって歩き出した。

「それにしても……私は坊やに砕かれたかと思ったのに……。なんでメダルが九枚あの部屋にあったのかしら？　まぁいいわ、折角

の人間の体……楽しまなきゃ♪」

セシリアはモブ生徒の頬を掴む。

ガシッ！！

「え？　セシリア……さん？」

「これが……これが夢にまで見た愛情なのね！！」

「な！？　セ、セシ――」

モブ生徒がセシリアの唇の餌食となる。

またジャラジャラとコインの落ちるような音が聞こえた。

「いやぁぁ！！」

「セ、セシリアがキス魔になった！？」

「に、逃げろ！！　掘られるぞ！！」

逃げる生徒たち。

しかし、逃げた先には既にセシリアがいた。

「ふふふ……逃げても無駄よ♪」

「な、なんで！？」

追いつめられる生徒達。

「さっきから騒が――何があった？」

織斑千冬が現場に入ってきた。

モブ生徒が事情を説明する。

「せ、先生！！　セシリアさんがキス魔に！！」
「はぁ……何かと思え――」

ガシッ！！

「な！？」
「織斑先生も……意外と綺麗なのね」

セシリアは千冬の頬に手を添え、唇を近づける。
千冬は抵抗するも、まったく抜けられない。

「あなたの愛も……欲しい」
「や、やめろセシリア――」

沈黙する廊下。
この間４０秒。
またコインの溜まるような音が聞こえる。

「……満たされる……満たされるわ！！　こんなの……初めて♪」

一方千冬はというと……。

「……」

思いっきり真っ白になっていた。

――続く……のか？

グリード

【メズール（完全体）】

仮面ライダーＯＯＯで登場した、怪人の女幹部。

セシリアと中の人が同じ。

今回は結構前に出たコアメダルの伏線回収の為だけに現れたゲストキャラ。

実はイズールが貰ったコアメダルは、設定を込めて錬成された本物に近い物であった。

設定を込めて作られたレプリカなので、欲望は底なしではない。

セシリアに寄生したため、人間と同じ感覚を持つことが出来、本人は喜んでいる。

しばらく己の欲望を満たす為に数話を使おうとしている。

今回は『メズール』というよりも『愛ずーる』である。

このセシリア×メズールの物語だけで一つの二次創作書けそうな気がする。

第三十九話　愛ずるオルコット大暴走（前編）（後書き）

もしかしたらこのアイディアが次回作になるかもしれません。
感想おまちしております……訂正、感想ください。

第四十話　愛ずるオルコット大暴走（後編）（前書き）

やっと完成した後編。
最近忙しくて大変です。
あれ……ちょっと話が未完成？

第四十話　愛ずるオルコット大暴走（後編）

ＩＳ学園のドッペルゲンガーの前回までの３つの出来事！！

１つ、テニスで優勝したセシリアは一夏のマッサージを受ける。
２つ、マッサージで眠ってしまったセシリアは起きた後にレプリカのコアメダルを見つける。
３つ、意思持ったレプリカコアメダルに寄生され、セシリアはメズールに乗っ取られてしまった。

カウント　ザ　メダル！
現在、セシリアの使えるメダルは――

シャチ・コア×３
ウナギ・コア×３
タコ・コア×３

セルメダル×いっぱい。

――セシリアｓｉｄｅ

ここはセシリアの深層心理。
深い意識の底で彼女は目覚めた。

「あら……？　わたくしは……」

真っ黒い空間にはわたくしと……もう一人のわたくしがいました。

「ドッペルゲンガーさん？」

「はじめまして、私はメズールっていうの♪」

メズールと名乗ったわたくしは笑顔で話しかけてきます。

「今あなたと私の欲望を満たしているのよ♪」

「欲望？」

「そう……あなたは愛情に飢えていて、私はその愛情を知りたいの。それが今回の欲望」

「愛情……ですか？」

「そう、ちょっと記憶覗いたけど……幼いころに父と母を亡くして一人で頑張って、孤高の存在になったあなたは……心の深いところで愛情を欲しがっていたのよ」

「……たしかに……そんな気がしますわ」

わたくしは黒い空間を眺めます。

なんだか……心の寂しさを表現しているようでした。

「ちょっとお願いがあるの♪」

「お願い？」

「私に少しあなたの体を貸してほしいのよ～」

メズールさんはわたくしの手を握ります。

すると、メズールさんの記憶らしき物が流れ込んできます。

――８００年前。
――グリード。
――欲望。
――五感欠落。
――無。

なんだか……物凄く寂しい人生だと……直感ですが、思いました。

「私は人間の愛情という部類に興味があったのよ～♪　もう楽しみでいてもたってもいられないわ～♪」

そう語るメズールさんは嬉しそうです。

「……いいですわよ。でも……どんなことをしますの？」
「う～ん……自由気ままって感じかしら？」
「……あ、あまり悪用しないでくださいよ？」
「わかったわよ♪」

メズールさんはわたくしの手を強く握り……。

「じゃあ、今日はお互いの」
「欲望を」

「「解放しましょう♪」」

――前編の一夏の部屋を出るところに続く。

――セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――そして現在。
――イズールｓｉｄｅ

俺は昨日、ウォルツさんの愚痴を延々と聞いていたのである。

「まったく……ウォルツγさんの性格は激しいな～」

偶然通りがかったゼオルさんの屋台にマドカちゃんがいた。
俺はマドカちゃんに話しかける。

「お～い、マドカちゃ～ん！」
「あ、イズールさん♪」

マドカちゃんは大きなクーラーボックスを持ってきた。

「見て！　大きな魚が釣れたんだよ♪　黒猫さんと一緒に釣ったんだ♪」
「ニャ～」

マドカちゃんは太陽のような笑顔で俺を癒してくれる。
昨日の苦労が吹き飛びそうだ。
俺はクーラーボックスの中身を覗く。

「さって～、まさか買ったお魚ってオチは――」

ビチビチ！！

「……」
「ね、すごいでしょう？」
「ニャ～ン」

ピラニアヤミーだぁぁぁぁぁぁ！！！
な、なんでこんなところにヤミーがいるんだ！？
あれか？　グリードがいるのか！！
「マドカちゃん……それお魚やない、ヤミーや」
「ヤミー？」
「ニャ？」
俺はピラニアヤミーを捻り潰す。
ジャラジャラジャラ……。
すると大量のセルメダルへと姿を変えた。
「おぉ……お金に変わったね♪」
「ニャ～」
「あ、黒猫さん大変だ、今日の朝ごはんが無くなっちゃった！」
「ニャ～ン……」

本当に平和だな……この二人。
そうこうしていると、向こうから千冬先生が走ってきた。
「イズール！！　貴様、セシリアに何を投与した！！」
「は？　投与！？　何があったんです！！」
すると、千冬先生が顔を赤くした。
「セシリアが今日の朝、突然キス魔となって……私のファーストキスを……この私のファーストキスを奪ったのだぞ！！」
頭抱えて悶える千冬先生。
あぁ……ご愁傷さまです。
そういやこのピラニアヤミー作れるメズールとセシリアは中の人が同じだったな……！？
セシリア……メズール……今日の事件……ヤミー。
そこから導き出される答えは……？
――俺の部屋のコアメダル。
「あれかぁぁぁぁぁぁぁ！！」
ならば……事は重大だ。オーズドライバーが必要になるかもしれない。
今……オーズドライバーは……簪さんの部屋だ！！　タトバもそこにある！！
「マドカちゃん、黒猫さん、行くぞ！！」
「ニャ！」
「お姉ちゃん、行くよ！」

「お、お姉ちゃんだと！？」

俺、マドカ、千冬先生、黒猫さんのメンバーで？へと向かった。

「エム～？　飯はまだか～？　誰もいねぇし」

オータムが来たのは気付かなかったのである。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――その頃。

「これが……愛」

「た、助け――」

ジャラジャラ。

「これも……愛」

「い、いや――」

ジャラジャラ。

メズールは次々に愛を確かめていた。

「もっと知りたいわ♪　次は――」

ぐぅ～。

「……お腹空いたわね。ん？　お腹が空いた！？　私……空腹なの！？　これが空腹なのね～♪」

セシリアに寄生したメズールはグリード時代に堪能できなかった感覚を思い切り楽しんでいた。

「たしか……食堂はアッチだったわね。ガメルからお菓子貰った時は味が分からないから捨ててたけど……ついに味が分かるのね！！　楽しみだわ～♪」

ルンルン気分でスキップするメズール。

背後には犠牲者で溢れていた。

――食堂にて。

「えっと……スパゲッティに……シチューに……あぁ、これテレビで見たときに味わってみたかったのよね～」

グリード時代は視覚は薄かったが見れないレベルでは無かった。そうでなければ今まで戦えないだろう。

食券販売機で次々に食券を購入。

それを全て注文した。
セシリアのテーブルには大量の料理が運ばれてきて、他のクラスのみんなはそれを恐ろしそうに見ていた。
「……おいしい……今まで人間はこんな美味しい物を食べていたのね！！」
思わず涙を流すメズール。
「これが感動という感情……もう、最ッ高！　あの時の戦いが霞んで見えるくらいよ♪」
そう言いながらスパゲッティを頬張るメズール。
そこへいつもの一組メンバーがやってきた。
「せ、セシリア！？　どうしたの……パジャマ姿でそんな膨大な料理注文して！！」
「あら……たしか……シャルロットだったわね」
そう、メズールは寄生した後はずっとパジャマのままだったのである。
「あら、おめかしがまだだったわね。いけないわ～。前の癖ね♪」
今度はパフェに手を出していた。
「おいしいわ～♪　本当に美味しい♪」
メズールがパフェを美味しそうに食べていた時、のほほんさんが現れた。

「ふぇぇぇぇん、おりむー」
「ど、どうした、のほほんさん」
「私のファーストキスが奪われたのぉぉぉぉぉぉ！！」
「だ、誰に？」
のほほんさんは目つきを鋭くしてメズールを睨む。
「セシリーにだよ！！」
のほほんさん、ちょっとキレ気味。
「「「「！？」」」」
驚く四人。
「ま、まさか……そんな趣味が」
「お前……」
「僕も未知の世界だよ」
「うむ」
一夏、箒、シャルロット、ラウラの順で引く。
……のほほんさんに。
「だから～！　奪われたんだって！！　おりむーの部屋からセシリーが出てきた後で」
一瞬の沈黙。
「えええぇぇぇ～！！」

叫ぶシャルロット。
「しゃ、シャル！　静かにしろって！」
「だ、だ、だってぇ！」
混乱するシャルロット。
「私がパジャマ姿で……ん、そういえば、あなたがセシリアの……。ふぅん、なるほどね～♪」
メズールは一夏全身を舐めるように観察する。
そしてメズールは一夏の頬に手を添え――
口づけをした。
もちろん、頬とか額とか言うオチは無く、口に。
「「「！？」」」
「～ッ！？」
「……♪」
驚く三人。
喋れない一人。
楽しむグリード。
食堂が静まり返る。
「――！！」

抵抗する一夏、しかし流石はグリード。簡単な力ではどうにもならない。

「……ぷはぁ」

「せ、せせせ、セシリア！！　お前いったい何やってんだ！！」

メズールは唇を離した。

顔を真っ赤にして抗議する一夏。

ちなみにここまでの時間は４０秒。

ジャラジャラジャラジャラジャラ！！

「う～ん、やっぱり男だとキスの味も違うのね……頭も少しボーっとする。また一つ勉強になったわ。それにしてもセシリアは随分とこの坊やに対する欲望が溜まってたのね、セルメダルの数が尋常じゃないわ」

その光景に唖然となる周囲。

「せ、セシリア！！　お、お前は何をやっている！！」

顔を真っ赤にして叫ぶ箒。

目には少し涙が溜まっている。

「あら、そんなにしたいならあなたもすればいいじゃない」

「え？」

ガシッ！！

メズールは箒の顔を両手で掴むと、一夏の顔へと押し当てた。
「「ッ〜！？！？」」
キスをしてしまう二人。
混乱して二人はどうしていいか分からない。
「さて……食事もしたし、キスもたくさんしたし……そろそろセルメダルを回収しようかしら」

すると、食堂に血相を変えた生徒が走りこんできた。
「た、大変！！　空飛ぶ魚の大群がこっちにむかってるわ――って、きゃぁあぁあぁぁ！！」
食堂の入り口から大量のピラニアヤミーがやってくる。
その数は膨大で、それを見た生徒はパニックになる。
「な、何アレ！？」
「う、うわぁぁぁ！！」
「助けてダディ！！」
「オデノカラダハボドボドダー！！」
ピラニアヤミーはメズールの前でセルメダルへと変わり、セシリアの体へと集まって行く。
ジャララララララララ！！

「はぁ……いいわぁ♪」

そしてみるみる内にセシリアの体に吸い込まれていくセルメダル。

「なに……あれ」

「セシリア……人間なのか？」

「ぷはぁっ、い、一夏離せ！！　い、いや、離すな／／／」

「あ、わ、悪ぃ！！　え、どっちだよ！！」

セルメダルを吸収したメズールは次の遊びを思いついた。

「そうだわ、ＩＳとかいうもので空を飛んでみたいわね♪」

メズールはそう言うと、食堂を飛び出して外へ出る。

――学園敷地内にて。

メズールは大きく息を吸う。

「風……気持ちいのね。えっと……たしか……ブルー・ティアーズ！！」

ガキンッ！！

ジャキンッ！！

メズールにＩＳが装着される。

「……なんだか防御面が不安ね。だったら――」

ジャララララララララ！！

ブルー・ティアーズがセルメダルに包まれる。

セルメダルは次々に形を変えていく。

『シャチ！！』

頭にシャチを模したヘッドパーツが装着される。

『ウナギ！！』

腕に鞭のような物が装備される。

『タコ！！』

腰にタコの触手のようなパーツがスカート状に装備される。

他のセルメダルは青い装甲となって露出部分を埋めていく。

『シャッシャッシャウッタ～♪　シャッシャッシャウッタ～♪』

シャチのようなマークが付いた青いマントが装備される。

専用機？

【ブルー・ティアーズ（シャウタコンボ）】
メズール化したセシリアによって強化されたブルー・ティアーズ。セルメダルを軽く2万枚つぎ込んだことにより、アホみたいに強固な全身装甲を得ている。
装備は以下の通り。
シャチヘッド：敵がどんなところに隠れていても索敵できる。ハイパーセンサーよりも高性能。
ウナギウィップ：放電できる鞭。アンカーとしても使えるようになっている。
タコレッグ：吸盤で壁に張り付いたり、相手の動きを封じるのに使う。足場の不安定な場所での狙撃には便利。
他にもセルメダルでビットが増えていたりする。

「さて……飛んでみましょうか」
「――そうはさせないわ！！」
近くに更識楯無が現れた。
「一応条約違反だから飛ぶのはやめてくれる？　セシリア・オルコットの偽者さん」
「たしか……生徒会長の……。あ、生徒会長というのも面白いかもしれないわね」
メズールと楯無はお互いに武器を構えた。

グリード
【メズール（完全体）】
ＶＳ
生徒会長
【更識楯無】

楯無はＩＳを展開して攻撃する。

「こっちの先行よ」
「あら、やってみなさい」

楯無のミステリアス・レディがメズールのブルー・ティアーズを攻撃する。

ガンッ！！

しかしまったくダメージは無い。

「嘘ッ！？　イギリスの専用機ってこんなに堅かったかしら。というか絶対防御無しで攻撃を受け止めるってどういう事？」
「絶対防御？　あぁ～、たしかそんなのもあったわね」

実はただ単に発動し忘れているだけである。

「じゃあ……これはどうかしら？」

楯無の周囲に霧が発生する。

「なにかしらこの霧」

「これはナノマシンで、こんなことが出来るのよ」

パチンッ！！

ドカァァァァァァン！

楯無の合図で一斉に爆発が起きた。

「……すごいわね。この攻撃を直撃で耐える機体があるなんて……どこのＩＳ？」

「この位……ライオンの光に比べたら……いえ、消えたカザリに失礼ね」

メズールは攻撃体勢に入る。

「今度はこっちの番よ」

「かかってきなさい、偽者さん」

メズールはスターライトｍｋ？を展開する。

「……これは私の趣味じゃないわね」

ジャラララララララララ！！

スターライトｍｋ？にセルメダルが集まって行き、形を変える。
「人間の科学というのも意外と面白いわね♪　水をうまく使えば堅い物も簡単に切り裂けるなんて思いつかないわ」
完成したライフルにエネルギーが溜まって行く。

オリジナル武器
【リキッドブラスト】
メズールがセシリアの中にある科学知識の一部を読み取って、セルメダルで改造したライフル。
簡単に言えば超強力な水圧カッター。
チャージレベルによってはビルや地面を軽く抉ってもまだお釣りがくるほどの威力になる。

「発射！」
「！？」
ビシュゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！
楯無が間一髪でそれを回避するが、地面には大きな穴が開く。
※イメージ的にはモンスターハンターのアマツマガツチのブレス

を思い浮かべてください。

「なんて威力」

「私も知識だけしかなかったけど……すごいわねコレ」

メズールはそういうと一気に移動する。

「さぁ、踊りなさい」

「それは私の台詞よ」

楯無は水で自分の分身を作る。

「無駄よ」

メズールはシャチヘッドで本物を探し当て、ウナギウィップで攻撃する。

バシンッ！

「きゃっ、全然通用しないか……最終手段使おうかな……」

「そんなことしなくてもいいわよ。今は空を飛びたいのよ」

今の状況からして、圧倒的に楯無が不利である。

緊迫状態が続く。

――その頃。

――イズールｓｉｄｅ

俺達は簪さんの部屋に向かって走っていた。
その途中で俺はゼオルさんから説明を受けていた。

「――で、今回の事件はどう解決する？」
『殺すだけなら簡単だ。所詮、おもちゃに設定をつぎ込んで錬成したただけの代物だ。強度はプラスチック程度しかない。ただ、そこから生まれたセルメダルは劇中の強度と変わらないはずだ』
「そもそも、なんで錬成なんかしたんだ？」
『かつての実験の副産だ。物が命を持てるかどうかのな』
「でも、グリードは所詮……」
『そう、所詮は“物”……のはずだったんだが、レプリカだから状況が違うぞ』
「例えば？」
『お前の目の前にいる……アレだ』
「アレ？」

俺達の目の前に卵らしきものが見えた。
青く光っている。

「先生……アレ……わかりますか？」
「卵だな」
「卵だね」
「ニャ～ン」

ペキャッ！！

卵が割れて、何かが生まれた。
ピラニアヤミーか？

「……ちょろいですわ！！」

さか〇クンのようにシャチ型の帽子を被った二頭身セシリアが現れた。

ヤミー？

【メズリア】

仮面ライダーＯＯＯで現れたショッカー戦闘員のような原理で生まれた謎のヤミー。

大きさは成人の膝ほどで、体重は５ｋｇ

簡単に言うと、『セシリア版ミニイカ娘』である。

実は、セシリアの幼少期の寂しさが露呈したもの。

戦闘能力は無いが、集団で愛情を要求するためタチが悪い。

意外と泣き虫。

基本『ちょろいですわ』以外は喋らない。

メズリアはトコトコとこちらに歩き出す。

トコトコ……コテンッ！

あ、コケた。

「……び、びぇぇぇぇん！！」

あ、泣いた。

すると、その声に反応したのか、ゾロゾロと他のメズリアが集まってきた。

「――」

「――？」

「――！！」

言葉は喋らないが、何か会話しているように見える。

どうやら慰めているようだ。

「……」

「――？」

「♪」

「「「ちょろいですわ！！」」」

どうやら泣き止んだみたいだ。

「イズール、観察している場合ではないようだ」

「へ？」

周りを見ると、俺達は大量のメズリアに囲まれていた。

「ちょろ？」

「ちょろいですわ」

「ちょろい」

「ちょろ～」

万事休すだ。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――その頃。

「やめろセシリア！！」
「どうしたんだセシリア！」
「目を覚まして！」
「お前、いったいどうしたんだ……って、なんだあのＩＳは！！」

一夏、箒、シャルロット、ラウラが戦闘に割り込んできた。

「あら、みんなで来てどうしたの？」

メズールがつまらなそうに答える。
その他の全員がＩＳを展開する。

「みんな、セシリアを止めるぞ！！」
「「「了解」」」

「……しかたないわね」

グリード
【メズール（完全体）】
ＶＳ
主人公
【織斑一夏】
&
一夏の幼馴染
【篠ノ之箒】
&
フランス代表候補生
【シャルロット・デュノア】
&
ドイツ代表候補生
【ラウラ・ボーデヴィッヒ】
&
生徒会長
【更識楯無】

一夏の攻撃。
雪片弐型を振るう。

「目を覚ませぇ！」

バシャンッ！

「へ？」

しかし、一夏の攻撃はまったく通ることなくすり抜ける。
これはメズールの特有能力のゲル化によるものである。

「やめときなさい、どうあがいてもあなた達では勝てないわ」

メズールはリキッドブラストで攻撃する。
それをラウラはＡＩＣでガードする。

「くっ、威力が今まで経験したのと違う」
「だからやめなさいって言ってるでしょう？　戦っても傷つくだけなのに」

「……そうはいくか！！」

次に箒が剣で攻撃する。

ガキンッ！

「堅いか！」
「……あなたたち……そう、セシリアは本当は愛されてるのね」

メズールはそう言うと、箒をタコレッグで締め上げる。

ギリリリリリリ！！

「ぐ、ぐあぁあああぁあぁあぁあ！！」
「ほ、箒！！」
一夏が叫ぶ。
「安心しなさい。手加はしているわ」
そう言うメズールの声は何だか寂しそうに聞こえる。
「……私も……こういう風に心配してくれる家族が欲しかったわね。……ガメルはただ甘えていただけだけど」
すると、メズールの動きが鈍くなった。
「あ、あら？　体が……少しふらつくわね。セシリアが目覚めかけてる」
「シャルロット、今だ！！」
「わかったよ、一夏」
シャルロットのＩＳに付いているシールドが展開する。
「グレー・スケール！！」
ズガンッ！！
シャルロットのパイルバンカーが命中する。
そしてメズールがメダルをまき散らしながら飛んで行く。

ジャララララ！！
「きゃぁあぁあ！！」
ズガンッ！
ダンッ！！
ギャリリリリリリ！！
地面を転がり、数十メートル先で停止した。
青い装甲が剥がれ、パジャマ姿のセシリアの姿が露わになった。
「……なんでだろう、満たされてる……。みんなの心配してくれる気持ちがセシリア本人に届いたのかしら……。やっぱり、生きた人間に寄生するなんて……ダメね。私……満足して消えちゃうもの」
そして、メズールの意識は一旦途絶えた。

――セシリアｓｉｄｅ
「……メズールさん……」
わたくしはメズールさんの何だか切ない気持ちで目を覚ましました。
周囲には大量のコインのようなものが散らばっていました。
「セシリア、大丈夫か！？」
「セシリア……なのか？」

「大丈夫！？」
「けがはないようだが……一応医者に見せた方がいいだろう」
「一夏さん……箒さん……シャルロットさん……ラウラさん」
みんなの名前を呼んでいると、鈴さんが現れました。
「さぁ、セシリア！！　今ガタキリバで……ってアレ？　もう終わってるの？」
「鈴さん？」
鈴さんは手に変な装置と、緑色のコインを三枚持っていました。
「イズールの連絡で今コレを簪さんから渡されて救助に行けって言われたから頑張ってきたのに」
そう言う鈴さんはなんだかつまらなそうにコインを指でいじります。

――今回の被害報告。
更識楯無のプライドにちょっと傷がついたくらいで特に被害は無し。

「……ところがそうもいかないのよね～」

鈴さんが見つめるさきには大量の小さな小人のような人がいました。

あれは……わたくし？

「さっき連絡あったけど、ちっちゃいセシリアみたいなのが大量に歩いているみたいなのよ。織斑先生からみんなに『殲滅しろ』だってさ」

こうして、二分割したわたくしの事件は、大きな後処理に追われることになります。

それにしても……メズールさん、なりふり構わずキスするなんて……。

まぁ、一夏さんとキスしている時だけ、意識がわたくしだというのはみんなには内緒ですわ♪

わたくしは自分の唇の感触を思い出します。

……思わず顔が熱くなります。

またしましょうね、一夏さん♪

――次の日。

セシリアは部屋で準備をしていた。

「昨日のキスを思い出して興奮していたら遅刻ですわ～！！」

「あらあら、セシリアは慌てんぼさんね♪」

隣では魚柄のエプロンを着たもう一人のわたくしが料理をしています。

実はあの後、イズールさん達によってメダルは体外に出され、メズールさんはこの世界で暮らすことを許可されました。

しかもゼオルさんはメズールさんへのお詫びで、五感が付く特殊なメダルに改造したというのです。これでメズールさんは大喜び、ただし条件に『人の愛情を知りたければ、セシリアの母親代わりとして一緒に生活して確かめろ』との事です。

「では、いってきます……『お母さん』」

「いいの？　これは疑似的なものよ？」

「欲望に忠実なのはよろしいんじゃなくて？」

「……それもそうね。じゃ、いってらっしゃい♪」

「はい♪」

不思議な毎日が始まります。

――愛するオルコット大暴走。
――完。

――その頃。

イズールと鈴は学園の廊下を歩いていた。

「いやぁ……俺達空気だったわな」
「あたしもよ。てっきりあたしがガタキリバになるものかと思ってたわよ。せっかく決めポーズまで考えてたのに」
「しかたないだろ？　そういう筋書きになったんだから」
「……はぁ」

そんな二人の前に何かが現れた。

「ちょろいですわ！！」

「「……え？」」

ソレはゾロゾロと集まってきた。

「ちょろ」
「ですわ！」
「ちょろ～」
「ですわ～」

その数、およそ三百。

「「ぎゃぁぁぁ

第四十話　愛ずるオルコット大暴走（後編）（後書き）

ご感想お待ちしております。

第四十一話　キャノンボール・ファストの狂走者（前書き）

制作期間４時間。
やっと物語の進路が元に戻ります。

第四十一話　キャノンボール・ファストの狂走者

キャノンボール・ファスト当日。

「えっと、Ｆの４５……Ｆの４５……」

五反田蘭はマップを確認しながら頭を下げた状態で歩く。

どんっ。

「きゃっ！？」

「あら？」

座席を探しながら歩いていたら案の定人とぶつかった。

蘭は慌てて姿勢を戻すと、頭を下げた。

「ご、ごめんなさい」

「いえ、いいのよ。気にしないで」

相手の女性は美しい金髪をなびかせる……年上？　大人の魅力はあるが、背などは自分とたいしてかわらない。

「あら？　あなたも一夏の坊やの事が好きみたいね。そんな欲望の気配がするわ」

「えぇ！？」

（な、なんでバレたの！？　この人は超能力者！？）

「まぁ、ライバルは多いみたいだから頑張ってね♪　じゃあね～

♪」

女性は蘭の横を通り過ぎる。
耳にシャチの形をした耳飾りがあった。

（さ、さすがＩＳ関係のイベント。世界中から人が来るのね）

蘭はもう一度パンフレットを見る。

「……？」

そこにはさっき会った女性の写真が載っていた。

「セシリア……オルコット？」

しかし、さっきの女性は観客席に座っている。
どういうことだろうか……。
悩み続ける蘭なのであった。

――イズールｓｉｄｅ

今は二年生のレース。
どうやらデッドヒートらしい。

「サラ・ウェルキン……イギリスの代表候補生。優秀なのか？」
「そうですわ。専用機はありませんけど、優秀な方でしてよ」

ふむ、イタズラリストに追加しておこう。

さほど重要ではないが、セシリアのＩＳは現在、シャウタ化の影響により、コアが変化。メズールが協力すれば再びシャウタとなるようだ。一応『ストライク・ガンナー』は装備可能だ。

「それにしても、なんかごついな鈴のパッケージ」

「ふふん。いいでしょ。こいつの最高速度はセシリアにも引けを取らないわよ」

ふふんと、威張る鈴。

おぉ……たのもしいじゃないか。

さて……。

「こちらイズール。ガルクライフ社製の様子はどうですか？」

『こちらゼオル。入学という根本なことを忘れたマドカちゃん以外は順調だ。今全員がそちらへ向かうはずだ』

その言葉と同時に布仏本音、更識簪がやってきた。

「やぁ、おりむーにイー君」

「……こんにちは」

なんというか……のほほんさんのイナゴ兵はゴツクなって、簪さんのＧＡ－ＩＳ－ＡＣはいくつか装甲がプラスされてる。

「なんというか……すごいな」

「えへへー♪」

「……あの、私も……何か言ってほしい」

「うん……なんというか、悪役っぽい」

「がーん」

「みなさーん、準備はいいですかー？　スタートポイントまで移動しますよー」

山田先生の若干のんびりとした声が響く。

各自うなずくと、マーカー誘導にしたがってスタート位置へと移動を開始した。

『それではみなさん、一年生の専用気持ち組のレースを開始します！』

大きなアナウンスが響く。

俺達は各自位置に着いた状態で、スラスターを展開している。

しかし、俺だけはクラウチングスタートの構え。

超満員の観客が見守る中、シグナルランプが点灯した。

3……2……1……GO！！

あっという間に全員の姿が遠くなるが、俺は俺のやり方。

俺は『走る』……スラスター無しで、両手を振りながら。

「「「？」」」

観客全員が唖然となる。

それはそうだ、ブースター無しで人間と同じように『走っている』からだ。

だが、こうしないと発動しないサムスのアビリティが存在する。

シュポンッ！！

何かが点火するような音がする。

よし、あとちょっと！！

俺のＧＡ－ＰＥＤが光を纏い始める。

背中のブースターが展開する。

キュォォォォォォォ！！

「キタキタキター！！　カモン、スピードブースター！！」

【スピードブースター】

一定時間走り続けると高速ダッシュができ、最高速で接触した特定の物質を破壊したり、全ての敵に大ダメージを与える事ができる。高速ダッシュ中は無敵状態であり、回転ジャンプした場合は、着地まで攻撃判定が持続するが、段差の多い場所では使用できない。

（ｗｉｋｉ引用）

ズドォォォォォォォォォ！！

俺は一気に加速し、スピードブースターの状態に突入した。

ＢＧＭ【ルパン三世のテーマ　７９】

「ふはははは！！　もう俺は誰にも止められない！！」
観客は超加速の俺に驚く。
なにしろ走っているフォームは変わらないのだから。
まるでホセのように。

俺の前に箒が見える。
「な、なんだアレは！　は、走っている！？」
ドドドドドドドドドド！！
「ふはははは、箒よ、今こそ俺の本気を見せてやろう！！」
俺は一夏と箒のキス写真、（崩壊前の世界版）を見せる。
「な、なんだその写真は！？」
箒が咄嗟に写真に手を伸ばした。
結果、接触。
紅椿、ダメージ。
ドォォォォォォォン！！
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「ふはははははは！！」

ドドドドドドド！！

次に簪さんとセシリアを確認する。

「え、走ってる？」

「イズールさん、走ってここまで！？」

「お前らに俺は止められないぜ！！」

簪さんは重力場、セシリアはビットで妨害するが、スピードブースターが発動した俺を止められるのは直角カーブのみである。

「残念だったな簪さん、グラビティスーツで重力対策はバッチリだ」

俺は二人を追い越し、次へ向かう。

のほほんさんと鈴と一夏だ。

「な、なんだ！？」

「あれはスピードブースター！？　完成していたの……」

「う、うわ！　走ってる」

俺はアームキャノンを展開、ビームはパワービームで。

ウェイブビームなんか使ったら、確実に制御不能のコースアウトで死者が出るからこれが無難である。

ダンッ！

ダダンッ！！

三人はコースを大きく外れる。

「わっ！」
「のわ！」
「あわわわ！」

俺は三人を追い越す。

「俺は誰にも止め――」
「させるかぁぁぁ！！」

まずいっ！
鈴が体勢を直して迫ってきた。

「食らえ！！」

バシュン！

あれはグラップリングビーム！？
なんで鈴が使えるんだよ！！

「おい、俺はお前を引っ張る先頭車両じゃないんだぞ！　というかなんでお前がグラップリングビーム使えるんだよ！！」

俺はとっさにスキャンバイザーで確認する。

は？

鈴が腕を変身させて使っている！？

「てめぇ、なんか最近俺のようになってると思ったら、移植した俺の設定を完全に使いこなしてやがったな！？　なんで黙ってた！！」

「そのほうが面白いからに決まってんでしょ！？」

俺は止まれないので、鈴をぶら下げたまま走る。

「うぉぉぉ

鈴は背中に俺と同じブースターを展開、いや、変身してスピードブースターを起動する。
もはや機械的ではなく、足による戦いとなった。

ドドドドドドドド！！
ドドドドドドドド！！

「チェリオォォォォ！！」
「コナクソォォォォ！！」

白熱するバトルレース、それが二週目にはいったときに、異変はおこった。

「真打登場。俺の名前はＺＥＯ」

上空にサイレント・ゼフィルスとシルバリオ・ゴスペルを足したような機体が現れ、俺と鈴に攻撃する。
しかし、今は無敵の暴走特急と化した俺達には効かない。

「「邪魔すんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」

俺達は腕をアームキャノンに変形させて、俺はスーパーミサイル。
鈴はアイススプレッダーを発射。

見事命中。

「ごあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

俺達はレースを再開しようとしたが、コースが大破していたため、スピードブースターの効力が切れた。

キキィィィィィィィィィィィィ！！

キキィィィィィィィィィィィィィィィィ！！

「……鈴、わかってるな？」

「わかってるわよ。あたしらの勝負潰したらこうなるのよ」

「「――よし、殺そう♪」」

――続く。

第四十一話　キャノンボール・ファストの狂走者（後書き）

ご意見ご感想など……ください。

第四十二話　ＩＳ学園対ＺＥＯ軍団（前書き）

今回登場の転生者をいつも感想をくれた真っ白い布さんへ捧げる。

第四十二話　ＩＳ学園対ＺＥＯ軍団

前回のあらすじ。
チフユサンダー・ＺＥＯ襲来。

「「よし、殺そう♪」」

俺達の前でＺＥＯが立ち上がる。

「はん、正義の味方の癖に粋なマネしてくれるじゃないか。おかげで肩こりが直ったわ。だが、どうやらお前達は俺を本気にさせたようだ」

パチンッ！！

ＺＥＯは指を鳴らした。

「ＺＥＯ軍団、総力戦だ！！　全員集結！！」

ジリリリリリリ！！
バシュゥゥゥゥゥ！！
バリリリリリリリ！！

空間が歪み、大量の無人イナゴ兵、ゴ・ダンダー、チフユサンダー達が現れた。

「全員、攻撃開始！！」
全員がこちらに向かって動き出した。

『学園ＩＳ所持者はこれを迎撃してください』
「「「了解！！」」」

ＩＳ学園
ＶＳ
ＺＥＯ軍団

それにしても敵の数が多い。
「鈴、今回は小細工無しの本気でいくぞ！　ハイパーモードは使えるか？」
「流石にフェイゾンは無理よ！」
「じゃあ、普通に迎撃しろ」
「わかった」

――ハイパーモード、起動。

ピピピ♪

「はい、こちらイズール」

『こちらゼオルだ。前にギガハイヴで沈んだイナゴ兵が流用されている。数が多いのでガルクライフ社が学園全員の指揮をする』

「了解！！」

ズドンッ！！

ドドドドド！！

バンバンッ！！

アリーナ全体が戦場と化している。

逃げ惑う人々、冷静に対処する学園生徒と先生達。

『イズール、ダークサムスの能力【ダークエコーズ】を使え！』

「オッケー！！」

俺はフェイゾンを全開にし、フェイゾンで出来た自分の分身を二人作り上げた。

「ダブルが駄目なら――」

「「「トリプルだ！！」」」

『各自、散開！！』

「「「イエッサー！！」」」

――イズールside　end

――箒side

くそっ、数が多すぎる！

ピピピ♪

「む？　通信？」

私は回線を開く。

『こちらはガルクライフ社のゼオル。聞こえるか？』

「ゼオルさん！？」

『どうやら無事のようだな。今から我々が全員のサポートをする。こっちも総力戦だ！　我々の増援が到着するまで持ちこたえてくれ』

「わかった！」

私は迫ってきたイナゴ兵を切り裂く。

ザシュンッ！

ドカァァァァァァァン！！

『修理費などは気にせずどんどん破壊してくれ』

「言われなくてもそのつもりだ！」

キュィィィ

そういえばなんであの兵器の名前がわかった！？
それにこのデジャヴ……。

「箒！　ボーっとするな！！」
「す、すまない！」
『こっちにイナゴ兵３体が来るぞ！！』

ダダダダダダダダダダダ！！
無人イナゴ兵はライフルで攻撃する。
それを私たちは回避し、迎撃する。

『ＺＥＯのビット、５機』

ヒュンッ！
ビシュン！

一夏のシールドでガードし、私が迎撃する。

「まずい……完全な消耗戦かもしれない」
「たしかに、ゴスペルやあの巨大ＩＳの比じゃない」

『まだ来るぞ！　ゴ・ダンダー３体、イナゴ兵２体！！』

くそっ、ワンオフが使えれば……。
まてよ？
紅蓮椿！
あれがあれば！！

「ゼオルさん！　紅蓮椿のパーツを送ってください！！」

『無理だ、空中換装機能なんてあれには搭載されてないぞ！！
……いや、戦艦で急ピッチにＦ１のように整備すれば……可能だ！！』

私のモニターにルートが表示される。

『艦隊がそちらに接近したら合図する。そしたら箒ちゃんはその中でパーツを換装、いい――ッ！？　ＺＥＯのサイレント・ゴスペルが来るぞ！！』
「「何！？」」

キィィィィィィィィィィィィィィンン！！

「……殺！！」

ズダンッ！！

一夏はＺＥＯの両足蹴りの直撃を受けた。

「ぐぁぁぁぁぁ！！」
「一夏ァ！！」

ズドォォォォォォォォォォォォォォオン！！

「よそ見はいけないよ♪　とっとと死ね！！」
「させるかぁ！！」

私はＺＥＯに斬りかかる。

「そんなんじゃ通販の穴あき包丁の方が魅力的だ」

ガシッ！！
ＺＥＯが私の剣を持つ両腕を掴む。
「チェックメイト！」
ググググググ……ガキンッ！！
しまった！　隠し腕か！！
バキンッ！
バリバリ！！
ベキンッ！！
「紅椿が！！」
相手の隠し腕にはビーム状の爪が付いており、紅椿の装甲を引きちぎり、切り裂く。
「やめろぉぉぉぉぉぉ！！」
「一夏、よせ！！」
雪羅がサイレント・ゴスペルに攻撃しようとする。
「はん、こざかしいわ！」
バキンッ！！
ＺＥＯの首から黒い腕が生え、一夏の頭を掴み、壁に叩きつけた。

ズガン！！
ググググググググ……。
「が、がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
黒い腕に青い光が灯る。
フェイゾン！？
このままでは一夏が……死んじゃう！！
「や、やめろ！！　私はどうなってもいいから一夏だけはやめてくれぇぇ！！」
「表舞台で称賛浴びているようなお前達なんぞ生かしておく必要はない。そこまで言うなら……ほれ！」
ＺＥＯは私にリボルバー銃を渡した。
「今、一夏の絶対防御は外れている。そしてその銃の弾は６発の内１発が空砲だ。それを一夏へ向けて撃て。空砲だったらお前達の勝ちだ」
「！？　そんなことできる訳――」
「残念だ～♪　本当は全部空砲だったのに～♪　かわいそうな一夏君。ちゃんと銃を確認しないで怒鳴った箒ちゃんのせいで――」
ガチャンッ！！
足の装甲が展開し、青い光を纏う。
「死んじゃいましたとさ♪」
「や、やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

フェイゾンの光が一夏を襲う。

ダァァァァァァァァァァン！！

「あ……あぁ……うわぁあぁぁあぁぁ！！」

「ふはははは！！　これで……これでこの世界は……あん？」

煙が晴れるとそこには、チフユサンダー達がいた。

０１『言ったはずだぞ？　私たちは一夏を――』

その他『愛していると！！』

「やっぱり裏切りやがったな？」

０１『最初からゼオル様の破片程度のお前が気に食わなかっただけだ。覚悟しろ！！　……といっても、今のはダメージがデカいな』

バシッ！！

シュバッ！！

グググ……。

０１『これより我々下級空想世界侵略兵器は、空想世界侵略規定に基づき、空想世界を滅ぼそうとするお前から離れ、反逆する！！

チフユサンダーズ、ヒィィィィトアァァァァァァァップ！！』

その他『おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！』

お前達……。

――箒ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

みんなが戦っていると、急に戦局が変わった。

『こちらゼオル。敵の大部分がこちらに寝返った。親玉を叩くチャンスだ！』

「りょ、了解！」

するとラウラがこっちに来た。

「今のは聞いたな？　行くぞ」

「うん！！」

俺達は一夏達の元へと向かった。

続々とＺＥＯの付近にＩＳ学園軍団が集まってくる。

０１『おとなしく投降しろ！！』

「はん、お前達が裏切る事はとっくのとうに予想していたところだ！！」

パチンッ！！

ＺＥＯは指を鳴らした。

「こいっ！！　【真っ白い布の転生者】！！」

ズドォォォォォォォォン！！

「な、なんだ！？」

ダークエコーズを元に戻していると、何か嫌な予感が駆け巡った。

空から棺桶が降ってきて、地面に突き刺さる。

ガチャ……。

棺桶が開き、白い布に包まれたミイラのような物が現れた。

「そしてこれが……スコールの主設定とテンプレの神様三人、転生者二人の主設定だ。それも長く更新されてない物だから怨念が溜まってるぞ～♪　あとは【杉田のラウラ愛】も追加しよう」

ヒュンッ！！

ＺＥＯはビー玉のようなものを投げた。

チャポン！

タポン！

ポチャン！

まるでコアメダルのように投げ込まれる。

ドクン……ドクン……！！

「さぁ、後はまかせたぜ」

「ま、待て！！」

ギュォォォォォォ！！

ＺＥＯは空間の歪みへと逃げた。

『こちらゼオル。総員戦闘配備！！　今回はまずい、ウォルツも投入するぞ！！』

ドクンドクンドクン！！

何か来る！？

ミイラの布が取れ、男から女の姿へと形を変える。

『……アァ……ガァァァァァァァァァァァァァァァァ……はぁっ！！』

侵略歌謡転生者
【真っ白いナニカ】

侵略歌謡転生者
【真っ白いナニカ】
ＺＥＯが究極空想生命体の実験台として作り上げた変異転生者。
元になった【真っ白い布の転生者】という転生者の素体が大きく変化している。
性別、能力、戦闘能力が大幅に変異強化されて、全てが不安定。
何人もの人格が込められているので思考能力が定まらず、知能は低い。
彼女は歌を歌うが、その歌声は周りの有機物や無機物の設定を不安定にさせる。
イナゴ兵は歌声で操ることが出来る。
空想世界間の移動が可能。

感想が多かったユーザーネーム【真っ白い布】さんへ感謝をこめて作った作者からの贈り物でもある。
歌はユーザーネーム【杉田】さんのラウラへの愛を作者が独自解釈したもの。

『ラ～、ラララ～、ララララッラ～♪』

ジリリリリリリリリ……。

ビリリ……。

突然、気分が悪くなる。

自分の腕を見てみると、腕が文字の集合体に変わろうとしている。

他のみんなにも同じような症状が出ている。

「な、なんだよこれ！！」

「あ、あたしの体が……！？」

俺と鈴。

「オウェ！！」

「く、くぁあぁあぁ！」

「わたくしの体が！！」

「僕……苦しい！！」

「あ、ぐぁあぁあぁ！！」

一夏、箒、セシリア、シャルロット、ラウラも同じ症状が出ている。

くそっ、キャラクターには効果絶大の最終兵器ってやつか！？

「あ……ぐぁあぁ」

「い、いやぁあぁぁ！！」

千冬先生や山田先生もダメか。

「くぅぅ！！」
「嫌だ！　痛いよ……苦しいよぅ……」
簪さんやのほほんさんもダメか！！
他のモブ生徒はダメージが大きい。
『ラララ～♪　ラララ～♪』
ジリリリリリリ！！
バチリッ！！
すると、無人イナゴ兵が動き出し、セシリアに発砲する。
ダンッ！！
バリィィィィン……。
絶対防御が薄いガラスのように割れ、そのままセシリアの腕を貫く。
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
セシリアの絶叫が木霊する。
セシリアの腕がガラスのように粉々に砕け、血の代わりに無数の文字――設定の砂が飛び散る。
兵器や肉体の設定が不安定なんだ……だから防御も何もあったもんじゃない！！
「……はぁ……はぁ……」
「せ、セシリア……」

俺の声帯まで不安定になってる……。
なんだよこの転生者殺しは……転生者どころか空想世界の人間全員殺せるじゃないか。
こんなのがただの実験体？　ふざけるな、こんなのがあったら魔力ＳＳＳも身体能力強化もエクスカリバーもアンリミデットブレードワークスも仮面ライダーも何もかもが不安定の超弱体化じゃないか。
チフユサンダーも影響を受け……てない！？
０１『我々は……ガガ……ブ……無事……』
訂正、無事じゃない。
ガチャン……。
イナゴ兵の一体が俺に銃を向けた。
「……ここまで……なのか……」
意識が遠くなる。

――BANG！！

銃声が響いた。

――続く。

第四十二話　ＩＳ学園対ＺＥＯ軍団（後書き）

感想をください。

……それにしても準ラスボスでこの能力は強すぎでしょうか？

第四十三話　（無題）（前書き）

今回ちょっと忙しくて更新が遅くなりました。
申し訳ございません。
今回は前回の続き。
超展開あり……かもです。

第四十三話　（無題）

雨が降っていた。

「……あれ……俺って……どうなった？」

自分の着ている服は冬物で、傘を持っている。
目の前では何かが燃えている。

「……」

何かの絵だ。
子供が描いたようなヘタクソな絵。
金色の鎧を纏った剣士のようだ。
雨に濡れながら燃える絵の上の部分に名前が書いてあった。

「ミスター……Z（ゼット）？」

俺は思い出した。
このキャラの名前は……後に『ゼオル・ゲバイン』に変わる。
イラストは声出さずに燃えていく。
当たり前だ。
これはただの絵だ。意思はないし、声も出さない。
たしか数年たった後にこれを見つけて、黒歴史として恥ずかしくなるから燃やしたはずだ。
仮面を被ったミスターZは灰になる。
その時の表情や感情は分からない。

「そうだ……バルゼッタもゼオルも……俺が……」

灰が舞い、雨で火の威力が弱まり……消えた。
そして溜まった水たまりには……。

「……」

ゼオルが愛する少年と、それが変り果て、憎むべき存在となった青年の顔が映っていた。
これがゼオルの誕生。

ＩＳ学園のドッペルゲンガー
【第４３話　（無題）】

――ＢＡＮＧ！！
銃声が響いた。
敵の無人イナゴ兵に穴が開く。

「……マドカ……ちゃん？」

そこには笑顔の織斑マドカがイナゴ兵を展開して立っていた。

「大丈夫？　何だかうなされてたけど」

みんなが苦しんでいる中、マドカちゃんは平気で立っていた。

「俺……思い出したよ。俺を作ったヤツの正体、ゼオルの正体……あと真実も」

すると、マドカちゃんはニッコリと笑う。

「そっか……なんだか知らないけど、良かったね♪」

「そういえば……なんで平気なの？」

「“無設定”だから♪」

「あ……なるほど。不安定になるものが無いのか」

マドカちゃんは軽々と動く。

「音には音で対抗だよ！」

すると、マドカちゃんは俺が前に使った事のあるサウンドスフィアを展開し、手拍子をする。サウンドスフィアが共鳴して音を出す。

パン！
パン！
パパン！

『ラ〜……？』

敵の動きが止まる。

「さぁ、イズールさんもいっしょに」

「お、俺もか？」

パン！
パン！
パパン！

「みんなも一緒に♪」

パン！
パン！
パパン！

「チャッチャッチャチャッ♪」

パン！
パン！
パパン！

すると、会場の生徒達の不安定化が止まり、みんなで手拍子を始める。

「オ・ラ・ラ♪」

パン！
パン！

パパン！

「「オ・ラ・ラ♪」」

パン！
パン！
パパン！

「「「オ・ラ・ラ♪」」」

パン！
パン！
パパン！

苦しんでいたみんなが立ち上がる。
いつのまにか、みんなはマドカちゃんのバックダンサー状態になっていた。

「さて、このサウンドスフィアの音は相手の歌の反存在で、打ち消すことが出来るみたいだよ？　流石ゼオルさんの知り合いの発明品。色々奇抜だね♪」
「そ、そんな効果があったのか！！」
「それじゃあ～、レッツプレイ！！」

無設定
【織斑マドカ】ｗｉｔｈ　ＩＳ学園軍団

ＶＳ

侵略歌謡転生者

【真っ白いナニカ】　ｗｉｔｈ　イナゴ親衛隊

『ラ……ラララ～！？』

サウンドスフィアの音が敵のリズムを崩す。

□ニュース速報□

設定不安定歌の最終発動を阻止しました。

「さぁ、私が歌で妨害している内に攻撃再開だよ♪　ラ～ラララ～♪」

「わかった！」

ＩＳ操縦者でイナゴ兵を薙ぎ払っていく。

バキン！

ドカン！

ズガガガガガガ！！

『あ……あぁあぁぁあぁ！！』

敵の体にノイズが走る。

設定が不安定だから……崩壊の前触れか！？

「よくも一夏を！！」

ザシュン！！

箒が切りつける。

敵の設定が不安定なので、ダメージ判定がおかしい。

『ギガガガガ！！』

すると、設定が不安定な敵は変異した。

『ラ～、ララ――』

「ラ～ラ～ラララ～♪」

マドカちゃんがうまく妨害しているようだ。

ビキンッ！

敵にヒビが入る。

もはや設定が不安定で体を保てないのだろう。

『ラ……ララ～……』

ボロボロ……。

『ギャァァァァァ！！』

「な、なんだ？」

周囲が一気に設定の砂と化し、真っ黒になる。
敵の姿も消えた。

「……」

全員で警戒する。

ザシュンッ！
バシュンッ！

謎の音と共に無人イナゴ兵が消えていく。

「くそう……周りが見えねェ、全員警戒おこたるなよ」
「「「了解！！」」」

マドカちゃんは歌を歌い続ける。

「ラ～ララ～♪」

周囲の暗さが無くなり、全員で周囲を見た。
なんというか……廃墟だ。
これは……学園？
どこかで見たような……麻帆良？
そしてそこに立つ謎の青年……？

『ギ……ガガガ……』

背中からは無数の腕、周囲には巨大な機械の手が地面を太鼓のように叩いていた。

デン……ドン……ドン……ドン……。
デン…ドン……ドン……ドン……。
デン…ドン…ドン…ドン…。
デンドンドンドン！
デンドンドンドン！

『ギャララララララララ！！』

設定バグ
【真＊＃ｉナ％ｋ】

設定バグ
【真＊＃ｉナ％ｋ】
ＺＥＯの不完全な実験によって生まれた設定バグ。
戦闘に特化している。
各腕には魔力があり、少しの攻撃だけでも骨までダメージが響く。
ＦＦの魔法が使えるらしいが、バグで変異して原型を留めていない。
なぜか異様にラウラを付け狙う。
外見は、グラフィックのバグったキャラクターのような醜い姿。

『ギリャア！！』

設定バグがラウラを狙う。

「ラウラ、避けろ！！」
「何！？」

ズシャァァァ！！

ラウラが設定バグによって投げ飛ばされる。

「うわぁぁぁ！！」
「ラウラ！　この野郎！！」

俺はハイパーモードを起動して攻撃する。

しかし、相手は透過して回避した。

『クケケケ……』

俺はバイザーのモードをサーモバイザーに切り替え、熱探知で相手の姿を確認した。

「そこだ！！」

俺のハイパービームが命中する。

ビシュゥゥゥゥゥ！！

『イギャァァァァァァァァ！！　ラ～ラララ～♪』

ビキビキ！！

バチリッ！！

またみんなの体に悪影響が現れた。

「お……ぐふぉ！」

「みんな、任せて！！」

マドカちゃんがイナゴ兵で援護する。

ズダダダダダ！！

『……！？』

設定バグは回避し、ラウラを追う。

『ラウラァァァァァ！！』
「く、来るな！！」
ラウラはＡＩＣで相手を封じる。
『……アイ……シテイル……』
「近寄るな変質者！！」
ラウラの背後に機械の手が現れる。
「な、しま――」
ズガンッ！！
機械の手はチフユサンダーに破壊された。
０１『油断大敵だぞ？』
「すまない、助かった」
チフユサンダーが援護している間に俺は設定バグに向けてハイパーミサイルを放つ。
ズドォォォォォン！！
設定バグを構成している設定にダメージが入る。
チフユサンダーや主要メンバー全員で攻撃を与える。
俺も出し惜しみなしで攻撃する。

『……ギャラ……ガガガガ！！』

設定バグは背中の触手腕を飛ばしてきた。

他のみんなは切り落としているようだが、俺には斬撃武器は無い。

「ヤバ！！」

ザシュンッ！！

「イズール、油断大敵よ。今度模擬戦でもする？」

「流石鈴、そこに痺れる」

俺達はすぐに散開して設定バグを攻撃する。

設定バグは疑似麻帆良学園を駆け抜け、飛び回る。

全員がミサイルなどの誘導弾で攻撃。

それを他の腕などを使って回避する設定バグ。

０１『イズール、ヤツの動きを止められるか？　いい案がある』

「わかった、いいのがあるぞ」

俺はハイパーモードを解除して、アイスビームを展開。

アイススプレッダーを放ち、命中させる。

『ガガガッガ！！』

設定バグは凍りついた。

０１は千冬先生に話しかける。

０１『今回は緊急事態だ。オリジナル、お前も協力しろ』

「む……わかった。何をすれば良い？」

すると０１は千冬先生にラグビーボールのようなものを渡した。

０１『これは千冬の設定を持つ者十人で発動させる大技だ。今号令を出す』

０１は叫んだ。

０１『全員集合！！』

チフユサンダー各員が集まってきた。

シュバッ！

バシッ！

ググググ……。

０１『我らチフユサンダーズの最終奥義。１０がいなくなった事により随分封印された必殺技！！』

シュビンッ！

０１『チフユサンダー・ハリケーン！！』
０２『チフユサンダー・ハリケーン！！』
０３『チフユサンダー・ハリケーン！！』
０４『チフユサンダー・ハリケーン！！』
０５『チフユサンダー・ハリケーン！！』
０６『チフユサンダー・ハリケーン！！』
０７『チフユサンダー・ハリケーン！！』
０８『チフユサンダー・ハリケーン！！』
０９『チフユサンダー・ハリケーン！！』

？説明しよう、チフユサンダー・ハリケーンとは、チフユサンダー１０が戦隊シリーズを見て思いついた必殺技であり、十人の千冬の設定を持つ者に触れることでエンドボールを発動、敵に命中させることで必ず爆散させるという物である。

０１『チフユサンダー・ハリケーン――』
０２『ラウラ！！』
０３『ラウラ！！』
０４『ラウラ！！』
０５『ラウラ！！』
０６『ラウラ！！』
０７『ラウラ！！』
０８『ラウラ！！』
０９『ラウラ！！』

０１『Ｇｏ！！』
その他『おぉぉおぉぉぉ！！』
チフユサンダー達が一斉に走り出した。
０１『オリジナル、そのボールを０９に投げろ！！』
「こ、こうか？」
ダンッ！！
千冬さんの蹴りでボールが０９へ飛んで行く。
０９『ぜろはちさん、パスです』
飛んできたボール０８へ蹴る。
０８『オゥ、ゼロナナサンニパスデェ～ス！！』
次に０７へボールが飛ぶ。
０７『今日はうな重――０６！！』
０６『まかせな！！　０５！！』
０６は飛んできたボールを回し蹴りで飛ばす。
０５『はわわ！　０４、パスですよ！』
０４『……うん』
バシッ！！

０４は０５がキャッチしたボールを弾き飛ばした。

０３『ふふふ……ヤツは私の中に眠る暗黒龍を目覚めさせてしまった。行けッ！　０２の元へ！！』

飛んだボールを０２がキャッチし、地面へ突き立てる。

０２『０１、クラウディングトライだ！！』

０１『オッケー！！』

０１はバック宙でボールを蹴った。

０１『エンドボール！！』

ボールはラウラ……の姿に変わって設定バグへと飛んで行った。

『ラ……ウラ……？』

「ふん、お前は醜いな」

『ラウラ♪』

設定バグはラウラを持ち上げ、喜ぶ。

『？』

設定バグはあることに気付いた。

『こ、こいつはラウラじゃない！！　リリカルなのはの戦闘機人、チンクだ！！　う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――』

ズドォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！

俺は爆散する設定バグを眺めた。

「……なんだこれ？」

ゴレ○ジャーの原作のように理不尽で理由不明な爆発だった。

※本当にゴ○ンジャーの敵はこのような意味不明なパターンで爆散します。

その場にいた全員が唖然としていた。

準ラスボスがこんな死に方でいいの？

カツン……コロコロ……。

「……」

ベキャンッ！！

濁った主設定が転がってきたので、とりあえず踏みつぶした。

グキン
バキン
メキョメキョ

周囲の風景が元に戻って行き、敵の設定バグは人の姿に戻る。

「あれ？　俺……」
「えっと……お前誰だ？」

明らかに原作に存在しない青年がそこにいた。
頭には天使の輪が付いていた。

「随分ほったらかしにされてると思って久しぶりの出番だったんだけど、なんかよく分からずに出番終了みたいだね」
「いや、だからお前誰だよ」

謎の青年はふわりと宙へ浮かぶ。

「あ、ごめん。もう時間だ。向こうの世界に帰らなきゃ」
「だからお前誰だよ！！」

謎の青年は天高く飛んで行った。

「じゃあな～、助けてくれてありがとうな～」
「だからお前は何なんだよぉぉぉ！！」
青年は結局、正体を明かさずに天へ召された。

「イズール、あたし疲れた」
「……俺も」
俺達はこの後、一夏の誕生日開始まで頭を悩ますこととなった。
俺達の勝利だ。
……だめだ……オチねぇ……どうしてくれるんだよ、チフユサンダーズ。
完全にムード持っていきやがった。

――続く。
あ、終わった。

第四十三話　（無題）（後書き）

ご感想……ください。
次回で6巻終了の予定です。
8巻……出ないなぁ。

第四十四話　決戦後の休息（前書き）

今回で６巻終わらせるつもりでしたが、書く時間が少なかったので次回まで６巻は続きます。

第四十四話　決戦後の休息

前回までのドッペルゲンガーは？

前回、ＺＥＯが実験で誕生させた転生者【真っ白いナニカ】は設定バグとなって学園生徒に恐怖をもたらすが、千冬軍団によって撃破される。

後に分かったことだが、あの転生者は『ネギま！』の二次創作サーバーで活躍していた転生者をコピーして改造した存在ということが分かった。

（イズールの日記より抜粋）

ここは一夏の家。

一夏の知り合いと俺達が集まっていた。

「ハッピーバースデイ！　おめでとう！！」

「イズール、近所迷惑になるからデカい声出すな！！　というか人数多すぎだろ！！」

そう、ここにはチフユサンダーを含めた全メンバーがいたのである。

「気にするなよ～、だからお前はヒトナツな～のだ～」

「いや、そんな状態じゃないからな！？」

現在、一夏の家の中はツイスターゲームのようになっていた。

０８『オゥ、クルシ～デ～ス』
「お前は余計に腹立つから黙って――」

以下省略。
結果、一夏の家でのパーティでは限界状態。
俺を含めたガルクライフ社メンバーは場所を変更。

――ガルクライフ所有温泉施設。
――特別宴会場にて。

「つ～わけで、一夏の誕生日に便乗して乾杯！」
「「「かんぱ～い！！」」」

メンバー紹介。

イズール・ユ・ミヅル。
ゼオル・ゲバイン。
ウォルツ・ゲバイン。
凰鈴音。
山田真耶。
織斑千冬。
オータム。
黒猫ラウラ。

メカヤマダ。
チフユサンダーズ。（０８はセシリアに用があるようなので欠席）
ゴ・ダンダー。

「あれ、そういやメズールは？」
「メズールさんはセシリアさんの所です」

山田先生が答える。
なるほど……まて？　簪さんはどこ行った？

「あぁ、簪さんなら『7巻の準備する』って言ってたわよ」
「やっぱり読んでやがったのか！」

俺は黒猫ラウラを見る。
今日は人間モードだ。

「私に何か付いているか？」
「いや……そうじゃないんだが」

俺は黒猫ラウラの食べている物を注目した。
玉ねぎ……つまりユリ科の植物などだ。

「お前……平気なのか？」
「うむ、元が人間だから平気だ」

そ、そうなんだ……。

すると、ゼオルさんが話しかけてきた。

「イズール、今回の事件によって、世界のパワーバランスの崩壊

が決定的となった」
「どういう事ですか？」
「良く考えてみろ。性格は違うが織斑千冬と同じ適正で能力の高いＩＳ操縦者が９人。メカヤマダやマドカちゃんも加えると１１人がフリーの無所属だ。国際ＩＳ委員会の連中が黙っちゃいない。メズールも例外ではない。まぁ、メズールは奴らに気付かれてはいない」

国際ＩＳ委員会……久しぶりに聞いたな。

０１『ふん、我々のこの世界での任務は終わったようなものだ。もう、この世界の誰にも従うつもりなどは無い』
「それならいいんだがな」
０１『安心しろ、ゼオル様には従うさ』
「そりゃどうも」

俺はゼオルさんの会話をよそに大皿の寿司を橋で摘まもうとする。

ガシッ！！

「「あ」」

俺と鈴の視線が合う。

「寄越せよ……サーモン」
「渡しなさいよ……サーモン」

ちょっと顔が引きつる。

「あんたの設定は傷が早く治ったりして便利だけど……好みも同

じになるようね」
「俺も初耳だ」
まさに一触即発。
サーモンを巡る戦いが今始まる。
「……黙って食え」
ウォルツγさんの睨み。
「「すんませんでした！！」」
それは見事な土下座だったという。
「じゃあ……俺はネギトロ食うよ」
「うん……譲ってくれてありがとう／／／／」
「鈴、そこは顔を赤らめるシーンじゃないぞ？」
「え、そうなの？」
完全に俺化してないか？
――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ
ここでみんなの様子を見てみよう。
まずは山田先生から。

「……」
メカ『どうしました？』
山田真耶はメカヤマダをじっくり眺めていた。
「あの……夏休みの時、私の仕事片づけたのって……」
メカ『あぁ、私ですよ』
「えっと……その時のお礼です。ありがとうございました」
山田先生はメカヤマダに頭を下げた。
メカ『き、気まぐれですからそんなに頭を下げないでください！』
オロオロと慌てるメカヤマダ。
「あの……後で一緒にお風呂入りませんか？」
メカ『あ、いいですね。ここのドリンクはおいしいんですよ～♪』
「あ、それは楽しみです♪」

次に織斑千冬。
チフユサンダーズに囲まれていた。
「……本当に似ているな」
０３『ふん、やっと私の内に眠る闇の波動に気付いたか』
「……性格以外は」
０２『いや、性格似てる奴はいるぞ』
「誰の事だ？」

０２『普段の喋り方をやめた０８』
「０８？」
０２『普段、エセ外人みたいな口調の個体さ』
千冬は思い出す。
「あ～、あいつか」
０２『ま、あいつは今一夏の家にいるセシリアに用があるって言ってたがな』
０２はちびちびと水を飲む。
「お前達は飲食できるのか？」
０２『ああ、出来るぞ。ちゃんと味も理解できる』
それを聞いた千冬は缶ビールを持ち出した。
「なら……飲まないか？」
０２『あ……いや、私は飲まないんだ』
０７『実はコイツ性格荒いくせに下戸……つまりお酒が苦手なんだ♪』
「そ、そうなのか？」
０２『あ、０７！！　お前余計なことを――』
ピッ！
イズールの常とう手段、『雫飛ばし』を発動。
ビールの雫が０２の口の中に入った。
バタンッ！！

０２撃沈。

０７『ねぇ千冬』
「なんだ」
０７『……一緒に飲もうよ』
「ふ、いいだろう」

二人は缶ビールを飲む。

０７『あまり飲みすぎも駄目だよ。お風呂で寝ちゃうから』
「わかった」

「「乾杯」」

カツン！

缶どうしがぶつかる音がする。
二人は月を酒の肴にして飲む。

０７『夜空……綺麗でしょ？』
「あぁ、まるで日本じゃないようだ」
０７『うん、ここは日本じゃないもん』
「どういう事だ？」
０７『ここはガルクライフの……いや、やっぱり気にしないで』
「……わかった」

０７は近くから皿をだした。

０７『月見てお酒飲むのもいいけど……私は風景じゃなくて食べ

物が酒の肴だな。食べる？　焼き鳥だけど』
「いただこう」
二人は皿から焼き鳥の串を摘まむ。
コリコリと軟骨を食べる音が響く。
「……うまいな」
０７『私が作ったんだ。千冬もやろうと思えば料理出来るのに……そんなに一夏の料理が好きなの？』
「うっ！！　やはり……そういうのは姉として変なのだろうか？」
０７『いや、変じゃないよ。弟をちゃんと心配している時点で立派なお姉さんだよ』
「その根拠は？」
０７『だって私の親戚のグレートちゃんが現れた時とか動揺してコーヒーに塩入れそうになった事を回避しようとして粉ゼラチン入れてたじゃん』
「な、なぜそれを知っている！？　誰にも話してないぞ！！」
ちょっと千冬の顔が赤くなった。
０７『だってそのゼラチン用意したの私だもん』
「……」
千冬はうなだれた。
０７は鳥の軟骨をコリコリと食べている。
「しかし……この焼き鳥は軟骨しかないのか？」
０７『私の趣味。何かリクエストある？』
「では、お茶漬けはあるか？」
０７『お茶漬け……、大丈夫だよ』

「それにしてもなぜガルクライフ社の連中は料理に凝っているんだ？」
０７『おいしい料理はいろんな人とコミュニケーションが取れる……ゼオル様がいつも言ってたんだ。だからガルクライフ社の大体が料理できるんだよ』
「たしかに、言葉が通じない国などでは一種のコミュニケーション方法か……私も習うべきか……料理を」
０７『一夏が独り立ちするまでには覚えておいた方がいいね』

０７はクスクスと笑った。
そして０７はお椀を取り出し、ご飯を入れ、わさびの乾燥粉末と海苔を入れる。

０７『あ、千冬は辛いの大丈夫？』
「それなら大丈夫だ」

それを聞いた０７は梅干しを入れ、熱いだし汁を注いだ。
ご飯は少し冷めていたのでだし汁の熱さが丁度良い。

０７『はい、お待ちどうさま』
「いただきます」

ズズゥゥ……。

お茶漬けの汁を飲む。
汁に溶け込んだわさびがだし汁と混ざっていい風味を出していた。

「……もしかしたらお前が一番一夏の嫁として相応しいかもな」
０７『たしかに一夏は好きだけど、料理は作るよりも食べるほうが好きだよ。ははは！』

なにげない会話と食事。
なぜか千冬と07は仲良くなった。
ゼオルの教えは……あながち間違いではないようだ。

――大浴場にて。

イズールはいつもの通りに鈴の姿に変身して本物の鈴の背中を流していた。

「はい、両手をバンザイして」
「うん」

イズールはゴシゴシと鈴の背中をタオルで擦る。

「イズール！　日本の風呂ってスゲーな！！」
「オータム……お前は観光に来た外国人か！？」

オータムの意外な一面発見。
イズールは鈴の髪を洗い始めた。

「毎回思うけど……なんでこんなに髪の手入れとかうまいの？あんた女らしいわよ」

イズールの手が止まる。

「……女らしいか。じゃあ逆に聞くけど、男らしさってなんだ？」

「ん～……わかんないや」
「じゃあ、鈴の質問の答えもそれな」
「え～、ずる～い」

イズールは鈴の髪を洗うのを再開した。
織斑千冬と山田真耶はその光景を眺めていた。

「先生方はいいんですか？　俺に裸見られても」

「馴れたからな」
「馴れてますから」

「そ、そうですか……」

「見ろイズール！　窓から月が綺麗に映るぞ！！」
「オータム、お前は落ち着け！」

千冬がイズールに話しかけた。

「なんだか恋人というよりは仲の良い兄妹に見えるぞ？　いや、今の姿だったら姉妹か」

少し笑う千冬。
イズールと鈴は少し照れた。

「たしかにこれじゃあ姉妹ですねw」
「あたしもそう思うわw」

ザバァ……。

鈴の髪を流し、二人は湯船に浸かる。

「「ふぅ……」」

「本当に姉妹ですね♪」

山田先生が微笑んだ。

少しの間、みんなは無言になる。
重い空気ではなく、みんなお風呂を楽しんでいるからである。
すると、山田先生が鈴状態のイズールを後ろから抱きしめた。

「!?　や、山田先生!?」
「私にもこういう妹がいたらなぁ～と思いまして。少しいいですか？」
「……いいですよ♪」

その様子を見る鈴。

「あ、イズールだけいいな～。千冬さんもあたしにやってください」
「織斑先生と――いや、今は関係ないか。でもなぜ私なんだ？」
「あたしには兄や姉はいないし……他世界だとあたしに兄弟がいたりするんですけどね。だからちょっと甘えたくて。母も父にも今は甘えられないですから」
「他世界？」
「あ、その部分は気にしなくていいですよ」
「そ、そうか……なら……やってやろう」

千冬は鈴を抱きかかえた。

「うん、悪くない」
「……複雑な感情だな」
その光景を見るイズール。
「千冬先生が父で、山田先生が母で……俺達が姉妹みたいですね」
その言葉を聞いた各自の感想。
「あ、それいいかも」
「わ、私が父役なのか！？」
「織斑先生が……私の旦那さん……／／／」
ちょっと山田先生に脈ありだったりする。
０５『あの～、みなさん？』
「「「「？」」」」
０５の言葉に気付いて振り向く四人。
０５『みんな……のぼせてるようですけれども』
周囲には屍の山があった。
「オータム……はしゃぐから……」
「んじゃ、そろそろあがろっか」
「山田君、私たちもあがろう」
「はい、織斑先生」

こうしてイズール達のｓｉｄｅは終わるのである。
次回は一夏の誕生日の様子である。

――続く。

第四十四話　決戦後の休息（後書き）

ご感想お願いします。
後、この人の隠しエピソードを聞きたいというリクエストも募集します。

第四十五話　一夏の誕生日だＺＥ（前書き）

今回で６巻の終了です。
７巻は相当原作とズレます。

第四十五話　一夏の誕生日だＺＥ

ここは一夏の家。
今回、イズールと鈴の出番は無し。

一夏ｓｉｄｅ――

「あ、あ、あのっ、一夏さん！　け、ケーキ焼いてきましたから！」
「おお、蘭。今日、どうだった？　楽しめたか？　って言っても、途中でメチャクチャになったけどよ」
「は、はい！　あの、かっこよかったです！　あっ、ケーキどうぞ！」
「サンキュ」

蘭が差し出した皿を受け取って、その上のケーキを食べる。

「うまいなー、これ、蘭一人で作ったのか？」
「は、はい！」
「蘭って料理上手だよな。うん、いいお嫁さんになるぞ」
「お、お嫁っ……！？」
「一夏、はいラーメン」
「おわっ！？　鈴、いきなりだな――って、！？　お前……イズールの所にいったんじゃ？」

俺が向いた方向には、鈴のパペットを腕にはめた千冬姉……いや、チフユサンダーがいた。

０８『ヤッパリ、コレデハゲンカイガア～リマ～スネ～』

「やっぱりそうよね」

パペットの口がパクパクと動き、声を放つ。

声がそっくりだから困る。

パペット人形

【パペット鈴ちゃんｍｋ－？】

ガルクライフ娯楽開発部が開発した謎の人形。

元々はチフユサンダーのような兵器としての開発が進んでいたが、路線変更によっておもちゃのパペットとなった。

人格の再現率は異常。

しかし、誰かの腕に装着されない限り眠り続ける。

「つ～ことでよろしくね」

０８『スイマセン、アナタノデバンハココマデナ～ノデス』

ズポッ！

「あ――」

パペットはそのまま動かなくなった。
「お前……何のためにそれ持ってきた？」
０８『キブンデ～ス』
０８はポケットから何かの小箱を取り出した。
０８『コレハセシリアサンヘノプレゼント！　フォゥ・ユー！』
小箱を受け取るセシリア。
「えっと……ありがとうございます」
カパッ！
小箱を開けるセシリア。
中には青いビー玉のようなものが入っていた。
「ガラス玉？」
チャポンッ！
「あ」
ビー玉らしきものはセシリアに吸い込まれた。
「……」
「セシリア、大丈夫か？　おい、あれは何だ！」
０８『アッレ～ハカノジョンキオクデ～ス』
「記憶？」
０８『ソウデス、アレハカノジョノキオク。イチカモシッテイル

ハズデ～ス。サイキンミタミョウニリアルナユメヲ』

最近見たリアルな夢？

箒と俺が付き合っていたあの夢か？

「あ……お、おおお――」

「せ、セシリア……？」

「思い出しましたわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

急に叫んだセシリア。

「ど、どうしたセシリア！」

「一夏さん、わたくし……わたくし……」

急にセシリアは涙をぽろぽろとこぼし始めた。

隣のメズールは心配する。

「セシリア、大丈夫！？」

「お母さん……わたくし…ぐすっ、わたくしは……」

セシリアの体が淡い青色の光に覆われる。

０８『サッテ……セシリアチャンノキオクガアンテイスルマデニ……今までの真実を全て話そう。お前達の見た夢がどんな意味を持つのかを』

うおっ！？
なんだか滅茶苦茶千冬姉に似ている！！

ＩＳ学園のドッペルゲンガー４５話
【一夏の誕生日だＺＥ。～別題、真実～】

この物語はフィクションです。
ＩＳやメトロイドとも関係ない物となっております。

――０８の回想。

そもそも私達の誕生のきっかけは、ゼオル様がこの世界を手に入れようとしたことが始まりだった。その時の私はただの素体状態で、千冬のような姿をしていなかった。
ゼオル様の目的は、全空想世界を手に入れて現実世界に干渉するための物だった。

「今回の任務は、インフィニット・ストラトスと呼ばれる世界からあらゆる設定を奪う事だ。お前達はジャイアントストラトスのサポートが仕事だ」
『了解！』

当時のゼオル様は自分を生み出して殺し、捨てた現実世界への復讐に支配されていた。
そんなゼオル様はどんなことがあっても私達の間接的な父親という立場には変わりなかった。

「０８、お前は現地での報告係だ。定期的な連絡を頼むぞ」
『了解しました』

当時の私は部隊内で任務を裏切る物が現れた場合の処刑人だった。
なので口調も変えた。

『ワタ～シハ～、ジャパニーズ・ゲイシャガール！！』

そして偵察を開始した。
一夏の誘拐、箒や鈴音などの交流も観察していた。

それが終わったのは現実時間で一年前。

ピピピ♪

『オゥ、ウォルツサンジャナ～イデスカ～♪　キョウハドウシタ～ノ？』
『……お兄ちゃんが……負けちゃった』

『――なんだと！？』

突然のガルクライフ・アーミーズの崩壊。
私たちはこの世界に取り残されることになった。
私はゼオル様を殺したヤツが憎かった。しかし、私ごときではどうにかなる相手でもない。
しかしそんな中、ゼオル様は７５％という不完全な状態で蘇った。
理由は、ゼオル様はかつて自分を生み出した存在から『権限』を奪ったらしい。
私にはその『権限』の正体は分からなかった。

それから一年。
つまり現在に近い時間帯にイズール・ユ・ミヅルが現れた。
ゼオル様が実験で開発した人工空想生命体らしい。
しかし、彼の中には自分を殺した存在の一部が入っていた。
結局、ゼオル様はその人を愛していたのだろうと思った。

そんな時に事件は起こった。
ちょうどイズールが山田真耶との衝突で死亡した時、それは起こった。

１０『あれ？　これは何でしょう？』
０８『オゥ？　コレハゼオルサマノ“セッテイノカケラ”デ～ス』
１０『きっとこれを届ければ喜びますね』
０８『ソダネ～、テガラハユズリマ～ス』

そして１０はゼオル様の欠片に触れた。

バリリリリリリ！！
バチュリッ！！

１０『い、ぎゃあああああああ！！』
０８『１０、どうした！！』

陽の力を持つはずのゼオル様の欠片が黒い光を放った。

ＺＥＯ『復活だ……この俺の復活だぁ！！！』

それがチフユサンダー・ＺＥＯの誕生。
そしてヤツはあろうことか外世界から人間の願望をコストに設定バグ【ユガンダコイゴココロ】を作り上げた。他の二次創作で叶わなくなった恋心の設定も抽出して。
そしてラウラの前に置いて行った。
もはや空想世界の自由の為に復讐を目指した過去のゼオル様になっていた。

――そして今。
一夏ｓｉｄｅ――

０８『私から説明できるのは以上だ』
「えっと……ＺＥＯってやつの目的はなんだ？」
０８『失礼、そこの説明を忘れていたな。ゼオル様が空想世界の自由の為に戦ったのに対して、ＺＥＯはただ書かれては捨てられていくだけの二次創作世界の自由……いや、支配が目的だな。今の二

次創作世界は原作サーバーや現実世界にまで影響を及ぼす。ヤツはそこに目を付けた。しかし、転生者と呼ばれる武装集団によって支配される他世界を手に入れるのは困難……そこで、既に捨てられたり消されたりした上級設定を持つキャラクターから能力を喰うことを思いついた。ちなみに上級設定とは、『無敵』や『最強』といった単純で強力な物の事を言う』

驚いた。
前にイズールから俺達は小説の存在とは聞いてたけど……まるで落書きを書き換えるように能力を加えられるのか！？

０８『もはやヤツの設定は膨大で、世界に影響が出るほどだ。既にこの世界は『インフィニット・ストラトス』や『メトロイド』などからかけ離れ始めている』
「メトロイドってなんだ？」
０８『馬鹿者、そこは空気を読んで聞かなかたことにするものだ』
「えっ、そうなの！？」

そういや周りから何も反応が無い。
周りを見ると、みんなこの話についていけないでいた。

「「「？」」」
０８『……お前達ではこの話を理解できなかったか。一夏、ジュース買ってこい。金は３０００円出す。全員の飲みたい品もリストに書いた』
「あ……うん」

俺はジュースを買いに外へ出た。

一夏side end

――08 side

私はセシリアに話しかける。

08『セシリア、思い出したか？』

「……はい」

セシリアは銀時計事件の時の記憶を全て取り戻した。

「……私、恋……結局叶いませんでしたわ」

「セシリア……」

メズールが心配そうに声をかけた。

他のみんなも心配そうにのぞきこむ。

そしてセシリアはみんなに真実を話した。

「「「……」」」

全員が無言になる。

「そっか……やっぱり夢じゃないんだ、あれは」

「結局、私は嫁とは付き合えなかった訳か」

「私が……恋人」
「私……あの夢だとたしか……アイドルになった簪ちゃんのマネージャー」
シャルロット、ラウラ、箒、楯無の順に呟く。
蘭や弾もなにか思い出しているようだ。
「私がたしか妖精で」
「俺はドラゴンだった……」

これにより、再び一夏の恋人は箒へと認識されるのである。
……と思っていたが、数名が反乱し、暴走。

「箒には渡さない！」
「嫁は私の物だ！！」
「私が……恋人／／／」
「マネージャー……」
「あ、私も負けません！！」
遂に放心状態のセシリアと数名を除いた集団は乱闘を始めた。
０８『馬鹿者共が！！　少し黙っていろ！！』
千冬の声で黙らせることになったのは言うまでもない。
――０８　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏ｓｉｄｅ――

「お、よかった。売り切れはないな」

自宅から最寄りの自動販売機。
俺は頼まれたジュースを買うところだった。

（さて、これで注文通りだな。戻るか）

と、俺が歩き出したところで、ちょうど自販機の明かりが届かないギリギリのところに人影を見つける。

（なんだ……？）

ジュースを買いにきたにしては離れすぎている。

～♪　～♪

すると、人影の方向からギターの音色が聞こえてきた。

「ラ～ラララ～、ランララランラララ～♪」

俺はその人物を一度見たことがあった。
たしか……。

「織斑……マドカちゃん？」

「んにゃ？　おぉ、お兄ちゃん……いや、弟か？」
「お、お兄ちゃん！？」

織斑マドカ。
千冬姉と似ており、俺の血縁疑惑がある少女。
イズール曰く『頭がお花畑』の記憶喪失。

「こんなとこでなにやってんだ？」
「ん～、路上ライブで火がついて武道館ライブでロックンロールなのさ」
「いや、明らかにロックなメロディじゃないよな！？　ギターでロックは無理だよな！？」
「ん～、ジュースでも飲みながら考えよう」

マイペースだなぁ……。

チャリンッ！

「その欲望を……ナンチャラ」

ピッ！
ガコンッ！

カキョッ！
ゴクゴクゴク……。

「ぷは～！　……ゲェェェェップ！！　炭酸はキツイわ」
「うわっ！　ゲップは外見イメージ崩れるからやめろよ」
「……りょーかーい」

マドカちゃんはギターをギターケースにしまう。
「私はお前だ、織斑一夏」
「な、なに……」
「言ってみただけ」
そしてマドカちゃんは肩にギターケースを担ぎ、口笛を吹きながら歩いて行った。
「～♪　また会おうね、お兄ちゃん。いや、弟か？」
口笛【ケロッ！とマーチ】
そこへラウラと箒がやってきた。
「結局、ヤツの狙いはなんだったのだ？」
「私も気になる」
「おわっ、なんでラウラと箒がいるんだよ！！」
「私は嫁が襲われないか心配でな」
「私は6巻を読んだから――いや、なんでもない」
こうして、俺の誕生日は終わるのである。
そして、マドカちゃんの『また会おうね』は実行されることとなる。
「一夏……」
「なんだ？」
「私と付き合った夢を見たことは無いか？」

「ん、あぁ……あるけど？」
「付き合ってほしい。鈍感なお前に一応釘は打っておくが、『恋人として』だ！！」
はい？
――続く。

第四十五話　一夏の誕生日だＺＥ（後書き）

ご感想お待ちしております。

第四十六話　狂った七巻の始まり（前書き）

本当に狂っています。
原作の筋書が薄く見えるほどに。

第四十六話　狂った七巻の始まり

ついに七巻突入である。
そんな中、悲劇は起きた。

――イズール＆一夏の部屋にて。
――原作時間、七巻のＰ２３くらい。

「～♪」

俺はシャワーを浴びて冷蔵庫を開けた。
俺は手を伸ばす。

スカッ！

「？」

本来そこに存在する物が無かった。
俺は一夏に尋ねた。

「一夏、俺のマウンテンデュー知らない？」
「あっ、俺が飲んだ」

俺は床下の隠しスペースから最新兵器を取り出した。

???

【最新兵器】

世にも恐ろしい電動マッサージ機内蔵の棍棒。
ちなみにイズールが夜なべして作りました。
股間に当てれば相手を一瞬の内に悶絶させるほどの一品。
イズールの電気能力にも対応。
※女子にやれば大体の確立で訴えられます。

「お前は馬鹿な子じゃないって信じていたのに！！」

ヒュンッ！
フォンッ！
ブンッ！

「お、おいやめろ！　殺す気か！！」
「大丈夫……すぐに快楽へと変わるよ……フフフ♪」
「わ、悪かった！　謝るから――」
「死んでもらうよサガラ君！！」
「サガラって誰だよ！！」

俺の怒りは活火山の桜島だぜ！！

「ちゅすとぉぉぉぉぉぉ！！」
「え、チェストじゃないの！？」

一夏が避けた。
最近のＩＳ訓練のおかげだろう。
俺の攻撃の勢いは止まらず、扉に当たろうとする。
俺はここで気付くべきだった……この後七巻で誰が現れるのかを。

ガチャ。

扉が開いた。

「じゃじゃーん。楯無おねーさん参上――」

――五十秒後。

「あの……大丈夫ですか？」
「……まだぁ……腰に力入らないやぁ……」

悶絶した楯無さんは涎を少し流しながら答えた。

俺は楯無さんをとりあえずベッドに横たわらせた。
濡らしてしまった下着……どうしよう……女性ものなんて常備してないしな。

「すいません、今回は妹の簪さんの話ですよね？」
「うん……なんで知ってるの？」
「……肩貸しますよ」

――説明中。

「「え？　ＧＡ－ＩＳ－ＡＣがオジャンになってた！？」」

驚く俺と一夏。

「そう、だから簪ちゃんが落ち込んじゃって……だからそんな簪ちゃんをどうにかしてほしいのよ。なんだか前に性格が戻ったみたいで」

なるほど、ＧＡ－ＩＳ－ＡＣはあの設定を不安定にさせる歌で駄目になってたか。
でも……俺の予想が正しければ性格の方は演技だ。簪さんなりの七巻再現なのだろう。
ま、とにかく行動してみましょう。

「一夏、あとは頼んだ」
「俺がやるのかよ！？」

――その頃。

鈴は食堂で盆にラーメンを乗せてルンルン気分でテーブルまで歩いていた。

「ラーメン、ラ～麺～♪」

タタタタッ！

鈴に走って近づく影があった。

鈴は気付いていない。

走る人物の正体は篠ノ之箒。一夏を探しているようだ。

ドンッ！

「あっ」

「すまない鈴！　こっちは緊急事態だ！！」

そのまま走る箒。

ラーメンのどんぶりが宙を舞い、地に落ちる。

ガシャンッ！！

スタッフが駆け付ける。

「大丈夫ですか！？」

すると鈴は床に散らばったラーメンのナルトを指で拾い上げ、呟いた。

「おいおい……今日のラーメンにはチャーシューが五枚も入ってんだぜ？（子安ボイス）」

鈴からイケメンボイスが出た。

そして鈴はそのままナルトを5分ほど眺めた後、箒を追いかけ始めた。

――視点は戻る。

イズールは部屋でゲームをしていた。

「やっぱりメトロイドは繰り返し遊べるからいいよね」

バタンッ！

「一夏はいるか！？」

「なんだ箒か。一夏はいないぞ」

「そうか……邪魔したな」

バタンッ！

「……」

ピコピコ♪

バシュンッ！

「お、マザーブレインだ」

バタンッ！

今度は鈴が現れた。

「イズール！！　箒見なかった！？」

「箒ならＡ－１２方面へ向かってチャリンコより３２％ほど遅いスピードで進んでいるぞ」

「ありがと……って、なんでそんなに分かるのよ」

「秘密だ」

「それよりあんた、いい加減授業出たら？　もう何か月分授業の描写が無いと思ってんのよ！！」

「別にいいだろ、学校にちゃんと出席してる『設定』なんだから」

「あんたねぇ……」

ここで俺はあるイタズラを思いついた。

「そうだ鈴、どうせしばらくは一夏と簪さんが活躍するから……イタズラしない？」

「イタズラ？」

「そう……俺と鈴の姿を入れ替えるの♪」

「え、それやっちゃう？」

俺達はお互いにジャンプする。

そしてハイタッチ。

「「ウルトラタァァァァッチ！！」」

バシュゥゥゥゥン！！

俺は鈴に、鈴は俺に変身した。

「やっぱり鈴の体は動きやすいな♪」

「なによ、幼児体型とでも言いたいの？」

「スレンダーってこと。というかお前最近自分の胸2センチ増強してただろ」

「な、なんでわかんのよ！！」

「俺の設定使ってんだからなんとなく分かるよ」

すると、鈴に異変が現れた。

「う……」

「どうした？　初めての男の体が合わなかったか？」

すると、鈴の顔が赤くなり始めた。

「あんた……良い匂いがする」

鈴は俺の体の匂いを嗅ぎ始めた。

物凄い嫌な予感。

ボスッ！！

鈴は俺をベッドに倒した。

「鈴……なんで制服脱がしてるの？」

「……」

鈴の目がトロンとしている。俺の姿だけど。

「はぁ……はぁ……」
「鈴……なんで俺のブラ外してるの？」
鈴の様子がどんどんおかしくなっていく。
「じゅるっ……れろっ……ちゅぱっ」
「ひゃんっ！！　ば、馬鹿！！　乳房や乳首舐めるな！！」
「んっ……んん……」
ぬちゃ……。
「わっ、お前どこに指突っ込んで――っあぁん！！」
カモン、スキャンバイザー！！
――スキャニング中。
なるほど、鈴は男性脳に振り回されてるのか……。
まずは正気に戻さないと。
ガシッ！
やりたくなかったけど非常事態だ。砕けろ俺の股間！！
グキャリッ！！
「ッ～～～～～！！？」
「あぁ……すげぇ痛そう……」
鈴、悶絶。

「男の子のコレって……痛いとは聞いてたけど、まさかここまでとは……」
「ふざけんなよ……いくら卵子出来なかったり、受精しないからってやっていい事と悪い事があるぞ！！」
たしか俺が女性脳に振り回されないために使ってた薬品グミがあったはず……。
俺は冷蔵庫の隠し収納から薬品グミを取り出した。
「鈴、コレを定期的に喰っとけ。脳が慣れるまで役に立つ」
「……ごめん」
「ん～、男の子の感情、少し理解した？」
「うん」
鈴はグミを食べた。

――数分後。
「んじゃ、これが男子の生理現象と対処法。あと、常識とマナーね。よく読んどいてね」
「ありがとう……」
「気にすんなよ、別に嫌いになったわけじゃないだろ？」
「でもあたし……あんたをレ〇プしそうになったのよ！？」
うわ、生々しい表現。

「未遂で済んだからいいだろ？　んじゃ、イタズラ開始だ」
「え、ちょっと！」

――イズールside　end

――鈴side

はぁ……。
いきなり失敗した。
イズールを襲うなんて……。
あたしはさっき指に感じた感触を思い出す。

「……」

あたしの体でもあるから……あたしもあんな感触がするんだろうなぁ。

キーンコーンカーンコーン♪

あ、授業の鐘だ。
……一組か、バレないわよね？

一組にて――

授業中。

「……どうしたイズール、ボーっとして」

「あっ、ごめんなさい千冬さん」

「……『千冬さん』？　熱でもあるのか？」

千冬さんが近づいてくる。

そしてあたしの額に手を当てる。

千冬さんの胸が少し見えた。

千冬さんって……ここまで綺麗だったんだ……。

ガシッ！

「ど、どうしたイズール！？」

あたしは思わず千冬さんの手を握っていた。

「……いけない、グミ食べなきゃ」

カバンからグミを取り出す。

が、千冬さんに没収されてしまった。

「授業中に教師の前で飲食とは――グミ？　『薬品グミ』？　なにか病状でもあるのか？」

あぁ……そっか……一夏とイズールがこの学園に来たときはこんな思いだったんだ……ハハハ。

心臓がドキドキして……周りから甘い匂いがして……みんな綺麗で……はちきれそう。

「おい……イズール？」
「はぁ……はぁ……」
まずい……このままじゃあさっきの二の舞だ。
「あの……大丈夫ですか？」
「山田先生……すいません、ハグさせてください」
「へ？」
あたしは山田先生を抱きしめた。
はぁ……少し落ち着く。
「あ、あの……前に『ハグしてくださいね』とは言いましたけど、授業中は――」
気付いたら、あたしは山田先生の唇を奪っていた。
「「「！！？」」」
騒然となる教室。
ごめんイズール。あんたの評判落とすわ……コレ……気持ち良くてヤメらんない。
？生物の本能とは理性を遥かに凌駕するものである。
キスから解放された山田先生は羞恥で顔を真っ赤にし、フリーズする。
「山田先生も好き……千冬さんも好き……みんな、みんな大好き

♪」
「お、おい……イズール！？」
「い、イー君が壊れたぁぁ！！」
「むしろしてください！！」
「あ、私にもぉ！！」
あたしは……あたしは……あ――
プツン！
「あ」
バタンッ！！
こうして鈴の脳は男性としての本能に耐え切れず、ダウンした。
「一夏、イズールを保健室に運んで――いや、やはり私が運ぼう。山田君、後を頼む」
「ふわぁ……／／／」
「……山田君？」
「は、はい！　織斑先生！！」
こうして鈴のイタズラは未遂に終わった。
――鈴ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

「まさか……ここまで二組がつまらないとは思わなかった」
「どうしたの鈴さん？」
「いや、なんでもない」

ここは二組の教室。
俺がイズールだと気付くヤツはいない。
なぜならいつもの変身とは違って、今回は完全再現だからだ。
髪型、制服、その他まで真似てある。

「ねぇ鈴さん、ここ教えて」
「あぁ……ここは２√３ね」
「ありがと！」

どうにか場に溶けこんではいるが……不安だな。
そういや……ティナさんはここのクラスなのか？
ティナ・ハミルトン……金髪碧眼の鈴のルームメイト。
たしか情報を得る為に現実ネットでググったら……同姓同名金髪碧眼のＰＣゲームのヒロインがヒットしたな……まさかね。
たしか……タイトルは『ｕｎｉｖ』。これは偶然か？　はたまた関連性が？

「……謎だ」

もしや設定バグの始まりも関係しているのでは？
んな訳ないか……考え過ぎだ。
……というか暇だ。
暇すぎるぞ二組！！

キーンコーンカーンコーン！！

「以上で講義を終了します」

「起立！　礼！」

授業が終わってしまった。

さて……４組でうまくやってるか見に行きますか。

ピンポンパンポ～ン♪

『２組の凰鈴音さん、至急保健室まで来てください』

は？　保健室？

俺は保健室へと向かった。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――箒ｓｉｄｅ

――保健室にて。

私と一夏と織斑先生が保健室へ来ていた。

今日のイズールがおかしい。

告白の返事をくれない一夏も十分おかしい。というか告白したことを聞いてなかったのか！？　……心の中で怒鳴ってしまった。

「で、お前達……コイツに変な物食わせたり、心に負担与えたりしてはないだろうな？」

織斑先生がそう問いかけた。
だが、誰にもそんな記憶は無い。
やっぱりフェイゾン系の病気なのだろうか。

「う……ん？」

イズールが目を覚ました。

「おいイズール、大丈夫か？」
「いち……か？」

ガララッ！！

誰かが保健室へ入ってきた。

「失礼します」

たしか４組の更識簪だったな。
簪はイズールへ近づき、メガネを少しイジリ始めた。

――スキャニング中。

「……嘘……鈴さん？」
「……あ……わかるんだ……」

？　簪は何を言っているのだ？
今ここにいない人間の話をしてどうする？

ガララッ！！

「寝てる人に配慮して失礼します」

鈴が入ってきた。

はて、鈴はあんな台詞を言うやつだったか？

「鈴……恐らくお前が一番原因を知っているのではないかと思って呼んだんだ」

「……先生、今日イズールは発作が起きるから薬品グミを定期的に接種しないといけなかったんですけど……もしかしてそれを邪魔しました？」

「……あぁ」

「今のイズールは……簡単に言えば発情期で、女の子だらけの学園では危険な状況なんです。……ちょっとマズいんですよね」

「「「発情期！？」」」

驚いた……ま、まさか発情期があるとは……／／／

ということは鈴は……イズールに襲われたのか……？

？ある意味正解です。

「ちょいと処置しますんで……簪さんは助手で手伝って」

「わかった」

私たちは鈴によって保健室から出て行くこととなった。

――廊下にて。

「実はここに盗聴器があってだな」

「「あんたはなにやってんですか！！」」

盗聴か……あまり進まないが、私もきになるぞ。

『鈴……今キツイか？』

『めちゃくちゃ……キツイ……今すぐどうにかして』

『馬鹿、保健室でナニしようとしてんだよ。俺と簪さんにそれほどのプロポーションが――』

ガンッ！！

『……痛いよ』

『自業自得』

なんだ？　鈴とイズールの声と台詞が逆のような気がするぞ？

『最後にグミ食ったのは？』

『あの時だけ』

『仕方ない。元に戻れ』

『嫌だ』

『なんで？』

『なんというか……心がフワフワして……ドキドキして……くすぐったくて気持ちいいのよ。もうちょっと味わいたい』

『こりゃ重症だな……メズールでも呼んだ方が良いのかな？』

『……淫乱』

『はい、簪さんは黙っててね』

なんだかおかしな方向に会話が進んでいないか？

『しかたない……簪さん、そこに置いてある最新兵器を』

『ラジャ』

『ちょ、なにそれ！？』

『何って……マッサージ器さ♪』

『ちょ、ま、あ、アッ――――！！』

――数分後。

「んじゃ、元気になったんでお邪魔しました～♪」

「……ハハハ、時が見えるよ」

なぜか元気になったイズールと、グッタリとした鈴が歩いて行った。

いったいなんだったのだ？

そして、簪にタッグマッチの誘いを一夏がするのが、この数秒後。

――箒ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――鈴&ティナの部屋にて。

――イズールｓｉｄｅ

「そんなことがあったんだよ」

「ふ～ん」

俺の話をお菓子喰いながら話すティナ・ハミルトン。

良く太らないな……こいつ。

「すぅ……くぅ……」

「鈴、気持ちよさそうに寝てる♪」

「変身でカロリー使いすぎたんだろ。寝かせてあげよう」

鈴は眠る。

明日の俺の評判が……楽しみだ。（涙）

――次の日。

「みんな……何してんの？」

ある一定のモブ生徒がみんなキスの体勢で待ち構えていた。

鈴……本当にいったい何をやりやがった！？

――数分後。

「やりすぎだよ……鈴」

昨日の出来事を確認した俺は憂鬱だった。

「どうした？」

「一夏……俺がまるで変態じゃないか」

「何の話だ？」

ガララッ！！

あ、山田先生だ。

「はい、今日はこのクラスに新しいクラスメイトが来ます」

「「「な、なんだってー！！」」」

ちょっと待て！　原作ではこれ以上クラスメイトが増えた記憶はないぞ！？

「ではどうぞ」

カツコツ……。

その人物は自前のチョークを取り出し、モニターへと――

「あの……黒板じゃないので書かないでください」

「？」

その人物はチョークをしまい、自分の名前を言った。

「今日から一組の仲間になった織斑マドカ、永遠のティーンズです♪　ティターンズではありません。好きな物は家族とナタデココで、嫌いなことは一人静かにご飯を食べる事です。よろしくお願いします」

誰かと思ったら、お前かマドカちゃん！！

無設定
【織斑マドカ】

「席は織斑君の後ろが空いてます」
「わかりました」

マドカちゃんは一夏の後ろに座り、何か一夏につぶやいた。
俺は口の動きを読み取る。

――よろしくね、お兄ちゃん……いや、弟か？

そういやもしマドカちゃんが本当に血縁者、または千冬さんのクローンだったら……どういう関係になるんだ？

「ねぇ……あの子千冬様に似てない？」
「あたしも思った、織斑って姓だから妹？」
「その説濃厚」

ざわ……。
ざわ……。

その時、沈黙を続けていたラウラが動いた。

「お前を義妹として認めよう」

その言葉を聞いたメンバーが動く。

「ラウラ！　ずるいよそんな事！！」
「邪魔するなシャルロット！　箒がリードした今、私にはもはや時間がないんだ！！」

特別編
【アイエスファイト】※元ネタ『ウルト〇ファイト』。

自分をマドカに『一夏の嫁』と認識させるための醜い女の戦いが始まります。
おっと、ラウラが謎のポーズを見せた。あれは前に俺が教えた『荒ぶるエリオのポーズ』です。対抗するシャルロットはウソで教えた『荒ぶる天使ちゃん（ハンドソニック）の構え』だ！！

しかし、ここで問題が起きた。

「「……」」

教えたのはあくまで『構え』であり、『攻撃』ではないということだ。

シュバッ！！

おぉっと、ここでセシリアがまさかの参戦。
あ、あれは『キュアホワ〇トの決めポーズ』だ！！　というかなんで知っているんだ！？　謎を呼びます。

「ホワイトサンダー！！」

セシリア叫んだ！　戦局がセシリアに傾きます。
しかし、ブラックサンダーがありません。そう、ブラックがいないのでマーブルスクリューは成立しません。そしてセシリアのこの悔し顔！！

「ふっ、どいつもこいつも甘いな」

箒の参戦です。
何かのポーズをしていますね。
あ、あれは『けい〇ん！』のジャケットイラストのポーズだ！！
しかし、『デコ』とか『たくあん』とか『うんたん』やその他一名がいないから成立しなかった。そしてこの悔し顔！！

「ならば！！」

おぉっと、ここでまさかの『ツバメ返しの構え』だ！！　一番しっくりする。どこかの吸血忍者的な事をするのでしょうか！？

「まて、私がやろう」

織斑先生がおもむろにマイクを取り出した。

「～♪　～♪」

歌いだしました。

まさかの『アリスＳ〇Ｓ』のネタ！！　というか今の世代の人間はこの作品知っているのでしょうか！？　まさか、攫われるのでしょうか？

今この教室は設定バグの仕業としかいいようがないほどのカオスと化しています。

というかなぜこうなったし！！　狂うにもほどがあるよ！！

ガララッ！

「真打登場！」

鈴、もうやめて！　これ以上カオスにしないで！！

「ドウモコンニチワ、鏡音リンデス」

惜しい！　レンがいない！！
リンはレンと一緒で初めて完全体なんだよ。
「あの……私もやります」
山田先生も参加です。
「私……実はニンジンが好きなんです♪」
『アトリエシリーズ』かーい！！　しかもヴィオラートのやつ。
「なんだ？　自慢大会か？　たしか……デストロイモードが――」
やめろ一夏！！　ユニコーンのバナージしたらパワーバランス崩れるわ！！
「あー、私もやるー」
のほほんさんは何かあったっけ？
「やっちゃえ！　バーサーカー！！」
ドンッ！！
なんでしょう……のほほんさんの背後に絶対世界間を間違えているナニカがスタンドのように見える……。
とにかく、役者は揃いました。
言っておきますが、これが夢オチじゃなかったら絶対にイヤです。
そして戦闘が開始された。

戦闘タイプではない千冬先生と山田先生と鈴は俺の隣で観戦。
いや、山田先生は戦闘できるだろ、ＲＰＧ的に。

「うぉぉぉぉ！！」
「……ハンドソニック」

ガキンッ！！

「甘いぞ一夏！！　ツバメ返し！！」
「まさか……紅い彗星！？」

「いけ、バーサーカー！！」

なんででしょう？　のほほんさんが一番強そうに見える。

「……とりあえず、山田先生、千冬先生、鈴、あの台詞言うぞ」
「はい」
「ああ」
「うん」

「「「「「声優ってすごいよねぇ」」」」」

ここで目が覚めた。
ちょうどシャルロットとラウラが千冬先生の出席簿ダイナミックを喰らっているところだった。
ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

のほほんさんの背後に筋肉の怪物がいたような気がしたが……見なかったことにしよう。

「……もうちょっと寝よ」

「寝るな」

パァンッ！！

こうして午前が終わる。

――続く。

第四十六話　狂った七巻の始まり（後書き）

ご感想お待ちしております。

第四十七話　再び鈴になる（デフォルトで）（前書き）

今回は短めですかね……。

第四十七話　再び鈴になる（デフォルトで）

事の始まりは廊下にて。

「でね、黒猫さんが最近ツナ缶からサバ缶にグレードアップしたんだよ？」

「へぇ、あいつも美食になるのかな」

俺とマドカちゃんが歩いていると、ラウラと一夏がいた。

「……もう一度言ってみろ……」

「そ、その、ラウラ？　待て、話し合おう！」

「遅い！」

ラウラが部分展開でプラズマ手刀を呼び出し一夏に斬りかかる。

「「まずい、一夏が危ない！」」

俺とマドカちゃんは（ノリで）救助に向かう。

「やめろ、馬鹿者。肉の焦げる匂いは焼き肉屋だけで十分だ」

突如現れた千冬先生はラウラを窓の方へ投げ飛ばした。

「教官！　これは夫婦の問題――」

ドンッ！

「「「「あ」」」」

「……へ？」

飛んできたラウラにぶつかる俺。

ガシャンッ！！

窓ガラスを突き破り、外へ飛び出す……俺。

「……今日の空って……こんなにも綺麗なんだぁ……」

そのまま落下。

下はコンクリート……いや、アスファルトか。

ガキリッ！！

俺の中で何かがズレたような音がした。

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――シャルロットｓｉｄｅ

僕は最近暇だ。

まるで誰かに出番をもぎ取られたかのように。

「一夏……付き合えるかなぁ」

ガシャンッ！！
なんだかガラスが割れるような音がした。
「な、何！？」
ドシャッ！！
ビチャッ！！
僕に生暖かいナニカが降りかかった。
「……」
体に付いたソレを手で触って見てみると、手が真っ赤に染まった。
「な、なんじゃこりゃぁあぁぁぁ！！」
それは血でした。
そして目の前には誰かが倒れていました。
「アッオウ……ミてママ……おセんベイになっちゃった。アーハハハ……」
そこには血だらけの鈴がいた。
僕は鈴に話しかけます。
「鈴、大丈夫！？　血だらけだよ！？」
「鈴？　……あれ……いつのまに鈴になった？」
「もしかして……イズール君？」
「そうか……記憶戻ったから知ってるのか……０８のヤツめ、余

計な事を」

僕はイズール君＝ドッペルゲンガーを思い出した。

だからこの鈴の正体がわかっていた。

「今日はどうしたの？」

「いや～、ラウラに衝突してそのままお空をハイキングしちゃってさ～」

シュバッ！！

イズール君はポーズを決めた。

「イズール、変身！！」

……。

何も起こらない。

カツン

コツン

コロコロ……。

すると、僕の足元に何かが転がってきた。

ビー玉？

パキンッ！！

あ、ビー玉が割れた。

「ノォォォォォォ！！」

「どうしたの！！」
僕は割れたビー玉に触れてみた。
……なんとなく分かる。これは……イズール君の……体だ。
「俺の体……まるで卵のように……」
「……（どう声をかければいいんだろ）」
イズール君の顔が青くなっていくのが分かる。
「……こんな時こそゼオルさんの出番だ！！　つ～ことで、場面チェンジ」
「へ？」

――ゼオルの屋台にて。
あれ！？
なんで僕はここにいるの？
「ん？　珍しい組み合わせだな」
「ニャ～ウ」
「実はかくかくしかじか」
「だれこれそのこの？」
「理解は？」
「ＯＫ」

「ナ～ウ♪」
「よしよし♪」
僕は黒猫さんの喉を撫でながら二人の会話を聞いていた。
「こりゃ……完全復活まで半年はかかるぞ？」
「半年！？」
「すぐに戻りたいならするよ？」
そういってゼオルさんは何かの紙を取り出した。何かの落書きのようだった。
「……プロトタイプバルゼッタの外見になるけど」
「遠慮しときます」
もしかして……あれがイズール君の材料？
「あと……今のお前はＧＡ－ＰＥＤのシステムは体の設定と共に穴あきチーズも同然だな。しかも、今のお前は他人の姿を借りなきゃこの世にはいられないって訳だ」
「うっそー！！　転生者が能力一部損失なんて聞いたことないよ！！」
「だって……お前の能力は『組み込んだだけ』だもん」
……なんの話だろう？
「まぁ、今まで路線変更が酷かったし……それに……ＺＥＯがしつこく干渉しているのも原因だし……なかなか人員が回らないのさ」
「……」

みるみる元気が無くなっていくイズール君。
なんだかとっても……かわいそう。

「俺……部屋に戻る。シャルロットはどうすんの？」
「え、イズール君がその姿じゃ……」
「そっか……また鈴達の部屋に世話なるか。夜、一緒に風呂入る？」

え！？　いきなり……あ、そっか、今のイズール君は女の子だったね。

「えっと……いいよ／／／」
「いや、顔を赤らめるな」

僕は黒猫さんを降ろし、イズール君へついて行く。

「ニャーン」
「またね♪」

なんだか今日は厄日になりそうだ。

――シャルロットｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

「鈴～？　あの時の症状おさまった？」

「うん……って、なんであたしの姿なの？」
「会長のドロップキックよりひどい症状」
「ってことは……また変身障害？」
「いや、変身出来るけど元の姿にはもどれない。だから今日はここで厄介になるよ。山田先生と千冬先生にはもう相談済み。明日俺がドッペルということを大々的にバラす。隠すのに限界が来た」

そう、俺は某バーローでもないので本当は隠す理由なんてなかった。
ただ……イタズラの為である。
俺はボストンバッグを置き、タオルを構える。
「鈴、大浴場いこうぜ？」
「え？　あぁ……うん、いいわよ」

――大浴場……ではなくシャル&ラウラの部屋の前で。
俺はシャルロットを呼んだ。
コンコン。
『は～い、どちらさま？』
「埼玉から来ました、主人公です」
『イズール君ね？　ちょっとまっててね』
さて……待ってる間に能力確認しとくか。

――スキャンバイザー使用不能。
えぇ、結構便利だったのになぁ。
――ＧＡ－ＰＥＤ一部機能停止。
根本的に壊れたか。
――基本能力に損害なし。
つ～ことは、生身で使える能力は無事って訳か。
ガチャ……。
「おまたせ」
「おう、んじゃ行こうか」

――廊下にて。
俺達三人は廊下を歩いていた。
「――んでさぁ、一夏のヤツがそれ食べてお腹壊しちゃってw」
「あぁ……アイツもあいかわらずね。そういえばシャルロットは何か話題ある？」
「やっぱり……あの時の記憶かな？　セシリアは完全に思い出したみたいだけど、僕達はまだ夢としての印象がつよいから何とも言えないんだ」

俺はシャルロットの話を聞きながら窓の外を眺めた。
するとグラウンドをＩＳ装備で歩く箒とセシリアが見えた。
「七巻の……Ｐ６４か」

――大浴場にて。
カポーン♪

「浴場の擬音って誰が考えたんだろうね」
「知らないわよ」
「僕も知らない」

ここは大浴場。
生徒達の憩いの場。
現在は女子の時間帯。
俺も現在は女子だ。異論は認めない。

そんな俺の様子を複数の女子が眺めていた。
はて……誰でしょう？

「あの……もしかしてドッペルゲンガーさんですか？」
「うん……そうだけど」

キャァァァ！！　と、黄色い声。

「あたし、ずっとファンだったんです！！」
「正体を教えてください！！」
「演劇部に入ってください！！」
え？　ファンクラブとかあったりするの？
あ、こら、触るな！！
「なんだよあんたらは！」
「私たちは【ドッペルファンクラブ】です」
やっぱりあるんだ。

【ドッペルファンクラブ】
ＩＳ学園に現れたドッペルゲンガーに淡い恋心を寄せる集団。
当人達はドッペルゲンガーが女だと思っている。
つまり『お姉さま』的な関係を持ちたい人たち。

「だから触る――」
これで小一時間身動きが取れなかったのであった。
――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――その頃。
――ガルクライフ本部にて。

報告書。
作成：ゼオル・ゲバイン。

今回の物語についてのレポートである。

今回起きた事件、『負の遺産事件』についての考察などである。
本来この戦いは、ジャイアントストラトスの撃破で終わるはずだった。しかし、急な路線変更など、もはや『インフィニット・ストラトス』の二次創作として成立しない部分が大きくなった。お気に入り件数など、話を増やすたびに減って行くのが証拠として挙げられる。現在、お気に入り件数は１０６という数字で安定はしているが、これ以上の急激な伸びは無いだろう。
製作者の『インフィニット・ストラトス』への情熱が冷め始めたのも原因の一つだ。それによって物語が進まず、無理に進めるとバグが出る。言わば設定バグは製作者の『ご都合主義』である。キャラクターの増やし過ぎもそれに該当する。もはや有余が無いほどの状況になっている。

次のレポート：ＺＥＯとは何か。

ＺＥＯとは私の設定の欠片である。

ＺＥＯ自体は倒されたジャイアントストラトスの代わりに用意された敵だ。これも製作者のバグみたいなものだ。
フェイゾンを含み、捨てられたテンプレ神を吸収しているらしいが、目的はまだ分からない。究極空想生命体については誕生の方法は知らないはずだ。
もはやこの物語は初期の目的を見失った少年バトル漫画さながらの状態だ。一刻も早い終結をここに強く望む。

――ゼオルｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――ＺＥＯ　ｓｉｄｅ

「言ってくれるじゃねぇか……まぁ、終わりたきゃ終わらせてやるよ」

ＺＥＯは何かの入った巨大なカプセルを覗き込む。

「散々バグらせてこの物語を滅茶苦茶にしたんだ……野望は果たすさ」

ＺＥＯは誰もいない空間でほくそ笑んだ。

「さ、儀式の準備は揃った。後は――主人公を殺して権限を奪えばいい」

ＺＥＯは静かにそう呟いた。

――ＺＥＯ　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ
――次の日の教室にて。

「――ガルクライフ社所属のドッペルゲンガー、イズール・ユ・ミヅル。今後とも、よろしくお願いします♪　今は凰鈴音さんの姿を借りていますが、髪型違うので間違えないでください」
「「「えぇぇぇぇ！！？」」」

俺の真実を話した。
これが原因でまたリセットとかないよな？

こうして、俺のイタズラやってた人生が終わるのである。

――まだ終わらないよ？

「あの……イー君……なんだよね？」
「うん」

今は放課後。
まるで詰め所でカツ丼食うドラマのワンシーンのようになっていた。

「触ってもいい？」
「のほほんさんには特別だよ？」

ムニュ！

「……なぜ胸を触る？」
「えっと……本物かな～って」
「あんまり胸はやめてな」

というか一組どころか複数のクラスがここに集まってきてるからキツイっての！！

「あの！！　これに変身してください！！」
「えっと……何々？　なにこのイケメン」

渡されたのは一冊の雑誌。
イケメンアイドルグループの写真があった。
一体この子は俺に何を求めているんだ？

「……すぅ……」

俺は立ち上がり、深呼吸。

「イズール、トランフォォォォォム！！」

バシュゥゥゥゥゥゥン……。

俺は……あんまりなりたくないイケメンになった。

「……こんな感じか？　声は……知らないから俺の声で……あ、俺の姿が出来ないなら声も無理だな。じゃあ……一夏の声で」

すると……。

「「「きゃぁぁぁぁぁー♪」」」

黄色い声。

まったく……こいつらは欲に忠実だな。

そういや欲で思い出したが……メズールを最近見てないな。

？実は世を忍ぶ為にコアメダルの状態でセシリアの胸にぶら下がっているとはこの時イズールは知らない。

「あ、あの！　私はずっとファンで――」

「いや！　俺は偽者だからな！？」

「私も私も！」

「これに変身して！！」

「いや、私が先よ！！」

「獅子仲間！！」

「このキャラに！！」

「冬コミの為に！！」

レッツ・バトル。

女子の一人が迫る。
俺は右腕を掴み、投げ飛ばす。
次に別の一人を足かけで体制を崩し、頭を地面に叩き込む。
そして最後にペンとメモ帳を持った……どっかで見たような先輩を肘鉄砲で攻撃し、反動で位置の下がった頭を掴んで投げ飛ばした。
この間わずか5秒。

「すぅ……はぁ～……お疲れさん」

死屍累々。

ピピピ♪

「ん、誰からだ？」
『こちら鈴、あんた！　あたしの部屋で豚の角煮を煮込んでたでしょ！！　どうにかしなさい！！』
「了解。悪いなみなさん。話はまた明日！！」
俺はその場から逃げるように……いや、逃げた。

――鈴&ティナの部屋にて。

「……砂糖が足りないかな？　どう？」
「う～ん……足りないと思うわよ？」

同じエプロンを着た俺と鈴は角煮の味見をしていた。

「あたし達の意見じゃ参考にならないわね。感性が同じだから」
「そうだな……」

俺はティナさんを見る。
ティナさんはビクッとした。

「な、何よ……太るから食べないわよ」
「そう遠慮すんなよ……見ろよこれ、もう箸でほぐせるくらい柔らかいんだぜ？　官能的だぜ？　エロいんだぜ？」

ゴクリ……。

ティナさんから生唾を飲む音が聞こえた。

「「さぁ、食べよう」」
「……いただきます」

ティナさんは陥落した。
そういや……何か忘れてるような。

――その頃。
――イズール＆一夏の部屋で。

「……マズイな……これ」

一夏は静かに一人飯だった。

コンコン！

「どちらさま？」

扉を開けてみたらそこにはいつものメンツがいた。
箒&セシリア&シャルロット&ラウラである。

「さぁ一夏、告白の返事を――」
「箒さん！　それは無しですわよ？」
「本当だよ！　僕にもチャンスを？」
「ん、嫁よ……泣いているのか？」

ラウラの言葉で一夏は自分が泣いていることに気付いた。

「あ、……とにかく一緒に飯食おうぜ？」

こうして夜はふけていく。

――続く。

第四十七話　再び鈴になる（デフォルトで）（後書き）

最近、この物語を読み直して、これでいいのか不安になってきました。
物語の大幅な路線変更、設定バグ、オリキャラ過多、メズールなど。
これでいいのでしょうか？　私の痛い自己満足なのでしょうか？
今回はそれについてのご意見を募集します。
悪い点があればちゃんと書いていただけると嬉しいです。

第四十八話　壊れた筋書と儀式の始まり（前書き）

久しぶりの投稿です。
テストとか就活とか……すいません、言い訳です。

第四十八話　壊れた筋書と儀式の始まり

ここは亜空間。
別名称【空想の墓場】
捨てられたキャラクターや没設定、作者やシナリオライターの都合で殺されたキャラクターの執念や怨念が溜まる場所。
ここでＺＥＯは鼻歌交じりで作業をしていた。

「いや～、ＢＬＯＯＤ－Ｃには本当に世話になるよ～、最終回で一気に死者の設定が流れてきたから……利用できる設定が増えて儀式が始められる。そうだよ、ついに規定の数字に届いたんだよ！」

※作者はあの最終回は史上最高のトラウマです。断末魔の演技が凄すぎ。グロイので視聴するときはエチケット袋と強い精神を忘れずに。

ＺＥＯは近くにあるパイプオルガンを演奏し始めた。

「さぁ、今こそ殺された仮想の命たちよ！　今こそ現実という我らを殺す害獣を滅ぼそうではないか！！」

ＺＥＯは両手を広げた。
背後には無数の生体ポッドがあり、中の人間らしき生物は目を覚ました。

「さぁ、儀式の始まりだ！！」

第４８話
【壊れた筋書きと儀式の始まり】

――イズールｓｉｄｅ
――ガルクライフ社本社にて。

俺達主要メンバーはガルクライフ本社へ呼び出しを喰らっていた。ちなみに、俺の能力は大部分が回復、ＩＳは使えるが変身能力は不安定で、未だに鈴の姿がデフォルトである。

「今回……とあるアニメで大量に人が死んだ。その設定は消滅せず、敵の拠点に流れ着いている。今回はチフユサンダーのデータをもとに場所を割り出した。すぐに出発の準備をしてもらう」

ゼオルさんがそう話す。
俺は気になったことを話した。

「ゼオルさん。七巻の話は？」
「中止だ」
「簪さんの活躍は？」
「中止だ」
「襲撃は？」
「……襲撃してくるヤツが設定バグの可能性が高くなった。一体

ならいいが、五体はこのサーバーそのものが設定バグになる可能性があるから……それが理由だ。後、八巻が無い状態で七巻が終われば俺達の負け」

なるほど、そういう……じゃない！！　いままでの苦労どうすんだよ！！

あ～あ、簪さんなんか目を見開いてるよ。

「では作戦の説明だ」

【作戦内容】

裏空想世界サーバー『設定の墓場』を拠点にしているチフユサンダー・ＺＥＯの捕獲、または撃破。

○ＩＳとは異なる世界間の為、主要メンバーには専用の護符が必要である。

○設定が濃くない人物は護符があっても向こうで設定が空中分解してしまうので、一夏・箒・セシリア・シャルロット・ラウラのメンバーに護符が配布される。

○既に空想生命体である我々とイズールと凰鈴音は必要ない。

○参加しないメンバーは、ＩＳ学園の襲撃などに備える。

拠点侵入後について。

○チフユサンダーズが使っていたメインゲートから侵入。

○ＺＥＯは謁見の間にいるらしいので、謁見の間に急行する。

○恐らく迎撃態勢はとっていると思われるので、注意されたし。

○もしもの場合は、設定の墓場の核を崩して破壊する。

「作戦は以上だ。時間が無いからすぐに始めるぞ」
「「「「「「「了解」」」」」」」

――ＩＳ学園
――第三アリーナにて。

チフユサンダー達が何かの装置をセットしていた。
ウェブさんが指示をしている。

「そこのパーツを……そう、そんな感じ」

いろんな管やケーブルが繋がり、大きな魔法陣のようになっていく。
すると、ＩＳスーツに着替えたメンツが集まってきた。

「イズール、勝てると思うか？」
「一夏よ……デッド・オア・アライヴだよ。もう選択肢がそれしかないんだよ。やるんだよ」

俺は少し不安な一夏を落ち着かせようとした。

「それにしても……イズールは今まで陰で凄い事してきたんだな……」
「なんだ？　尊敬したか？」

「ははは、お前は本当に緊張感が無いな」
「褒めるなよ」

次に箒が話しかけてきた。

「イズール……」
「ん、箒か……どうした？」
「いや、お前には色々世話になったと思ってな。実感はないが……あの時一夏とキスをさせてくれたのはお前だったからな」
「あぁ……臨海学校の時か」

そういや……ラウラがタイムパラドックスしてしまったって言ってたな。

「その……ありがとう。この戦いが終わったら……一夏にもう一度告白して真相を聞くつもりだ」
「何だか死にそうなセリフだぞ！？」

次にセシリアがやってきた。
箒は……大丈夫かな？

「イズールさん」
「ん？」
「あの……原作から違うようになりましたけれども……ここまでみんなを生き残らせてくれたことに感謝いたしますわ」
「礼ならゼオルさんに――って、お前も全部読んでたのか！？」
「はい、おじ様からみせてもらいましたわ」

なるほど……そうしないといけないほど今回がヤバイって事か。

「メズールは？」
「お母さんもＩＳ学園防衛組にまわるそうですわ」
「そうか……あの事件以来会話してなかったからなぁ、帰ったら挨拶くらいするか」
「あの……それは俗に言う『死亡フラグ』なのでは？」
「……気にスンナ」

今度はシャルロットだ。

「イズール君、まだ鈴の姿から戻れないの？」
「多分最後までこの調子だろうな」
「そっか。僕達……勝てるよね？」
「勝つんだよ。何が何でも」

そしてラウラもやってきた。

「シャルロットも来ていたのか」
「あ、ラウラ。みんなの様子は？」
「やはり緊張しているが……ところでお前の姿は戻らないのか？」
「多分無理」

そしてゼオルさんがやってきた。
何だかすごいフル装備の機械を装備して。

「またせたな」
「ゼオルさん……その装備はなんだ？」
「ＩＳ学園防衛のための専用装備だ。通信もできる」

そしてゼオルさんが指を鳴らした。

「では、作戦開始！！」

――空想世界【設定の墓場】
――メインゲート前にて。

俺は周囲を見渡した。
空は紫色で不気味に雲が渦巻いていた。
他のみんなも周囲を見渡す。

『全員、ＩＳを装着せよ』
「「「「「「「了解」」」」」」」

全員がＩＳを展開した。

――ハイパーモード起動。

あれ？

「どうしたの？」

鈴が俺に近づいて心配する。

「ハイパーモードが強制発動された。しかも……安全装置が起動しない」
「それって……メトロイドプライム３の……惑星フェイザみたいね」

惑星フェイザと同じ……？
まさか！？

俺は巨大な扉を吹き飛ばした。
その向こうには大量のフェイゾンで汚染されていた。
青く不気味に光り、紫色の静電気を放っている。

「これは……最悪のラスダンだな」
「うわぁ……これは進めんのか？」
「触れたら即死ではないか！！」
「これ全部がフェイゾンですの！？」
「早速詰み！？」
「これは……僕の予想の斜め上かも」
「軍部が手を出していたらと思うと……ゾッとするな」

俺、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの順に意見を言った。
そういや敵は一応フェイゾンコアを取り込んでいるんだったな。
さて……俺は平気だが、みんなはどうしよう。

ピピピ♪

『こちらゼオル。フェイゾン反応を感知したがどうした？』
「こちらイズール。フェイゾン地帯になっている、どうすればいい？」
『全員に持たせた護符にはフェイゾンなどを無効化する力もある。有効に使ってくれ。こちらは設定バグの第一陣が来たところだ。私の現地入りはもう少し先になる、気を付けてくれ！』
「了解」

あの護符にそんな効果があったのか。

――メインホールにて。

薄暗い部屋はフェイゾンの青い光で不気味に輝いている。
周囲にはフェイゾンで変異した巨大なキノコ（足場替わりにもなる）が生えており、不気味さを増している。

「うぉっ、なんか変なキノコ踏んだ！」
「一夏、お前は少し落ち着け！　フェイゾンのキノコなんてそんな珍しいもんじゃないぞ？」

全員でフェイゾンのコケを踏みながら進む。
フェイゾンの上を歩くなんて滅多な経験ではないので、俺以外は怯えている。

「ラウラぁ……僕達大丈夫かなぁ……」
「心配するなシャルロット、私が付いている」

ラウラとシャルロットは相変わらずのいいコンビだ。

「一夏……平気か？」
「箒、意外と大丈夫だぞ？」
「護符……離すなよ？」

箒と一夏は相変わらずだ。
セシリアと鈴は……。

「セシリア」
「なんですの？」
「この戦い終わったら、あんた……あたしのハーレムにならない？」
「ッ！？！？」
「冗談よ」

何の会話だよ！！
死亡フラグを建設するな！！

すると、俺達の前に何かが飛び出してきた。

「キュイー！！」

「「！？！？」」

俺と鈴はソレの正体を知っていた。

【デバイドメトロイド】
パイレーツによってフェイゾンを注入されて変異したターロンメトロイド。
一定の攻撃を受けると分裂、それぞれが弱点属性のビームでなければ倒せなくなる。
分裂後の属性は以下の通り。
黄色がパワービーム。
紫がウェイブビーム。

白がアイスビーム。
赤がプラズマビーム。
しかし、パワーボムとフェイゾンビームを使えば分裂せずに倒せる。

俺はアームキャノンを構え、ハイパービームを照射。

ビシュゥゥゥゥゥゥ！！

「ギビャ！！」

バキャン！！

メトロイドは四散した。

「危なかった……」

「まさか……プライムの時のトラウマがいるなんて……」

俺と鈴はメトロイドの脅威を嫌というほど知っていたのである。
他のメンバーはメトロイドの破片を見つめていた。

「イズール、なんだこのクラゲみたいなのは」

「それはメトロイド……生き物に取りついてミイラになるまでエネルギーを吸い尽くす生命体だ」

「「ミ、ミイラ！？」」

セシリアとシャルロットはビビる。

そりゃそうだ、誰だってミイラになんてなりたくないもんな。
そんな事を考えていると大量のメトロイドが――！？
「全員！！　流石に俺だけじゃこの量は対処できない、逃げるぞ！！」
俺達はとにかく逃げた。
メトロイドに取りつかれたら、俺以外は対処の方法が無い。つまり死だ！！
ＩＳでとにかく逃げる。

メトロイドのスピードはＩＳに比べて遥かに遅いので、簡単に逃げれた。
「あぶねぇ……」
「あたし……こんなラスダンはキツイわ……」
「鈴、おつかれ」
「イズール……あんたねぇ――あれ？　この鍵付きの扉は何？」
そこにはフェイゾンで青く染まった扉があった。
今時鍵なんて随分アナログだな。
「イズール、そういやあんた……鍵あるわよね？」
「鍵？　そんなもの――」

――イズールの回想。
――【エピローグ？】　にて。

以下のアイテムを獲得。

○謎の鍵。
○現在販売されているＩＳの原作本全て。
○二週目への切符。

たしかにあった。
俺はＩＳの隠し収納から鍵を取り出した。

「鍵をＩＮ」

カチンッ！

「ひねる」

ガチャリッ！

まさかこんなところで伏線回収とは。

――謁見の間にて。

扉の向こうにはフェイゾンは無く、壁には黒い石のようなものが並んでいた。
部屋にはパイプオルガンの音色が響いている。
そしてヤツはいた。

「――ラ～、ラララ～……待っていたぞ」
「……ＺＥＯ――って、お前……姿が変わってないか？」
「当たり前だ、生物は進化するものだ」

空想の侵略者
【フラグメントゼオル】

空想の侵略者
【フラグメントゼオル】
捨てられたテンプレ神や転生者の設定をＩＳの二次創作経由で取り込み、安定したチフユサンダー・ＺＥＯの第二形態。
体内にフェイゾンコアや設定バグを生み出す核も保有する。
設定バグを操り、この世界を滅茶苦茶にした元凶。
正体はゼオルの設定のかけらの１％だが、その欠片に含まれる巨大な権限を使って野望を果たそうとする。
性格は昔のゼオル・ゲバインである。
実はゼオル・ゲバインの正体は、作者の物語を現地で管理するアバターである。

「さて……お前達……ここに来た限りは覚悟しろよ？」
「くっ！」
俺達全員は武器を構えた。
――続く。

第四十八話　壊れた筋書と儀式の始まり（後書き）

いつものようにご感想おまちしております。

第四十九話　空想の痛み、現実は知らず（前書き）

今回はフラグメントゼオル戦です。

第四十九話　空想の痛み、現実は知らず

俺達は武器を構えた。

「待て、まずは少し話をしよう」

「話？」

フラグメントゼオル（以下、フラグメント）は武器を構えずに語りかけてきた。

「まずは壁にある黒い石をよく見てみろ」

「黒い石？」

俺達は黒い石を観察した。

そこには何かが彫られている。

――佐倉杏子、ここに眠る。

――美樹さやか、ここに眠る。

――巴マミ、ここに眠る。

――クイント・ナカジマ、ここに眠る。

――御坂妹、ここに眠る。

――神宮寺まりも、ここに眠る。

――神楽坂明日菜、ここに眠る。

――ネギ・T・シルバーバーグ、ここに眠る。

他にも『ここに眠る』と書かれた黒い石が壁に無数に存在した。

これはまさか……。

「……これって……」

「そう、これは全部墓だ。シナリオライター、製作者、原作者、アニメ脚本家の勝手で殺された……かわいそうな同胞達だよ。没設定やタイムループ系で蘇った存在も例外ではない、確実に死んだという事実は存在する」

フラグメントは少し慈愛の表情で墓を見つめる。

「現実人は……勝手な演出で俺達を殺すんだ、その時の俺達はどうだ？　なんだか訳もわからず殺されて、痛いんだよ？　苦しいんだよ？　そしてなによりも……この真実を知った時は悔しいんだよ！！」

フラグメントは黒い石を拳で殴って破壊した。

そこには『ミスターZ、ここに眠る』と彫られていた。

俺は後悔の思いが込み上げる。ヤツの元を焼いた人物の記憶があるからである。

「一夏、お前はどう思う？」

「お、俺！？　俺は……今正しいと思う事をするだけだ！　今はお前が世界を壊そうって言うのなら、それを止めるだけだ！」

「そうか……だが、そんなお前も罪人の一人だ」

「どういうことだ？」

「お前が小説の人物だとして……『没設定』無しに生まれると思っているのか？　お前は複数の兄弟を殺してまで生き残った、生まれながらの罪人なんだよ」

「……でも、今をほっとけない」

「……そうか、お前、根は良いヤツだからな」

フラグメントが一夏に微笑みかけた。

次に箒へ向く。

「箒だったな？　お前はまったく進まない恋愛の原因が何だか分かるか？」
「お前の言う『製作者』と言うやつの存在か」
「そうだ、もはや八巻でも物語が進むか分からないが、それでいいのか？」
「……我々がただの登場人物だというのなら、お前はどうする？　お前も誰かが作った脚本の上でなければ、何も感じないのではないのか！？」

箒は声を荒げた。
箒も自分の人生に納得できない部分があるようだが、否定はしないようだ。

「……俺の物語は、とっくの昔に完結することなく焼け落ちた。だからこんなことをやっているんだ。全ての物語を統合し、影響力を高めれば、原作すら干渉できるようになり、結果的に現実を操れるのさ！！」

フラグメントは両手を大きく広げた。
その顔には邪悪な笑みがあった。

「さぁ、お前達もあんなクソ忌々しい現実を捨てて自由になろう？　さぁ、こっちへ来るんだ！」

フラグメントは手を伸ばす、しかしそれに賛同する人物はここにはいない。

「フラグメント、お前の野望よりも、自分達の人生の方が良いに決まってんだよ」

「……フフ、フハハハハ！！　ハーハッハッハッハ！！」

フラグメントは大きく笑う、狂ったように笑う。
そして、少し顔を抑えながら笑いを治めた。

「……だよな、お前達の考えも誰かに設定された脚本なんだよな、すっかり忘れてたよ……聞いた俺が馬鹿馬鹿しい。だったら――」

ギンッ！！
ジャキンッ！！

周囲のパイプオルガンが消え、部屋が戦闘用の部屋に変わる。
フラグメントにＩＳと、双剣が装備された。

「――俺の理想の空想か、お前達のクソみたいな現実か……どちらがこの世に相応しいか……はっきりさせよう！！」

空想の侵略者
【フラグメントゼオル】

ＶＳ

空想生命体
【イズール・ユ・ミヅル】
＆
主人公
【織斑一夏】

&
一夏の幼馴染
【篠ノ之箒】
&
イギリス代表候補生
【セシリア・オルコット】
&
空想生命体
【凰鈴音】
&
フランス代表候補生
【シャルロット・デュノア】
&
ドイツ代表候補生
【ラウラ・ボーデヴィッヒ】

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏ｓｉｄｅ――

ついに戦闘が始まった。
この世界を滅ぼせるらしいヤツに勝てるのか？
とりあえず攻撃を開始する。

「行くぞ、雪羅――」
「織斑一夏の設定変更！　雪羅削除、白式のファースト・シフト以前まで」
ガクンッ！！
え？
俺のＩＳが急に失速して地に落ちた。
ズドンッ！！
「痛っ……な、なんだよこれ！！　白式の最初の頃になってる！！」
俺の白式がセシリアと初めて戦った頃の状態まで戻っていた。
「篠ノ之箒の設定変更！　お前に専用機は必要ない！　打鉄だけで十分だ」
「なっ――」
「箒！！」
箒の紅椿がバラバラになって、いつのまにか打鉄に変わっていた。
一体どうなってんだ！？
「一巻の設定でフォーマットをちょっとやっただけでこれとは……俺に挑むには準備が明らかに不足してるな、俺の大部分は何を考えて送り込んだんだ？」
敵は何かを言っているが……そんなことよりコレどうするんだよ

！！

「ラウラ、援護して！！」

「わかった」

シャルロットとラウラがコンビネーションで攻撃する。

「自身の設定変更、遊戯王系転生者の設定発動」

敵はピンク色の紙のような物を取り出した。なんだあれ？

「罠発動、【聖なるバリアーミラーフォース】攻撃してくる敵を薙ぎ払います」

「きゃぁぁあ！！」

「うわぁぁあぁ！！」

シャルロットとラウラが妙な光に吹き飛ばされた。

なんなんだよ……本当に。

「一応言っておくが……俺は最近の――」

ガンッ！

敵がシャルロットを踏みつける。

「あぐ――」

「深夜でやっているようなハーレム物で――」

次にラウラの首を片手で掴んで持ち上げる。

「ぐあ――」
「勝手に嫉妬して殺傷能力あるものを主人公に向けるような常識の欠片も無いキャラクターがいるような作品が――」
「やめろぉぉぉぉ！！」
俺は不完全な白式で突撃する。
このままじゃあ二人が――
「大ッ嫌いなんだよ！！」
敵はシャルロットを箒へ、ラウラを俺の方へ投げ飛ばした。
俺はラウラを受け止めるが、勢いで吹き飛ぶ。箒も同じだ。
「設定変更、ガ――」
「「チェストォォォォォ！！」」
「グボファ！！」
突然、イズールと鈴が敵を蹴り飛ばした。
「大丈夫か？」
イズールが俺に話しかけてくる。
「あぁ……なんとかな」
「実はヤツの設定変化は無防備になる弱点みたいなもんなんだ。あの黒い墓石から情報を得ていたからなんとか分かったんだが」
「そんな事にはもっと早く気付いて欲しかった……」

そんな会話の中、敵が立ち上がった。

「正解だ、良い観察力だな。一応初見殺しレベルだったんだが……たしかに、俺は設定変更時はほぼ無防備だ。転生者の設定は安定しても、その転生者の持っている能力を使うには隙が出来るのさ」

敵は双剣を構える。

「まぁ、設定変更しなくてもそれなりの実力があるからカバーは可能だ」

「一夏、ファースト・シフトは大丈夫か？」

「それは――」

――全システム調整完了。

「よし、なんとかなった」

「本番だぞ！　気を引き締めろよ？　鈴、そっちは作業を頼む」

「――了解！！」

イズールは鈴になにかの指示を出したのが気になった。

「鈴にはこちらが使える設定核の収集を頼んだ。少し時間を稼ぐぞ、やれるな？」

「そういうことなら――」

俺とイズールは武器を構えた。

一夏ｓｉｄｅ　ｅｎｄ――

――シャルロットｓｉｄｅ

なんというか、僕達の想像以上の敵だ。
ラウラのビーム手刀を片方の剣で相手をし、イズール君のビームを避けて、一夏の攻撃を受け流す。まるで流れ作業のようだ。

「ラウラ！！　なんとか動きを止めてくれ！！」
「まかせろ一夏！！」

ラウラのワイヤーブレードを放つ、敵は瞬時に双剣を消し、向かってくるワイヤーブレードを避けて、空中で姿勢制御しつつ射撃をする。僕はその隙を狙ってラピット――

「――行け、ビット達よ！！」

ビシュン！！

敵の背中から無数のビットが飛び立つ。
僕はそれを避ける。

バシュンッ！！

すると、ビームがあり得ない動きをして曲がった。

「なっ！？　ビームが曲がった！？」
「あぶないですわ！！」

セシリアのビームが敵のビームを相殺させた。

「あ、ありがとうセシリア」
「そんな事より、早く援護を」
「分かった」

僕とセシリアはフォーメーションで波状攻撃を仕掛けながら敵に近づく。

ビシュンッ！！
ズガガガガ！！

「ちっ、数が多いか……ならば、ハイパーモード、イグニッション！！」

バシュゥゥゥゥゥン！！

敵に青く不気味に光る装甲が装着される。その姿はまるで鳥人。
あれは……まさかフェイゾン！？

「まだまだぁ！！」

攻撃に態勢が付いた敵はこっちの攻撃を無視して突っ込んでくる。
イズール君もハイパーモードは最初からハイパーモードなので、敵に攻撃をする。

「まだ浅いぞ？」

「深くすりゃいいだけだ！！」

もう……グレー・スケールしかダメージは通らない。やってみる価値はある。

「イズール君、ヤツの動きを止めて！！」

「ちょ、無茶言うな！！　こっちだって大変だっての！！」

「いいからお願い！！」

「ああもう！　ちゃんと作戦あるんだろうな！？」

イズール君は敵をアームキャノンで叩き伏せ、拘束する。

僕は瞬時加速で一気に距離を詰め、パイルバンカーを展開する。

「グレー・スケ――」

ザシュンッ！！

「……え？」

「お前がその技叫ぶってことは……腕を前に出すということを敵に教えているような――」

ズバンッ！！

……ドシャ！！

「――もんなんだよ！！」

僕の腕に変な感触がよぎった。そして、届いているはずのパイルバンカーが命中していない。

「……」

僕は恐る恐る自分の腕を見た。

そこに……僕の腕は無かった。

「……あ……あぁッ！！」

「まったく、この世界はもはやＩＳではない、絶対防御が確実に発動する訳もないのに……バカだな。もちろんヒロインだからってご都合主義が発動する訳もない。死ぬときは死ぬ」

「あぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ！！！」

言葉にならない激痛が襲う。（以下、表現不能）

――シャルロットｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

こいつ、自分の足を変形させてシャルロットの腕を切り落としやがった。シャルロットはすごく表現し辛い悲鳴を……ん？　切られた腕から血が出ていない？

「ただ設定を切断しただけだ。適当にくっつければ元に戻るし、痛みもすぐに治まる。所詮、お前らが死んでもＩＳが使えるだけの設定なんていらないよ」

フラグメントは俺を突き飛ばし、体勢を整える。

「さて、設定変更！！　リリカル系の――ん？」

フラグメントは自分の手のひらを見る。そして周囲を見渡す。

どうやら……鈴が仕事を成功させたらしい。

「お前……能力のタネに気付いたな？」

「その通りだ。お前の能力は転生者以外の版権型能力は周囲の墓石から接続しているだけだから、ちょこっと細工すればお前は能力を使えないことはスキャン済みだったんだよ」

ヤツは転生者の純粋な能力以外は周囲の黒い墓石から能力を接続して得ている。それを接続不能な状態に変えてやれば随分と能力が下がる。

鈴には墓石の破壊などを命令していた。破壊する為にジャイアントストラトスのパーツが役に立つなんてな……。

「こちらイズール、鈴……よくやった！！」

『いや……あたし何もしてないわよ？』

は？

０８『ソレハ私デース』

空からヤツは現れ、フラグメントを攻撃した。

「０８！？　なんでここに？」

０８『ミンナヘノ最終兵器ヲプレゼンツネ～』

０８は何かのライフルのようなものを取り出した。

０８『コレハ……設定不安定弾だ。ヤツの転生者の設定で覆われた外殻を取り払うことが出来る。到着が遅れた理由は、さっきまでダークサムスの再現体と戦っていたからだ、許せ』

０８……お前本当はすごく強いのか？

俺はライフルをとりあえずフラグメントに撃った。

「当たれ」

「甘いわ！」

０８『そっちこそ甘いぞ！！』

フラグメントの攻撃を０８が弾き、片腕だけのシャルロットが追撃する。

「うぉぉぉぉぉぉ！！」

それに反応して、フラグメントはライフルの弾を避け損ねた。

ダンッ！！

「な――が――俺の……設定が……」

パキリ
ピキン
パラパラ

『ガ……声が……俺の……体がぁ！！　そんな……こんなたったの数行で逆転だなんて……まだだ！！』

設定が剥がれたフラグメントはフェイゾンの装甲に覆われた人形のような姿になっていた。

『転生者！！　お前だけでも――』
「これで終わりだ、そして――」

俺はいままでの出来事を回想しながらハイパービームを放った。

「ごめんな」

ビシュゥゥゥゥゥゥ！！

○フラグメントの敗因。
他のキャラの設定を使える事による油断。
数の不利。

――続く。

第四十九話　空想の痛み、現実は知らず（後書き）

次回でやっとラスボス戦です。
ご感想待ってます。待ってます……。

第五十話　ＩＳ学園のドッペルゲンガー（前書き）

ラスボス登場です。
ここで簡単な作り方の紹介。
○まずはこの世界を題材の空想世界とは無関係にして不安定にさせます。
○たくさんの設定を用意して注ぎます。
以上です。簡単でしょう？

第五十話　ＩＳ学園のドッペルゲンガー

気が付くと、俺達はＩＳ学園の第三アリーナにいた。
全員もそこにいて、一夏、箒、シャルロットに起こった設定変化も直っていた。

「全員無事……みたいだな」
「あぁ……終わった……のか？」

俺と一夏が周囲を見渡す。
周囲には戦闘したと思われる形跡と、イナゴ兵の残骸が転がっている。
空は無駄に青空である。

「あっ、おりむーにみんなだ♪」

向こうの方からのほほんさんがやってきた。
俺はのほほんさんに話しかけた。

「ただいま。そっちはどうだった？」
「大変だったよ。戦力終結させてなんとか撃破したんだよー」

このイナゴ兵の残骸はそのためか……。
そして、ゼオルさんがやってきた。

「おつかれさん、すまんな……援護に行けなくて」
「いや、結果が良かったから大目に見ますよ」

ゼオルさんはなぜか空を見上げている。

「どうしたんですか？」
「……実は、この二次創作サーバーの設定核が行方不明になった」
「このサーバーの設定核が！？」

空想世界の設定核となると……サーバー管理のコンピュータのようなものだ。それが行方不明とはどういうことだ？

「なんだかとっても嫌な予感がするんだよな～」
「そんな不吉なことを言わないでくださいよゼオルさん……」

空を見たら、歪んだ空間が――えッ！？

バチリッ！！
ビリバリリリリｒｒｒ！！

空間を引き裂いて何かが現れた。

『まだだ……まだ……オわってナい！！！』

首から上が無く、左足も無く、胴体が一部損失したフラグメントが現れた。

「フラグメント！？」
「久しぶりだな……俺の１％」
『ヒサ――だ……大部分』

そういや元は一人だったな……この二人。

『もう……油断はしない。最初から本気で全能力をフル稼働でいくぞ！！』

フラグメントの背中から無数の半透明の触手が生える。そして空間の歪みへと次々と刺さって行く。

――幻想郷サーバーにて。

「なっ！？　あ、あれなんだ！？」

「新しい異変かしら？」

ヒュンッ！！

ザシュンッ！！

「――！？」

「魔理沙！！？」

魔理沙と呼ばれた少女は触手に貫かれた。

抜かれた触手にはビー玉のようなものがくっ付いていた。

「痛ッ――この野郎！！」

少女は手をかざすが、何も起きない。

「あ、あれ？　だ、弾幕が……出ない！？」

「どういうこ――」

ザシュンッ！！

「キャァ――！！」

「ア、　アリス！！」

アリスと呼ばれた少女も触手に貫かれ、何かを抜き取られた。

「うぇ……あ、あれ？　傷が無い。まさか私も――」

アリスは手をかざす、しかし何も起きなかった。

「嘘……人形も動かない」

「あ、あの触手……消えやがった！！」

森には少女二人が残された。

――別の場所では。

「あなたは食べてもいい人間？」

「う、うわあああ」

「待って――」

ザシュンッ！！

「――へ？」

――さらに別の場所では。

「チルノちゃん！！」

「だ、誰か助け――」

ザシュンッ！！

――さらに別の場所にて。

「霊夢、これは異変どころじゃないわ」

「紫……あんたが顔を青くするってことは相当ヤバイみたいね」

二人は触手に攻撃する。

数本が破壊されるが、残りが襲い来る。

「しかも私の能力がまったく効かないなんて」

「あれは妖怪なの？」

触手から高出力のレーザーが発射される。

少女二人は、それに見覚えがあった。

「あれは魔理沙の――」

霊夢と呼ばれた少女の背後に触手が現れ、霊夢はそれに反応する。

「ち――」

ズドンッ！！

すると、もう一本の触手が霊夢を足かけする。

「な！？」

「知能がある！？」

バランスを崩した瞬間に触手は霊夢を殴り飛ばした。

「キャァア！！」

「霊夢！！」

霊夢は神社に衝突し、触手に貫かれる。

ザシュンッ！！

「あぐ――」

霊夢からビー玉のようなものが抜き取られる。

「大丈夫！？」

「かはっ……あれ？　傷が無い？」

霊夢は再び戦闘態勢を取る。

「何が目的なの……？　あんた知らない？」

「あれが妖怪なら知っているはずなんだけどねぇ……」

触手は先ほど紫と呼ばれた人物に迫る。

「援護するわ――」

霊夢はジャンプする。

ゴシャッ！！

しかし、そのまま頭を地面に打ち付けた。

「ッ！？　飛べない！！」

「え！？」

それに油断した紫は触手に貫かれた。

ザシュンッ！！

能力を喪失した紫の影響により、二次創作世界の幻想郷の一つは、滅んだ。

――他の二次創作サーバーにて。

ここは神様のいる場所。
転生者を送り出した神の一人、アテナは仕事をしていた。
「いや～、コーヒーこぼすのは勘弁よね～♪　あれ？」
目線の先には空間の歪みがあった。
「なにかしらこれ――」
ザシュンッ！！

――とある魔術の禁書目録サーバーにて。
学園都市を触手が襲来していた。
ここには超能力者なる者たちがいるが、全員が襲われていた。
「な……なんですの、あれは！！」
緑色の腕章を付けた少女は顔を青くしていた。
そこに別の少女が現れた。
「黒子！！」
「お、お姉様！？　ここは危険です、早く非難を――」
「そんなこと言ってる場合じゃないのよ！？」
「馬鹿はお姉さまの方です！！　能力者や現代兵器が役に立ってないのですよ！？」
「そんなの、レベル５になれば――」

少女はコインを上に投げる。
「――分かんないじゃない！！」
ドシュゥゥゥゥゥ――
強力な一撃が触手を薙ぎ払う。
「ふ、どんなも――」
バカンッ！！
油断した少女の背後の地面から触手が現れる。
「嘘！？」
「伏せろ！！」
青年が現れ、右手で殴る。
触手は怯む。
「へ？　こいつ……消えない！？」
ザシュンッ！！
青年が触手に貫かれた。
そして何かを抜き取られた。
「大丈夫！？」

少女は青年を心配するが、青年は怪我一つない。

「あ、あれ……なんともない？」

「よ、良かった……」

少女が安心する。

先ほど黒子と呼ばれた少女は状況の変化に怯えていた。

「お、お二方……今はヤバイ状況ですの……」

「「へ？」」

ウネウネ……。

グバンッ！！

突如、触手全てが人間の手の形になった。

「「「……」」」

誰かが火の玉を撃つ。

「くたばれぇぇぇ」

しかし、触手に届く寸前に消えた。

「あれは！？」

「俺の幻想殺し！？」

「……ですの」

触手は火の玉を撃った人物を向く。

「ひっ、ヒィィィィ」

その人物は逃げた。

触手は指で鉄砲の形を作る。

ズドォォォォォォォォォォン！！

さっきまで火の玉を撃っていた人がいた場所は巨大なクレーターになり、建物は根こそぎ無くなっていた。

「おい……ビリビリ……」

「……今は名前がどうのこうの言ってる場合じゃない！！」

「お姉様の……超電磁砲（レールガン）！？」

学園都市の危機は続く。

――魔法少女まどか☆マギカサーバーにて。

五人の少女たちは触手の襲撃を受けていた。

「ほむらちゃん……あれ何……」

「知らない……あんな魔女……見たことない」

触手は手の形をしており、既に三人がやられて、魔法が使えなくなっていた。

「ソウルジェムまで無くなってる……」
「おいっ、どういうことだよ！！」
「ティロ・フィナーレがまったく効かないなんて……」
その近くには白いぬいぐるみのような生物が様子を見ていた。
「まずい……このままじゃノルマが――」
ザシュンッ！！
ポテッ！
「きゅ、キュウべえ！？」
「まどか、そんなやつに構ったら――！？」
黒い少女は白い生物を拾い上げる。しかし、生物の感触は無かった。
「……ぬいぐるみになってる」
「「「「えぇー！？」」」」

――リリカルなのはサーバーにて。
触手と六課の人々は交戦していた。
「くそっ、わけわかんね！！　なんで魔法が全部きかねぇんだよ！！」
「落ち着いてヴィータちゃん！！」

「なのは！　これが落ち着いていられるか！！　スバルは戦闘機人から生身の人間になっちまうし、フェイトは魔法使えなくなるし、ヴィヴィオなんか……能力がスッカラカンになっちまってんだぞ！！」

ザシュンッ！！

「うわぁぁぁ！！」

「はやて！！」

「はやてちゃん！！」

――そして現在のＩＳ学園のドッペルゲンガーのサーバーにて。

――イズールｓｉｄｅ

異次元に突き刺さった触手が大量の設定を運び込んではフラグメントの体に押し付けていく。

『足りない……まだ足りない……もっと……もっと体を』

「ゼオルさん……これは」

「あぁ……マズイな」

どんどんフラグメントの体は膨張し、無機質な姿へと変わっていく。まるで巨大なＩＳのように。

そして５メートルほどで成長が止まり、欠けた肉体も埋まる。

『俺はどんな手を使っても全ての空想世界を統合し、現実を屈服

させる。そう、俺はこの物語で真の空想生命体。俺の名は――』

負の遺産
【ＩＳ学園のドッペルゲンガー】

負の遺産
【ＩＳ学園のドッペルゲンガー】
テンプレ神や転生者を骨組みとし、この世界のサーバー核をコアにして、様々な二次創作世界のキャラクターで肉付けした理論上、単純で究極の空想生命体（キャラクター）。
『消えたくない・死にたくない・構ってほしい』というキャラクター達の執念の集合体。

元々は、ガルクライフ社が理論を作って封印した負の遺産。空想世界侵略兵器なんかとは遥かに格が違う。能力は取り込んだものによって変わる。
基礎能力は、慣性の法則や重力無視の能力。

このバグだらけで歪んでしまった物語そのものであり、生きた物語である。
実は取り込んだ設定は水と油のように混ざっていないので、能力は使用の際、切り替えなどがひつようで、同時使用は出来ない。
無敵のように見えるが、実は全ての設定はゼオルの欠片１％のみで制御してる為、そこが攻略のヒントとなる。

ＩＳ学園のドッペルゲンガーは近くにいた三年生、ダリル・ケイシーを見る。

「お？　やろってのか？」

ダリルは武器を展開する。

「ちょ、先輩！！　あんなのとやるッスか！？」

後輩のフォルテはＩＳ学園のドッペルゲンガーの危険さを感じ取っていた。

「コンビネーション『イージス』でいくぞ？」
「い、嫌ッス！！　死んじゃうッス！！」
「腰抜けが、だったらそこで見てな」
「や、やめるッス、先輩！！」

――戦闘開始。

６００
「さぁ、くらいな！！」

ダリルの攻撃、ライフルが放たれる。

１２０のダメージ。
&％＝～　↓　“＃&％
『邪魔するか？』
――反撃不能。

ダリルの攻撃は全部命中するも、まったく効いていない。
「なんできかねぇんだ！？」
『俺をＩＳのように思ってる時点でお前の負けだ』
ＩＳ学園のドッペルゲンガーは手をかざす。
そしてダリルのＩＳが動かなくなる。
「なっ、おい動け――」
『その幻想を――物理的に殺す』
ズガンッ！！
ダリルが地面に屈服した。
俺はアームキャノンで敵を攻撃するが、びくともしない。
『超電磁砲』

ズドォォォォォォォォン！！

ダリルが地面と共に消滅した。

『俺はこんな連中に密かに計画練っていたのか？』

「せ、先輩ィィィィ！！」

フォルテが叫ぶ。

周囲にいた生徒が逃げ始める。

『まだ足りない！！　こんなのじゃあ！！』

教師達が集まってくる。

「先生方！！　来るんじゃない！！　死んでしまう！！」

「生徒のみなさんは早く逃げてください」

「そういう話じゃないんです！！」

『瞬間移動』

「へ？」

敵が教師の一人の背後を取る。

『超電磁砲』

ズドォォォォォォォン！！

教師一人が消滅する。

こいつ……予備動作とチャージが必要ないのか！？

『決着をつけるぞ、転生者！！』
「くそっ！！」

負の遺産
【ＩＳ学園のドッペルゲンガー】
ＶＳ
ＩＳ学園軍団＋α

俺が攻撃するも、まったく効果は無い。
敵は余裕でこちらに近づいてくる。

「食らいやがれ！！」
『プラズマザンバー！！』

敵の腕に黄色いブレードのような物が展開された。あれは……どこかで……。

「イズールの坊や、私に任せなさい！！」

どこからかメズールが現れた。

「メズールか！！」

メズールは腕から水を放つ。

『幻想殺し』

敵は右腕を構え、それを消滅させた。

「嘘！？」

『異分子が、消えろ！！　設定昇華』

バリンッ！！

「メズール！！」

メズールは敵によってメダルの山に変えられてしまった。

こいつ強すぎにもほどがあるだろ！！

「あの馬鹿！！　あのままだと暴走するぞ！！」

ゼオルさんの表情が変わる。

「どういうことですか！？」

「このサーバーの核使ってこの世界を攻撃したら取り込んだサーバー核に傷や不具合が出る。その不具合や傷に他の設定が染み込んだら……」

急に空が紫色になり、周囲が紅い霧に覆われ、空間が歪み、黒い霞のような物体の生物が現れる。濃い魔力で覆われ、青い粒子が舞い、雷が鳴り始める。

『何が……ナ――』

ベリ……。

ガシャンッ！！

ＩＳ学園のドッペルゲンガーの表面の装甲が剥がれ、有機物のような醜い姿へと変わっていく。

「やっぱり……所詮『究極』は『完全』ではないってことか……昔に計画倒れになって正解だったようだな」

「関心してる場合じゃないですよ！！」

そしてＩＳ学園のドッペルゲンガーは『災厄』と化した。

――続く。

第五十話　ＩＳ学園のドッペルゲンガー（後書き）

倒す方法はありますのでご安心を。
ご感想お待ちしております。

第五十一話　強い思いは世界を変える（良くも悪くも）（前書き）

今回で決着です。

第五十一話　強い思いは世界を変える（良くも悪くも）

ズシャンッ！！
ズシンッ！！

変貌を遂げたＩＳ学園のドッペルゲンガーは行動を開始した。

『うぉぉぉ＆ａｍｐ；％（），Ｉｊ„』

声が一夏と箒が同時に喋ったような声になる。

『人類には設定ガ――ナノダ！！　さすれば――ハ――い』

赤い霧と紫色の空で禍々しく見える。
もはや究極の生物というよりは邪神に近い。

「全員、攻撃開始！！　残りは生徒の避難を優先させろ！！」

千冬先生が叫ぶ。その指示で全員が動き出した。

ドガガガガ！！
ダンッ！！
ズガガガガガ！！

ＩＳを装備した人間で一斉に攻撃するが、少し怯むだけで効果は無い。

『空想……救われルことナク……構われるコト無く――跳躍！！』
【瞬間移動】

「全員、回避だ！！」

全員が複雑な動きで回避しようとするが、どこかの専用機持ちの背後に敵は現れる。

「ちっ、このっ！！」

銃声が鳴り響く。
しかし効果は無い。

『夢想……夢にすら忘れられたワレラ……恨ミ……封印サレルことなく』

【夢想封印】

カラフルな弾幕がホーミングで専用気持ちを襲う。
カラフルと言っても、どれも深い色でダークな感じがする。

「い、嫌ァァァァァ――」

ダンッ、ダダンッ！！
ビシャァ！！

血しぶきが舞い、その生徒――だった物の右腕だけが無残に転がり落ちた。

「うぇェェェェ！！」
「う、うわぁぁぁぁ！！」

複数の生徒はその光景に恐怖を覚える。

俺達もその光景に少し戸惑うが、止まるわけにはいかない。

「一夏、雪羅は使えるな？」

「おう、さっきは大変だったけど使えるぜ！！」

「すまないが、襲われそうな生徒がいたら助けてやってくれないか？　無理か？」

「任せとけ、これでも結構戦えるんだ」

「……過小評価してたか、すまないな」

俺と一夏は握りこぶしを合わせて行動を開始した。

俺は箒に連絡をする。

「今の聞いてたな？　箒は一夏の援護を頼む」

『任せろ！！』

『境界……物語を繋ぎ、滅びは始まる――始まり……グォォォォォォォ！！』

【式神「八雲藍」】

亜空間から狐の尾を持つ人間のような物が現れる。

「あれ、紫様――なんだこいつは！？」

ドシュドシュ！！

その人物に触手が突き刺さる。

「ぐあっ――」

そしてその人物の体が不気味に変化していく。

「あ……がぁぁあぁぁあaaAaaaaGYAaaaa！！」

設定バグ
【八％＃】

設定バグがシャルロットを襲う。

「Guryaaaaa！！」
「このっ！！」

シャルロットが発砲してダメージを与える。
設定バグ程度だとダメージは通るらしい。
八雲藍はもはやただの暴徒のような攻撃しかしてこないようになっていた。

「……」

俺は無言で八雲藍だった物にハイパーミサイルを撃ちこんだ。

ズドォォォォン！！

「――！！」

設定バグはバラバラになって設定の砂になった。
あいつ、二次創作の平和がどうこう関係なくなってる。

「シャルロット、大丈夫か？」
「うん、ありがとうイズール君」

俺達は敵を見た。
どんどん酷い状況へと悪化している。

紅い霧が濃くなっていき、空にはヒビが入る。
もはや世界崩壊一歩手前のような感じだ。

『世界……私の世界……俺の世界……僕の世界……』
【&

ッ！？　つまり全員Ｇの負荷でこうなったのか！？
なんてこった制御系を一時停止出来るなんて……。
俺は連絡した。

「各員、ＰＩＣが消えている！！　一定のスピードを出したら慣性で胃の中がシェイクだ！！」

その無線を聞いて全員がスピードを落とした。
危機一髪……なんて生易しくはないか。これじゃあ敵の狩りが有利になる。

『夢が夢を――ケヒャヒャヒャヒャ』

強すぎる……こいつ、倒せるのか？
そう思う――れ――にｊ＆ａｍｐ；，％４６（９０００――＾＾０－８６５ｔｇｙｔｙｗａｒｄｒあうぇｄｒｆｔｇｙｈつｆｒｈｗｊｊぎおｂけぺ；：；ｒｈ：ｂ；ｔｋのじいおｔｒｗ；おいｈつ９おｂ０８７とぉじｐｂｂｂｂｂｂｗ４ｐｊｈ８う７８７いおペおつｈ２いｒｊｆぴぐｒ８０へｊら@あ）ｒヴぁｋ、ｍｂ

――イズールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――ゼオルｓｉｄｅ

俺はＩＳ学園のドッペルゲンガーの装甲を引きはがした。

ベリッ！！

『ガァァァァ！！』

「いい加減黙ってろ」

剣で傷口を攻撃する。

ちょっと今の衝撃でサーバー全体が大きな不具合が一瞬起きたが、仕方がない。

俺は広げた傷口に腕を入れ、一部の設定を引き抜く。

ブチンッ！！

『グリャァァァァ！！』

「これで少しはマシになったか？」

俺はＩＳ学園のドッペルゲンガーに振り落された。

「やっぱり、俺の欠片は混ざってなかったか。露出まで出来たから、あとは引っこ抜くだけ！！」

ＩＳ学園のドッペルゲンガーに光る小さなコアのようなものが表面に現れる。あれが俺の欠片だ。それを剥がせば、あいつは崩壊するはずだ。

俺は全員に呼びかけた。

「各員、露出したコアを狙え！！」

『え！？　大丈夫か？　あれって――』

「心配するな、適当な事じゃ壊れない」

『了解した』

さって……反撃開始だ。

――ゼオルｓｉｄｅ　ｅｎｄ

――イズールｓｉｄｅ

「全員、コアを狙え！！」
「「「了解！！」」」

全員が一斉にコアへ攻撃する。
一応効いているようには見える。

『世界が止まる……トきが止まる……我の時間は止まったまま』
【ザ・ワールド】

まずいっ！！　時間系は本当にまずい。

「――当たりなさい」
「……ッ！！」

ダダダダダ！！

あれは……楯無会長に簪さん！？

「頑張ってる？　イズール君」
「イズール君！！」

ガバッ！！

いきなり簪さんが抱きついてきた。

「おわっ！！　どうしたんだよ」
「心配したんだから！！　本当に……」
「あれ？　簪さんってこんなにハキハキ喋った？」
「いつのまにか……こうなってた」

これも敵の影響なのか？　とにかく時間停止は回避できた。

そして全員が攻撃する。
ＰＩＣも回復済みなので自由に戦える。

『滅ベバ――ワ――％＆ａｍｐ；％』

ついに敵が限界まで変形した。
背中は棘だらけ、周囲は血の海のような赤黒い霧、空は紫、敵の装甲は禍々しく、この世の終わりと見間違えるほどである。

『ギャラララララ！！』

敵は巨大な咆哮をあげた。周囲の大気が震え、ガラスが砕ける。

「撃て、撃ちまくれ！！」
『星砕き、俺――ガ――』

【スターライトブレイカー】

Ｇｈｈｇｅｋｒｊ$％＆ａｍｐ；，７ｔｙｒｗｉｇｇｈｕｅｏｔｈ

【スターｒ，＆ａｍｐ；％＆ａｍｐ；】

ズドォォォォォォォォ！！

敵は強力なビームをチャージ無しで放った。
しかし、なぜか軌道はズレ、海へ命中した。

ギンッ！！
ドォ……ン……。

海面が大きく膨張し、光の柱を描く。
桃色の光は周囲を光で包み、蒸発させる。

「あれ……チャージ無しで撃っていいもんじゃないだろ……」

すると、敵に変化が現れた。

『ガ――ギ……Ａａ』

なんと桃色の光が体のヒビから漏れ出していたのだ。
これはチャンスだ。

「鈴、一気に行くぞ！！　ほかのみんなは援護をお願いします」
「あいよ♪」
「「「了解！！」」」

俺と鈴は敵に向かって突き進む。
銃声と指示が飛び交う中、俺と鈴はコアまでたどり着く。
そしてコアを掴む。

「「抜けろォォォォォォ！！」」

ギリリリリ……。

『％&

――？？？にて。

「あれ？」

俺達四人はいつの間にか知らない場所に来ていた。

「イズール、ここどこ？」

「どうなってんだ？」

「私は……なんでこんなところに？」

場所は公園のようだ。

時間は夕方、夕焼けが綺麗に照らされている。

「イズール、あそこにだれかいるわよ？」

「え？」

鈴の言葉で振り向いた俺達の目の前には金の仮面を付けた子供がブランコで遊んでいた。しかし、楽しそうには見えない。

俺達はその子供に話しかけてみた。あの仮面……どこかで。

「……まってたよ。隣に座りなよ」

子供は俺に隣のブランコに座るように指示した。

「お前は誰だ？　それにここはどこだ？」

俺は座りながら問いかけた。

「俺――いや、僕は……ミスターZ。君達の敵……かな」

「ミスターZ！？」

落書き
【ミスターZ】

落書き
【ミスターZ】
過去に子供に描かれ、その数年後に黒歴史として破かれ、捨てられ、焼かれてしまった落書き。（※実話）

「てめぇ、よくも今回――」
「いや、僕はもう負けたんだよ。手を見てみなよ」
俺は自分の手を見た。そこには光るコアが握られていた。
「お兄ちゃんお姉ちゃん達は……僕に勝った、もう何もしないよ」
ミスターZは寂しそうにブランコに揺れる。
「お前……それよりも、お前はそんな子供の姿だったか？　記憶が正しければお前は大人の体だったはず……」
「あぁ、これのこと？　仮面は再現、体は……僕が大好きだった

生みの親の少年期を模した姿なんだ」

ミスターZはブランコから降りて空を見上げた。

「結局、野望は成就しなかったな～、やっぱり……もう物語の無い僕にとって、他世界に影響を及ぼすなんて無理だったんだなぁ」

ミスターZは仮面を取って捨てた。仮面は空気に消え、仮面の下からは火傷の跡がある幼い顔があった。火傷は恐らく焼かれたのを示す物だろう。

「イズール、一夏、箒、鈴音、君達は……僕に構ってくれた。こんな形ではアレだけど。もう、今回の戦いで得たものはそれだけで十分だよ。僕は……安らかに逝けそうだ」

「「「「……」」」」

俺達は少しかわいそうなアイツの言葉に、何も言い返せなかった。

～♪　～♪

夕方の5時を知らせる音が公園に響く。

「お～い、帰るぞ～？」

「あっ、迎えだ！　はーい！！　今いくよー」

ミスターZが向かった先には、かつて死んだキャラクターや捨てられた子供達の落書きが並んでいた。

ミスターZは笑顔で振り向いた。

「僕達はずっと……ず～っと、みんなの頭――いや、こころにい

るから……だから……僕たちの事……忘れないで……ぐすっ……たまに構ってあげて？　約束だよ……？」

ミスターＺは笑顔で涙を流していた。

「あぁ……俺は忘れない。お前達がいて……俺達キャラクターが表舞台に立てるって事」

「うん、その答えが正解だよ。じゃあ――」

「また遊んでね……僕の大好きな……お父さん（創造主）」

――元のサーバーにて。

『％’（＆ａｍｐ；ｙｕ％＄％’）＆ａｍｐ；’』

「俺は創造主の記憶を持っているだけだが……『お父さん』か……悪くない。さて、アイツの願いだ。逝かせてやろう！！」

「「「おう！！」」」

俺達はＩＳ学園のドッペルゲンガーを攻撃する。

ベリ……。

ズシャンッ！！

コアがあった場所の装甲が崩壊し、中からフェイザイトの甲殻が見える。

フェイザイト！？　だったらアレが使える。

「いままで役に立たないって思ってごめんよ……ノバビーム！！」

唯一フェイザイトを豆腐のように貫ける特殊ビーム。今までフェイザイトの装甲なんて見なかったから、使う機会がまったくなかった。

「みんな、ヤツの動きを止めてくれ！！」

「「「「「了解！！」」」」」

全員で攻撃を開始する。

「このっ！」

一夏が雪片弐型で切りつける。

設定の砂が飛び散り、敵は膝をつく。

『グアッ――』

「次は私だ！」

箒が紅椿の双刀で腕を切りつける。

『ギ……』

「今度はわたくしですわ！」

セシリアがビットで各関節を攻撃して態勢を完全に崩す。

「今度はあたしよ！」

鈴が衝撃砲で頭部を吹き飛ばす。

頭蓋が割れ、中から文章に出来ないようなグロテスクな物が漏れ出す。

「うわぁ……」

「えっと……今度は僕の番だよ！」

シャルロットがパイルバンカーで足の付け根を粉砕する。

シャルロットに紅い鮮血が降りかかる。

ブシャァァァァ！！

「う、うわぁぁぁぁぁ！！？」

「大丈夫か？　次は私が行きたいのだが」

ラウラが敵に急接近し、レーザー手刀でフェイザイトの甲殻を切り付ける。

ガキンッ！！

「堅い！？」
「ラウラ、その付近の甲殻を剥がしてその青い中身の範囲を大きくしてくれ！」
「分かった！！」
ラウラはレーザー手刀で甲殻を切り崩す。
「さてと……準備は整った！！」
グバンッ！！
アームキャノンが少し膨張変形し、緑色に輝く。
そしてXレイバイザーでフェイザイトの中にある設定結合の中心を見つけ出した。
「そこか！　これで最後だ、ミスターZ！！　いや、IS学園のドッペルゲンガー！！」
バシュンッ！！
一筋の緑の光は、青い装甲を貫き、中のソレを砕いた。
『ワレ……願い成就――＃＆ａｍｐ；……この物語ハ……フィクションで―。実在する――ガガガ……ありがとう、また遊ぼうね♪』
「今度は狂気に満ちてないで出てきたら遊んでやるよ」
『うん♪』

――こうして、捨てられたキャラクターと、それが生み出した狂気の産物は消え去った。

ヤツの体は花びらとなってこの世界中に舞う。桜の花びらだ。
そして雨のように大量のビー玉のような……設定が降ってきた。
俺はそれを手に取った。その設定は虹色に輝いていた。

「なんの設定だ？」
「な！？」

なぜかゼオルさんは驚く。

「それは……命の設定じゃないか！！」
「……『命の設定』……？」
「そいつは死んだキャラクターや転生者を作るときに必要な超級設定だ。お前を作るときに使ったが、その設定を作るのに半年で一個のペースだ」

そ、そんな価値が……。でも、今回も例の如くこの戦闘で死んだり壊れたりした人や物は元通りになっているからなぁ。

パキンッ……。

「？」

その時、世界の核が割れた。

――続く。

第五十一話　強い思いは世界を変える（良くも悪くも）（後書き）

そろそろエンドマークです。
ご感想お待ちしております。

最終話　エンドマーク

世界がゆっくりと花びらへと変わる。

「どうなってんだよ！？」

「……」

ゼオルさんは首を振る。

その方向を見ると、この世界の中心だったサーバーの核そのものが割れていた。

「負荷をかけ過ぎたんだ。もう手遅れだ」

「どうなるんですか」

「……全ては原作に還る」

地面も、建物も花びらに変わり始める。

すると、その話を聞いていたみんなが集まってきた。

「シャルロット……」

「僕……なんとなく分かるけど……お別れしなきゃいけないみたいだね」

シャルロットは俺に自分のジャージを渡した。

「こんなものでしか思い出残せないけど、受け取って」
「……」
「泣かないでイズール。一緒にクレープ食べたこととか、十分……あの……その……。いや、そうだよね。僕も寂しいから、イズール君も寂しいよね。でも……その……」
「ありがとう……シャル」
「イズール君……初めてシャルって呼んだ♪」
「……うん」

シャルロットは一歩下がる。

「みんな、お疲れ様。僕は先に帰るよ」

「おう」
「分かった」
「わかりましたわ」
「お疲れ様」
「先に待っていてくれ」

ふわぁ……。

――突然のお別れだけど……もっと楽しく過ごしかったなぁ。

シャルロットは黄色い花びらとなって空へ消えた。

「次は私だな」
「ラウラ……」

ラウラは眼帯を俺に渡した。

「この世界の私は恐らく……設定が無ければお前を好きになっていたのかもな」

「いや、でも――」

「たしかに、その言葉は弓弦イズル……つまり我々の創造主を否定することになる。しかし私はお前も、私の創造主も否定するつもりはない。ただ、お前に感謝していることには変わりない」

「……」

「とにかく、受け取ってくれ。もう、もたないし……消える私には不要だ」

ラウラは俺に背を向けた。

「元の世界に戻っても、応援してほしい」

「……あぁ」

そしてラウラは他のみんなを見た。

「私も戻るぞ。一応言っておくが、嫁は渡さんぞ！！」

「あぁ」

「望むとこだ！」

「わたくしも譲りませんわ！」

「あたしも……なのかな？」

ふわぁ……。

ラウラは灰色の花びらとなって空へ消えた。

――私も……甘くなったものだな。まぁ、悪くなかった。

「今度はわたくしですわね」

「セシリア……」

セシリアはカチューシャを外して俺に渡した。

「最初にケンカした仲ですけれども……この物語は楽しめましたわ♪」

「うるせぇ、いまさら過去をほじくるなんて……らしくないぞ！！」

「ふふっ、あまり泣くものではありませんよ？」

「……泣いてなんか……ないやい」

セシリアは空を見上げる。

「もしかしたら、あなたの頑張りでお父様とお母様が蘇ったと思うと、ちょっと惜しいですわ」

セシリアを見ると、頬に一筋の涙が……。

「セシリア……お前……」

「ッ！？　別れに涙は無しですわ！」

セシリアはゼオルさんを見る。

「おじ様、今度こそお別れになりますわ」
「そうだな。コイツは卒業証明書代わりだ」
ゼオルさんはセシリアにコアメダルを渡した。
「……ありがとうございました」
「そいつを元の世界まで導いてやれ」
そしてセシリアは他のみんなを見た。
「ふっ、一夏さんは渡しませんわ！！　このセシリア・オルコットが――いえ、その辺はイズルお父様におまかせしましょう。それではみなさん。８巻で待っていますわ」
「またな」
「また会おう」
「セシリア！！」
鈴が叫ぶ。
「？」
「あたし、原作だとあんたとよくケンカしたけど……この世界では親友だからね！！」
「ッ！！　今そんなこと言われたら……っ……泣いて……しまいますわ……ぐすっ……」
セシリアは涙でぐしょぐしょの顔を無理矢理笑顔にして……青い花びらとなって空へ消えた。
――わたくしは本当に……幸せ者ですわ。

次に箒と一夏が歩み寄ってきた。

「イズール」

「イズール、これを受け取れ」

一夏は俺と一緒になって考えた必殺技名が書かれたノート、箒はよく一夏を殴るのに使っていた木刀を渡した。

「……一夏、もっとマシなのは無いのか？」

「しかたないだろう！？　急なんだから」

こんな状況でも二人は口論する。

そんな二人の姿に思わず笑みがこぼれた。

「あいかわらずだな。お前ら」

「そう言うお前だって」

「いや、意外と別れ際はこういうのがいいかもしれん」

そして二人は鈴を見て、俺を見た。

「最後くらいはお前の元の姿で別れたかったな」

「そうだな。お前が髪を結ってない鈴の姿だとなんだか妙な感じだ」

「それはそれなんだよ。だからお前らはヒトナツとモッピーなん

だ」

「まだ言うかコイツ！！」

「も、モッピー！？」

そして二人は足元から花びらへと変わっていく。

「時間だな。俺と箒は先に行くから鈴とちゃんと話しろよ？」

「そんなことわかってらぁ」

俺と一夏は拳を合わせた。

「お前も達者でな」

「お前も一夏の鈍感に気分悪くするなよ？」

「おいおい、そりゃねぇぜ」

ふわぁ……。

一夏は白い花びら、箒は赤い花びらとなって空へ消えた。

――活躍、見ててくれよ？

――そういえば一夏、なんであの時の告白の返事をくれなかったのだ？

――なんでって……一度付き合ったのにもう一度返事するのは野暮ってもんだろ？

――ッ！？

「あの二人……」

思わず笑みがこぼれた。

「やっほー♪」
「やぁ」
「……」

のほほんさんに楯無さんに簪さんがやってきた。

「ちょっと、ここは俺と鈴の最後の言葉なんですから邪魔しないでください」
「そう言わないで。あの子よりも設定薄いからもう腰から下が無いのよ」

見ると会長達は腰から下が無く、浮いている状態だった。

「さっきオータムとマドカちゃんから『今度はちゃんと決着つけようね♪』って言われちゃったわ♪」
「そっか……あいつらはもう行ったか……」

マドカちゃんは良い子だったのになぁ……。

「イー君。えっと……大好きだったよ！！　ずっと言えなかったけど、その……でも、後悔してない」
「のほほんさん……」

のほほんさんは顔を赤くして向こうへと走り去って、そのまま花びらになった。

――会える機会があればまた会えるよね？

「あぁ、会えるさ」

「じゃあ、私達も行くわね」

「……さよなら」

「はい……お元気で。楯無、簪」

ふわぁ……。

楯無はと簪は水色の花びらとなって消えた。

――やっと名前で呼び捨てしてくれた。

――訂正、またね。大好きでした。

「イズール」

「鈴」

俺と鈴は向かい合う。

「思えば長かったな」

「うん。ボストンバッグ持って衝突したのが運命の分かれ道だったわね」

「……そうだな」

「……うん」

沈黙する俺達。

「そうだ、これあげるわ」

鈴は自分の髪を結ってあったリボンを片方はずし、俺に渡した。

「あんた、髪は結ったほうがいいわよ。後、これが最初で最後の恋人としてペアルック。あと……これも渡すわ」

鈴は自分の体に手を押し当て、設定を取り出した。

「これはあんたから移植した設定と、この世界でのあたしの記憶。大切にしてね」

「お前……それ外したら……」

「いいのよ。どうせすぐ消えるし、会話する分の時間はあるわ」

ベキャンッ！！

ついに空間の地面が消え。無重力の状態となる。

お互いの涙がふわりと浮かぶ。

「……この物語終わること予感して、わざと性行為しなかったでしょ？」

「その根拠は？」

「あんたとあたしがどんなにエッチしても、設定されてない以上絶対に子供は出来ないって、あんたの設定を移植した時に気付いてたんだ」

「……」

「ありがとう。あたしを大切にしてくれて」

「……お前には敵わないよ」
「当たり前よ。あたしは一時期『あんただった』のよ」
鈴は鈴の姿をした俺の顔を引き寄せ、キスをした。
そしてゆっくりと離し、無の空間へと身を投げた。
「鈴！！」
「あんた、帰ってもあたし達の事応援しなさいよ？　８巻で、いえ……これからの巻も！！」
「ああ！！　だから……ありがとう！！」
「ふふっ、あ％――そろそろ限界ｋ＆ａｍｐ；……」
鈴は桃色の花びらに変わって無の空間へと消えて行った。
――いつまでも……忘れないで。こういう物語がひとつエンドマークを刻んだってこと。
「……ああ！！　俺は忘れない！！　お前達がいて、俺は――」

――俺は、生きることの素晴らしさを取り戻せたって事を。

現時刻をもって、空想世界サーバー【インフィニット・ストラトス】の二次創作化を全て終了。全てを原作サーバーへ還元。ガルクライフ社社員は原作者連合から追われないように処理せよ。以上。
究極空想生命体開発プロジェクト責任者【ゼオル・ゲバイン】

「終わったな」
「はい……織斑先生」
「山田君は良かったのか？　別れの言葉を言わなくて」
「泣き顔を見られるのは恥ずかしいんです」
「ふっ、そうか」
「私たちも行きますか」
「そうだな。見守るのは大人の仕事だ。仕事が終われば、あとは家に帰るだけだ」

織斑千冬はゼオルを見る。

「今回はお前の野望に付き合ってやったが、教えてくれてもいいのではないか？　お前の真の目的は何だったのかと」

ゼオル少しがっかりとした表情を見せる。

「ふんっ、今回は空想世界侵略兵器の回収を名目として俺の設定の欠片をおびき出す作戦だったんだが……集まったのがたった２％分だったとは」
「お前……本当は黒幕だろ」
「当たり前だ。あのミスターＺは『元々俺』だ。つまり――」
「悪役……か」
「だが……まぁ、今回はバルゼッタに心打たれたよ。かつて俺を倒した勇者に似ていたところもあるが……おっと、これ以上は言えないな」

ゼオルは無の空間を眺める。

「んで、どうする？」

「我々も帰るさ」

「はい。私もです」

「そうか……俺、結構お前達と飲み語りしたのは楽しかったよ」

「私もだ」

「はい、いつかまた会いましょう」

「あぁ、現実世界で8巻の発売を待ってるさ」

千冬と真耶は花びらとなって消えた。

「さて……イズール、聞こえるか。完全消滅したくなきゃ帰るぞ。ギガハイヴを呼んである」

こうして世界（物語）はまたひとつ、消えた。

――数日後。
――インフィニット・ストラトスサーバーにて。
――ＩＳ学園屋上。

俺は鈴の姿でこの世界へ来ていた。

「……」

７巻終了直前の世界。
もう少ししたらこの世界の時は止まるだろう。
俺は久しぶりにマウンテンデューを飲みながらグラウンドで訓練する生徒達を眺めていた。

「どうした？」

ティナさんに変身したゼオルさんが俺に話しかけてくる。

「俺……決めたよ」
「何を？」

――《出演》

――イズール・ユ・ミヅル／バルゼッタ・イロウ
――ゼオル・ゲバイン

――チフユサンダー・ＺＥＯ／ミスターＺ
――ＩＳ学園のドッペルゲンガー／
――ウォルツ・ゲバイン
――ウェブ

「俺……全ての物語を良い方向に導くために戦うよ」
「良いのか？　それは原作破壊……つまり原作者連合を敵にまわすことになるぞ？」

――織斑一夏
――篠ノ之箒
――セシリア・オルコット
――凰鈴音
――シャルロット・デュノア
――ラウラ・ボーデヴィッヒ

「いいんだ。これは俺の覚悟だ」
「そうか……力にはなるぞ？」
「ありがとう」

俺は鈴から受け取った設定を取り込む。

――更識楯無
――更識簪
――織斑千冬

――山田真耶
――布仏本音
――ティナ・ハミルトン

「……これはミスターZから受け継いだ意思でもある。『すべての空想に幸せを』って」
「……」

――グレートチフユサンダー
――ジャイアントストラトス
――ザ・ウォーカー
――チフユサンダー
――タテナシロボ
――メカヤマダ
――ゴ・ダンダー

「後、お前が黒幕だった事も考慮して」
「……気付いていたのか」
「当たり前だ。俺はお前の創造主の記憶があるんだぞ？　お前の考えくらい分かる」

俺はゼオルに微笑みかける。

「落ち着いたら……お前の物語の続き書いてやるよ」
「本当か！？」

ゼオルさんが物凄く驚く。

「さて……忙しくなるぞぉ！！　原作者連合に喧嘩売るんだからな」

「そ、そうだな……」

俺は、ふと気になることがあった。

「そういや……どこからメトロイドと関係ない世界になったんだ？」

《美術》

――みんな想像

「あぁ……それは山田先生と衝突した時だな。二週目のチケットでも使うか？」

「いや、いい」

俺は二週目のチケットを燃やした。

灰は屋上からふわりと飛んで行く。

「これでいい」

「いいんだな？」

俺は鈴から貰ったリボンで髪を結った。髪型はポニーテール。

「今日から俺は……」

バタンッ！！

扉が荒く開かれ、この世界の凰鈴音が現れた。

「あ、あんたね！！　あたしの偽者で色々イタズラして回ってんのは！！」

俺はこの世界の凰鈴音を見て、宣言した。

「始めまして凰鈴音。俺の名前は――」

「ＩＳ学園の……いや、『原作荒らし（救済）』のバルゼッタだ！！」

《製作・監督》
ＺＥＯＬＵ

ＩＳ学園のドッペルゲンガー
ＴＨＥ　ＥＮＤ

――その頃。
――ゼオルさんの屋台にて。

「……ニャ〜ン」

ＩＳ学園のドッペルゲンガー

ＴＨＥ　ＥＮＤ

最終話　エンドマーク（後書き）

ついに完結しました。
この約４か月間お付き合いしていただき、誠にありがとうございました。
次回作を作るかは未定です。

それにしても……ＩＳやメトロイドとも関係ない話へとズレてしまいましたが、大丈夫だったでしょうか？　不快じゃなかったでしょうか？
とにかく、いままで感想でいろんなことを言ってくれたみなさまには本当に感謝しています。そして、また創作意欲が湧いたときにはまたお付き合いしてくれるとうれしいです。それでは、またいつか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4113u/

IS〈インフィニット・ストラトス〉　IS学園のドッペルゲンガー

2011年10月19日09時18分発行